

## 『リディアの書』

1L Z-Λ leΛ  
JeMeΛ -Me-Z-Mλ

・まえがき

セレンによる異世界ファンタジー小説です。

地の文は日本語で、会話等は日本語およびアルカという、紫苑の書形式です。

主人公は紫苑の娘、14歳の少女「水月リディア」です。

今回は時間物です。舞台は3つ。2022年の日本と、1998年の日本と、メル320年のアルバザードです。

紫苑でも玲音でもやらなかったことをやろうという意図です。

なお、玲音は紫苑の続編でしたが、今回は別の話です。まあ2022年ですしね。

ただ、前作からの設定の引き継ぎはあります。

基本的に第三エンド「伝えるということ」を継承しています。

なお、名前の変更や追加もありますが、そこは突っ込まないでください。

前作はフェンゼル征伐、シェルテス征伐など、1つのシナリオでできていました。

今回は複数のシナリオが同時に進む、大きな話になっています。

従って、複数の主人公がいます。

今回は登場人物の数がハンパないのが特徴です。

また、ストーリーの大きさと複雑さも特徴です。

この規模のものを書き手として扱えるかという挑戦のつもりです。

・主な登場人物

**水月リディア(ミヅキディア)**：水月紫苑と水月静の娘。中3の多感な年。元気でまっすぐな性格。明るい、友達作りは下手。やや依存心が強い。子供のころからアトラスへ旅行しており、家にレインがいるので、地球で唯一の日本語とアルカのバイリンガル。

**水月紫苑**：紫苑の書の主人公。メル367年、フェンゼル＝アルサールを征伐した。玲音の書で静の妻となる。

**水月静**：玲音の書の主人公。紫苑の塾の講師で、生徒だった紫苑と付き合い、シェルテスと戦った。そのせいで仕事を辞めたが、紫苑の父の商社に雇われる。

**村上螢**：静の最初の妻。勇太の母。薄倅の女性。

**村上勇太**：静の最初の子供。06年生まれの高1。16歳になったばかり。螢に引き取られ、静は会ったことがない。小柄で眼鏡をかけていて、痩せている。暗くて内向的で大人しく、友達が少ない。

**水月春夫**：静の弟。紫苑もその存在を知らされていなかった人物。06年に失踪したきりだったが、神の夢を開いてしまったリディアはこの叔父の春夫に会う。

**藤堂広重**：静の友人。元は春夫の友人で、リディアたちを助ける。

**大河鉄平**：静の幼馴染。静の実家のすぐ近くに住んでいる。

**レイン＝ユティア**：リディアの養母。紫苑と静の親友で、同居人でもある。初月雄和に一目惚れし、いまだに好意を寄せている。

**アルシェ＝アルテームス**：ハイン＝アルテームスの息子で、紫苑たちの戦友。

**ハイン＝アルテームス**：フェンゼルを倒してアルタレス（召喚省長官）になった人物。徳が高い。

**アルデス**：サールの王。たびたびの不祥事を紫苑に拭ってもらい、紫苑に頭が上がらない神様。

**ルフェル**：エルトの女王。アルデスと一緒に出てくるが、なにげにエルトの一族は不祥事を起こしていない点に注目。

**メルティア**：時空を司る悪魔。紫苑に気に入られている。細面のイケメン。けっこう粋な計らいをする。

**ベルト**：メルティアと対を成す悪魔。言語を司る。

**ミロク=ユティア**：イルミロク党の党首。弱冠 20 歳でミロク革命を起こし、アルバザードを一新した人物。

**アルシェ**：みなしごの少年。奴隷商に育てられ、虐待されて育った。背が小さく痩せて力がなく、その上ノロマで、「お前は何一つできない」と殴られ続けたため、極度の怖がり、コンプレックスを持って生きている。

**アルヴェスク**：反イルミロク派レジスタンスの一班長。

**初月雄和(ハツキョウ)**：紫苑の父親。静の上司。全般的に万能な人物。静にとって最も尊敬に値する人物。レインの初恋の相手。

**初月理沙**：紫苑の母親。飄々としていて、紫苑をからかうのが趣味。おしどり夫婦で、雄和から愛情を一身に受ける。

**wanted busters**：静が高校のころに作りだした物語。「神の夢」により現実化してしまう。日本全国に散らばった結界をすべて破壊すれば人類が滅亡する。それを食い止める **wanted busters**、人類を滅ぼそうとする **persona**、選民のみが生き残ることを目的とする **new-wise** による抗争の物語。

(注) ウォンバスは子どもの作ったものなので、名前が徹底的に痛いですw

**祁答院零司(ケイダインレイジ)**：wanted busters の主人公。二重人格で、覚醒すると気の荒い霊司に代わる。ウォンバスのリーダー。

**皇叡慈(スメラキエイジ)**：persona のリーダー。無口な青年。

**静愁呪慈苑嬢瞬(セイシュウジ ユジ エンジ ヨウシュン)**：new-wise のリーダー。本名は神崎珀璃(ハクリ)。

**夢幻**：静愁呪の恋人。

**クルル=ディア**：最初に静が作ったキャラクター。魔法使いの少女で、中世の 아일랜드 出身。

**ルキテファウスヴィルテス**：魔界の女王。

・間違いだらけの仲介人

埼玉県南埼玉郡白岡町新白岡の一軒屋。

私、水月リディアは居間の椅子に腰掛けていた。とても暑い夏の一日。世間から見ればきつとなんでもない水曜日。でも、私には今日が大切な日なのだ。

というのも、今日は異世界アトラスに行く日だから。

信じられないかもしれないが、この世には異世界というものがあるのだ。

母の紫苑や父の静は地球にそっくりな惑星アトラスに行ったことがある。行ったどころかそこで神様に会ったり、悪魔と戦ったらしい。アルバザードという国に行き、人々を助けた救世主なんだって。

そこで紫苑が出会った友人が、異世界の少女レイン=ユティア。彼女はその後地球に来て、なんだかんだで私の養母となった。今も同居している。

親が異世界で冒険してきたなんて話を本当に信じてるかって？

そりゃそうよ。私、毎年アトラスに旅行してるんだから。

え？うそっばい？そもそもアトラスで日本語が通じるわけがないだろって？

いい視点ね。ファンタジーのお話だと、魔法で言葉が通じるようになるけど、実際にはそうはいかないもんね。

そう、アルバザードにはアルカという独特の言語があるの。紫苑はレインからアルカを必死に習ってコミュニケーションをしたらしいわ。

じゃあ私はアルカを話せるのかって？

(c-, h-o loA MeAJ JeA Ca ell CcJJeF

え、イミフ？そうよね。音もオリジナルだし、文字もオリジナル。なにせ異世界の言語だからね。文字はアルファベットで代筆できるけど、耳は簡単にチューニングできない。

紫苑や静でさえアルカを自由には使いこなせないの。2人のアルカはなんかヘンだわ。

やっぱりレインのアルカが生粋のアルバザード方言で、最も違和感がないわ。

あ、ちなみに私はこのとおり、日本語もネイティブなの。つまりあれよね、日本語とアルカの唯一のネイティブってこと。

そんなネイティブな私は日本の中学に通う3年生の女の子。

今はまだ14歳。8月生まれだから、あともう少しで15になる。アルバザードでは14歳の最後の日までが子供という扱いだから、もう少しで半大人になれる。そう思うと、なんかどきどきする。

学校は東京の女子校だ。紫苑——そうそう、ウチはアルバザードかぶれなので、親を名前で呼ぶことが多い——の薦めで、近所の学校には入らなかった。紫苑はあまり近所の学校にいい思い出がないみたい。まあ、私立にしたのは私の希望でもあったんだけど。

ただ、共学にしなかったのは静の薦めだ。私にカレンができるのを嫌がってるみたい。そんなことしなくても平気なのに。私、男の子って苦手だし。まあ、そもそも人が苦手なんだけどね。

こうして居間でぶらーんと脚を伸ばしながらアイスを食べつつ、だらだらしてるわけで。そんなことを考えていたら、レインが入ってきた。猫みたいな人だ。

そういえばウチで飼ってる本物の猫は今日は姿を見せないな。

ぼぷりという猫で、私が小さいときに静が連れて帰ってきたのが出会いだ。雨に濡れて震えてたんだそうだ。あのときは子猫だったのに、いまや単なるぐーたら猫だ。

「おかあさ〜ん、アイス食ベリゅ？」

はもはもしながら喋る私。ちょっとはしたなくて、いや。

「あ、ほしいほしい」とレインは冷凍庫を開けに行く。

私はなぜかレインをお母さんと呼ぶ。紫苑によると、レインが私を病院に連れてったときに、看護婦さんがレインをお母さんと勘違いしたことから、だんだんとそう呼ぶようになっていったみたい。よく分からないけど。

レインがアイスを啜えながら座る。しかし、若いなあ。いつまでも可愛くてきれい。

「ねえお母さん、私が>-ICになったら働くの？」

「どうかなあ。日本で働くのは難しいよ。身元保証人は紫苑たちがなってくれると思うけど、住民票がないからまともに就職できないしさ。私、保険証もないもん」

「そうだよね……」

「ねえレイン、今日おじいちゃんたち来るかな」

「雄和さん、忙しいみたいよ」

雄和っていうのはおじいちゃんの名前。初月雄和っていうの。紫苑は自分と静を名前で呼ぶのは許しても、おじいちゃんたちは名前で呼んじゃダメだって言ってる。

「じゃあ静も帰って来れないじゃん」

なぜなら静はおじいちゃんの忠実な部下だからなのです。

「ううん、理沙さんとデートだから来れないんだって」

理沙っていうのはおばあちゃんのことね。

私はレインから目をそらすようにアイスを見た。おばあちゃんの話になるとレインは悲しそうな顔をする。おじいちゃんはレインの初恋の人で、今でも好きなんだそうだ。おかげでレインは綺麗で若いのに独身のままでいる。

「……まあ、元々おじいちゃんはアルバザードには行けないからね。来なくてもいいんじゃない？」

私はアイスの棒を捨てると、部屋を出た。

私の部屋は2階。昔は紫苑の部屋だったみたい。今は紫苑と静は隣の部屋。おじいちゃんとおばあちゃんが昔いた部屋だ。

おばあちゃんって言うてもこないだ53になったばかりで、おじいちゃんもおばあちゃんより3つ上なだけだけどね。

おばあちゃん、紫苑を産んだとき14だったんだってさ、すごいよねえ。今の私でもう子供がいたなんて。

自分の部屋に戻ると、パソコンのスイッチを入れた。

インターネットに接続する。お気に入りからサイトを選ぶ。

「新生人工言語論」

もうずいぶん長いサイトだ。管理人は私。もう14年になる。元々は紫苑が始めたサイトで、それを私が引き継いだのだ。

これは人工言語やアルカを紹介するサイトだ。紫苑曰く、私が生まれたころは人工言語についてノウハウを述べたサイトがなかったそうだ。

紫苑は自分のアトラスでの経験を活かし、アルカだけでなく人工言語についても何か語れないかと考えたらしい。それでサイトを作ってみたところ、案外これが盛況だったという。

紫苑のサイト運営は巧かったようで、当時は存在しなかったか矮小だった人工言語界が少し賑わったそうだ。紫苑は異世界で実用されている人工言語アルカを、アトラスについてはうまく隠しつつ、紹介した。

なにせ異世界で実用されている言語だけに、反響はそれなりのものだったらしい。レインの助けもあって、当時の人工言語の中ではハイレベルのコンテンツ力を持ったサイトになったそうだ。

その完成度の高さから、アルカはほかの人工言語の見本になったり、あるいは叩き台になったりした。同時に、コンテンツメーカーの目にも留まった。紫苑はその言語能力の高さからコンテンツメーカーと協力し、人工言語作成の受注を行ったりしたそうだ。

コンテンツメーカーが作るコンテンツを通し、徐々に日本で人工言語という概念が広まり、「人工言語と言えばエスペラント」という公式を崩すに至った。

そんな中、私がサイト運営を引き継いだ。趣味でやっているものだから大きな活動ではない。でも、ネット上の友人と話すのは楽しい。私は引っ込み思案なところがあるから、現実よりネットの方が仲良くなれるみたい。

レインが育ててくれなくて1人だったら、もっと暗い子になってたんだろうなあ。いまでも十分暗いって言われるのに……。

巡回経路のサイトをチェックすると、パソコンをシャットダウンした。

机の引き出しを開けて、紫苑の書を取り出した。

紫苑の書というのは、かつて紫苑がアトラスに行ったときに使ったノートのことだ。一度レインにあげたが、同居の際に戻ってきた。

今では私の部屋にある。異世界アトラスへの出入口でもある。魔法とともにこの本を開くとアトラスへ行けるのだ。

額にぐっと表紙を押し当てる。少し涼しい。

「むー」

私はつい先日の出来事を思い出していた。最近、そのことばかりが気になる。

静には紫苑の前に奥さんがいた。蛍という人だそう。学生結婚だったらしい。離婚してから生徒だった紫苑と結婚したそう。どちらも小説みたいな話だなあ。

で、その蛍さんとの間に息子がいるそう。だけど、静は会ったことがないみたい。会いたくないのかって聞いたけど、いつも困ったような顔をするばかり。大人って複雑なんだね。

でも、私からしてみれば腹違いのお兄ちゃんだから、やっぱり気になるわけで。彼のことは小さいときから聞かされてきたけど、実際に会ったこともないし、どんな人なんだろうって思った。

私は引っ込み思案だから、お兄ちゃんといえど、自分から会いに行くのは怖い。それに、そもそも私は彼がどこにいるのか知らない。だから、子供のころからお小遣いを貯めて、ネット経由で探偵に依頼して調べてもらった。

お兄ちゃんの名前は村上勇太。蛍さんは旧姓に戻したみたいで、苗字が違うのがヘンな感じだ。

そしてついにこないだ、探偵から情報を得て、勇太君に会いに行ったのだ。しかも2回。

ただし、1回目は本人確認をしにいっただけ。顔も知らないから、学校から帰ってくるのをじっと待った。該当者っぽい男の子を見たとき、あれがお兄ちゃんなんだとちょっと意外に思った。なんか、静に似てるんですけど……。

でも、静の方がずっと強そうな感じ。勇太君は高校1年で、私より1つ上。背はふつうくらいで、痩せ型。なで肩で弱そうな感じ。メガネをかけていて、黒い学生服を着てた。全体的になよとした静みたいな感じだった。

そのときはそこで帰った。

2回目は私、勇気を出して話しかけてみた。学校の帰りに1人で歩いているのを見計らって、後ろから「勇太君？」と声をかけてみた。私にしては最大級の勇気だった。

彼はハッと振り向くと、私を見て、誰だこいつという顔をしたかと思うと身を引いて、目を細めた。なんだろう、女の子相手に少し怖がってるような感じがした。

「……だれ？」

その短い言葉がお兄ちゃんの最初の言葉。すっごくぶっきらぼうでビックリした。怒ってるのかと思った。名前呼んだくらいで怒られてたらかなわないよ……。

「私、あなたの妹よ。リディアっていうの。蛍さんから聞いてない？」

「……だれ？」

勇太君は怪訝そうな声で同じことを言った。なんだろう、勇太君って静から聞かされてきた蛍さんの性格にそっくりな気がする。ああ、やっぱりこう育ったのねと思った。

「知らないんだ。あなたのお父さんが再婚してたこと。私、年子よ。中3。……ほんとに何も知らないの？」

「……」

そしたら今度は沈黙。しばらく沈黙。身を引いて、怖がった猫のようなお兄ちゃん。でも、逃げるわけでもなし、かといって愛想を見せるわけでもなし。ヘンな人……。付き合いづらいなあ。

「んと……何だか私、色々期待しすぎちゃってたみたい。お兄ちゃんって優しいのかなとか、私の存在を知ってて私と同じく会いたがっててくれるのかなとか、正体を明かせば会いたかったよって優しく言ってくれるのかなとか……勝手に期待してました。

心の中で妹ってどんなだろうってずっと考えてくれてるんじゃないかって、一方的に期待してました。

でも……私の想いはちっとも伝わってなかったみたいね。そりゃそうだよね、言わなきゃ伝わらないよね」

私はぺこっとお辞儀をした。

「静から聞いている。あなたみたいな人は、そうやって何も反応を返さないでも、きちんと心に言葉は届いてるんだって。それ、理解できるよ。ただ、私は静に似て聡い性格だけど。



まあ、お互いインナーなのは同じみたいだね。その辺は波長が合うみたい。大人しい私がこんなに喋れたなんて数えるくらいしかないもん」

「……」

「えと……それじゃ帰るね。勇太君、私はあなたを見限ってこの場を去るよ。さようなら、お兄ちゃん。勝手に色々期待してごめんなさい。期待は儂いね」

もう一度ぺこっとお辞儀をすると、私は小走りでその場を去った。勇太君は何も言わなかった。

——そんな一日だった。

そして私はその日のことをよく思い出す。いまも、考えている。

すごく残念だった。もっと優しいお兄ちゃんを期待してた。私に会いたがってくれていて、会えば歓迎してくれるんじゃないかって期待してた。

でも、何も知らなかったのね。それじゃあしょうがない。

うん、しょうがない。でも……さみしかったな……。

私はぬるくなった紫苑の書を額から外した。

「リディア～、2人とも帰ってきたよ」

下からレインの声がする。紫苑と静だ。私はとてとて走って階段を下りた。

「おかえり」

「ただいま」と2人の声が揃う。

「珍しいね、2人一緒なんて」

「うん、パート帰りに先生が迎えに来てくれたから」

紫苑は静のことを先生と呼ぶときがある。ずっと前に教師は辞めたのに、いまだに先生と呼んでる。癖になってるみたい。

「夜道に紫苑を1人にさせられないからな」と言いながら靴を脱いで上がる静。

「カバン持つよ」

手を差し伸べる私。

「ああ、すまん」

静は顔色を変えずにすっと渡した。

「リディア、お前今日は家にいたの？」

「うん、ネット更新してた」

「肩凝るぞ、あんまりやると。お前、俺に似てるんだから」

「凝ったら揉んでね」

静は何も答えずに手を洗いに行った。

「そういえば私も肩凝ったなあ」

紫苑が呟くと、洗面所から静が「あとで揉んでやるよ」と答えた。

紫苑は「ふふふ」と笑う。私はつまらない顔をしてカバンを居間のソファに放り投げた。

⑥ucɔλ, leλ- ueλ <-λ laAeε ʔ- -ʝλ- eʝɔδ ⑥

⑥ʝ-, >cl lc-Jel,, (eʃ leλ- -ʝʃ ʝcl -ʝue/ h-cl λʝaʝʝa ʝ- ʃa ʃcʝʝe⑥

⑥-ʝ, ʝɔ> ʝɔʝʝɔ l-cl ʝeʃeδ ⑥

⑥ʝ-⑥

⑥h0-, -lueʃ⑥

急にうきうきしてきた。

⑥hɜ>δ ʃccʝ ʝɔɔʝɔʝʝ ʃɔ -δ ⑥ と静が寄ってくる。

⑥lee lclɔʝ cl, ʃaʝ ɔʝʝ V-ʝʝɔλ,, ʝɔ> ʝɔʝʝ ʝccʃ⑥

レインの呼び声にみんな2階へ向かう。

「あ、私、セリアに着替えるよ」

セリアっていうのは浴衣みたいなもので、アルバザードにあるアルティス教の服のこと。

「あらそう、じゃあ先行ってるから早く来なさいね」

「はあ〜い」

私は部屋でセリアに着替えた。レインが作ってくれたもので、夏には涼しくて最高だ。

紫苑の部屋に行くと、もう誰もいなかった。先に魔法でワープしたらしい。部屋の真ん中には一冊のノート。すべてはここから始まったという紫苑の書。

私は部屋をぐるっと見回した。ここはずっと紫苑の部屋だったようだ。

あのベッドは私が生まれる前からあったらしい。目の前の窓から見える景色は随分変わったようだ。押入れには紫苑の空手道具が入っていたようだ。いまだに紫苑は強いみたい。

紫苑は私に護身術を教えようとしたけど、私は親から運動神経を受け継がなかったみたいで、体育はからっきしダメ。走って転んで乳歯を折ったこともあるくらい運動が苦手な私。空手なんてやらされたけど、足上げたら転んで頭打って泣いておしまい。

床の上の紫苑の書を手に取る。

これを開くと異世界アトラスに行ける。時空を司る悪魔メルティアの魔法がかかっているからだ。

呪文を呟く。メルティアから教わった呪文だ。厳密に言えば、時空を移動する魔法は高等レベルだから、私には使えない。私が唱えることでメルティアが召喚され、魔力を貸してくれるのだ。

呪文を終えると、紫苑の書が光る。幻想的な淡い光だ。

さて、まだまだお子様な私。これからどんな未来が待っているのかしら。  
きっと、素敵な未来が私を待ってる。  
紫苑がやったような冒険活劇が、私にも訪れるのかな。

そうして紫苑と同じくレインみたいな親友を見つけるのかな。  
静みたいなご主人様を見つけ、子供が生まれるのかな。  
素敵な未来。満足な現在。私、生まれてきて良かった。

私は紫苑の書を開いた。慣れた光が私の身を包む。

きっとこの本の中には、私のために書かれたストーリーがある。  
それは、私だけの物語。困難もあるだろうけど、私、諦めない。  
だって、逃げたら幸せにはなれないもの。

紫苑たちと同じように幸せな未来が私にも訪れますように。  
夢っていう色で私のパレットを塗り尽くせますように。

ΛοΛ lePC - CYa, lcΛJ Λo-Λ,,

迎えにきてね、私の悪魔さま♪

光が消えていく。

ワープする先はいつも決まっている。レインの実家の地下室。初めて紫苑がアトラスに行った場所。

私はゆっくりと目を開けた。そしてそこには見慣れたレインの地下室が……  
——ない。

「……あれ？」

私はぼうっとした顔であたりを見回した。

そこは明らかに屋外だった。

「ここ……どこよ……」

辺りを見回すが、紫苑たちの姿はない。

どうやら自分は公園か何かにいるらしい。恐らく街の中央のカルテ。

だが、この人だかりはなんだ。少し離れたところにもものすごい数の人が立っている。

「日本……ではないよね。アルティス教の服を着てるし。とりあえずアトラスには来たみたいだけど……」

風景からしてカルテだろうが、見覚えがない場所だ。カルテのどの辺りだろうか。

「まさかメルティア……」

首に汗が伝う。私は乾いた声で呟いた。

「……まちがえた？」

・宝くじで3億円当たったくらいの客観的な幸せ

光が消えると、俺たちはレインの家の地下室にいた。

「さて、じゃあ召喚省に行くか」

「先行ってて、先生。私、リディアを待ってるわ」

「ああ、そういえばセリアを着てくるって行ってたもんな。じゃあレインと先行ってるぞ」

ᄒᄒᄒᄒ, ᄒᄒᄒ ᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒᄒᄒᄒ

ᄒᄒᄒ, ᄒᄒ ᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒ ᄒᄒᄒᄒᄒᄒᄒᄒ

「じゃあ行くか」といって歩き出そうとしたとき、紫苑が俺の手を引いた。

「どうした？」

「お別れのキスは？」

一瞬面食らって黙ってしまった。結婚してもう長いし、リディアが大きくなってからはあまりいちやつかなくなってきたからだ。

しかし俺が黙ったことで紫苑は不機嫌になったのか、薄く微笑んで首を傾げた。まるで、「まさか私に逆らわないよね？」とでも言うかのように。

慌てて取り成しても不機嫌を悪化させるだけなので、「いや、レインがいるからちょっと恥ずかしくて」とごまかした。

レインは呆れた顔で笑うと、後ろをむいて「いないいなーい」と目を覆った。

そっとキスをすると、紫苑は子供のようににやにやして、顔を離した。

「なんだ？今日はいつもと様子が違うな」

「アルバザードで大切な人と離れるのが不安なんです。なんだか……嫌な予感がして」

「いやいや、フラグ立てんなw」

「……気を付けてね」

「アルシェに会いに行くだけだろ？今夜中にはまた日本だって」

紫苑を部屋に残し、俺とレインは居間に上がった。

一応家の鍵をかけて外に出る。ふだんアルバザードは夜間外出禁止令があるが、今日はディアセルなので街はお祭り騒ぎだ。家を出たところで既に人がごった返していた。

人混みを避けながら、カルテへと歩いていく。

「どうする、電車にするか？」

「ううん、歩きでいいよ。カルテも久し振りだし」

「そうだなあ、お前さん、最近すっかり日本人だもんなあ」

カルテに入ったところで会話が途切れた。特に話題もなく無言で歩く。同居して10年以上だ。無言でも気まずくない。

「そういえばさ、静って紫苑のこと愛してるの？」

「なんだ、突然？」

「紫苑てさ、たまに静に横暴するよね」

「まあ、たまに横暴なときがあるよな」

俺はやんわりレインの日本語のおかしい点を修正する。

「よく我慢できるね。さっきのだってさ、紫苑は有無を言わさずって感じだったじゃん」

「しょうがないよ。俺がこうしてられるのは紫苑のおかげなんだから」

Ⓜ(a e)J (cδ e

「-lkc……あむ」続きを考えたが、アルカだと自信がないので日本語で返す「しがない塾講師だった俺がさ、今の会社で1000万以上の年収を稼げるようになったのは、間違いなく紫苑のおかげだからだ」

ⓂJo- eδ e

「ああ、当時の俺は第二新卒だったし、今の会社につながるキャリアもなかったからな。大学も文学部だし、ワーキングプアまっしぐらだったはずだ。ロクに資格もなかったしな。

あいつと結婚したからお父さんの部下にしてもらえたんだ。お父さんの庇護があるおかげで夕飯には返してもらえるし、こうしてディアセルも休ませてもらえる。

紫苑と結婚しなきゃ面接さえしてもらえなかったはずだよ、ウチの会社は」

Ⓜ(eC (Ya (cl-C -VeJ e J-(CcelJ JeCeδ e

「ただ、それだけじゃなかなかね……。1000万っていうのは現実的じゃないさ。たまに思うんだよ、もしあのまま虫に捨てられて紫苑に拾われなかったらって……。ぞっとするぜ？

俺、紫苑に拾われたから人生救われたんだ。紫苑に恩返しするためなら何でもするさ。あいつが横暴だろうと、従うよ」

Ⓜh>>...AoA lo lYaJJoA AoJ scAo -lJ-C (Ya e

「そりゃそうかもしれないけど、紫苑は俺のことなんだかんだで考えてくれるしな。優しいよ。それに、子供も産んでくれたしな。何より、頭がいいから俺をイラつかせない。むしろ何であいつが俺みたいのを好きになったのが不思議だよ」

「私は静だって有能だと思うけど」

「せいぜい紫苑が他人に見せびらかして自慢できるアクセサリーだな。「ウチの夫は1000万以上稼いでるのよ、そんなダンナをゲットして凄いでしょ。しかもイケメンでスタイルもいいのよ」みたいな感じ。要するに俺の仕事は紫苑をいかに気持ちよくさせるかなんだよ。俺の存在は紫苑が自慢するための指輪か血統書付きの犬なんだよ」

「すごい悲観的」

「にもなるさ。仕事もロクにしてないし、能力だって紫苑に何から何まで負けてる」

「仕事してないの？」

「してないよ。もともとまったく異業種だったし、専攻でもなかったし、転職組なのにノウハウもなかったからな。同期のほうが経営戦略とかの知識が多くて能力も高い。俺ひと

りの力ならとっくにクビになってる。なのに同期より俺の方が取ってるから、居心地悪くてさ。ほら俺、残業もあまりしないで帰っちゃうだろ？紫苑が夕飯はリディアと自分のために外すなってるさ。お父さんも配慮してくれてさ。

それに、俺がお父さんの子分でしかないって社内じゃバレてるしな。会社じゃ小さくなってお父さんの顔を汚さないように専念するので精いっぱいだ。ガキのころは短気だった俺だけど、いまじゃ仙人みたいになっちまった」

「それはそれで大変そうだよ、仕事」

「いや、楽だって絶対。世間に申し訳ないくらい。だから会社で仕事してない分、家で紫苑に仕えるっていう仕事をしてるわけさ。眠くても疲れてても紫苑が夫婦生活求めてくれば絶対拒まないしな。足が冷えれば足湯をしてやるし、マッサージも」

「なんか……私が初めてあったころの静とだいぶ変わったよね」

「情けなくなった？」

レインは無言で頷く。

「いいさ……それが今の生活を維持する唯一の手段だからな。紫苑に捨てられたら会社にはいられないし、一人で生活しなきゃならない。リディアの養育費を稼げるか不安だ。俺は特に能力もないから、再就職はキツイよ……」

「なんか……せちがらいね」

「そういう想定をすとな。でも今の生活はいいわけだ。身に余るくらい。紫苑の機嫌を取って娘に良い教育を与えて悪い虫がつかないように気を付けていれば、このままちゃんと老後を迎えられそうだからな。紫苑と結婚できたのは3億円宝くじで当たったようなものかな。そんな気分だ」

「そんなに幸せ？」

「と思うよ、客観的には」

「ん？じゃあ主観的には？」

「……」

「ん？」

「……お前さ、いないいないの使い方、間違ってるよ、蛇足だけど」

・美術室の時計

1997年2月4日（火）

公園を見渡す二階建ての一軒家の前で、制服姿の少女がインターホンを押す。  
表札には祁答院(カウイ)とある。

「おはようございます、華嬢(カヅヨウ)です」

「あ、ちょっと待ってね。霊司(レイジ)ねぼうしちゃって」

答えたのは友人の母親だった。

「あ、はい」

華嬢は口を離し、横にいる紫丹(シタン)に「だつてさ」と告げる。

姉と対極的に大人しい紫丹は、「うん」とだけ答えた。両手で鞆を持ち、前に下げている。

「あんた、先行ってなよ。どうせ道違うんだし」

華嬢は高一で、紫丹はまだ中三だ。

「そうね。じゃあ……」

紫丹はしずしずと歩いていった。

しばらくするとドタドタと音がして、少年が出てきた。

「ごめん、華嬢」

「また寝坊したのね」

歩きだす華嬢。公園に出ると左折し、スクランブル交差点まで歩く。

ここの信号は長い。華嬢はため息をついた。零時は腕時計を気にして見ている。

「あのさあ、電車間に合うかな？」

「ぎりぎり大丈夫だと思う」

信号が青になる。直進して駅のロータリーへ出る。

階段を昇って改札へ行き、定期券を挿入する。

少し駆け足で階段を降り、ちょうど来た電車に乗る。

「よかった。間に合ったわ」

「悪いね」

「それにしてもどうして寝坊したの？昨日遅くまで起きてなかったじゃない」

華嬢の家は霊司の家の隣だ。子どものころから一緒に、幼稚園まで一緒に。部屋が隣同士で、窓を通して電気が点いているかが分かる。

「ヘンな夢みちゃってさ」



霊司は気弱に呟く。彼は少し長い黒い髪の大人数い少年だ。細くて背は中くらい。学力は高いというわけではなく、中くらいだ。顔はきれいで少女のようだ。

「夢？」

「銀髪の小さな女の子がさ、運命の歯車が回りだしたとかなんとか言ってくるんだよ」

「それ、何かのお告げじゃないの？」

華嬢は目を輝かせた。華嬢はオカルトマニアだ。ポニーテールが猫の尻尾のように揺れる。

「また富士見ファンタジアか角川文庫みたいなこと考えてるだろ、お前」

「素晴らしいじゃないの！ああいう小説に載るような話の前兆かももしれないわよ」

「そうかなあ……」

終点の本川越に着くと、改札に定期を入れ、駅を出る。

出て右手の道をまっすぐ行くと、書店がある。2階部分が書店で、ここで華嬢はアニメ雑誌などを買う。高校の教科書も売っているので重宝する。

書店の前にスクールバスの停留所があるが、生徒がずらっと並んでおり、駅に隣接したビジネスホテルの駐車場にまで生徒が列をなしている。

「あ、そうだ霊司ちゃん、美術室の時計の話って知ってる？」

霊司は眉をひそめながら半ば無視した。

「夜の8時に時計を見ると、異世界に引きずり込まれるんだって」

「……そうか」

「聞いてる？」

「お前、また学校に忍び込もうとかいうんだろ」

「まあね」

「馬鹿馬鹿しい」とため息「幽霊なんているわけないだろ」

「じゃあこないだの花子さんは？」

「う……」

霊司は黙った。華嬢は優越感混じりの笑みを見せた。

先週のことだ。

教室を出たところにあるトイレに花子さんが出るという噂を聞いて、華嬢は紫丹と霊司を連れ、夜中の学校に忍び込んだのだ。

その花子さんというのは仮面をつけた制服姿の少女の姿をしているらしい。ここの昔の生徒で、殺されてなお呪われて縛られているらしい。

2人ともまったく華嬢を信じていなかったが、トイレで少女の呪うような声を聞いて、飛び上って逃げたのだ。

「あれは単に誰かがいたんだろ、個室に」

「そうかしら？じゃあなんで逃げたのよ」

「それは……」

「美術室の話だって本当かもよ？確かめてみればいいじゃない。怖いの？」

「怖くは……ないけどさ」

「じゃあ今日は帰らないで学校に潜んで調査するからね」

「で、でもさ、紫丹ちゃんもいないことだし」

「後で公衆電話でウチにかけるわ。夕方になったら」

「バスに乗れないじゃん」

「上福岡駅から歩けるもん。前もそうしたじゃない」

本川越から歩いて川越に行き、東上線に乗れば上福岡だ。30分も歩けば華嬢たちの通う北城高校に着く。

「そりゃそうだけど……」

「じゃあ決まりね」

夜8時。

外は気が狂ったのかというほど強い風が吹いており、紫丹は予定より遅れて到着した。

ものすごい風で、きっと明日のニュースに出ることだろう。

霊司たちは時計の前にいた。もう生徒は帰っており、誰も残っていない。

この学校は夜は教室に鍵をかけるので、あらかじめ部屋の中で隠れていた。

「別に……何も起きないじゃん」

霊司が安心したような期待はずれのような声をあげる。

「うーん、おかしいわねえ」

華嬢は首をひねる。

「だから幽霊なんかいないんだよ」

勝ち誇ったように霊司が言ったとき、紫丹があつと声を上げた。

霊司が振り返ると、時計が淡く光った。その光を見ていたら、ふっと意識が飛んだ。

意識が戻ったときは、黒い空間にいた。薄暗く、人間の脈のように赤い細い線が四方八方を囲んでいる。暗くて狭い洞窟のようだ。

「な……なに、何が起こったの？」

慌てる霊司。

「異世界に来たのよ！」

華嬢が叫ぶ。

「そんなバカな！」

「お姉ちゃん、見て。誰かいる」

紫丹が指さした先には、黒い壁と同化した少女がいた。霊司より年上に見える。

「あなた……なにやってるの？」

恐る恐る問う華嬢。少女は虚ろな目を向け、「助けて」と呟いた。

するとその瞬間、黒い炎が巻きあがり、霊司の周りを囲んだ。炎はやがて人の形になった。

「な……なんだ、こいつ」

怪物は霊司に手を向けると、衝撃波を放った。目に見えない攻撃に霊司は吹き飛ばされ、倒れる。

「霊司ちゃん！」

華嬢が駆け寄ったとき、霊司の体から金色のオーラが立ち上った。

紫丹は口に手を当て、「零司(レイジ)だ……」と呟いた。

霊司の髪はみるみる間に金色になり、青い雷が彼の体をまとった。霊司はゆっくり立ち上がると、鋭い目つきに変わって怪物を睨んだ。

怪物が衝撃波を再度撃つが、霊司は青い光を手から放ち、怪物をかき消した。

「ふっ、雑魚が」

「零司……あんた、また出てきたのね」

華嬢が恐る恐る言う。

「華嬢か。また俺様をくだらねえことに巻き込みやがって。迷惑なんだよ、おめえのオカルト好きは」

「な、なによ！あんたにそんなこと言われる筋合いはないわ！」

「でも、助けてくれたのは零司よ、お姉ちゃん」

「う……」

零司はニヤッと笑った。

「そういうことだ。まあ俺はもう寝る。もう起こすんじゃねーぞ」

零司の体はふらっと地面に倒れ、髪の色も元に戻った。そして霊司に戻り、立ち上がる。

「あれ……僕は……」

「零司が来てたのよ」

「ああ……そうか。二重人格っていうのは厄介なんだか便利なんだか分からないね」

「それより、あの人は？」

紫丹が指をさす。壁と同化した少女は壁から解き放たれ、静かに立っていた。

「ありがとう、霊司君。おかげで私は成仏できるわ」

「というか状況が飲み込めないんですが、なぜあなたはここに？」

「私は美術部の部員だったの。部室の時計についていた九十九にこの世界に引き込まれ、殺されてしまったの。成仏できずに苦しんでいたところ、あなたたちに助けられたのよ」

「なるほど。でもなんで時計に九十九が？」

「この学校には霊がよく集まるのよ。結界だからかしら」

「結界？」

「霊力の集まる特殊な空間なの。あなたが手から放った力が霊力よ。この結界はほかのものより大きいから、霊が集まりやすいの」

「そう……なんだ。てゆうか、本当に幽霊が……」

霊司は青くなった。

「でもこの結界、もう長くはないかも」

「どうして？」

「結界を破ろうとする者がいるからよ」

華嬢「破れたらどうなるの？」

「私のような呪縛霊が解放されるわ。中には悪霊もいるから、ここは破壊されるでしょうね」

紫丹「大変なことになりますね……。勉強どころじゃなくなっちゃう」

霊司「結界を破ろうとしているのは誰なんですか」

「薬師寺京香(ヤクジキョウカ)……というかつての男子学生らしいわ。彼もまた生者ではないそうだけど」

「薬師寺……」

「そろそろ時間みたい。私は行くね」

そう言うと少女は光になって消えた。

光が収まると、霊司たちは部室に戻っていた。

・人生の意味

2008年7月19日

東京都中央区銀座。夕方5時。

「静君」

渋い男性の音がオフィスに響く。

「はい」

デスクでPCに向かっていた俺は素早く立ち上がると、メモとペンを持って上司のデスクへ小走りで寄った。

一瞬、周りの目が俺に集まる。だが「お父さん」が俺を呼ぶのは日常茶飯事なので、皆すぐデスクに目を戻した。

「今日はもう帰りなさい」

お父さん——初月雄和——は小さな声で周りに配慮しながら言った。

「あ……はい。ありがとうございます」

俺は頭を下げた。

今日はディアセルだ。ディアセルは異世界アトラス最大の祭りだ。毎年この日は紫苑たちとアルバザードに行く。お父さんは気を利かせて早く帰してくれる。

ただ、ウチは紫苑と一緒に夕飯を食べようというので、ただでさえ俺は7時台に会社を出ることが多く、冷や水を喰らうことが多い。

役員の娘の夫ということで俺が特別扱いされていることは明白で、周りは正直鼻もちならないだろう。俺としてはもっとこき使ってほしいが、紫苑がそれを許さない。ということはお父さんもそれを許さない。結果、俺は早く帰ることが多い。

お父さんは優しい綺麗な顔をしているのに、威圧感がある。この人が怒ったところを見たことはないが、その肉体的かつ精神的な強さは、紫苑との恋人時代に間近で見た。

月の悪魔シェルテスに操られた狂犬や鴉などを、信じられない身体能力で倒したり、少しも慌てずに家族を避難させたりという肉体的な強さがある。また、俺が紫苑の家に忍び込むように入ったとき、お父さんはあっさりそのことを見破っていた。それでも少しも怒らず娘のことを信頼していた。

初めて会ったときに俺はお父さんのファンになり、この人は凄いと本能で悟った。

その後俺は紫苑を守ってシェルテスと戦った。その功績のおかげで、お父さんに気に入ってもらえることができた。そして紫苑が妊娠し、結婚となった。

俺はシェルテス戦のせいで仕事を失ったが、お父さんが拾ってくれてこの会社に来た。

ウチは貿易系の商社だ。英語力を買ってもらったのはお世辞ではなかったということ、入社して実感した。

だが、俺は文学部で語学ばかり勉強していた学生だったから、ロクに経済のことなんて分からなかったの、最初はそりゃ戸惑った。今ではようやく簡単な仕事ができるようになったが、しょせんまだその程度だ。

まして今後は幹部候補として、俺を経営のほうに進ませるつもりのもので、勉強しなければならないことだらけだ。

最初に入ったときはいくらコネがあっても未経験なので年収は少なかった。それでもスタートで提示されたのが500万台だったので驚いた。もらうところはこんなにもらってるのかと驚いていたら、お父さんが「30歳でこの倍にさせてみせるさ」と言ってきたものだから、さらに驚いた。と同時に不安になった。

今俺は27。去年娘のリディアが生まれ、来月で1歳になる。紫苑とはまだまだ新婚気分だ。はっきり言って生活は蜜のように甘い。

俺の実家は東京都練馬区光が丘だが、紫苑が妊娠した後は埼玉県南埼玉郡新白岡にある紫苑の実家に住んでいる。現在は埼玉県民だ。

ここは白岡ニュータウンがあり、とてもじゃないが富裕層の住むところじゃない。典型的なベッドタウンだ。そのくせ店がなくて生活には不便。

ところが自然は多く、空気も悪くない。お父さんたちは紫苑をふつうの少女として育てたかったそうで、それでここを選んだそうなのだ。家は既に持家で、土地も初月家のものだ。

新白岡は田舎のわりに交通の便はそこまで悪くはない。会社は最寄りが銀座駅だが、宇都宮線で上野に行き、銀座線に乗れば1時間ほどで着く。悪くない。光が丘だって中野坂上経由で行って40分以上かかるのだから、大差ない。それでこれだけの田舎の空気が吸えるなら子供の健康には良いというものだ。

なお、今現在紫苑の実家に住んでいるのは俺と紫苑とリディアとレイン。お父さんとお母さんは家が手狭になったので別に買うと出して行ってしまったのだ。

なにせ世帯年収が5000万もあったので、家など板チョコのように簡単に買えたようだ。

お父さんは若くして役員で、しかも権限をかなり持っている。

それもそのはず、この会社の大株主がお母さんの実家側らしく、お母さんのコネでお父さんはここに入ったからだ。まあ、お父さんの力があれば自分でやっても上に行けたとは思うけど。

お父さんが権限を持っているので、俺もこの会社でずいぶん融通を利かせてもらっているというわけだ。

なお、お母さん本人はまた別の会社で働いている。そちらは一族会社らしい。これまた年収がなかなかのものだ。

お父さんの計らいで俺は定時かせいぜい7時ごろには帰してもらえる。夕飯は新妻&若妻の紫苑の手作り料理だ。

なんせこの紫苑がまだ19歳ときた。大学2年生。女子大生妻。……凄い話だ。いや、結婚したときギリギリ高校生だったから、女子高生妻か。……ほんとに凄い話だ。

リディアの面倒はレインが見てくれている。紫苑は学業に専念し、かつ家事もこなしてくれている。

紫苑はアイドル級の容姿だし、スタイルも小柄で細くて、可愛くもあり綺麗でもある。頭脳は明晰で、できないことを探すのが難しいくらいの女だ。性格は恐ろしいところもあるが総じて俺には優しい。本人は根暗とっているが、よく笑うし元気だ。

紫苑は若くて学業も忙しくないから体力がある。昼に使うエネルギーが少ない分、夜になったときの残HPは俺よりかなりある。アルバザードで良い思いをさせてしまっすっかり抱かれるのが気に入ってしまったようで、ある意味残業が大変ではある。

リディアの後にはしばらくはいいので、次のができないよう気を付けているが、本人は基礎体温を測って安全日を探したりといったことに余念がない。

「あの……」

「どうした？」

「もしよかったら、ご一緒しませんか」

お父さんは声をひそめ、「私はアルバザードに行く資格がないよ、静君」と答えた。

「いえ……そうではなく、今夜行く前にお父さんにご相談したいことがあります」

「ふむ……」

少し考えたあとで、お父さんは「分かった」と言って机を整理しだした。

俺はPCをチェックして荷物を整理し、10分ほどで部屋を出た。

会社の入口で待っていると、お父さんが出てきた。

「待たせたね」

「いえ、ご一緒できて嬉しいです！」

お辞儀をする俺の横を女の子が通る。女の子はお父さんに恭しく挨拶して通り過ぎていった。お父さんはコネ入社だということを一切感じさせない仕事ぶりだ。偶にこうして早く上がっても誰も文句を言わない。

お父さんは仕事の運び方が巧く、そんなに残業をしているわけでもない。また、役員だというのにバリバリ第一線で活躍し、実際に数字にも繋げている姿は若手にとって英雄視されている。

その見た目の良さと精悍さと柔和さと優しさを兼ね揃えたお父さんは女子社員の憧れの的で、男子社員からも尊敬の的だ。特に俺。俺はこの人を誰よりも尊敬している。本当の父親なら良かったのに……。

「じゃあ、どこに行こうか。一杯やっ払いこうっていうことなんだろう？」

「はい、お願いします」

「こないだの店でいいかな。あっちの」

「はい、喜んで！」

後を付いていく俺。横に並ぶのが恐れ多い気がして、半歩ずらしてしまう。

階段を上り、店に入る。静かな雰囲気のお店だ。仕切りが中にあり、周りの話し声が遮断される。

話しやすい店をわざわざ選んでくれたんだろうな。

注文を取ると、お父さんはネクタイを少し緩めた。

「まあ、静君も楽にして」

「あ、はい」

「それで、話というのは」

「ええと……」

俺が一瞬戸惑ったのを見て少し話にくいことなのかと察したお父さんは、場を和らげるために簡単な話題を投げてきてくれた。

「そういえば紫苑は元気になっていますか」

「あ、はい。おかげさまで。リディアも元気です」

「勉強は得意な子だから大学は真面目に行っていると思うけど、家事もしっかりしているかい」

「はい。料理は子供のころから得意だったそうで」

「私たちが苦勞かけたからかな」

お父さんはくすつと笑う。

「はは。おかげで僕はおいしい手料理を食べさせてもらっています」

「レインさんは？」

俺は一瞬どう答えるべきか迷った。レインの話題を広げるか否かについて考えたからだ。レインはお父さんのことが好きだった。が、振られてしまった。それをいまだに引きずっているらしい。

結局レインについては「ええ」とだけ答えた。

話題はリディアのことや近況、そして仕事もことにも及んだ。



「確かに、あそこであの対応はなかったね。だけど、それに問題点に気付けたことは素晴らしいよ。ここで気付けば挽回などいくらでもできる」

「ありがとうございます」

やがて酒も入って口も開いてきた。

「お父さんは本当にお母さんと仲がよろしいですね」

「はは。私は姫一筋だからなあ」

お父さんはお母さんをそう呼ぶ。恥ずかしくはないようだ。

「私も紫苑とお父さんたちのようになりたいです」

「だが、私のようにになるとリディアは悲しむかもしれないよ」

からかうように笑う。笑顔が素敵だ。どうやったらこんなカッコいい人間が出来上がるのだろう。見ているだけで幸せだ。

つまみを少し摘む。

「それで……少し重い話なんですけど……唐突な質問で恐縮ですが、お父さんにとっての人生の意味とはなんですか」

お父さんは「ふむ」と言って一瞬間をおいた。

「難しいな。でも、どうして？」

すぐには答えない。大人だ。お父さんは俺がその質問の答えを聞きたいのではなく、自分の人生の意味を模索しているのだということに一瞬で気付いたようだ。そしてすぐに産婆法で話を進め出した。

「いえ……」

「どういう答え方をすればいいのか迷うなあ。試しに静君のを聞かせてくれないか」

「それが……」

「うん」 静かに頷く。

「……よく分からなくて」

「そうか……。そうだろうね、私も同じだよ」

「えっ」 意外に思っ顔を上げる「お父さんでもなんですか」

「ええ、自分の人生に何の意味があるんだろう、自分は何のために生まれたんだろう、自分にしかできない何かを成し遂げられないことをしないと自分はただの地球で生きて死ぬだけの動物と変わらないじゃないか、なんて思うことがありますね」

ひとつひとつの言葉が俺の心に響く。人は自分の心の中にある言葉を言われるとき、最も心に響くのだ。お父さんは俺の心を読んで言葉を出しているにちがいない。

しかも「君みたいな若いころにはよく考えたもんだ」みたいな突き放した言い方はしない。それは裏を返せば「どうにもならないから年取るまで我慢しろ」とか「君みたいな若憎には分からないだろうが」とか「俺はとっくに乗り越えた大人だ」という意味になるが、お父さんにはそういった演出が一切なく、等身大の自分を素直に露出した回答といえる。

だが実際にはお父さんほどの人がそんなことでウジウジ悩むはずがないことはみんな知っている。だからこの言葉を聞いても誰も真に受けて評価を下げるなどない。

「まさに、その通りなんです！」

ぐっと前に体を出す俺。

「恥ずかしながら、そんな風に考えてしまいます」

「君はアルバザードを救った英雄だ。紫苑というふつつかながらも一心に愛情を注いでくれる妻も得た。私には羨ましいくらいだ。すると、仕事に悩みがあるのかな」

「仕事は……楽しいです。やりがいもあって。でも、今の生活に実感がなくて。あの……変な話なんです、もし紫苑に会わなかったらっていう仮定をしてしまうんです。そうするとすごく怖くなって。自分は前妻と別れて何をしてたんだろうって」

「今とは違う幸せがあったと思うよ」

安定感のある声で断言するお父さん。そうか、そういう考え方もあるのか。

「ただ、今ほどとは思えないのです。その人生のほうが現実味があって、そのほうが現実に見えて……なぜかその架空の設定の自分を考えて……」

「そしてその自分が人生の意味を問うてくる、と」

俺は無言で頷いた。

「さっきの質問の答えだが……私の人生の意味はね」

「はい」

「日々の幸せの積み重ねだ」

「積み重ね……」

「うん。今日、定時で上がって、娘婿の君と楽しく酒を飲んでいる。あの小さかった娘が婿を連れてくるようになったかなんて考えるのは感慨深い。この後は理沙と過ごす。見たい映画があるんだ。デートをしようと思って」

「あ、そうだったんですか。すみませんお時間いただいてしまって」

「ナイトショーだから大丈夫。汐留で食べて、新橋で映画を見る。帰りは映画の内容について彼女と語らう。そして静かに眠りにつく。実に幸せな一日だ」

「はい。そういう幸せの積み重ねが人生の意味……と」

「ああ。ほかに、目標に向かって努力したりするのもいい。人間は基本的に動物だ。動物は食べて子孫を残すことしか主眼としない。一部の人間はもっと文化的な方法で自分が生きた証を残そうとする」

「そうですね」

「新技術を開発したり、人の生活を変えるような商品を作ったり、色々だ」

「文系の私にはあまり縁がなさそうですね。それが残念です」

つい本音が出た。そう……か、俺は社会を新しい方向に動かす人材ではないのだ。この金を稼ぐだけの繰り返しの生活がまるで車輪の中のハムスターに見えて、鬱になっていたのだ。何か新しいことが俺はしたかったのだ。だが、いくら金を稼いでもルーティンワークでしかないため、自分の人生の意味を疑ったのだ。

「理系の研究者のような人間になれなかった私は社会の歯車として止まるまで回り続けるのでしょうか」

「ふむ……。思うに、静君の価値観というのは、歴史を変えるような特別なことをすることなんだろうね。それが叶わないと思うと、自分が年老いて働くだけの存在に思えてしまう」

「……その通りです……まさに」

「特別でありつつ、生活も安定させたい。地位もほしい」

「はい……自分でかなり恥ずかしくなってきました」

「いいよ、恥じることはない。ただね、きっと君の思う研究者も同じことを思っているんじゃないかな。自分の作りたいものが作れない。会社という制約がある。その制約を取ると今度は金がない。自分が作りたいものはこれじゃないんだ——とかね」

「なるほど……」

「よしんば環境が整っても、自分が死ぬまでに自分の望む技術が大成する見込みがないのかも、かなりの失望になるのではないかな」

「工学技術などに多そうですね。人間のようなロボットとか。みんな「ちい」みたいのがほしいのに、実際自分が生きている間にできそうなのは似ても似つかないものですし。そりゃ寿命が短いのが残念でしょうね」

お父さんは「ちい」をスルーして、頷いた。恐らく何のことか分かっていないだろう。

「そうか……自分の理想をかなえようと思ったら環境や寿命に限界がある……逆に環境や寿命内でできることはタカが知っている。限界が低い。なるほど」

「私が言いたいのは、ひとまとめに理系だから夢が持てる、自分が文系だから歯車でしかない、というのは考えものだということだよ」

「それも……そうですね。なるほど、なるほど」

「それで、お父さんは日々の幸せが人生の意味だと」

お父さんは水割りのグラスを傾ける。

「私の価値観だけどね。人生は細分化すれば一日の積み重ねだから、一日一日をどれだけ充実させたかが、将来的な充実感につながると思う。仕事と同じさ。日々の努力が実を結ぶ」

「確かに……そうですね」

「静君は今日、悩んでしまった。それはいい。解決への糸口をつかんだのだから。だが、明日悩むことは有益ではない。明日同じことで悩むのはただウジウジしているだけになってしまう。では、君が明日すべきことは何だろう」

「明日ですか」

「将来のことを考えるより、明日のことのほうが読みやすいだろう？」

「確かに。今までの話をまとめると、僕は明日は明日を充実させればよいということになるでしょうか。人生の意味は幸せや充実感である。今日悩むのはいいが、同じことを明日悩んでは一日が充実しない。だから少なくとも今日と同じことで明日悩まない」

「そうだね。君は明日、もう今日のこと悩まない。それが明日を充実させる。そして明日一日の充実の積み重ねが、君の人生すべての充実に影響する。だから、逆説的だけど、人生の意味を悩まないことが、人生の意味を見出すことになるんだ」

「なるほど、人生の意味はと悩むことがむしろ意味を見失うことになり、考えないことが意味へと導いてくれるということですか」

理屈で物事を考える俺は、こういう説得が非常に有効だった。お父さんは人を見て説得のしかたを変える。俺には俺への対処をする。本当に凄い人だ。

俺は明るい顔で「ありがとうございます！スッとしました！」と答えた。お父さんにはこやかに笑った。

「お父さんは本当に凄い方です。人生の意味とは、いかに充実した幸せな日々を過ごせるか……か。それが世の中を変える技術であつてもいいし、家族との団らんであつてもいいし、もちろん趣味でもよい。牧歌的な幸せもありってことなんですね。幸せになる権利はタダ、か」

「そうだね。君は頭の切れる男だから、理解してしまえばすぐ行動に移せると思う」

俺ははにかんで頷いた。

「こういう話は本当は紫苑がしてあげるべきことなんだが、彼女はまだ19だからね。私でよければ、また話を聞いてあげることくらいはできる」

「はい、今後ともよろしく願いいたします」

俺は深く頭を下げた。

・大人と子供

静と別れた雄和は予定通りに妻の理沙とデートをし、新居に帰った。

ダブルベッドで映画の感想などを話していたが、ふと彼は思い出したように口を開いた。

「そういえば、姫との待ち合わせの前に、静君と少し話をしました」

「あら、珍しい。あなたが呼んだの？」

「いえ、彼の方から相談があるといつて」

「相談？」

理沙は美しいカールに指を通しながら、小首を傾げる。

「人生の意味とは何かという相談でした」

「……紫苑に満足してないのかしら」

「いえ、そういうことではないようです。彼は精神的に安定していないところがあるから、鬱周期になるとそういうことを悩むようです」

「大丈夫なのかしらね、仕事とか」

「仕事は大丈夫です。頭が良いですからね。それに、人当たりも。ただ、思い悩んでしまいう癖があって、少し心配です」

「紫苑がカバーしてあげられるかしら」

「ええ、きっと」

理沙は起き上がると、ドレッサーの丸い椅子に座って鏡を見る。

「まあ、あの子も結構鬱になるんだけどね」

「……ですね」

「周期が重なったらどうなるのかしら」

「レインさんがいるから大丈夫だと思います。彼女はしっかりしているから」

「あの子も大変ね。異世界人なのに。そういえば、まだあなたのことが好きなのかしら」

理沙は目をやらずに呟く。雄和は少し下を向いて、一拍おいた。

「……恐らく」

「迷惑？それとも嬉しい？」

理沙は少し意地悪な顔で聞いた。

「嬉しいですよ。紫苑は理想的な娘ですが、レインさんも違うタイプの理想的な娘です」

「ふう……ん。巧いんだから」

理沙は髪を弄る。雄和は立ち上がり、理沙の肩に手を置く。

「姫は少し嫉妬をされたようですね」

「む……してないもん」

頬を赤くする理沙。

「可愛いですよ」

「もー。だって、雄和って本音がよく見えないときがあるんだもん。今だって女として聞いてるのに、娘として答えてさ。巧いよ」

「本音ですか。私の本音は、貴女以外には考えられない、しかないですよ。今も昔もね」  
雄和はくすくすと笑うと、部屋を出ていった。

ドアがぱたんと閉じ、理沙は両手を太腿の間に入れ、ため息をつく。

「はあ……あしらわれちゃった。まだまだ私も子供だなあ」

じーっとドアを見る理沙。顔がにやける。

「私の王子様はかっこよすぎるんだわ」

・トイレの花子さん

1997年2月5日（水）

埼玉県川越市古市場。夜8時。

霊司は北城高校の1Fにいた。隣には華嬢と紫丹。

昨夜の美術室での出来事を根拠に、華嬢は幽霊の存在を強く主張した。鬼の首を取った態度で華嬢はトイレの花子さんも存在すると言った。

そこで先週聞いたうめき声がトイレの花子さんのものだったのか確かめるべく、またも校内に残ったというわけだ。

問題のトイレは霊司たちの教室の前側の出口を出たところにある。

大人が来ないことを確認し、彼らはトイレへ入った。

懐中電灯を使って中を調べるが、当然誰もいない。

「華嬢、やっぱいないみたいだよ。もう帰ろう」

「霊司ちゃん、奥の個室、まだ調べてないでしょ」

華嬢に言われるまま霊司は奥の個室に入った。すると華嬢が外からドアを閉めた。

「おい、華嬢。閉めるなよ」

ところが華嬢は返事をしない。むっとした霊司は「華嬢、僕を脅かす気だろ！」と声をあげたが、返事がない。

「なんだよもう……」

諦めて中に電気を当てたとき、空中にヘンなものが見えた。

——それは仮面だった。

「ひっ！」

思わず声が洩れる。

仮面は目の部分に細い穴が開いているだけの白いものだ。

よく見ると、それは浮いているのではなかった。仮面をつけた制服の少女が立っていたのだ、目の前10cmほどのところに。

それに気づいたとき、霊司は背筋を赤黒いムカデが走っていったような恐怖を感じ、発狂しそうになった。だが怖くて声が出ない。

「私に何か用？ 祁答院君」

「ど……どうして僕の……名前を」

掠れる声を出す。

「だってその教室じゃない。知ってるわよ。なぁに、興味本位で私に会いに来たの？」

答えに窮する。Yes と言ったら怒らせるかもしれないし、No でも怒らせるかもしれない。かといって華嬢が望んだからという言い訳も卑怯でできない。

「ぼ、僕は……その……き、君が花子さん……なんですか」

「ふふ、そうよ」

「け、結界に封じ込められてるんですか」

少女の顔色が変わる。

「どうしてそれを？」

「昨日、美術室の時計に縛られた女の人を助けたんです。その人から聞いたんです。この学校は結界なんですよ。君も閉じ込められているんですか」

花子さんはふうと息を吐いた。

「ねえ、私の顔、見たい？」

「え……」

「嘘をついても分かるの。答えて」

「その……怖くて……ようやく今の環境に慣れてきてショックが消えたばかりなんで、環境をこれ以上変えると怖くてどうにかなってしまいそうで……」

「失礼ね、私、女の子なんだけど」

「あ、そういう意味じゃ……！す、すみません。あ、でも確かに仮面のほうがふつうに考えて怖いかもしれないです。見てみたい……かな」

少女はくすくす笑うと、仮面を取った。

ところが仮面から光が漏れ、霊司は思わず目を閉じた。

目を開けたときには花子さんはいなくなっていた。

「あれ……？」

どこにいったんだろう。霊司は首をかしげ、外に出た。

とそのとき、知らない男の声で怒鳴られた。

「なにやっとするんや！」

教師が来たのかと思ってびくっとした。だが男は「はよう逃げるんや！」と言った。それはまったく知らない若い男だった。

「え？」

霊司は男を見る。男は霊司の後ろを指さしている。

霊司が振り向くと、そこには鉈を持った仮面の少女が立っていた。花子さんだ。だが、さっきまでとは様子が違う。仮面の奥の彼女は理性を失っているように見える。

「なぜ……私を殺した……」



少女は鉈を持った手を振り上げる。

「危ない！ 霊司！」

男は霊司の名を呼ぶと、右手から青い光を出し、少女を撃った。

少女が面くらっている間に霊司は走りだした。男は霊司の手を引っ張ると、走りだした。

なぜか華嬢と紫丹も一緒に走っている。

「あ、あのっ！ どうして僕の名前を！」

男に叫ぶが、男はそれどころではないという顔で走り続ける。

トイレを出たところでぱっと光が出て、気がつくやうに霊司はまた個室にいた。

「……あれ？ 今、僕は走っていたような」

だが花子さんと話した個室にまた戻っていた。いま、何が起こったんだろう。

霊司が外へ出ると、懐中電灯を持った華嬢がいた。

「どう？ いた？」

「え……？ お前、走ってなかったっけ？」

「……は？」

「え……あれ？ ど、どうしたんだろう」

「そりゃこっちのセリフよ」

「何があったんですか、霊司さん」

「いや……なんでもない」

華嬢にありのまま告げたらまたこの肝試しを実施されそうなので、霊司は黙っておくことにした。

・転校生と赤ん坊

\*大阪弁は良く分かりません。高校当時のいい加減な知識のまま現在に至っています。  
今だったら自分が扱えない言語のキャラは出ませんが、当時は平気で出していました。

1997年2月6日(木)

翌日。

2時間目の休み時間、霊司は廊下を歩いていた。

4Fには渡り廊下があるが、ここは屋内ではなく、屋上のようになっている。左右には柵があり、直進するとドアをくぐって化学室がある。

渡り廊下を歩いていたとき、霊司は資料集を落としてしまった。

するとちょうど通りかかった男が資料集を拾って渡してくれた。

「あ、すみません」

お礼を言った霊司は「あつ」と思わず言ってしまった。それは昨日トイレで会った男だった。

「なんや？ワイの顔になんかついとるんか。知りあいやったか？」

「あ……いえ」

「そうやるなあ。なんせ今日転校してきたばかりやさかいなあ」

「そうなんですか。あの、昨日……夜……学校にいませんでしたよね」

「{せやからワイは今日」

「でっ、ですよ！すみません」

「おもしろいやっちゃん。自分、名前何てゆうんや」

「祁答院霊司です」

「ワイは雅軀龍(ミヤビクニ)や。よろしゅうな」

「はい、お願いします。あ、僕のひとつ上みたいですね」

「ああ。次で3年やな」

霊司はお辞儀をして去った。

帰り道。霊司は4Fの一番奥の廊下を歩いていた。

1Fの自分の教室から見て対角線上にあり、最も遠い位置にある廊下だ。

パソコン部の部室には近いのだが、教室からは遠い。クラスの誰にも会わない気楽な場所だ。

休み時間はよくこのトイレに来る。誰も知り合いがいなくて落ち着けるからだ。

霊司は階段から屋上へ出る。誰も屋上へ出ないので、特に鍵もかかっていない。未来はどうか分からないが少なくとも現在は地域で評判の進学校であるため、学内でも制約が緩い。基本的にみな真面目で悪さをしないから、いちいち屋上に鍵などかけない。

誰もいない屋上で、霊司は肌寒い空気を吸っていた。

屋上にはクリーム色のタンクがいくつも置いてあり、歩けるスペースは少ない。

5分ほどで寒くなって引っ込もうとしたところ、藤色の毛布が落ちているのに気付いた。近寄って中を見ると、そこには赤ん坊が入っていた。

「はぁ？なんでこんなところに赤ちゃんが！？」

霊司はパニックになった。教師に告げようと思ったが、10代の多感な少年は突如この出会いが何か運命的なものなのではないかと感じ、このことを秘密にしておくことに決めた。

なぜか分からないが、こんなところに赤ん坊がいるわけがないし、きっと例の結界ネタにつながるイベントなのではないかと感じたからだ。

かといって赤ん坊をどうしたものか分からず、霊司はとりあえず抱き上げた。赤ん坊は霊司になつき、大人しくしている。

誰にも見つからないように赤ん坊を抱えると、霊司は屋上を出た。そのまま学校を出て、なんとコートに隠して自宅まで連れ帰った。

夜になり、霊司はニュースを見た。

赤ん坊誘拐みたいな話にはなっていないようで、安心した。

「さて、どうしたものか」

とそのとき、赤ん坊がぐずりだした。

「お腹減ったのかな。それともおむつかかな」

哺乳瓶などない。おむつの替えもない。まいった。

とりあえずおむつかと思い、おむつを剥がした。

「あ……この子、女の子だったのか。しかしこの後どうしたものか」

観念した霊司は窓を開けた。身を乗り出して「華嬢」と呼ぶ。するとすぐに窓が開いた。

「どうしたの？」

「ちょっと相談があって、こっち来てくれないか」

「うん、わかった」

2分もせずに華嬢が部屋に入ったきた。当然のことながら、赤ん坊を見て驚いたようだ。

「どうしたの、この子」

霊司は事情を説明した。

「なるほどね。けどさ、霊司ちゃん、どうやってこの子の面倒みるわけ？」

「それが……そうだよな」

「考えなしに持ってきちゃダメでしょう」

「そうだね」

とそのとき、窓の近くに青白い炎が起こり、若い女性が現れた。幽霊のようで、半透明だ。

「びっくりした……。あなたは……」

「この子の母です。北城高校の結界にいるのだけど、あなたに助けてもらいたくて、その子をメッセージ代わりに置いたの」

「僕に助けを？」

「ええ、あなたがこの子を結界の外に出してくれたおかげで、私もここまで来ることができたわ。

お願いがあるの。私とこの子を邪鬼から救ってほしいの」

「邪鬼？」

「私の夫、この子の父親よ。昔は心優しい鬼だったの。でも薬師寺京香に操られてからというものの、すっかり魔物になってしまっ」

「ここにも薬師寺が……」

「薬師寺はこの邪鬼の力を利用して結界を破壊するつもりなの。そんなことになったら私たちは一生成仏できないわ」

「つまり、旦那さんが暴れる前に薬師寺を倒せばいいんですね」

「ええ」

華嬢「あの……ところで、この子とあなたはどのようにしてウチの学校で幽霊を……」

「私は古い幽霊なんです。あの学校ができるとき、私の最初の娘が工事現場で遊んでいて生き埋めになってしまったの。この子の姉よ。

私は悲しみにくれて自殺したの。学校ができた後、屋上から身を投げてね。でも私のお腹にはこの子が既にいたみたいで、結局道連れに……」

華嬢は「なるほど」と頷いた。

霊司「旦那さんは鬼って言ってましたけど、ふつうの人間ではなかったのですか」

「彼は元寇の時代から現代にやってきた悪魔だったの。理性があつて優しくただけけれど、すっかり変えられてしまったわ」

2人は「ふーむ」と頷いた。

霊司「結論としては、薬師寺を倒せばいいということかな」

華嬢「まあ……そうなるでしょうね。結界が破られる前に」

霊司たちは紫丹を連れて高校へ行った。気付かれないように屋上へ上がろうとしたが、3Fで人と出くわしてしまった。

しまったという顔をする華嬢だったが、霊司は「あっ」と声をあげた。それは転校生の軀龍だった。

「軀龍先輩」

「知ってるの？霊司ちゃん」

「転校生なんだよ。1つ上で。なにしてるんですか」

「いやあ、学校に不慣れなもんで、迷ってしまったんや」と笑う。

「えーえ？それはないでしょう」

華嬢はじろっと見る。

「あはは。いやな、肝試しがしたかったんや」

「一人でえ？」

「そっちこそこんな時間に何しとるんや」

「き……肝試しよ」

「ふうん。なんかワケありっぽいな」

中々尻尾を出さない2人。紫丹はカマをかけるように、「薬師寺さんに会いに」と言った。すると軀龍の顔が一瞬ピクッと動いた。それを見て華嬢はニヤっとした。

「もしかして、あなたが薬師寺？」

「ちやうちやう、ワイは雅や。しかし薬師寺退治に来たのはワイだけではなかったんやな」

「やっぱり、結界のことを知ってるのね!？」

「まあな。色々事情があんねんや。ま、こうなったら一緒に薬師寺退治に行ったほうがエエみたいやな」

軀龍は階段を上がりだした。霊司たちはそれについていく。

「うお、それはそうと、アンタむっちゃかわええな。名前なんてゆうん？」

軀龍は驚いた眼で紫丹を見る。紫丹はたじろぎながらも「し、紫丹です。こっちはお姉ちゃんの天城華嬢……」

「ここの生徒か？」

「いえ……目指してはいますけど、まだ中三です」

「そうかそうか、じゃあ来年は一緒になれるな。いやあ、それにしてもホンマかわええな。すっかり一目惚れしてもうた」

「えっ」と霊司と華嬢が青い顔になる。

「あ……あの先輩、紫丹ちゃんはこんな風に見えて実は男——」

「ワイ、この学校に転校してきてよかったなー」

しかし軀龍には霊司の言葉は少しも届いていなかった。

・北城高校の結界

軀龍を仲間にした霊司たちは、赤ん坊をつれて屋上へ戻った。すると先ほどの母親の霊がまた現れた。

「お母さん、それで、薬師寺はどこに？」

「それが分からないの。この学校にいるのは間違いはないんだけど、どこにいるのか分からなくて。どこを探してもいないのよ」

頷く軀龍。

「せやな。実はワイも今日一日かけて校内を調べ回ったんやが、どこにも見当たらんのや」  
考え込む霊司たち。

「あの……もしかしたら」

皆の眼が霊司に集まる。

「物理的空間にはいないのかも」

「……つまり？」

「美術室の時計の中みたいな空間に引っ込んでいるのかも」

軀龍「そんなことがあったんか。なら霊力の高いところを調べあげればええんちゃうか。

お母さん、美術室以外に霊力の強いところはどこでっしゃろ」

「そうね……1Fのトイレと……この下かしら」

霊司が眉をピクッと動かす。

紫丹「この下？」

霊司「……僕の部室だ。PC室がある」

華嬢「1Fは花子さんだろうから、PC室が怪しいわね」

一同は4FのPC室へと行った。どこからくすねたのか、軀龍が鍵を使って中に入る。

霊司はPCの電源を付けると、棚で何かを探しだした。

「なにしてるの、霊司ちゃん」

「フロッピーを探してる」

紫丹「机の上にありますよ」

「いや、それじゃない。開かずのフロッピーというか、入れても何も反応しないやつがあつてさ。故障だと思ってたんだけど、今思うともしかしたらってね」

「{」

霊司は「あった、これだ」というと、ノーラベルのフロッピーを出した。PCに挿入する。

C>と表示されたところに霊司はyakushijiと打ち、リターンキーを押した。

するとその瞬間、PCに青い電気が流れ、画面の中から男が飛び出してきた。

「お、おまえ……」

若い細面の男はオレンジ色の長髪をしており、学生服を着ている。手を口に当て、くくくと笑っている。

軀龍「お前が薬師寺か！」

「くく……よく僕の居場所が分かったね、君たち。だがもう遅い。邪鬼の力はもう満ちた。この結界は破壊させてもらおうよ」

そう言うと薬師寺はすうっと出口へ飛んでいった。

「待て！」

軀龍は靈気を放つ。薬師寺は手で払うと、「邪魔だなあ」と呟いた。

「君たちの相手は彼女にしてみらおう」

すっと薬師寺が手を挙げると、靈司はふいに意識が遠のくのを感じた。

と思った瞬間、靈司はぐいっと誰かに手を引っ張られた。

「こら、急に止まるな！走らんかい！」

それは軀龍の声だった。なぜか靈司は1Fの廊下を走っていた。華嬢と紫丹も走っている。後ろを見ると仮面の少女花子さんが鉈を持って追いかけてきている。

「な……な……！？」

わけも分からず靈司は走った。どうにか花子さんを巻くと、4Fの渡り廊下で4人は息をついた。

「い、いったい何があったんですか！？なんで花子さんが！？」

「はあ？なにゆうとんのや。薬師寺に1Fのトイレに送り込まれたんやろが」

「へ？」

華嬢「そこで鉈を持った仮面の少女が襲ってきたのよ」

「そんな。僕の話した花子さんはもっと理性のある幽霊だった！」

「なんですって？僕の話したってどういうことよ」

「あぐ……いや、実は昨日……」

靈司は事情を話した。

「あきれた。花子さんに会ったんならどうしてそのとき言わないのよ！」

「ごめん……」

紫丹「ということは、靈司さんは昨日の時点で今日にワープしていたのですね。で、ほんの数秒だけ今日の世界に滞在し、すぐまた昨日に戻ったと」

「そうみたい。花子さんの理性的な面を知ってるのは僕だけのようだ。たぶん、彼女がこの時間に僕を送ったのは、救いを求めてのことだと思う」

そのとき、バンッと音がしてドアが開いた。仮面の少女が鉈を持って襲いかかってくる。

軀龍「目えさましや！」

霊力を放つ軀龍。しかし少女は鉈で青い球を弾き飛ばす。

「走るでえ！屋上や！」

「どうするんですか、先輩」

「屋上じゃ袋小路じゃない！」

化学室側のドアを勢いよく開けると、軀龍は叫ぶ。

「薬師寺や！あいつ、結界ぶっこわすゆうてたやろ。花子ちゃんはただの時間稼ぎや。あいつを先に止めなあかん！」

紫丹「邪鬼っていうのの復活を止めるためですね、軀龍さん！？」

「せや。お、ワイの名前呼んでくれたんやな、紫丹ちゃん」

階段を駆け上がると屋上へ出る。

軀龍「薬師寺ィ！」

屋上には薬師寺が天に昇る天使のようなポーズで宙に浮いていた。心なしか体が光っている。

「遅かったね、ウォンバスの諸君」

霊司「ウォンバス？」

「結界はたった今崩壊したところだ」

紫丹「そんな……」

横では赤ん坊の母親が泣き崩れていた。赤ん坊は泣いている。

「さあ、どうする、ウォンバスの諸君。結界は破壊した。邪鬼は甦る。仮面の少女もいる。そしてこの僕も。ふふふ、ウォンバスを逃がしはしないよ。ペルソナのためにもね」

「ペルソナだか三島由紀夫だか知らんがな、お前の思い通りにはさせんでえ」

軀龍は特大の霊力を放つ。が、あっさり薬師寺に跳ね返されてしまう。

薬師寺は即座に華嬢をマークするが、華嬢はきょどきょどした表情で身を守るだけだ。

「……ん？」

意外そうな顔の薬師寺。

「なぜ君は攻撃をしかけてこない？」

「攻撃ですって？武器ひとつないのに女の私にどうしろっていうのよ」

「まさか……戦闘要員じゃないのか？霊力のひとつも打てないと？」

「霊力って零司の打つような青い光のこと？私にできるわけないでしょ」

「ははは、こりゃ驚いた。日本のウォンバスはずいぶんと無能じゃないか。こりゃ最後の国はペルソナの勝ちで終わりそうだ」

「さあ、仮面の少女。その鉈で彼らをほふるがいい」

少女は鉈を振り上げ、霊司を切る。霊司は腕を切られ、地面に転がった。



「い……た」

小さな傷から血が滲んでくる。

「とどめだ、仮面の少女よ」

少女は鉈を振り上げる。しかし少女は「うう」とうめきを上げ、鉈を落とした。

「どうした」

「い……や」

「なに？」

「いや……彼は……私を助けてくれる……化け物の私から逃げずに話し相手になってくれた……殺したくない」

「何を言ってるんだ、石神結衣。お前、僕の怖さを忘れたのか？」

「薬師寺……お前こそ私の敵……」

「ふん……術が解けたようだな。石神、お前はもういらぬ」

薬師寺は少女に霊力を撃った。少女の顔面に球が当たり、仮面が弾き飛ばされる。

華嬢たちは思わず少女を見たが、逆行で見えない。足元の霊司だけがその顔を見ることができた。

「ふっ、化け物め」

「私は……化け物じゃない。薬師寺……お前が私を苛めたせいで、私はトイレで首を吊って死んだ……忘れたとは言わせぬ」

「お前みたいなグズは迫害されて当然だ。いい余興だったよ」

鼻で笑う薬師寺。少女は喉を詰まらせて薬師寺を睨む。

「なに言ってるんだ……お前」

静かな声で霊司が立ち上がった。

「怒ったのかな、非戦闘要員君？」

「彼女を縛ったのはお前だったのか、薬師寺。苛め殺しただと？よく笑ってられるな」

みるみるうちに霊司の髪が金色に変わっていく。

「お前……」

零司が来た。

零司は恐ろしい目つきで薬師寺を睨みつけた。

「ち、霊司のやろう。口上だけたれて、やるのは俺様かよ」

「何者だ……」

「あの世で考えろ」

零司は右手から強力な霊気を撃つと、薬師寺を消し飛ばした。

断末魔をあげ、薬師寺は光の中に消えていった。

「ち、口だけ野郎が。あっさり死にやがった。さて、と」

零司は少女を睨むように見た。

「苛められたからってすぐ死ぬな。相談するか薬師寺と刺し違えろ」と言い放つと、零司は床に倒れた。

少女は静かに「そんな強さがあれば苛められなかったわ」と呟いた。

やがて零司が起き上がると、無言で仮面を少女に手渡した。

「私に仮面を着せたいの？ 零司君。あなたも私の顔なんて見たくないの？」

「……てゆうか、石神さんが可愛いっていうのを軀龍先輩が知ったら、ライバルが増えちゃうんで」

零司はぼりぼりと頭をかいた。少女は意外そうな顔をしたが、嬉しそうな笑みを浮かべた。すると少女はすーっと消えていった。

ころんという音がして、仮面が地面に転がる。零司はそれを拾うと、優しく胸に抱いた。

「零司ちゃん」華嬢が駆け寄ってくる「石神さん、なんて？」

「え……？」顔が赤くなる「いや、別に……たぶん、ありがとうって言いたかったんだと思う」

「お姉ちゃん！ 地面見て！」

突如、紫丹が叫ぶ。見るとスクールバスの停留所付近、入口のアーチの近くで白い炎が燃え上がっていた。

華嬢「なにあれ……」

すると赤ん坊の母親が現れ、「邪鬼が復活しました」と告げた。

零司たちは急いで階段を駆け下り、アーチのところへ行った。

そこでは棍棒を持った鬼が咆哮をあげていた。

零司「な……んだこいつ」

母親「私の夫、魁羅です」

魁羅は零司たちを見つけると、手当たり次第に靈気を放った。すんでのところによけると、靈気は植えてある樗に当たって弾けた。

零司「あぶなっ！」

魁羅は怯える零司に近付くと、棍棒で背中を殴った。零司は「うっ」と言って地面に倒れた。

華嬢「まずいわ、零司ちゃんが倒れちゃったら零司が出て来れない！」

魁羅は軀龍に30発もの靈気を撃ちつけた。軀龍は捌ききれずに靈気を喰らい、地面に倒れ込む。

形勢悪しと見た母親は、華嬢に娘を託し、魁羅の前に立った。

「あなた……もうやめて。私と一緒に無になりましょう。あなたを止めるにはもうそれしかないわ」

しかし魁羅は彼女の言うことを聞かず、棍棒で彼女の胸を打った。彼女は地面に倒れたが、倒れながらも夫の手を握った。

「お願い。あなたを一人にはさせないわ。どんなになっても愛するって誓ったもの。こんなになってしまったあなたでも、私は逃げないわ」

彼女は掌を魁羅に当てると、靈気を直接魁羅の体に放った。魁羅は悲鳴をあげ、光の中に消えていった。

靈司が咳をしながら立ち上がり、彼女に駆け寄る。彼女は息も絶え絶えだ。

「靈司君……巻き込んでしまっでごめんなさいね」

「そんな……僕の方こそ助けられなくて……」

靈司は手を取ろうとしたが、彼女の体は徐々に薄くなっていき、触れなくなっていった。

「あの子を……羅刹嬢(ラセツジョウ)を頼みます。埋められた姉と一緒に供養してやって……」

そう言うと彼女は消えた。

靈司は赤ん坊を取り上げると、校舎と学食ドームの間、彼女が指さした部分に赤ん坊を置いた。

すると赤ん坊は猫のような泣き声をあげて、消えていった。

軀龍「終わったな……」

靈司「はい。しかし、結界、ウォンバス、ペルソナ……分からないことだらけです」

華嬢「薬師寺のやつ、私たちのことをウォンバスとか言ってたわ。なんのことかしら」

・ねじ曲がった鬱

2008年7月19日

埼玉県南埼玉郡白岡町新白岡。夜11時。

「ふうっ」

19歳の水月紫苑は桃色の唇の間から息を吐いた。

「おつかれ、紫苑」

「先生も」

俺は紫苑の部屋にいた。いましがたアトラスから帰ってきたところだ。

メルティアのおかげで紫苑と俺は1年に1度アトラスに行くことができる。レインはアルバザード人でありかつリディアの養母なので、特別に自由に行き来できることになっている。

今日はディアセル。いつものようにアルバザードへ行き、アルシェたちとあつて親睦を深めてきた。織姫と彦星のように互いの別れを惜しんで帰ってきたところだ。

俺は会社帰りの格好のまま、スーツでアトラスへ行った。今は手を動かしてネクタイを外している。

「ねえ、先生」

「ん？」

「ここ、座って」

ベッドに手を置く。紫苑のベッドは一人用で、夫婦とはいえ、寝室は別だ。紫苑はダブルベッドを望んだが、俺が強く拒んだ。

俺は前妻との離婚の原因に「近づきすぎたこと」があると考え、紫苑との同室を拒んだ。

だが俺のルールでは、俺が紫苑の部屋にお泊りするのはOKだ。事実上何日間もお泊りするということも、まもある。

「どうした？」

「うん……その、先生の様子がヘンだなって思って」

「え……？」

眉を動かす静。

「簡潔に言って、今日、鬱でしょ？」

「なんだ、それw」

「ようするに、鬱なんでしょ、でしょ？」

「……なんでそう思うの？」

「上の空だもん。先生、悩みがあって元気がないとき、上の空になる」

「そんなの誰でも同じだろ」

「顔に出るのよ。パッチリした眼が眠そうに半分閉じるのよ。無気力な目つき。焦点が合わないし、人と目を合わせない。鬱の証拠だわ。ちがう？」

俺は鼻で笑った。

「はいはい、紫苑には敵わないな」

「悩みなら聞かせて。あなたの悩みは雪玉ころがしだもん。ほっといたら短時間で取り返しがつかないほど大きくなってしまう」

「うむ……いや、だが凄くヘンな話でな」

「ヘンな悩みなの？」

「ああ、そうとも言えるな。紫苑、お前さ、人生の意味って考えるか？というか、人生の意味ってなんだ？」

紫苑は眉をひそめると、首を傾げた。

「……特に考えないわね、そんな大層なこと。私にとっては日々の生活を先生と幸せに暮らせることが一番なんだけど」

「それが人生の意味になるのか？」

「意味っていうより楽しみとか価値よね。でも、私の場合、それがイコール意味でもある、かな。先生は違うの？」

「いや、まったく同じだ」

紫苑はアルバザード人のように cΛJh-cZ した。

「同じなんだよ。俺は紫苑が好きだ。お前みたいな女神はほかにいやしない。地球でもアトラスでもお前くらいだ」

「ふふ……」と嬉しそうな顔。

「紫苑のおかげで今の会社に入れた。定時過ぎに返してもらって、仕事もつらくなく、それで年収も高い。そのくせ家に帰れば女子大生妻が手料理をふるまってくれる。

すでに可愛い娘がいて、親友のレインもいてくれる。年1回はこうして異世界で遊べる。

現在の環境はまったく苦しくなく、楽しく、将来も希望に満ち溢れている」

「うん、うん」

「こういう右肩あがりの状況だと、人間は不安に思わない。たとえ将来いつかは死ぬと分かっているけど、成長期は不安が少ない。

だが、右肩下がりと別だ。俺は27だ。年々老いている。10代みたいな無理が効かない。なにかすればすぐ体が痛くなる。

そのくせガキのころと違って仕事ばかり増える。体は悪くなってるのに、打つ鞭の量は増える。右肩下がりと。下がってる時は不安になるんだよ」

「うん……。ただ、静は現状、下がってはいないのよね？私がいるから」

「ああ。だがな、俺はこの現実が架空なんじゃないかって思う。お前みたいないい女に拾われて……ってほどのことを俺はしてない。正直、ラッキーすぎて意味が分からない。

本来の俺は今頃どうしてたかなって、そればかり考えてしまうんだ。つまり虫に捨てられて自力でコネもなかったらどうなったかってね。

そればかり考える。そしてその想像が現実感じられる。その現実の現在や大4のときのギャップが激しすぎて、人生はこんなに嫌なことだらけなのかって思うんだ。

10代はいい。入学式もあるし、青い恋愛もできる。入社式も結婚式もある。だが俺には何がある？もうあとは葬式だけだ。離婚もした俺は、25超えた瞬間、自分に残ってるのが葬式だけなんだ」

「……」

紫苑は沈痛な面持ちと、困惑した表情を同時に見せた。

「ものすごい不安だぞ。虫に捨てられ、自分一人でどうにかしなくちゃならない。体は老いていくし、転職も厳しい。ロクなキャリアも築いていない。じゃあもし今の会社がつぶれたら？

潰れなくて楽で払いのいい会社なんて有名大学の新卒じゃないといけない。ってことは金で我慢して結婚できないか、健康を捨てて乾電池のようにブラックで使い捨てられ、稼いだ金は病気で消えるかのどちらかだ。

薄給、サービス残業、休出、名ばかりの管理職、転職に使えないキャリア、いつまで安泰か分からない経営……人間関係以前に労働環境が整っていなさすぎる」

「それは……私と合わなかった場合の話ってことでよね？」

「そう」

「そっか……」紫苑は暗い表情で息を吐いた「そんなに世の中厳しいのか……。私、大学生だから何も知らないなあ……」

「まあ、最後は運だよ。新卒でも有名大でもブラックに行くやつはいるからね。メガバンクより外資のほうがずっといいからって外資行ったはいいものすぐつぶれたり、メガバンクでの激務に耐えかねて辞めたり。一流メーカーでも激務に耐えられずに辞めたりな。

逆に専門卒でも楽で割りのいいところにコネで潜り込めることも多々あるし」

「うーん、じゃあ何のために頑張って受験したのかなあ」

「と思うから、ますます大学は勉強でなく就職のための学校になっていくわけだ」

「うん……それはわかるけど、先生、話がずれたね。架空の静はとにかくお金や健康やお嫁さんなどの中のどれかを捨てなければならないのね。

でもさ、そんなに不安？静と会ったときのこと考えると、別に食べていけないことはなかったと思うよ？」

「食うのはな、できるさ」

「残業それなりで、お金もまあまあ平均くらいで……だったらよくない？そういう仕事にすれば。今で27、まして蛍さんのときは25だったんだし、パラレルワールドの静もやり直せたんじゃないの？」

「ただ、定時すぎに終わってアフターがあると、それはそれでつらい。そういう仕事は事務が多いからね、この仕事やって何になるんだろうとか思うわけだよ。

自分はこのまま何もなさずに死ぬのだろうか。ただジジイになって体が動かなくなるだけなら、今日死んでも同じことではないか？どうせ良いこともないし発展もないのだから。と思うわけだ」

「そっか……。じゃあ先生はどうしたかったの？何がどうなれば満足なの？てゆうか、静の満足できる、「あー、これが人生の意味だ」っていうのは何？」

静は自嘲気味に笑って答えた。

「世界を救う」

「軍隊とか医学みたいに？」

「いや、魔法を使いたい。剣でもいいけど。それをやって世界を救いたい。アルディアのセレンみたいにな」

「なるほど。でもさ、シェルテスを倒した先生は英雄だと思うよ。魔法だって使ったじゃん」

「そうそう、だけど紫苑と会わなかった俺はアトラスに行っていないから」

「あ、そうか……」

「うーん、つまり、さ。静は「人生の意味とはなんだ、俺の人生こんなくだらない作業の繰り返しでいいのか、俺の人生は好転せずにただ老いて死ぬだけか」っていう不安に押しつぶされそうなのね？」

しかも、それが現在の自分ではなく、たぶんそうになっていたであろう架空の自分に対して」

「ああ」

「なるほど、やっかいな悩みね。悩んでる主体が実際の自分ですらないわけだしね」

「ああ。でもさ、実際魔法なんて地球では少なくともムリじゃん？となると、俺の望みって高望みなんだよ。で、魔法が叶わなきゃ、あとはどうでもいいやって腐って生きてる。

ふつうは司法試験が取りたいとか医者になりたいとか言って夢にするんだよ。でも俺は医者なんかどうでもよくて、そんなの何万もいるのでどうでもいいって思うんだよ。

俺は自分しかねれない特殊能力で特別な人、オンリーワンかつベストになりたいんだよ」  
「努力なしで？」

「そうそう。俺の才能により、世界を救う力を得たいんだよ。だけどそれができない。でもほかには興味持てない。医者なんてどうでもいいとしか思えないからね。

もちろん医者は世の中に必要なんだけど、俺が俺を特別に思うという意味ではどうでもいい。

アルディアだってそうじゃん。リディアもセレンももともと世界を救うべく生まれてきた。始めから才能があって、努力はすべて報われる。でも俺はそうじゃない」

「あれは……異世界の話だから」

「そりゃそうだけど……」

「ええと、ちょっとまとめるね。現在の静は私との甘い生活があるから満足なのね？」

「ああ」

「だけど、より現実味のある架空の自分が哀れで、そのことを考えると鬱になると」

「そうなんだよ」

「かといって架空の静の不安を取るためには救世主になるか、最低でもやたら有利な転職をあてがってくれるかしないとダメ」

「ああ。金や将来性など、どれかひとつでも失えば容易に不安になる状況だ。で、架空の俺が不安に思うと、現実の俺も鬱になるんだよ」

紫苑は口を手で覆った。

「じゃあ……静が救う相手は架空の自分ってこと？」

「ああ。できないけどな。俺思うんだよ、人生戻って失敗をやりなおしたいって。でも人生の失敗に気づくときはたいてい大人なんだよ。だから、手おくれ。

つまりさ、時間を戻したいんだよ、せめて。10代じゃないことが嫌なんだ」

「どうして？」

「魔法の世界にスカウトされるのはどう考えても10代だけだからだ」

「あ、それは私も17のころに思ってた。ラノベの読みすぎかな」

「俺はラノベ世代だから、人生の良い部分は夢のある部分は10代のうちだけで、20や30にもなって異世界の魔法少女と恋愛したり冒険することはないと思ってるんだよ。

で、自分が搾り滓であるところのオッサンになってしまったことで、鬱になっている。生きたくないんだけど、死にたくないから生きている。それだけだ。毎日が苦痛で生きる」

「うーん、客観的には架空の静も幸せだと思うよ」

「年収はリーマンの平均くらいはとれて、そこそこ健康で趣味もやって友達もいて遊んでる。まあそうなるだろうな。女もできていただろう。



北朝鮮の人間とかに比べればはるかに幸せだし、派遣社員とかに比べればずっとマシな生活だろう。

だけど、それでも体は苦しいだろうから、きつい歯車にすぎない。それが嫌だ」

紫苑はこくこくと頷いた。

「結局俺のわがままなんだよ。どこまでも自己中で自分が世界の中心だと思ってるから、こんな風に考える。

そして非現実的な夢が叶わないことを理由に勝手に一人で鬱になってる。どんな社会人だよ」

「非現実な夢……か。それが無理だとあきらめて、じゃあまともな生活でもするかと思ったら、それすらできない年齢になっていた、ということね」

「そうだな……。一段階夢を下げて、それさえ叶わない。年をとればとるほど色んなものを失っていく。得るものなどない。いや、あるだろうが、若いときに得たほど嬉しくないものだ。

仕事のスキルだなんだを喜ぶのは自己防衛さ。あんなもの本当はどうでもいい。本当は魔法を使って異世界で活躍する以外に得る希望などない」

「静は本当に異世界に行きたかったのね。私も同じだったから、分かるよ」

「異世界……というのもあるが、俺の考えていた想像の世界が実現したら、どんなに面白かったかと思うよ。ガキのころ考えてた想像が実現したら、別に異世界じゃなくてもいいわけで。

つまり想像の世界が実現化したら、どんなに面白かったらうって。それだけで一生分のイベントをもらえたって思えて、あとは人生何があっても、自分の人生には意味があったと思えるじゃん」

「なるほど……。私で言うならフェンゼルとシェルテスを倒したから、人生の意味をまっとうしたってことね。それと同じことを、並行世界のあなたもしたいのね」

「ああ」

「てゆうか、先生って子供のころ、そんな想像の世界を持ってたんだ？」

「ん？ああ、ラノベの影響でな」

「どんな話？聞かせて」

俺は少し顔を明るくして話し出した。こういう話をするのが楽しいみたいだな。少年のころはきっとこんな顔をしていたんだな。

「いくつかあるんだけどな、一番中核なのはウォンティッドバスターズっていう話なんだ。略してウォンバス」

「「お尋ね者を狩る」っていうこと？」

「そうそう。もともと中2で描いてた漫画のタイトルなんだけど、いつしかゲーム用の作品のタイトルになったんだ」

「ゲーム？」

「ああ、PCでプログラムしてたんだ」

「すごーい」

「すごくはないけど。まあ、そのゲーム用の設定で、けっこう膨大な設定があった。でも小説にはしなくてさ、記憶とファイル2冊分の情報しかない。ゲームもいくつかやっただけで頓挫したからね。

高校のころはさ、毎日そのゲームの設定を考えてた。架空のキャラのことを考えてた。勉強なんかしなくてな、毎日楽しかった」

「私は作品を作らなかったから共感はできないけど、聞いている感じ面白そうだね。で、どんな話なの？」

「地球には結界があるんだ、全国各地にたくさん。それを全部壊すと人類を滅ぼせる。で、人類を滅ぼしたいのがペルソナ、選民だけ残したいのがニューワイズ、人類を守るのがウォンバス」

「タイトルがウォンバスだから、主人公は人類を守りたいのね？」

「その通り。ただな、俺、自分をモデルにして3つのうちの1つのグループのリーダーにしているんだ」

「ニューワイズでしょ？」

紫苑はしれっと言った。

「よく分かったな」

「100%選民思想だからね、静は。人間自体は嫌いじゃないもんね。あなたの言う「バカ」や「クズ」が嫌いなだけで。あなたは真面目よ。世界をよくしたいんでしょう？守られるべき人たちのために」

「はは。で、俺にはゼロから作る独創性がなくてねえ。

高校生の主人公なんだが、二重人格は銀狼怪奇ファイルっていうドラマのパクリ。大人しい男の子が主人公っていうのは当時のラノベの流行り。

祁答院っていう苗字は中3のときに聞いてたトワイライトシンドロームっていうラジオドラマのパクリ。赤い月を俺が特別視するのは、同じ番組から。

あと、ほかのキャラはクランプのXから大体パクってる」

「へえ。けっこうオタクだったのね」

「黙ってたけどな」

「いつごろまで考えてたの？」

「大学になったらいつの間にか忘れてたよ。あとはな……もうファンタジーを考えてもわくわくしなくなった。オッサンのくせに恥ずかしいって思ってたな。

オタク趣味に走れるやつはある意味才能だ。無駄に常識があるとハマれない。年相応であるべしとかいう自分側の抑制が入ってしまい、苦しいことになる。

秋葉原の加藤容疑者だって二次元で満足できればよかったのに、無駄にプライドがあってそうじゃないから苦しんだんだ。解脱したやつの勝ちだよ」

「先生はプライド高いもんね。解脱はできなそう」

「こないだ定期検診で大病院に行ったんだよ。昔は心臓が痛くて心電図を取ってもらった。あそこ聖剣伝説2っていうゲームが発売するころでな、待ち時間に雑誌見てわくわくしてた。

で、同じ病院にいったわけさ、27で。別の病気の心配で。でも全然当時と気持が違うんだよ。病気があったらどうするよ？っていう不安ばかりだ。自分が若くないことを知っているから。

ゲームなんか目にもつかない。DQ5がDSで出たからやってもいいって思ってるんだけど、でも通勤中は勉強しなくちゃお父さんに申し訳ないとか思って、時間が作れない。

それに、この年でゲームなんてとってしてしまう。だから、たった13年でこんなに同じ病院に行っても違うものかと思って、鬱になるんだよ」

「ゲームくらいいいんじゃないの？あ、でも先生的に納得できないのか。じゃあ納得できる遊びって何？」

「年齢的にじっくりくるもの。酒、たばこ、ギャンブル、女、家族サービス。以上だ。温泉はまだ早い。ディズニーランドでデートは逆にそろそろ遅い」

「うーん……で、その中で実際にやりたいものは？」

「酒は肝臓が心配で飲まないし、たばこは高校のときだけ。ギャンブルは嫌い。女かな、セックスしたい」

「ふふ……してよ」

「いや、正確には、したいときにできる環境がほしいというか……実際にしたいわけではなくて、恋人がいる安心感というか」

「なにそれ……私を怒らせる気？」

「あ、いや……。で、まあ、楽しみないよな、俺。家族サービスくらいか？それはむなしくない。むなしいのが嫌なんだよ」

「ほかにはないの？女ってことは、風俗は？まあ行ったら毒盛ってリディア巻きこんで心中するけど」

「……。紫苑がいるうちはいかないよ。いなくなっても変わんないかも。どうせむなしいだけだし。だからさ、ガキのころと違ってむなしい遊びは嫌なんだよ、キャバクラとか。楽しいかつ有意味でないと嫌だ！」

「うーん、先生を喜ばすのは難しいなあ。自分で「こうあるべし」っていう要求が強いよね。人生、つらそうね……」

「つらいよ。だから嫌なんじゃん」

「もっと楽に生きていいと思うよ。満足できるレベルを下げないと。「丸い四角を持ってこい。じゃなきや泣くぞ、ゴルァ」みたいな感じじゃないですか、それ」

「はは、そうだな。リディアより赤ん坊だな」

「まあ、純粹ってことですけどね。そういうところ、嫌いじゃないよ。でも、行きすぎは困るよね、先生的にも」

「そうなんだよ。だから……諦めるしかないかな。まあ、現実の俺は紫苑がいて幸せなわけだしさ。でも並行世界の俺は違う。

せめて良い生活があるか夢が叶っていれば……」

「ふう。夢……か。想像の世界……。それが叶っていれば静は人生の意味をまっとうできた……」

「だが、今更どうにもならない。それが 27 という年齢だ。現実だ。死んだ方が早いのに、死ねない」

「……つらいね。要求が高いことが辛いだよ。でも、それを下げられないんでしょう？」

「ああ……」

紫苑は静の左手に右手を重ねると、静をじっと見た。

「じゃ、叶えよう」

「……ん？」

「先生、その夢、かなえよう」

「何がだ？」

「自分が要求を変えられないなら、世界を動かせばいい。先生は世界の中心なんですよ？」

今ここにいる先生は、私のおかげで救われたのよね。でもパラレルワールドの先生は私に出会わなかったら救われてない。

じゃあ、救おうよ。私にとってはその世界の水月静も水月静なんだから」

「それは……ありがたいが、救うって……どういう意味だ」

紫苑はすっと立ち上がると、机からメモを取り出した。

「なんだそれ？」

「玲音の書。覚えてる？」

「もちろん。でもあれはノートだろ」

「これ、あのノートの紙よ。切り取っておいたの」

「なんのために？」

「もちろん、魔法を使えない私が魔法を使うためによ」

「それで何をするんだ？」

「変えるのよ、世界を」

「は？」

「あなたがさびしい世界なんて、いらないでしょ？」

「え……あの」

紫苑は薄く微笑むと、紙にアルカで呪文を書いた。その紙を机に置くと手を重ね、呪文を唱えた。手のひらと紙の間に淡い緑色の光が起こる。

「並行世界の先生が救われれば、今のあなたも救われる。そうよね？」

「あ、ああ……。だが、そんなことが本当にできるのか？」

「できるわよ。今から並行世界に連れてってあげる。あなたは自分の好きな年齢に戻れるわ。今の精神のままでね。好きなだけ、過去をやりなおしなさいな」

「ほ、本当か……？」

「実際に世界を変えるのは並行世界のあなたであって、今ここにいるあなたとは分離してしまうんだけどね」

「そりゃ好都合だ。この世界の俺はお前に会って幸せなんだから。俺が救いたいのはお前に会わなかったときの俺だ」

「ふふ、先生は私に会ってよかったね。会わなかったときの自分も救ってもらえるんだから」

「……？」

「大丈夫。安心して、不安な静。あなたの不安は私が取り去ってあげる。Jee cJ( Ca, C4a Ccc- <-I AaA, 4-δ」

紙から光が漏れる。紫苑は目を細めて俺を見つめる。

「やりなおしたいことなんて誰にでもある。でも過去はやりなおせない。交通事故で足を失った人も、「あの日」には戻れない。子供を失った人も、「あの日」には戻れない。

——ふつうはね。

でも、諦めないで。魔法は存在するのよ」

「紫苑……」

「静、あっちの世界でもまた私を選んでね」

「え？」

「大丈夫、あなたはあなたのままよ。分離するのは別のあなた。私も分離するわ。紫苑でない私として。静、私を選んでね。(c-(c……J」

・迎えに来たよ、俺

2008年7月19日

東京都新宿区。

「お疲れ様です」

俺、水月静はオフィスを出て、帰路についた。

外は蒸し暑い。まったく、新宿なんか勤めるもんじゃないな。アスファルト多すぎなんだよ。

ケータイを開きながら街を歩く。誰からも電話がない。メールもない。いや、メールはあった。もっとも、広告メールだが。

はあ、と息を吐く。時間は7時。今日は早い。

どうするかな。帰ってもやることねーし。ゲームやろうにも、仕事でPC使ってるのにこれ以上目を酷使したくねーし。寝ながらニコ動かな。

あーあ、彼女もいねーし、やることねーなあ。昔のダチは離散か結婚のどっちかだし。会社の連中じゃ遊び相手にもなんねー。

はあ、俺、このまま何もなくて年だけとって、だんだんガタが来るのを待つだけなのかな。何もいいことなく、このまま死ぬのか。

27でまだ何でもできるって社長は言うけど、じゃあ例えば今から薬剤師なんてなれるか？なれねーだろーが。6年間も大学通えるかよ。

K1に出るくらい強くなれるか？それも無理だろ。今までのしょっぱい貯えを取り崩して生きるしかねーんだよ。

はあ、蛍にも逃げられ、ガキにも会えねー。学生結婚だったから大学のダチにも恥ずかしくて会えねーし。

蛍はいいよな、帰れば可愛いガキがいて。俺には何もねえ。

それにしても女できねーな。まあ、稼ぎも少ないし、できるわけねーか。それにこんな性格じゃな。見た目だけ無駄に良いのにな。

かつこいいとはよく言われるが、それまでだもんな。どうにもなんねー。

はあ、恋愛がしたいなあ。セックスはソープでいいとして、恋愛がしてー。だがモテねー。しにてー。いきたくねーが、しにたくねー。

うあ、マジ鬱だよ。夕方以降はいつもこうなんだ。寝る前が特にひどい。

こうなると、俺の人生どこで間違っただかなとか考えるんだ、いつも。

胃腸が痛いのが気になって、不定愁訴の原因ばっか考えやがる。ストレスに決まってるじゃねえか。

暗いことしか思いつかねえ。

夜になるといつも自分が最後病院のベッドで仰向けで倒れて、天井見ながら寝てて、家族もなく痙攣してゴミクズの肉塊になるんだってことばっか考えて怖くて発狂しそうになる。

そんな毎日だ。毎日毎日毎日毎日。

夕方になれば鬱になり、将来への不安に襲われ、起きている間は胃痛にやられ、寝る前は発狂にさいなまれる。

何もかもこんな状態の俺をあっさり見捨ててった蛍が悪い。俺が院止めて見通しが効かなくなったらすぐ裏切りやがった。

なにが愛だよ。ふざけやがって。そんなもん、この世に存在するか！

ちっと舌打ちをして地下鉄に入っていく。

片道1時間弱かけて家に帰ると、待っていたのは猫と親だけだった。父親は死んだ。母親だけだ。

弟はいたが、家出した。嫁もいない。ガキもいない。クズみたいな燃えカスの俺しかない。

俺の病気のせいで周りが逃げていく。自己を抑制できないからか？誰も俺を治す気なんかなく、俺の症状が安定しているときに近付いてきては、症状が悪化したとたん逃げてきやがる。

まったくもって人間不信だ。悩みの総合デパートだよ。

ちっ、典型的な鬱の症状だな、こりゃ。

だが鬱の原因は蛍だ。あいつのせいで05年から鬱がなおらねえ。

大学出てからいいことなんてひとつもありやしねえ。

誰か俺にまともな職や希望ある未来を与えやがれ。

じゃねえと蛍殺して都庁あたりで自爆テロすんぞ、この野郎。

あ、そうだ。蛍の名前叫んでキー局に恨みつらみの手紙を送って大規模な自爆テロしたらどうか。

蛍を単に殺すより効果あるかも。

ああ、そんなことばっか頭をよぎる。

夢があんなら呪ってないで勉強しろよ。努力しないから何にもならないんだよ。

と思うだろうな。

甘い甘い。努力してほしいなら、まず努力したくなるような気にさせてみろ、地球！

こんな状態だとやる気がでねーんだよ。

ああ、うぜーな。なんか来いよ、なんか。魔法少女的な。

いつもポスト見てんのはメガネ屋のハガキ受け取るためじゃねーんだぞ。

中学生のころからポスト見てんのは、クラスの子がラブレター送ってきて彼女になってくれて、俺のこのクソ人生を救ってくれるのを待ってるからなんだぜ。

窓の外から魔法の少女が来て、俺のことを迎えに来たよって行ってきてくれ。てゆうか、言ってこい！

俺からはなんもせん！だが俺の先天的な俺性によって、なぜか才能溢れる勇者として異世界に召喚されるのだ。

俺にとって価値があるのは異世界を救って英雄になることだけだ。魔法を使ってな。異世界じゃなくてもいいけど、とにかく魔法と英雄だ！

そうじゃなきゃ弁護士だろうが医者だろうが、どうでもいい未来だ。

——つつつ、もうかれこれ 17 年以上か。はあ……。

今日も、当たり前だけど、窓の外なんか見ても、誰もいない。

こうして部屋を暗くしてランプをつけてぼーっとカッコつけてれば、27 でもまだ少年誌の主人公みたいなカッコいいクールな雰囲気でするじゃん、この顔だし。

ってなわけで、少年誌の主人公としてギリセーフってことで勧誘されないかな。ってなことを考えて、今日もこうしてるわけだけど、こねえ。

はあ、人生やりなおして一な。どこでしくじったんだろ。やっぱ中3か高1だろうな。あるいは17あたり。

25では既に取り戻しが付かない事態になってたな。

ガキのころに戻ったらPCもやんねーし、運動ももつとする。勉強もしたし、虫歯にならないように徹底的に気を付けた。

で、女子高生を合法的に彼女にして、やりまくってやる。

くそ……もう人生やりなおしきかねーのかよ。いきたくねえ……。

——コンコン

「ん？」



俺は入口のほうを見たが、誰もいない。  
ノックがまた響く。  
入口じゃない。窓だ。何かが当たっているのか。  
俺はランプを向けた。

が、そこに映っていたのは俺だった。  
「空耳か……」  
と思った矢先、窓に映った俺がノックをした。  
「!？」  
な、なんだあの影。俺はノックなんてしてねえぞ。

いや、違う。あれは俺だ。窓の外に俺がいる。宙に俺が浮いている。  
「おい、開けてくれ、俺」  
向こうの俺は俺を俺と呼んでいる。ああ、どうもあいつは俺らしい。  
「え……なんだお前」  
ビビりながら声を出す。  
「俺だよ、水月静。なんちゃらサギじゃないぞ。「これがほんとのオレオレ詐欺」とか言わないから。  
分かるだろ、こうして迎えに来てほしかったんだろ？知ってるぜ、なんせ俺の注文だからな」  
「な……なんだよ、いったい」  
乾いた声で窓に近づく。  
「お前の大好きな魔法で来てやったぞ。早く開けろよ。これが中国人窃盗団かと思って躊躇してる間に魔法が解けたら、一生後悔するのはお前だけ、つまり俺」  
「あ……ああ」  
俺は半信半疑で窓を開けた。一応下がって格闘技の構えをしておく。

「おいおい、並行世界の俺はそんなビビリなのか？」  
「お前は……本当に俺なわけか？」  
「ああ、心臓バクバクだろ、お前。期待 120%だよな？いいぜ、安心しろ。いつも見てる「蛭が寄り戻してくれてよかったと思いきや、実は夢っていうオチで殺意がわく」っていうのとは違うからな」  
「でも、あの夢はたまに「これは夢じゃないんだよな」っていう確認を夢の中でしてんの、結局朝になって余計鬱になるんだぞ？」  
「ああ、あれはキツイな。だが安心しろ。これはマジだ。座るぜ」  
俺が俺の前に座った。ヘンな気分だ。

「ふむ……この世界の俺のほうがやつれてるな。今彼女はいんのか？」

「いや……」

「だろうな」

「お前はいるのか？」

「ああ、かなりありえないくらい上玉がな。結婚もして子供もいる」

「蛍はどうなった？」

「あ？ああ、あれは別れたままだよ。だが大丈夫。次の女ができれば前の女なんてすぐ忘れるもんだ。蛍への恨みなんか自分の生活が安定して希望が出ればすぐ記憶ごと消え去るさ」

「そうか……。ふむ、俺がいつも思っていることだが、口で聞くとゲスだな」

「まあ、俺だからな」

「その俺がよく上玉と結婚できたな？こっちの俺は全然だ」

「で、そっちの年収は？」

「5,600くらい」

「いいじゃん。中途のくせに」

「でも大変だぞ。お前は？」

「嫁が逆玉でな。親父さんの商社に潜り込んだ。あと数年で1000万になる。定時で上げられる仕事だよ、特別扱いでな」

「すげえな」

「ところでお前、まだ塾なのか？」

「いや、もう辞めたさ」

「その嫁ってのは、あの塾で出会ったガキだ」

「え？生徒と結婚したのか。意外だな。ってゆうかそんな生徒いたかな」

「初月紫苑っていうガキがいたろ？」

「初月……？あつ！」

言われてハッとした。いたいた！あの可愛げのねえ。

「えっ、だってあいつ、入ってきたばっかの春先だったか、なんか俺のところに質問しに来てさ。立て込んでたから待たせちゃったらそのあと急に態度が悪くなってな。

クソガキだったっていうイメージしかないぜ？なんだか夏に辞めちゃってさ。会話なんて全然なかったし」

「ははは」

「お前、あんなんと結婚したのか？」

「いやいや、お前の思ってるよりずっといい子だよ。それに凄い子でな。異世界に行ったり魔法を使ったり」

「はあ？」

「ここに来たのも紫苑のおかげだ」

そのあと、俺は一通り俺から事情説明を受けた。

信じられなかったが、目の前の状況を前にして、嘘だとは言えなかった。

「——さて、じゃあお前が望めば過去に戻してやるけど、どうする？この世に未練はあるか？」

「いや、ないね。明日から仕事がどうなってもしまったことじゃない」

「言うねえ。俺はそう思えないけどな」

「そりゃ嫁の親父さんに悪いからだろ」

「まあ、あれだ。今の俺より幸せに——てゆうのは違うな——今の俺とは違う、紫苑が主人公じゃなく、俺自身が主人公となる世界を作ってくれ。悔いのない、人生の意味を見つけてくれ」

「ああ、分かった。じゃあ、送ってくれ。しかしあれだな……」

「ん？」

「迎えに来るのをずっと待ってたわけだが、迎えに来たのが俺とはな。どこまで孤独なんだか……」

「まあ……そう言うな。魔法少女じゃなくて悪かったな」

「あのさ、魔法少女には会えるのか？」

すると俺はにやっと笑った。

「ああ、会えるさ。結局俺もお前も運命の人は同じセレスなんだ」

「セレス？」

と言った瞬間、目の前がぱっと白く光った。

・もし人生をやり直せたら、本当に幸せな未来に行けるのだろうか

1995年4月10日(月)

眼を開けたら……夢オチだった。

見えたのは天井。ただの天井だ。俺の部屋の、白い天井だ。

なんだよ……。

思わず涙が出た。

せっかく人生やり直せると思ったのに、いつもこれだ。

蛍が戻ってきたと思ったら夢。

金が入ったと思ったら夢。

病気が治ったと思ったら夢。

どこまでこの世界は俺をぬかよろこびさせやがるんだ。ふざけやがって。

はあっとため息をついて起き上がった。

——ら、視界の変化に気付いた。

「はあ……？」

部屋の内装がわずか一夜の間にガラリと変わっていた。何が起こったのだ？

「ん？」

そして、ふと気づいた。

あれ……なんで俺、メガネかけてないのにこんなに見えるんだ？

ぐるっと見回す。机にはPCが置いてある。しかし、それはwindowsではなく、NECのPC-9800だった。とっくの昔に捨てたはずなのに……。

「……{」

机を見る。コクヨの学習机だ。マリオの絵が下敷き代わりにになっている。

「おい、なんだよこれ……」

立ち上がる。

あれ？なんだか体が軽い。胃腸も軽い。今日は調子がいいのか……。

部屋を出て、鏡を見る。

「……は？」

そこにいたのは、俺だった。ただし、ガキのころの顔をした、背の小さい俺だった。

「な……んだよ、これ……」

隣の部屋からガチャッと音がして、人が出てきた。

「おはよう」

親父だった。病気にかかる前のまともな顔をした、27の俺に近い痩せこけた疲れた暗い顔をした、あの陰気臭いクソ親父だ。スーツを着て、カバンを持っている。ただの挨拶なのに、それすら俺に怒っているかのような口調だ。

「え……あ、はい……」

親父は俺を尻目にトイレに入った。

俺は訳も分からず顔を洗った。

夢を見ているのか？いや、実感がありすぎる。

じゃあ何か？27になった将来の夢を見ていたのか？いや、それもない。俺の記憶じゃ親父は死んでるし、蛍は逃げている。

「おい……まさか、本当に俺は過去に……」

歯を磨いてトイレに入る。

「あ、そういえば、俺、このころって……」

パンツを脱いでじーっと見る。

「……なるほど、思春期だ……」

うおっ！恐ろしい！俺、背え伸びるの！？これから！？

「あっ……あはははははははは！！背え、伸びるんだ！？本当なら伸びるどころか縮むんだぜ？その上死んで火葬場で骨だぜ？それが俺に残された現実だったんだぜ？

なのに俺はまた背が伸びる。うわっ、うわっ！また第二次性徴！？

すっ、すげえ！すげえええええええええええええええ！老いるどころか成長してんだぜ！？

うわっ、俺、ぜってえ運動部入る！即日入部してやる！！背を176にはするんだ！体重も68にしてやる！今なら間に合う！虫歯だってないままでいける！！！！」

狂ったように笑っていたら、親父が出てきて、「なんだお前？」とじろっと睨んだ。

うわ、こええ……親父、こんなに威圧感あったんだ。

はあ……そうだった。

俺は急に暗くなった。

そうだ……俺の家は、こいつときちがいの婆さんのせいで、ボロボロだったんだ。俺は休みのたびにこいつに殴られ、婆さんにはボロクソ言われてきたんだ。

小学生のころは何かあるたび「アンタを車で精神病院に送ってやる。面倒見てもらえ」と言われ続けたんだ。

親父は酔って俺を殴り、勝手な幻聴を起こしちゃ俺を殴った。こいつらのせいで……。

下に降りた。

居間に行くと、朝食が用意されていた。母親とばあさんが支度をしている。

ばあさん、このころこんなに動けたのか。母親、若いな。

カレンダーを見る。95年の4月だ。ということは、中3に戻ってきたのか。

不思議なもので、13年経っても昔の習慣というのはすぐ思い出せるもので、俺は自然と机についた。昔の居間のレイアウトに体が混乱することもなく。

少しすると春夫が下りてきた。俺はぎょっとして見た。

こいつ……小学生……ありえねえ。あの無精ヒゲが……。てゆうか、俺から逃げて家出したやつが目の前に……。

春夫は寝ぼけ眼をこすって席に着いた。特に会話もない。

飯を食うと、急かされるように制服を着、家を出た。

ちょっと待って。食ってすぐは胃が痛くなるんだから……って、あれ？痛くない……。こ、これが若さというものか……。

鞆を持って家を出る。うわぁ、隣の家がねーよ。いつの話だよ、これ。

歩こうとしたところ、「やぁ」という声が聞こえた。

振り返ると幼馴染の大河君がいた。

「うわっ、君……若いな」

「はぁ？」

大河は嫌みっぽい馬鹿にした声で答えた。思わずムッとしたが、すぐに思い出した。そうだ、こいつはガキのころ、こういうやつだったんだ。性格が丸くなったのはバイトしてからだったな。

てゆうか、こいつこの後不登校になるんだよな……。ここで学校いつときゃあとで28になって苦労しなかったのに。俺も当時注意したのにな……。

「いや……おはよう。行こうか」

そうそう、大河はすぐそこに住んでいるから、俺と一緒に登校してたんだった。

駅へ歩く。駅を歩いて学校へ歩く。

「町並みがいちいち古いな……」

「は？」

「いや……そういえば、今日クラス替えだよな」

ここで俺はふとあることを思い出した。ガキのころから俺は正夢を見ることが何度かあった。

たしかこの日、俺はこいつが7組で金山という生徒と同じになるという夢を見た。が、発表後に大河に伝えたため、信じてもらえなかった。

その悔しい思いを思い出した俺はしれっと言った。

「君さ、7組になるぜ。金ちゃんと一緒」

「え、なんで分かるの？」

「予知夢だよ、13年前の君は信じなかったけどな」

「は？」

「まあ信じてみろ。いや、逆だな。せいぜい疑ってみろ。その分だけ俺を崇めたくもなるさ」

「何言ってるんだ？」

「俺は4組。武と同じだ」

「……」

学校に着き、俺は大河を引っ張っていった。大河は掲示板を眺め、呆然としていた。

「な？」と言って俺は大河の肩を小突き、クラスへ行った。

さて、なぜ俺がこの年に戻ったのかを考えてみよう。

2年までの俺は皆勤賞で元気なガキだった。が、3年になって急に友達と別れ別れになった。4組になったせいだ。

そのショックで俺は「誰が新しいクラスで友達なんぞ作るものか」と心に決めた。実際ショックで作る気力がなかったともいえる。

そのせいで俺は急激に孤立。人嫌いの女嫌いになった。女が嫌いというのは当時遠距離で付き合っていた女へ操を立てるためだった。

女が嫌といって男子校に入学。そのせいで女子高生をゲットすることもなく、よけいに暗い人生を歩むに至った。

また、自律神経が乱れたのもこの年から。深夜ラジオを聞いたりして体調を崩しだしたのもこの辺からだ。

そうか、俺の人生はここから狂ったのか。そして、ここからならやり直せると踏んだのか。なるほど。

教室に入ると、俺は席に座った。

知り合いは武しかいない。1年のときのクラスメートで、超仲が悪かった。

ところがこいつは俺が孤立してると知るや、急に敵対を止めてきた。アニメ声優の話題を振ってきて、俺たちはそれで仲良くなった。結局付き合いは大3まで続いたな。

中3は最悪だったが、武のおかげで楽しくなった。

だがな、思うんだよ。武はいいけど、やはり普通に人付き合いをすべきだったと。

ガイダンスが終わったら俺は部活を運動部に変えようと思った。剣道部だ。

ところが、俺の考えはガイダンス中に変わった。

隣の女子、いや、周りの女子に呆れたからだ。こんなに同級生って子供だったろうか。当たり前か、塾生みたいなもんだもんな。

なんだか交友関係を広げて彼女を作ってという計画は的外れな気がしてきた。

今の俺は体は14歳だが、精神は27歳のままだ。体さえ若ければ中学生と付き合えるだろうか？あいにくろリコンじゃないんで無理だ。ガキはバカだから嫌いなんだよ。

学校が終わると、俺はぶらっと帰路についた。剣道は……道場にでも行くかな。

一人で歩いて帰る。まだ午後になったばかりだ。暇だ。

「ふむ……しかし、どこかいこうにも金なんてないんじゃないか。ジュース一本買えんな。ありえない。てゆうか半ドンだからソープでも行くかって思っても、そんな金がない。ガキって案外不便だな。

ん、そうか。PCもないし、エロ本もない。AVに至っては借りられない。ちょ……俺にどうしろと」

腕を組む。うーん、忘れてたが、子供って制約が多かったんだな。

柵を越えて飛び降りる。着地と同時に前立腺が悲鳴を上げる。

いたっ。もうなんだよ。あ、そうか。このころから着地はダメだったか。

てゆうか心臓いてえな。糸が張ったみたいだ。確かに胃腸はいいが、当時は当時なりに不定愁訴があったようだな。

家に帰り、机を漁る。金はないか。お年玉の残りなのか、全部合わせたら数万にはなった。

数万なんて一日で使っちゃうけどなあ……。この数万って多分このころの俺には大金だったんだろうな。

そりゃそうか、高校のときでさえ池袋まで電車で行くのがもったいないからって武と台風の日にはチャリで行ったくらいだもんな。



金を持って家を出る。

行先は飯能だ。西武線に乗り、下りで揺られる。

このころの俺って飯能行ったこと……あったな。大河に連れて行かれた。遠かったな。

飯能に着くと、慣れた足つきで歩きだす。美杉台まで30分ほど歩くと、とある集合住宅のところに来た。

さて、実際のシナリオだと俺がこの年でここに来ているはずがないわけだが。

実はここは蛍の実家だ。幼女のころからここにいると聞いていたので、中学生の蛍もここにいるはずだ。

ぼーっと駐車場で待っていた。もう家には帰っているだろう。外に出ないものか。一度入ったら女はそうそう出ないかな。

数時間そこでたたずんでいたところ、蛍とおぼしきガキが母親に連れられ、降りてきた。買い物のような。

かなりドキドキしながらすれ違う。蛍はチラと俺を睨むように見た。俺の目線がキモかったのだろうか。

キモいも何もお前は6年後に俺に処女を捧げるわけだがな。

とか思うとなんか気分がいい。

しかし、蛍は男みみたいな格好をしている。最初は分からなかった。

ズボンに長袖。背が高くてメガネ。髪はぱつつんで長くも短くもない。ぶっちゃけ、かなりブスである。

やっぱ中坊じゃ男女の区別がつかん見た目の奴もまだいるわな。

しかも超目つき悪いな、こいつ。相当世の中に恨みを持っているというか……メス猫だな。

「ふむ……大学では人選ミスをしたかな……」

俺は呟くと、駅へ戻った。電車に乗り、夕方過ぎに家に帰った。

飯を食ってベッドで寝転んで天井を見ていた。

それにしても13年前とはな。ウィンドウズもない時代か。いや、今年の終りに出たんだっけな。

阪神大震災はあったんだっけ？オウムは？

ん？大震災とか俺は予想できるわけだから、これをテレビで利用すれば俺金持ちウハウハじゃね？超能力者としてあがめられるじゃん。

いや待て、でも13年分の未来しか知らんがな。それじゃダメだ。

じゃあ競馬で何億も当てて隠居するか？ダメだ、どのレースが勝ったかなんて知りやしねえ。

あ、じゃあ数年待ってりそなが潰れたとき、株を買いまくっておくとか。待てよ……そのとき親が俺を信じるか？

いやいや、ちがうだろ。そもそも俺はそんなことをしにきたんじゃない。

人生をやり直しに来たんだ。

そう、少なくとも勉強ちゃんとして、高1で不登校にならない。近場の高校で彼女を作り、安定した成績で大学に行く。

理系をキープし、できれば薬学部に行こう。でなきゃ法学部で検事を目指す。あ、公務員もいいな。

……と、待て。

なんだか急に不安になってきた。

「それ、本当に幸せか？やり直してまともな人生にはなるかもしれん。

でも、魔法を使って過去に来たのに、それくらいの修正しかしないのか？

俺は人生の意味を作りに来たんじゃないのか……？」

そうだよ、このままじゃいけないんだ。何か、行動しなくちゃ。

・脳内彼女が目の前に現れた日

蛍に会いにいった俺は家に帰り、天井を見ながら寝そべっていた。

夜はどこへ行こうか。学生はヒマだな。

ゲームが転がってるが、誰が今更 PS1 や SFC などやるもんか。

どこか行きたい。しかし外出すると怒られるよな……。

俺はいったん部屋へ戻ってから外へ抜け出した。

引っ越す前のマンションにぶらっと行ってみた。外は少し肌寒い。そうか、4月だもんな。

「このマンションは 27 のときもかわんねーな」

周りをぶらついてファンタオレンジを買い、近くの公園にいった。

レンガの上に座ってジュースを飲もうとしたら、先客がいるのに気付いた。

夜盗か……？このときの俺ってケンカどうだったんだっけ？バリバリ前線でやってた最盛期は 17 だったからな……。

だがそれは女の子だった。

なんだ、女か。しかしなんだってこんな時間に。

俺を見つけた少女はこっちに手を伸ばしてきた。

「ん？」

警戒する俺。

「しーあ」

離れたところで少女はポツリと呟いた。

「しーあ？」

「遊空……しーあを見つけました」

頭のおかしな女だな。何を言ってるのかわかんねえ。とりあえずスルーしとくか。

くるっと振り向いたところで、俺は「ん？」と言って空を見上げた。

今……ゆうくうって言ったか？

聞き覚えのある単語だ。だが、それは人の口から聞くはずのない言葉だった。なぜならそれは俺の想像した小説のキャラクターが使う言葉だからだ。

どきっとして振り返る。よく少女を見てみる。まだ中学生かそこらかと思しき少女だ。はだけた着物を着ている。着物の下には何もつけていないようだ。髪は長く、顔は可愛い。正直、可愛さに魅かれた。

まさか……。

信じられないことに、その少女は俺が脳内で育んだ少女と同じ格好をしていた。

「いま……遊空って言った？」

おそろおそろ問いかける。少女はふふっと笑うと、小さく頷いた。

「お前……夢幻か？」

「はい、シーあ」

やはりそうだ。目の前の少女は俺がガキのころ考えていたウォンバスの登場人物だ。

ニューワイズのリーダー、神崎琥珀の恋人、夢幻。それがこの子だ。

夢幻は「遊空」という独自の一人称を使う。寄り柱という柱がないと立つことができない。

それにしてもシーアだって？シーアって何だ？そんな単語、設定にはなかった。

俺をここに連れてきたもう一人の俺はシーアという単語を作っていたのか？あるいは、もう一人の俺は俺の知らない言語を知っているのだろうか。

「遊空……立てない。起こして……」

少女は柱のような杖を持っていた。脚が悪いようだ。俺は素直に手を引いてやった。

「大丈夫か、脚。怪我してるのか？」

いや、そうじゃない。彼女は虚弱体質なのだ。確かそういう設定だった。

だんだん状況が読み込めてきた。

もう一人の俺は俺を単に若返らせるためにここに送ったんじゃないようだ。

さっき家で考えたとおり、勉強なりしてそれなりの仕事についてたところでのたの社会の歯車でしかない。人生の意味を考え続けてしまう。

だからもう一人の静はこういう設定を加えたわけだ。つまり、俺の作ったウォンバスが実現する世界でのやり直しを。

なるほどな、ウォンバスが現実のものになった世界か。こりゃあいい、面白いじゃないか。

そして俺はオブザーバーではなく、登場人物なわけだな。

「シーあ、ありがとう」

「ああ。だが俺はシーアとやらじゃないよ」

「じゃあ、シーあはだあれ？」

「俺は……」

ここに夢幻が現れたということは、どうやら俺の役割は神崎琥珀らしい。無理もない、琥珀は俺がモデルなのだから。

琥珀は通常「静愁呪慈苑嬢瞬(セイシュウジ ユジ エンジ ョウシュン)」という激しくプギャーな厨ネーミングを名乗っている。

これは実は名前がそのまま呪文になっているという設定だ。静愁呪慈苑嬢瞬は呪文なのだ。

だからやはりここでは本名を名乗っておくべきだろう。

「——琥珀。俺は神崎琥珀だ」

「はくり……」

「夢幻、俺のところ来い。俺がお前の探していた運命の相手だ」

俺は夢幻の手を取って引き上げた。

俺は夢幻を家に連れ帰った。

夢幻は大人しく座っていた。俺たちは緊張することもなく、たまに歓談しては和やかなときを過ごしていた。

初めて会ったにもかかわらず、俺たちはまるで長年の恋人のような様子だ。

夢幻は俺がこの物語の作者だということを当然知らない。俺を神崎琥珀だと思っている。実際俺は神崎琥珀のモデルだし、それはそれでいい。

しかし、何もかもシナリオ通りというのはまずい。琥珀は夢幻の恋人だが、琥珀はシナリオ上、夢幻を失うからだ。

このまま進むと夢幻は死んでしまう。それは食い止めねばならない。

それに謎が残る。神崎琥珀は祁答院霊司たちが高2の17歳だったときに、25歳の役だ。

97年に25歳になっていなければならないのに、俺はまだ中3だ。年齢的に矛盾がある。

となると、あと1年の間に俺は25歳になるということなのだろうな。その間に高速でイベントが進行していくのだろう。それまで夢幻を守らなければ。

・三条大橋の上で

1996年7月19日

京都府京都市中京区三条通。深夜。

神崎琥珀は三条大橋の上を一人で歩いていた。

夏だというのに長い黒のローブをまとい、目には眼鏡をかけている。

眼下には鴨川。古都とはいえ、京都も都会だ。鴨川は例にもれず淀んでいる。

神崎琥珀はたったの1年で24歳になっていた。琥珀の中では1年で8年分の時間が経っていた。

夢幻との甘美な生活に始まった高校受験時代。夢幻と過ごしながら2度目の高校受験を終えた神崎琥珀は、埼玉県川越市の私立北城高校へ進学した。

夢幻を手に入れた琥珀にとって他の人間などどうでもよく、結局中学では武も含めて友人を作らず、孤立した。

自分でも予想外だったのは、武とさえ付き合わなかったことだ。中3の武は子供すぎて、付き合い対象ではなかったのだ。当時は彼と一緒に大人になっていったので付き合うことができた。だが今は違う。27歳の大人が14歳の少年と対等には付き合えない。

孤立していたものの、2度目の受験なので落ちるはずもなく、簡単に北城高校に入れた。

大人の頭なので開成でも入れたらろうが、誰が西日暮里まで行くものか。まあ西日暮里や江古田はまだありえるにせよ、広尾など真剣に誰が行くものか。

北城高校はこの当時優秀で地元の評判も良かったため、周囲は喜んだ。が、琥珀は夢幻との生活を一番としていたため、そんなことなどどうでもよかった。

夢幻は琥珀以外の人間には、少なくとも霊力のない家族らには見えなかった。

琥珀は夢幻と確かに過ごしているにもかかわらず、周りの人間はそうと知ることができなかった。

琥珀は幸せな生活の中で自問自答した。悩んだと言ってもいい。

それは、夢幻の死の理由が分からないことだ。実は静は夢幻が死んだ理由を設定していなかった。過程を設定していないのに死んだ事実だけは作っていた。

となると、じゃあどうやって夢幻を守ればいいのか。琥珀は苦悩した。

そして高校も半ばを過ぎたころ、琥珀は異変に気付いた。

それは夢幻の影が薄くなり、触れることが叶わず、また顔すらもハッキリ認識できなくなってきたということだった。

琥珀は絶望した。そして周囲の人間が夢幻を見れない本当の理由に気付いた。

その原因とは、「夢を失ったこと」だった。

夢を見れなくなった大人は、夢の虚像を見ることができないのだ。そして、触れることも。

やがて夢幻は琥珀の前から消え、琥珀は一人になった。これが夢幻の死の理由だった。

だが、琥珀は夢幻を諦められなかった。しかし夢を虚像と分かっているながら見るには年を取りすぎた。

そして琥珀はこう考えた。ならば、夢幻に実体を与えよう。

かつて西洋神話のピグマリオンは彫刻に愛を注ぎ、彫刻が命を持つように願った。

その願いは叶い、彼は理想の女性と結婚することができた。

ピグマリオンほど幸せな人間がこの世にいるだろうか、否。

夢幻には実体がなかった。どの人間にもあるような血と肉の塊を持っていなかった。

夢を見る能力のある人間だけが触った気になれる少女だったのだ。夢を見れない大人は顔を見ることすら叶わない。

琥珀は夢を取り戻そうとはしなかった。見れても夢は夢だ。むなしいのだ。

だから、琥珀は夢幻に実体を持たせ、架空を現実にしようとした。

夢幻が見えなくなった琥珀は、腐りながら高校に通い、大学を浪人。

その後、1年勉強して大学に入った。大学を出た後、琥珀は家を出た。

彼の人生の意味は明白だった。それは愛する「脳内彼女」を「リアル彼女」に変え、ピグマリオンのような幸せを手に入れることだった。

では、どうやって夢幻に実体を持たせればよいのだろうか。それには多大な霊力が必要だ。だが琥珀にそこまでの力はない。

そこで琥珀は結界に目を付けた。地球にはたくさんの結界がある。霊力の吹きだまりだ。これを破壊すれば大量の霊気を取ることができる。それで夢幻を実体化しようという狙いだ。

だがそれには協力者が必要だ。しかし自分の個人的な欲望に付き合ってくれるやつなどいない。

そこで琥珀は宣伝文句を考えた。それは結界のエネルギーを以って死すべき下らない人間を殺すという文句だった。

地球にはいない人間が多すぎる。悪人を排除すれば善人がよりよく生きられる。その活動に参加しないかと誘うのだ。

琥珀は霊力の持ち主だが、この世界には琥珀のような人間が少なからずいる。彼らの協力なしに結界を破るのは不可能だ。

能力者の大部分は年端もいかぬ子供だ。人類なんて滅んでしまえと思う人間はそうは多くないかもしれないが、悪人が死ねばいいのにと思っている人間はむしろほとんどだろう。

そんな悪人の生殺与奪の権利が与えられるとしたら、霊力という強大な力を持つ余した若者が黙っているだろうか。

琥珀には勧誘する自信があった。

大学を出てからの2年間とにかく協力者探しをした。

ところが、当初の予定ほど巧くはいかなかった。霊能力者を探すのは一苦勞だし、見つけたところで中々勧誘を受けない。

思ったほどみなは選民思想ではないし、仮にそうだとしても実行までは移さないのだ。

絶望した琥珀は自分の霊力を上げる方向に力を入れ、独力で組織を作ることにした。最悪、今後も構成員は自分だけだ。

夢幻に実体を持たせて蘇らせるのに必要な結界の数は計り知れない。

結界は世界中にある。イギリスにはイギリスの結界があり、日本には日本のものがある。さらに、ひとつの国に結界はひとつというわけではなく、いくつもある。

結界には大きな力を持った歴史上の人物が封じ込められている。例えば日本の結界には卑弥呼が封じ込められている。

琥珀が組織するニューワイズのほかにも団体がある。結界を壊して霊力を人類の滅亡に使用しようとするペルソナ。そして結界の破壊を阻止しようとするウォンバスだ。

3つの団体は世界中にある。日本のニューワイズは琥珀だけだが、ほかの国にはほかの国のニューワイズがある。

現在、世界中のほとんどの結界は破壊され、ウォンバスは劣勢を極めている。残る結界は日本のものだけだ。

琥珀は三条大橋の真ん中で止まった。四条河原町の方を向き、鴨川を遠目で見やる。

「夢幻……」

現在、日本で結成されているのはペルソナのみ。ウォンバスはまだ各々のメンバーが覚醒していない段階だ。



「これがスタートか」

今ならまだ自分が参戦しないことで死者を出さずに済む。だが、夢幻を諦めることなどできるはずがない。誰が死のうが、誰を殺そうが、脳内彼女に実体を持たせるほうが大切だ。

深夜だというのに、三条大橋は人どおりがある。なにせ四条河原町が色町なものだから、鴨川の西の通りを介して三条大橋にも人が流れてくるのだ。京都もまた眠らない街なのだ。

河原町には通り沿いに警官がいるな……。騒ぎを聞きつけてやってくるのにほんの数分。急ぐ必要があるな。

琥珀はふっと短く息を吐くと、パチンと指を鳴らした。

その刹那、琥珀の体から青白い光が立ちこめた。やがてそれは雷となって大橋を打ちつけた。闇に覆われた空間が揺らぎ、結界が雷鳴とともに崩れた。

当然のことながら、これに通行人は驚いた。なにせ突然の落雷だ。結界は常人の目には見えない。崩れても何が起こったか分からない。琥珀が雷を打ったことも分からない。

雷は橋を打ちつけたため、橋に傷跡を残した。焼け焦げを探して人が集まる。

ち……。集まってきたな。

長いローブをたなびかせつつ、琥珀は早々にその場を立ち去った。

・死亡届を出された少女

1996年7月20日

京都府京都市左京区浄土寺石橋町。午前。

アイスクリームを片手に一人の少女が鞆を持って歩いていた。

少女は見たところまだ7つほど。ランドセルも背負わず、鞆を持って歩いている。セーラー服のようなものを着ており、さながら中学生のようだ。

しかしどう見ても小学校低学年の背丈で、顔もあどけない。髪は肩までの長さで、色は薄い。手入れをしていないのか、ややぼさぼさだ。

少女は銀閣寺のほうから降りてきた。露店でアイスを買って、通りを降りたところで左折して、哲学の道を川沿いに歩いている。

今日は土曜日とあって、補導もされないのだろう。

露天エリアは観光客でごった返していたが、哲学の道に入るとその数はぐっと減った。ここでは歩行者は物静かになる。この道には人をそのように変える力があるのだろうか。

少女の名前は霞堂裏飛鳥(カスミドリアスカ)。既に死亡した人物だ。

もともと、幽霊という意味ではない。戸籍的に死亡しているという意味だ。

彼女はこの年にして強大な霊力を持ったペルソナの一員だ。ペルソナのメンバーは終嚙矢(シュウカツ)と呼ばれており、飛鳥はそのうちの一人だ。

活動を円滑に行い、かつ逃亡を防ぐため、終嚙矢は全員死亡届が出されている。そのため飛鳥は死亡したことになっている。むろん、死亡届は偽装されたものだ。

「飛鳥」

青年の声が少女の背中にかかる。

「なに？ 皇」

少女は人形のように無表情のまま振り返った。

その青年皇叡慈(マリアージュ)は薄い色の短髪で、背が高く細身だ。年は17,8だろうが、大人びて見える。

「三条大橋の結界が昨夜破壊された」

少女は眉ひとつ動かさず、「ふーん」と言ってアイスを舐めた。顔に一切感情の見られない、機械のような少女だ。

「おい飛鳥！」

皇の後ろから少年が出てきて飛鳥に突っかかった。

「お前、それがどんだけ重要か分かってねえだろ」

少年は入屋臥(イヤツ)。年齢は10歳ほどだ。臥と書くが読みはシンだそうだ。彼は感情の起伏が激しく、無表情な飛鳥にいちいち突っかかる。

「皇、私たち、戦うの？」

「ああ、飛鳥。三条大橋が壊されたということは、静愁呪が動いたとみてよいだろう」

「それって宣戦布告ってことだよな、皇！静愁呪のやつをぶっ殺そうぜ！」

「まあそう焦るな。静愁呪は俺よりも強い。正面から戦うのは避けたい相手だ」

「じゃあどうすりゃいいんだよ」

「そうだな……」

皇は哲学の道沿いを再び歩き出した。ここは考えながら歩くにはうってつけの場所だ。まあ、実は十字路では交通事故に注意する必要があるのだが。

「ニューワイズは静愁呪ひとりだ。京都に残っている結界はあと7個。西九条にひとつ、祇園にひとつ、本能寺、清水、河原町にひとつ。あとのふたつは覚えているか？」

「京都駅だろ？」

「厳密には、京都駅と115号線が交差する高架下だ。では飛鳥、最後は？」

「伏見区横大路」

飛鳥は静かに答えた。その答え方はやはり機械のようだった。

「そうだ」

「伏見区う？そこ、どこだよ」

「そう遠くない。バスでも京都駅から30分ほどだ」

「電車は？」

「最寄駅から少し歩く場所だから、バスのほうがよかろう」

「で、どうすんだよ、俺ら」

「こちらはふた手に分かれられる。俺が静愁呪を食い止める。お前たちはその間に結界を壊せ」

「なるほどね」

「俺たちペルソナとニューワイズは今後常に斥候を通して互いの動きを見る。片方が知らぬ間に片方が動くことができるという環境にはない。つまり、抜けがけはできない」

「だけどふた手に分かれればその限りではないってことだな。よし飛鳥、行くぜ。今夜だ」

臥は飛鳥の背中をバンバン叩く。飛鳥は「はぁ」とため息をついて、アイスを舐めた。

・本能寺の変

1996年7月20日

京都府京都市中京区寺町。午後8時。

本能寺。織田信長が焼き討ちされた有名な寺だが、そんなことがあったとは思えぬほど街中にある。

関東人は本能寺は山の中にあったと何となく思っているのではないか。意外なほど街中に平然と佇んでいる。

ただ、厳密に言えば現在の本能は当時とは位置が違う。当時は油小路蛸薬師に存在した。

皇は黒い服を着て、闇に溶け込んでいた。一人で歩いていたが、その背丈と美貌のせい  
か、道行く女がちらちらと彼を見ていく。

37号線を西に歩き、一旦本能寺を過ぎて寺町通りで左折。

どうみても車の通るただの街中の道なのだが、その道の左手に本能寺の入口があった。

人通りはまばら。

皇は隙を見て高く跳躍し、壁を越えて中に侵入した。霊力を利用すれば、ビルとビルの  
間を跳んでいけるほどの距離が出る。

中に入り、前へ進む。本尊があり、その右手には霊園がある。

皇は慎重に辺りを伺いながら進んだ。

霊園には誰もいなかった。

本尊の奥には信長と従者の慰霊碑がある。

そしてそこに静愁呪が立っていた。彼は皇に気付くと、ふっと鼻で笑った。

「もう少しで結界を破壊できるところだったが、とんだ邪魔が入ったものだ」

「ペルソナの皇叡慈だ。この結界をお前の手に渡すわけにはいかん」

「そうか。なら仕方がない」

静愁呪はゆらっと動くと、有無を言わず皇に霊力を放った。

圧倒的な力に押され、皇は地面に転がる。

「皇。お前は弱すぎる。お前一人で俺に勝てると思ったのか？」

ばんばんと埃を払いながら、皇は静かに答えた。

「思わんさ。だが、時間なら稼げるんでな」

「なんだと？」

眉を動かす静愁呪に霊気を放つ。静愁呪は軽やかにそれをよけるが、慰霊碑に当たった霊弾が跳ね返って静愁呪の眼鏡を飛ばす。

「ち……」

眼鏡を拾う静愁呪の元に駆け寄ると、皇はナイフで静愁呪の脚を切りつけ、続けてナイフを首に突き付けた。

「次からはコンタクトにするんだな、静愁呪」

「ふん、運が良かったな、皇。だが次はこうはいかんぞ」

静愁呪はナイフに恐れもなさず、霊力で砂煙を巻き起こした。

皇が目を覆っている間に静愁呪は消えていた。

「ふむ。まさか静愁呪を追い払えるとはな。飛鳥たちは巧くやってくれたろうか」

皇は本能寺の結界を破壊した。結界は音をたてて崩れた。

「さて、人が来る前に退散するとするか。——と、その前に」

皇は霊弾がぶつかってしまった慰霊碑に手を合わせた。

本能寺から逃げた静愁呪は、アジトに向かって歩いていた。

しかし皇に切られた脚の傷は意外と深かったようで、速やかな止血を要した。

「ふん、芳しくないな」

堀川通りを右折し、二条城を左手にして歩いていく。

二条城を過ぎたところで静愁呪はため息をつき、地面に座り込んだ。幼稚園の柵にもたれかかって座り、目の前の大きな道路をぼーっと見ている。

「夢幻……待っている」

人通りはまばらだ。何人かが不審そうな眼で静愁呪を見てくる。

その中で、一人の少女が声をかけてきた。

「アンタ……こんなところで何しとんの？」

少女は和服を着て、手に買い物袋を提げている。年の頃は17,8といったところか。背が高く、気が強そうだ。

「ほうっておけ」

静愁呪は冷たく答えた。

「なんや、人がせつかく心配しとんのに。……って、アンタその傷、どうしたん？」

近寄ってくる少女。静愁呪は首を振って顔をしかめる。

「関わるな。お前のためだ」

「せやかて、放ってなんかおけんわ。とりあえず止血したる」

静愁呪の迷惑そうな顔も無視し、少女はハンカチを使って止血をした。

「立てる？」

「ああ。礼は言う。だがもう大丈夫だ。もう行く」

「行くて……アンタ、家はどこやの？歩けんやろ、その傷じゃ」

「大丈夫だ。すぐそこだ」

「じゃあついつってったげる」

「おい……本当に」

「ええて。お兄さん、悪い人には見えないし」

「……とんだ眼をもってやがる……」

少女に肩を借り、静愁呪は歩きだした。

「そういえば、名前なんていうん？」

「静愁呪慈苑嬢瞬だ」

「はい？な、なんや覚えにくい名前やなあ。じゃあ静愁呪でええねんな。ウチは霞堂裏槍戯(ウギ)や。よろしゅう」

「お前も人のことを言えた名前じゃないな」

ふっと静愁呪は笑った。

「静愁呪、アンタ東京の人か？」

「ああ……ん？いや、どちらかというと埼玉のほうが長いな」

「埼玉てどこやろ？」

「そうか……この辺まで来ると埼玉が分からないやつもいるのか」

「アンタらかて和歌山や奈良がどこやとか知らんやろ。それと同じや」

「仕事は何してるん？」

「ニートだな」

「ニートってなんや？」

そうか、この時代にはまだこの言葉はないんだった。

ん……？この時代だと？なんのことだ。なぜ頭にそんなフレーズが出てきたんだ……。

「まあ無職だ」

「じゃあ生活どうしてるん？けっこうエエ年やろ」

「金はある。会社勤めをしていないだけだ」

「へえ。自営業みたいな感じやね」

「ん……うーん」

「お前はどうかんだ。高校生か」

「うん、いわゆる女子高生やね。サボり気味やけど。家業つがなあかんから」

「家業？」

「ウチなあ、信じられんやろうけど、神社の娘でな」

「それは信じられるが」

「最後まで聞きや。ウチの神社には海王の槍っちゅう槍があつてな。それを継承せなあかんのや。それがな、体の中に槍を突っ込んで継承せなあかんの」

「体の中に？それは死なないか？」

「死なんよお。霊力で槍を体内に収めるからね。体内では霊体になるから、痛くないんよ」  
静愁呪は頭をぐるっと回した。

「あ、ヘンな女って思ったやろ」

「それはさっきから」

「ひどいー。まあ、そんな与太話を人にしちゃあ面白がとるだけなんやけどね。冗談や、冗談」

「ふむ……」

静愁呪は俯いた。

「ここでお別れだ、霞堂裏」

「名前と呼んでや」

「では、槍戯。助かった。礼を言う」

「じゃあ、またどっかで会うたらな」

「ああ……会うだろうよ。今回は恩があるので襲わない」

「……は？」

「だが次は終嚙矢として容赦しない」

「な……」

槍戯は蒼白な顔をして、立ち尽くした。

立ち去る静愁呪。しかし槍戯は鋭い声で呼びとめる。

「待ちいや」

振り向くといつの間にか槍を構えていた。

「……それが継承した海王の槍か。継承は既に終えていたのだな」

「こんなところで終嚙矢に会えるなんてな。飛鳥を返しいや」

「飛鳥……？ちょっと待て、お前俺が終嚙矢だと思っているのか？」

「だって今アンタが「次は終嚙矢として容赦しない」って言うたやろ」

「いや、その文は2つの解釈があるだろう。「次は終嚙矢であるお前に対して容赦しない」という意味だ。「として」が誰にかかっているか分からんから、無理もないが」

「……ん？」

槍戯は少し考えて槍を少し下に傾けた。

「なんや……口車に乗せられているような……」

「戦いたいなら構わんが、ニューワイズと争ってもしょうがないぞ」

すると槍戯は槍を下ろした。

「なんや、ペルソナやないんか」

「お前こそ終嚙矢ではないのか？」

「あつたりまえや」

「……」

「少し話でもしないか」

静愁呪は公園のベンチに槍戯を連れていった。

「なあ静愁呪、なんでウチのこと終嚙矢やて？」

「妹に飛鳥というのがいるだろう。それが終嚙矢と聞いた。姉もそうかと思ってな」

「ちゃうわー。ウチは飛鳥を取り戻そうとおもてるだけや」

「妹が誰のもとにいるか知ってるのか？」

「那羅奈國(ナラケ)やろ？」

「そいつの居場所は？」

「知らん。実際は皇っちゅうやつが指揮つとるっちゅう話や」

「この傷はその皇と戦ってつけられたものだ」

「……じゃあ、結界が壊れたっちゅうことか？」

「ああ、してやられた」

「飛鳥はおったの？」

「いや。恐らくペルソナはふた手に分かれていたのだろう。どこかの結界が今頃壊されて  
いるはずだ。あまり結界を壊されると困る。はやくアジトに戻らなければ」

「ニューワイズはふた手に分かれなかったん？」

「ああ、構成員は俺しかいないからな」

「なんやて？」

槍戯は考え込んだ。そして手を打った。

「なら、ウチがニューワイズになったる。そのほうが飛鳥を取り戻せるしな。一人で探す  
のは正直無茶や」

「そうか……なら歓迎しよう、槍戯」

「ふふ……」

槍戯は微笑みながら静愁呪の顔を覗き込んだ。

「なんだ？」

「眼鏡とつてもらってええ？」



「なぜだ？」

「顔が見たいんや。静愁呪、綺麗な顔しとるね。ウチの好みやわ」

「……墓石に霊弾でも弾き返すんだな」

「え？」

「さあ、行くぞ」

「あっ、ちょっと待ってや。これは冗談ちゃうよ？最初はな、ほんと言うと好みやから声かけたんや。ねえ、聞いとる？ねえね、彼女さんはおるん？」

静愁呪は振り返ると、胸に手を置いて答えた。

「ああ、ここにな」

・最初の脱落者

1996年12月10日

静岡県熱海市桃山町。午後10時

入屋臥は一人で山道を歩いていた。  
左手には桃山小学校が見える。

「皇のやつ、いつも俺のことをガキ扱いしやがって」  
臥は舌打ちをした。

ペルソナの3人、皇、飛鳥、臥は今日の昼、陸路で熱海市に入った。  
京都から出て東海道沿いの結界を破壊しつつ、静愁呪と渡り合いながらここまで来た。  
途中少し南下して寄り道し、熱海へ足を運んだ。最終的に目指すのは東京。熱海まで来たので、神奈川は近い。

桃山町の結界は、この桃山小学校にある。  
熱海は有名なリゾート地だが、有名なのは駅からビーチまで。駅の裏手の山道など、観光客はロクに知らない。

駅の東の道を北に上がっていくと山道になる。高架下を超えた辺りは昭和の匂いのする商店が点在するが、それも少し上るとすぐになくなってしまう。

山道といってもむろん舗装はされている。ただ、坂の勾配は急で、歩いて登るにはしんどい。

道はくねくねと曲がっており、明らかに山道を切り開いて作った道路だということが分かる。A点からB点まで行くのに迂回しなければならないため、直線距離よりだいぶ遠く感じる。

山道を上がったところでビーチの辺りを見降ろすと、ホテルの照明などと相まってかなり美しい。遮蔽物がないため、遠くの岬まで見える。

臥は柵にもたれかかって久々の故郷の風を満喫していた。

桃山小学校に通っていたのはつい去年のことだ。

両親はホテル経営をしていた。父親は地元民で、母親は愛知から嫁いできた。

ところがリゾート地としての熱海は近年急激に風化。新婚旅行のプロトタイプだった時代はいつのことやらというほどの閑古ぶりだ。

経営不振から両親は不和に。結局母親は臥を置いて出て行ってしまった。悲観した父は借金のこともあってか、飛び降り自殺。

臥は親戚の家に引き取られることになった。

ところがそんな折、臥の元に皇が訪れ、人類を滅ぼす計画に誘う。

臥は喜んで終嚆矢となった。皇は臥の死亡届を偽造し、仲間に引き入れた。

だが、冷静な皇に対し、短気な臥は常に反抗してきた。仲は良好ではなかった。

一番の原因は飛鳥だ。あの機械のような少女に惚れた臥は、飛鳥にカッコいいところを見せようと、あれこれ強がった。

だから皇がいちいち子供扱いしてくるのが許せなかった。飛鳥に振り向いてもらうために、臥は功を焦っていた。

そして、臥はアジトを抜け出し、いま、桃山小学校にいる。

明らかな命令違反だった。

「皇は慎重すぎるんだ。ここは俺の地元だ。土地勘もある。俺が動くのが一番なんだ」

臥は霊気を開放し、結界を破壊しだした。

そのとき、臥の足元に長槍が飛んできた。思わず跳んでよける臥。

「誰だっ!？」

闇の中から現れたのは、和服姿の少女だった。槍戯だ。

「入屋臥やね。子供がこないな時間にひとりでおったらあかんやろ」

槍戯は地面から槍を抜く。

「来るな!」

臥は手から氷の飛礫を打ち出す。が、槍戯は槍を扇風機のように回して弾き飛ばす。

「ええ筋しとる。大きなたらきつと強うなる。けどな、アンタはここまでや」

「くっ」

分が悪いと見て逃げ出す臥。槍戯は無表情で追いかける。

「来るなよ!」

追い込まれた臥は柵を背に叫ぶ。眼下は崖だ。

「皇のゆうことを聞かんかったんやね。なんでかしらんけど、ウチらにとっては好都合やったわ」

槍戯は海王の槍を構えると、臥の心臓を目がけて放った。

ぐっと肉に食い込む感触がし、槍戯は若干眉をしかめた。

臥は自分の胸に深々と刺さった槍を見て、蒼白な顔をした。

槍の衝撃で臥は吹き飛び、柵を越えて崖の下に落ちていった。

「これでひとり……」

槍戯は蒼白な顔で、槍を体内に戻した。手が震え、歯がカチカチ鳴る。

「これが人を殺した感触……。もう……。戻れんのかな」

気がついたら槍戯は泣いていた。なんで泣いているのかは自分でも分からなかった。

・かぶらや

1996年12月11日

静岡県熱海市水口町。午後6時。

「日が暮れたな。行くぜ」

髪を肩まで伸ばした赤毛の青年が皇に声をかける。ここはペルソナのアジト。

皇の周りには終嚙矢のメンバーが集まっていた。

皇叡慈、霞堂裏飛鳥のほかは3人。

丈の長い白いローブを着込んだ17歳の少女、左京怨弥(サキウオン)。滋賀県甲賀市の出身で、甲賀忍者の末裔だ。

学生服を着て長い矛を持った詭弁家の15歳少年が氷室麗(ヒムレイ)。三重県伊賀市の出身で、伊賀忍者の末裔だ。

伊賀と甲賀は現在でも水面下で忍者の末裔による対立があり、ふたりは敵同士の立場にある。

ところが互いを愛してしまった彼らは里を抜け出し、駆け落ちした。追手を振り切るためにペルソナに入り、身の安全を確保したというわけだ。

そんな怨弥に岡惚れしているのが赤毛の少年庵頭苑(オカガシエン)。17歳の高校生だが、既に中退している。

神奈川でボクサーをやっていた苑は持前の霊力を活かして勝ち進んでいった。

しかし気が荒すぎたため、傷害事件を多発。退学を食らい、少年院へ送致された。

そこを皇に拾われたというわけだ。

「知っての通り、昨夜、臥がニューワイズの手にかかった。今日はその弔い合戦だ。ニューワイズは水口の結界を狙っている。総力戦で来るだろう」

皇の呼びかけに応じ、終嚙矢は立ち上がった。

来宮の駅を少し離れると何も無い街だ。だが、結界はそんなことお構いなしに存在する。

ここの結界は人どおりがないところにあつたため、戦闘には好都合だった。

結界には既にニューワイズが結集していた。誰かを結界破壊要因に回す余裕はなさそうだ。

この総力戦に勝ったものが結界を牛耳るということになりそうだ。

ニューワイズは静愁呪のほかに槍戯と数人がいた。

斥候によると、角の生えた灰色い肌の気持ちの悪い男が魔霧(マ)というらしい。  
横に立つ大型のからくり人形は呪影(ジュエイ)というらしい。なんでも自分は2012年からやってきたが、最初は元寇時代に送り込まれたただのとはざいているらしい。

「静愁呪、水口の結界は我らペルソナがもらう」

「ふん、俺に対してそれだけの人員か。見くびられたものだ」

「そこは敬意を以って対応しよう。静愁呪、今日はお前を倒すために我が皇一門を招集した。じきにここに応援が来る。本能寺のときのように逃げられると思うなよ」

「皇一門？」

静愁呪はくっくと笑った。

魔霧がにやにやしなながら、藤色の風呂敷を取り出した。魔霧が風呂敷を開くと、中から生首がいくつも転がってきた。

「これは……」

皇は蒼白な顔でよろよろと近寄った。魔霧はおっとりした声で、しかし皮肉たっぷりに答えた。

“OK, now all members in Sumeragi family came together for a reunion”

転がった首の中には幼い少女のものもあった。

“Look! She's like a kokeshi doll without a body. How cute”

くすくす笑うと、魔霧は爪先で少女の頭を転がした。

「そうか……誇り高き皇家もこれで終わりか」

「ほお、怒りを抑えたか、皇」

「勘違いするな、静愁呪。我らペルソナは人類の滅亡を望んでいる。いまさら一族のものが殺されたくらいで、怒りを覚えるはずもない」

「その瘦せ我慢がどこまで続くか見ものだな」

静愁呪は手から氷の矢を高速で放った。静愁呪は皇を霊気で吹き飛ばし、魔霧と呪影のほうに追いやる。そしてたった一人で怨弥、麗、苑を相手取った。

吹き飛ばされた皇は空中に溶岩を作り、呪影に投げつける。しかし鋼鉄の体は溶岩では溶けなかった。

その隙をついて魔霧が皇に闇の魔法を放つ。食らったことのない魔法を食らい、皇は混乱した。

動けなくなった皇に呪影がタックルをする。腰をしたたかに打たれ、皇は地面に倒れ込む。

“You want hear this. That little girl cried out in pain when I put my arm into her belly”

「きさま……その魔法……魔族か」

魔霧は不気味な笑みを浮かべたまま、闇の魔法を放った。

皇は舌打ちすると、地面に手を打ちつけて飛びあがり、華麗にバク転して呪影の後ろに隠れた。

魔霧の魔法は呪影にぶつかり、呪影は停止した。

“What!?”

「馬鹿め」

皇は間髪入れず溶岩を魔霧に叩きつけた。溶岩に押しつぶされた魔霧は炎上して灰となった。

一方、槍戯は飛鳥と対峙していた。

「飛鳥、ようやく見つけたで」

「姉さん……」

「アンタを助けるためにここまできたんや。さあ、アンタは家に帰り！」

しかし飛鳥は首を振る。

「ペルソナに入ったのは私の意思よ」

「何やて!? 何ゆうとんのや。はよ、帰り！」

「姉さんには分からないわ。——死んで、姉さん」

飛鳥は氷の矢を放った。槍戯は軽くそれをはねのける。

「アンタ、馬鹿ゆうとるんやないで！」

「私は本気よ。それに、臥を殺したのは姉さんでしょ」

攻撃を続ける飛鳥。しかし槍戯は攻撃を返せない。

「なぜそれを……」

「回収した死体の胸には槍の傷痕があった」

「アンタ、自分のやっとなこと、わかっとなん？人間がみんな死んでまうねんで!？」

「そんなこと、私にとってはどうでもいいわ」

「なんやて!？」

飛鳥は氷の槍を作ると、槍戯の腕を刺した。

「槍戯！」

怨弥たちを押していた静愁呪が寄ってくる。

「魔霧らもやられた。ここは退くぞ」

静愁呪は槍戯の手を取ると、砂煙を巻き起こし、その隙に逃げた。

戦地を脱した静愁呪と槍戯は、人里を離れながら山道を歩いていた。

「また二人に戻ってしまったか」

「……ありがとう、ウチを助けてくれて」

「勘違いするな、戦況が悪かったから撤退しただけだ」

「そないな言い方……」

静愁呪は良心の呵責を覚えたが、夢幻のことを思うと槍戯に優しい言葉をかけられなかった。

「妹とは……」

「うん？」

「やはり戦えないか？」

「……せやね……どうやろね……そうやね……次は、殺せると思う」

「そうか」

「静愁呪、次はどこに行くん？」

「箱根だ」

「今度は勝てるかな。こないだの伊豆のときはウチらが勝って、今回の水口では負けて……」

「だから次は勝たねばなるまいな」

「箱根のどこなん？」

「箱根峠と小田原だ。歩いていく」

「はあ、つらそうやな。ウチ、女の子なんやけどな」

「辛かったら途中で休みを入れる。最悪歩けなくなったら俺がおぶってやる」

「……ありがとう。ふとしたときに優しいんやね」

「……」

「ねえ、ウチに冷たいのは、心の中の彼女さんがおるから？」

「……ああ。……すまん」

それからはしばらく無言で夜の山道を歩いた。ひたすら寒い。

「その後は？」

「ん？なんだ？」

「小田原の次。神奈川と東京？」

「東京の周りは最後に攻める。まずは地方だ。福島に行き、戻る。小田原からは電車で行くさ。峠だけ我慢してくれ」

「うん」

静愁呪の不器用な気づかいを感じて、槍戯は嬉しそうに頷いた。



・ふれみあむ争奪戦その1から3

1433年アイルランド

アイルランド中央部に位置する Leix は耕作地の多い穏やかな土地で、その Leix の中には Mountrath という小さな町がある。Dublin と Limerick の間に位置する町で、人口は多くない。

Mountrath より北西に進んだところは一面の耕作地だが、今から 500 年ほど前の 15 世紀は少し違っていた。このころ、とある小高い丘に一軒の小さな家が建っていた。

丘に建つその家には、美しい姉妹が住んでいた。クルル=ディアとモンナ=ディアである。

彼女らは親を早くに亡くし、兄のカトゥッサを頼って生きていた。

母のティルルは魔族、父のユーテルは神族だった。

クルルは魔族の血を引き、強力な魔力を得た。

モンナは神の血を引き、幼くして神官長となった。

クルルは強欲で意地が悪く、攻撃的な少女で、モンナをいつも困らせていた。

ある日、クルルはモンナを連れて、南に広がるリーザの森へ行った。

洞窟に住むゼルギという猿の魔物がお宝を持っていると聞きつけたためだ。

「姉さま、ちょっと待ってください！」

モンナが地面に届くほど長いロープの裾を引きずりながらクルルを追う。

「遅いわよ、モンナ。早くなさい」

森を歩いていると、一人の少女が現れた。

「あら、メサイアじゃない。久し振り♪」

燃え盛る剣を持った赤毛の少女メサイアはぶるぶる拳を震わせた。

「何が「久し振り♪」だ、クルル！ 貴様、出会い頭に人に氷塊をぶつけて封印しておいて、よく言えたものだな！ おかげでこの 3 カ月、生死の境を彷徨ったのだぞ！」

「そう怒らないでよw ちょっとしたアメリカンジョークじゃないの」

「1433 年じゃまだアメリカ見つかってないだろうが、ゴルア(# ㄥ°)！ 空気嫁！」

モンナ「まあまあ、メサイアさん。どうにか厨ストーリーを組み込まないといけない作者の苦勞も悟ってあげてくださいな」

クルル「原資料が少ない上に、あまりに厨過ぎたんで、心が折れたんでしょうね。不憫な……(´;ω;`)ウツ…」

「ほかのストーリーはすべてリアル志向で書かれているくせに、この扱いの差はなんだ!? まじめだったのは最初の数行だけじゃないか！」

メサイアは両手を天に伸ばした。

モンナ「原作からこんな感じでしたよ? アイルランドとアイスランドの区別がついてない頃の話ですしw」

クルル「厨ねえ……。まあ、息抜きのシナリオってということで、いいんじゃないの？」

「それはそうと、クルル。お前、どこに行くつもりなんだ？」

「ゼルギを倒しに」

「ふむ、なら一緒に行こうか」

3人は洞窟に入ると、シナリオの都合上さっさとストーリーを進めたいがため、特に迷うこともなくゼルギの元へ着いた。

原作ではシェゾ=ウッキーと名付けられた、頭にわかを巻いた猿が出てきた。手にはぷよぷよではなく鎌が握られている。

「よーし、ぶっ殺してくれるわ！」

華麗にアイス=カ〇ヅェルで猿を倒すと、流石に著作権のことが気になりだしたクルルであった。

かくして宝をゲットしたクルルであったが、中には宝の地図しか入っていなかった。

「お約束ね……」

「ねえさま、宝の地図にはなんて？」

「エリア湖の3妖精を倒し、この印のついた洞窟へ進めってさ。そしたらぶれみあむっていう宝が手に入るってさ」

メサイア「流石元ネタがRPG用に作られただけあって、お買い物要素満載だな」

洞窟を出たクルルは森で髪の長い少女に出会った。

「アンタ、こんなところで何してるの？」

「あ、どうも。私、ライファって言います。お師匠様のお使いに来ていて、迷ってしまいました」

「ライファ？」

クルルは眉をあげた。ライファというのは小さいころ魔物に攫われた妹の名と同じだ。

「で、どっから来たのよ？」

「魔界です」

「じゃあアンタ魔族？」

「いいえ、私、小さいころに魔界に攫われて、お師匠様に助けられて暮らしてたんです」

モンナ「ねえさま、この子……」

「……みたいね。ライファ、迷ってるならウチで休みなさいよ。歓迎するわ」

「いいんですか？ありがとうございます。あなたのお名前は？」

「クルルよ。こっちはモンナ。そこの剣士はメサイア」

「ライファです。よろしくお願いします」

家に戻るとその日は寝た。

次の日は東の町ルシロを超え、その南東のエリア湖に行った。

湖の洞窟に入ると、3匹の妖精が出てきた。短気なエレキ、熱血なヒート、冷静なコールドの3人だ。

「クルル=ディア。汝のような邪神にふれみあむは渡しません」

「よーし、ぶっ殺してくれるわ！」

モンナ「ちょww 会話になってませんわ、ねえさま」

メサイア「そもそもなぜ日本語なのかと問いたいところだな」

3妖精を倒すと、クルルは奥の洞窟へ進んだ。

するとそこにはミストという魔族がいた。

「アンタ誰？」

「ミストと言います。ふれみあむを探しているのですね？お付き合いしましょう、クルルさん」

「なんで私の名前を……」

糸目の灰色い肌をした魔族はふふっと笑った。

「それは秘密です」

「……」

「宝の地図を探しに来たのでしょうか？」

ミストが指す方には地図があり、北西の山ラ・カルブへ行けとあった。

ラ・カルブは異世界への入口だと噂されている。

山でクルルを待っていたのはカノンという中級魔族だった。

作者が使っていたプリンタに canon と書いてあったのを単に名前にした——という錯覚をクルルは不意に覚えた。

カノンは元は上級だったが、あまりのふがいなさに家を追い出され、魔力を失って中級になりさがったヘタレである。

「やべっ！クルルじゃねーか！」  
「ハロー、カノン。ふれみあむを出しなさい」  
「おまww それなんてカツアゲ？」  
「出さずに殺されるか、出して死ぬかどっちかになさい！」  
「ヲイ！どっちみちデスかよ(°Д°) ならこうするまでだ！」

カノンはダッシュで逃げ出した。  
が、FF3的に言えば「逃げ腰で防御ができなかった」わけで、あっさりクルルのアイス＝カン〇エルにケツを刺され、矢鴨と化した。  
カノンを退治したクルルはふれみあむを開けると、突如箱の中に吸い込まれた。  
きょとんとするモンナたち。急にあたりはシーンとしてしまった。

#### ・ふれみあむ争奪戦その4

クルルが目を開けると、そこは森だった。  
そして目の前にはおいしそうな……もとい可愛い少女が走っていた。  
走っていたというか、魔物に追われて逃げている。

「きゃー！にいさまあーっ！」  
「おーい、チビ。死ぬ前に答えなさい。ここどこよ？」  
「きゃー！」  
しかし少女は答えない。  
クルルはこめかみに青筋を浮かべながら、竜のモンスターを「ドラグ＝ス〇イブっぽい魔法」で瞬殺した。  
「わっ、わわっ」  
少女が驚いて尻もちをつく。

「おい、チビ。これで答えられるわね。ここ、どこよ？」  
「り、りーざの森い」  
えぐえぐ泣き出す少女。  
「ん？じゃあウチの近くじゃない。アンタ誰よ、見ない顔ね」  
しかし少女は恐怖で泣きだした。  
「びえーん」

「こら、泣くんじゃない。殺すわよ！」

「こ、殺……し、しーぎゃーびー！！」

「う、うるさっ！！ 作者の娘みたいな泣き方するんじゃないわよ(° 皿 ° #)」

幼女の口を塞いで無理に泣きやまずと、クルルは名を問うた。

「で、名前は？」

「わたし……クルル」

「は……あ？」

クルルはじっと幼女を見た。そう言えば、見覚えがある。これは……自分だ。

「アンタ、今いくつ？」

「よっちゅ」

「ねえ、お姉さんは？」

「私は……えーと、ソレイユよ」

「ソレイユおねえちゃん、助けてくれてありがとう！」

「ああ……気を付けてね」

クルルは幼女を見送った。

そして地面に座って考え込んだ。

さて、いったいどういうこと？

あれは過去の私。どうやらふれみあむは過去へワープするアイテムだったらしい。

あのころの私は何をしていた？

4歳のころ……そうか、父さまと母さまが殺されたときか。

そうだ、思い出した。私、ソレイユって女に会ってる。たしか……。

ごそごそとポケットを探すクルル。ペンダントがない。

やっばそうだ。あのとき、ソレイユの落し物を拾ったんだ。返そうと思って次の日森に来たんだ。

でもソレイユはいなくて、私は魔物に襲われた。そこを助けにきたのが中級魔族のメサイア。

そうだ、メサイアとゼルギを倒しに行ったんだっけ、あのときも。

その後は……ソレイユがルシロにいるって聞いてルシロに行き、盗人少年パルサーにペンダントを取られた。

パルサーを成敗してエリア湖へ。3妖精を倒して、北のミナ・カルモで怖がりな萌え精霊のノート仲間にした。

その後、西の砂漠ヤ・カルスへ。

イル・ハノイの塔に昇ってドラゴンを退治。

家に戻ったところでカノンのじいちゃんのヴィーカが襲ってきて……父さまと母さまが殺された。

そのときまでの私は素行の良いガキだったけど、その事件でぶっつんしてこの性格に。

ノートやパルサーを追い払い、ずっと私を守ってくれてたメサイアまで……。

そうだ、ヴィーカ戦のとき、ソレイユは何をしてた？

現れて助けてくれなかったの？思い出せない……。私はこの後父さまたちを助けにいったの！？

思い出せない……。頭が痛い……。

悩んでもしょうがない。もし私が現れなかったんなら、今回は現れればいい。父さまたちを助けられるかもしれない。

じゃあ、ちびクルルに見つからないように潜伏するか。

いや……。その前にすることがあるわね。

ラ・カルブ山。

クルルはカノン狩りをしていた。

カノンの洞窟に入り、奥へと進んだ。

「おーい、カノン、いるかえー？」

「誰だ、私の眠りを覚ます愚か者は……」

低い声で唸るカノン。

「おー、いたいた。ふれみあむ出せや、( '▽ )、」

「貴様……この俺を誰だと」

「何カッコつけてんのよ。「我」とか「俺」とか、日〇語にしかない代名詞使ってんじゃないわよ。「ここは意識です」って読者に説明するのが面倒でしょうが」

「ふ、嬢ちゃん、冗談もほどほどにしな——(ry)」

クルルは無を言わずファイアーボールを放った。

「びぎゃー！」

灰化しかけるカノン。

「さあ、ふれみあむを出しなさい」

「すみませんでした( ㊦` ;ノ多 プレミアム)

「よし、これいざってときに未来に帰れるわね」

「お……お前、誰なんだよ、チンヨウ……」

「まあ 10 年ちょっとすれば分かるわよ。じゃあね」

・変えられない過去

幼女クルルの帰宅を待ったクルルは、家の近くに潜伏していた。

幼女が帰って来たとき、記憶通りヴィーカが現れ、クルルを襲った。

ヴィーカはカノンの祖父であり、魔界の皇女ルキテファウスヴィルテスの腹心だ。

ヴィーカからクルルを守るため、父ユーテルと母ティルルは必死で戦った。

「ちょっと待ちなさい！」

屋根の上からクルルが降り立つ。

ちびクルル「ソレイユさん！」

「クルル、下がってなさい！こいつは私が倒す！」

ヴィーカ「誰だ、お前は……」

「ソレイユよ。アンタはヴィーカね。覚えがあるわ」

「ふむ？どこで会ったかな。魔界のものか？」

「訳あってこの二人に味方するわ。アンタはここで死になさい」

「誰に向かって口をきいておる？馬鹿め、大人しくしていれば死なずに済んだものを」

ティルルとユーテルは顔を見合わず。

ユーテル「お嬢さん、君はいったい……」

「構わずに戦ってください。話は後です！」

クルルは氷の筵をヴィーカに放った。

だがヴィーカは虫を潰すようにクルルの魔法を握りつぶした。

「ふっ、脆弱な……」

ヴィーカは列火を放った。悲鳴をあげてティルルが燃える。

「母さま！」

叫ぶクルル。

「大丈夫よ、お嬢さん！」

手を前に出して制止するティルル。

「ヴィーカ、私はこのくらいじゃ倒せないわよ！」

ティルルは氷の槍を放ち、ヴィーカの腕を貫く。

「ぐっ。やるな、流石はユーテルの妻。しかし凍てつく氷はワシも得意ぞ？」

巨大な氷柱を作ると、ヴィーカは矢のように飛ばした。

氷の柱はティルルの胸を貫き、彼女は地面に倒れた。

「ティルル！」



ユーテルが走りだしたとき、ヴィーカはユーテルの背中に回り込み、剣で胸を突き刺した。

「とっ、父さま！」

クルルはただ惨劇を見ながら叫ぶしかできなかった。

ティルルに駆け寄るクルル。

「母さま、死んじゃやだ！せっかく 10 年ぶりに会えたのに、まだ一言も話してないよ！」

「クルル……？あなた、未来から来たクルルなのね？」

「そうよっ！ああ、モンナがいれば回復できるのに！」

「モンナも？ああ、あの子も無事なのね。よかった。ヴィーカにこのまま皆殺しにされるのかと思った……。私とユーテルだけで済むなら、幸せよ……」

「へんなこと言わないでください！そうよ、ふれみあむで今から未来に戻ります。モンナに治してもらえばいい！」

「私はもう無理よ……。せめてユーテルを……。あの人を……」

ティルルは目を閉じた。

クルルは半狂乱になってユーテルに駆け寄った。

「父さま、立って！母さまが死んじゃったよ！」

ユーテルを揺さぶるが、ユーテルは胸から血を流し、既に死んでいた。

「どうして起きないの……お父さんのくせに……。お嫁さんと娘が殺されちゃうのよ……？」

「なんだ、お前。未来から来たその娘だったのか」

ヴィーカは幼女クルルを指さした。クルルはゆらっと立ち上がる。

「ヴィーカ……覚悟はできてるんでしょうね」

「くっく……なにを言い出すかと思えば。今の戦いを見ていなかったのか、少女よ。

なに、お前を殺そうと思えばいつでもできる。せいぜい己の弱さを嘆いて生きるがいい」

ヴィーカはユーテルの死体を持ち上げると、闇に消えていった。

「くそっ……くそっ……」

クルルは袖で涙を拭いた。

「ヴィーカ……絶対殺してやる」

ふれみあむを壊れんばかりに握りしめた。そしてクルルはふれみあむを開け、未来へと帰っていった。

・魔界編

ふれみあむで未来に戻ったクルルの周りには、モンナ、メサイア、ライフアがいた。ミストはいつの間にかいなくなっていた。正体も明かさない不気味な魔族だった。どうも彼はふれみあむをクルルに手に入れさせたがっていたのではないかと思う。だが何のために……。

メサイア「クルル、お前どこに行ってたんだ？」

クルルは事情を説明した。

「そんなことが……」

モンナは蒼白な顔で呟いた。無理もない、このころのできごとをモンナは覚えていない。

ライフア「クルルさん、それでこの後どうするんですか？」

「魔界に行くわ」

メサイア「ラ・カルブか。腕が鳴るな」

クルルたちはラ・カルブへ足を運んだ。

魔界の入口にはサタンという魔族がゲートを守っていた。

「お前……魔界へ行くのか」

「ここを通しなさい。さもなくば殺すわ」

「それはこっちのセリフだ。今すぐ帰れば生かしてやろう」

サタンは長い矛を突き出し、クルルを狙う。その矛をメサイアが弾く。

「お前……魔族だなア？」

「ああ、メサイアだ。幼馴染を守ってやるのが仕事でな。いざ尋常に勝負！」

切りかかるメサイア。ところがサタンの長い矛の間合いには届かない。

炎を剣から飛ばすが、それもかき消されてしまう。

「メサイア、下がりなさい！魔法で援護するわ」

クルルが叫んだが、遅かった。既に魔法を唱え終えたサタンがクルルをめがけて土の槍を放ってきた。

「きゃっ！」

とっさのことに対応できないクルル。

「危ない！」

そこにメサイアが飛んできて、クルルを押し倒した。

「あ、ありがと。メサイア」

「ふん、礼はやつを倒してから言え」

「分かってるわよ。てゆうか、いつまでも乗らないでよ。重いじゃない」

メサイアをはたくクルル。メサイアはにと笑って……地面に倒れた。

「メサイア……？」

問うように彼女を見つめるクルル。

メサイアの右のわき腹から左肩に、斜めに土の槍が刺さっていた。

「な……」

サタンは瞬時に土の魔法を放つと、突如クルルの頭上に大きな槌が降ってきた。

「ねえさま、危ない！」

モンナがクルルを突き飛ばす。

ぐしゃっという音がして、妹の頭の潰れる音がした。

「え……うそ……」

何が起こったのか分からない顔で呟くクルル。槌の下からじわーっと赤い血が滲む。

槌の周りでは、残ったモンナの首から下が痙攣していた。白いローブが下腹部を中心に赤く染まっていく。

「モ……モンナ……」

「くっくく……もろいなあ、人間は」

「このっ！」

怒ったライファが氷の矢を放つが、あっさりサタンに弾かれてしまう。

「許さないんだから！」

叫ぶライファ。

「ライファ！」

だが、思わず叫んだのはクルルだった。

「はいっ！」

氷の矢を構えたライファが勢いよく返事をする。

「逃げなさい！」

「は——……え？」

「私はこいつを倒して魔界に行く。でもアンタは逃げろ」

「何言ってるんですか。クルルさん一人じゃよしんば魔界に行ったって」

「ハッキリ言う。アンタの力じゃ迷惑だ！」

「そんな……言い方」

「メサイアとモンナが一瞬でやられた。これが魔族の本当の力ってことよ。アンタじゃ足手まといだ」

「私だって魔界で育ったんです！お役に立てます！」

「ディア家の血を絶やすつもり！？」

ライファの顔を見て叫ぶクルル。

「え……それはいったい」

「アンタはね、私の妹なのよ。ライファ＝ディア。赤ん坊のころ、攫われたの。黙ってたけどね。

アンタは生きなさい。生きて……私たちの無念を晴らして」

クルルは風の魔法でライファを吹き飛ばした。

「きゃ……クルル…姉さん！」

ライファは遙か彼方まで吹き飛ばされていった。

「さて、サタン。これで邪魔者はなくなったわね」

「お前一人で何ができる」

サタンは土の槍を放つが、槍はクルルに届く寸前で蒸発した。

「な……んだと」

「何ができる……ね。妹も親友も生き返せない。はっ、確かにふがいないやつだわ、私って。

でもね、アンタをくびり殺すことならできる。それが黒魔術に身を染めた私の呪われた運命よ」

クルルは氷の筵を放った。氷柱はサタンの周り 360 度から起こり、サタンの体に無数の穴を開けた。

「くっ……このくらいで……」

サタンは地面に這いつくばって呻いた。

クルルはサタンの頭を持ち上げると、石で小突いた。額が割れて、血が噴き出る。

「魔族も血は赤いんだな。——苦しんで死ね」

クルルは石でサタンを小突き続けた。

サタンが絶命するまで、実に 1000 回以上も小突き続けた。

・死神貴族シャルル＝アマンゼ

ぼろ雑巾になったサタンの死体を鳥の群れに投げ捨てると、クルルはモンナとメサイアの死体を埋葬した。

首から上が綺麗に無くなってしまった妹を見ていたら気が触れそうだった。ショックで何度も吐いてしまった。

「モンナ……赤ん坊のころから、アンタのことは覚えてるのに……最期はこんな死に方だなんて……。

美しい顔が誇りだったのに……私のせいで……」

妹と親友を埋めると、クルルは魔界の入口を通った。

「もう……忘れよう。

私は何があってもヴィーカを殺す。それだけだ。

みんなのことは忘れよう。思い出しちゃいけない。私はいつもの元気で傍若無人なクルルだ……」

暗い空間を落ちていくと、たどりついたのは魔界の林だった。

「さて、町を探るか……」

歩きだしたクルルは魔界の化け物が少女を襲っているのを見つけた。

「面倒だけど……助けてやるか」

クルルはファイアーボールを魔物に打つと、自分に敵意を向けさせた。

地球で見る魔物よりも遙かに強く、クルルは苦戦を強いられた。

「だけど、しょせん私の敵じゃないわねえ」

チラと少女を見ると、少女は鎌を構えたまま立っていた。

「その魔物は雷に弱いんですの！」

叫ぶ少女。

「よし、雷ね」

クルルは雷の魔法が不得意だが、それでもクルルの魔力は強大だ。

雷の斧を作りだすと、魔物を一刀両断した。

「ふう。終わった。アンタ、もういいわよ、出てきなさい」

木々の間から出てきたのは頭に小さな角を生やした少女だった。

「ありがとう。わたしは、シャルル＝アマンゼ。死神貴族の娘です。あなたは？」

「私はクルル＝ディアよ。ヴィーカをぶっ殺すためにここに来たの」

「ヴィーカ様を！？何を考えてるんですの、あなた」

シャルルは眼を丸くした。

「アンタも魔族か……。そりゃヴィーカの味方なわけよね」

「味方意識はありませんよ。わたしたちは種族ごとにまとまっているだけです。ただ、ヴィーカ様を殺すなんてムリですよ」

「そんなのやってみないと分からないわ。いずれにせよ、私は父さまたちの仇を取るんだから」

「仇……」

シャルルは眉をひそめた。

「さて、シャルル。助てあげたお礼に、貰うもん貰いましょうか。命救うのもタダじゃないのよ」

「え……う」

「大丈夫、安心して。ウチは明朗会計だから。とりあえず即金で100万ペリカでどうよ？」

「あの……わたし、貧乏貴族なのでお金ないんです」

「持ち合わせがない場合は後日でもOKよ。「にこにこクルルローン」の当社規定によると、10分複利だけど」

「あのう……わたし、身ぐるみ剥がされるんでしょうか……」

「そうねえ、金がなかったらその可愛い顔を使って風の吹く俗っぽいところに流そうかと思うんだけど」

「はうう……なんでもするから助けてください……」

「じゃあ私に加勢してよ。アンタ、中級魔族？」

するとシャルルは手で顔の右半分を覆った。

「いいえ……」と言って手を外すと、シャルルのごっそり顔の肉が剥げ落ち、骨が剥き出しになった。

「このとおり、上級魔族です」

「……なるほど、ね。その可愛い顔は変身だったのか。上等ね。ついてらっしゃい」

「でもクルル、ヴィーカ様を倒すって、どうやるんですの？」

「ん？ふふふ……」

クルルは笑い出した。

「いきなり王都には行けないでしょうからね。魔界の小さな村を襲撃して拠点を構えるのよ」

「はあ……拠点ですか」

「そうよ。一人じゃヴィーカに勝てないもの。まずは小さな集落。逆らう者は女子供も皆殺しよ、はっはっは」

「あのう……それにわたしも加担するんでしょうか」

「ったりまえでしょ。命の恩人の言うことは聞きなさい」

「はあ……そうですね」

「次は大きめの町を狙う。拠点を確認し、兵糧と兵を確認。まずは美濃の斉藤を攻めるのが常套手段よ。最初から三河に突っ込むバカはいないわ」

「あの……それはなんて○長の野望で……」

「そして近畿を中心とし、イベントの光秀の乱が来るまでに(ry」

「……」

「とにかく、町を占拠するから、手頃なのを教えなさい」

「(ぼそっと) クルルのほうがヴィーカ様よりよっぽど怖いんですの……」

「あ!?! なんですってえ?」

「ひゃあ、悪霊退散なのですー!」

シャルルをしばいたクルルは、「えー」と鳴き続けるシャルルの腕を引っ張りながら林を進んだ。

「この林を抜けたところにウアレッタの村があります。今日はそこで休みましょう」

「よし、占拠占拠♪」

「あのう、それはまた今度にしませんか(T\_T) wanted になってしまいますよお……」

・ヴァンパイアの村

シャルルに連れられてウェアッタの村に行ったクルルは、宿で夜を明かした。

「へえ、アンタほんとに貧乏貴族なのねえ」

部屋にベッドは2つ。ふたりはランプの明かりを灯し、夜通し話していた。

強がっていてもクルルも16歳の少女。友達ができて嬉しいのだ。

「むしろ没落貴族です。根っこを掘って食べるような生活です」

「それは苦勞したわね」

「でもクルル、よかったんですの？わたしの分まで宿代を出してしまっ

「うん？ああ……まあほら、パーティの財布はひとつって言うじゃない」

「クルルは魔界のお金なんか持ってなかったから、自分の宝石を売ったのよね。そのお金でわたしの分まで……。大切な宝石だったんじゃないの？」

「あっはは」手をぱたぱたと振る「どうせ近隣の街や盗賊団から巻きあげたお宝だから、いいのよ」

「き……聞いたのがまちがいでしたあ……(T\_T)」

とそのとき、クルルが人差し指を立てた。

「しっ、誰か来るわ」

ふっとランプを息で消す。

その瞬間、ドアを破って何者かが襲ってきた。

クルルはとっさに剣を取り出し、剣を突き立てた。しかし敵はクルルの腕にかみついた。

「いたっ！」

振り払うクルル。しかし相手は離れない。クルルはふいに違和感を覚えた。

こいつ……攻撃で嘔みついてきたんじゃない。私の血を吸ってるんだ！

「クルル！」

シャルルが鎌で敵の背中を切りつける。ぎゃあっと声がした。

「女の声っ!？」

意外なことに声は女のものだった。クルルは暗闇の中で女を取り押さえる。

シャルルが明かりをつけると、そこには脚の細い少女がいた。脚にはリングを嵌めている。

「アンタ……何者なの？」

「リスティス……リスティス＝マイム＝ウェアッタ。お前の血がうまそうだから、吸いに来た」



「そりゃ私が薄倅の超絶世の傾国の美少女だってことは知ってるけど」

「そこまでは言ってない……」

「だからって「はいそうですか」って血なんかあげると思う？」

「く……」

「クルル、この人、どうしますの？」

リスティスは自嘲気味に笑うと、「殺せ。心臓に杭を刺して燃やすんだな」と言った。

するとクルルは鼻で笑い、リスティスを離れた。

「白けちゃった。アンタ、帰んなさいよ」

「なんのつもりだ……」

「私はね、残酷なの」

「は？」

「だからね、殺せなんて言ってくるやつを殺るのは、つまんないのよ。興ざめだわ。アンタ、帰れ」

「何を言ってる……また狙うぞ」

「狙えば？アンタじゃ私に勝てないけどね」

「ぐっ……」

「血がほしいって、どれくらいよ。コップ一杯？それとも私が干からびるまで？」

「へんなことを聞く女だな。量はさほどではない。そうだな、確かにワイングラス一杯くらいだ」

「じゃあ、やるわよ」

「なんだと……？」

「もっとも、私のヴィーカ退治に協力したらだけどね。血は後払い。功績次第よ。やる？」

「ふっ……ふふふ、お前、面白い女だな。いいだろう。名は？」

「クルル、クルル=ディアよ。よろしくね、猿」

「猿？」

「決まってるじゃないの！」

クルルはシャルルをビシッと指さした。

「雉い！」

「はっ、はい！」

そしてリスティスを指さした。

「猿う！」

「お、おう……」

「——と来たら！？」

「あの、先生」

シャルルはひっそり手を上げる。

「はい、シャルル君」

「犬的な……？」

「わかってんじゃないの！さあ、明日は鬼退治よ！！(´Д`)」

眼を輝かせながら窓の外を指さすクルル。

そんなクルルを尻目に二人はぼそっと呟いた。

「自分を退治してどうするよ……」

・コリンテュアの泉

「なあ、クルル。お前、魔法の腕は確からしいが、剣のほうをもう少し鍛えたらどうだ？」

リスティスの誘いに乗り、クルルは剣の稽古をつけてもらった。

魔族リスティスの体技は凄まじく、クルルは防戦一方だった。

「ほらほら、昨日の勢いはどうした！」

「ちっ、私は魔法を混ぜて戦うのが得意なのよ！」

「そんなのは言い訳にならないな。ほれっ」

ピシッと剣を打つと、クルルの剣は音を立てて折れてしまった。

「ほい、私の勝ちだね」

「ま……まいったわ。ああもう、魔法があれば負けないのに！」

「長期戦では魔力が尽きることもある。剣は重要だぞ」

「ふん……」

「さて、クルル。では勝った報酬として血を貰おうか。なに、ほんの少しだ」

「む……仕方ないわね」

クルルは首を差し出した。

「おいおい、首から吸ったら頸動脈から血が噴き出しちまうだろ。死ぬよ？」

「そうなの？」

「この歯だぜ？」にっとなをみせるリスティス「針じゃあるまいし、スプラッタになるぞ」

「じゃあどこから吸うの？」

「唇だ」

「はあっ!？」

「唇は少し嘔むだけで結構血が出るんだよ。しかも新鮮な。部位によって味が違うんだ。牛でもサーロインが高級とか、そういうのあるだろ」

「あたしや家畜か！」

リスティスはクルルの顎を持ち上げる。

「ちょ……！待ってって！あのさ、今気付いたんだけど、それってキスするってことじゃないのよ!？」

「まあ、そういうことだな。諦めろ。さあ、瞳を閉じて……」

「ちょ！来るな平〇堅！ てゆうか、明らかにこのシーン不必要でしょ！そもそも唇から血を吸うなんて話、聞いたことないわよ！」

シャルル「殺伐とした話の中にレズ要素のお色気を取り込みたいという作者のけなげな読者サービスですのん」

「ぜってえ誰もよろこばねえ YO!!(´Д`) に、兄さま！助けてえ！」

「よいではないか、よいではな(ry」

・・・(中略)・・・

「う……うう……クルルは汚れてしまいましたわ、兄さま……」

「処女じゃあるまいし、キスくらいで落ち込むな、クルル」

「どうでもいいことに、処女なのよね……」

唇を抑えながら呟くクルル。

「それにしてもよわっちい剣だったな。あんなんじゃ魔界じゃ戦えないぞ。よし、クルル、新しい剣を調達しにいこう」

「剣ですって？どこにあるのよ？」

「魔界にはイーゼスっていう鉱石があつてな。ものすごく固い金属を含んでいるんだ」

「固いって……ガ○ダリウムみたいなの？」

「……イメージ的にはそんな感じだ」

「危険なトークですのんw」

「で、イーゼスからできた剣は最も上物なんだ」

「ふうん、そうなんだ？でもなんか微妙ね」

「なんでだ？」

「だってある特定の材料を使った剣ってことでしょ？銅の剣とかミスリルソードみたいなさ。

剣で最強なのは単品物じゃない。ラグ○ロクとかエクス○リバーみたいな。大量生産系は後半でアテにならないのよねえ（´ー`）」

「おい、なんの話をしている……」

「でもクルル、アダ○ン装備は最強でも大量生産できますのよ？」

「そうか……」真剣な顔で顎に手を置く「その線があつたか……」

かくして3人はイーゼスを探しに、コリンテュアの泉へ向かった。

泉に行くと、おあつらえ向きに妖精がモンスターに襲われていた。蝶のような羽を生やした少女だ。

まるで仲間にする口実を作るために備えられたかのようなイベントである。

「よーし、ぶっ殺してくれるわ！」

魔物を殺したクルルは、妖精に手を差し伸べた。

「あ、ありがとうございます！私はコリント＝コリンテュア。あなたのお名前は？」

「クルル=ディアよ。イーゼスを探してここに来たの」

「私はイーゼスの守り手です。お礼にイーゼスを分けて差し上げましょう」

ところがコリントはリスティスを見ると不快な表情を見せた。

「この人……ヴァンパイアですね。私の妖精族と敵対している種です」

リスティスはむっとして言葉を返した。

「種族で決めつけるなよ、チビ助」

「むーっ！チビって言うなあ！」

「お前、妖精族の中では一番大きな種だよな。でもお前自身は小さいな」

「むきーっ！」

コリントはイーゼスをリスティスに投げつけた。

リスティスはイーゼスを払うと、「な？」と言った。

「ほらみる。種差よりも個人差のほうが大きいんだ。だから種差で決めるなよ、コリント」

「う……」

まんまと言いくるめられたコリントはバツが悪そうに羽をぷらぷら動かした。

「さて、これで剣が作れるわね。それにしてもコリント、アンタこんなところでイーゼスを一人で守ってたの？」

「はい。イーゼスを守り切れれば女神さまになれるんです。私、生まれてから2年間ここでイーゼスを守ってきました」

「へえ、まだ2歳なんだ。え、てゆうかイーゼスくれちゃっていいわけ？」

「少し分ける程度なら大丈夫ですよ」

「そう。じゃあ私たちは行くけど、アンタも気を付けて」

「あの……クルルはどこに？」

「ヴィーカをぶっ殺しにね」

「ヴィーカ？」

「幼いから知らないのね。魔界の皇女の側近よ。私の親の仇」

「ふうん……じゃあ、そのヴィーカっていう悪いやつを倒せば、私、女神になれるかなあ？」

「ん？あー、なれんじゃね？」

適当に答えるクルル。しかしコリントは言葉を真に受けて、期待に胸を膨らませる。

「じゃあコリントも連れてってください！絶対女神になってやるんだから！」

「うーん、妖精の回復魔法もほしいところだし、まあ来てくれるならいいか」

横で聞いていたリスティスはシャルルに耳打ちをした。

「こいつが犬かな……」

「……ですね。犬臭がプンプンするのですの」

・王都潜入

剣と仲間を揃えたクルルは王都へ潜入を試みた。  
だが王都に入るには許可証が必要だった。

シャルル「クルル、どうしますの？」

リスティス「許可証なんてないぜ？」

「うーん……門番を殺して突破ってのはどう？」

コリント「それは捕まりますよ……」

「なんでよ！そもそもロープレって、うざい門番をふっ飛ばせば、もっとすんなり話が進むと思うのよね。

どうせ門番なんて、魔王軍が攻めてきたとき「うわあ、魔王軍だー！」とか言ってやられるだけで、街なんて守れない連中なんだから。そのくせ主人公だけ食い止めてんじやないわよ」

リスティス「正論だなw」

コリント「けど、門番を殺したら大変なことになりますよ？」

「しょうがないわねえ。じゃあ真面目に許可証を旅人からガメるわよ」

シャルル「発想がw」

山道に戻ると、哀れな旅人を待ち伏せた。

すると一人の少女が王都から飛んできて、クルルの近くに止まる。近寄るクルル。

「アンタ、誰よ？」

「え？あ、こんにちわ」

少女は三角帽子をかぶっている。帽子には星の刺繍が多数ある。髪はクルルと同じでポニーテール。

肩のはだけた服とスカートを身につけ、悪魔の羽を生やしている。羽には眼の模様が多数ついており、不気味だ。

「私はシトラス＝ヴァル＝ラスター。王都からお使いに行くところです」

シャルル「うん？なんだか貴方、クルルに似てませんか？」

「うーん？」

ラスターはクルルを覗き込んだ。

「そういえば……顔が似てるね。あなた、クルルっていうの？」

「ええ、そうよ」

「で、王都には何をしに？」

「ヴィーカをぶっ殺しに」

「……え？」

驚いた顔のラスター。

「無理っていうんでしょうけど、やるわ。親の仇よ」

「そう……でも、じゃあなんでこんなところに？」

「許可証がないのよ。静かに潜入したいの」

「なるほど。許可証なら私があげてもいいけど？」

「ほんと？」

「ただし、お使いを代わりにしてくれない？あそこの道をずっと行ったところにルアさん  
っていう人がいるから、この包みを渡してあげて」

「いいわ、取引成立ね」

「じゃあ前払いで許可証。あ、ちゃんと運んでよ？」

「OK。じゃあまたね、ラスター」

ラスターは羽で飛んでいった。

「さて、じゃあルアとやらにこれを渡しに行くわよ」

ルアの家に行くと、クルルは扉をたたく。

「すみませーん」

中から出てきたのはひよろい青年だった。

「おお、おかえり」

青年はクルルを見るなりそう言った。

「おかえり？何言ってるの？」

「君こそなに言ってるんだ、ライフア。お師匠様をからかっちゃいけないよ」

「ライフアですって!？」

クルルは目を丸くした。

「え……あれ？人違いかな？僕はまぬけだからなあ。ははは」

「私、ライフアの姉のクルルよ。あなたがライフアの育ての親のルアさんなのね」

「顔すら間違えたけど、その通り。はは。まあ入って」

クルルは歓迎を受け、事情を説明した。

「そうか……ライフアは魔界には来ず、生き延びたのか。うん、それは良かった」

「それでこれがラスターの荷物。あの羽の生えた子、何者なの？」

「欠片だよ」

「かけら？」

「ルキテファウスヴィルテス皇女の。なんだ、君は何も知らないのだね」

「詳しく聞かせて」

ルアはおほんと咳をした。

「魔界の王、ルキテファウスヴィルテスの正体は白い球だ。が、ふだんは少女の姿をしている。

皇女はかつて神界の王と戦って負傷し、自分の一部を失ってしまったんだ。それが欠片。

その欠片たちはこの世界や君の世界、そして別の世界にまで散り散りに飛んでいってしまった。

欠片はいずれも皇女の魔力を帯びた強い力を秘めている」

「へえ、さながらタリスマンね」

「少し違う。君は欠片をアクセサリーのようなものとイメージしているだろう？」

「違うの？」

「ああ、欠片の最大の特徴は、人間として転生するという点だよ」

「人間として？」

「厳密には魔族の場合もある。ハーフのこともある。——君のようにね」

「……なんですって？」

「君は少女のくせにあまりに魔力が強い。おかしいと思ったことはないかね？」

「そういえば……。てっきり才能だとばかり」

「才能さ。皇女の力を持っているのだから。君、夏生まれだろ？」

「ええ……それが何か？」

「皇女の欠片は誕生日が同じなんだ。当然だろ？負傷した日に吹っ飛んだ欠片からできて

いるんだから」

「なるほど。で、皇女は欠片をどうしたいの？」

「集めて元に戻りたい。しかし欠片がいつどこで人間に転生するのか分からない。

かといって自分は王都を離れられない。そこで皇女は欠片を集める専門家を用意した」

「ヴィーカ？」

「彼は腹心だ。皇女の傍で政務なりを担当しなければならない」

「じゃあ誰なの？」

「君の父上だよ。ユーテル候」

「ええ？」

「ユーテルは皇女のお気に入りだね。傍に置いておきたいと思った皇女がヴィーカを放ち、殺して自分の傍に置いたんだ」

「そんな……じゃあ、私が4歳のときの出来事は……」

「皇女の差し金だったことになるね。幸いなことに君の父上は完全には死んでいない。「果ての君セイネルス」として、皇女の下で新たな人生を歩んでいるわけさ」

「ルキテファウスヴィルテスめ……」



「ユーテルの仕事は欠片を探し集めること。欠片を以って生まれた人間は、そのままでは収穫できない。

欠片として覚醒しないといけない。君の場合、4歳のときのその出来事が引き金で覚醒したのだろう」

「そういえば、あのときから魔力が強くなった気がするわ……」

「先ほどのラスター君も、欠片なのだよ」

シャルル「それでクルルにどことなく似てたんですね」

「じゃああいつもいつかは……」

「君の父上に狩られることになる」

「……。……ふざけないで」

「うん？」

「皇女だか何だか知らないけど、私には私の人生があるのよ。「欠片ですから回収します」なんかで納得できるか！」

頷くリスティス。

「クルル、皇女を倒そう」

コリント「返討ちは目に見えてますけど、一矢報いることくらいはできるでしょう」

・ 操られた幼馴染

ルアの家を出て、ラスターの許可証で王都へ入ったクルル一行。

宿を取ると、日が暮れる前に王都を見学して回った。

「王都はさすがに都会ね」

「クルルは初めてですものね」

「地球にはない木もあるわね。リスティス、これは何？」

「ソトロノだな。地球にはなからう」

広場に出ると、屋台でソーセージを売っていた。

4本買うと、噴水の近くで座って食べた。

「コリント、これ何の肉？」

「え？ただの豚ですよ。魔界産ですけど」

「中〇産じゃなきゃいいわ。魔界はチ〇イナフリー」

「ちょw」

「ギョーザもほしいところすのんw」

前方を見ると少女が列を成して歩いていた。

戦闘には鎌を持ったローブの女性。

「リスティス、あれ何？」

「ヘルの行進だよ。先頭が死の王ヘル。後ろの少女は従者だ。手に魔法の鎖をつけられて、反抗できないようにされている」

「従者……ねえ」

「従者というよりは食糧だな」

「はあ？」

「ほら、列を見てみろ。骨の魔物がいるだろう？あれが emperor だ。ヘルは女色でな、少女を凌辱しては食うんだ」

「で、食われるとああなると」

コリント「死してなお隷属をさせられるとは……哀れな……」

シャルル「まったく。クルル以上の外道がいるとは、驚きですの」

「いい度胸じゃないの、へっぼこ死神w カルシウムにしてやろうか？」

とそのとき、クルルは目を凝らして隊列を見た。

「ん？あれは……まさか」

駆け出すクルル。慌てて3人が付いてくる。

「どうしたクルル!？」

「列の中に知り合いがいたの」

「知り合い？」

「7歳のころ、一緒に旅をしたところがあるわ」

「リュート！」

クルルは列を分け入って叫んだ。

おかつば頭の少女はゆっくりと振り向く。

「やっばリュートじゃないの！こんなところでどうしたの！？私はクルルよ！アンタ、ヘルに従者なんてやってんのよ！」

「クルル……？」

「そうよ、リュート＝アルカネット！昔一緒に旅をしたじゃない。その星のペンダント、忘れないわ」

「何の騒ぎだ？」

ヘルが近づいてくる。

「アンタがヘルね。私はクルル。リュートを返してもらおうわ」

クルルはリュートの手枷を魔法で切ろうとする。

その刹那、クルルの前髪を刃物が掠めた。

見上げると、魔法の刃を放ったのはリュートだった。

「え……？」

「クルル＝ディア……殺す」

「ちょ……なに」

リュートは手枷をしたままクルルを殴った。

頬を殴られてクルルが吹き飛ぶ。

「何言ってんのよ、リュート！」

「ふはは、無駄だ、クルルとやら。この娘の心は既に私のもの。さあ、リュート。この娘を殺すがいい」

リュートはダッと駆け寄る。手枷をしたまま恐ろしい体技でクルルを追い詰める。

「クルル、加勢しますわ！」

しかしシャルルたちの周りを従者の少女らが取り囲む。

「くっ……多勢に無勢だな」

「リュート、目を覚ましなさい！」

「クルル……殺す」

リュートは風の刃を放った。クルルの脚が切れ、鮮血が吹き出す。  
「いたい……っ！」

クルルに歩み寄るリュート。  
「アンタ……どうして……。ヘルが心を奪ったですって？あんなに明るかったアンタがどうして……」

「クルル……さよなら」

リュートが拳を上げる。

だがクルルはリュートを見返した。

「そんなの信じないから！」

クルルはリュートの拳と拳の間を目がけて氷の矢を放った。

バシュッと音がして、手枷が外れる。

その瞬間、「うっ」と言ってリュートが倒れ込む。

「リュート……？」

起き上がったリュートは、「ううん……」と言って頭を押さえた。

「私……何をしていたの？あれ……クルル？クルルじゃない。どうしたの、あなた」

「よかった……やっぱり操られていただけだったのね。へへへ」

だがその状況を喜ばないヘルは舌打ちをすると「引き上げだ」と言って去っていった。

「おいクルル、いいのか、ヘルを逃がして」

「正面からじゃ適う気がしないわね。今日はリュートを回収できただけでOKよ」

宿にリュートを連れていくと、クルルは昔話に花を咲かせた。

・ハデスの狂宴

リュートの話によると、皇女の城には3人の貴族がいるらしい。  
ゼウス、ポセイドン、ハデス。ハデスが一番下の弟だ。その上にヴィーカや皇女がいる。  
昨日のヘルはハデスの部下だそうだ。

まずはハデスらを倒さねば、城には入れないという。  
クルルは身支度を整えると、宿を出た。目的はハデスの暗殺だ。  
ヘルの従者をしていたリュートは城の抜け道を知っており、そこから城内に侵入した。

「この先がハデスの部屋よ」

リュートの言葉にみな緊張する。

奇襲用に魔法を唱え終えてからいざ部屋を開けてみると、そこには待ち構えていたかの  
ようにハデスが座っていた。

「打て！」

扉を開けると同時に魔法を放ったクルルたちだったが、ハデスはあっさりと右手でもみ  
消した。

「なっ！」

ハデスは15,6歳の少年の姿をしている。

ゆっくり玉座から立ち上がると、手をぱんぱんと叩いた。

「ご苦労。皇女の欠片。わざわざ欠片を持って我らが城に帰ってきてくれるとは、手間が  
省けたというものだ」

「アンタなんかどうでもいいのよ、ハデス。私はヴィーカと皇女をぶっ殺しに来たの。ア  
ンタはただの前座だ」

「くくく……皇女を倒すだと？欠片風情が知った口を」

ハデスが指を鳴らすと **lunar hell, emperor** などのアンデットモンスターが現れた。

「シャルル、リスティス、コリント。雑魚は任せた！私とリュートはハデスを討つ！」

「はいっ！」

散会するメンバー。

シャルルは器用な鎌捌きで **emperor** を倒していく。

リスティスは剣技で **lunar hell** を倒す。

コリントは回復に専念している。

「いくわよ、リュート！」

9年の歳月を経て、幼馴染との連携が繰り広げられた。

ハデスは不敵な笑みを浮かべながらクルル達の剣や魔法を捌いていった。

やがてシャルルらが魔物を倒し、加勢に加わった。

「クルル！加勢しますわ！」

「よしっ！これで5:1ね。これで勝てる！」

「ふむ、多勢に無勢だな。ときに、お前の希望の根拠はこの仲間たちか。面白い」

「今更泣きごとと言うんじゃないわよ！」

「希望を失ったとき、お前の顔がどう歪むか……考えただけでも心地よい」

ハデスはシャルルを指さした。シャルルは精いっぱい相手を眼で威嚇した。

「お前は死神か。火で焼いても骨は残るが、溶けたら何も残るまいな」

「え……？」

「顔を触ってみろ」

シャルルは顔に違和感を感じて頬を触った。するとそこには変身を解いてもいないのに、肉がなかった。

「な……」

顔の皮膚が解け、骨が頭わになる。

「いや……これはなんですか」

顔が剥がれ落ちると今度は腕や腹や足までもがこそげ落ち、肉がぼとぼとと地面に落ちる。

「いや……いや……」

シャルルの肉は床に落ちると、じゅーと音を立てて溶けていった。

強酸だ。

「あ……あああ……たすけて……」

みるみるうちにシャルルは骨すらも解かされ、白い泥になって地面に墮ちた。

後に残ったのは服と死神の鎌だけとなった。

「シャルル……。きさま、シャルルに何をした！」

「お前はヴァンパイアか。ヴァンパイアが血を失って死んだら面白いな。くくく」

「させるか！」

剣で切りつけるリスティス。しかしハデスは指一本で止める。

と同時にリスティスの手を取り、引き寄せて腹を殴った。

ハデスの拳はリスティスの肝臓を貫き、背中から拳が突き出た。

リスティスは血を噴いて悲鳴をあげた。

「肝臓は血のプールだ。さあ、何秒持つかな」

「リスティス！耐えて！今回復してあげるから！」

コリントが回復魔法を唱えるが、ハデスはくいと指を下に向ける。

その瞬間、重力が何倍にもなってコリントにかかった。彼女の羽は無残にも歪み、ティッシュペーパーのように潰れた。

悲鳴をあげて地面をのたうち回るコリント。

「子どもの頃、蝶を手で捕まえようとしたら、クルル？ 蝶ってさ、軽く握ったつもりでもあっさり潰れて死んじゃうんだよね。——こんな風に」

くしゃっとハデスが手を握ると、目に見えない圧力がコリントの頭を握りつぶした。

「あ……あ」

コリントは苦しそうな声を出し、もがいた。が、次の瞬間、トマトが弾けるように頭部が破裂した。

桃色の神経の付いた眼球がクルルの膝に転がってくる。

「コリント！」

クルルが駆け寄ろうとしたとき、ハデスがリスティスをコリントの死体の上に投げつけた。

「リスティス！」

しかしリスティスは既に血を失って死んでいた。

「その死体は今夜ヘルに食わせてやろう」

「このっ！」

リュートが氷の槍をハデスに放つ。だがハデスはそれを片手でつかむと、リュートの胸を刺した。

「そ……んな……。クルル……。こいつは……。無理……。逃げて」

崩れ落ちるリュート。

クルルは呆然と立ち尽くした。

「ははは、そうそう、その顔。それが見たかった。いい顔するね。信じられないって顔だ」

クルルは無表情のまま、氷の筵を打った。まるで効果がないことを始めから知っていたかのように。

ハデスは簡単に魔法を捻りつぶすと、クルルに近寄った。

「お前の冒険はこれでおしまい。ヴィーカや皇女に勝てるわけがないだろう？部下の私にすら勝てないお前が」

「この……くそやろう」

クルルはハデスの顔に唾を吐いた。

「いいね、その反応」

ハデスはクルルの眉間に右手の中指を置いた。左手で後頭部を押さえ、動けないように固定する。そして壁にクルルの体を押し付ける。

「これでまた欠片がひとつ」

ハデスは右手の薬指をクルルの左目に、人差し指を右目に宛がうと、瞼の方から指を挿しこんだ。

クルルは肉にされる豚のような断末魔をあげ、しきりに頭を振る。

「中間管理職の楽しみはこれくらいしかなくてね」

ハデスが指をくいと動かすと、ぶちっと神経の切れる音がして、眼球がふたつ転がった。

クルルは目を覆って地面をのたうち回る。

「ユーテルから聞いたよ。お前が実の娘だとね。だから苦しまずに殺してくれと哀願された。

お前、愛されているな。ユーテルも愛されている。皇女のご寵愛を受けてな。

おかげで俺は万年中間管理職だ。

せめてお前をくびり殺さないと気が済まない」

ハデスは泣き叫ぶクルルの口に右手を突っ込むと、食道と気管の壁を破って喉に手を突っ込んでいく。

クルルはビクビクと強く痙攣し、両手でハデスの腕を掴んで抜こうとする。

やがてハデスは食道を破って心臓を鷲掴みにすると、惜しげもなく握りつぶした。

クルルは一度強く痙攣し、その後もしばらく痙攣していたが、やがて絶命した。

「くく……いい父親を持ったな。

さて、欠片を皇女に献上せねば……」

クルルの死体から光の玉が出てくる。白い灰かな玉だ。

ハデスはそれを取ると、静かに部屋を出て行った。



・親心

mel 384 diasel

俺はアルバザードのカルテをレインと歩いていた。

今日は年に一度のディアセルで、家族4人でアルバザードに来ている。

とはいえ、娘のリディアはセリアに着替えてから来ると言っていたので、遅れてくることになっている。

紫苑はリディアの到着を待ってからこちらへ来るとのことなので、今はレインと一緒に歩いている。

カルテを過ぎて北区に入ったところで、紫苑からアンセに着信が入った。

「おう、どうした？」

ホログラムに紫苑が映る。背景はレインの家の地下室だ。なぜか紫苑は不可解な顔をしていた。

「リディアがまだ来ないのよ」

「遅いな。あいつ、何やってんだ？」

Ⓔh>>, el lecΛ JeΛ JeΛc- Je Joく,, co> (a eΛ >olJ <cl -e

首を傾げるレイン。

「何かあったのかな。俺、そっちに戻るわ」

「うん、お願い……」

俺はアルシェにアンセを入れて遅れる旨を伝えると、アルシェは自分のほうがレインの家に食事を持っていくと言ってきた。

ハインさんも来るらしい。今や一国のアルタレスが気軽にレインの家に来るという事態に俺はちょっと面くらったが、素直に従うことにした。

この時間だと地下鉄も走っていないから徒歩だ。え？ディアセルだから夜でも地下鉄が走ってるんじゃないかって？

いやいや、誰がディアセルに働くと思う？オートメーションを嫌うアルバザードには無人運転はないんだぜ。

家に戻ると、地下室へ行く。

木の箱に座っていた紫苑が不安そうな顔で首を上げる。

「まだか、あいつ」

「うん……。どうしたんだろ」

「いったん地球に戻ろうか？」

「無理よ。最後に来るあの子が紫苑の書を持ってるんだもん。まだあの子の机の上よ」

「そうか……まいったな」

「h-c, (4a 7a7c7c le7c7c7c 7e 7-7 >c-7δ 6」

「4-, 7ee a 7c7e7c 7e7c 7a, 7c7c 7c6」

「e7c7c (4a, 7- e7c c7c7c,, 7c7c 7c7c 7-7c 7-6」

「7c7c 7-7c 7e7c7c 7-7c >e7c7c-, 7c7c7c 6」

頷く紫苑。

紫苑がメルティアに語りかけると、いつまでも年を取らない美青年が現れた。

「7c7c7c7c7c7c7c, 7c7c7c 7c<6」

「7c7c7c7c7c7c7c, >e7c7c-, h-c, (4a 7c >c7c- 7e7c7c 7c7c 7c7c 6」

「4-, 7c7c7c- 7- 7c7c-7c7c7c c> 7c7c6」

「>c-δ 7-7c c> 7- 7a7c7c 7-c7c7c 6」

「c7c7c, 7- 7- 7c7c-7c7c7c c>e7c7c >e7c 7/06」

「>e——はあ？ 6」

目を丸くする3人。アルカの数にいまだに慣れない静は少し考えてから驚く。

「なっ……！う、うちの子がメル320年のアルバザードにいるってどういうこと？」

焦る紫苑。メルティアに唾がかかるくらい詰め寄っていく。

しかし日本語の通じないメルティアは眉をひそめて身をそらす。

「7c7c7c, 7- 7e7c 7c7c >-7c 7- e7c 7-7c <c7c7c- 7c, 7c7c7c7c-6」

「h37c7c7c 6」

「-7c 7-7c 7c7c7c >-7e7c 7c 7e7c 7c 7-7c7c-7c 7c7c7c7c- - <c- 7e7c c> 7e6」

「4-, 7c7c 7c7c,, 7e7c 7c e7c c7c - 7c7c7c-δ 6」

「7c e7c 7c7c - 7e7c>7c,, -7c7c, 7c 0c7c7c7c-7c / <c- 7-7c 7-7c7c 7c7c7c7c- - <c- 7c7c,,

7c e>-7c -7c7c7c e 7c7c 7e 7c 7-7c7c7c c> -7c>-7c- 7c7c7c >-7c 7c, <c- e>-7c 0c7c7c7c

「>>....,, 7-7c 7-7c e7c 7c7c7c- -7c 7-7c7c - >e7c 7/0δ 6」

「e7c 7c >e7c 7c7c 7-7c >e7c -7c 7-7c 7c7c7c,, 7c -7c7c "7c7c7c7c7c-" c> 7e 7c7c,, 4-7c >c7c- 7c7c7c 7-7c

7-7c 7c c7c7c 7c6」

「h-c7c7c7c....6」

静は肩を落とした。

7e7c7c 7c7c>, 7e7c7c- 7c7c 7e7c7c <c7c7c7c- 7-δ 6」

「c7c7c7c7c-7c7c, 7c7c7c a 7e7c7c <c7c7c7c- 7-6」

「-7c7c7c....6」

不安な表情のレイン。紫苑は黙って下を向いたままだ。

「すまん、紫苑。俺がああとき自暴自棄になったばかりに」

「違うわ。魔法を使ったのは私よ。それに、ああとき先生の悩みを解消しなければ、素敵な旦那様の水月静にはならなかった。

私たち、別れていたかもしれない。そう考えれば……リディアのことは……」

⑥>el(c-, l- 7e(c- -l(c ccA- (cδ ⑥

⑥l-Λ-⑥ メルティアは静の文法を正すように文頭を強調した ⑥7e- <c- c OcΛZ⑥

⑥(a e(c l->c eδ ⑥

メルティアはゆっくりと頷いた。

これに一番反応したのはレインだった。レインは貧血のような症状を起こしてふらっと地面にへたり込んでしまった。

動悸とストレスがもともと弱い肺に悪影響を与えたのか、胸を押さえてこほこほと咳き込んでいる。

「レイン……大丈夫か？」

「だめ……。私、リディアがいないと……。あの子は私が育てたのよ……」

俺はメルティアに礼を言うと、メルティアは心配そうな顔をしたまま消えた。

蒼白な顔の紫苑。レインは床にへたり込んでしくしく泣いている。

俺は無言でふたりの肩をぼんぼんと叩き、背中をさすった。大きな妹がふたりいるみたいだ。

紫苑とレインを居間へ連れて行き、座らせた。

暖かいお茶を用意しようと、台所へ行く。

それにしても二人とも凄惨な落ち込みようだな。当然か。紫苑は腹を痛めたんだし、レインはずっと育ててきたんだし。

ふむ……俺はどうなんだろう。心配ではあるが、あいつらほどガーンという感じはしない。男親なんてそんなもんなのだろうか。俺の親父もそうだったな。

逆に紫苑がいなくなったらどうなるだろう。

ちょっと想像してみた。その瞬間、ものすごい眩暈と恐怖に襲われ、冷汗が出た。

ま、まずい……ものすごい衝撃が予想された。これは死ぬ……。蛍のときの数倍だ。

そうか、俺にとっての大切度ってというのがあったんだな。嫁は失ったら自殺するほど大切だが、娘はそれほど大切ではない、と。ふむ……。

カモミールティーを淹れ、居間へ戻る。

紫苑は手を机の上に乗せて、黙ったまま斜め下を見ている。

「あ、そうだ。アルシェたち、こっちに向かっているって。事情説明しないとな」

「うん……」

「紫苑……。あのな、大丈夫って思って待ってるしかないよ」

「分かっている……」

「紫苑が高校生だったとき、初めてアルバザードに来たろ？あのときお父さんは感づいていたんだろ？これはあのときの親の気持ちだよ」

「そう……そうね。ああ、お父さんに初めて申し訳ないと思ったよ。こんなに身を裂かれそうになるなんて……。親って子供のことがこんなに心配だったのね」

じゃあ俺は親じゃないのかな、とか思ったり。

「大丈夫だよ、あれでも紫苑の子だ。向こうで英雄になって帰ってくるさ」

「でも！」紫苑は声を荒げた「あの子は私みたいな力がないわ！」

「まあ、混ざった血が悪かったようで、すみません……」

「あの子は大した人間じゃない。運動もダメだし、勉強だって秀才程度。私の高校時代と違って、努力も根性もハングリー精神も乏しい。ふつうの中学生の女の子なのよ……！」

「親がそんな風に思っちゃダメだろ。あいつを信じてやらないと」

まあ、あいつが凡人だというのは俺でも分かるけど、それを言っちゃおしまいよ、と。

「信じるって……あの子の何を？アルセリアの着付けもできないのよ？料理だって！郵便局で物を出すやり方も知らないし、地下鉄の乗り方だって知らないのよ。子供じゃない！」

「地下鉄は……大丈夫だろ。こっちにはアンセがあるし」

「先生、メル 320 年ってどんなだか知ってる？」

俺は首をかしげてレインを見る。

「静、その年の夏にミロク革命が起こったのよ。若きミロクは選挙で大勝利して、その後は……。……320 年は革命の血の歴史の始まりよ」

「え……」

「そんなアルバザードに行ったなんて。私のときは 367 年で、太平の世だった。でも……うう……胃が痛いよ、先生……」

「大丈夫か。ほら、カモミール飲めよ。落ち着くぞ」

紫苑の腹を撫でてやる。

レインがごほごほと咳き込む。

「ああ、お前は肺か。はあ……」

左手でレインの背中をさする。

まったく、玲音の書の時代から弱点は変わっていないな。紫苑は胃で、レインは肺。

「まあ、メルティアは何もできないって言ってたけど、こっちから何かできることがあるかもしれない。アルシェが来たら早速着手しよう」

「そうね……」

「紫苑は動けなければ寝てていい。娘は俺が助けるから」

「ありがとう、先生……。でも私、寝てたら余計心配よ。動いてるほうが楽だわ」

「じゃあ俺、外に出る準備しておくよ。こりゃ軽装すぎだからな」

二階に行ってレインのお父さんの部屋に行き、アルティス教徒の服を棚から出す。

そのとき、突如俺の脳裏にリディアの小さい頃の映像がよぎった。

にやーにやー言いながら泣く猫猿。

とてとて走ってくるチビ。

幼稚園でえへらえへら笑ってたアホ面。

小学校に上がって女の子っぽい顔になってきて、美少女と褒めそやされたころ。

そういえば、俺は娘に裸を見られるのが嫌で、2,3歳くらいまでしか風呂に入れてやらなかったなあ。

高学年になったら大人しくなって、母親と同じで友達がいなくて、静かになっていったな。

でも俺には相変わらずまとわりついて「遊んで遊んで」ってうるさかったな。

中学校に入ってからあまり変わらず、なんだかんだでへばりついてくるな。

可愛い娘といえば可愛いが、よく懐く猫みたいなもんだな。はは。

しかしあれだ……いなくなって……もしかしてもう会えないと思うと……。

急に喉に熱いものがこみあげてきて、思わず口を手で覆った。

やばい……いま分かった。

俺、心配してないわけじゃなかったんだ。

俺まで倒れたら、誰が紫苑を支えるんだって思ってただけなんだ……。

「くっ……」

俺は床にへたり込んで、泣きだした。ああ、どうやら俺も親だったらしい。

昔の俺ならイラついて床でも殴るのだろう。だが、今の俺にそんな若さはなかった。

ただ、娘がいなくなったショックで女々しく泣いていた。

俺と紫苑はあるとき「神の夢」とやらを開いてしまった。

そして世界が歪み、その歪みを修正するためにリディアが過去に送り込まれた。

メルティアの話だと、過去だけではすまない感じだったな。

神の夢ってなんだ？リディアに何をさせようって言うんだ？

紫苑が並行世界を作り、その世界の俺は神崎琥珀として生きた。

俺の考えたウォンバスが実在する並行世界だ。

あの世界ができたせいで、世界が歪んでしまった。

もう何年も前のことなのに、今更償えっていうのかよ……。

しかも俺でなく俺の娘がかよ……ふざけやがって。

・ 薫の王子様

>el ʔ/0 lc-Jel

今日は年に一度のディアセル。

私、水月リディアは家族でいつものようにアルバザード旅行に行くはずだった。

ところが紫苑の書を使ってワープしたところ、レインの家ではなくカルテっぽいところに来てしまった。

「うーん、ワープの位置を間違えたのかな」

目の前には群衆が集まっている。

例年ディアセルはお祭り騒ぎだが、皆、なんとなく服装がお祭りムードではない。

また、雰囲気もピリピリしている。

「なんのイベントだろ……。面白そうじゃないからいいや」

私はレインの家に歩こうとしたが、そのとき群衆からウォーという叫びが聞こえた。

「なんだろ……。カルテンのほうかな？」

近寄ってみた私は思わずきょとんとした。

目の前にお城が建っていたからだ。でも、カルテにお城なんてない。

「あれえ？ここ、カルテじゃないの？」

群衆はお城の周りに集まっていた。

Ⓞlclɔɔ, lclɔɔⓄ と言いながら、人をかき分けて進む。小柄な私なので、するするとすり抜けて入っていける。

先頭に出ると、お城の前には男の人が立っていた。

20歳くらいかな、若くてカッコいい男の人。でも、凄く怖そうな顔をしている。

んー、お父さんには似てないな。おじいちゃんに似てるかも。ただ、凄く怖くした感じ。

Ⓞ-l -ʔce, -l -ʔce, lʔaʔʔa >cʔoʔ ʔaʔc-rⓄ

アルティス教の服を着た人たちがしきりに叫んでいる。

ヘンなことに、周りにはアルティス以外の服を着た人もいる。

地球と同じくジーパンを履いている女の人もある。ヘンなの……。

ミロク＝ユティア？なんか偉い人の名前じゃなかったっけ？

ユティアって苗字、レインの親戚？レイン、ああ見えてお嬢様だからなあ。

ミロクさんがマイクを使って喋り出す。

Ⓜ-λ JeΛC (cc) cl >-λ (cc) laλ- -(a l-λ- 0-c -λ,,  
-λ lel >cμo) 4a(c- θcλ- (a leλ -λ (JeΛC- --λ- (cc) cl eλ) leV-leΛ/ -l-cV,,  
l--J (JeΛC- ( λ-λ-λ (λ-μe-Z-μλ Vcl >eSc) <->cc λ-oλ,, (l -λ...Ⓜ  
「なんか難しい話してるな。政治家の人？よくわかんないや。行こ」

人だかりを抜けて歩いていく。

「それにしてもここはどこなんだろう……」

とそのとき、何か怖そうなおじさんが3人私に近寄ってきた。

シャツとジーパンを履いた人だ。なんでアルティス教の服を着てないんだろう……。

Ⓜ0ec, (c eC V-l(e o)δ Ⓜ

Ⓜh3δ 4, 4- h-oⓂ

Ⓜ"h-oδ" h3C, (cc) V-l(e e) l-l) Jo- -r (l (c μe )el --λ- (a leλ >cλ-lc) λ-l (a λ-lr Ⓜ

Ⓜ>cλ-lc)δ >cλ-lc) eC (oδ Ⓜ

すると男の人はギョっとした顔になると、急に顔を赤くして私の胸倉を掴んだ。

Ⓜ0ec, λcc->cc)r (c θclθ V-λ -λ) o)δ Ⓜ

なっ、なになに！？

私は真っ白な顔になって答えた。

Ⓜ0-(c)clθr λo...λoλ...,, 3>, λcc->cc) eC (oδ λoλ Jccλ- >cc) h-μ (c)JeⓂ

Ⓜ-l (c θclθc) >e -λr λcc->cc)δ h3C, -l(c >e)θo lcS oV- ee r Ⓜ

Ⓜ>e, >e)θo eC (o eee...Ⓜ

半ベそをかきながら悲鳴に近い声を上げると、男の人は私の髪を引っ張って、茂みのほうへ引きずっていった。

「いやあー！やめてよー！髪痛いよーっ！」

日本語で叫んだ瞬間、男の人はギョっとして私の髪を離した。

Ⓜ0e... (c o) (o c) (a)μrδ (c laλ-J cC ->θ Ⓜ

「わ、私は日本人よ！私にひどいことしたら、大変なことになるわよ！アルシエに頼んでみんな逮捕してもらおうから！」

弱虫のくせに精一杯がんばってみた。

それが気に食わなかったのか、男の人は私の口をふさいだ。

「むーっ！」

そのとき、ひとりの男の子が通りかかった。

あっ、ラッキー！誰か来た！

男の子は私たちを見るとビシッと固まる。



⑥Oec, eMeA, (c (cl Z-A) -l -AJ -δ ⑥

⑥O-...O-O-...lee, (eo, lYaJJJa⑥

⑥JoA Me leeV V-l -Ca⑥

⑥uc, ucYar⑥

男の子はきよどきよどしながら去ろうとした。

ええーっ、助けてくれないの……(>\_<) せめて大人を呼んでくるくらいしてよーっ！

私は思わず去ろうとする男の子の腕をとった。ビクっとする男の子。

「助けて！せめて誰か呼んできて！！」

⑥O-...-l- (c )a (o)⑥

⑥MeA )e)l leee⑥

男の人が私の口をまた塞ぐ。そして男の子を追い払おうとする。

⑥Oec, (cc) JoM (o)rδ ⑥

そのとき、警察と思しき人たちがやってきた。

⑥Oec, Ca le M-(r el< lcc(r⑥

男の人たちは急いで逃げていった。

警官は私に大丈夫か聞いてきたので、大丈夫ですと答えた。

そしたら特に事情聴取とかもなく、警官は去っていった。

あとに残されたのは私と男の子。気まずい空気が漂う。

⑥>...Ca eC M-( lcl (c (a)M (o)δ ⑥

「なによ、助けてくれなかったくせに……」

⑥(c )a)M (o)δ ⑥

⑥lee, Vc) Je >eM,, Aa) eC Mclc-,, Ca> (Yaδ ⑥

⑥-Me...⑥

⑥(C)M M- ->, -Meδ Aa) M-...>...IYa, J-- , (oeA )eAa Mclc-⑥

⑥(oeA )eAa Mclc-δ ⑥

怪訝そうな顔のアルシエ。

⑥Ca e)J (o)δ ⑥

⑥h3)δ -Kc, M- leA-A l- <a)C e Mclc- )-eA <a)C e (oeA (c)Je⑥

⑥Y-A Ca l- -Me-Z-M)δ ⑥

⑥...h3)δ ⑥

何この子……。アルバザードの住所の仕組みを知らないってありえる？

もしかして今日初めて来た外国人とか？

Ⓞ(4a laλ- c se 7-lδ Ⓞ

Ⓞ(ee, -λ eλ -μe-λⓄ

Ⓞh>>...J-c-, 3-JJc -, h-c, -(a eλ 7-d(ce Jeleδ Ⓞ

Ⓞ7-d(ceδ 7-d(ce eλ (cδ Ⓞ

だめだ、この子じゃ話にならない。カルテを知らないアルバザード人なんているもんですか。

はあとため息をついて左手をくるっと回す。もういい、アンセのGPSで調べるから。

アンセを開いたが、通信機能がシャットダウンされている。

「あれ……？」

何度か試したが、使えない。圏外らしい。

「どういうこと？」

Ⓞλee, -(a eλ ->δ λcλ eλ μ-λ-Ⓞ

Ⓞ3>...h-c, λ-l( (μe-Ⓞ

Ⓞλ-l( (μe-δ Ⓞ

じゃあ北区じゃないの。でもこんな場所、見覚えがないなあ。

第一私が前に連れてってもらったアルバ城はこんな古くなかった。これじゃ別物じゃないの。

……あれ？

ふと気になった。

北区のアルバ城って確か建てなおしたものだって紫苑が言ってたな。

まて、よ……。「建てなおした」？じゃあ、その前があるってこと……？

まて……。じゃああれ、昔のアルバ城？

いやいや、昔のアルバ城を建てなおしたから、今があるわけで……。じゃあ、さっき見た城は何？

ん！！

腕を組んで考えた。嫌な予感がしてきた。いや、すごく、する。

Ⓞ-μe Jca, λcλ -J> l-λ se - (4a,, (aμ eλ c>, -lc >el (c-lδ Ⓞ

Ⓞ>el 7/0, lc-Jel (cJeeⓄ

ふうーっ。

私は静かに長い溜息をついた。アルシェの前髪が息で揺れる。

「……なるほどです」

今度は「はぁ」と深いため息をついた。

まさか時間まで間違えてワープするとはね。

とんだ冒険をしちゃったわよ。早く合流しないと紫苑たちが心配するわ。

はあとため息をつく私。

だがその瞬間、私の背筋は凍りついた。よく凍りつくとか言うけど、本当にそう感じるものなのね。まるで背中を氷でできたムカデがぞわぞわっと走るような感じ。

急に心臓が脈打ち、口がカラカラになって、背中が冷汗をかく。そして顔がみるみる青ざめていく。私、死んじゃうかも……。

アルシェが心配そうに私を見てくる。

私はようやく声を絞り出したが、それは蚊の鳴くような声だった。

「紫苑の書……なくしちゃった……」

それからはしばらく元の場所に戻って紫苑の書を探した。

アルシェにも手伝ってもらって探したが、ノートはどこにも落ちてなかった。

「そんな……あれがないと帰れない……。私、最後にどこで見た？ここに来たとき持ってたっけ？あああ思い出せない……」

まずい、まずいです。

「だからいつも気をつけなさいって言ってるでしょ」っていう紫苑のお説教が頭をよぎる。う、うざいよお……。

え、ちょっと待って……。もし見つからなかったら私どうなるの？

お母さんて……320年に……生まれてないじゃん。

お母さんのお父さんのドゥルガさんは……顔も知らない……。

紫苑と静は……こっちに来てない。

あ、ハインさん！……も生まれてない？

じゃあ私……家なき子？

アンセも通じないのに、どうしよう……。

セリアの中が汗でぐっちょりになる。

下には白いシャツと下着しか付けてない。シャツが透明になるくらい汗をかいてしまった。

⑥ 4-, ㄱa eㄴ ㅅㄹ - ㄴcVㄹㅅ ㄴㅅ-ㄴㄹ

⑥ h>>...ㄹ

けど、いくら探しても紫苑の書は見つからなかった。

ベンチに座る私たち。アルシエが心配そうに見てくる。これ以上迷惑かけるわけにはい  
かないよね。

⑥ Jeeㄹeㄴcㄴ, -ㄹㄴe,, ㄴㅅㄹ eㄴ ㅅ-ㅅㅅㅅ,, ㄴㅅ> ㄴㄱa ㄴㅅㄴㄴ -ㄴ ㄹ-ㄹ

⑥ ㅅ-ㅅㅅㅅ,, ㄴ-ㄴ ㄴc ㄱㅅ> ㅅㄴㄴ ㄱa ㄹㅅㄴㄴ >-ㄴ ㄴc ㄴcㄴeㄴ ㄴa ㄴeㄴ ㄴㅅ>ㄹㄹ

⑥ ㅅ-ㅅㅅㅅ e,, ㄴㅅㄹ ㅅc ㄹㅅㄴㄴㄹ

⑥ hㅅㄹㄹ ㅅㅅㄹ ㄴc ㄹ- ㅅe ㄴeㄴㄹㄹ

⑥ ㄴeㄴ, ㄴㅅㄹ ㅅc ㄹ- ㄴcㄴㄹ

⑥ ㅅㅅㄹ ㄴc ㄴe ㅅ-ㅅㅅㅅ ㅅe >eㄹ -ㄴ >ㄹ ㄴaㄴ>, ㄴc ㄴaㄴ ㄴㅅㅅ ㄹ- ㄴㅅㄴㅅ ㄴㅅ>ㄹㄹ

⑥ 4-, ㄴㅅㄹ ㄹ- ㅅㄴㄴ -ㄴa ㄴc V-ㄴaㄹㄴㅅㅅ ㅅ-ㄴㄴ

疲れた顔で私が呟くと、アルシエは怪訝そうな顔をした。

⑥ ㄴa eㄴㅅ ㄴㅅ>ㄹㄹ

⑥ ㄴㅅㄹ ㅅeㄹ ㄴㄱa ㄴ-ㄹ eㄴ< ㄴa ㄴeㄴ ㄴㅅㄹ ㄴaㄴ- c ㅅㄴㄴ

⑥ ㅅㄴㄴ> -ㄴ>ㄹㄹ

⑥ V-ㄹ ㄴa ㄴeㄴ,, ㄴㄱa ㅅeㄹ ㄴeㄴ>ㅅ >eㄴㄴc- ㅅeㄴeㄴ>ㄹ

⑥ -, 4-, -ㄴ ㄴeㄹ ㅅㄴㄴ- ㄴaㄴ

そうか、このころはアルティス教はそこまでデフォルトじゃないんだ。

⑥ >eㄴㄴc- <ㄴ-ㄴ eㄴVc ㄴ'-ㄹㄴ - ㄴa ㄴeㄴ,, ㅅeㄴ ㄴeㄴ- ㄴㅅㄹ ㅅeㄴ <ㄴ- ㄴ - <ㄴ- ㄴ ㄴㅅ>ㄹㅅ ㄴaㄴ

⑥ h--ㄴ, ㅅㅅㄹ ㄴc ㅅc ㄴaㄹ ㄹ- ㄴㅅ>,, ㄴc ㄴㄴㄴ ㄱeㄴ -ㄹ

⑥ hㅅㄹㄹ ㄴㄱa ㄴ-ㄹ ㄴㅅㄹ ㅅㄴㄴㄴ-ㄹㄹ

アルシエは脚を伸ばした。

⑥ ㄴㄴㄴ, -ㄴ ㄴ-ㄹ ㄴ-ㄴ ㄴa ㄴaㄴ,, -ㄴ >ㄴㄴ ㅅㅅ- ㄴaㄴ eㄴ <ㄴ-ㄴ-ㄹ

⑥ ㅅㅅ- eㄴ>ㄹ

⑥ 4-, >-ㄴ -ㄴ cㄴㄴ ㄴcㄴㄹ

⑥ ㄴcㄴㄹ>ㄹ

しかしアルシエは目を瞑ってふるふると首を振った。とても寂しそうに。

⑥ ㄹcㄴc-, ㄴcㄴe -ㄴㄹ

アルシエは私の手を引っ張った。

⑥ ㄴeㄴ- ㄴㅅㄹ ->ㄹ>ㄹ

⑥ ㄴc ㅅc ㄹ- ㄴㅅ>ㄹ -ㄴ <ㄴㄴ V-ㄴ ㄴeㄴㄴ-ㄴㄹ

カルテっぽいところを出ると、アルシエに導かれるまま歩いていく。

へえ、これが320年のアルバザードかあ。なんだかゴミゴミしてるなあ。道も汚いし。それに、空気が澱んでいる気がする。

しばらく歩くと倉庫みたいなところに来た。木でできた粗末な扉がある。

⑥-①a -⑥

案内されるまま中に入ると、藁が敷いてあった。

⑥①a e① >①① -①①,, -① ①-① ①a - ①c, ①c①c-⑥

えっ？私は驚いた。

まず最初に、これが彼のベッドだという点。これはベッドと呼べるものだろうか。ただ床に藁が敷いてあるだけ。

次に、これを私に貸すという点。そしたらアルシェはどこで寝るの？

⑥①ee①e, ①ee①e,, ①a e① >①① ①a-① ①e①e①①⑥

⑥①-①①①, -① >①① ①-① ①- ①-①①①-⑥

「え……牛小屋で寝る？それは……申し訳なさすぎるというか……」

そもそもこれが家？もしかして相当貧乏な子なのかなあ……。

⑥①ac>, ①①ccl ①a-① ①cl ①① ①-①①①⑥

⑥-① ①c ①①ccl,, -① e① ①a①c-,, -① e① ①①-① e >e①⑥

⑥>e①①⑥

⑥①a e① ①①-①①c①,, ①a ①-a① -① c> -① e① -①c-①⑥

⑥①①- -....⑥

まさか奴隷だったなんて……。なのに私にベッドを貸してくれるのね……。

さっきは私を見捨てたけど、本当はすごく優しい子なのかも。

私はまじまじとアルシェを見た。

年は私と同じくらいかな。もしかしたら少し彼の方が上かも。

背が小さくて、体が細い。とても弱そうだ。

顔はそんなにいいとは言えないけど、おひとよしというか、優しくそうに見える。

多分、ケンカとかが苦手なんだろうな。でも、悪い人じゃないんだ。

私はよからぬことを頭の中で考えていた。

ほら、私って紫苑と同じように異世界ファンタジーをしてみたいって願ってたじゃない？

もしそうなったらね、紫苑と違って私には白馬の王子様が来ないかなって願ってたのよ。紫苑が会ったのはレインで、女の子。じゃあ私には素敵な男の子が来ないかなって期待してた。

なんていうのかな、こう……若かりしころの静みたいなさ。

助けてもらったもんだから、急にアルシェがその人なんじゃないかってちょっと期待してしまった。

甘いよね、私。そんな都合のいいことが起こるはずがないよ。

それに、私の理想の王子様とアルシェじゃちょっと……いや、失礼だけどだいぶ違う。

もっとう、同じ細いでもこう強そうな、さ……。ぎゅっと抱きしめてくれそうな……。

顔もなんていうかこう……お父さんのな……。

私の頭にふとお兄ちゃんの顔が浮かんだ。そう、ね……。まだ勇太君のほうが理想に近いかも……。

ぷるぷると首を振る。

いかんいかん、余計なことは考えないの。

こんな妄想ばっかしてるから、紫苑の書をなくすのよ、リディア！

・バウンティハンターズ

## Lyon, France 2038

ローヌ県の県庁所在地であるリオンはフランス第二の規模を持つ大都市で、パリからは南東の方角にある。いったんボヌヌへ下り、そこからはほぼ南に下っていくとリオンに辿りつく。

大都市同士を結ぶ国道が発達しているため、比較的回り道をせずに行くことができる。

街の中心部の北東にはパーク・ドゥ・ラ・テト・ドールという大きな公園があり、平日休日を問わず池の周りには人が見られる。

午後 8 時。

すっかり暗くなった公園内を、16 歳の少女アリス＝アンシャルは一人で走っていた。いや、逃げていたといったほうが適切だろう。

アリスは息を荒げながら木々の間を飛びまわっていた。

後ろからは何者かが彼女を追ってきている。よく見るとそれは人ではない。黒くて丸くて太くて長い、顔のついた不思議な生き物だ。

“Muda!”

アリスが振り向きざまに青い靈気を放つ。

ミューダと呼ばれた黒い物体は不気味な笑い声を上げると、それを飲み込んだ。口の中は黄色く怪しく光っている。

目まで黄色い光を放っており、甚だ不気味な生き物だ。

「クカカ……よくも俺をハントしようなどと考えたものだ。小娘がいつちよ前にバウンティハンター気取りか」

“ta gueule!”

アリスは顔を赤くして怒鳴ると、再度ミューダに靈気を放つ。しかしまたもミューダに飲み込まれてしまう。

劣勢と見るや、アリスはふたたび走り出した。

“Ah! C'est la troisième catastrophe de ce genre ce mois!!”

本当に今月は最悪だ。一度目は食い逃げ犯に返討ち。二度目は呪影とかいうロボにこてんぱんにされた。

そして三度目は手足すらない化け物に追われている。

まったく賞金稼ぎなんてなるもんじゃないなとアリスは走りながら思った。

公園を2周ほどしたところで、アリスは河岸に追い込まれてしまった。

「あとがないな、小娘。覚悟しろ」

口を開くミュウダ。先ほどアリスが打った霊力をそっくりそのまま貯め込んでいたらしい。

“Ahhhh!!!!”

頭を抱えるアリス。

その瞬間、アリスの目の前に剣が降ってきた。霊気は剣に当たり、河へ跳ね返っていく。

「誰だッ!？」

ミュウダが振り向くと、そこには乱雑な髪を肩まで伸ばした青年がいた。

「アリーナ……ジグラス=アリーナだ。賞金首のミュウダだな？観念してもらおうか」

するとミュウダの声色が急激に変わった。

「アリーナだと!?冗談じゃない!」

突然焦り出したミュウダは逃げようとするが、アリーナは素早く剣を拾うと、ミュウダの目に突き刺した。

断末魔をあげてミュウダが倒れる。

「ふん、あつけないものだな。所詮は産業廃棄物か」

アリーナは剣を鞘に収める。

「それにしても Persona's end のせいで不気味な化け物がどんどん生産されやがる。まあ、おかげで俺は食えてるんだがな」

呟きながら、アリーナはアリスを見た。

”Tu vas bien?”

”O...oui. Merci”

“Hein?”

”Merci pour l'aider. あと、私は日本語を話せるので、日本語でも大丈夫ですよ”

「ん？なんだ、お前もバウハンだったのか」

「はい……」

アリーナはアリスに手を差し出し、アリスを起こした。

アリスは彼を尊敬のまなざしで見つめる。

「アリーナ……なのよね、本物の。会えて感激です。あの有名なバウンティハンターのアリーナに会えるなんて!」

「そんな大したもんじゃない。バウハンなんてヤクザな仕事だ」



「そんなことはないですよ」

アリスは土手に座った。アリーナも倣う。

「じゃあお前は どうしてバウハンに？」

「アリスです」

「ああ、アリス」

「私は、Persona's end の災害孤児なんです。孤児院で 10 年間育ちました」

「ほお」

「孤児院には私みたいな子供がまだたくさんいるの。そんな子を救うにはお金が必要なの」

「それでバウハンにか。なるほど」

アリスは水面を見つめた。

Persona's end が起こったのは 2022 年。ちょうどアリスが生まれた年だ。

かつて地球にはウォンバス・ペルソナ・ニューワイズという 3 つのグループが結界を巡って攻防を繰り返していたそう。

その勝負に勝ったのがペルソナ。ペルソナの目的は人類の滅亡。結界の力を利用して人類を滅ぼそうとした。

だがニューワイズとのパイの奪い合いやウォンバスの健闘により、人類はすべて滅亡しなかった。

それが Persona's end だ。

3 つのグループは世界各国に支部を持っていた。最後まで結界攻防戦をしていたのは日本だった。

フランスから遠く離れた極東の島国が、最後まで結界を巡って争っていた。

ペルソナの日本支部のリーダーは那羅奈國という化け物だったそう。

だが実際にペルソナを率いていたのは皇叡慈という青年。

皇はウォンバスの祁答院霊司、ニューワイズの静愁呪慈苑嬢瞬を打ち破ると、Persona's end を引き起こした。

それにより、人類のほとんどは死滅。残った人類は原因の究明を急いだ。そして分かったのがこの Persona's end のことだった。

人類を襲うミューダのような化け物は、日本から湧いてくる。

1998 年の段階では極東の小国の言葉なぞ西洋人のほとんどが見向きもしなかったが、日本から湧いてくる化け物が日本語を喋るため、たった数十年で日本語が国際語となってしまう。

日本語が理解できることが直接緊急時の死活問題に繋がるからだ。特にバウンティーターハントーズと呼ばれる賞金稼ぎにとって日本語は仕事で使う第一言語とあっていい。

アリスはリヨン生まれのフランス人だが、日本語は日本人と同じくらい流暢にできる。

「ねえ、アリーナ。あなたもお金のためにバウハンをしているの？」

しかしアリーナは苦笑して首を振った。

「さあ、どうだかな」

アリーナは立ち上がると、去っていった。

・バウンティハンターズと皇女の欠片

大物賞金首ノエル＝マスダリン。顔半分を戦火で失った半ミイラの男が、リオンに潜伏しているとの情報をアリスはキャッチした。

この賞金があれば、孤児院の子供に腹いっぱい物を食べさせることができる。

ノエルのアジトに潜入したアリスが天井の高い居間に入ったとき、桜の枝が地面に突き刺さった。

“Qui est là!?”

甲高いアリスの声が石造りの居間に響く。

影からそっと出てきたのは14歳ほどの幼い少女だった。帽子を被り、手には桜の枝を持っている。

“Korne”少女がくすくす笑う”Je suis la soeur de Noel”

“Quelle petite fille! Tu vas le courage d'affronter l'adversaire?”

アリスは皮肉げに言い放った。

するとコルンは眉をひそめ、首をゆっくり動かした。

“...Est-ce que vous aimez des fleurs?”

“Hein?”

アリスはすっとんきょうな声をあげたが、やがて頷いた。

するとコルンはくすくすと笑いだした。

それとともに彼女の周りに桜の花びらが舞っていく。何もない空間から花びらがどんどん現れる。

やがて花弁は濁流となり、コルンの周りで土星の輪のような軌跡を描きだした。

“Aimer a loisir...”

花弁は渦となり、アリスを襲う。

悲鳴を上げながらアリスは花びらを切り裂く。しかし斬っても斬っても花弁は増えるばかりだ。

これではキリがない。いや、それ以前に窒息してしまう。

アリスは霊気を上から下に放つと、衝撃で上昇気流が起こり、花びらがバァッと天に向かって舞い上がった。

その隙を狙い、アリスはコルンの懐に飛び込み、胸を強く打った。

コルンは低いうめき声を上げると、すっと失神した。

「……ふう。終わったか。ちっちゃいだけあって、防御力や体力が全然ね。けど、攻撃力はなかなかのものだった。末恐ろしいわね」

アリスは柱の近くにコルンを寝かせておいた。彼女に賞金はかかっていないので、少女ということもあり、今回はこのまま放置だ。

コルンを倒したあと、二階に繋がる階段へ進んだ。

しかしホールに出たところで「おい」と呼びかけられた。

振り向くとそこにはアリーナがいた。

「アリーナ！？ どうしてここに」

「お前こそ。俺はノエルを倒しに来たんだ」

「奇遇ね、私もよ」

「お前が……か？」

アリーナは疑うような目つきでアリスを見た。

「うん、私だってバウハンなんだから」

「しかし、お前の力ではノエルの相手はキツいだろう」

「なによ、子供扱いしないで」

アリーナは剣を抜いたままやれやれと首を振った。

「けど、そんなにノエルって強いのか？」

「最高ランクの賞金首だぜ？ 正直お前さんでは力不足だ」

「うーん、じゃあいっしょに戦わない？ 賞金は山分けしようよ」

「そういうわけにはいかない。お前はノエルを突き出す気だろ？ ノエルは生捕で捕らえることが賞金獲得の条件だよな？」

「うん。問題なくない？」

「いや、オオアリだな。俺はノエルを殺すために来ているからだ」

「殺す？」 眉をひそめる「なんでまた……」

しかしアリーナは黙って剣を伸ばしてきた。

「それはお前には関係のないことだな。アリス、交渉決裂だ。ノエルの賞金がほしいなら、まず俺を倒してもらおうか」

「アリーナ……」

「お前もバウハンなら、勝つか退くかしかないことを知っているはずだ」

アリスは頷いて細い剣を構えた。

だが相手は名うてのハンター。5秒も経たぬうちにアリスの剣は宙を舞い、アリーナは剣をアリスの額に突き付けた。

「残念だな」

「……ええ」

「帰れ、アリス」

アリスは黙ってその場を去った。

アリーナはため息をつくと、階段を上った。

上がった先の部屋の扉を開けると、そこには顔の半分が溶けた怪人がいた。

「ノエル＝マスンダリン……」

「ジグラス＝アリーナか。久し振りだな」

「……サラの仇を取りに来た」

「サラ？」

知らぬ顔で首を傾げるノエル。アリーナは眉間に皺を寄せ、剣を向けた。

「貴様が殺した俺のフィアンセのサラ＝ヴァークトッドだ。忘れたとは言わせん」

アリーナはノエルの懐に飛び込んだ。

剣を振るが、ノエルは簡単に剣で弾き返す。

「お前こそ、コルンをどうした」

「コルン？なんだそれは」

「俺の妹だ。下にいたはずだ。斬ったのか」

ノエルは体当たりでアリーナを吹き飛ばした。棚にぶつかってアリーナが呻く。

「もう一度聞く。妹をどうした」

「ならアリスに聞くんだな。もう一人のバウハンだ」

「アリス？」

「もう去ったがな。妹が心配なら、下に見に行けばいいだろう。俺を倒せたらだがな」

「生意気な口を」

ノエルの剣がアリーナの腕を切る。シャツが破れ、じわっと血が滲む。

「かのアリーナもこの程度か」

ノエルが剣を振り上げる。

とそのとき、ドアが突然開き、アリスが入ってきた。

「なっ！？」

ノエルは目を見開いたが、アリスは隙を逃さず、ノエルの腿に細剣を突き刺した。

うめき声を上げるノエル。

「ノエル＝マスンダリン！あなたをハントしにきたわ！」

「アリス！お前帰ったんじゃないのか！？」

「私は諦めが悪いのよ。ほら、アリーナ、早く捕えて」

アリーナはノエルの脚を刈ると、地面に組み伏せた。

「くっ……俺がこんなところで」

「運が悪かったな、ノエル」

アリーナは剣を取り、ノエルの喉元に突き付ける。

「アリーナ……」

アリスが心配そうな眼で見てくる。

「やっぱり殺すの……？聞いてたよ。サラさんって人のために？」

「ノエル……死ぬ前に聞かせろ。なぜサラを殺した」

ノエルはくっくと笑う。

「妹のためさ。コルンはルキテファウスヴィルテスの欠片だ」

「ルキテファウスヴィルテス？ニューワイズの神崎が残した言葉か」

アリーナは眉をひそめた。

Persona's end の後、ウォンバスに関する研究は盛んに行われた。

ニューワイズのリーダー神崎琥珀の研究も当然行われた。

神崎によると、この世には魔界という場所が存在し、そこの皇女が自分の欠片を探しているのだという。

欠片は人間として転生する。皇女はその欠片を集めていると神崎は言う。

だがそんな話はただのおとぎ話にすぎない。アリーナはそう考えていた。

「サラ＝ヴァークトッドはルキテファウスヴィルテス皇女の息のかかった人間だ。

欠片を集めるのはセイネルスという男だが、その部下の一人がサラだ。

そしてコルンは欠片だ。欠片を回収するには、その欠片を戦士として覚醒させた上で殺すことになる」

「サラが……なんたら手下？そんなバカな……」

「信じないのは勝手だがな」

「欠片は今この世界だけに存在しているわけではないようだぞ。

俺は時空を越えて世界を見る超能力がある」

「時空を越えてだと？」

「ああ。別の世界では乙守氷雨という少女と、異世界のレミレーンという名の姫が狩られたようだ。こちらの世界でもコルンが狩られる日は近いだろう」

「……俺には何がなんだか……欠片だと……」

「ちなみにその女。アリスとかいったか」

「アリス＝アンシャルよ」

「どうやらお前も欠片のようだ。残念だったな。お前も死期が近い」

「え……」

「お前、コルンをどうした」

「居間で気絶しているわ」

「そうか。それはよかった。あいつを守りきれなかったのが後悔だ」

ノエルは目を閉じた。

アリーナはしばらく迷っていたが、やがて剣を収めた。

「何をしている、お前」

「ノエル……俺はバウンティハンターだ。てめえの悪事は数知れない。牢獄にブチ込んでやる」

「お前……」

数日後。

ノエルの賞金を手に入れたアリーナは「お前の奇襲のおかげだ」と言って賞金をすべてアリスに渡した。

だがアリスはそれをまるまる孤児院に寄付すると、アリーナの旅に付いていくと言い出した。

アリーナは迷惑がったが、アリスは世話女房のように近寄っていき、なんだかんだでパーティになってしまった。

……コルンとアリスが回収されるのは、それから数年後のことである。

\*乙守氷雨とレミレーン、中学のときに BASIC で作ろうとしたファイヤーエンブレム風のゲームのキャラ。無名のゲームで、実現しなかったが、世界はウォンバスやクルルシリーズと繋がっており、ヒロインの氷雨とレミレーンは欠片。

もともと日本の高校生の男の子が主人公で、幼馴染の氷雨といっしょに異世界に飛ばされる。そこで帝国から攻撃されている王国の姫のレミレーンを助けながら帝国と戦うという、元ネタが分かりやすいゲームだった。

頓挫したのは、COM のアルゴリズムを組めなかったから。A 点から B 点へ進む最短距離の計測について、AB 間に山や木などの障害物がある場合に、どのように測ればいいのか中学の自分にはプログラムできなかつたため。あらゆる手を得点化し、最も自分に得になる最高得点の手を選ばせるというところまではどうにか自分で考えたが、実際には組めなかつた。

・時をかける少女

1997年4月18日

祁答院靈司は夢の中でコインが落ちる音を聞いた。  
コインは高い吹き抜けから落ち、玄関で転がった。  
靈司は階段を降り、コインを見た。  
上を向いていたのは――

はっと起き上がると、目の前に少女がいた。  
ぼーっとする靈司。ベッドの横に、ピンクの服を着た銀髪の少女が立っていた。

「え……だれ？」

「祁答院靈司。運命の歯車は回り始めました」

「は……？」

ゆっくり靈司が起き上がる。

「私はミヴァ＝アルカネット。時空を渡り、結界の破壊を阻止しています」

「いや、そういうことじゃなくて。なんで僕の部屋にいるのさ」

「私は時空を移動できます」

「はあ……。で、何しに来たの？」

「祁答院靈司、あなたはウォンバスのリーダーです。あなたにウォンバスを率いてペルソナとニューワイズに勝ってもらいます。そのために来ました」

「いやいや、意味不明なんだけど」

「言葉どおりです。分かりませんか？」

「いや……意味は分かるけど……いきなりで何が何やら。ウォンバスってなんだよ……」

ミヴァが口を開きかけたところで、靈司は「いい、いい」と言って手を出した。

「とにかく今日は学校だ。もうごはん食べて行かないと。華嬢と紫丹ちゃんを待たせちゃうし」

紫丹は2月にめでたく北城高校に合格し、今月から1年生になった。最近、通学は3人でしている。

「靈司……あの……」

「ウォンバスだかなんだか知らないけど、僕は勝つだの負けるだの、ぶっそうな話はごめんだよ。悪いけど帰ってくれないか」

「私が帰れば困るのはあなたです、靈司」

「……なんだって？」



「本来の歴史では、ペルソナが勝つことになっているのです。私はその未来を変えるためにやってきました。ペルソナが勝てばあなたも華嬢たちも死にます」

霊司は怪訝な顔になり、ベッドに座った。

「死ぬだって？ どういう意味だい？」

「望もうと望まぬと、あなたたちはペルソナの皇やニューワイズの静愁呪に狙われます」

「だれ、それ？」

ミヴァはいったん目を閉じる。

「ウォンバスとは何かからご説明したほうがよろしいようですが、どうしますか？」

「……君がここになぜかいる以上、君が超能力者だってことは分かる。こんな小さい泥棒がいるとも思えないし、そもそも明らかに日本人に見えないしね」

「理解していただいたようで」

「で、華嬢たちが関係してるって聞いた。ってことは、僕だけがその話を聞いてもしょうがないな」

「では、私も学校に行きましょう。放課後、軀龍も交えて話をしましょう」

「先輩も関わっているのか？」

「惣那には川越に来てもらわねばなりませんね」

「そうな？」

ミヴァは目を大きくする。

「ああ、まだ惣那には会っていないのですね。了解しました」

「……君の話は演技には聞こえないな。嘘だとしたら大したものだ。そもそも嘘をつく理由も見当たらない……」

そのとき、霊司の母親がドアをノックした。

霊司は慌てて今行くと答えた。

振り返るとミヴァはいなくなっていた。

霊司は食事をすませて家を出ると、天城家に行った。

「おはよう、霊司ちゃん。そっちが先に来るなんて珍しいわね」

「ああ……ちょっと今日放課後残れるか。多分、紫丹ちゃんも」

「？いいけど」

放課後。霊司は部活に出た。部活が終わったのは6時すぎ。

先輩や後輩が去った部室で、霊司は華嬢たちを待っていた。

ぼーっとパソコンの暗いDOSの画面を見る。薬師寺京香が潜んでいた例のパソコンだ。

「そう言えば薬師寺もウォンバスだのと言っていたっけな……」

やがて華嬢と紫丹と軀龍がやってきた。

「話って何？霊司ちゃん」

「僕じゃなく、ミヴァっていう女の子から話があるんだ。時空を超えられるんだろ？出てきてよ」

すると外からミヴァが静かに入ってきた。驚く3人。

「誰や、このこども」

紫丹「お人形みたい……」

「こんにちは。ウォンバスのみなさん。私はミヴァ＝アルカネット。

時空を越えてウォンバスの勝利を導くためにやってきました」

華嬢「ウォンバス？」

「この世界には霊力という力があります」

「ああ、霊司ちゃんが使う超能力みたいなやつね？」

ミヴァは小声で「まあ、厳密にはそれはユノで、軀龍の雷はヴィルでといった違いがあるんですが……」と呟いた。

「え？」

「いえ、なんでも。それで、霊力を蓄えた泉のような場所がこの世にはいくつもあります。

それを結界といいます。結界を破壊すれば、莫大な霊力を得ることができます。

この霊力を利用して人類を滅ぼそうとするのがペルソナという集まりです」

華嬢「人類を……？」

「ええ。実際にはペルソナが勝ってもあなたたちの健闘のおかげで滅亡にはならなかったんですが、それでも悲惨な世の中になります」

「で、お前さんはその未来を変えるためにここにやってきたっちゃうことやな」

「理解が早いですね、軀龍」

「まあ、ワイもへーきな顔で雷だしたりするからなあ。超能力ネタはふつうに受け入れられるで」

「超能力ですか。日本語には霊力だの超能力だの、不思議な言葉がありますね。訳語がなかなか一致しないです」

「あん？なんやって？」

「いえ、別に。ペルソナのほかにニューワイズという団体がいます。

これは選民思想で、良い人間だけを活かすことに霊力を使おうとする連中です」

華嬢「下の人も下の人なりに必死に生きてるっていうのにね……」

「そして結界の破壊を食い止め、彼らの企みを阻止しようとするのがウォンテッド＝バスターズ、すなわちウォンバスです」

「ポジション的には正義の味方やな。よかった、よかった」

薄く笑うミヴァ。

「あなたたちの使命はペルソナとニューワイズを倒すことです。

3 団体は世界中にあります、残る結界は日本だけです」

「ふむ、そりゃ大変な役目やな」

「ペルソナのリーダーは皇叡慈。ニューワイズは静愁呪慈苑嬢瞬。ウォンバスはあなた、祁答院霊司です」

「僕が？弱いのに」

「そう言わないでください。リーダーに必要なのは力だけではありません」

華嬢「じゃあさ、皇と静愁呪って力的にはどれくらいなの？」

「矛盾するようですが、彼らは強いです。皇はペルソナで一番強いですが、圧倒的ではありません。

しかし静愁呪は別格です。一人で一団体に匹敵する力があります」

華嬢「恐ろしいやつね」

紫丹「ところで、私たちは何をすればいいんですか。結界を守るといっても何をすればいいものか……」

「彼らの動向は私が可能な限り監視し、お伝えします。

彼らが結界を破壊する前に彼らを倒せばこちらの勝ちです」

華嬢「つまり結界で待ち伏せして彼らを倒せば OK ってことね」

「あの……倒すってまさか……殺すってことですか？」

おずおずと尋ねる紫丹。

「もちろんです」

少女ミヴァはあっさり答えた。一同は暗い面持ちになる。

「どうしました？殺さなければ殺されますよ。歴史ではそうなっていました」

「……せやかて……なあ？」

頷く 3 人。ミヴァはため息をつく。

「この時代にも警察がありますね。霊力で殺せば証拠など出てきませんし、安心していいですよ」

「そういうことやなくてな」

「辛いのは分かりますが、殺されるよりはマシかと。どうしても嫌なら、再起不能にするだけでも大丈夫です」

皆、黙って下を向いた。

「華嬢と紫丹はまだ霊力に目覚めてないようですね。私が開花させましょう」

ミヴァは華嬢の手を取ると、霊力の使い方を説明しだした。紫丹は横でじっと見ている。

霊司はため息をついて、部室を出た。軀龍が付いてくる。

2 人で屋上に出ると、深いため息をついた。

「大変なことになりましたね、先輩」

「せやな……。まあ、殺さん程度にいたぶったろ（笑）」  
「僕……こういう野蛮な話って好きじゃないんですよ」  
「ワイもや。せやかて紫丹ちゃんのことも守りたいし、しょうがないやろ」  
「……そうですね」

部室に戻ると、華嬢が興奮した顔で話しかけてきた。  
「霊司ちゃん、見て見て！」  
華嬢が手を振ると、桜の花びらが宙を舞った。  
「わ、すごいな」  
「綺麗でしょ？この花に触れると相手の霊力を奪うのよ。私の周りを回って守ってくれたりもするの。桜花陣って名付けたわ」  
「センスいいじゃん。紫丹ちゃんは？」  
「私は回復魔法を覚えました。攻撃は向いてないんだそうです」  
「うん、そのほうが似合ってるよ」

・惣那、来襲

1997年4月20日

日曜日。霊司は軀龍に呼ばれて川越に来ていた。華嬢と紫丹も一緒だ。  
本川越の改札を出て右に曲がったところで待つと、やがて軀龍が現れた。

「おお、霊司。すまん、日曜にわざわざ」

「いえ、大丈夫ですよ」

軀龍はここに来る前は京都にいたという。今は埼玉の川越住まいだそうだ。

家族で来たのではなく、マンションで一人暮らしをしているそうだ。

まだこちらの地理に慣れていないので、今日はこの辺りを散策したいのだという。それに霊司たちも付き合っほしいということだった。

霊司は川越に詳しいわけではないが、通学で毎日来ているので多少は知っている。そこで、案内役を引き受けたというわけだ。

「じゃあ、クレアモールのほうに行きますか、先輩」

川越というところしかない。あとは時の鐘側の古都街だ。

「あ、霊司ちゃん、私アニメイトに行きたいんだけど」

クレアモールがここから前方右側にあるとすれば、アニメイトは前方左側にある。スクールバスの停車位置から歩いて15分程度のところなので、霊司もたまに行っている。

「OK。とりあえずクレアモール行って、あとで時の鐘に行く前にアニメイトに寄ってくよ」

霊司はすたすたと歩き出した。

最初の信号を渡り、細い道をまっすぐ歩いてクレアモールにぶつかる。

右折してモールに入ると、さまざまな店が立ち並んでいた。

軀龍はまだ台所用品や家具をちゃんと揃えてないということだったので、途中でマルヒロに寄った。

クレアモールで2時間ほど遊んだあと、モール内でお昼を食べた。

その後、モールを出てアニメイトへ行った。

このアニメイトは正面の入口をくぐると、すぐ目の前が漫画コーナーだ。

軀龍はあまりサブカルに興味がないのか、やや退屈そうに華嬢たちを眺めていた。

「霊司ちゃん、私2階に行ってるね」

「あ、僕も行くよ」

入口から入ってまっすぐ歩いたつきあたりには階段がある。階段は最初正面に向かって数段あるが、その後右に曲がっており、さらに踊り場を挟んでまた右に折り返す。

階段にはポスターが張り巡らされており、うっかり見とれていると踏み外しそうになる。

昇った先は CD や LD の売り場で、オタク度と価格の高い商品が並んでいる。

華嬢は CD のジャケットを表裏何度もひっくり返して吟味していた。

小遣いの少ない女子高生の華嬢にとって 3000 円の CD は高価だ。

「これ……試聴とかできたらいいのになあ」

「でもまあ、毎回開けられないじゃん」

「そうね……。けど、CD っていつまで続くのかしら」

「え？何十年も続くんじゃないの？」

「そうかしら。なんか新しい技術が出ないかな。家にいながら CD さえ使わないで音楽が聴けるみたいな」

「魔法かよ。そんなのないよ。媒体がないのに曲をどうやって聞くんだよ」

「つまり音楽データだけ読み込むのよ、CD から読むんじゃないくて。スーパー電話線みたいなものを通してデータが流れてくるの。できそうじゃない？」

「言ってる意味が分からない。なんだよ、スーパー電話線って」

結局華嬢は CD を買わず、漫画の新刊を買った。

アニメイトを出ると、時の鐘へ案内した。日曜なのでそこそこ人通りがある。

「ずいぶん古い鐘やなあ」

「先輩、ここは芋のアイスが有名なんですよ。食べませんか」

「ええなあ。たべよ」

芋アイスを食べながら、ぶらぶら歩く 4 人。

「川越は大体こんな感じなんやな。ようわかったわ」

「ほかは……まあ、裁判所くらいしかないですからね」

「裁判所？」

「あっちに」 霊司は指をさす「あるみたいです。僕の人生には一生関係なさそうな場所ですけど」

アイスを食べた後で、4 人は軀龍の家へ向かった。

連雀町の交差点まで戻ると右折し、月越小学校のほうへ上っていく。

「この辺りは星野とか川女がありますね」

「なんや、学校の名前か？」

「はい。川越女子は相当レベルの高いところですよ」

「ほんなら紫丹ちゃんも受けたんか？」

紫丹を見る軀龍。霊司と華嬢は一瞬言葉に詰まる。

紫丹はにこにこしながら「私は受けられませんから」と言う。

しかし軀龍は「またまた謙遜して」と笑う。

霊司と華嬢は「ははは」と笑ったが、何気にもものすごく冷たい汗が背中を伝っていた。

もう今更本当のことは言えんというオーラが滲み出ている。

霊司「ぶ、文化祭とか行ってみようと思うんですよ」

「文化祭？川女の？」

「はい。紫苑祭って言って、英語劇なんかもやるらしいです」

「女子高の文化祭なんて楽しいんか？女の子は多そうやけど、そんなところ行ったら華嬢に怒られるんちゃう？」

「はあ？何言ってるのよ。私がなんで怒るのよ」

「へえへえ」と笑う軀龍。

華嬢の横顔を見る霊司。しかし華嬢はつんとして目を合わせない。

なんとも気まずいと思いながら霊司が前を向くと、前に少女が立っていたので、すっとよけた。

そのとき、少女が突然口を開いた。

「霊司様」

「——えっ!？」

ぎょっとして振り向く霊司。

「霊司様ですね」

少女は無表情で霊司を見てきた。

「え……だ、だれ？」

いぶかる霊司。しかし少女は薄い微笑みを浮かべると、恭しく挨拶した。

「雪之条惣那と申します」

「ああ……君が惣那か……」

霊司はミヴァの言葉を思い出した。惣那という人もウォンバスらしい。

「私のことをご存じで？」

「ああ……いや……その。君はウォンバスなんだろ？」

「はい。ただ、今日はその用件だけで来たわけではありません」

首を傾げる霊司。

「私の将来の主人にお会いしにきたのです」

「将来の？」

軀龍を見る。しかし軀龍は下を向いたまま返事をしない。

「いえ、軀龍さんではありませんわ。霊司様、あなたが私の主人なのです」

「はあ？」

「雪之条家が選んだのです。ウォンバスのリーダーのあなたを」

「ちょっとあなた、さっきから何言ってるのよ」

華嬢がしゃしゃり出てくる。

「霊司様、このおなごは？」

「いや……幼馴染だけど」

「ふうん……」

じいっと華嬢を眺める惣那。上から下まで。そしてふっと笑う。

「な、なによ、今笑ったでしょ」

「いえいえ、めっそうもない」

「しかし、いきなり主人とか言われても困ります。ねえ、先輩」

だが軀龍は不機嫌な顔で下を向いたままだ。

「まさかお前がウォンバスだとはな、惣那」

吐き捨てるように言う軀龍。

「え？ どういうことですか、先輩。ふたりは知り合いで？」

「ああ。犬猿の仲や。雪之条家と西九条家の間柄やからな」

「西九条？ 先輩の名字は雅でしょ？」

「そりゃオカンの旧姓や。ワイの元の名は西九条軀龍。雪之条家とは何百年も対立関係にある」

「それについては私のほうからご説明しますわ、霊司様」

「まあ、ここで話もなんやから、ワイの家で話そうか。今後はウォンバスの仲間やさかい、歓迎したるわ」

軀龍はさっさと歩きだす。

マンションに着くと、「狭いけど、適当に座ってや」と言って軀龍は買ってきた荷物を整理しだす。

軀龍がお茶の用意をしている間、霊司たちははテーブルの周りに座って話を始めた。

「先ほど申したとおり、わが雪之条家と軀龍さんの西九条家は対立関係にあります。

家は京都にございます。雪之条の当主は私の父です」

「じゃあ西九条の当主は先輩のお父さん？」

「いえ。西九条朋衿の父です」

「ともえ……？」

「ワイのいとこや」

お盆にお茶を乗せて軀龍がやってくる。

「まだ7つでな。むっちゃかわええんやで。ワイのこと兄ちゃんとおもとる」

「雪之条は惣那しか跡取りがおらん。しかし西九条のほうはちゃう。せやから後継者争いが必至なんやな。

ワイがおれば朋衿に迷惑がかかる。それで早々に身を引いたんや」

しかし惣那はくすつと笑う。

「逃げたのではなくて、ですか？」



「お前……その性格、相変わらずやな」

「あら、失礼」

霊司は頭を抱えた。

「まあまあ、これからはウォンバスの仲間なんだから、喧嘩はやめてくださいよ」

華嬢を見るが、目が合うと霊司を睨みつけて目をそらした。さっきからなんだか不機嫌だ。

霊司は深いため息をついた。

・×1 子蟻と厨少女

1997年4月27日

東京都千代田区市ヶ谷駅。

外濠沿いに立つこの駅を出たところには橋があり、その橋を越えると有楽町線に乗り継ぐことができる。

この駅はちょうど区境にあるため、同じ市ヶ谷駅でも中央線は千代田区にあり、地下鉄は新宿区にある。

ふたつの駅を繋ぐのは靖国通り上にある市ヶ谷橋。広い橋で、車道は2車線あり、さらに歩道も付いている。

中学一年生の少女、時任姫乃は手を後ろ手に組んでぷらぷらさせながら、市ヶ谷橋を歩いていた。

姫乃は小さなピンクのポシェットを持って、うきうきした顔で、髪を揺らせて歩いていた。

外堀の向こうから歩いてきた姫乃は、市ヶ谷駅の改札でお目当てを見つけると、嬉しそうに手を振った。

「内耳さんっ」

とことこ走っていく。

「やあ、こんにちは、姫乃ちゃん」

改札のところで立っていたのは30近くのメガネをかけた優しそうな男性だった。

「待ちましたか？」

「いいや、僕もいま来たところですよ」

「よかった」

姫乃はふふと微笑む。

時任姫乃はペルソナの終嚆矢だ。彼女は炎を操る。

小学生のとき、両親が離婚。父親に育てられる。しかし素行の悪い父親とソリが合わず、姫乃は懐かなかった。

姫乃は両親が離婚したことで学校で苛めにあった。1995年というのはまだまだ離婚が珍しい年だった。それは97年でもそう大差のないことだが。

姫乃を守ってくれたのは友人の沖名彩音。

しかしそのことで彩音も苛めにあってしまう。

そんな中、クラスの悪ガキによって彩音が不慮の死を遂げてしまう。

それにより姫乃の怒りが爆発し、姫乃は炎を操る力を開花させ、少年らを焼き尽くした。

9月の終りの金木犀の咲くころのことだった。

その後、姫乃は皇に会い、終嚙矢となる。

そこで綾小路内而と出会う。

内而は28歳のサラリーマンで、4歳になる綾音という娘がいる。

内而は大人しく成績優秀で優しい少年だった。

阿佐ヶ谷で生まれ、そこで大人になった。大学は中央線一本で法政に通い、法学部を出た。各駅の電車で20分という恐ろしく楽な4年間だった。

妻とは学生時代に出会い、卒業と同時に結婚した。その後綾音ができ、24歳で父となった。

大学から市ヶ谷にいたわけだが、この界限は日本の出版業界が最も密集している土地なので、学生時代から出版人と会う機会が多々あった。

将来は弁護士を目指していたが、あまりの難しさに正直たじろいでしまった。

結局在学中に行政書士は取ってみたものの、司法書士の試験で早々に白旗をあげてしまった。司法書士で白旗なので、司法試験など夢のまた夢だ。

先輩の勧誘もあって、卒業後は実用書の出版社に就職。健康から自然やスピリチュアルまで幅広く扱っている。

激務な業界だが、フランクで自由度の高いところが楽しくもあった。

結婚生活は幸せそのものだったが、綾音が2歳になったとき、妻が交通事故で他界。

目の前が真っ暗になった内而の元に、皇が訪れた。

内而は心優しく、またいい大人であったので、皇のいう人類滅亡など、正直言って笑い草でしかなかった。

ところが内而は皇に従わざるをえなかった。断れば娘の綾音に危害を加えられるからだ。

妻なき今、内而は綾音だけは守らなければと心に誓っていた。綾音を守るため、内而は終嚙矢になった。

実は内而は皇に勝るとも劣らぬ力を持っていた。ポテンシャルだけなら終嚙矢でナンバーワンかもしれない。

だが戦いを好まぬ性格のため、戦闘要員としては強力な駒とはいえない。

大人しく優しい内而に対し、姫乃はギャルっぽい明るさを持っている。

傷つきやすい繊細な少女ではあるものの、基本的な素行は明るい。

ただ、小学校時代のトラウマにより、心を塞いでしまっている部分があり、大切な人間の死に対して特に感覚が鈍摩してしまっている。

姫乃は自分の父親を毛嫌いしており、内而に父親と兄の影を見出していた。

内而は優しい大人の雰囲気があり、姫乃は彼に憧れていた。

内而もそれを知っているが、大人として適当に姫乃をあしらっている。

今日は市ヶ谷の結界を破壊する日だ。

配置されたのは姫乃と内而。皇に指揮されたとおりに動くことになっている。

姫乃は大した強さがないが、地元民としてその土地勘を買われた。

「結界の破壊は午後 6 時でしたね。まだ 2 時間ほどありますが」

「少しここをブラブラしようと思って。今からこの辺りを案内しますね」

「いや、僕は会社がこのあたりだから」

「え、そうなんですか？」

「うん、大学もここだったしね」

内而は橋に向かって歩き出す。

「そうなんだ。私の家もここなんです」

「へえ。こんな近くに住んでたんですね。どうりで僕らが配置されたわけです。学校もこの辺なんですか？」

「うん。牛込第三中よ」

「ああ、じゃああっちだ」内而は指をさす「駐屯地の横を上がって途中で右に曲がってまっすぐ行って……左側だったかな」

「うわあ、詳しいですね」

「詳しいというか、大日本印刷の目の前だから覚えてるんだよ」

「なるほど。そういえば印刷所って書いてある建物がありますね」

橋を渡り、信号を渡る。

「どこかでお茶します？」

「姫乃ちゃんが行きたいなら」

「はいっ、行きたいです！おなか、すきました！」

ぴしっと手をあげる姫乃。

姫乃の要望でマックに入ると、内而はコーヒー、姫乃はシェイクとアップルパイを頼んだ。

「ごちそうするよ」

「そんな」

「いいから。気にしないで」

「ありがとうございます」

姫乃はどきどきしながらシェイクを飲んだ。

ちらっと内而の顔を盗み見る。

「ん？どうかしたかい？」

「い、いえ……。あ、そういえば今日はお仕事休みなんですか？」

「日曜だからね。まあ、日曜でも出るときは出るけど」

「大変なんですね」

「まあ……ね」

深い大人の悩みを抱えた声で内而は答えた。

「そういえば、娘さんは？」

「実家に預けてるよ、今日は」

「どこなんですか？」

「阿佐ヶ谷」

しかし姫乃は首を傾げる。地理には弱いようだ。

「綾音ちゃん、元気ですか」

「おかげさまで。4歳だからもうけっこう喋るんだよね」

「へえ、かわいいだろうなあ」

「今度よければ連れてくるよ。遊んであげて」

「ぜひーっ」

マックを出ると、二人は靖国通りを歩いた。

人通りはまばらだ。車は多い。

靖国通り沿いの亀岡八幡宮に向かうと、入口に長い階段があった。

「いやあ、凄い階段だね。姫乃ちゃん、ここに来たことは？」

「ないですよー。中学生が寺見て喜ぶはずないもん」

「いやいやw あと、これは神社ね」

「同じですって」姫乃は頬を膨らませる「どうせ神様なんていないんだから」

「はは」

「しかしここが結界とはね」

「駐屯地にあったらどうしようかって思いましたよ」

「そしたら潜入する羽目になったね」

「撃ち殺されそうですよねw」

「さて、それでは皇さんの意のままに動くとしますか」

内而は印を組んで霊力を高める。

とそのとき、内而はピクッと固まり、目を細めた。

「……どうしたんですか？」

「いや……」

内而は黙ったまま下を向く。

しばらく沈黙した後、内而はにこりとほほ笑んだ。

「こんなにあっさり片付くとは思ってなかったので、驚いてしまってね」

「え？」

「結界だよ。ほら、もう壊れてしまった。思うのほか強度が弱くて驚いたな」

「内而さんが強いんですよ、きっと」

姫乃は口に手を当てて笑う。

「えーっ、じゃあお仕事もうこれで終わりなんですね。はやっ！」

「そうだね。気が抜けてしまったよ」

「ウォンバスもニューワイズも来ませんでしたしね」

「ニューワイズはまだ東京に入っていないって聞くし、ウォンバスはまだメンバーが集まっているかも怪しいからね」

「まあ、これで結界を一個取りましたね」

「そうだね。じゃあ帰ろうか。歩いて帰るのかい？途中まで送っていくよ」

「え、いいですよ。地元だし、大丈夫です」

「女の子の一人歩きは危ないから心配なんだ」

「あはは。誰か来たら火で燃やしちゃいます♪」

すると内而は苦笑した。

「そりゃそうだね。じゃあ橋のところで分かれよう」

そしてふたりは市ヶ谷橋のところまで戻った。

「今日は楽しかったです。また遊んでくださいね。お話とか、したいから」

「うん、僕も楽しかったよ」

「今度は綾音ちゃんも連れてきてくださいね」

「ああ。それじゃあ、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

姫乃は名残惜しそうに去っていった。

内而はしばらく突っ立って外堀を眺めていた。

姫乃が見えなくなると、内而はゆっくり神社に戻っていった。

長い階段を登ると、そこには霊司、華嬢、紫丹、軀龍、惣那がいた。

「おまたせ、ウォンバスの諸君」

霊司「……なぜ、戻ってきたんですか？」

「彼女……姫乃ちゃんを巻き込みたくなくてね」

「僕が聞いているのは、なぜ戻ってきたかです。あなたも去れば良かったじゃないですか」

「結界を破壊せず、おめおめとウォンバスから逃げました……そう皇君に言ったら、娘はどうなるかな」

華嬢「たったふたりしか人員を送らない皇が悪いのよ。逃げかえって人員を増やせばいいじゃない」

「そうはいかない。すぐそちらの間者から君らも話を聞くだろうが、こちらは氷室君たちが既に別所に向かっていてね。ここで君らを食い止めるのが僕の役目だ」

「そうですか……戦いは避けられませんか」

「残念ながらね。ペルソナはできるだけ多くの結界を壊す。ウォンバスはその現場を押さえてなるべく終嚙矢を殺す。

ペルソナが結界を壊しきる前に終嚙矢を殺し終えたら、そちらの勝ちというわけです。だが僕もおめおめやられる気はありません。時間を稼いだ後に帰らせてもらいますよ」

内而は両手を広げ、磁力の波を出した。突如、金属が引き寄せられる。霊司の学生服のボタンが宙に舞い上がり、バチバチと弾け飛んでいく。

ボタンは宙で踊ると、くるっと回って弾丸のようになり、霊司を襲う。

「霊司様！」

惣那が氷の壁を作り、霊司を守る。

「こら、霊司ちゃんに何すんのよ！」

華嬢が桜花陣を放つ。同時に軀龍が雷を放つ。だが、内而は磁力で空間を歪め、桜の舞と雷を克ち合わせた。すると両者は相殺して消え去った。

「しかし、多勢に無勢ですね」

内而は磁力波を出すと、霊司たちは見えない力で地面に叩き伏せられた。

「ぐっ、なんてバカ力や！」

紫丹「潰されてしまいますう！」

「悪いが、ウォンバスの諸君、君らにはしばらくこの姿勢でいてもらいますよ」

とそのとき、「内而さん！」という悲鳴が聞こえた。

振り向くとそこには姫野がいた。

「姫乃ちゃん！？どうして」

「さっき様子がヘンだったから！やっぱり結界壊してなかったんですね！どうして一人でウォンバスと戦うの！？」

「それは……」

動揺で内而の磁力が弱まる。

惣那はその隙をついて起き上がり、氷の矢を放った。

「内而さん、危ない！」

姫乃の叫びもむなしく、氷の矢は内而の後頭部を貫いた。

額から氷の矢が覗く。

「きゃあああああ！！」

姫乃の叫び声がこだまする。

「姫乃……ちゃん……逃げろ……」

「嫌です！内而さんっ！」

「綾音を……頼む。だから……逃げてくれ……早く！」

内而は姫乃を突き飛ばした。姫野は惣那を睨むと、泣き叫びながら走っていった。

「逃がしませんよ」

惣那が姫乃を追う。しかし内而が最後の力で立ちふさがり、強力な磁力を放った。

惣那の体はとてつもない圧力でひしゃげ、腰を思いきり地面に打ち付けた。あまりの苦痛で惣那は声も出ず、地面を芋虫のように這いずりまわった。

ほかのメンバーは悲惨な様子に動くこともできず、もがく惣那と倒れゆく内而を交互に見ていた。

惣那を回復した紫丹は、内而の回復も試みた。

しかし内而は既に死亡しており、回復は効かなかった。

泣き出す紫丹の肩を支える軀龍。

「泣かないでや、紫丹ちゃん。紫丹ちゃんはよう頑張ったで」

「はい……」

「内而っちゅうおっちゃんの体……運ばなな。大変な騒ぎになるで」

惣那はチラと内而を見ると、「その川に投げますか」と言った。

「惣那！」

霊司が声を荒げると、惣那はしゅんとした。

「霊司様は……お優しすぎるのです……」

「とにかく内而さんの体をどこかに運ばないと」

華嬢「大人を見つからないように運ぶなんて無理よ。大きな袋もないし、車もないもの」

「じゃあどうすれば」

「私の桜花陣で無に帰すっていうのは……どうかしら。埋葬する場所も分からないもの。散らせてあげましょうよ……」

「そうか……そうだな……」

華嬢は桜花陣で内而を吊った。

内而の体は光る桃色の花びらになって空に散っていった。



・東京タワー

東京都港区芝公園。東京タワー。

閉館後の東京タワーは暗く、ひっそりしている。

時任姫野は誰もいない展望台を一人で歩いていた。

東京タワーには結界がある。姫野は結界の破壊を命じられた。

皇たちはいまごろ別の結界に向かっている。さて、今夜ウォンバスやニューワイズの邪魔に会うのはどのチームか。

「私……かな。だって一人だもん。しょうがないよね、パートナーの内而さんが殺されちゃったんだし」

ぽっと手のひらから炎を出す。

「さて……時間だ。結界を壊そう」

霊力を結界に注ぎ込むと、東京タワーの地面に緑の星型の線が浮かび上がる。

緑の線からは光が立ち上り、結界の姿を映し出した。

「この結界はペンタライン……か」

姫野はさらなる霊力を送り込む。結界がそのたびに抵抗するかのよう光を発する。

「待ちや！」

そのとき、闇の中からウォンバスが現れた。姫野は自虐的な笑みを浮かべると、ゆっくり振り返った。

「また会えたね、ウォンバスの人たち」

「嬢ちゃん、悪いことは言わん。帰りや。そんで、二度とペルソナに加担すな。そしたら今回は見逃したる」

「ふふ、甘いんだね、お兄さん。でもね、私は帰らないよ。むしろ待ってたの。内而さんの仇を取るのをね」

姫乃は火の玉を軀龍に放つ。結界内では結界の力を利用してペルソナは通常よりも強くなる。

ウォンバスは結界の破壊を防ぐため、結界の力を流用できない。

軀龍は火の玉を喰らって吹き飛ぶ。慌てて紫丹が回復に走る。

「あはは、結界の中でペルソナと戦うのは不利みたいね」

火炎流を放つ姫乃。華嬢は桜花陣で防ごうとしたが、力に押される。

「華嬢、危ない！」

霊司が霊力の壁を補うが、炎に押されてふたりは焼かれた。

「なんだ、ウォンバスも大したことないね。どうして内而さんが負けたのか分からない」

すると惣那が氷の槍を作りながら答えた。

「彼には殺意がなかったからです。あなたを守るので精いっぱいでしたからね。純粋な力では彼の方が上でした」

「あなた……忘れないわ。あなたが内而さんを……」

姫乃はきっと惣那を睨んだ。

姫乃は案内版を持ち上げると、バリンと音を立てて土産物のショーケースを破壊した。

そして中から長い棒を取り出す。棒に念を込めると、それは炎の槍になった。

「生きたまま火葬してやる」

「ふっ、中学生になったばかりの子供の言葉とは思えませんわね」

「うるさい、おばさん！」

姫乃は槍を突き出すと、惣那の左肩を突き刺した。

「くっ」

惣那は肩を押さえて膝を曲げる。

「あら、私はまだ高校2年ですわよ」

「十分おばさんじゃない！」

槍をさらに伸ばす姫乃。しかし惣那は氷の槍で受け止める。

「月のものも来ていない子供から見れば、私もおばさんなのかしらねえ。ふふ」

「なによそれ？」

ガシガシと槍をふるう。しかし惣那はすべて槍で受け流す。

「国語の勉強くらいなさいな。生理のことです」

「部屋の片付けくらいきちんとしてるわよ、バカじゃないの！」

火の玉を投げつける姫乃。惣那は氷の壁で防ぐ。

「やれやれ、これだから子供は。それに、槍を作ったのは確実にミスですね」

惣那は槍を構えると、目にもとまらぬ速さで姫野を打った。

「わっ！」

あまりに強かに槍を打たれ、姫乃は槍を落してしまった。

「あなたの槍捌きは、ただ棒を振っているだけ。マンガを見て槍が強いとでも思ったのかしら？」

私の槍は子供のころから習わされたもの。きちんと修行を積んだ人間の手捌きです。炎を纏えば勝てるものではありません」

「なっ、なによ……」

炎を投げつける姫乃。しかし惣那は氷を投げつけて相殺する。

姫乃は地面にへたりこんで、下を向いた。

「勝負ありですね」

惣那は槍を構える。

「まちいや、惣那。殺したらアカン」

「またそんな甘いことを」

霊司「お願いだ惣那。彼女に戦意はもうない。こちらに勝てないことは実証されたから」

「……霊司様がそうおっしゃるなら」

惣那は槍を収めた。

すると姫乃はくっくと笑いだした。

「どうしました？」

「確かに私は負けたけど、結界は壊すよ。あなたたちもろともね」

「負け惜しみですか。あなたに何ができるというのです」

「ふふっ、私の力は炎だよ？時限爆弾を東京タワーにしかけたの。負けたときに道連れで  
きるようにね。結界もタワーも崩れる。一緒に死んでもらうわ」

「な、なんやて！？」

「もう時間がないよ。セットしたもの。あと1分で爆発よ。解除する方法はあるけどね」

「そ、そりゃなんや！？」

「これ」

姫乃は胸元から鍵を出す。

「時限爆弾は天井のあそこね。ほら、あれ。これで解除できる」

「はよ、よこし！」

軀龍が姫乃に近寄ると、姫乃はくすつと笑って鍵を飲み込んだ。

「なっ！」

眼を見開く軀龍。しかし一瞬止まったあと、振り返って大声で叫ぶ。

「みんな、早う遠いところへ！階段を使って外に出るんや。あとは霊力でジャンプして、  
増上寺あたりに着地するでえ！」

霊司たちはワラワラと走り出した。軀龍は姫乃の腕をぐっとなつかむ。

「なにをするの！痛い！」

「嬢ちゃんも一緒や！逃げるでえ！」

「なっ……なに言ってるの！？」

「お前さんだけ死なせてたまるか！結界なんかもうどうでもエエ！ほら、こっちや」

「でも……あなたたちは内而さんを……」

「内而のおっちゃんの償いをワイらにさせてくれ！それには嬢ちゃんがまず生き残ること  
や！」

「え……」

「ええから！」

軀龍は姫乃の手を取って走りだした。だが姫乃はがんとして動かない。

「こら、嬢ちゃ——」

軀龍が振り向くと、走ろうとしていた姫乃の腹から、氷の槍が突き出ている。

「え……」

姫乃が自分の腹を呆然と見る。後ろには惣那が立っていた。

「そ……惣那、お前、なにしとんねん……」

惣那は無表情のまま、氷の槍をかき回した。悲鳴をあげて姫乃が地面に倒れる。血が噴き出て、地面に水たまりを作る。

「鍵に決まっていますわ、軀龍さん」

惣那は踏みつけられた虫のように痙攣する姫乃の腹に拳を宛がうと、傷口を広げるように手を突っ込んだ。

声にならない悲鳴を上げる姫乃を無視し、胃の中に手を突っ込んでいく。

麻酔なしで内臓を手でかき回される激痛に姫乃は痛烈な悲鳴をあげ、惣那を振りほどこうと必死でもがいた。

「大人しくなさい。探せません」

惣那は氷の針を出すと、姫乃の四肢と首を刺し、地面に磔りつけた。標本採集の虫のようだ。

「あなたは子供です。大人を舐めてるからこうなるんですよ。鍵を飲めばもう相手は取らないだろうなんて、浅はかですね」

姫乃の叫び声だけが東京タワーにこだまする。

「ありました」

ずるっと赤い手を引き出す惣那。

「これで爆弾を解除できますね」

姫乃は虫の息で、芋虫のように小さく痙攣している。

「紫丹ちゃん！はよう助けてやっどくれ！」

軀龍の叫びに慌てて紫丹が駆け寄る。

だが姫乃の傷を見てまっさおな顔になると、静かに首を振った。

紫丹らを見もせず、惣那は霊力で浮かび上がると、天井の爆弾を解除した。

「ふう。これでよし」

すっと地面に降りてくる惣那。口を押さえて動かない華嬢と、蒼白な顔の霊司。

「さあ、警備が来る前に退散しましょう。結界は守られました」

「……」

しかし誰も返事をしない。

惣那はため息をつく、姫乃を見た。姫乃は最期の力で自分の身体に火を放った。苦しさを紛らわすために、自殺を図ったようだ。

姫乃の体は急激に燃え、あとには骨すら残らなかった。不思議なことに床には傷一つ残らなかった。まるで姫乃が最初からいなかったかのように。

内而と姫野が死んだ後日、阿佐ヶ谷の一軒家に少女が訪れた。

玄関を開けたのは4歳になる綾小路綾音。父母を失った幼い少女は丸い瞳で来訪者を見上げた。

「お姉ちゃん……だれ？」

「お姉ちゃんは……お母さんよ」

「お母さん？綾音のお母さんなの？」

「そう、望っていうの。あなたのお父さんを好きだった女の子の魂からできているのよ。あなたのお母さんになるには中学生の体は小さすぎたから、少し大人になったの」

「お姉ちゃん、パパのこと好きだったの？」

「そうよ。望は、内而さんのことが大好きだったの。あなたのパパのことがね」

「ふうん。綾音もパパが大好きだから、望お姉ちゃんのこと好きになれそうだよ」

すると望はにこりと笑って綾音の頭を撫でた。

「これからは私が守ってあげるからね、綾音」

・9月20大戦

この日、大型の台風20号が日本を襲った。  
台風は福島の方へ抜けていった。

風使いの左京怨弥は台風のエネルギーを利用して、福島の結界を破壊しにいった。  
一方、風使いのニューワイズ、ジェノンもまた同じことを考えていた。  
ジェノンはかつて魔界でクルルたちに倒され、命からがら逃げてきた魔族だ。  
クルルの妹のライファは逃げ延びてウォンバスとなったが、クルルへの復讐心から、ジェノンはニューワイズになった。  
ジェノンは上半身が人間で、下半身が竜巻の形をしている。

ペルソナは結界を得るために、麗だけを残して福島へ飛んだ。  
麗はペルソナのアジトを守るのが役割だった。  
一方、人員不足のニューワイズは全員で福島へ飛んだ。  
ウォンバスはというと、福島へは向かわなかった。  
その代わりに、手薄なペルソナのアジトを破壊することを目的とした。

埼玉県上福岡市。

今回の計画を事前にミヴァから聞いていた霊司たちは、土曜日の授業が終わるとともに、すみやかにペルソナのアジトへ向かった。

いつもは本川越駅に向かうスクールバスを利用するが、今日は上福岡駅へと向かった。  
上福岡駅に着くと、4人は東上線に乗る。  
惣那とは池袋駅で待ち合わせだ。  
電車で揺られて池袋に着くと、改札を出る。  
出たところで惣那が鞆を持って立っていた。

「霊司様」

「ごめん、待たせたね」

「いいえ」

西武池袋線の改札へ向かう5人。

「池袋で待ち合わせってことは、惣那ってこの辺に住んでるの？」

「はい、東池袋です。元は京都ですが、今は一人暮らしですから」

「そういえば学校って聞いたことなかったな」

「お茶高です。お茶の水女子。そこの菊組です」

華嬢「えっ！？すごい頭いいじゃないの！」

「のでしょうか。よくわかりませんが」

「僕、お茶女ってお茶の水にあると思ってたんだけど、池袋にあったんだ？」

「いえ、護国寺です。東池袋から歩いてもいいける距離ですわ」

有楽町線ユーザーでない霊司は首を傾げる。

切符を買う。行先は練馬。

本当は上福岡からだとう光市と小竹向原を経由したほうが早いのだが、惣那の都合上、そうはいかなかった。

黄色い電車で揺られて下ると、練馬で降りる。

駅を出て左折。千川通りを東にいき、消防署で右折。442を南下して目白通りを越える。

「練馬って初めて来たけど、ふつうの街だね」

「特に賑やかでもないし、新しくもない。ごみごみしてるわね。駅からちょっと離れるとすぐ住宅地なのね」

環七とぶつかったところで左折。そのまま直進し、徳殿公園前で地図を持っていた軀龍が止まる。

「このあたりやな」

霊司「こんなところにペルソナのアジトが……」

華嬢「ふつうの住宅街なのよねえ」

ペルソナのアジトに忍び込んだウォンバスだったが、入った瞬間、頭上から土の牙が降ってきた。

とっさに霊気の壁で防ぐ一同。

「だれや！」

闇の中から出てきたのは氷室麗だった。

「こんにちは、ウォンバスの皆さん。氷室麗と申します」

麗は土の槍を回しながら答えた。

「ペルソナのアジトへようこそ」

「なんや、お前さん一人かいな。とっとと逃げたほうがええで」

「一人？うーん、僕は一人なんて言ってませんがねえ」

「あん？どう見ても一人やろ」

「一人かもしれないし、一人でないかもしれない。どこかに隠れている可能性がないとも言い切れませんねえ」

「なにゆうとんのや。あほらし」

「ふふふ、アホらしいのかアホなのかハッキリしてほしいところですねえ」

「さっきから人の言葉尻とらえて何面白そうにしとんねん」

軀龍が雷を放つ。が、麗は槍を地面に突き立て、避雷針とした。

「なんや、こいつワイの雷を地面で吸収しよった」

「いえいえ、吸収ではありませんよ。地面に流したのです。吸いこむというのとは違いますよ。地面が帯電するわけではありませんからね」

「なんやて？」

「あなたの理屈だと、地面は触るとビリビリするくらいでないといけませんねえ。そうでなければ吸収とは呼べませんよ」

「詭弁ばっかごちゃごちゃと」

軀龍は再度雷を放つ。華嬢も併せて桜を舞わせる。

しかし麗は槍でそれらを受け流した。

「ふふ、詭弁？最強じゃないですか。好きだなあ、それ」

「無駄口ですね」

惣那が氷の矢を麗に投げるが、あっさり弾かれてしまう。

麗は不敵に微笑むと、素早く手を動かした。

惣那は一瞬何が起こったのか分からなかったが、脚に激痛を感じた。

脚を見るとそこには手裏剣が刺さっていた。

「な……」

惣那は痛さのあまり、床に倒れ込む。

「惣那、大丈夫か！？」

霊司が近寄ると、麗は霊司にくないを投げつけた。

くないは霊司の影に刺さると、急に霊司は身動きが取れなくなった。

「こ、これは……」

「影縛り、です」

「手裏剣に影縛りって、なによあんたハットリ君！？」

華嬢が桜を放つ。しかし麗は風を起こして桜を散らす。

「ええ、伊賀忍者の末裔ですから、ハットリ君ですね」

麗が華嬢の目を見つめると、華嬢は身動きが取れなくなった。

「ふふ、どうです？僕の間を見ると動けなくなりますよ。ちなみに、素晴らしいことに、呼吸もできなくなります」

華嬢は喉をかきむしって地面をのたうち回った。

「お姉ちゃん！」

紫丹がかけよる。

「お嬢さん、お姉さんを連れて退散しなさいな。ウォンバスの諸君、早くした方がいい。さもなくてこの少女は糞尿を撒き散らして死ぬことになります」



「ぐっ、しゃーない。撤退するで！」

しかしその声を惣那が防ぐ。

「ダメです。ここで氷室を倒さねば、ほかの終嚙矢の情報が何も掴めません」

「せやかて！」

「私たちの目的はアジトを襲い、終嚙矢の情報をつかむこと。結界は残り少ない。遅れを取るの命取りです」

「お前、華嬢を見捨てる気いか!？」

「華嬢さんを外に連れ出したところで術は解けませんよ。騙されてはいけません。私たちは氷室を倒すしかないのです」

「へえ、賢いお嬢さんだ」

麗は槍を回す。

「紫丹さん、華嬢さんに人工呼吸をしてあげてください。呼吸が自力でできないだけで、あとは問題ありません。呼吸を入れれば問題なく生きられます」

「えっ……で、でも私、人工呼吸のやり方なんて分かりませんよお」

「私は戦力です。私が人工呼吸をするわけにはいきません。回復はあなたの仕事です」

「で、でも……」

華嬢が惣那を見て首を振る。

「華嬢さん、ファーストキスの相手が霊司様でなくて残念ですわね。でも、私としても戦力のあなたを失うわけにはいきませんのよ」

口の端を上げながら、紫丹に目を移す惣那。

「紫丹さん、今回の人工呼吸は胸を押ししたりする必要はありません。心臓が停止しているわけではありませんから。単に口の中にふーっと息を吹き込んであげてください。それだけで十分です」

「はっ、はい！」

紫丹は華嬢の頭を持ち上げると、「ごめんね、お姉ちゃん」と言ってキスをした。

霊司は複雑な顔で、というか珍しく明らかに不機嫌な顔で麗を見た。

惣那と軀龍が飛びかかっていったが、麗にいなされて地面に倒れる。

「さて、あとはリーダーの君だけですわね、祁答院君」

麗が槍を向けたとき、霊司はふっと目を閉じて倒れた。

「ふっ、情けないリーダーですわねえ」

とそのとき、零司が覚醒し、起き上がった。髪の色が変わり、様子が変わる。

「よう、おめえが氷室か。覚悟はできてんだろな」

「なっ……なにが起こったというのです……」

たじろぐ麗。槍を突き出すが、零司は片手で槍を掴む。

ぐいっと引っ張ると、麗はたたらを踏んだ。  
零司は一步踏み込むと、麗のみぞおちに強烈な一撃をくらわせた。  
うめき声をあげて麗が倒れる。  
「ふん、たいしたことねえなあ」  
そういうと零司はまた眠りについた。

麗が目覚めると、そこはペルソナのアジトだった。  
「いたた……」  
みぞおちを押さえる麗。  
時計は12時を回っている。ずいぶん気絶していたようだ。  
「ウォンバスは……去ったのか。僕を生かしておいたのか。馬鹿な連中だ……」  
部屋を見渡すと、資料はしっかり持って行かれていた。  
「まいったな。みんなの資料を持っていかれましたか」  
苦笑する麗に、ふいに男が声をかける。  
「で、どう責任取るんだ？」  
振り向くとそこには苑がいた。  
「やあ、どうも。福島にしてはお早いお帰りで」  
「いやなに、俺は一足先に帰ってきたんでね。こんなこともあろうかとな」  
「……」  
「お前には呆れたぜ、麗。ウォンバスにみすみず資料を渡すだなんてな」  
「僕としたことがふがない。あとで皇さんには謝っておきます」  
「いやいや」  
苑はゆっくり近寄ると、麗の肩を叩いた。  
「そりゃ無理な話だろ」  
そして苑は麗の胸にナイフを突き立てた。

「な……」  
麗はゆっくり胸を見る。  
「お前、邪魔なんだよ」  
「す……皇さんの……指示ですか……」  
「馬鹿言え。お前のせいで怨弥はちっとも俺を見てくれりやしねえ。お前らもうヤツたんか？ああ？まだだろ。お前、ガキだしな。  
俺はよお、怨弥を寝取っちまおうと思ったのに、あいつ、意思が固くてよ。処女のくせに。抱かれたわけでもないのに堅いんだぜ」  
「く……」

麗は胸を押さえるが、出血が激しい。

「お前さえいなきゃ怨弥は諦めて俺のところに来る。前からお前のことは気に食わなかったんだよ。じゃあな」

苑はナイフを抜くと、倒れ込む麗を突き飛ばし、アジトを去った。

・「私はこうして受験を選びました」(1)

2018年6月27日

蒸し暑い水曜日。

私、水月リディア小学四年生は、学校から帰ると居間のソファに寝転がってテレビを見ていた。

お父さんの静は会社でお仕事。お母さんの紫苑も会社でお仕事。

家には私とレインとぽぷりしかいない。レインは私のお母さん。産んだお母さんじゃなくて、育てたお母さん。

時間はまだ4時前。早い早い。紫苑たちが帰ってくるまでまだ時間がたくさんある。

「暇だなあ」

私はテレビを消してソファにころんとした。

習い事はない。友達もいない。することがない。暇だ……。

学校はすぐそこ。うちを出て5分以内。近すぎる。

ホームルームが終われば5分でおうち。かといって帰ってからすることもない。宿題なんて授業中に終わらせちゃうし。

「ひまあ……。反対から読んだら、まひい……」

ソファでごろごろ。よく太らないな、私。

「むー」

寝ぼけた顔で起き上がると、のそのそ自分の部屋に上がっていった。

ベッドに寝転ぶ。

「パソコンでもやろうかな……」

しかし、特にやる気がおきない。

「学校みんなは遊んでるんだろうな。なんで私には友達がいないんだろ」

正確にはゼロではない。適当に話す相手はいるし、少し仲の良い子もいる。

「ゆかりは友達かな。でも、ひなと仲がいいから、私とはあまり遊んでくれないのよね」

ぼーっと寝っ転がっていたら、本当に暇になってきた。

私は海老のようになって脚をもぞもぞと動かした。

Ⓢh>>...l-l- lal Jc Je>-c> e4o,, lel lal el lcll 7o7 uccl >c-l8o

抱き枕を取って、脚の間に挟む。

Ⓢ...>>, l- 7cl eJcl -, -μ <-l le -, Je >e, Je >e, l-l- eJ el l- Jo- V-μ Ca e4o6

目を瞑ってぎゅっと力を込める。

Ⓢh>>...eJ el l- eJcl V-μ μo7 -(a e4o6

はあと息を長く吐く。

そのとき、ドアを開けてレインが入ってきた。

Ⓜcxc-δ (ʧa ɹ- -ʧaδ ㊦

「わっ、わわ！」

驚いた私はガバッと起き上がる。

「いたの？ ドアが半開きだったから分からなかったんだけど」

Ⓛoλ ɹ-ʧ -ʧaʀ lea ɪ-ʧ -ʧa ɹel ʧoλ eʀ ㊦

私が怒ると、レインは身を後ろに引いて驚く。

Ⓜhλδ ɪ-ɪ eɹ (ʧa λ- ʧo - λoλ -ʧ ɹo- eδ ㊦

レインはじっと見てくる。

しばし沈黙した後、レインは「ふうむ」と不思議そうな顔をした。

Ⓛcel, (ʧa -ʧ-ʧoʧ leelδ ㊦

Ⓜhλδ leel eʧ ʧδ ㊦

Ⓛ-ʧc, (ʧa ɹoλʧ-ʧ λ-λδ ɹ>, ʧoʧo ɪ-ɹ, ʧaλ -ʧa ㊦

私は目を見開いて、「あう……」と言葉に詰まる。

Ⓛeλ (ʧa ɹoʧoʧ cλ ㊦

Ⓛe, ʧeʧeʧeʧoʧʀ lecl, leelV -ʧaʀ ʧ'-ʧʧʀ ㊦

唾が飛ぶくらい怒鳴る私。しかしレインは眉をひそめて耳を塞ぐ。

Ⓛoecλ, oecλ, (ʧa ʧ--ɹ <ɹλ - λoλ,, ʧ--ʧ, (ʧa eλ λ- ɹcʧ ʧa e ㊦

Ⓜhλδ ㊦

ⓁeelV,, ʧeʧ λoλ,, leel ʧe eVcle,, ɹcl- ʧa eʧ ʧ-ʧ ㊦

Ⓛo...ɹo- eδ ㊦

Ⓜh-o,, (ʧa eʧ h-o ʧo ʧol ʧee), eλʧ hcθʧ, (ʧa eλ <cʧʧ ʧ-> - leλ-,, leλ- -ʧ ʧeλ ʧa c> ʧʧ-ɪ, <ɹ> ʧoʧoʧ a,, eɪ ʧ-ɹ oʧe oλ leel,, ɹo> ʧa e> ʧeλ ʧoʧ e hcθʧ ㊦

Ⓜh-c, hcθʧ eʧ ʧδ ㊦

Ⓛɹ>...ʧaλ ʧa, λoλ oʧʧ ʧcl c> ɹe,, (ʧa ʧaʧ ɹcʧ oλ ʧeʧ >cʧa ʧa,, ʧeʧ (ʧa ʧeʧ <leλ leel ʧcʧ ㊦

Ⓜhɹ>, λoλ λ-ʧ leel eʧ ɹe ɪ'eɪ λ- ʧa -ɪ ㊦

Ⓛ>δ ʧ-, eɪ λ- h-o ʧa oɪ cλ ʧa oλ leel,, (ʧa eʧ ʧoʧ - ʧee) ʧcʧe ㊦

Ⓜh--λ, ɹo> λoλ λ-ʧ h-o ʧa - (ʧa cλʧ) λoλ ʧoʧ ʧeʧe ㊦

私の頬が桜色に染まる。

Ⓛʧac>, (ʧa ʧ-λ ʧo, leclδ ㊦

Ⓛ>δ ʧ-, h-o ㊦

⑥c' ɔ>δ ⑥

⑥--...ΛɔΛ -' f ⑥

⑥fδ ΛɔΛ ('a' 10 -' ⑥

⑥cl e' eΛ) - ɔ' ɔΛ 'Λ' ('c' 'e,, ɔ' (''a Λ-l <ɔΛl ⑥

⑥-) (''a 'e'-' l'ee'δ ⑥

⑥h--...z>>, le -('...'-, c> 'e 'e', ΛɔΛ <c-Λ'-' -lh-' ('ɔ') e 'θ-θ- Λɔ-Λ,, 'ee c> ('a, ('ɔ')  
l--' -(c') >ɔ - Z->ɔ Λɔ-Λ,, 'Λ-Λ ΛɔΛ, 'ɔ>ɔ, Λ-' e'cl ⑥

⑥hɜΛ... ⑥

⑥ɔΛ (''aδ ⑥

⑥eΛ) (''a,, ɔΛ ΛɔΛ, ΛɔΛ <--' <-Λ'ΛZ c> 'e 'e', -l'c, ΛɔΛ <--' ('a 'ɔ') Z->ɔ,, c>  
(a, ΛɔΛ Λ-' e'cl 'e l-> ⑥

⑥>>, >>, ɔ>δ ⑥

⑥'-' ('ɔ 'e' ('c' 'e,, 'ee, 'ecΛ, ΛɔΛ -' <l'eΛ l'ee' 'ɔ'Λ)δ ⑥

⑥h-ɔ,, ('a eΛ 'θ'cɔ l'e'Λ ('e' e'cl,, ('a l-Λ' >cΛ ('c' 'e ⑥

⑥'-Λδ ⑥

⑥'-, 'θ'cΛ (''a 'ɔ <-l ' - l'a ' - ⑥

そう言うとレインは部屋を出ていった。

そうか、OKなのか。なんだ、ここんとこ悩んでたけど、別に病気とかじゃないんだね。  
安心した。

私はドアをしっかり閉めると、またベッドに横になった。

次の日、私は学校に行った。木曜日。いつもと変わらない。

昼休み、私は珍しくゆかりに呼ばれ、校庭で遊んだ。

ボール投げをして、上り棒とかに昇った。

上り棒を降りたときに、脚にむずがゆいものを覚え、私はぼーと突っ立っていた。

「どうしたの、リディア？」

ゆかりが近寄ってくる。

「うん……や、これも使えるなって思って」

「何が？」

「レーシュに」

「レーシュ？なにそれ。リディアってたまにヘンな言葉使うよね」

「いやあ、なんていうのかな」私は唇に指を置いた「日本語で何て言うか分からないんだ  
けど」

「なにそれ」

苦笑するゆかり。

「なにになに？何の話？」

ひなが縄跳びを持って近寄ってくる。

「ん、またこの子がヘンなこと言ってるの、レーシュとかなんとか」

「レーシュ？」

「いや、日本語訳はあるんだろうけど、知らなくてさ」

「何語なの？英語？中国語？」

「いや……まあそれはいいんだけど。ほら、ベッドとかでするじゃん。ここをさ、押すと気持ち良くなるやつ」

私が手で押さえると、ふたりはぎょっとして青ざめた。

「な、何言ってるの、リディア」

「はあ？ふたりもしてるんでしょ？トイレと同じようなものじゃん」

「しないよ！」

同時にゆかりとひなが声を荒げる。

「ええ？なんで嘘つくのよ。見られりゃ恥ずかしいけど、してる分には誰だってしてるんだから、隠してもしょうがないじゃん」

しかしふたりは怪訝な顔で私を見る。ふたりは気まずい顔でお互いを見る。

「あの……さ。リディア、そういうこと人に言わない方がいいよ。友達いなくなっちゃうよ」

「え？なんでよ……」

不安な表情になるリディア。

「なんでも。当たり前じゃん」

冷たい声でひなが言う。そしてゆかりの腕を取って教室へ戻っていった。

「え、ちょっと待ってよ……」

慌てて追いかける。

「なんだろう……私、ヘンなこと言ったの？ふたりはまだだったの？」

放課後。

たった数時間のことなのに、クラスの雰囲気は変わっていた。

友達のいない私でも分かる。なんか様子がヘンだ。私に対する目が違う。

男子は変わらない。問題は女子だ。女子が明らかに私を避けてくる。

「ゆかり、一緒に帰らない？」

近寄る私。けどゆかりは困った顔になり、ひなを見た。

ひなはこれ見よがしに腕を交差させて、バッチンのポーズをする。

「あ……私、今日塾だから。このまま塾行くから」

「そう……うん、じゃあまた明日」

私はため息をついて帰った。

まあ、明日になれば気まずさくらい消えてるでしょう。



・「私はこうして受験を選びました」(2)

ところが次の日になると、事態は悪化していた。  
女子が私を蔑むような目で見てきたのだ。  
私が話しかけても女子は知らんぷりして逃げていく。  
もともと引っ込み思案な私は追及できずにポツンと立っているだけだった。

孤立した女子というのは弱いものだ。  
女子による女子のための共同戦線を失った女子は、たちまち男子の苛めの餌食になる。  
ポツンと突っ立っている私を男子がからかって苛めてきた。  
私の髪を引っ張ったり、背中を押したりした。ゆかりたちと一緒にいれば、こんな目に  
合わないのに……。

私は大人しいので、小さい声で「やめて……」としか言えなかった。  
男子はそんなことじゃ止めないし、かえって面白がって髪を引っ張ってくる。  
私はついに泣き出してしまったが、それすら面白いのか、男子は私の背中やおなかを傘  
の先でつついてきた。  
ここまでされていたら女子が「やめなよ」と言ってくれるのだが、なぜか助けが来ない。  
女子は私のことなど見えないのか、何も起こっていないかのようにおしゃべりしている。

授業が始まって先生が来たら苛めは収まったけど、先生はボロボロになった私に気付か  
なかった。

私は授業中ずっと泣いてたけど、先生は最後まで声をかけてくれなかった。  
帰り道は当然のように一人だ。家が近くて助かった。遠かったら帰りも男子に苛められ  
る。

逃げるように家に帰ると、私はランドセルを玄関にぶん投げた。  
迎えに来ていたぼぷりが驚いて逃げていく。  
「なによ……猫まで私から逃げる気？捨ててやる、あんな猫……」  
私は居間のソファで寝転んだ。  
テーブルにはおやつが置いてあった。レインの置手紙がある。筆記体のアルカで書かれ  
ている。どうやら買い物に行ってるらしい。  
私はテーブルの上のシュガーラスクを手にとると、握りつぶして粉にした。  
「ゆかりの裏切り者……」

私はその姿勢のまま、30分以上も突っ立っていた。  
しばらくすると、レインが帰ってきた。電気もつけずに突っ立っている私を見ると、ビ  
クツとした。

「な……こんなところで何してるの、リディア」

「お母さん……」

「あ、おやつのレストラン、食べなかったの？……え、なんでぐしゃぐしゃにしちゃったの？  
だめじゃない」

「……」

じゃあ代わりに猫を捨ててほしかった？

「食べ物を粗末にしちゃいけないのよ。あなた、アルバザード人でしょう！」

「……」

アルバザード人じゃないよ。レインとは血が繋がってないじゃない。

「ねえ、聞いているの？」

聞いているよ。バイリンガルだもん。

「学校で何かあったの？」

「……」

何かあったよ。何かあったけど、言いたくないのよ。

「ねえ、黙ってたら分からないでしょ？」

「……」

親なら黙ってても私の気持ちを分かってよ。言いたくないから、魔法みたいに言い当ててよ。

「リディア……服、どうして汚れてるの？」

「……」

お、気付いたのかな？

「まさか……帰り道で男の人に襲われたりしたんじゃないよね？」

男の人？なにそれ。私、お金なんて持ってないよ。なんて的外れなんだろう。

「リディア、答えなさい。服を脱がされたり触られたり、したの？」

「……」

私は黙って首を振る。てゆうか、そんな男の人がいるのね……。

「そう……じゃあいいけど」

「……」

よくないわよ！もっと突っ込みなさいよ！

私は我慢の限界で、下を向いたまま自分の部屋に戻った。

夜になると、まず紫苑が帰ってきた。

続いて静が帰ってくる。

レインは困った顔で夕食を並べた。

食事中、私はずっと黙っていた。親は私の様子がヘンなことに気付いたみたいだ。

「なあ、リディア。お前腹でも痛いのか？珍しく黙ってるな」

私は静には弱い。レインには調子づいた態度を取れるけど、静は厳しいので無理だ。  
レインはけっして怒らない人だけど、静は怒らせると怖い。怒鳴られるし、お尻を叩かれる。

なので私は怒られない程度につっけんどんな言い方で「大丈夫……」と答えた。

「大丈夫じゃないでしょ。レインから聞いたわよ。服もボロボロだったって」

紫苑が突っ込んでくる。なんだか紫苑の言い方ってレインよりもキツイ。棘がある。なんかウザい。

「もともとボロボロな安い服を買ってくるのが悪いんじゃない。お金あるんだから、渋谷で服買ってよ」

「なんですって……？」

イラっとした顔になる紫苑。

まずい、言いすぎた。紫苑の場合、頬を引っぱたいてくる。あれは痛い。静と違って手加減がない。

「……だって」

ブスっとした顔で開き直す私。

「なあ、リディア。お前、学校で苛められてるんじゃないか？」

ズバっと言い当てる静。遠慮がないなあ。

「……そんなことないよ」

「じゃあどこで服をボロにされた？言ってみろ」

眼を覗き込む静。久々に怖い顔になってるお父さん。私はぎゅっとスカートをつまんだ。

「……校庭で転んだの」

「っていう風に今から電話でゆかりちゃんに聞いてもいいんだな？」

「やっ、やめてよ！！」

ガッと立ち上がる私。

「ほらな。やっぱ嘘だ」

「う……」

「お前は俺と紫苑の子だ。嘘が苦手だな」

「う……」

「さて、誰に相談したい？言っとくが、誰にも相談したくないはナシな。誰が一番マシか選べ。嫌ならじいちゃんたちでもいいぞ」

「おじいちゃんは……いい」

「じゃあどうする？」

私はぐるっとテーブルを見た。

「じゃあ……紫苑で」

すると紫苑は意外そうな顔で「私でいいの？」と指さした。私は黙って頷いた。

みんな出ていく。紫苑がカモミールティーを淹れてくれる。

「で、何があったのよ」

「あの……」

私が手を押しえると、紫苑は「は？」という顔になる。が、一瞬後に、眉をひそめた。

「え、それって……」

「ええ、それって……」

「ええ……」

紫苑は動揺を隠しながら頷いたけど、相当動揺しているようだ。

「ええ、それって……」

「ええ、それって……」

「ええ……」

「ええ……」

紫苑は顔を手で覆う。額に手を当てて、ぶつぶつと呟いている。

「ええ……」

「ええ……」

「ええ……」

「ええ……」

「ええ……」

「どうしよう、紫苑。私、もう学校行けないかも」

「ええ……」

「紫苑さ、学校に行って先生に私を守ってくれるように言ってよ」

「ええー？」

嫌そうな顔の紫苑。

「嫌なの？」

「わたしさ……あの学校、いい思い出ないし……。理由をなんて説明したものかも分からないし……」

ほら、モンスターペアレントって呼ばれそうだしさ……。卒業生がモンペになって帰ってくるっていうのはどうかと……

それに、そういうことなら男の静に言ってもらったほうが効果ありそうじゃない？」

「なによ、紫苑、ほんとに私のお母さん！？」

「だって……ねえ、静に頼もうよ」

私は鼻で笑った。

「もうっ、そんなこと言えると思う？女親ならともかく、男親の静がどうやって学校の先生にそんな相談するのよ。「なんで娘さんが苛められたんですか」「いえね、レーシュネタを友達にふっちゃって」って？」

「言え……ません、ね」

「もうっ！私、恥ずかしくて学校にいけないよ！」

テーブルに突っ伏す。

「そりゃアンタが悪いと思うけど……」

「うー……レインに騙された」

「どうして？」

「あの話しぶりだと、人前でしなければOK的な言い方だったのよ」

「ああ、そりゃ文化の違いね。アルバザード人にとってはトイレやお風呂と同じで、当然だけどわざわざ人に見せるものでもないっていう程度のものだから。

アルバザードだと、「あなた、してるの？」なんて聞かないわ。して当然だもん」

「当然だから聞かないの？それもヘンな感じ」

「だからほら……ええと、日本人でも「脇毛はえてるの？」とか聞かないでしょ。生えて当然で、分かりきってるし、恥ずかしいから一々尋ねないでしょ。それと同じなのよ」

「なるほど……」

「日本だとする人としらない人と隠す人の3種がいるけど、アルバザードだとする人しかいないのよ。そこがまず違いね。

仲が良いとそれについての悩みを女同士で言うこともあるそうだけど、日本じゃまずないわね。相談なんてしたら、「え、あなたするの？」っていう目でまず見られちゃうから」

「そうなの……？」

「まあ中高生になってればまだマシな結果だったかもしれないけど」

「うあああ……レインのバカァ！」

私は泣きだした。

「まあまあ」

「うー、騙された……」

「そんなつもりなかったって」

ポンポンと背中を叩く紫苑。

「はあ……私、ゆかりたちも当然してるって思ってたんだけどなあ」

「まだでしょ、そりゃ」

「え？そうなの？みんなしてるんじゃないの？」

「いや……そうじゃないと思うよ。少なくとも私はショックだったもん、それ聞いて。だってあなた、私が産んだんだもん」

「そんなに？」

「そりゃそうよ。自分の娘がって考えたら……まあ、驚くわね。大人になったってことではあるけど」

「静も驚く……よね」

「絶対内緒ね。静が聞いたらショックで寝込むわ」

「え、寝込んでじゃうの？これっていけないことなの？」

「いけなくはないけど、父親も男でしょ。男の人って女に夢を持っているところがあるのよ。

10歳の娘が現実にはこんなですって知ったら、間違いなく寝込むわ」

「そうなんだ……。じゃあ絶対隠さなきゃ」

「そういえば、紫苑はいつから？」

紫苑は頬を赤らめて、目を泳がせた。

「そういう話はするもんじゃないのよ」

「私の聞いたくせに……。レインは答えてくれたよ」

「え？レインっていつなの？」

とたんに興味津津な紫苑。

「5歳だって」

「うわぁ……。じゃあ私より早いや」

「で、紫苑はいつなの？」

「あ……。いや、でも幼稚園だったかな。ふとしたきっかけで」

「じゃあ、みんなしてんじゃない」

「うーん……。あ、でも私はそれから8歳くらいまでしなかったよ」

「どうして？」

「お母さんに見つかって怒られたの。で、すっかり忘れてて、8歳でまた偶々見つけちゃって」

「そうなんだ……。てか、怒られたんだ。レインなんか怒った私を怒ったのに」

「まあ、デリケートな問題だから、文化差は大きいよね」

「ゆかりやひなもしてると思うんだけどなあ」

「日本だとアルバザードほど寛容じゃないから、しない子はしないかもね。しても親に怒られてやめちゃうとか。

結局それを恥ずかしいと思うかどうかの文化なのよ。

例えばあなた、ふつうの日本人に比べれば生足見せるの恥ずかしいでしょ？」

「そりゃそうよ、当然じゃない」

「その当然と思う気持ちが文化の力なわけよ」

「なるほど……」

「で、私はこれから苛められるわけですが……」

カモミールティーを啜る。

「それが問題よね」

「うん」

「……うーん、じゃあ、学校辞めちゃう？」

あまりに軽い紫苑のセリフ。

「え、いいの？」

「いいよ。静が OK 出せば」

「え……それって静に原因を言うってこと？」

「そりゃね」

「それだけはヤメテ！そんなことになるくらいなら、学校行くよ！ただ、ゆかりたちとは違う中学に行くから！」

「受験するの？うん、それがいいと思うよ。そうよ、あんた受験しなさい。そうすればあと 2 年の辛抱よ」

「受験で別の中学に行くなら静に今回の理由を隠せるもんね。よし、私、受験するよ！」

立ち上がる私。しかし、またすぐに座る。

「あのさ……結局私はレーシュをしていいわけ？」

「ん……いいと思うよ」

「なんでアルバザードでは OK で日本ではダメなの？」

「ダメっていうか、恥ずかしいことになってるからよ。」

アルバザードは hc9C のほうが厳しいの。日本人はわりと平気で hc9C したことあるかどうか聞くようになったけど、レーシュについては話題にも出さないじゃない？

アルバザードは逆でね、レーシュはしてて当然だけど、hc9C はしてるかしてないかで大変な違いがあるから、聞けないわ。うっかりするともものすごい苛めや非難に繋がることがあるからね」

「そうなんだ？」

「うん。アルバザードは日本ほど恋愛にオープンじゃないし、男の子と付き合うのも難しいからね。」

その代り、レーシュが発達してるのよ。予行演習にもなるし、病気にもならないし、精神安定剤にもなるからね」

「予行演習？てゆうか男の子と付き合うのがなんでレーシュに関係してるの？」

「えと……まあ……。あ、そうか……。あんた、まだそういう感覚なのね。ただ肉体的に心地いいという意味でしかないのか……」

「みゆ？……それに、なんで精神安定剤になるの？」

「落ち付くでしょ、まず。あとさ、叶わぬ恋って多いじゃない。だから想像でカバーするわけよ」

「なんの想像？」

「つまり……好きな人と一緒にいる想像……」

紫苑は目をそらす。

「紫苑、好きな人いるの？」

「そりゃいるわよ……静」

「あ、よかった。他の人だったらどうしようかと思っちゃった」

「バカ言いなさい」

「あ、でもさ」

「ん？」

「静と会ったとき、紫苑って高校生だったんでしょ？でもレーシュを再開したのは8歳だったんでしょ？じゃあその間は誰が好きだったの？」

「好きな人なんていなかったわよ。強いていうならお父さんかな」

「じゃあ、おじいちゃんを想像したの？」

「そういう意味じゃないわよ」

「じゃあ誰？」

「そういえば……静に会う前は特定の人にはなかったわね」

「不特定の人？そこらへんのおじさん？」

「ヤダ、気持ち悪い。ええと……まあ、まったく知らない人よ」

「かっこいいの？」

「うん、まあ」

「クラスの男子でカッコいい子とか？」

「それはなかったわね。知ってる人が頭に出てきたことって静を除けばないわね。好意を持つてる子もいたけど、なぜかそういうときは出て来なかったわね」

「そうなの？」

「あんたは違うの？」

「そういえば……同じだ。お風呂とかだとクラスのカッコいい子のこと考えるけど、そのときになると全然出てこないや」

「でしょ？そんなものよ」

「なんでだろ？」

「さあ……なんか嫌なのよね。あと、その人に申し訳ないというか。あと、現実味があるとかえって想像しづらいというか……」

「ふーん。あ、でも好きなマンガに出てくるキャラは出てくるよ」



「ああ、やっぱり誰かしらを想像するってことは子供ながらにやってるわけね。そういえば私もそうだったわ。実際に好意を持ってる男の子って頭に出てこないのよね」

紫苑はそう言うと、席を立った。

「どうしたの？」

「二階に行くの。私、これでもあなたのお母さんなのよ？これ以上こんな話してたら気が狂いそう」

「そうなの？」

「昔、お父さんにこれ系の話題を振ったことがあってね、お父さん、死ぬほど気まずそうにしてたんだけど」

「へえ、いつ？」

「静と結婚する前よ。そこの遊歩道のベンチで」

「そんなことがあったんだ」

「ウチってさ……こういうのオープンに話しすぎると思うのよ、私が言うのもなんだけど」

「なんでかな？」

「多分ね……友達がいなくてだと思ってる。私もあなたも。だから親がすべての役割を担っちゃうわけよ」

「ふーん」

「……くれぐれも静にそういう話はしないよーに。静、寝込んで鬱になっちゃうから」

「ちょw そんなにショックなの？」

「静は繊細で理想家だからね。あんたにはいつまでも猫とじゃれてほしいのよ」

「なにそれ。私、そんなことしないよ」

「静の中では、娘っていうのは甘いものが好きで、おばけが怖くて、すぐ「びーびー」泣いてお父さんのところ走っていくような生き物のことをいうのよ。」

もちろん家事ができて勉強は真面目で、悪意を持たず、人の噂もせず、血を見ると卒倒し、倒れてる人がいたら献身的に助けるわけ」

「はあ？そんな女、いないよ」

「けど、少なくとも静の中の娘像はそんな感じよ。崩さないであげてね」

「えー、まんどくさ！」

「そう？私から見れば、あんた、結構静の前ではいい子演じてるから、意識してると思ってたけど？」

「そう……みえる？」

「思いきり。小さいころの私そっくりだわ」

「私、紫苑ほど腹黒くないと思うけど……」

「面白いこと言うじゃないの。じゃあその黒いお腹の中に戻してあげようか？」

微笑む紫苑。私は苦笑して首を振った。

紫苑は「はーあ」とため息をついて出ていった。

私はソファに寝転がる。

紫苑と同じ……か。それも癪だな。

私は紫苑のあげた理想の娘像に自分がいくつ当たってるか数えてみた。

「結構……合格ラインだと思うんだけどなあ……」

・岡惚れの末路

1997年10月4日

神奈川県相模原市上溝。

JR相模線の上溝駅ホーム。庵頭苑はこの1面1線の小さな駅を左京怨弥と歩いていた。

橋本で相模線に乗り換え、上溝までやってきた。橋本はそこそこ大きな駅だが、上溝になると途端に田舎になる。

相模線の不便さに辟易した怨弥は嫌悪感混じりに走りゆく電車に目をやった。

「今どきボタンを押してドアを開ける電車なんて……」

「ん？あぁ、ここは田舎だからな」

「それに、電車も少なすぎです。橋本で何十分も車内で待たされました」

白いローブのような変わった服を着た怨弥は腰をはたきながら不平を述べる。

駅を出ると、本当に何も無い。

すぐ右手に交番があり、そこを通過すると、大きい道路に出る。

そこで左を向いて信号を渡ると、道沿いに歩いていく。商店街はさびれている。

大きい街なら影に隠れて見えないような文房具屋がむしろデンと構えている。昭和の風景を思い出させる雰囲気だ。

57号は広く長く直線で、正面を見ると遠くに山々が見える。

「山がありますね」

「あぁ、丹沢山のほうだろうな」

「詳しいんですね。山登りとかするんですか？」

「いや、この辺が実家なんだよ」

「ふうん」

怨弥は大した興味もない声を出す。

苑はチラチラ怨弥を盗み見る。

麗を暗殺してからというもの、怨弥が思い通りになるかと思いきや、怨弥はますます落ち込んでしまった。

そこを慰めてかつさらおうという手段だ。

苑はここ神奈川でボクサーをしていた。

ところが靈力に目覚めた苑は、試合中に靈力を使った。靈力で強化された拳で殴れば、常人はひとたまりもない。

あまりの強さで恐怖の的となった苑は孤立し、持前の気の荒さもあって、街中でトラブルを起こしてしまう。喧嘩だ。

傷害でボクシング界を追い出された苑はチーマーになり、傷害を何度も引き起こしてきた。

そろそろ警察の厄介になるかというときに皇に会い、終嚙矢になった。

今日は田名の結界を破壊しにきた。苑が選ばれたのは、ここが地元だからだ。

「ウォンバスは来るでしょうか」

「こねえだろ。こんな田舎」

「飛鳥と皇は平塚です。あちらのほうが大型の結界なので、人員が多いようです」

「そうか。じゃあウォンバスもあっちを狙うんじゃないかねえの？」

「いえ、むしろ人員手薄なこちらのほうが……」

暗い顔になる怨弥。

「それよりさ、怨弥」

「名前と呼ばないでください」

ピシヤリと拒絶される苑。顔をしかめて、苑は頭をかく。

「氷室のことは忘れろよ。俺がウォンバスに復讐してやるからよ」

「……」

怨弥は黙って歩いた。

上溝本町で右折、すぐ上溝で左折。川を越え、大きなバイパスを越える。

「アパートとか住宅が多いですね。よくこんなところに住めるものです」

「バイパスがそこにあるし、上溝よりはいいよ。あと、住宅街っていうけど、この右手向こうは工場地帯だぜ」

「へえ」

上田名を右折してしばらく歩いていると、怨弥はぴたっと足を止める。

「ん？ どうした」

「……来てます」

「なに？」

苑は眉をひそめる。

ゆっくり振り向くと、そこには霊司たちが立っていた。

軀龍「あちゃあ、結界に連れてってもらう前に尾行バレてもうたか」

紫丹「逃げられそうですね」

「ウォンバスですね。いいえ、私は逃げません。結界までご案内しましょう」

華嬢「なんですって？」

怨弥はしずしずと歩いていく。霊司たちは怪訝な顔でついていく。

田名の結界は運のいいことに建物や大通りがなく、人気のない空き地にあった。

「戦いやすいところにありましたね。好都合です」

霊司「なぜ、逃げないんですか」

苑「まあ、そもそもお前らが逃がしてくれるとは思えないしな。つけ狙った以上は殺す気だろ？」

怨弥「それもありますが、氷室麗の仇を取るためです」

惣那「氷室？あの練馬の男性ですか。たしか霊司様が……」

華嬢「零司が倒したとは思いますが、その後は資料だけ持って、私たちアジトを出たわね」

紫丹「怪我をさせからって仇は言いすぎじゃない？お姉ちゃん、あの人ちょっと様子が変わだよ」

ざわめくウォンバス。

怨弥「どういうことですか」

霊司「いや……氷室君は確かに僕が倒したけど、気絶しただけですし、あのままアジトに寝せておきましたよ。彼は亡くなったんですか？」

「え……ええ」

「おかしいな。ウチの紫丹が最低限回復したし、僕らが帰るときも息をしていました。死因はなんですか」

「腹部の刺し傷です。ナイフで」

「ナイフ？そんなもん僕らが持ってってませんよ」

怨弥は困惑した顔で霊司を見る。

「嘘を言っているのね……？」

「いえいえ、嘘じゃないです。てゆうか、もともとあなたたちと戦うつもりでここに来てるんだから、今更嘘ついてあなたを宥める意味はないでしょう」

「……じゃあ……どうして……」

紫丹「私たちが帰った後に別の誰かに殺されたんじゃ……」

「え……」

戸惑う怨弥。

苑は旗色が悪いと思ったか、話を遮るように紫丹に殴りかかった。

「ごちゃごちゃうるせえんだよ」

紫丹は右頬を殴られ、悲鳴をあげて地面に倒れた。

「俺は女だろうと容赦はしねえ」

「おのれ、紫丹ちゃんに何しとるんや！」

軀龍が殴りかかるが、所詮喧嘩が強いだけの軀龍では、ボクサーにはかなわない。あっさり拳をかわされ、ボディに一撃をくらう。

ボクサーの背筋というのは凄まじいものがある。パンチ力は尋常でなく、訓練のない軀龍は一瞬で地面に倒された。

「先輩！」

叫ぶ霊司のもとに駆け寄ると、フックで霊司の横っ面を殴る。霊司は首が折れ曲がるのではないかというほど顎を揺らされ、地面に崩れた。

華嬢「ひっ！」

「あとは女二人か」

惣那「調子に乗らないことですね」

惣那は氷の矢を放つが、尋常でない運動神経で苑は矢を殴り壊した。拳に霊力を込めているので、当たった矢はバラバラに砕け散った。

「そんな……」

その隙に苑は惣那の懐に入り、アッパーを放った。惣那の歯が折れ、歯と歯の間に挟んでいた舌先を己で噛みちぎってしまう。

惣那は血を吐いて思わず手で口を覆った。灼熱のような痛みで思わず涙が出る。立ちあがろうとしたが、脳が揺らされ、地面に倒れ込んでしまった。

「さて、最後はお前だな。おさげの女」

「くっ、女だからって舐めないで！」

華嬢が必死に抵抗しようとしたとき、苑の腹から土の槍が突き出した。

「な……？」

ゆっくり振り返ると、そこには冷たい顔の怨弥が立っていた。

「な……んで」

「あなたが……麗を殺したんでしょう？」

「……俺……は」

「9月20日にいなかったのはあなただけ。ニューワイズはあのとき全員参加していた。あなたしかいない」

「俺が……悪いんじゃない……」

苑は腹を押さえてよろよろ歩く。

「お前に……振り向いて……もらいたくて……」

「やっぱりあなたが……」

「お前が……ほしかったんだ……怨弥」

血の付いた手で怨弥に助けを求める苑。

「来ないで！麗を返して！」

怨弥は槍を苑の顔に放った。額を突きぬかれ、苑は仰向けに倒れた。

傷口から血が濁流のように流れ、苑は痙攣した。そして一分もせぬうちに絶命した。

華嬢は茫然と怨弥を見ていた。

「あ……わ……あなた……なんで……。仲間じゃないの？」

「彼は裏切り者です。そして彼を殺した私も」

怨弥は自分の心臓に槍を当てる。

「ちょ！待って！」

しかし華嬢の叫びもむなしく、怨弥は自らの心臓を刺した。

「紫丹！」

華嬢が紫丹に駆け寄る。

「紫丹！起きて！あの人を助けてあげて！」

しかし紫丹は気絶しており、目覚めない。

やがて紫丹たちが意識を取り戻したときは、既に怨弥は死んでいた。

惣那は血の泡を吹きながら、冷静に事後処理をしていた。

そんな惣那を紫丹が回復する。歯を拾って回復すると、惣那は綺麗な顔に戻った。

霊司「左京さんて言うらしいね、この人。左京さんの体、どうしよう……」

華嬢「あと、この男も」

とそのとき、怨弥の体が光り、光の中から少女が現れた。

「君は？」

「抱風と言います。忍者の末裔である怨弥の式神です」

「忍者が式神？」

華嬢「変わった組み合わせね」

「私は怨弥の意識が作りだした、いわば怨弥の別の人格なのです」

「零司みたいなものかしら」

「私の中には怨弥の4つの性格がそれぞれ人格化して存在しています。朧、月影、蛍、華抄」

「綺麗な名前ね」

「いま4人で会議をしました。私たちはあなたたちウォンバスと交戦の意思はありません」

「私たちも終嚆矢でないあなたと戦う気はないわ」

「私たちは怨弥の体を故郷である甲賀の里に返しにいきます」

そう言うと、抱風は怨弥の体を持ち上げた。そして苑に火を放ち、空へと去っていった。

・機械仕掛けの裁判官

1997年12月24日

この日、ウォンバスはペルソナのアジトを襲撃することにした。

残る終焉矢は皇、飛鳥、そして謎の少年甲癸だけだ。

皇と甲癸はこの日、結界を壊しに出ている。

アジトには飛鳥がいるとの情報を受けた。

そこでウォンバスはふたたび練馬のアジトを襲撃した。

ところが、アジトを襲撃したウォンバスが見たのは、もぬけの殻のアジトだった。

「しまった。ワイら、騙されたわ」

惣那「霞堂裏妹は結界を破壊しにいったようですね、単身で」

霊司「ミヴァ、聞こえているなら出てきてくれ。飛鳥ちゃんの居場所を教えてくれ」

ところがミヴァは答えない。

「ミヴァ？」

首を傾げる霊司。おかしい……いつもなら返事が来るのに。

「ミヴァさんなら、今は答えられませんよ」

突然の声に驚くウォンバス。入口を振り返ると、そこには一人の少女が立っていた。

「誰ですか」

氷の矢を構え、威嚇する惣那。

「いやですね、そんな怖いものはしまってください」

少女はにこにこする。髪に大きなリボンをつけたスカートの少女だ。顔からして、どう見ても外人だ。

「私はライラ。海外のウォンバスのメンバーです。日本勢のお手伝いに来ました」

華嬢「海外？どこから来たの？」

「アイルランドですが、こないだまでは中国にいました。来花って名前で」

「ふうん……。それで、そのライラさんは私たちの仲間になると？」

「ええ」

紫丹「それで、ミヴァさんが返事できないというのは？」

「ニューワイズのジェノンがミヴァさんの存在に気づき、邪魔立てをしたからです」

「ジェノン？」

「中級か下級な魔物でして。クルルお姉ちゃんの時代だったら雑魚扱いだったんですが、魔力の上がったこの時代では、あんなのでも脅威なんです」

華嬢「魔力？なんのこと？クルルって誰？」



「いやあ、まあ鬼神の話は置いといて。ほら、噂をすれば影って言うじゃないですか。

お姉ちゃんが来たらストーリーの流れを無視して速効エンディングに持ってくに決まっていますからね」

あははと笑うライラ。華嬢は訳が分からないという顔で首をひねる。

「まあ、デウス・エクス・マキナはこの時代にはいらないということですよ」

軀龍「なんやよう分からんけど、とにかくミヴァは今出れないんやな。で、飛鳥はどこにおるんや」

「さっきアジトを出ていくのが見えました。練馬の結界を破壊しにいくようですね、ついに」

「そうか。なら、ワイらも結界に向かうで」

1時間前。

ペルソナのアジトで飛鳥と皇は暖を取っていた。甲癸は既に出発している。

「飛鳥。俺たちは出発するが、お前はここにいるんだ」

「私は配属ナシなの？」

「奥の部屋的那羅奈國を守らねばならん」

「気付かないんじゃないの、ウォンバスも。壁の向こうだし」

「不安は取り除いておきたい。那羅奈國が死ねばペルソナは預言者を失う。最高の間者を失うようなものだ」

「ふう、じーさんの発想ね」

じーさんは飛鳥の口癖だ。誰であろうと純粋な子どもの心を失った人間を、飛鳥は「じーさん」「ばーさん」と呼ぶ。

皇は苦笑すると、飛鳥の頭を撫でた。

「ただし、ウォンバスが全員で来そうなら逃げろ」

「どうして？」

「恐らくウォンバスは俺らを止める部隊とここを攻める部隊に分かれる。それくらいならお前でも倒せる」

「うん」

「だが、全員でここに来るなら、逃げて練馬の結界に向かえ」

「どうして？」

「お前に死んでほしくないからだ」

「……」

飛鳥は無表情な顔で皇を見返した。

「死……。死ぬのはじーさんとばーさんだけよ。裁判官は心ない人間を裁くから」

「飛鳥……」

皇が出てしばらくした後、那羅奈國からウォンバスがこちらに向かっているとの情報が入った。

飛鳥は鞆を手につくと、ゆっくりアジトを出た。

練馬の結界に向かうと、そこには予想外の人物が立っていた。

「姉さん……」

槍戯だった。槍戯は海王の槍を手を持ち、じっと立っていた。

「練馬の結界を取りに来たんやな、飛鳥。それはウチも同じやで。妹やからって手加減はせえへん。大人しくウチに帰りいや」

飛鳥は氷の槍を出すと、ずっと構える。

「ばーさんは裁判官に裁かれるのよ」

「ウチがばーさんやて？ケツの青いじゃりんこの癖に」

「私のおしりは白いけど」

「ほんま、かわいげのない妹やなあ」

槍戯は衝撃波を放つ。が、飛鳥は簡単にこれを弾く。

「つよになったな、飛鳥。けど今のはほんの小手調べや。海王の槍を持つウチにかなうはずがないで」

「そうね。姉さんは槍を継承した。私はいない子……」

槍戯の眉が動く。

「アンタ……まさかそれを気にしてウチから出ていったんか……？」

しかし飛鳥は何も答えず、槍を構える。

「神崎に惚れたのね、姉さん。恋心に信念を抜かれて浮かれてるあなたは、ばーさんよ」

飛びかかる飛鳥。3,4合と槍を交える。

「恋の何がアカンねん。子供には分からのやろ！」

槍戯は柄で飛鳥の肩を叩く。うづくまる飛鳥。

槍戯は額に槍を突き付ける。

「どや？観念して家に帰り」

「……いや」

「なんでやねん！」

「臥……。殺したの、姉さんでしょ……」

「……」

「熱海で……。あいつの故郷で……。姉さんを許せない」

飛鳥は立ち上がると、槍戯に槍を放つ。腕をかすめ、破れた和服から血が滲む。

「飛鳥……アンタ……その子のこと、好きだったん？」

「え……？」

意外な表情で固まる飛鳥。ほぼ初めて飛鳥が表情を見せた瞬間だ。

しかしそのとき、ウォンバスが到着した。

「ちっ、ウォンバスか。アカン、アカン。ウチはまだ死ぬわけにはいかん。飛鳥、お前もはよ逃げ！」

槍戯はさっと飛び上って逃げていった。

軀龍「まちいや、姉さん！……ちっ、逃げられたわ」

一方、飛鳥はぼーっとして動かない。すかさず惣那やライラが飛鳥の退路を断つ。

惣那「観念なさい、霞堂裏飛鳥」

飛鳥「ん？あぁ……じーさんとばーさんね。こんばんは」

華嬢「はぁ？ばーさんって誰のこと？」

「あんたたち全員よ」

「ふーむ、500年以上生きてる私は確かにばーさんかもしれませんが」

ライラは笑うが、霊司たちは冗談か何かだと思ってスルーした。

「やれやれ、時任さんといい、ペルソナには子供が多すぎですね。女子高生の私がおばさんだったりばーさんだったり。世も末ですねえ」

惣那は槍を構えると、飛鳥の胸を目がけてはなつた。

だが飛鳥は華麗に槍を捌くと、素早く氷の針を無数に出し、惣那を撃った。

惣那を退けた飛鳥は電気の鞭を作ると、恐ろしく小回りの利く動きで霊司たちの足元をすくった。

霊司たちは縄跳びに引っ掛かった子供のように地面に転んだ。しかし、帯電している鞭なので、タダでは済まなかった。

体中に電気が流れ、みな痺れて動けなくなった。

「皇が私に死ぬなと言ったわ。まぁ、私はばーさんじゃないから、死なないけど」

飛鳥は結界に霊力を加える。結界が歪んで壊れる。

「姉さんは破壊直前まで結界にダメージを与えていたようね。助かったわ」

「く……結界を壊されるなんて……このライファ——じゃなくてライラちゃん、一生の不覚よ」

やっとのことで立ち上がるライラ。

「動けたのね、ばーさん」

「このくらい、クルルさんのシバキに比べたらなんてこともないですっ！」

氷の矢を放つライラ。飛鳥は氷の槍を振り回し、矢を落とす。

「くっ、ここで負けるわけにはいかないわ。飛鳥さん、あなたを倒せば終わりなんだから！」

「えっ……？」飛鳥は思わず手を止める「それ、どういう意味？」

「どういうって……皇は幕張に向かっているんでしょう？」

飛鳥は黙って頷く。

「静愁呪も幕張よ。皇との一騎打ちじゃ、静愁呪に分があるわ」

「え……でも姉さんは練馬だったし、皇には甲癸がいるわ……」

「甲癸？皇は今日は一人よ」

「え……そんな」

飛鳥の動きが止まる。動揺を隠せない飛鳥。

「え……なんで、私……。この気持ち……。なんで」

自分の心の動きに戸惑う飛鳥。

その隙を逃さず、ライラは氷の矢を放った。

「あっ！」

手が遅れた飛鳥は矢をよけられなかった。矢は飛鳥の腹部を貫くと、鮮血が伝う。

「わ……。たし」

飛鳥がゆっくりと倒れる。

仰向きに倒れた飛鳥の元に、ライラが歩み寄る。

「私も……。ばーさん……。だったみたい」

「なぜそう思うんです？」

「……。あんたの話を聞いて、皇のことが……。頭に浮かんだの。心配っていう気持ちだと思う。姉さんと同じ……。私も……」

「あなた……。心を持ったんですね」

「こころ……。？私は機械のような子供と呼ばれてきたわ。心なんて……」

「いいえ、それは心ですよ、飛鳥さん」

飛鳥は天に向けてゆっくり手を伸ばす。

「臥を……。失った……。皇が……。優しくしてくれた……」

「うん……。あなた、どうして終嚙矢に？」

「姉さんが……。槍を継承したわ。私は……。お父さんたちにとって、いらぬ子……。だから、姉さんの邪魔にならないように……」

「……あなたは……なんだろう……感情のない子なんかじゃなかったんじゃないのかな。  
それを表に出すのが苦手だっただけなんじゃないかって思う」

「そう……かな」

飛鳥はライラの答えを聞く前に、静かに眼を閉じた。

・ 剣士の娘

1997年12月31日

大晦日。華嬢は霊司の家の玄関に来ていた。

ジャンパーを着た霊司が家から出てくる。

「どうもー、あけましておめでとう、霊司ちゃん」

「ああ、華嬢、紫丹ちゃんも」

これから近所の神社で初詣だ。特に宗教的な意識はなく、ただ皆がやっている慣習にすぎないが。

中央公園を目の前にして右側に進むと、小さな神社がある。大晦日には毎年火を焚いていて、おみくじなんかもやっている。

歩きだす3人。

「今日は軀龍たちは来ないのね」

「先輩もさすがにこの時間はね。惣那も池袋だかどっかに住んでるらしいし」

「あのふたり、どっちも一人暮らしなんて、偉いよね」

「ああ、僕にはできないな」

神社で初詣を終えた後、3人は特にすることもなく家路に着いた。

「外、寒いな。華嬢、お前ホッカイロとかつけてる？」

「うん、ぼっけに入れてるよ」

「僕もしてくりゃよかった」

「まあ、もう家だしさ」

「お前、この後すぐ寝るの？」

「おそばも食べたし、ちょっと本を読んだら寝るわ」

「またファンタジー小説？」

「んー、ちょっと違うかな。文学の本」

「珍しいな。いつもファンタジーなのに」

「うーん」華嬢は手を後ろに組んで歩く「なんてゆうか、ウォンバスになってファンタジーが日常になったら、本が急に荒唐無稽に見えちゃって」

「ああ、それは分かる。本来こんな生活ありえないからな」

霊司と別れた華嬢は一度家に帰ったが、突然暖かいおしるこが飲みたくなり、外へ出た。

「自販機で買お……」

以前ならこんな時間に外には出なかったが、霊力に目覚めてからは出るようになった。

変質者が来てもあっさり撃退できるからだ。

が、家を出て目の前の公園を横切ったとき、突然「おい」と呼ばれて驚いた。  
「え、私？」と振り向くと、そこには頭に鉢巻を巻いた黄色い袴姿の少女がいた。

「天城華嬢だな」

「え、ええ……あなた……ペルソナ？」

身構える華嬢。

「は？なんだそりゃ」

しかし少女は首を傾げる。ずいぶん気性の荒そうな物言いだ。

「オレは六宝仙忌祇陣。天城家の長女と戦うために生まれてきた。いざ尋常に勝負」

すらっと腰の鞘から刀を抜く忌祇陣。

「えっ！？ちょ……それ何よ！？まさか、本物じゃないでしょうね」

「本物に決まってるだろ」

「ちょっと待って。なんで私を襲うのよ。ペルソナでもないのに。私が何をしたっていうの？」

「うん？お前、本当に何も知らないのか？」

忌祇陣は刀を下げて、話した。

「お前の親父は剣をやっていたろ」

「剣？ああ、そういえば剣道をやってるわね」

「剣道じゃねえ。お前の親父は剣士だ。オレの親父と同じでな。」

オレの親父は昔お前の親父と戦って負けた。だから親父は娘のオレを剣士に育てた。天城家に勝つためにな」

「ええっ！？なにその迷惑な設定！」

「そういうわけだ。覚悟しろ」

「覚悟もなにも、なんで戦わなきゃいけないのよ。てゆうか霊力のことがなければ私、ただの女子高生よ。おかしいじゃん、そんな果たし合い！」

すると忌祇陣は「ふむ……」と考え込んだ。

「むろん、お前も剣を取れ。家に帰って取ってくるんだな。それで対等だ」

「そういうことじゃなくてさ。私、剣道なんてやったことないよ」

「なんだと……そんなバカな……」

「お父さんは私に剣道なんて押しつけなかったからね」

忌祇陣はがっくりと肩を落としてうなだれた。

「まあ……そう落ち込まないでよ」

「落ち込んでなどない。お前に剣の心得がなくても構わん。お前を切れば、六宝仙家の勝ちだ」

「ちょ……あんた、どういう頭してんのよ！」

「覚悟！」

忌祇陣は抜き身の刀で華嬢を切りつけた。

その切り方はためらいがなかった。華嬢はとっさに後ろに跳んだ。白刃が宙を切る。

「あぶなっ！アンタ、今本当に切ろうとしたでしょ！頭おかしいんじゃない！？」

「オレはこのときのために今まで訓練してきたんだ」

「じゃあ私も本気で行くわよ。残念ね、私がただの女子高生じゃなくて」

「なんだと……？」

「確かに剣道はできないけどね、こんなことができるのよ。桜花陣！」

華嬢の声に反応し、季節はずれの桜の花びらが忌祇陣を包む。

「な……なんだこれは！」

忌祇陣は花びらを切るが、やがて花びらに包まれ、呼吸ができなくなってしまう。

しばらく呼吸を止めさせ、忌祇陣を気絶させると、華嬢は桜花陣を消した。

忌祇陣が気絶から蘇ると、そこには華嬢が靈力を構えて立っていた。

「お前……その力、なんなんだ」

「靈力って言ってね、まあいわゆる超能力者なの、私。剣だけじゃ勝てないよ」

「そうか……オレの負けか。親父に合わせる顔がないな」

忌祇陣は剣を取ると、切腹しようとする。

「ちょっと待ちなさい！」

慌てて止める華嬢。

「なんだ？せめて潔く死なせろ」

「アンタのそのぶっ飛んだ頭、どういう構造してんのか分からないけど、その剣の腕前は認めるわ」

「ふん……」

「だからね、アンタ、私たちの味方になりなさい。ウォンバスに入りなさい」

「ウォンバス……そういえばさっきも言っていたな。なんだそれは」

華嬢は事情を説明した。

「ふむ……なるほど、いいだろう。負けた以上はこの命、お前に預けよう」



・手鞠少女

1998年1月2日

京都府京都市南区西九条

ペルソナとニューワイズは結界を奪いあいながら関東へ進行してきたが、そのすべてを壊してきたわけではない。

互いに出し抜かれられないように気を付けていたため、A地の結界をすべて破壊する前にB地へ移動することがままあったからだ。

皇はいったん東京から引き上げ、京都へ戻った。

そこで正月休みを利用してウォンバスも京都へ戻ることにした。

京都には西九条家がある。雪之条家とは長い対立関係にある。正月はここに厄介になることになっている。

「へえ、ここが先輩の実家ですか」

「実家ちゃうな。いとこん家や」

華嬢「大きいお屋敷ねえ」

「では、私はここまでで」

立ち去ろうとする惣那。

「え、惣那、どこ行くのさ」

「霊司さま、雪之条家の人間がこの敷地に入れるはずがありません。私は宿を取ります。皇たちとの交戦でお会いしましょう」

「いや、惣那。実は当主がお前さんと話がしたいってことらしいんや」

「……なんですって？」

怪訝な顔になる惣那。

「畏ちゃうで。それにもし畏やっても、霊司たちはお前さんを100%守るに決まっとるから、安心しいや」

「いえ……そういうことではなく、なぜ私が西九条の当主と……」

「そりゃ当主と話せば分かるやろ。ワイは知らん。さ、はいり」

惣那は怪訝な顔のまま、敷居をまたいだ。

霊司たちは軀龍に案内されるまま、奥へと進んだ。

客間でしばらく待たされたあと、やってきたのは威厳溢れる中年男性だった。

「遠路はるばるようこそ、軀龍のご学友がた。私が西九条家の当主です」

「うわ、凄い気迫ね。ビリビリ伝わってくる……」

華嬢は小声で霊司に耳打ちした。

「……そして、雪之条の姫君も。よくいらっした」

「お目にかかれて光栄です、西九条殿」

惣那は静かに礼をした。

「実はそなたをここに呼んだのは、西九条と雪之条両家の停戦の橋渡しを願いたいためですな」

「停戦……ですか」

「ええ。私は抗争を娘の代にまで継承したくない。その意思をお父上に伝えていただければと思ひましてな」

「……そ……それは……」

珍しく困惑する惣那。

「祁答院君、すまないが、私と姫君のふたりにしてくれないでしょうか」

「あ、はい。失礼しました」

霊司たちは外へ出る。

紫丹「あの……惣那さんをひとりにして、大丈夫なんですか」

「安心しいや。当主のあの顔は本気やったで」

忌祇陣「それにしても、娘のためか。オレにはそんな優しい親父はいなかったな」

ライラ「私に至っては自分のお父さんの顔すら知らないですねえ」

そんな雑談をしながら渡り廊下を歩いていると、軀龍の目の前に手鞠が転がってきた。

軀龍がそれを拾うと、前から着物姿の少女がとてとて走ってきた。

「お兄ちゃん！」

「おおっ、朋衿！ひさしぶりやな！」

おかつば頭の美少女朋衿は猫のように軀龍にすり寄った。

「会いたかったよ……来てくれたのね」

「おおきゅうなったな。ますますかわいくなったでえ」

「えへ、そうかな。お兄ちゃん、お正月はウチにいるんでしょう？また遊んでくれる？」

「ああ、もちろんや」

華嬢「うわあ、かわいい子ねえ。大人しそうだし、頭もよさそう」

しかし朋衿は人見知りなのか、少しおびえた顔で軀龍の影に隠れる。

「お兄ちゃん……この人たちは……」

「ああ、ワイのダチや」

「こ……この外人のお姉ちゃんも？」

ライラ「はい、そうですよー。よろしくね、朋衿ちゃん」

「あ……は、はい。よろしくお願ひします」

朋衿は丁寧に頭を下げた。

小一時間ほどすると、惣那が話を終えて出てきた。

朋衿は庭で手鞠を付いている。

「話はどうやった？」

「……恐らく、停戦の方向で話が進むと思います」

霊司「じゃあ僕は君の結婚候補でなくなるようだね」

「いえ、霊司様。そういうわけではありません」

「え、なんで？」

すると惣那は珍しく感情的な顔になり、「それを私に言わせるのですか」と言ってそっぽを向いてしまった。

華嬢「ちょっと、霊司ちゃん、こっち来て。話があるわ」

「え、何……？」

華嬢に引っ張られていく霊司。

「あちゃー、修羅場やなあ」

しかし惣那は笑わない。

紫丹は朋衿に交じって遊んでいる。

ライラと忌祇陣はあてがわれた部屋に籠っている。旅の疲れか、仮眠を取るらしい。

縁側に座っているのは軀龍と惣那。気まずい沈黙が訪れる。

「寒いな」

「1月ですから」

「……せやな。で、お前、霊司のこと本気で？」

すると惣那は無言で頷いた。

「ふうむ、お前さんにも心があるんやなあ」

「当たり前です……。私がこう振舞っているのはすべて雪之条のため」

「中身は案外ふつうの女子高生なんやなあ」

「……からかわないでください。それで、停戦なんですが——」

とそのとき、朋衿の悲鳴が聞こえた。

とっさに振り向くと、そこには袴を着た男が立っていた。

朋衿は怯えて男を見上げている。その反応からして西九条の人間ではない。

「お前……何者や」

「静愁呪慈苑嬢瞬……」

「お前が……ニューワイズの。なにしにきたんや」

「この少女を貰いにな」

「なんやて!？」

軀龍はガバッと立ち上がると、静愁呪に歩み寄った。

しかし静愁呪はその瞬間、電気の衝撃波を放ち、軀龍と惣那をいとも簡単に床に抑えつけた。

「さあ、朋衿。俺と一緒に来るんだ」

「い……いや……！」

怯える朋衿の前に紫丹が立ちはだかる。

「邪魔をするな」

静愁呪は風を起こすと、紫丹を吹き飛ばした。頭を打って紫丹が気絶する。

「さあ、来るんだ」

朋衿をつかむ静愁呪。

「ま……まてや、コラ……！」

軀龍は床で手を伸ばす。

しかし静愁呪は朋絵を担ぐと瞬間移動でその場を去ってしまった。

・羅刹嬢

1998年1月8日

埼玉県川越市古市場

祁答院霊司は久々に学校の屋上に来ていた。

フェンスに寄りかかり、首をひねって下を見る。

「薬師寺と戦ったのがもうずいぶん昔に感じられるなあ」

そういえばこの屋上で赤ん坊を拾ったのだ。

あの子は結局どうなったのだろう。

霊司は何の気なしに赤ん坊のいたほうを見つめる。

するとそこに見知らぬ少女が立っていた。

「……お兄ちゃん？」

「え……？」

「あなた、祁答院霊司でしょう？」

「君は……」

少女はスカートにカーディガンを着ている。

髪はおかっぱで、顔はかなり可愛い。

「私、夕霞罪羅刹嬢。あなたに助けられた赤ん坊。魁羅の娘よ」

「えっ、君がああ赤ん坊！？」

霊司は驚いた。羅刹嬢はくすくすと笑う。

「驚いたみたいね」

「ああ、だって急にこんな大人に……」

「大人っていってもお兄ちゃんと同じくらいだけどね、体は」

霊司はうーんと唸った。そして気まずい顔で目をそらす。

「どうしたの？」

「いや……君のおむつを取り替えたんだなと思うと、顔が赤く……」

羅刹嬢は「えっ？」と言って、顔を赤らめた。

「そ……そうだったね。ふふ……はずかしいよ」

「で、君はどうしてここに？」

お礼を言いに来た鶴なのかなと霊司は思った。

「あのね、私もウォンバスと一緒に戦おうと思って」

「君も？」

「うん。ニューワイズの静愁呪に復讐したいの」

「どういうこと？」

「魁羅を目覚めさせ、私を覚醒させたのは、静愁呪だったの。静愁呪は私をニューワイズとして勧誘するために覚醒させたの」

「そうなんだ……」

「静愁呪のせいであんなことになったのよ。許せないわ」

「そりゃ静愁呪もとんだ誤算だったなあ」

「ところで羅刹嬢、君は強いのかい？」

「私は尋常じゃない魔力を持ってるわ」

「魔力？」

「魔方陣を作ることができるの。消費魔力は大きいし、時間もかかるけど、威力は絶大よ」

「ふむ、ゲームでよくあるやつね。わかる、わかる。イメージはできたよ。じゃあ君は後列に置こう」

・3 姉妹の最期

1998年1月10日

異空間

ライラことライフア＝ディアは、異空間を泳いでいた。

ここはミヴァが時空を渡るときに使う空間だ。

ミヴァはペルソナやニューワイズの情報を霊司たちに伝えるのが仕事だが、最近ジェノンの妨害にあい、仕事できていない。

ライラはミヴァを救うために、異空間に来た。

異空間では下半身が竜巻の形をした魔族のジェノンがミヴァを押さえつけていた。

「ジェノン！そこまでよ！」

「……なんだ貴様は」

「ウォンバスのライラよ。……あるいは、クルルさんの妹、ユテールの3姉妹の末妹といったほうがわかりやすいかしら？」

ジェノンはすーっと飛んでくる。

「クルルの妹か。なぜウォンバスに荷担している？」

「クルルさんは魔界に行き、ハデスに殺された。クルルさんはヴィーカを殺すために魔界にいった。でも部下のハデスに殺されてしまった」

「ふがない姉だな」

「ヴィーカを殺そうと思ったのはそもそも、ヴィーカが私たちのお父さんを殺して連れ去ったから。

命じたのは皇女ルキテファウスヴィルテス。目的は自分の欠片を集めること」

「有名な話だ」

「ペルソナが勝って世界が減びなければ覚醒しない欠片もある。たとえばそれはアリス＝アンシャルという欠片。

だから私の目的は、ウォンバスを勝利に導き、皇女に欠片を集めさせないこと」

ジェノンはケタケタと笑い出す。

「ご苦労なことだ、ユテールの娘。じゃあ俺の目的を教えてやろう。

俺の目的は500年前に俺に魔界で恥をかかせたクルルへの復讐だ。

魔界でやられて命からがら逃げた俺は、ディア家への復讐のため、ニューワイズとなった。

そう、欠片を皇女に集めさせるためにな」

ジェノンは竜巻を起こすと、ライラに投げつける。

ライラは炎を出すと、竜巻を四散させた。

「炎はメサイアさんから習ったわ」

続けてジェノンは風の刃を放つ。

ライラは食らってしまい、腕が切れたが、すぐに回復をした。

「この魔法はモンナ姉さまのもの」

「ガキがこしゃくなまねを！」

再び竜巻を投げつけるジェノン。

しかしライラは竜巻の目の中に飛び込み、中から氷の筈を放った。

筈はジェノンを 360 度の方向から貫き、ジェノンは悲鳴をあげた。

「くっ……またディア家にやられるというのか」

「今度は殺してあげる、ジェノン」

「馬鹿め……俺がひとりで死ぬと思うなよ」

「え……？」

突如ジェノンは自分の周りに帯電した竜巻を放った。

竜巻はライラとジェノンを巻き込むと、激しく立ち上った。

「ク……クルルさん……ごめんなさい、私はここまでのようです。

ミヴァさん、いまのうちに逃げて！」

ライラは最期の力でジェノンに氷の筈を放った。

「でも、これでようやく会えるね。

500 年も待ったよ……お姉ちゃん」



・幕張

1998年2月4日

千葉県千葉市美浜区。午後8時

静愁呪は京葉線の海浜幕張駅を出て、一人で歩いていた。

駅前の大通りを進むと、幕張メッセに着く。

地面からメッセを見上げる静愁呪。首が痛くなるくらいあげないと、上が見えない。どこまで大きいビルなのだろう。

静愁呪は靈力を脚に込め、タンッと跳び上がった。

驚異的な跳躍力で静愁呪はビルの上に乗った。

そして静愁呪がゆっくり後ろを振り向くと、そこには皇がいた。

「静愁呪……」

「一騎打ちのようだな、皇」

「年末は幕張駅の結界を見事お前にとられた。だが、今度はそうはいかない」

「ふ、こないだのように逃がしはしないぞ」

皇は炎を放つが、静愁呪はあっさりと氷の剣でなぎ払う。

「この幕張さえ取れば、形勢はペルソナに傾くのだ」

皇は懐から剣を取り出すと、剣に炎を帯びさせる。

斬撃を浴びせるものの、静愁呪は氷の剣でそれをかわす。

「静愁呪。お前、剣術の心得もあつたのか」

「まあ、小学生のころにな。だが高校の体育のときは散々だった」

にやつく静愁呪。

「馬鹿にして……！」

皇はギンと剣をぶつける。

「熱くなるな、皇。剣筋が乱れてるぞ」

静愁呪は皇の腹を切る。

「ぐわっ！」

皇は腹を押さえてうずくまる。すかさず静愁呪は皇の喉元に剣を突きつける。

「まあ、魔法剣の使い方は剣道とは違うということだ」

「……くっ！」

「終わりだな、皇」

静愁呪は皇の喉を剣で貫いた。鮮血が刃を伝い、こぼれ落ちる。

「あ……が……」

皇は喉を押さえて地面に倒れ込む。だが、その手は静愁呪の袖を掴んでいた。

「ものすごい執念だな」

「おま……えも……道連れ……」

「なんだって？」

とそのとき、皇の体が燃え上がり、静愁呪まで巻き込んで炎上した。

静愁呪は慌てて氷の盾を使ったが、かなりダメージを食らってしまった。

「くそっ……さすがはペルソナのリーダーか。俺としたことが油断した」

静愁呪はよろよろと歩き出した。

「まあいい。これで皇は倒した。あとは甲斐だが、こちらには朋衿がいる」

ビルを降りようとしたとき、静愁呪は人影に気づいた。

「……お前」

そこにいたのは羅刹嬢だった。

「静愁呪ね」

「羅刹嬢……きさま、覚醒させてやった恩を忘れ、ウォンバスに着いたそうだな。なぜだ？」

「なぜですって！？」羅刹嬢が声を荒げる「お前のせいで母さんがどれだけ苦勞したことか！この悪魔！」

右手にナイフを構え、羅刹嬢は静愁呪にぶつかる。ドンと音がして、静愁呪の胸にナイフが突き刺さる。

「な……俺が……このくらいで死ぬと……思うな」

「わかってるわ！」

羅刹嬢は左右の腕を天地にそれぞれ向ける。そして呪文を唱えると、足下に魔方陣が浮かび上がる。

「そ……れは」

「魔方陣よ、静愁呪を焼き払え！」

すると魔方陣が緑に光り、炎を帯びた雷が静愁呪に落ちる。静愁呪は悲鳴を上げるまもなく絶命した。

羅刹嬢は静愁呪の死を確認すると、静かにビルを去った。

・最後の結界

一方、同じ時間、霊司たちは近所の病院にいた。

産婦人科の併設された病院で、小さいところだ。実は霊司や華嬢が産まれた病院でもある。家から歩いて10分程度のところにある。

なぜここに来ているのかというと、霊司の街にも結界がひとつあり、ちょうどその場所には現在この病院が建っているからだ。

ペルソナやニューウィズがこの結界を狙わなかったのは、ウォンバスのリーダーの霊司の家があったからだ。彼らは明らかにここを難所として避けていた。

軀龍「なあ、羅刹嬢は大丈夫か」

「ええ、先輩。彼女ならきっと静愁呪を倒してくれると思いますよ」

華嬢「私たちは自分の敵に専念しましょう」

夜の病院の鍵を壊し、セキュリティシステムを軀龍の雷で狂わせると、霊司たちは中に入った。

中にいたのは一人の少年だった。少年は結界を壊しているところだった。

「やあ、ウォンバスの諸君」

紫丹「こ……子供？」

「ボクは甲癸。最後の終嚙矢さ」

甲癸はワンピースのデニムを着ていた。

年はまだ5歳程度だろう。どう見てもただの少年だ。

惣那「しかし皇もひどいものです。こんな子供に結界を任せて囷にするなんて」

「ボクは囷じゃないよ、雪之条。なにせ終嚙矢で最強なのはボクだからね」

惣那「世迷い言を。私は子供だからとて手加減はしませんよ」

惣那は氷の矢を放つ。

が、甲癸は片手でそれを吸収する。

「な……。そうか、ライラさんと同じ、氷の使い手のようですね。私の出番はなさそうです」

惣那は一步下がる。

「ならワイがやったるでえ！」

軀龍が雷を放つが、これも片手で吸収してしまう。

「なん……やと。こいつ、ダメージ軽減どころか、吸収してへんか？」

華嬢「じゃあ私に任せて。桜花陣！」

だが甲癸はくすくす笑いながら桜の花びらを吸収した。掃除機で吸われるように、花卉が手のひらに吸われていく。

「うそっ、どうなってるの!？」

「ふふふ、ボクは大した力はないけどね。あらゆる属性を吸収できるのさ。これがボクが最強と呼ばれる所以だね」

惣那「子供のくせに、ずいぶんと難しい言葉を知っていますね」

「そりゃそうさ。ボクは那羅奈國とずっと一緒にいたんだから。那羅奈國はもう何百年も生きてるんだぜ？」

紫丹「え?じゃああなたは子供じゃないじゃないですか」

「そうさ。子供なのは見た目だけ。頭脳は大人さ」

靈司「どこのコナンだか知らないけど、靈力が効かないならこうするまでだ!」

椅子を持ち上げると、甲癸に投げつける。

しかし甲癸は手をかざすと、風の防壁で身を守る。

靈司「だめかっ……」

「当然、ボクにも靈力はあるからね。生半可な物理攻撃じゃこの防壁に塞がれておしまい。それと、こんな面白い使い方もある」

甲癸が手をかざすと、先ほど吸収された技が靈司たちを襲った。

悲鳴をあげて靈司たちが倒れる。

駆龍「くっ……靈力は効かない。生半可な物理攻撃もダメ。せやったら、どないせーちゅうんや」

甲癸「死ねばいいと思うよ」

笑いながら甲癸が手を上げる。

とそのとき、シュパッと音がして、甲癸の右手が空を飛んだ。

「はあ？」

見上げると、肘から上が綺麗になくなっていった。

「え……？」

前方を見ると、そこには忌祇陣が立っていた。

忌祇陣は正式にはウォンバスではないため、甲癸は情報を得ていなかった。

先ほど忌祇陣を見たときに知らないやつだとは思ったものの、まさか本物の刀を装備した侍だとは思っていなかった。

思うはずもない。現代に帯剣した人間、しかも帯剣した少女など、到底考えられない。

何百年も生きている甲癸ですら、そんなこと予想だにしえなかった。

「ようは、おまえには殴ったり切ったりしかきかねえってことだろう？」

「ちょ……まっ！」

忌祇陣は素早い踏み込みで地面を蹴ると、次の瞬間、甲癸の額を割った。

「ぎゃあああ！」

頭を割られた甲癸がのたうち回る。

「さて、年貢の納め時だな」

「いやだ……死にたくない……ボクは死にたくないから終嚙矢になった。死を避けるため那羅奈國に仕え、卑弥呼を復活させようとした。ボクの願いは死の回避なんだ……」

空気を掴むように手を伸ばす甲癸の喉元を、忌祇陣は貫いた。

甲癸はしばらく痙攣したあと、絶命した。

「死にたくない少年、か。皮肉なもんだな。オレなんかに殺されて」

忌祇陣はチンと刀を納めた。

・操り人形

甲癸を倒したウォンバスは撤収しようとしたが、軀龍は奥に人の気配がすることに気づき、歩みを止めた。

「しっ、誰かおる。なあ、バレとるで。出てきいや」

すると部屋の奥から現れたのは朋衿だった。

「と、朋衿！？どうしてこないな所に！？」

「お兄ちゃん……」

朋衿は着物姿でとてとて歩み寄る。

「おう、よしよし。もう大丈夫やからな。こわかったろ、静愁呪にさらわれて」

「お兄ちゃん、ここどこ？」

「埼玉や」

「さいまたってどこ？」

「京都よりずーっと東にいったところや。けど大丈夫やで。兄ちゃんここに住んどるし、今日は泊まってけばええ」

「おうち、いつ帰れるの？」

「明日や。明日帰ろ。大丈夫、新幹線つこたら、たった2時間で帰れるさかい。ビューンって感じや！」

「ほんと？」

「ああ。朋衿、新幹線初めてやろ？わくわくするでえ。遊園地よりおもしろいで」

「ともえ、遊園地、行ったことないの……」

軀龍は「ああ……」と頭を掻く。

「そしたら明日はディズニーランドいこか？帰るのは明後日でもええし」

「ほんと？」

嬉しそうな朋衿。

「でも、ともえ、いけないよ」

「当主なら大丈夫や。ワイから電話いれたるさかい」

「ううん、そうじゃなくて。だって、ともえ、ここでお兄ちゃんたちを殺さないといけな  
いんだもん」

「……なんやって？」

くすくすと笑う朋衿。目から光が失われていく。

朋衿の周りに魔方陣が起こり、朋衿の背後に淡い黄緑の炎が起こる。

炎は顔を持っており、こちらをケタケタ笑いながら見てくる。

「な、なんやお前」

「俺はジョーカー。ゲノムの魔法をかけられた朋衿を操ってる者さ」

「操ってるやと!？」

「ああ、このガキは俺の者だ。静愁呪は朋衿の潜在能力に気づいてニューワイズにしようとしたが、朋衿はいやがった。

そこでこうして俺を取り憑かせ、言うことを聞くようにさせたのさ。

くくく、甲癸を倒してくれて助かったぜ。これで最後の結界は俺たちのものだ」

「おんどれ、朋衿から離れえや！」

飛びかかる軀龍。しかしジョーカーはずっと消えてしまう。

代わりに朋衿が口を開く。朋衿の声で喋るジョーカー。

「俺を殺すなら、朋衿をやるしかないぜ」

「朋衿……おい、ジョーカー、朋衿の可愛い口つこて、ロクでもないこと喋らすなや！」

しかし軀龍は威勢よく怒鳴ったものの、対処に困った。

惣那はずっと出て、朋衿に氷の矢を構える。

「ちょ、惣那お前なにしてんねん！」

「いとこだから殺せず、血縁でもない終嘴矢なら殺せるというわけですか？」

「それは……」

「敵である以上、排除は絶対です」

惣那は矢を放った。しかし矢は朋衿に当たって綺麗に弾けた。

「なっ!？うそでしょう!今直撃したじゃないですか!」

たじろぐ惣那。顔が青い。

「氷に耐性があるのかも。任せて!」

華嬢が桜花陣を放つが、これも朋衿に当たって消滅する。

忌祇陣「こいつもさっきの甲癸と同じタイプみてえだな。これならどうだ!」

朋衿のか細い首と薄い胸をめがけて剣を振る。

が、袈裟懸けに斬った忌祇陣の剣はまるでコンクリートの壁を斬りつけたかのように跳ね返され、逆に自分の手首を痛めてしまった。

「いってえ!なんだ、このガキ!？いったいどうなってやがる!」

ジョーカーが朋衿の声で笑う。

「くくく、朋衿にはすべての攻撃を無力化する絶対の防御がある。甲癸なんてもんじゃない。このガキが最強だぜ。なんせ倒せない。

そして魔力も強い。こんな感じにな!」

朋衿が手をかざすと、帯電した雹が室内に降り注ぐ。逃げ場を失ったウォンバスは次々と倒れていく。

地面に倒れた軀龍に近づくと、朋衿はゆっくり手を上げた。

「終わりだ、軀龍」

しかしそのとき、朋衿は頭を押さえて苦しみだした。

「ぐう……邪魔をするな、朋衿」

朋衿の瞳に光が戻る。

「やめて！お兄ちゃんを傷つけないで！」

また朋衿の瞳から光が消える。

「うるさい、朋衿！お前は黙って支配されている！」

「朋衿……お前……。そうか、お前も中で戦っとるんやな」

朋衿が軀龍の手を握りしめる。

「お兄ちゃん、お願い、私を殺して！私の意識が出ているときは絶対の防御が途切れるの」

「せやかて、お前……ワイにそんなことができるわけが……」

「お願い！そうしないと人がみんな死んじゃうんでしょ！？ともえ、そんなの嫌だよ！

それに、このままだと雪之条に殺される。どうせ死ぬならお兄ちゃんに殺してほしい。一番苦しくないやりかたでしてほしいの！」

「朋衿……。わかった」

軀龍は朋衿を抱きしめる。

「朋衿……すまん……遊園地……つれてってやれんで、すまん……」

忌祇陣から刀を借りると、刀に帯電させる。

「お兄ちゃん、いいの。どうせ雪之条との和平なんて無理な話だったんだから。もともと、ともえは惣那に殺されてたと思う」

軀龍は泣きながら朋衿の首に刀をあてがった。

「一瞬で楽にしたるからな……」

「ねえ、お兄ちゃん。ともえが死んだら、すぐに死体をぎゅってしてくれる？」

「ああ、約束するで」

「うん、お兄ちゃん、だいすきだよ」

刀を振り上げると、軀龍は目を閉じずに、しっかり光景を焼き付けるように、朋衿の首を刎ねた。

朋衿の首は胴から離れ、ころころと地面を転がった。斬った首からは鮮血が噴水のように飛び上がった。

朋衿は本当に軀龍を信頼して恐怖を感じていなかったのだろう。ふつうは恐怖で血管が収縮するので、ここまで激しく噴出はしないものだ。

だが、朋衿の首を見ると、彼女は涙を流していた。やはり怖かったのだろう。軀龍は胸を突き刺されたような感覚を覚えた。

朋衿が死んだことでゲノムの魔法が解け、ジョーカーが悲鳴を上げて燃え上がった。



軀龍はそれを見届けると、約束通り、朋衿の体を抱きしめた。

鮮血が間欠泉のようにぴゅっと噴き上がるが、軀龍は気にすることもなく、朋衿の体を抱きしめた。血染めになりながら、軀龍は声をあげて泣いた。

・ペルソナ敗北

朋衿の死体を抱いて泣く軀龍の元に、灰色い顔をした人型の化け物がやってきた。

軀龍は目もくれず、朋衿に泣きすがっている。

霊司「……誰ですか、あなたは」

男は黒いローブをきている。

「那羅奈國……」

「そうか、あなたがですか」

「まさか甲癸が負けるとはな。先ほど連絡があり、皇が戦死したとの旨を聞いた」

惣那が一瞬眉をひそめる。皇は元々惣那の許嫁だった。ペルソナになり、死亡届が出て、表向きには死に、結婚の話はなくなったのだ。

「皇が？ 静愁呪はどうなったんですか？」

「静愁呪はお前たちの刺客の羅刹嬢によって殺された」

「そうか、羅刹のやつ、うまくやったみたいだ」

那羅奈國は重いため息をつく。

「これで終嚙矢は壊滅。残念だが、ペルソナの負けだ」

「で、あなたはこれからどうすると？」

「私にもう戦意はない」

「そうですか。なら僕たちもこれ以上何かしようということはありません。ペルソナの敗北宣言は受理しました」

「私はこれから長い眠りにつく。もう目覚めることもないだろう」

すると那羅奈國は、異空間へと消えていった。

・ニューワイズの最期

霊司たちが病院から立ち去った後、霞堂裏槍戯はペルソナのアジトにいた。

アジトの電気を消し、呆然と窓の外を眺める。

さきほど、静愁呪の戦死を聞かされた。

槍戯はもぬけの殻になり、最後の仕事のために、この場所を訪れた。

やがて、異空間から那羅奈國が練馬に現れ、アジトに帰ってきた。

槍戯は息を潜め、海王の槍で部屋の奥に行こうとする那羅奈國を後ろから刺した。

「ぎゃっ！な、なんだ貴様……」

「那羅奈國、お前が最後のペルソナや！ウチと一緒に死んでもらうで！ひとり勝ちはさせへん！」

「くそう……霞堂裏め……」

那羅奈國は極大の針を作ると、槍戯の腹を刺した。

槍戯は「ぐっ」とうめくと、地面に倒れた。

同様に那羅奈國も倒れ、絶命する。

「ふう……いたた、痛いなあ。痛いなんてもんやない……静愁呪の赤ん坊産むより痛いんやろか、これ」

仰向けになって笑う槍戯。

「いたいなあ……けど……心のほうがもっと……いたいなあ……。静愁呪、もうすぐそっち行くからな。

あんた、最初に二条城で会ったときから、ずっと好きな子がおったよな。

死人には勝てんってようゆうやろ。けどこれで晴れてウチも死人や。これで条件は対等やでえ。あはは……」

そうして槍戯はゆっくり目を閉じた。

・ウォンバスの結末

1998 年春

霊司たちは北城高校の 4F の渡り廊下にいる。

フェンス越しに下を見る。スクールバスの発着所には生徒が列を作っている。

華嬢「終わったわねえ」

霊司「ああ」

紫丹「ペルソナとニューワイズは壊滅。ミヴァさんも別の時空へと旅立った」

霊司「こちらの死者はライラさんだけ。残念だけど、かなり優秀な結果だと思う」

軀龍「せやな。ただ、朋衿の件は本当に悔やまれるわ」

霊司「そうですね……」

「あんな。西九条家に、最近幽霊が出るねんて」

「え？」

「着物を着た少女の幽霊なんやて」

「……そうですか」

「たぶん、まだ手鞠で遊んどるんやと思う」

「……そうですね」

霊司「羅刹嬢も静愁呪を倒した後、目的は果たしたと言ってお母さんの元へ帰ってしまったし、なんだか寂しくなりましたね」

「せやなあ」

華嬢「忌祇陣も私に勝つために修行するとか何とかで、実家に帰ってしまったし」

紫丹「そういえば、忌祇陣さんの実家ってどこなんですか？」

「秩父とか言ってたかな。山の中らしいよ」

「へえ……」

華嬢「そういえば、惣那はほんとに霊司ちゃんと結婚する気なのかしら」

霊司「さあ、言い寄られてはいるけど」

紫丹「あの……私思うんですけど」

皆の目が紫丹に集まる。

が、紫丹はしばらく沈黙する。

華嬢「何よ？」

「うん……お姉ちゃんね、霊司さんにちゃんと好きだって言ったほうがいいと思うよ」

「なっ、なっ……！」

「せやせや、意地はってたらホンマ惣那に持ってかれてまうで」

「そんな……！私は別に……」

フェンスに手を当てる華嬢。

「ちょっと時間空けようか」

軀龍は紫丹を連れて立ち去る。

「まったく、なんなの、あいつら」

悪態をつく華嬢に靈司は苦笑する。

「あのさ……華嬢。僕ら幼なじみだったからあまり意識してなかったけど、僕はお前のこと……好きだよ」

「なっ！？」

華嬢は顔を赤くする。

「お前は……どう思ってるの？やっぱりただの幼なじみ？」

「え……あの……」

華嬢は真っ赤になってうつむいた。

「いや……その……私も……同じよ」

「同じ？ハッキリ言ってよ。いつもみたいに」

「ああもう！好きよ、好き！わかってるでしょう、いまさら言わせないですよ！」

「そうか……嬉しいよ。じゃあ……」

靈司は華嬢に顔を近づける。

「えっえっ……」

華嬢は戸惑うが、やがて覚悟を決めて目を閉じる。

靈司はちゃんと華嬢の額を指で押した。

「え？」

華嬢はビクっとして目を開ける。

「何考えてんのさ、高校生のくせに。「じゃあ、いつも通りで」って言おうとしただけだよ」

「え……あ……ああ、わ、私もそうよ。ただ、いまちょっと目にゴミが入って。か、勘違いしないでよね！」

「はいはい」

靈司は手をあげてプラプラ振った。

とそのとき、ふっと靈司が倒れ込み、零司が出てきた。

「まったく、靈司の野郎。勝手に恋人を決めやがって」

「久しぶりね」

「なあ華嬢。お前、俺の存在意味を知ってるか？」

「え？」

「俺はなあ、よわっちい霊司が自分を強く演出するために生み出した人格なんだ。

こいつが一番気にしていたのは、華嬢、お前に守ってもらってばかりの自分の弱さだ。

だがペルソナたちとの戦いで、こいつはお前を守る術を学んだ。もう、俺はいらないってわけさ」

「零司……」

「俺の役目もおわりだな。まあ、幸せに暮らせや」

「あ、あと霊司から伝言だぜ」

「え？」

「好きだ、付き合おう」だとよ。まったく、それくらい自分で言えや」

零司はふたたび眠ろうとする。

「あっ、ちょっと待って！」

華嬢が零司の腕をとる。

「あん？」

「じゃあ、霊司ちゃんに伝えて。「私も大好きです。付き合ってください」って……」

「まったく……」

零司は頭を搔いて苦笑いした。

一方、紫丹を連れて軀龍は屋上に来ていた。

「なあ、紫丹ちゃん。ワイ、中央大に進路が決まってな」

「おめでとうございます。すごいですね。ウォンバスとして戦いながら受験したのに」

「アホのワイにしちゃようがんばったと思うわ。それでな、中央は八王子ってところにあるんやが、遠くてなあ」

「ええ……川越から引っ越すんですか？」

「ああ、そうしようと思う。でな、その前に伝えときたいことがあって」

紫丹を見つめる軀龍。紫丹は軀龍の言葉を察すると、ばつの悪そうな顔をしてうつむいた。

「あの……その前に、私……軀龍さんにお話しなくてはいけないことがあって」

しかし軀龍は紫丹の唇に指を置いた。

「ええて、苦しいことは言わんでもええ」

「でも、これは知らないとしてもまずいんです。軀龍さん、後から知ったらもっと傷ついてしまう」

「傷つくことなんてあらへんよ」

軀龍はフェンスから目下の田んぼを見渡す。

「好きになってもうたのが華嬢の弟やってことくらいじゃ、ワイはびくともせんでえ」

「え……」

紫丹は言葉を失い、呆然と立ち尽くした。

「……引っ越したら遊びに来てや。霊司たちも連れてな」

軀龍はそう言い残すと、屋上を去った。

北城高校の空には、一人の少女が浮いていた。

それは姫乃が描いたリリスというキャラだった。

リリスは姫乃の霊力によって現実化し、一部始終を監視していた。

「ふふ、人間は温かいなあ。リリス、冷たいもん」

リリスは姫乃の式神であり、かつ皇女の欠片だ。

「さあて、そろそろ皇女の刺客がくる頃かしら。霊司君もこれから大変ね。

それにしても、男の欠片は珍しいなあ」

リリスは不適に笑うと、すーっと飛んでいった。

・アルバ城侵入

>el ʔ/0 Z-Λ Z-Λ

夢の中でぼぷりが抱きついてきて、私は体がかゆくって、ハッと目覚めた。

「うーん」と言いながら私はクーラーのリモコンを探す。

「暑い……クーラー」

と思ったところで、私はガバッと起き上がる。

「そうだ……私……アルバザードにいるんだった」

起き上がる。藁のベッドだ。そうか、これのせいで痒かったのか。

「あれ……アルシェは……」

周りを見渡すと、ちょうどアルシェが入ってきた。

Ⓞ JɔɔΛɔ, Mɔɔc-Ⓞ

Ⓞ JɔɔΛɔ,, leΛ ʔɔa >ɔɔ-ʔ ʔ- ʔ-ʔM-δ Ⓞ

Ⓞ ɔ-Ⓞ

アルシェは顔に痣を作っていた。

Ⓞ ʔɔ -ʔ Jɔɔδ Ⓞ

Ⓞ >eδ ʔ-ɔɔ-ʔ -Λ >-Λ ʔa >ɔɔ ʔcl ʔel -Λ ʔcʔ ʔ-Λʔ - ʔ-ʔⓄ

Ⓞ <aɔ -Ⓞ

Ⓞ -h-h, ʔa eʔ Jʔɔɔ,, -Λ ʔ-ɔɔ ɔa ʔ- Je laʔⓄ

Ⓞ ʔɔa....Ⓞ

Ⓞ h-c, -Λ >elʔcʔ <--ʔ - ʔc,, ʔac ʔaⓄ

アルシェはパンの欠片を渡してくれた。それと、たぶん今絞ったんだろなっていう感じの牛乳。

Ⓞ JeΛʔ-Λʔ....Ⓞ

このパンはきっと彼の朝ご飯なんだろう。私のために分けてくれたのね……。

私はもぐもぐ食べる。なんだか……申し訳ない。

朝ご飯を食べた私は、アルシェの家を出て行くことにした。

アルシェは奴隷少年で、私を助けるような余裕はない。これ以上迷惑をかけちゃいけない。

Ⓞ Oec, ʔc ʔe ->δ ʔc Jc M- ʔɔɔδ Ⓞ

Ⓞ ɔ-....ʔeʔⓄ

Ⓞ JɔɔΛ ʔ-ʔ -ʔa,, -Λ eʔc V-Λ ʔaʔ-ʔ c >eδ <cɔΛ- ʔcⓄ

Λ-ʔ ʔcʔeʔe ʔeʔeʔe



ⓂccΛ, (c) 7e ->δ Ⓜ

ⓂΛα Λ β Λ-Λ (c<|eJ |ec e ΛαΛⓂ

Ⓜ(αδ --, le |ec |e (c 4ac(αμ 7α7Ⓜ

Ⓜ4-, 7α7α |e, ΛαΛ 7α|C 7eΛ μ- e Λ-Λ,, (eC ΛαΛ (c<|-(cⓂ

Ⓜ7αΛ (c 7α V-Λ (αδ Ⓜ

ⓂΛαΛ....7αμ 7cl Λ-|C (μ-μⓂ-Ⓜ

アルシエは驚いた顔になった。

Ⓜ|e Λ-|Cδ eJδ Ⓜ

ⓂΛαΛ μeC 7cl - 7ee>J >e|C- 4a| |-( Λ-ΛC ΛαΛ - <c- Λα-ΛⓂ

Ⓜhα>....Ⓜ

Ⓜα|C- ΛαΛ μeC (α -(α, |-(eμ Vcl ΛαΛ,, Λα> ΛαΛ 7αμ <-| Λ-|C >cl |e Λ-|C (cl 7-7|CeΛ 7'-|aaCⓂ

Ⓜh--Λ....7-7|CeΛ -, (|-|-(c |-(c 7cl |4aδ (αμ, >cμα) 4aC- Λ-V Λ- |C,,

4-Λ |-( >eδ-( <-|CαJ 7c e >cΛ-|eC c> (α7e| (eμ,, 7αΛ α |-( 7eΛ |4a c> (αμ (c7eeⓂ

はあとリディアはため息をついた。

「そうか、そんなことが昨日あったのね。それじゃあお城に入るのは難しいね……」

Ⓜ(|-|....-Λ <cC Λcel V-Λ(α> - (cⓂ

ⓂΛ-Λδ Ⓜ

Ⓜc (αμ, -Λ αcα |eα - Λ-|C >-Λ (α (|-Λ eC |-( -ΛCⓂ

Ⓜ|eαδ Ⓜ

Ⓜ7a|-( <ccΛ- >cμα) 7c< (c7ee,, >eδ eC 7cΛ-Λ,, 4-Λ -Λ eC 7|-Λ |-(c,, 7αΛ....Ⓜ

Ⓜh--Λ, (α 4aΛ μ-CⓂ

Ⓜ7αΛ (c 7e7C 7-7 ΛαJ - α->eⓂ

へえ、アルシエってこの年で馬車なんか運転できるんだ。すごいなあ。

そのとき、男の人の怒鳴り声が聞こえた。メジュって人に違いない。

アルシエは慌てて私を藁の布団の中に隠した。

ⓂOec, -μe| (α >αJ (α 7e| (c 7e Λ-|C -7Ⓜ

ⓂV-ΛC-ΛC, 74aJ7αa| -Λ 7e -77rⓂ

Ⓜ(c μe 7eC -77 VecΛrⓂ

怒鳴りながらメジュは持っていた鞭でアルシエを打つ。

アルシエは痛覚が鈍磨しているのか、腰を打たれてもすぐ起き上がって、ひたすらメジュに謝った。

へこへこしていると、メジュはそれ以上打つのを止め、舌打ちして去っていった。

Ⓜaaα....|- eC Ve> -, (4a eC α-77αδ Ⓜ

藁から抜け出す私。心臓がまだドキドキしている。

Ⓜα-77α, -Λ eJ ΛαC - |-(Ⓜ

急いで部屋を出ると、アルシェの馬車に乗った。

馬車が出発する。

うわあ、馬車とか初めてなんですけど。

馬車は私の知らない道を行き、ゆっくり進んでいく。意外と遅いんだなあ。

しかし、見慣れない道路だな。私が知ってるアルバザードじゃこんなくねくねした狭い道路はない。もっと整備されている。

そうか、ここをそう変えたのがミロクさんなんだよな。すごい人だなあ。

けど、このころのアルバザードってこうなってたのね。ヨーロッパみたい。

それにしても、街を歩く人の貧富の差が激しい気がする。ホームレスや奴隷っぽい人が多い。

反対に、お店の中には綺麗な服を来た人が多い。彼らは貧乏な人たちのことなんか、目に入らないみたい。

通りを抜けると、急に現代の日本みたいな道路に出た。そうか、今見ていたのは旧市街なのか。

「うーん、それにしても凄いいいね、ここ」

動物園みたいなにおいがする。馬車だからしょうがないか。

私はお腹に手を当てた。

「まずいなあ、周期的にそろそろなのよねえ。持ってくればよかったなあ。アルバザードに食事に行くだけだと思ってたから、鞆も持ってかなかったよ。

この時代にもあるんでしょうけど、アルシェに言ってもどうにもならないよね……」

腕をあげて、脇の下をくくん嗅ぐ。

「においがついちゃったかな。それとも、私だったりして。お風呂、入ってないからなあ」

そうこうしているうちに馬車がお城についた。堀に渡らせた橋を通ると、馬車がガタゴトと揺れる。おしりが痛いです。

アルシェは門番と話をし、中に入れてもらう。

誰もいないのを見計らうと、アルシェは私に合図した。

Ⓞ(aM, 7cl)Ⓞ

ⓄJeeMe(cJ, -MeⓄ

ⓄccJ, -IV-rⓄ

アルシェが帰っていく。

私は緊張でお腹が痛くなるのを感じながら、息を潜めて城内を歩いた。

「確かカルテンは王座の真下にあったとかレインが言ってたっけ。王座の真下というと、1階か地下。

となると1階のはず。だってレインの時代にはカルテンは平屋だったもの。サリュも1階にあるはずよ」

緊張しながら歩いていると、時折人の足音が聞こえ、私は慌てて柱の陰に隠れる。

みんな私に気づかず、すたすた歩いていく。足並みは早めで、忙しそうだ。お城の人も忙しいんだねえ。

それから少しすると、大きいドアがあった。

「ここ……かな？」

ぎいっとドアを開け、中に入る。

ドアのわりに、中はあまり大きくない。

「執務室……的な感じかな。誰の部屋だろう。とにかく、ここじゃないわ」

部屋を出ようとしたところで、足音が聞こえ、私は慌てて部屋の中のクローゼットに隠れた。

隙間から見ていると、部屋には2人の男女が入ってきた。

ひとりは見覚えがある。昨日のミロクさんだ。もう一人は誰だろう。綺麗な女の人だ。明るくて元気そうな感じ。若いな。

⑥ ㄱㄴㄹ ㄱㄴㄹ ㄱㄴㄹ, ㄴㅇㄹ ㄴㅇㄹ-ㄴ ㄴ-ㄴㄴㄴ ㄴㅇㄹㄴ

⑥ ㄴ-ㄴㅇㅇ, -ㄴㅇㄹ, h-c ㄴㄴ ㄴ-ㄴ ㄴㅇㄹㄴㄴㄴㄴ

⑥ ㄴ-ㄴ ㄴㅇㄹㄴㄴㄴㄴ

⑥ -ㄴㄴ, ㄴㄴ eㄴ ㄴㄴ h-ㄴㄴ -ㄴㄴ, ㄴㅇㄹ -ㄴ ㄴㄴㄴ -ㄴㄴㄴ

⑥ ㄴㄴㄴㄴ, ㄴㅇㄹㄴㄴㄴ

アルソンで……たしかリーファ隊のひとりよね。

ミロクを守る5人の精鋭、リーファ隊。アルソンは改革担当で、かなり強硬な人だったって言ってたわね。

そうそう、だんだんレインの言っていたことを思い出してきた。

そうだよ、この年からミロクさんが革命を行って世界中が変わるんだった。

私、大変な現場に来てみたい。

⑥ c> ㄴeㄴ, ㄴㅇㄹ ㄴeㄴ ㄴ-ㄴ ㄴeㄴㄴ

⑥ -ㄴㄴ v-ㄴㄴeㄴ ㄴeㄴㄴㄴ-, ㄴㅇㄹ ㄴeㄴ eㄴ hㄴㄴㄴㄴㄴ

⑥ ㄴㄴㄴㄴ

⑥ ㄴ-ㄴㄴㄴ e ㄴㄴㄴ-ㄴㄴㄴ -ㄴㄴ- eㄴ ㄴ-ㄴㄴ ㄴ'-ㄴㄴㄴ-ㄴ -, ㄴ-ㄴㄴ ㄴeㄴ-ㄴ ㄴㄴ ㄴㄴ-, ㄴㅇㄹ -ㄴㄴ ㄴeㄴ ㄴㄴㄴㄴㄴㄴ

ㄴe- ㄴ-ㄴㄴㄴ-ㄴㄴㄴ

⑥ ㄴ-> ㄴㄴㄴ, ㄴㅇㄹㄴㄴㄴ

そのとき、私はクローゼットの中の何かに躓いてしまい、カタッと音を立ててしまった。

「しまった！」

思わず手で口をふさぐ。

アルソンさんが首を傾げてクローゼットを開けにくる。

まずいまずい、どうしようどうしよう！

見つかったら殺される！

あー、でもどうすればいいの！？もう隠れようがないよ！

こんなとき、漫画だったら誰かが助けに来てくれる。もしくはドカーンとか爆発がどこかで起こって、ミロクさんが「何の騒ぎだ」とか言い出して、クローゼットの件がうやむやになる。

漫画ならそういう王道パターンが起こるのに！王道、起これ！起こって！

しかし運命は非情だった。

アルソンさんはガチャッとクローゼットを開けた。

私は三角座りで、えぐえぐ涙を浮かべながら、頭に手を置いていた。

ⒺOe...l-l- (4a e( Ae)Ⓔ

躊躇なくアルソンさんがサーベルを抜く。

「ひいっ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

頭を抱えて土下座する私。

けど、アルバザード人に土下座したって何も伝わらない。

アルソンさんは猫の子を掴み上げるように、私の襟を掴んで両手で持ち上げた。見かけによらず怪力だ。

Ⓔl-l Jee)Ⓔ

私を床に置くと、アルソンさんはサーベルを喉に突きつけた。

「あ……う」

剣を喉に突きつけられるなんて漫画ではよくあるけど、リアルに自分がされると、青ざめて声もでない。

むしろ恐怖で気絶した際に自分から剣を喉に刺してしまいそうなくらいだ。

ⒺOec, >-A-, (c e( Z-cA )o)δⒺ

男言葉で凄むアルソンさん。私は蒼白な顔で首をふるふる振る。

「ごめんなさい、ほんと、私はスパイなんかじゃないんです。お願い、殺さないで」

ⒺOec, -l- (c )a) (o) (c la)- c (o )-l)Ⓔ

ⒺA...A)A e(....c( -)e-Z-))Ⓔ

⑥ leA 7a <ceTe

剣を喉元に押し当てる。じくっとした痛みが私の体を走る。まるで焼けた電気を喉に当てられたような感覚だ。

「ひいっ！あ……だめ」

私はあまりの怖さでおしっこを漏らしてしまった。

赤いカーペットがじわーっと黒く塗れていく。

⑥ -I7aA, Me <c7I <MeC,, 7aaJ la <caA 7IeJ

⑥ -し, 7IaaJ7aa

チンとサーベルを仕舞うアルソンさん。

私は「あうあう」と呻きながら、ミロクさんを見る。

ミロクさんはそっと歩み寄ると、私の足下に跪いて、同じ目線で話しかけてきた。

⑥ leA A- Ve>, 7aA-, Me <caA 7IeJ -I -A7,, 7c7, 7c le Z-ca 7a7

⑥ 4-...7a7 7e Z-ca 7c7,, 7e7 7a7 7a 77a e7 Ae,, 7IaaJ7aa >c777 7e7e7

⑥ 4-, -A e7 >c777 7a7c-

⑥ 7a7 e7 7c7c- >c777

⑥ >c777 7a e7 c>7a -, 7c le -7e-A 7a7,, 7aA-J c7 ->7

⑥ 3>...

-I7aA ⑥ eJ 77a Ae777

怖い目つきのアルソンさん。私はびくびくと震える。

⑥ 7a7...7a7 7a7-c c <c- -I7

-I7aA ⑥ 7a 7a <ce, 7a7 77a 7c7I 7a 7c77e

⑥ 7e7 7e77 7a7 eA 7eA7-c <ceTe

>c777 ⑥ h3>, 7a7 eJ 7c 7aA-J -7a7

-I7aA ⑥ J- 7a, 7eA 7eA7 Ae 7-A7 77a -7a7

⑥ eJ 77a 7e7 7-A 7a7

⑥ >c7I 7eA- 7e7 7-< 7a 7e7 77e77-A,, c> 7a7 a -7 7e7 >c7I 77a 7e >e7-A,, 7e7 7e- 77a e7

>e7-A7 7a> 7eA- 7e7 7-< 77e77-

⑥ 3>...

私は言葉に詰まった。

⑥ 77a <caA e7I 7a e7 Ae7 7a> 77a 7a77 <-I c77I 7a7

アルソンさんは私の肩にサーベルを置く。

私は蒼白な顔になり、乾いた唇を開いたまま、目を見開いて首を振った。

ミロクさんが何か言おうとしたとき、ドーンという音が響いた。

⑥ 7a -7 7a777

ミロクさんが立ち上がる。

「遅いよ、王道！」思わず叫ぶ私。

すぐに人が入ってくる。

⑥>cμ>γr ΛσΛ el- <-l ue⑥

おとなしそうな女性だ。眉をひそめてミロクさんに報告をする。

⑥--ue, cσ -c uσlδ⑥

これがアーシェ……。確か彼女もリーファ隊のひとりだ。

⑥>cΛ-lec V-Λl γcγ leΛ-, l--j eγ γ0 Vc-, l--j Mcγ-c ecl e Λ-lc γσγσ γ-cχel⑥

⑥γ-cχel cσγδ hσc, (eμc- χc- Λ-, -lσΛ, Me cε-cl γe l--j⑥

⑥-ι, lYσσσσaΓ⑥

アルソンさんはさっと走っていった。

今しかない！

私はとっさに走り出した。

臆病な私が走り出すとは思ってなかったのか、ミロクさんは私の腕を捕まえ損ねた。

アーシェさんは事情が分かっていないらしく、子供の私を特に警戒もせず、そのまま素通りさせた。

⑥Oec, YσΛ-r V-cγ Λec-lr Me <σj l- >-Λ-r⑥

「いやああ！こないでえ！」

私は心臓が破れそうな勢いで走った。逃げてしまった以上、もう言い訳は効かない。捕まったら今度こそ殺される。

ミロクさんは歴史上、何万人もの人を殺している。さっきは優しくそうに見えたけど、捕まったらきっとアデュ収容所に送り込まれる。そしたら一巻の終わりだ。

私はふと、自分が収容所で迫害されて虐殺される絵を想像した。収容所の囚人は死ねば肉は別の囚人の食事になり、油は石鹸に加工され、髪はかつらにされる。

私の体のすべてのパーツが効率よく処分され、加工される。ここで捕まったら私は肉になるんだ。そう思ったら怖くて、脚が震えた。

そうよ、ミロクさんっていうのはそういうことをした人なんだ。ここで転んだら肉にされる。そんなの嫌。死にたくない！絶対倒れちゃダメだ！

壁に何度もぶつかりながら階段を下りたり上ったりしているうちに、ついにサリュのある小部屋にたどり着いた。

「こっ、ここがサリュ！」

転びそうになりながらサリュに駆け寄ると、私は石段に両手をついて、メルティアに向かって叫んだ。

⑥>elc-c-r >elc-c-r -lγr -lγ ΛσΛr -lγ ΛσΛr ΛσΛ cσμ -cσr γ- j-lYσ c'-μe-r -jγ -jγr MeΛ laΛ- -jγ ΛσΛr >elc-c-r ΛσΛ jeC Yσ, l--j jeC <-Λ ΛσΛr -lγ ΛσΛr -jγ, >elc-c-----rΓ⑥

私の叫び声を聞きつけた役人が入ってくる。

⑥0ec, >-Λ-ƒ し-| Jee/ƒƒ6

「いやあああああ！！」

私は顔を真っ赤にして男の人に叫んだ。男の人はあまりの気迫に驚き、一歩後ずさる。

こんなことなら紫苑みたいに格闘技とかやっつくんだっただも、もう遅い。

「メルティア、早く、早く！開けて、開けてえええ！！」

ドンドンとサリュを叩く。するとサリュが光を出し、私の体を包んだ。

・交錯する世界

暗い……。

私はどこに……いるんだろう。

目を開けると、見知らぬ天井があった。

「ここは……」

木の天井だ。どう見ても日本の家屋。

でも、私の家じゃない。

私はゆっくり起き上がる。

周りを見渡す。そこは6畳程度の部屋で、机や本棚やズボン掛けなんかが置いてある。

ズボン掛けにはハンガーに掛かったスーツがある。男の人の部屋のような。

部屋はちょっと汚れている。

「ここ……どこ」

そのとき、部屋の引き戸が開いて、男の人が入ってきた。

「起きたか」

「え……」

私は本能的に身構えて、布団を体に引き寄せせる。

「うん？いや、怖がらなくていいよ」

男の人は慌てた顔で言う。無精ひげを生やした小柄で痩せためがねの人で、やや一重で怖い目つきをしている。

口が小さくて、目つきは悪いのに、ぼーっとした印象を受ける。

あれ……この人、どこかで……。

私は一生懸命頭の中を検索した。

「そうだ……春夫おじさん？」

静の弟の春夫おじさんではないか？以前若い頃の写真を見たことがある。

「よく分かったな。あの……君はリディアだろう？」

「はい……。あの、なんで私のことを？それに、ここはどこなんですか。私なんで……こんなところに」

「ああ、一から説明しないといけないみたいだな。こっちに来て。何か飲みながら話そう」

「あのっ、私、家に帰らなきゃいけないんです」

「分かってるが、今出て行ってもムリだと思うよ」

「えっ？」



「あー、なんていえばいいのかな」戸惑うおじさん「とにかく、話をさせてよ。そしたら俺の言ってることも分かるから」

春夫おじさんはどうも口下手らしい。

私はおとなしく頷くと、黙って居間に付いていった。

テーブルに座ると、おじさんがお茶を入れてくれた。緑茶だ。静なら紅茶を出すだろうな。

「あの……ここは、おじさんの家ですね」

「正確には兄の家なんだが」

「静の育った場所ってことですか。じゃあ、ここって光が丘なんですか？」

「ああ、そうだよ」

おじさんは私が父親を名前で呼ぶのに驚いたのか、眉をあげて答えた。

「へえ……初めて来た」

あれ、でもなんか変だ。

確かおじさんは蛍さんが出て行った後に数年していなくなってる。静側のおじいちゃんが亡くなった日に、家出をしたはずだ。

それなのに何で光が丘にいるんだろう。

「あの……いま、何年ですか？」

「え？」意外な顔「2022年だけど……」

「で、ですよ」

「それで、どうして私はここに来たんでしょう」

「ああ、じゃあ説明するよ。ただ、俺の説明は分かりにくいかもしれないけど」

「いえいえ」

おじさんはゴホンと咳き込む。静を和風にしたような顔だなあ。

「お前のお父さんはな、高校時代にある物語を作っていたんだ」

「小説ですか？」

「実際には書かずに頭の中にあっただけなんだが、イラストやなんかで資料に残してた。あとは口伝だな。俺は当時小学生で、兄の話す物語が好きだった。設定を最も覚えていたのは間違いなく俺だ」

「へえ、どんな話なんですか」

「ウォンテッドバスターズっていつてな。1997年の日本が舞台だ。」

世界には結界という霊力の吹きだまりがあり、それを破壊すると強力な霊力が得られる。

結界を破壊して人類を滅ぼそうとするペルソナという集団。結界を破壊して優れた人類だけ生かそうとするニューワイズ。

そして彼らを阻止しようとするウォンテッドバスターズ、通称ウォンバスの3団体の争いの話だ」

「ファンタジーですね。戦いとか結界とかグループとか、静っぽいなあ」

「てゆうか静にもそんなころがあったのね。かわいいなあ。」

「で、その話がなんなんですか」

「まあ、続きを聞いてくれ。主人公はウォンバスの祁答院霊司なんだが、これが何を意味するか分かるか？」

「え？……つまり、物語の結末は、ウォンバスが勝って人類が減りませんでしたってことですか」

「その通り、さすが賢いな。で、ウォンバスが勝つのが静の描いた物語だったわけだ。

だが静はマルチエンディングを用意していたな、ペルソナが勝つ場合の未来も想定していた」

「その場合、人類は滅ぶんですか？」

「いや、ニューワイズらに結界を奪われていた関係で、集めた霊力は弱く、人類は滅びなかったんだ。一部は生き残った。

だが結界を破った日本からどんどん魔物が吹き出し、世界は混乱に陥った。

そんな化物や人間の悪者を倒す賞金稼ぎをバウンティハンターズという」

「それも静の作った話なんですか」

「そうだ。ペルソナが勝ったあとの話として存在した物語だ」

私はふむふむと頷いた。いまのところ話は飲み込んでいる。

「でだ、静はニューワイズが勝った場合を想定してなかったんだな」

「はあ……」

「ニューワイズのリーダーは静愁呪慈苑嬢瞬」

「ヘンな名前ですね」

「本名は神崎琥珀という」

そういうとおじさんは二冊のファイルを取り出した。一冊は透明、もう一冊は黄色の透明。

「これは？」

「兄が遺した資料さ。絵や当時の想いが綴られている」

「絵？」

「琥珀のイラストなんかがある。ほら、これさ」

「この、袴を履いた人ですか？静、このころから漫画が上手だったのね」

「で、この琥珀なんだが、実は兄がモデルになっている」

「へえ……」

「さて、ここで少し話を現実に戻そう。お前は兄の人生をどれだけ知っている？」

「ええと、大学で村上蛍という人に出会って、結婚し、勇太という子供ができた。

その後離婚し、初月紫苑と会う。そして私が産まれる」

「うん、で、俺については？」

「春夫おじさんは、蛍さんが出て行ってしばらくして家出をした。その後は音信不通になっている……と聞きましたけど」

「そうか、そっちではそうなってるのか」

「そっち？」

春夫おじさんはお茶をガブッと飲んだ。何か苛立っているような焦っているような……。

「実はな、この世界にお前は存在しないんだ、リディア」

「……は？」

「水月静は確かに村上蛍と結婚し、村上勇太を設けた。そして離婚をした。

ところが静はその後、初月紫苑なんて女性とは出会ってないんだ」

「え……？それってどういう……。だって、そしたら私は産まれてない……」

「そう、だからお前は这个世界にいないんだ」

「いないって言われても……いるじゃないですか」

「お前、パラレルワールドって分かるか？」

「ええ……まあ、小説で」

「ここは兄が紫苑と出会わなかった世界なんだ。よってお前は存在しない」

私は頭を殴られような衝撃を覚えた。

なにこれ、私、帰ってきたんじゃないの！？

もう、間違えだらけの仲介人ね、メルティアったら！

「え……それじゃあ、この世界の静は紫苑と会わずに何を……」

「静は、信じられないことに、紫苑と出会った未来からやってきた自分に会った」

「静が静に会った？つまり、こっちの静が私の知ってる静と会ったってこと？」

「そうだ。お前側の静がこっち側の静に会いに来た。妻の紫苑が魔法を使ったせいだ」

「なんのために？」

「お前側の静は自分が叶えられなかった夢を果たすために、こっちにやってきた。そしてこっちの静を若返らせ、過去に飛ばした」

「ややこしい……」

紫苑ほど頭のよくない私は頭を抱え込んだ。きっと紫苑ならサクサク理解するんだろうな。

「静が飛んだ世界というのはこれまた厄介でな。なんとウォンバスが実在する世界なんだ」

「高校のときに作った物語が現実化したんですか？」

「そうだ」

「でも、それって面白いんですか？夢が叶うとは思えない。だって、作者の自分はその世界に入ったって観察しかできないじゃないですか」

「いや、そこで思い出してほしいんだが、静がモデルになった人物がいたよな」

「あ……ええと、神崎……なんとか」

「琥珀だ」

「ああ、そうそう」

「兄はその世界で神崎琥珀と名を変え、生きた」

「え、でもそしたらその世界に元々いたはずの神崎琥珀はどうなるんですか」

「その世界には琥珀は存在しなかった。空白のポストになっていたんだよ、静のために」

「なるほど……」

さあ、本格的にややこしくなってきたぞ。私は腕を組んで頭を整理した。

「つまり、静はその世界では神崎琥珀なわけね」

「兄はニューワイズが勝った未来を設定していなかった。だから、いざ自分が琥珀になったとき、新しく設定を作ることができるぞと考えたわけだ。

設定というより……兄はすでにその世界の住人だから、自分の生き方や努力がそのまま物語の結末になるわけだ。

現実化した小説の中では、作者は話の筋を変える力を持たない。静の努力が足りなければニューワイズの勝つ未来は来ないかもしれない」

「はい」

適度に相づちを入れる私。

「だが、兄は頑張ったんだろうな。晴れてニューワイズの勝ちとなったわけだ」

「その世界で？」

「ああ、その世界で」

「でも、おかしくないですか？」

「何がだ？」

「あくまでこっちの静はウォンバスが現実化した世界に飛ばされたんですよ。

そこでは神崎琥珀は静。じゃあその世界では逆に水月静が存在しなくなる」

「そうだな」

「その世界はこの世界とは関係がありませんよね。ただ、この世界がウォンバスの世界に静を派遣したという点を除いては」

「つまり？」

「いや……ですから、ウォンバスの世界で何が起ころうと、おじさんの世界は関係ないでしょうってことです」

「ところが、そうでもないんだな。問題は、ふたつの世界にまたがる静のせいで、ふたつの世界がリンクしてしまったということなんだ」

「リンク？」

「簡単にいえば、ふたつの世界がひとつになったということだ。この世界にしかない特徴と、ウォンバスの世界にしかない特徴が合わさった」

「その、「にしかない特徴」って何ですか」

「ウォンバスの世界の場合、ウォンバスが実在し、ニューワイズが勝利したというのが特徴だ」

「そうですね。この世界にはウォンバスはありませんもんね」

「逆に、ウォンバスの世界になくてこの世界にあるものがある。それはなんだと思う？」

私はうーんと考えて、自分を指さした。

「私ですか？」

しかしおじさんはがっかりした顔で首を振った。あ、きっと私のこと、そんなに賢くない子だって思ったな……。

「お前は違う。さっきも言ったとおり、お前は这个世界には元々存在しない。这个世界では静は紫苑に出会ってない」

「なるほど、そうでした。じゃあ……何でしょう」

「村上勇太だ」

おじさんは静かに答えた。

「勇太君……？あ、そうか。这个世界では静は蛍さんには会ってるから、勇太君は存在する。だけど、ウォンバスの世界では静は琥珀だから、勇太君を作ってない」

「そうだ。这个世界の鍵を握るのは、村上勇太なんだ」

「ま、まってください。頭を整理します」

おじさんは「ああ」というと、席を立って、お茶のお代わりを淹れてくれた。

「2つの世界がそれぞれの特徴を鍵として、互いにリンクした。ひとつ目の鍵はウォンバスが実在すること。もうひとつの鍵は、お兄ちゃん……」

「状況が飲み込めたようだな」

「えっ、じゃあ这个世界はニューワイズが勝った世界なんですか？」

「そうだ」

「じゃあ、良い人間だけが生き残るとかいう……」

「そうだ」

おじさんはゆっくり席を立つと、窓のカーテンをしゃっと開けた。

「見てみな」

恐る恐る近寄ると、私は目を疑った。

恐らく光が丘の街であろう場所が、ところどころ焼け焦げているからだ。

いくつかのビルは倒れ、いくつかの家は潰されている。また、炎上して黒い灰になった家もある。

「どうして……あんなことに」

「あれがニューワイズエンドの結果だ」

「ニューワイズエンド？」

「琥珀が起こしたテロだよ。今年 2022 年になって起こった。

悪い人間が死んだとき、例えばたまたまそのとき料理をしていたら、火はどうなる？

もしそいつがトラック運転手だったら？電車の運転手だったら？」

「……どこかにそのまま突っ込みますね」

「だろう？その結果がこれさ。良いとされた人間もかなり巻き込まれただろうな」

カーテンを閉める私。

静がこんな恐ろしいことをしたなんて……信じたくない。

「あの……でも、いくつか疑問があるんです」

「どうぞ」

「なんでおじさんは琥珀のしわざだって気づいたんですか」

「1997 年を境に怪死事件が首都圏で相次いでな。死亡者の名前を見てピンと来た。

祁答院霊司、天城華嬢、天城紫丹。珍しい名前だよな。どう見たってふつうには存在しえない名前だ」

「ええ……」

「俺はニュースを見たとき、すぐに勘付いたね。これは静の作った話だって。

初めは信じられなかったけど、あまりにニュースと物語の内容が一致するんで、これはもしやと思ったのさ」

「なるほど……。でも、春夫おじさんは 1997 年の時点では 2 人存在するんですよねえ」

「ん？」

「ウォンバスの世界のおじさんと、この世界のおじさん。2 つの世界がくっついたら、2 つの世界に共通している人間はどうなっちゃうんですか」

「ふたりの自分と記憶を共有するのさ。例えばこの世界の俺は 2008 年に突然静が失踪するまでの期間、静という人間を知っている。

一方、ウォンバスの世界の俺は、1996 年に失踪した静までしか知らない。そして、1997 年以降に起きたウォンバス関連のニュースを知っている。

ふたりの俺が合わさると、勇太の記憶やウォンバスの記憶を持った俺ができるわけだ」

「なるほどです」

「理解した？」

「あ、はい。なんとか」

「ところで、この世界のおじさんは、どうして静がウォンバスの世界に飛ばされたって知ってたんですか」

「2008年に失踪した際、静は手記を机に遺していた。恐らく自分自身と話したときにメモったものだろう。走り書きの資料だ。

そこには俺が述べたことが書いてあった。俺はそのメモを信じて喋っているだけさ。

半信半疑だったが、世界がリンクしてからは、信じざるをえなくなったよ」

「もしかして、そのメモに私のことも書いてあったんですか」

「その通り。紫苑と出会った2008年の静は、幼いリディアという赤ん坊を抱えていたそう  
だ。それで俺は姪の存在を知ったわけだ」

「なるほどです」

「ところで、このことはもう警察に話したんですか」

「いや、言っても意味がないだろうしね」

「ファイルを見せれば信じるんじゃないでしょうか」

「信じたら信じたで困るよ。俺は大犯罪者の弟になっちまう」

「あ……そうですね。それに、靈力を蓄えた珀璃相手じゃ、警察も無力でしょうし」

「ああ」

「あの……珀璃は2022年、つまり今年にニューワイズエンドを起こしたんですよね。ウォンバスとの戦いはそんなに長かったんですか」

「いや、戦い自体は1998年に終わっている。だが珀璃はなぜかそれから24年もかけてテロを起こした」

「「なぜか」？おじさん、その答えもそのファイルに書いてあるんじゃないんですか」

「いや、さっきも言ったが、静は高校時代にニューワイズの勝利を記していない。これはアドリブともいえる世界なんだ。どうなるかは誰も知らない」

「なるほど。それで、珀璃がどうして24年もテロを待ったか不明なんですね」

「分かっているのは夢幻という少女のことだけだ」

「夢幻？」

「静愁呪が出会った少女だな、1997年の開戦より前に既に死んでいる。

でだ、どうも資料によると、珀璃はこの子を蘇らせるためにニューワイズになったよう  
なんだよ」

「夢幻っていうのを生き返らせるために靈力を集めたってことですか？」

「それも目的のひとつなんだと思う。だが、資料が少なくて、そこから先は分からない。

まして 1998 年以降のことはこの資料にないから、予言ができない。なにせニューワイズが勝つ世界は初めてだからね」

うーんと唸って、私は椅子に座った。頭がこんがらがる。あつい。私はおでこに手を当てた。

「なんだか、SF すぎて頭がオーバーヒートしました」

「ああ、だろうね」

笑うおじさん。

「おじさんが私のことを知ってたのは分かりました。静のメモのおかげですね。

ただ、分からないのは、なぜ私がここにいるかです」

「その理由ならこれさ」

おじさんは一通の手紙を出す。

封筒には静のヘンテコな字で、「春夫へ」と書いてあった。

「中を見ても良いですか？」

おじさんは頷く。

中を見ると、やはり汚い字で——でも彼なりに一生懸命綺麗に書いた字で——おじさんへのメッセージが書いてあった。

「春夫

久しぶりだな。といってもそっちの世界ではお前は家出をしなかったのかもしれないが。そっちの静が遺したメモから、大体の事情は分かっているはずだ。

俺は紫苑と結婚したほうの未来の静だ。

そっちではニューワイズエンドが起こった世界と、勇太のいる世界がつながって、大変なことになっていると思う。

どうも俺のせいで大変なことになってすまんと思っている。

でだ、ニューワイズエンドはまだ終わっていない。2022 年のは一発目だ。まもなく二発目が来る。

俺が高校の頃に作った脳内設定だと、ニューワイズエンドもペルソナズエンドも、どちらも一発では終わらなかったからだ。

次にニューワイズエンドが起これば、悪い人間だけ死ぬというようなことは起きない。

不慮の死が勤務中の昼間や勤務中の夜勤に起こるわけだから、電車の車掌が死ねば電車はビルに突っ込むだろう。

最悪なのは原発や原爆施設が吹っ飛ぶことだ。が、恐らく起こるだろう。突然管制官や管理者が死ぬかもしれないからな。

そうになったら多くの人間が巻き込まれ、とても地球は住める場所じゃなくなる。



ニューワイズエンドは止めなきゃならん。なぜ琥珀となった俺がそうまでしてエンドを起こそうとしているのかは分からない。だが、エンドは止める。

そもそもウォンバスを知っているのは地球でお前と大河君だけだ。お前たちだけが事情を知っている。どうか俺を止めてくれ。

エンドが起こっていないということは、恐らくまだ結界が残っているんだ。

それと、実は、俺の娘が恐らくそっちに迷い込むことになる。悪いがこれを守ってやってくれ。

リディアという。まだ中学生でな。正直ちょっと頼りない子だ。

すぐ泣くし、運動もできないし、コミュケ能力もないし、頭もそんなに良くない。

苦勞するかもしれんが、よろしく頼む。けっして、悪い子じゃない。

ただ、一度心を許すとベタベタまとわりついてきて邪魔だから、適度に距離を置いて接したほうがいい。

恐らく娘がそっちに行くのは、エンドを止める件と関連しているのだと思う。意味もなく並行世界に行くとは思えないからな。

じゃあ、よろしく頼む。

静」

な……んだか、内容よりも、静が私のことをどう見ていたのかのほうに気がなった。

えーっ、私ってこんなに評価低かったの？へこむなあ……。

「ベタベタまとわりついてきて邪魔」ですってえ！？

静……いつも私の扱いがおざなりだと思ってたけど、やっぱり私のこと嫌いだったのね……。

・世界を跨ぐ手紙

>el ʔΔ0, -/Λ-

レインの父親の部屋で、俺はアルティス教の服に着替えた。

鏡で目を見ると、赤く腫れていた。まずいな、リディアをなくして泣いたのが、紫苑にバレてしまう。俺まで泣いてたらいけないのに。

居間に下りるとアルシェたちが来ていた。既に紫苑は事情を話したらしく、アルシェは落ち込んだ顔になっていた。

無理もない。アルシェもリディアが赤ん坊のころから毎年会っていたのだから。

「紫苑、アルシェにはもう話したみたいだね」

「はい、先生。それで、これからカルテンに行こうと思うんです」

「メルティアを正式に召還し、リディアのいる時代に合流しようってことか？」

「はい、それが一番良いと思います」

「だな。ちょうどハインさんがいるんで助かった。イレギュラーでもカルテンを使わせてもらえる」

俺たちは家を出て、夜のアルバザードを歩いた。

一国のアルタレスが護衛も付けずにしかも自分の脚で歩いている。

アルバザードというのは不思議な国だ。日本ならハイヤーだろうし、暗殺も気をつけねばならない。

ハインさんが自由に歩けるのは、自身が強力な魔導師だからだろうな。

カルテに着くと、そのまま中央のカルテンを目指して歩く。

夜のカルテンに入ると、奥へ進み、サリュのある小部屋へと進んだ。

サリュとは石でできた冷たい祭壇のことだ。ただの石と思うなかれ。サリュとは本来、神との通信感度の良い場所のことなのだ。そこに目印として置かれたのがこの石の祭壇だ。

なんていうかな、地球でいうと、サリュはケータイの電波がよく届くところのようなものだ。電波がいいから、通信がうまくいく。それと同じだ。

Ⓢ lee>J >elʔc-, ΛoΛ -/ʔeJ <-Λ ʔYa ʔ-Λ- JolJ ʔYa ʔ-Λʔ leΛ- - <c- le >cV- Λo-Λ ʔea /cʔc-  
ʔ-Ⓢ

紫苑の祈りに応じて、石壇が光る。そして光の中からメルティアが現れ……ない。

「あれ？」

思わず声をあげた。そこにはメルティアとは違う別の女性がいた。女性というより、少女という感じだ。

髪は長く、黄色人種の血が強い顔立ち。端正な顔の美少女だ。おとなしく見え、やや紫苑に似ているが、この子はもっと線が細くて狐っぽい感じだ。

ⓄⓂⓂ...eⓂ...Ⓞ

ⓄⓂⓂ eⓂ lee>Ⓜ eeⓂⓂ Ⓜea ⓂⓂccl- Ⓜ'eⓂⓂⓄ

驚いた。メルティアの代わりに言語と世界を司る悪魔ベルトがやってきたのだ。

Ⓞlee>Ⓜ >eⓂⓂc- >eⓂⓂ-Ⓜ ⓂⓂ>-Ⓜ-Ⓜ Ⓜc - Ⓜe>-c ⓂⓂⓂⓂ ⓂcⓂⓂ Ⓜe>-c-Ⓜ Ⓜc - ⓂⓂ>-Ⓜ-,,

Ⓜ- ⓂⓂⓂ ⓂⓂ- Ⓜ-Ⓜ- Ⓜ-ⓂⓂ ⓂⓂ <c-,, ⓂeⓂ ⓂⓂ eⓂ Ⓜ-Ⓜ,, ⓂⓂⓂ ⓂcⓂⓂⓂ Ⓜ'eⓂⓂZ,, Ⓜ--Ⓜ, ⓂⓂⓂ Ⓜ-e ⓂⓂ >ⓂⓂⓂ  
Ⓜ- <c- Ⓜe ⓂcⓂⓂ,, ⓂⓂ> ⓂⓂⓂ ⓂcⓂⓂ Ⓜcl Ⓜe <ecⓂⓄ

ⓂcⓂⓂ Ⓞh--ⓂⓄ

ⓄⓂⓂ> ⓂⓂⓂ ⓂeⓂⓂⓂ-Ⓜ - Ⓜ- ⓂⓂⓂ Ⓜ- ⓂcⓂ ⓂcⓂ ⓂeⓂ-Ⓜ Ⓜ'e>ⓂⓂ,, ⓂⓂ Ⓜ- ⓂcⓂⓂ Ⓜ-Ⓜ-, ⓂⓂ> Ⓜ- <c- Ⓜcl ⓂcⓂ,,  
ⓂⓂⓂ ⓂⓂⓂ ⓂcⓂ Ⓜcl ⓂclⓂⓂ - ⓂⓂ>-Ⓜ- Ⓜe >cⓂ- ⓂclⓂⓂ Ⓜ-Ⓞ

ⓂcⓂⓂ Ⓞ>ⓂⓂⓂ-...ⓂeⓂ ⓂⓂ eⓂ Ⓜ-c- >cl ⓂeⓂ- ⓂcⓂ Ⓜ->cl <c- ⓂecⓂ Ⓜe- ⓂⓂ-Ⓞ

ⓂecⓂ ⓄⓂ-Ⓜ ⓂeⓂ- Ⓜ-ⓂⓂ Ⓜ-Ⓜ >cⓂ- ⓂeⓂ-Ⓜ Ⓜe Ⓜ-Ⓜ-, lee>Ⓜ eeⓂⓂⓂⓄ

するとベルトは「ふうむ」と唸って顎に手を当てた。

ⓄⓂcⓂⓂ, ⓂclⓂⓂ Ⓜea ⓂcⓂⓂ Ⓜc</ ⓂecⓂ Ⓜc< ⓂeⓂⓂⓂ- <ⓂeⓂ Ⓜ- <c- >cl ⓂeⓂ- Ⓜea ⓂⓂⓂ/ >eⓂⓂc- ⓂeⓂ  
>Ⓜ- Ⓜ- <c- eⓂ e> ⓄcⓂZ Ⓜ-Ⓜ ⓂⓂ,,

ⓂcⓂ ⓂeⓂ- ⓂcⓂ ⓂclⓂⓂ ⓂeⓂⓂⓂ- <c- -ⓂⓂ ⓂⓂ- <c- Ⓜe >cⓂ- ⓂclⓂⓂ Ⓜ-, -Ⓜc, Ⓜ Ⓜ-c- ⓂeⓂ <c- ⓂecⓂ  
eⓂ e> ⓄcⓂZ Ⓜ-Ⓜ ⓂclⓂⓂ Ⓜe <c- Ⓜe ⓂcⓂc- Ⓜ-Ⓞ

-ⓂⓂe Ⓞh>....-Ⓜ ⓂⓂⓂⓂ Ⓜc,, Ⓜ-Ⓜ ⓂⓂ eⓂ ⓂeⓂ Ⓜ-Ⓞ

ⓂcⓂⓂ ⓄⓂⓂ-...ⓂⓂ eⓂ -ⓂⓂ ⓂⓂ-...ⓂeⓂ- Ⓜ-ⓂⓂ Ⓜe Ⓜe Ⓜ-ⓂⓂ Ⓜ- cⓂⓂ ⓂeⓂ- Ⓜ-ⓂⓄ

h-cⓂ Ⓞ-Ⓜc, ⓂⓂ- -ⓂⓂ Ⓜ-ⓂⓂ ⓂeⓂ -Z >ⓂⓂ eⓂⓄ

ⓄⓂc-, Ⓜc-, Ⓜ- Ⓜ- -ⓂⓂⓂ Ⓜe> >cl Ⓜ-Ⓜ eⓂ ⓂeⓂ ⓂeⓂ,, Ⓜ- ⓂcⓂ ⓂeⓂ Ⓜ'-ⓂⓂⓂ,, ⓂⓂ> ⓂⓂⓂ ⓂⓂⓂ Ⓜ-Ⓜ  
ⓂeⓂ ⓂcⓂ ⓂⓂⓂ -ⓂeⓂⓄ

しかしベルトは気づいたように言った。

ⓄⓂeⓂ...ⓂⓂⓂ ⓂⓂ Ⓜ-Ⓜ Ⓜ-ⓂⓂ ⓂⓂ ⓂeⓂ -Ⓜ "Ⓜ">, "-> "Ⓜ" Ⓜee ⓂⓂ ⓂcⓂc- eⓂ >cⓂ ⓂⓂ ⓂeⓂ, ⓂⓂ> ⓂⓂⓂ Ⓜ-ⓂⓂ  
ⓂⓂ - "Ⓜe"ⓂⓄ

Ⓞ>...Ⓜ-, ⓂⓂⓂ eⓂ -Ⓜ->,, ⓂⓂ eⓂ ⓂeⓂ ⓂeⓂⓄ

-ⓂⓂe ⓄⓂ--, c> ⓂcⓂ, -ⓂⓂ cⓂ ⓂcⓂ ⓂeⓂ Ⓜ--Ⓜ, Ⓜ-Ⓜ ⓂcⓂ ⓂⓂⓂⓂe Ⓜ-ⓂⓂ ⓂeⓂ c> Ⓜ> Ⓜ- -> - ⓂeⓄ  
ⓂecⓂ ⓄⓂee, -Ⓜ ⓂeⓂ- cⓂ ⓂeⓂ Ⓜ--ⓂⓄ

じーっとベルトを見つめるレイン。子犬のような目だ。

だがベルトはすまなそうに首を振る。

eeⓂⓂ ⓄⓂeⓂⓂ-ⓂⓂ,, ⓂeⓂ ⓂⓂⓂ Ⓜ-Ⓜ Ⓜe ⓂⓂⓂ eⓂ Ⓜc-Ⓜ-Ⓞ

h-cⓂ ⓄⓂe ⓂⓂⓂ ⓂⓂⓂeⓂ -ⓂⓂⓄ

ベルトは静かに首を縦に振った。ハインも無言で頷き、一同は緊張を帯びながら静まりかえった。

・実用的なアンティーク

カルテンを出た俺たちは一度レインの家に戻った。

ハインさんとアルシェはカルテでいったん別れることにした。何かあればアンセで連絡を取ることにしている。

俺はテーブルの椅子に座ると、ため息をついた。

「リディアのいる世界にはいけないし、リディアに手紙を送って警告しようにも、あいつの置かれた状況が分からない。まいったな」

紫苑「神の夢現象って私たちが引き起こしたもののよね。その世界ではウォンバスが実在する」

「ああ、で、さっきのベルトの言い方じゃ、リディアは霊界じゃなく地球にいるって話だったな。そんな雰囲気だった」

レイン「おかしいね。メルティアの話じゃメル 320 年に飛ばされたって言ってたけど」

「メルティアが言ってたろ、リディアはいくつかの世界に飛ばされたって。片方がこっちの 320 年、もう片方が……恐らくウォンバスが実在する地球だ」

紫苑「でも、それっておかしくない？ウォンバスの存在する世界で、水月静は初月紫苑と出会って水月リディアを産ませたの？」

「いや、その世界にリディアはいないはずだ。恐らく、俺たちの世界から、ウォンバスの世界にリディアが派遣されたんだ」

「何のために？」

「メルティアは世界の歪みをなくすためとってたが」

レイン「歪みって何？」

「ウォンバスっていう話は本来ウォンバスっていう団体が勝つようにできてるんだ。

だがウォンバスが実在する世界では水月静はニューワイズの神崎琥珀として生きている。

恐らく、その世界では物語を曲げて、本来負けたはずのニューワイズが勝っているんだ」

レイン「それが歪みなよね。じゃありディアは琥珀を止めるために派遣されたと」

紫苑「ただ、そうなるって解せないのが、なんでメル 320 年にも飛ばされたかってことよね」

「そうだな。それは謎のままだ。だが、それよりリディアは今この世界にいるんだろう」

この話になると皆一様に言葉を失う。

しばらく沈黙が訪れ、気まずい空気が流れた。

紫苑「さっきハインさんは、魔法を使ってリディアを観るみたいなことを言ってたけど、そんなことできるのかしら」

「さあ、この時代の魔導師の魔力っていうのはどの程度なんだ」

「実在すら怪しいレベルね。もっとも、ミロクやアルテナさんは相当な術者のようだけど、それでも魔法は歴史の表舞台からは隠れた存在みたい」

「ふむ……となると、無理か」

するとレインが「すん」と鼻を鳴らし、何か思いついたように話し出した。

「じゃあ、魔法が全盛だったころはどうか？」

「どういう意味だ？」

「アルディアの時代なら、魔法が全盛だったよね」

「でも、それって 300 年以上前の話だろ。さっきも言われたが、考えなしに俺たちを時空移動させると、またややこしいことになるんだ」

「確かに 300 年前に戻ってユティアに会うのは無理だけど、ユティアの遺した魔法のアイテムなら、現在でも時を刻んでるんじゃないかな」

「あ……」

紫苑は眉を上げる。

「主人が死んでも時計は動き続けるのよ、紫苑」

レインは得意げに言い放った。

その日は夜遅いこともあって睡眠をとることにした。

次の日の朝、俺たちはアルナを発つことにした。目的地はサプリ。大召還士リディアの育った家がある村だ。

リディアというのは、約 400 年前に産まれた女性で、ルティア国のお姫様だった。

ところがリディア＝ルティアの母親のリーザはアルシェという団体のリーダーをしていた。

対抗団体であるソーンからの暗殺を恐れ、リーザはリディアの身分を隠して北欧に当たるアルダに匿った。リディアの世話をしたのはリーザのいとこのナルム夫妻。

その後リディアはサプリに移り住む。ところがリディアが 7 歳のときにソーンにより、ナルム夫妻が亡くなる。

アデルに村を襲われたリディアは、ナルムを失うが、異世界の少年セレン＝アルバザードに救われる。

リディアはアルシェの第一使徒として働く。以降アルシェがソーンと合併してアシェットになる。

青年になったセレンは人工言語アルカを作り、世の広める。その世界語を持ってアシェットは悪魔テーマスと戦い、これを破る。

この戦いで貢献したのがリディアだ。エルトとサールの両方を召還し、両者の和平の橋渡しもこなした人物だ。

俺と紫苑は若い頃、悪魔シェルテスと戦った。

そのとき俺たちを守ってくれたのは神々の武器である、殲滅武具ヴァストリア。

中でもリディアの身につけていたヴァストリアは紫苑を守ってくれた。

その恩を感じ、俺たちはその後産まれてきた娘にリディアと名付けたのだ。

ヴァストリアを借りる前、俺たちは地球でシェルテスから逃げ回っていた。

必死の戦いで俺たちを救ってくれたのは一冊のノート、玲音の書だった。

これは魔法のノートで、書かれた呪文を唱えれば常人でも魔法を放つことができるというものだった。

そして後々分かったことだが、このノートの持ち主がリディア＝ルティアだったのだ。

その経験があるため、俺たちはリディアの遺した魔法の道具を探そうと、サプリの村へ赴いたのだ。

ハインさんとアルシェにはアルナに残ってもらった。何かあったときにすぐ動けるようにだ。

サプリに行くのは俺と紫苑とレイン。

レインはハインさんを助けた救国の少女なので、事情を知っている政府高官たちにとっては全盛期のジャンヌ＝ダルク並みに人気がある。

だから、もし行く先々で困難があっても、レインが上役を呼べば、たいていのことは顔パスになる。

サプリはアルナの西にある小さな村だ。まず最初にアシェルフィという泉の都に行く。そこからさらに西というルートだ。

アシェルフィは近代化されているため、電車が通じている。

ただ、アセットゆかりの土地とあってはさすがのミロクも好き勝手できなかったようで、アルナのような幾何的な都市にはなっていない。多少、昔の名残を残している。

西アシェルフィの駅に着くと俺たちは電車を降りる。

ここも例に漏れず地下鉄の駅だ。階段で地上にあがると、車道へ向かって歩く。

バス停に着くと、サプリ行きを待つ。10分ほど待つと、サプリ行きが来た。

電気で動いているため、排気ガスはない。また、音も静かだ。

バスの中は地球のものとそう変わらない。

乗る人が少ないため、つり革がない。その代わり移動中に転ばないようにとの配慮で、手すりがある。

もっとも、あくまでローカル線だからこうなっているのだろう。アルバザードにも地球と同じく TPO に応じた様々なバスがあるはずだ。

バスで 10,15 分ほど走ると、サプリに着いた。近いものだ。

下りた先は村の入り口。村の中は車道がなく、バスは通れない。

小さい村なので、簡単に歩いて回れる。それに、しばらく座りっぱなしだったの、少し歩きたいところだ。

「舗装もされてないんだな」

あたりには木の柵が立っていて、何となくここが道であることを示している。

「畑があって、動物がいて……典型的な村ですね」

「牧歌的でいいなあ。俺もこういうところで育ちたかった。どうよ、この空気」

「ほんと、気持ちいいですね」

「毎日銀座の汚い空気を吸わされてる俺だから、余計に違いが分かるよ。

アルバザードはアルナでさえ空気が綺麗だが、ここに来ると自然が多い分、余計に綺麗に感じる」

「木が多いから、夏だというのに涼しいですね」

「そうそう、気候も温暖で夏は冷涼だし、いいところだよなあ。リディアはいい思いしてたな」

するとレインがぼつりつつぶやいた。

「ウチのリディアにも味わせてあげたかったね……」

「……ああ」

せっかく場の空気を良くしようとしているのに、レインはிரらないことを言う。

基本的に俺たち 3 人は根暗でネガティブなので、この中にいると俺がむしろポジティブに映ってしまう。

紫苑はネガティブだが、芯が強く意志が強いという点では、とても明るくて強い。

レインは大人しく冷静で計画的という点ではネガティブではないが、少女時代からいろいろ不幸な目に遭ってきたので、不安になりやすいタチだ。

少し歩くと、リディアの家に来た。看板が立っているの分かる。

400 年も経っているのに、現存している。木の小さな家だ。

「これ、当時のままなのかな」

「流石に改築はされてると思いますよ。銀閣寺だって 2008 年くらいに改修されましたし」

「……だよな」

家の周りには柵があり、近くにはカメラと詰め所が設置されていた。

重要文化財なので保護ということだろうが、この処遇は牧歌的な雰囲気をぶち壊しにしてくれる。

ⓈⓃⓁⓂⓂⓂⓂⓂⓂⓂ

レインが詰め所をノックする。中から人が出てくる。

ⓈⓃⓁⓂⓂⓂⓂⓂⓂⓂ, ⓂⓂⓂⓂⓂ, -Ⓜ (eμ Z-Ⓜ) ⓂcclⓂ



⑥leΛ- l-∩ l-Λ - le μ-ε

⑥∂eΛ∩-Λ∩, a l-∩ <leΛ l4a,, -Λ∩ ∩-l ∩-< μ- e μcλc- >-Λ eμc∩ V∩l ∩--∩ ∩-l l4aε

⑥Jee leΛ- ∩∩ l-Λ ∩aa∩ eμc∩ ∩c∩Jeeε

⑥h3>δ ε

怪訝な顔になる守衛。

⑥∩cΛ∩, leΛ- ∩cμ eμc∩ e μcλc-ε

⑥...∂eΛ∩-Λ∩, ∩aΛ∩,, a ∩∩ <leΛ ∩aa∩ε

⑥a ∩∩ <leΛδ ∩∩- ∩a e∩ -μ∩-le∩δ ∩∩- ∩a e∩ -l∩-Λ ∩'-μ∩-le∩δ ε

⑥∩a -∂c-....ε

⑥∩cΛ∩ Λ∩Λ ∩∩ μc∩ e∩∩ Λ∩-Λ >c∩ e> μcΛ l-l∩, ∩e∩...Λ∩Λ e∩ lecΛ ∩a∩c- ∩ea h-dΛ e h-cΛ -l(εe>Jε

⑥3>...-Λ...∩-μ Vc∩ ∩a Je J∩<ε

⑥∩∩> μeΛ ∩aa∩ Λ∩Λ ∩-∩Λ ∩a <c∩Λ- ∩∩aε

そういつてレインはアンセを動かした。ハインにかけると、すぐハインが出る。

レインはアンセの映像を見せながら、ハインに事情を説明する。

守衛は驚いた顔でハインとレインを交互に見る。

ハインが守衛にレインの言うことを聞くように頼むと、守衛は驚いた顔のまま、俺たちを家へ導いた。

アルバザード人らしいなと思ったのは、彼らの態度だ。

守衛はレインが見知らぬ女だからといつて見下した態度をとらなかつたし、ハインの友人だと知つてへこへこすることもなかつた。

逆にレインも自分の名前をひけらかして偉そうな態度をとらず、始終謙虚な口ぶりだつた。

ハインさんも和やかで、丁寧に守衛に依頼していた。守衛はさすがに興奮して恭しかつたが、慇懃無礼ということはなく、むしろ好意と尊敬のまなざしという感じだつた。

こういうやりとりはどれも日本では見られない。俺は商社でやつてるから、ほかの国も見ているが、ほかの国にも概ね見られない。

特に日本や中国はひどいな。相手が偉いとするや、態度がコロッと変わる。

「やっぱ、働くのも暮らすのも、アルバザードだなあ……」

「え、どうしたんですか、急に。そんなにここの空気が気に入りました？」

「ん？あ、いや……。なあ、リディアを取り返して落ち着いたら、こっちに移つてまた子供でも作ろうか？」

「ええ？どうしたの？そうね、それも良いかもしれない。リディアも受験が大変だし」

「いや、受験はこっちのほうが大変だろ。アルナ大に行かせるには地獄の勉強をしなきゃいけない。あいつは凡人だから」

「アルナ大じゃなくてもいいじゃないですか。あの子は凡人なんですから、西アルナにでも行かせておけば。それでも十分幸せですよ」

「そうかもな……。あー、ほんと、こっちに移住しようかな」

「で、子供を作るのね？」

「そうそう」

「ふふ、子作りだけなら今日にでもしましょうよ」

しなを作る紫苑。口を押さえて笑う仕草が色っぽい。

「う……む」

「今日は紫苑のワルフィですよ。それともこないだみたく、リディアの制服のほうが良いですか？」

からかう紫苑。レインはごほんとかき込んでドアを開いた。

リディア＝ルティアの家は2階建ての小さな家だった。

ドアを開けると、正面はすぐ居間になっていた。居間の奥には暖炉。居間の向こう側には台所。

階段は玄関を開けて右手にあり、上ると2階には部屋がふたつあった。

「なんだか階段から2階の作りは、ウチに似てますね」

「だな。階段寄りの部屋は誰の部屋だ？」

「リディアの部屋だったようです。セレンが居候していたのが奥です。白岡でいうと、私の部屋だったところがセレンの部屋に当たりますね」

「つまり今のリディアの部屋がセレンの部屋に当たると」

「ええ。探すとしたら、階段側の部屋ですね」

「しかし、よくどっちがリディアの部屋だと分かるな。中には入れないから、中には案内板なんてないのに」

「アルディアにこういう一節があるんです。セレンが夜中起きてトイレに行った。その帰りにリディアの部屋のドアが半開きになっていた。

中からはリディアのうめき声が聞こえてきたので、不審に思ってドアを開けた。そしてらリディアは息をどれだけ止められるか実験していた」

「なんだそれ。大召喚士さまは不思議ちゃんだったんだな」

「いえ、死ぬときに必ず呼吸が止まるので、どれくらい親は殺されて苦しかったのか知りたくてやったようです」

「ああ……」

「その後、リディアは窓から侵入したアデルのヴェミに襲われますが、それをセレンが切り伏せます。そういう一節です」

「ふむ、セレンがトイレから戻る途中でリディアの部屋を見たということは、確かにセレンの部屋は廊下の奥になければならない。

となると消去法でリディアの部屋が分かるということか」

部屋の入り口を開けると、中は閑散としていた。

木がむき出しになって壁紙もない部屋。窓からは光が差し込んで明るい、天井には電灯さえない。夜になれば真っ暗だろう。

入って右奥には机があり、窓辺にはベッドがある。そして本棚とクローゼットがある。それだけだ。本当に最低限という暮らしぶりだ。

「リディアは貧乏だったのかな」

「リーザに引き取られるまでは、苦勞したようです」

手がかりがあるとすれば机か本棚だ。

俺たちはなるべく手垢で汚さないよう、守衛から借りた手袋を嵌めて探した。

なるべく現状維持で、動かしたものは元に戻す。

出てきたのはメル2年からメル4年ごろまでリディアが使っていたと思われるノートや本だった。

本は学校の教科書のように、娯楽本の類はなかった。ほかには文学のようなものが数冊ある程度だ。

「どうも、まじめな学生だったようだな」

「アシェルフィの小学校では首席だったようですよ。アシェットは押し並べて成績がよかったとか」

「できすぎた話だ」

「それにしてもすべて古アルカですね。まったくといっていいほど読めません」

古アルカは新生アルカと違って表意文字を使う。1000以上も文字があるので、まったく俺には読めない。

トンパ文字みたいのがうじゃうじゃ並んでいるようにしか見えない。それは紫苑も概ね同じだろう。

自然と俺たちはレインに目がいく。

「大丈夫、任せて。アルナ大には入試に古アルカがあるから」

レインはじーっとノートを読み出した。

「ああ、東大のセンターの国語に古文があるようなもんか」

俺は理解すると、椅子に座った。

「椅子、ちっちゃ。そりゃそうか、このころのリディア氏はまだ幼女だもんなあ。あと、この椅子は手作りみたいだな」

「機械工業がない時代ですからね。手作りっていっても本人が作ったのではなく、村人が作ったんでしょう」

しばらくするとレインが顔を上げた。

「どうだ？なんて書いてあった？」

「ノートは日記みたい。有名な日記ね。貴重な資料だから、写本がたくさんあるよ」

「ええと、つまり枕草子の写本を俺たちが読めるのと同じってわけだな。で、枕草子の原本を目の前にしている感じか」

「よくこんなところに置いておけますね。ふつうは厳重保管するものでしょうに」

「紫苑、それがアルバザードの考え方なのよ。あったものは、あったままに」

無言で頷く紫苑。確かにアルバザードには時間をゆっくり流したり、時間の流れを止めてしまう文化がある。

「この日記の一部は入試によく出るよ。私も小さいころ、暗記したもん。全文を読むのは初めてだけど」

「それで、魔法のアイテムっぽいものは」

「残念ながら、ここに手がかりはないね。このノートはリディアの魔力が弱いころのものだから、玲音の書みたいにはならないし」

「そうか……」

結局リディアの部屋にはこれといったものがなかった。

俺たちは落胆して外へ出た。

「どうする。サプリはハズレだったようだ」

「となると、アシェルフイでしょうか」

「アシェットの住んだ家か。まあ、リディアは思春期をそこで過ごしているのだから、魔力の強さでいえば望みはあるかもしれないな」

・大河鉄平

2022年7月21日

東京都練馬区光が丘

私は並行世界の春夫おじさんの元にはいた。ここは元々静の家だったところだ。

おじさんにウォンバスの件を聞かされた私は、正直困惑していた。

考え込む私を、おじさんは傍観している。

「まあ……悩むよな」

察したようなおじさんの声。

とそのとき、急にグラッと強い揺れを感じた。

「な、なに？」

合わせてドーンという何かが突っ込む音がする。

「ちっ」おじさんが立ち上がり、カーテンを開ける「また揺らぎか！」

「揺らぎ？」

「ニューワイズエンドは断続的に起こるんだ。最初のピークは一昨日。その後も地震のように群発している」

「ピークから次のピークの間に小さなエンドが訪れ、ちょっとずつ悪人が死んでるってことですか」

「そうだ。そしてその小さなエンドを揺らぎと呼んでいる。今も誰か死んだらしい。あの音は車の突っ込んだ音だな。運転手が死んだようだ」

「最初のピークは一昨日だったんですか。近いですね」

一昨日に起きたばかりのわりに、おじさんは随分事情に詳しいな。いくら資料があるからって。

「揺らぎのほうはもっと前から起こってたがな」

「あ、なるほど」

私は納得した。

「あの、つかぬ質問ですが、死ぬのはどういう悪人なんでしょう。殺人犯とかですか」

「ふむ……それは俺にも分からない。兄の資料には何も記されていない。

それに俺は警察じゃない。エンドのせいで死んでることはこの資料で知っているが、死んだやつを経歴や死因までは分からない。

逆に警察はエンドのことを知らないのだから、ここんとこの怪死の原因が謎で仕方ない」

「世の中ではエンドはどのように受け止められているんですか」

「揺らぎのうちは運の悪い事件が相次いだくらいにしか言われていなかったが、エンドが起こってからは終末思想を唱える人間が増えてきたな」

シューマツシソーというのがどんな字だか分からなかったが、私は適当に頷いておいた。唱えるっていうくらいだから、魔法の一種だろうか。多分……ウォンバス関係の？

「ネットじゃ某国の陰謀だの内戦だのテロだのと囁かれているが、どれも荒唐無稽だ。いや、この現実のほうがよっぽど荒唐無稽なのだろうがな」

「真実は小説より奇なり、ですね」

「……「事実」、な」

「あっ……」

私は顔を赤らめて下を向いた。

だが、恥ずかしがってる暇なんて少しもなかった。

次の瞬間、ドカーンという大きな音とともに、マンションが揺らいだからだ。

「まずい、車はウチに突っ込んだようだ。脱出するぞ」

おじさんは走り出した。

「えっ！でも靴が！」

「お前、さっきからずっと履いてるよ！」

「ええっ！？」

思わず足下を見ると、確かに履いていた。

そうだ、元々はディアセルにアルバザードに行く予定だったから、家で履いてきてたんだ。

おじさんについて急いで走る。家を出て階段へ走り、タカタカと下りていく。

「はあっ、はあっ、お、おじさん！待って！私、運動苦手なの！」

荒い息で叫ぶ私。おじさんは「ええっ」と迷惑そうな顔を見ると、速度を緩めた。

私は全身に汗をかいて、ついでに言えば涙まで浮かべ、体中から水を出していた。

どうにか地上にたどり着くと、私は地面にへたりこんでしまった。

「ここは危ない。コンクリが崩れたら巻き込まれる」

「は、はい！」

私は脚を引きずるように走った。

すると前方に煙を出してるトラックが見えた。

「ほんとだ……ほんとにマンションに誰か突っ込んだんだ……」

運転席は血だらけになっていて、中はよく見えなかった。

私は恐怖とショックで膝がガクガクしてしまった。

建物から少し離れると、おじさんは「やれやれ」と言って走るのを止めた。

「こりゃひどいな。光が丘公園に避難するか……？いや、警察の動きを見ておいたほうがいいか」

「私たち、これからどうするんですか」

「そうだな……本当はこれから一緒に行きたいところがあったんだが、自分のマンションが突っ込まれたからな……。

一応現場にいた者として、警察とも話すかもしれん。あと、保険屋に連絡をしなきゃな」  
面倒くさそうな顔のおじさん。

「悪いが、リディア。ちょっと別の人と行ってくれないか」

おじさんは隣のマンションを指さす。

「あそのマンション、見えるだろ？」

「はい」

するとおじさんはメモにサラサラ何かを書くと、私に手渡した。

「ここに書いてある部屋に行きなさい。で、メモを見せれば彼に話が伝わるから」

「彼？」

「変わった人だけど、静の娘ってことなら、良くしてくれるだろう。じゃあ頑張って」

おじさんは家に戻っていった。

私は首を傾げながら、マンションへ向かった。

メモに従って進むと、目的の部屋に行く。

ピンポンを押しても誰も出てこない。

「すみませーん」

何度か呼んだら、年をとった女の人が出てきた。

「はい？えと、どちら様？」

「あの……ここに大河さんっていらっしゃいますか」

「ええと、ウチだけど。誰だっけ？」

「えと、私、水月静の娘なんですけど……」

「ああ、水月君の！へえ、大きくなったわねえ。はいはい、鉄平ね。ちょっと待ってて、今起こすから」

え……？まだ寝てるって……今、お昼……。

しばらくすると、メガネをかけた人相の悪い男の人が、「はい」といって出てきた。

うわ、寝起きだ……。寝起きのおじさんとか、初めて見た。

「あの……私、水月静の娘なんですけど、春夫おじさんにここに来るように言われて」

「え……？弟君に？なんだろう」

話が全然伝わっていないようなので、私はメモを渡した。

大河さんはメモを読むと、「あー」と言って、「ちょっと待ってて」と言い、引っ込んだ。

え？あれ……。私、ここで待つ？ふつう中に入れてくれるとか……。

まあいいか。私はぼーっと突っ立って待ってた。

しかし中々大河さんは出てこない。2,3分が出てくると思いきや、優に10分は待たされた。この暑い中。

「まだかなあ……」

そろそろ10分を過ぎるころ、ガチャッとドアが開いて、少しばかり服を着替えた大河さんが出てきた。

「あ、やっぱり中で待っててもらえないかな。もう少し時間かかりそうなんで」

「あ、はい……」

私は大人しく入った。なんていうか、先に言ってほしいんだけど……。

中に入ると、居間のテーブルについた。

はあ、この人が大河さんね。静から名前は聞いてるわ。静の幼なじみだっけ。

変わり者って聞いてたけど、なんとなく分かるわ。

そしてやっぱり座らせるだけで、お茶のひとつも出してくれないのね。

と思っていたら、大河さんのお母さんとおぼしき先ほどの女の人が、冷たい麦茶を出してくれた。

「あ、すみません。ありがとうございます」

「今日は暑いわねえ。お父さん、元気？」

「あ、はい。おかげさまで」

「また遊びにつれてってくださいって言うておいてね」

「あ、はい。父も喜びます」

それから20分ほどして、大河さんがやってきた。

支度を済ませたらしい。なんだか良い匂いがする。シャワーを浴びたようだ。

私はちろっと彼を見た。大河さんは黒縁のメガネをかけていて、とても痩せている。背は静と同じくらい。腕が白くて細い。

白いシャツに黒い半袖の上着を着ている。下はズボン。年は静の幼なじみだから、40過ぎだろう。

確か大河さんは中学で不登校になって以来、学校にほとんど行かずにバイトをしていたんだっけ。

バイト先が20代でつぶれ、それからは職がなく、転々としているとか。長男なので家があるのもまだいいみたいな話だった気がする。

「待たせた、すまん。じゃあ行こうか」

「いえ、こちらこそ急にお邪魔してしまいました」

ぺこりとお辞儀をする。



大河さんは目を合わせずに玄関を出て行く。

歩いて光が丘駅に行くと、何とか線とかいう地下鉄に乗る。

席はけっこうガラガラ。まあ木曜の午後だしね。

「どこに行くんですか？」

「え？あぁ、飯能だよ」

飯能と聞いて私は反射的に蛍さんのことを思い出した。

大河さんは席が空いてるのに、座りもせず、ドアポールのところに立って、腕を組んで目を閉じた。

「あの……座らないんですか？」

「あぁ、君は座ってれば」

「え……あの……。せっかくだから、何か話をしませんか？」

「え、でも別に話すことなんてないけど」

にべもない。なんだろう……すごーく話しづらいんですけど。もしかして、私、嫌われてる？

「あの……静のこととか、聞かせてほしくて。大河さんもウォンバスの話は知ってるんですよね」

「あぁ」

「このごろ起こってる事件との関連も？」

「あぁ、ニュースを見て気づいた。それから、君のお父さんの弟君から、話を受けた」

春夫君と呼ばばいいものを、わざわざ回りくどい言い方をする。なんだか端々に違和感を感じる人だ。

「私も春夫おじさんから聞きました。ウォンバスを知ってるのは……」

「俺と、彼と、先生だけだ」

「先生？」

「君のお父さんのことだ」

「なんで静君って呼ばないんですか？」

「俺は付き合い合ったころからずっと彼のことを「君」と呼んできた。

俺にはほかに話す相手もないから、君といえば彼のことしか表さない。

かといってここで君と言ったら君自身のことを指すから、誤解を避けるために先生と呼んだ」

「てゆうか、なんで先生なんですか」

「浪人のころ、先生と呼ばれるような仕事がしたいとってた。だから俺は日記の中で先生と呼ぶことにした。それだけだ」

「ふうん……」

やっぱりかなり変人なようだ。静はこの人のことを理解して付き合ってるんだろうなあ。悪い人ではなさそうだが、理解しなければ付き合えないタイプだと思う。

「ウォンバスって静の作った話らしいですけど、小説か何かだったんですか」

「いや、ゲームだね。昔 PC-9800 っていう旧式のパソコンがあって、それに搭載した n88-BASIC っていうプログラム言語で組んだんだ」

「え、静ってゲームをプログラムしてたの？すごい」

「当時ほとんどパソコンなんて持ってるやつはいなかったから、中学生で自作していた彼は相当珍しかったと思う」

大河さんは娘の私の手前もあってか、素直に静をほめた。いや、私がいるからというより、本当にそう思っているような言い方だ。

大河さんは静のことが好きなんだというのが伝わってきた。私はなんだか上機嫌になった。

「大河さんはプレイヤーだったんですか」

「いや、一緒に作ってたんだよ。俺はデザイン担当で、ドット絵とかを作ってた」

「ドット……？」

「そうか、分からないよな」

「とにかく、一緒に作ってたんですね」

「ああ、ちなみにプレイヤーは弟君だった。異様なゲーマーでね。想定外のレベルにまで経験値を稼いだせいで、途中でバグってしまったんだよ。それでレベルに制限を」

大河さんは楽しそうに話す。最初はとっつきにくいと思ったけど、意外と喋るのは好きみたいだ。

人見知りなだけなのかも。ああ、そうか、つまり私に似てるんだ。

何とかって駅で乗り換えて、今度は地面の上を走る電車に乗った。

あ、これは覚えがある。前に飯能に行ったときに乗った。

大河さんは私を気遣ってか、今度は椅子に座った。

だが、私とはあくまで目を合わせようとはしない。

「あの……飯能で何をされるんですか」

「先生の妻だった人間の息子に会わせに行く」

ほんと、一々ややこしい指示表現だ。

「勇太君のことですか」

大河さんは無言で頷く。

「彼に会ってどうするんですか」

「先生を止めてもらう」

「え？」

「ニューワイズエンドがまだ完結していないのは、恐らく結界がまだこの国に残っているからだと思う」

「結界が？ 祁答院霊司たちが守った結界がですか」

「ああ」

「だけど、ウォンバスもペルソナも負けてしまったんですよね。じゃあ静…… 琥珀はいつでも結界を壊せたんじゃないですか。

つまり、エンドはいつでも起こすことができた」

「だが、実際には 24 年ものタイムラグがある。そのラグを説明する理由が見つからない。

結界が残っていたとしか考えられないんだ」

「じゃあ、琥珀は結界を探し続けたか、あるいは見つけていても何らかの理由があって壊せなかったと」

「恐らく。だが、こうしてエンドが始まった以上、残る結界はよくてもあと数個だろう」

「じゃあ、琥珀は今結界のあるところにいるんですね」

「ああ」

「ところで、結界ってどういう形をしているんですか」

「五角形だったり六角形だったり、円柱だったり、色々だ。実体は地面から浮き上がる光でな。

ビルを取り囲むくらい高い緑色の円柱だったりすることもあれば、ドームを取り囲むほどの球形のこともある」

「星形も？」

「そうだ」

「きれい！」

さすが静。良いセンスしてるわ。それでこそ私のお父さん。って、そんなの感心しちゃダメですね……。

「結界ってどうやって探すんですか」

「ウォンバスにはミヴァという間者がいた。時空を自由に移動できる少女だ」

「ああ、メルティアみたいなものか」

「ん？」

「いえ、なんでも。ミヴァですね。で、ペルソナには？」

「那羅奈國という祈祷師だ」

「へんな名前。じゃあニューワイズには」

「そこなんだ。実はニューワイズには間者となるキャラが存在しない。

静愁呪がどうやってペルソナたちの動きを呼んでいたのか、それが謎なんだ」

「じゃあ……もしかして、1998 年以降、琥珀は間者を失い、結界を探せなくなった。

だから、ライバルがいないのに 24 年間も結界が見つからなかったんじゃないかしら」

「と、俺たちは考えている。ただ、1998年以降というのが納得いかない。

ニューワイズはもともと人員不足で、少数精鋭だった。

静愁呪に付いていたのは霞堂裏槍戯という女で、これは結界を感知するような特殊能力があったようには設定上見えない。

一方、ジェノンという魔族もいたが、これはライラという女に殺されている。

そしてジェノンが死んだ後も、静愁呪は結界に現れている。従ってジェノンにも結界の感知能力はなかったことになる」

私はうんうんと頷く。

「97年の戦いで失った人員は、どれも感知能力を持っているようには見えなかった」

「でも98年以降、琥珀は結界の位置が分からなくなったっぽいんですね、仮説のひとつとして」

「ああ。だから、もしかして結界を感知する能力を失ったのは、98年よりも前なんじゃないかと思っている」

「96年とか？」

「あるいはその前か、分からない。例えば96年に力を失い出し、2年かけて徐々に力を失っていったとか」

「なるほど」

「だが、いずれにせよ仮説に過ぎない。単に琥珀が結界を壊せずに手をこまねいていた可能性もある」

「今は仮説の域をでないようですね。

ところで、エンドによって死ぬ人間は悪人って聞きましたが、どんな人間が死ぬんですか。春夫おじさんは分からないって言ってましたけど」

「ああ……これは俺の私見なのだが。多分……先生の嫌いなタイプだと思う」

「は？」

「先生の選ぶ世界だから、先生にとって良いと思う人間だけが残るんだと思う。あの人はかなり選民思想が強かったから、ある意味必然だと思う」

「静の好みからいくと、どんな人が死んじゃうんですか」

「まず……不良とかチーマーとかだろ。クズと呼んで忌み嫌っていたから。

あと、馬鹿な女とか。ギャーギャー騒いだりするDQNとか、周りの悪口とかばっか言ってる女とか、学歴が高くてウーマンリブとか言って「女性の女性の」とか言うやつは死ぬと思う」

「はあ……それは……凄くよく分かる気がします」

——だと思ったわよ。

「痴漢冤罪した女とかは確定で死ぬだろうし、詐欺とかも死ぬだろうな。

猫を虐めるやつも死ぬと思う。人の欠点やコンプレックスを笑うやつも死ぬと思う。

あと、政治的に激しい考えの人だったから、汚職高官はことごとく死ぬと思う。連日のニュースがそれを裏付けている。

それと、金持ちのくせに慈善事業に使わないやつも最近凄い勢いで死んでる。モラルのない医者も死んでるな」

「うーん、大体分かりました。予想通りでした」

「君は先生の娘だから、考えが近いのかもな」

「え？ ああ、そうですね。殺すのはかわいそうだけど、世の中にはいらぬ人間が多いと思います。それで世の中が良くなるなら、殺してもいいと思います」

「それはあれか、君のお父さんがやっていることだから、擁護するのか」

「いいえ、他人でもそう思ったと思います。ウチはお母さんもそういう考えの人ですから。

それでも静が首謀者っていうのはやっぱり効いてます。私は静ラブですから、静のそういうところも、すきなんです」

大河さんは何も言わずに黙った。

電車が飯能に着く。

私たちは駅を出て、暑い太陽の下を歩き出す。乾いたセリアがまた濡れていく。

「あの、大河さんは静と月 1 くらいで遊んでますよね。私のこと、静はなんて？」

「え？」戸惑う大河さん「いや、この世界には君はいないんだよ。弟君から聞いてない？」

「あ……」

口を押さえる私。理解力足りないなあ……。

「そうでした……」

「俺が先生に最後に会ったのは 2008 年だ。彼がウォンバスの世界に行って琥珀になった年」

「なるほど……じゃあ 14 年も会ってないんですね」

「むしろ、そっちの俺はどうしてる？」

「月 1 で静が会いに行ってますよ。ウチは新白岡で遠いから、わざわざ大河さん呼び出すような真似はしてないみたいです」

「そうか……」

ほっとしたような、なんだかよく分からない表情で彼は答えた。

・美杉台

20分ほど歩くと、美杉台に着いた。

「あの、この世界の勇太君って、どこの高校に行ってるんですか」

「多分どこでも同じだとは思いますが、聖望高校ってところに行ってるらしい」

「ああ、こっちと同じです。飯能駅から行けるところですよ。美杉台だったら男の子だし、頑張って自転車で行くかも」

「まあ、あるいはバスで飯能まで行って、そこからスクールバスだろうな」

私は頷いた。

勇太君のマンションまで来ると、駐車場でじっと待つ。

「あの、家には行かないんですか」

「彼の元嫁が俺と会ってくれる理由はないから。先生たちは相当酷い別れ方をしたから、彼女は先生側の人間とは絶対会わないはずだ」

「ああ……。あの、静の離婚の原因って……」

「さあ」と首を傾げる。

数時間待つと、一人の男の子が自転車で乗って駐輪場に来た。

あともう一人、ちょっと不良っぽい感じの男の子が、だらしない姿勢でバイクに乗ってやってきた。

「あ、あれだ。勇太君だ」

「顔、知ってるのか？どっちだ」

「真面目そうなほうです。元の世界で一度会ってるんです。こちらの勇太君は私を初めて見るはずですけど」

「よし、じゃあ話しかけに行くぞ」

ずっと大河さんが立ち上がったとき、突如ボンという音がした。それはレンジで温めすぎたカレーが爆発したような音。

私が思わず顔を上げると、一秒前まで不良君だったものの頭が吹き飛んで無くなっていた。

「いやああ！」

思わず叫び声を上げる私。勇太君も不良の姿に驚いて「うわあ！」と声を上げる。

兄と妹の初めてのコラボレーションが絶叫だなんて、悲しすぎる。

「まずい、揺らぎだ！」

大河さんが顔をしかめる。

でも私は何がまずいのかまでは分からなかった。

「早く広い場所へ」

大河さんが私の手を引く。

「君も来い！ こういう狭いところは危ない！」

「えっ！？ だ、誰！？」

勇太君の肩を掴んで引っ張る大河君。勇太君は困惑しながらも、今不良が目の前で死んだので、何か事件に巻き込まれているのかと思ったようで、比較的素直に従った。

多分、今勇太君の中では、遠くから不良がライフルかなんかで狙撃され、ここには危ないので走れと命じられたように写っているのではないか。

しょせんは高校生だし、大河さんは40越えの大人だ。子供は大人しく従うしかない。

3人で近くの美杉台公園へ走るが、道を曲がったところで大型のトラックがハンドル操作を誤り、街路樹に突っ込んできた。どうやらまたドライバーが死んだらしい。

街路樹のおかげで私たちは潰されずに済んだものの、運悪く街路樹がなぎ倒され、私たちに向かって倒れてきた。

「危ない！」

大河さんは私を突き飛ばすと、木を押さえた。

が、どう見ても力のある人ではないので、重い樹木を押さえることなんてできなかった。

「大丈夫ですか！？」

「ああ、だが、脚をやられたようだ。どんなに悪くても骨折程度で済んでいると思うが、さすがにこれじゃ動けんな」

「私、救急車呼んできます！」

「いい、代わりにケータイを貸してくれ。俺は持ってない。自分で救急車を呼ぶ」

「自分でって……」

「見ての通り、揺らぎは次々に起こっている。時間がない。

トラック事故に巻き込まれた形だから、警察の現場検証に付き合わなきゃならん。俺に付き合ったら時間がいくらあっても足りないぞ」

「え……でも」

「脚を怪我しただけだ。別に死ぬわけじゃあなし、大したことはない。

君は彼と一緒に琥珀を止めるんだ。いったん弟君のところに戻るといい」

「でも……心配です」

「いいから」

「……はい。あの……じゃあ」

勇太君を見る。彼は何が何だかという顔で私を見返してくる。

「行こうか……？」

「え、どこに？」

そりゃそうだよね。

「村上勇太君……でしょ？」

「あ、ああ……そうだけど？」

無口な感じの勇太君。私の世界と何も変わらないね。

「水月静って誰のことか分かる？」

すると勇太君は首を傾げ、少し考えてから首を振る。そうか、蛍さんは静の存在すら教えてなかったのね。

「あなたのお父さんなんだけど」

「え……」動揺を隠せない。

「それと、さっきの不良君とか、このドライバーとか、最近起こってる事件については知っている？」

「ああ……ニュースでずっとやってる……」

「あの一連の事件は、人が引き起こしてるものなの。神崎琥珀」

「琥珀？人間がどうやってこんな事件を？」

「霊力っていう超能力っぽいものを使って。信じられないかもしれないけど、さっきも不良君がいきなり死んだのを見たでしょう？」

「……」

困惑の表情。

「そして神崎琥珀のまたの名は……水月静」

ふたつの情報が一本の線につながり、勇太君は眉をピクッと上げた。

大河さんが脂汗を額に浮かべながら、付け加える。

「君の父親がこの事件の首謀者だ。彼が君くらいのころに作った架空の物語が現実化し、彼はその物語の登場人物に扮している。その登場人物の名前が神崎琥珀だ。

なんせファンタジーが現実化した世界だからな、霊力を使ってあんな風に遠隔地から人を殺すことができる」

「な……」

勇太君は訳が分からないという顔。

「勇太君、話の意味は理解してるんでしょう？ただ、信じられないだけで。でも、本当のことなのよ。

静は高校のころにこの話を作ったから、当時の手書き資料が残っているの。

そこに出てくる登場人物は、現実にこの世界にも存在し、そして大部分が死んでいるわ。

古い新聞を見れば分かる。祁答院霊司や天城華嬢といった、通常日本人では考えられない人名の人たちが、97年ごろに亡くなっているわ。

嘘だと思えば調べればいい。静の遺したファイルも見せてあげる」

「……」

それでも戸惑う勇太君。私より飲み込みと度胸はよくないみたい。



長い沈黙。

すると救急車とパトカーがやってくる音がした。

「まずい、君らは早くどっか行け。警察の尋問に巻き込まれるぞ！」

わざと脅かす大河さん。臆病な勇太君は尋問と聞いて不安な顔をし、小さく頷いた。

「帰る」

しかし、怖じ気づいた勇太君は逃げの選択肢を選んだ。

「ちょ！ダメよ！」

私は思わず腕をとる。

「はなせよ！」

「いやよ、私はあなたにこの話をするために来たんだから！公園に行きましょう」

「いいよ！話すことなんてない」

苛立った声の勇太君だが、もごもご話すのでよく聞き取れない。「いいよ」の部分しか聞こえない。

「自分のお父さんのことでしょう！？」

「そんなの知らないよ。会ったこともないし」

「だからこれから会いに行行って止めるのよ！蛍さんが殺されてもいいの！？」

実際、静の判定だと蛍さんは悪人に該当するとは思えない。静が蛍さんを殺すとは思えない。多分……本当に好きだったから。だけど、こう脅さないと勇太君は逃げてしまう。

「え……母さんが……なんで……」

歩みを止める勇太君。チャンス……。

「ほら、救急車来たぞ、早くっ！」

大河さんが半ば怒鳴るように言う。気迫に押されて勇太君は素直に私に手を引かれる。

美杉台公園に着くと、フェンス越しにグラウンドを見ながら、話を再開する。

「大河さん、大丈夫かな」

「……」

「結構大きな公園だね」

「そんなことより、なんで母さんが死ぬんだよ」

「勇太君さ、お母さんのこと大事？」

「ええ？」

苛立つ声。思春期の男の子は聞かれない質問なのかもしれないな。

「そんなのいいから、なんで死ぬのか言えよ」

「琥珀が殺そうと思えばそれまでだってことよ。琥珀は静。静を捨てた女が蛍さん。あなたはその息子。琥珀はどうすると思う？」

「……」

さすがに蛍さんに分が悪いと踏んだらしく、勇太君は言葉につまる。

うわぁ、今私、凄いやな女に見えてるんだろうなぁ。  
「琥珀ってヤツは……どういう仕掛けで人を殺すんだ」  
「ふう、まず結界とウォンバスについて説明しなきゃいけないよね」  
私は春夫おじさんと大河さんから聞いたことをすべて伝えた。

「……はぁ」

勇太君は長いため息をついた。そして首を振る。まったく理解を越えてしまったようだ。  
「ふたつの世界がつながって、この世界になってしまった……。分かる？」

「あぁ」

勇太君に説明していて思ったんだけど、彼はコミュニケーションが下手だ。

私が話してるのにこっちを見ないし、相槌も乏しい。分かってるんだか分かってないんだか見えないので、「大丈夫？」とか「聞いている？」とかつい言ってしまう。

何度か聞くと向こうもウザそうな顔で「あぁ」と言ってくるんだけど、だったらもっと態度に出しなさいよと思う。

20分ほどの会話だったが、向こうは特に質問することもなく、ただブスツとした顔で聞いているだけ。ほとんど私の講義とっていい。

しかも頭がそんなに良くないのか、間違っ理解したり、整理できてなかったりする。かといってメモにとるわけでもなく、ぼーっとしている。

せめて分からないならメモれよとか思うのだが、これ以上雰囲気悪くしたくないので、私は我慢した。

静はまるでこの子とは逆の性格だ。似ているのは顔とインナーなところだけ。多分、コミュニケーションができない性格は蛍さんに似てしまったのだろう。

「——というわけで、私と勇太君で、琥珀を止めたいのよ」

「あのさ……」

珍しく喋る勇太君。

「なんでお前も一緒なの？俺はそいつの子供だからまだ分かるけど」

「え……」

言葉に詰まる私。

「そもそもお前、誰？」

いぶかる勇太君。そりゃそうだよね……。

「私……リディア」

「は？なにそれ、名前？」

「う、うん。み……初月リディアっていうの」

私は思わずそう答えた。私がさらに別の世界からやってきたとかいう説明をするのが面倒だった。

これ以上ファンタジー要素を増やすとさらに怪しまれるかもしれないと思ったのもある。

「なんでお前も事件に関わってるの？」

しまった、そう来たか。そりゃそうだよね。

「私……も、静の作ったキャラなのよ。リディアなんて名前、ありえないでしょ？」

さて、一度嘘をついたら何個も嘘をつかなきゃならないという王道になってきたわけですが……。

「なるほど。案内役みたいなキャラか。確かに、そんなヘンな服、どこにも売ってないしな」

「え、これ？」セリアを指さす私「あ、そうよね。勇太君、鋭いね」

まあ、実際はアルバザードという現実世界に存在する服なんだけど。でも勇太君は「鋭い」と言われてまんざらでもないようだ。

男の人は女の子に褒められると途端に機嫌が良くなるって紫苑が言ってたな。単純な生き物だ。静もどれだけあの腹黒紫苑に騙されていることか。

勇太君は今、鋭いって言われて喜んだように見えた。多分、蛍さんと同じで鈍いっていうのがコンプレックスなのだろう。

ああ、あれか。私でいうと、「大人びて見えるね」とか「人当たりが良いね」って言われると急に相手に好印象を抱くのと同じか。

「そう、私はキャラなのよ。静が作った」

嘘ではない。私は静によって作られたキャラクター、すなわち個性である。

「でもちゃんと人間に見えるでしょ？体だってあるし。命も持ってるのよ。自覚としては実在の人間となんら変わらないわ」

「ふうん」

「あ、キャラだと思って「何かあったら見捨ててもいいや」とか思っていないよね？」

「はあ？そんなこと思っていないよ。なんだよ、それ」ちょっと不快そうな言い方。

「ごめんね、ごめん」

「ところで、琥珀はどこにいるんだ？それに、どうやって止めろと」

「そこから調べるのが私たちの仕事よ。恐らく、残った結界の破壊を食い止めることになるでしょうね」

「ええと……つまり俺たちがウォンバスになるの？」

「ああ、そうか。そういう見方もできるね」

思ったより頭が悪くないのかもしれない。聞いてないようで、ちゃんと聞いていたらしい。誤解されやすいだけなのかも。

そりゃそうか。静は天才気質だし、蛍さんは大学の首席だったし、血が悪いわけではないか。

「まず、春夫お……春夫さんに会いに行きましょう。静の弟よ。ウォンバスをリアルタイムでプレイしていた唯一の人なの」

「光が丘だっけ……遠いの？」

「電車で1時間くらいかな。あれ、もっと近かったかな。よく分からないや。まあ、そんな遠くはないよ」

「でも、それなら母さんに行っておかないと。それに今日はもう無理だよ」

「大河さんの口ぶりだと、揺らぎは日々起こっていて、エンドは近い。そんなに悠長にしている時間はないと思う」

「でもさ、外に泊まると母さんに色々言われるし」

「それなんだけど、蛍さんには黙っていたほうがいいと思う。離婚した旦那の事件に大切な息子を巻き込ませるなんて、絶対許さないと思う。蛍さんは静と一切縁を切りたいて思ってるんだから」

「けど、母さんの命がかかってるんだろ？」

「自分の命を捨てても、あなたを悪魔静に引き合わせるようなことはさせないと思うよ」

「うーん……でも、黙って行くわけにはなあ……」

勇太君は腕を抱えて悩んだ。

「やっぱり、とりあえず、話してみるよ。明日とかお前のケータイに電話するよ」

「あ、私ケータイないの」

もちろん加入はしているけど、元の世界での話だからね。ここじゃ繋がらない。

「ええ？あ、そうか。お前、キャラだもんな」

実際はキャラだった祁答院霊司たちも持ってたと思うけど、そういうことにした。

ん？でもケータイって当時、あったのかな……。

勇太君は黙って考え込んでいたけど、「とりあえず今電話してみる」といってケータイを出した。

蛍さんにかけるけど、出ない。家にかけても出ない。

「おかしいな……」

「もう仕事は終わってる時間？」

「ああ、いつもならもう……」

蛍さんは何の仕事をしてるんだろう。前に勇太君に会いに来たとき調べたけど、聖望学園って偏差値 60 を越える学校で、結構この辺じゃ有名な進学校なのよね。

大学的には MARCH クラスに行くのが多いから、一流ではないけど、まあ中堅大学には繋がってる学校みたい。

私立なので学費は高いだろう。蛍さんは再婚もせず、よくここまで行かせているな。

そうか、蛍さんは実家に両親がいたからな……。親がなくてシングルマザーだったら、相当ワーキングプアだったはずだ。

なんてことを考えている横で、勇太君が不安な顔で電話をかけていた。

「出ないの？」

「ああ。俺、帰るよ」

「そうだね。でも連絡はどうしようか。私、また明日ここに来るよ。学校終わった夕方くらいに」

「分かった」

と言ったとき、勇太君に電話がかかってきた。

当然蛍さんかと思って反射的に出たが、みるみるうちに顔色が変わった。

勇太君は「はい」とかしか言わないからよく分からないけど、口調からして蛍さんじゃないみたい。

電話が終わると、勇太君は青ざめた顔でいた。

「どうしたの？」

「母さんが……事故に巻き込まれたって」

「えっ!？」

「お前が言ってた揺らぎのせいだと思う。さっきトラックのドライバーが死んだのと同じ時間だった。

母さんは電車に乗ってたんだけど、運転手が死んだんだ。電車が脱線して、母さんは頭を打ったんだって」

「それで……蛍さんは……」

「病院で昏睡中だって……」

ふるふる震える勇太君。静が蛍さんを選んだわけじゃない。でも、結果的に蛍さんは巻き込まれてしまった。

勇太君は……父親に復讐をするのだろうか。自分を作ってくれた父親を……憎むのだろうか。

私は急にお腹が痛くなり、うずくまった。

「どうしたの……？」

「お腹が……急に痛くて……。ストレスだと思う。色んなことがあったから。汗で体も冷やしちゃったし」

「大丈夫か？」

「うん、ありがとう。私、今日はもう帰ったほうがいいみたい。大河さんのことも心配だし」

「ああ……」

「駅、あっちだったよね」

「え、一人で歩いて帰るのか？」

「うん、しょうがないし……」

よろよろ起き上がった私は思わず「あっ」と言ってしまった。

「どうした？」

「お金……ないんだった。電車賃……どうしよう。ケータイもないし、春夫さんも呼べない……」

「はあ……キャラは不便だな。金は貸してやるよ」

勇太君はお財布から 1000 円をくれた。

「ありがとう。明日返すね」

私はお礼を言ってその場を離れた。

はあ……これ、生理じゃないでしょうね。いや、違うか。胃が痛い感じだもん。

なんで胃が痛いかな。紫苑もそんな体質だったような……。静もか……。私ってストレスに弱い体だなあ……。

公園を出たところで、「あのさあ！」という荒々しい声が聞こえた。振り向くと勇太君がいた。

「駅までバス使ったら？」

照れ隠しのようにブスツとした声で言う。

「そ、そうしようかな」

「それと……あの……俺も行ってやろうか」

「え？」

「母さんが昏睡してるから、断る必要もなくなったし。それに、もし揺らぎやエンドが起こって、今度は病院内のオペレーターとかが死んだら、母さんまで死んでしまうかもしれない」

「……うん」

「だからさ、やっぱ早く事件を解決したほうがいいって思ったんだよ。ばあちゃんたちに連絡するから、ちょっと待ってろよ」

「あ……はい」

私はバス停のベンチに座った。勇太君は電話でなんやかんやと話している。

しばらくすると勇太君がこっちに来た。

「腹、大丈夫か？」

「うん。お腹押さえて座ったら良くなってきたよ。やっぱり冷えのせいみたい」

「その服、寒そうだな」

「そうなのよ、クーラー病にすぐなるのよ」

「琥珀——じゃない、作者としては静と呼ぶべきか——静ってやつも、もっと機能性のある服を考えれば良かったのにな」

勇太君は私をキャラだと信じ切っているようだ。

バスが来て、私たちは乗り込んだ。

がたごと揺られて10分程度で駅に着く。やはり乗り物は早い。

それから電車に乗って、光が丘へ向かう。上りの電車は空いている。

「明日が金曜だから、学校を1日休んでもどうにかなるか」

「学校は真面目に行ってるの？」

「ああ、ふつうに」

「ふつう、ね」

「お前は？」

「一応中学3年なんだけど、私立なのよ」

「キャラでも学校に行くんだな」

「だから、この世界じゃ実在なんだって。ふつうの人間と同じよ」

勇太君は私を経済的に養っているのが誰かとか、そういうことは聞かなかった。そこらへんが子供だなあと思う。

「中学から私立か。どこ？」

勇太君は言葉が短く、ぶっきらぼうだ。

「お茶女よ。お茶の水女子大学附属中学校っていうところ」

「あれ、そこって頭いい高校がなかったっけ？」

「お茶高のこと？うん、そうらしいね」

「じゃあ高校はそこに？」

「そう。だから受験生なんだけど、あまり勉強はしなくていいのよね」

「いいな、受験しなくていいって」

「大学は別に受験するから、サボることはできないけど」

「ああ……。で、そこって遠いの？」

「私、新白岡ってところに住んでるんだけど、池袋に行って、そこから茗荷谷っていうところに行くの。護国寺って駅でもよくて、どっちも同じくらいの時間なんだけど」

「ふーん。どれくらいかかんの？」

「片道1時間くらいなあ」

「中学生なのに大変だな」

「勇太君は自転車でしょ？羨ましいなあ」

「ふ……」

勇太君はちょっとにやけた。あ、笑うんだ、この人。

笑うと静に似てるかも。てゆうか、メガネとって髪型整えたら、相当イケメンなんじゃない？

「ねえ、勇太君さ、メガネとってよ」

「え、なんで？」

「素顔が見たくて」

「はあ？嫌だよ」

それきり勇太君は機嫌を損ねたのか、そっぽを向いてしまった。やっぱり気むずかしい子だ。



・アシェルフィの部屋で

>el ʔΔ0, -\elKc

サブりでこれといった収穫のなかった俺たちは、魔法のアイテムを求めてアシェルフィへ移動した。

アシェルフィの街には中央に泉がある。この泉に夜になると月が映ることから、ここは「月が泉に映る都アシェルフィ」と呼ばれている。

リディア=ルティアはサブりにいたが、使徒が集まるとサブりの家が手狭になり、アシェルフィに引っ越してきた。

以降、アシェットはこのアシェルフィで過ごした。

アシェットの家とはいえ、住んでいたのはアルシェの14人とその周辺人物だけだ。

ソーンはアシェルフィの北にあるカンタルという街に住んでいた。クミールの屋敷に居候という形で。

アルシェの家はドーム状になっており、やはりここも重要文化財として立ち入り禁止になっていた。

そこで、先ほどと同じく、レインの助けを借りて中に入れさせてもらった。

「うわあ、ここがアルシェの住んでいた家ね！」

紫苑は興奮しているが、レインの反応はもっと凄かった。

Ⓞ-μe....-μe....ΛoΛ ʃ- (aμ ʔoC μ- (‘-μe,, 0---, 0-----, ΛoΛ ʃ- (aμ leJ μclc- ʃc< μ-(ʔʔⓄ

レインは口に手を当て、突然泣き出した。

うわ……流石はガチの狂信者。

入り口を入るとまず一段低くなった場所があった。

「これ……日本の玄関みたいだな。靴を脱いで中履きに履き替えると」

「アルバザードでもこんなもんですよ。でも、この時代のほうがより日本に近いですね。

現代のアルバザードの場合、ここまであからさまな履き替え所はないですからね」

紫苑は靴下になる。靴がないからしょうがない。

入って右手は居間があった。左手は廊下がある。前方には廊下と階段。

「レイン、中の構造は知ってるか？」

Ⓞh-ɔ, h-ɔʔ ΛoΛ Jeμ leeθ e (a μ- Je h-ɔ/ >eμⓄ

興奮のせいで、言葉がアルカに戻っている。

「レイン、日本語でおkだからw」

「あ、うんっ。あのね、右手は居間よ」

ガチャッと開ける。

「ほら、ここ、ここ。大きなテーブルでしょ。アルシェのみんなで食事を採っていたのよ。そこ、セレンの席ね。隣はメルだったのよ、なんで分かる!？」

「え……と」

引く俺。紫苑に目を流す。

「出会ったころのメルが幼くて、セレンが世話をしていたから？」

「そうよ、紫苑!それでね、あっちが台所ね。使徒は交代で料理をしていたの。アシェルフィの商店街で材料を買っていたのよ。

買い物中に異性魔王に襲われたセレンが一人で魔王を倒したこともあったのよ!」

「う、うん。そうだったわね」

「食器棚にはココアや紅茶が置いてあったの。ミルフがココア好きで、使徒に広めたの。疲れたら、使徒はそういったものを飲んでいたのよ。

リディアはセレンによくお茶を淹れてあげてたらしいわ。この時代は女が魔導師として有力だったけど、それでも女のほうがおしとやかで尽くすのがいいって思われてたの」

「へえ、今と変わらないのね」

玄関に戻る。

玄関を背にして左の廊下を進むと、左右に分かれる。

「左はお風呂よ」

「お風呂？」

「アルシェは大浴場が好きだったの。日本みたいね。ここは泉の街だから、水は豊富だったし」

「へえ」

「あと、訓練所もあるの。反対に、右はリュウの研究所よ。地下になってるの」

ふたたび玄関に戻る。

「奥には部屋があるわ。リーザたちの部屋よ」

正面の階段を上る。途中で踊り場があり、そこで階段は左に折れ曲がっている。

「この手すりをね、メルは小さいころ滑り台にしていたの」

「活発だったのね」

階段を上りきる。

「この階段からメルはリディアをそこの踊り場まで突き落としたのよ」

「え、なんで？」

「痴話げんか!」

生き生きしたレイン。いや、「痴話げんか!」じゃねーだろw

「この階段、吹き抜けがあるでしょ?ほら、下が見える」

「ここもリディアがメルに落とされたとか？」

「ううん、セレンとメルの浮気に怒ったリディアが娘のルシアを投げ捨てたの」

「ちょw それどこのサールだよ」

紫苑「この吹き抜けの名前はセルアで決定ね……」

レイン「すんでの所でクリスがルシアを抱きかかえて助けたんだけど、そのせいでリディアは失脚するの」

「英雄も色々大変ねえ」

2階は円形になっていた。部屋のドアが壁に人数分張り付いている。

中央は屋上へ上がる階段があり、階段のところにはトイレがあった。

「リディアの部屋はそこよ」

まるで住んでいたかのようにサクサク進むレイン。

リディアの部屋を開けると、少女っぽい部屋がそこにはあった。

全体的に部屋はピンクと茶色で構成され、薄い水色のスカートや薄い黄緑のカーディガンが置いてあった。おおむね暖色パステル系の部屋だ。

家具は机やベッドといった簡素なもので、そのあたりはサブリと変わらない。

⑥--...-Mce, -Ca eC eZ e Mclc-⑥

うっとりした顔で深呼吸をするレイン。

⑥-Mce...AoA JcθoM J-θ le l- Mclc- JoC⑥

が、そういった瞬間、埃を吸い込んでレインが咽せる。

「ちょ、大丈夫？レイン」

⑥--...-l Vc-λ, AoA λ- -θθ >cl AoA Jcθc) feJ- le Mclc- la- JoC, oho, oho...⑥

「……。さて、探しましょうか」

紫苑はレインを放置して机を探り出した。

リディア＝ルティアという少女はどうやら歴史に残るのにふさわしい人物だったようだ。史上最強の魔導師かつ召還士という風に語り継がれているが、それはまんざらではないようだ。

机や本棚の中からは相当な魔術の本が出てきた。しかも相当数を自分で書いている。

ほとんどのノートは魔法の研究資料のようだ。

「この時代にこれだけ書くとはい……凄いな」

資料は古アルカのものや新生アルカのものがあった。あと、8年ほど試験運用された制アルカの資料もあった。

「先生、分担しましょう。レインは古アルカの資料を。私は制アルカを。先生は新生をお願いします」

「制アルカをお前が？」

「ええ、制アルカは新生が分かれば推測ができる言語です。文字は同じですしね。それに機械的で人工言語的なので、解読しやすいんです」

「とはいっても、解読は簡単じゃないだろう？」

「ええ、なので天才万能人の私が」

「はいはいw 分かります」

俺たちはそこら辺に座って資料を解読しはじめた。

レインはちゃっかりリディアのベッドに座り、布団をはいでシーツや枕の匂いを嗅いでいた。

「あの……そこの田山さん、なにしてるの？」

ドン引きな顔で紫苑が恐る恐る聞く。

⑥ 3a...3>, 3> ΛσΛ Ισ Μcλc- e( Ιcc(σ eε

「あ、そうすかー」と呆れ顔「ま、早く調べてね」

2 時間経過。

「日記もけっこう多いな。マメな性格だったらしい」

「字は安定して綺麗ね。ページの最初だけ綺麗といったこともないわ。」

制アルカの幻字ができたころは不慣れな手つきだけど、徐々に改善している」

「几帳面な性格だったらしいな。それに比べてこれ見ろよ」

「うわ、なにこれ、きったな」

「セレンの手紙っぽいぜ。ラブレターらしい」

「これ、あまり嬉しくないね」

「だが、リディアは相当大事にしていたみたいだよ。ほら、ここの日記にももらったときのことが書いてある」

「リディアって健気だったのね」

「あと、メルのもあるぜ、ほら。連絡事項を伝えたメモみたいだ」

「え、どれどれ？ うーん、なんか、蛇がのたくったような字ね。ええと、7:30 から早朝訓練なので食事を早く終えるように、か」

「筆圧も弱いな。だらだらいい加減に書いてたみたいだ。あと、文が短い」

「ものぐさって噂は本当のようね」

「あ、絵発見。先生、ほら」

「ん？猫のイラストか。結構漫画チックだな。こんな昔に、こんなアニメ風な画風が知られていたのか？」

「みたいね。地球とは違う進化のようよ。かわいいね、絵」

「これ、内容はレポートだよな。使徒は訓練以外にも座学をしていたようだな。しかし、レポートに絵か。てゆうか、多いな、イラスト」

「こういう絵が好きだったみたい。あ、こっちは魔法の杖で戦ってる絵よ。うわ、かわいい。ほら、リディアに猫耳」

「猫好きだということは分かったが、けっこうヲタい人だったようだな」

「この絵はセレンっぽいね。セレンに守ってもらってる絵みたい」

「ふうん。やっぱり守ってほしいんだな、最強の魔導師様でも」

「そりゃそうよ、女の子だもん」

「ふーむ」

ぱらっとめくると、凄い写実的な絵が出てきた。

「うわ、なんだこれ、むちゃくちゃ巧いな」

「これは……リディアね。こっちはセレン。戦闘中の絵みたい。敵は……ねえ、レイン、これ何の絵？」

「ああ、リディアとセレンの出会いね。サプリを襲ったカイラを倒す絵よ。まだふたりとも子供ね」

「これ、誰が描いたの？」

「セレンよ。あの人は絵が巧かったの」

「へえ……すごいわね」

ぱらぱら見ていると、絵が何枚も出てくる。

「これはヴァルデを掲げるシーンかしら」

「うん、そうね。結婚式の絵だわ」

「これはあまり上手じゃないね」

「セレンは相当練習してようやく巧くなったみたいだからね」

「へえ……」

机を調べていたレインが、「ねえ」と言って俺たちを呼ぶ。

「この机……後ろに隙間があるよね」

「ん？何か落ちて挟まってるんじゃないのか？」

「前に引っ張ろうか」紫苑が手をかける。

壊さないように机を動かすと、後ろからは銀色の棒が出てきた。

「これは……棒？」

「というか、ロッドだろうな。リディアが装備していた武器だと思う」

「ヴァルデじゃなくて？」

「ヴァルデは最終装備だからな。少女時代に使用していた武器だろう」

「じゃあ、これは魔法の杖ってことね」

「恐らく。ただ、俺たちが探しているのはリディアの様子を調べるためのアイテムだ。武器は今いない」

「そうね……」

結局リディアの部屋にはこれといったものがなく、俺たちは落胆した。

「あの……ほかの部屋も見てみない？」

「なんでだ？」

「魔導師はリディアだけじゃないですし」

「確かに。じゃあ誰の部屋を見る？」

「私、フルミネアの部屋に行ってみたいです。彼女は預言者でしたから」

「なるほど」

フルミネアの部屋に入ると、そこは少し薄暗かった。壁に染みついたアルマートの香りが鼻をつく。

カーテンは長く、神秘的な装飾で部屋は覆われている。占い師らしい部屋だ。

部屋をあさっていると、大きな水晶玉が出てきた。

「これは……」

「ヴェストリアのティクナか？」

「いいえ。それは神に返却されたはずですよ。これは恐らく少女時代に使っていた水晶……」

「これ、使えないかな。レイン、どうだ？」

「でも、どうやって試すの？私は魔導師じゃないよ」

「いや、お前も紫苑も魔導師だろ。ただ、力が弱いだけで」

「魔力をブーストするものがほしいですね。あ、さっきの杖を持ってきます」

紫苑は先ほどのリディアの杖を思い出し、取ってきた。

銀のロッドをかざすが、紫苑は急に止まる。

「レイン……魔法の呪文が分からないの……」

するとレインがロッドを取り、呪文を唱え出す。

Ⓞ(c lel <lc- le JcΛJ し-Λ, Me o)C JeJ/ (aM/ Jcl -l -Λ,,

<lc-, Me JcΛJ Mcle- >cZ)c し- (aM ->Ⓞ

すると杖が光を放ち、水晶に訴えかける。

水晶はそれに呼応するかのように光り出し、中に映像が映し出される。

「ん？なんだここは……光が丘の俺ん家じゃないか」

「……ですね」

「ん？ありや春夫だ」

レイン「春夫？」

「俺の弟だ。昔家出したきりだったんだが。……なにしてるんだ」

「カレンダーがありますよ、先生。あれ……2022年になってますね」

「じゃあ今じゃん。そんなわけないだろ。なんで春夫が……」

「あ、画面が変わりました。ん……？この人は、静？」

「んん？あ、俺だ。しかしこの格好はなんだ。袴にメガネ……この札はなんだ？」

「神社っぽいところにいますね」

「なんだ、これ、俺なのか？」

レイン「横に女の人が寝ているね。あれ、紫苑じゃない？」

「私？でも、着物を着て寝ているわ。私、あんな服持ってない」

「なあ……まさかとは思うんだけど、これ、ウォンバスの実在した、神の夢の世界なんじゃないか？」

「え？てことは、これ静じゃなくて……なんだっけ……あ、神崎琥珀？」

「多分……」

「じゃあこの女の子は？」

「夢幻だと思う。神崎の恋人の。2008年に俺を異世界の俺に会わせたとき、お前はこう言ったよな。

異世界の俺は魔法少女に出会って恋をする、と。そして自分を選べと言ったよな。

紫苑、恐らく夢幻の正体はお前だ。この異世界での水月静が神崎琥珀に配役されたのと同じく、初月紫苑は夢幻に配役されたんだ」

「つまり、この世界では、初月紫苑のポストは空席で、2008年を境に行方不明かなんかになったってことですね。で、私は夢幻になったと」

「だと思う」

「で、水晶にこれが映ってるってことは……」

「ウチのリディアはメル320年から、いつの間にか神の夢に飛ばされたらしい」

「なるほど。で、春夫さんの家が映ったってことは、この世界では春夫さんは家出せず、光が丘にいつづけたようね」

レイン「あのさ、テレビついてない？」

「なんか……ニュースを見てるね、春夫さん」

「日付は……7月19日のようだ。一昨日だな。全国で謎の怪死が相次いだらしい。こりゃニューワイズエンドだな」

「ニューワイズエンド？」

「神崎琥珀は本当は負けるはずだったが、異世界の俺は琥珀になって、自分が勝つように努力したようだな」

「ええと、その場合、確か人類の中から悪人だけが減ぶんだっけ？」

「ああ。で、ベルトが言ってたけどさ、そうやって並行世界を増やされると、困るんだってな」

「霊界と人間界が節操なく繋がってしまうから？」

「そう。だから、恐らくリディアが派遣されたのは、ニューワイズエンドを終わらせ、これ以上世界をごちゃごちゃにかき回さないためだと思う」

しかし紫苑はうーんと唸った。

「そこ、そこなんですよ。唯一納得がいかない。あの子が琥珀を止めても、別にあの世界が無かったことになるわけじゃない。

一度生まれてしまった並行世界は存在しつづける。リディアが派遣される意味が分からない」

「確かに……」

頭の痛い話だ。

「それと、リディアは恐らく春夫君の家に飛ばされるんじゃないですか」

レイン「けど、見あたらないよ」

「ううん。ほら、今は日付が19日でしょう？リディアが飛ばされるとしたら20以降よ」

「あ、そうか」

「だから、私たちはこの時点の春夫君にメッセージを送ればいいと思うのよ」

「だな。ウォンバスのことを知ってるのは春夫と大河君しかいない。春夫はこのニュースを見て琥珀の仕業と気づくはずだ。

春夫に手紙を出そう。リディアのことをよろしく頼むと」

レイン「ただ、どうやって手紙を送るのか、だよね」

紫苑「それなんだけど、メルの本棚に何か使えるものがないかな」

「時魔導師だもんな、何かありそうだ」

メルの本棚へ移動する。

「うわ……なにここ、本棚？」

そこはとてつもなく簡素な本棚だった。

元々セットされていた机と本棚とベッドのほかには、小さい四角い背の低いテーブルがあるだけ。

白いテーブルの下には1畳程度のカーペットがあり、テーブルの上には花籠が置いてあった。

メルの本棚はすべて花籠の中に納められており、ほかには何もなかった。

「ものすごい質素な本棚だな。装飾もロクにない」

「メルはそういう人だったらいいですよ。リディアは宝飾が大好きだったようですが」

「対照的だな」

それにしても探すところが少ない本棚だった。机の中もほとんど物が無い。

本棚もノートが転がっている程度だ。



「本は整理されていませんね。乱雑に置いてあります」

「質素ではあるが、几帳面ではなかったようだな」

「日記のようなものはありませんね。ほとんどメモです。連絡事項がほとんどのようです」

「大体のことは記憶していたんだろうな」

「あ、でもセレンからの手紙がいくつも挟んであるわ。やっぱり女の子ね」

「内容は？」

「えーと……まあ、ラブレターですね。セレンは気の多い人だったようです」

「好色だったんだ？」

「かなり。クミールにまで手を出そうとして散々だったそうですよ」

「まあ、英雄なんとやらってやつだな」

「しかし、ラブレターとは、意外に多作でマメなやつだな。言葉で言えばいいのに」

「ねえ、紫苑。メルの記事っぽいものがあるよ。ノートの本に書いてある。これが彼女なりの日記だったっぽいね」

「ん？どれどれ。あー、ってゆうか、ほとんどセレンのことしか書いてないわね」

「彼は果報者だな」

机の中を漁ると、レターセットが出てきた。セレンにもらったラブレターに返信するために買ったようだ。

「あ、日記メモにこのレターセットのことが書いてありますよ。制アルカで書いてありますね。時代が分かります」

「なんて書いてある？」

「ええと――」

お兄ちゃんが手紙をくれた。メルのこと可愛くて、好きだって。じゃあ、お姉ちゃんと別れればいいのに。

メルのこと心配らしい。早く蜚と別れればいいのに。

お兄ちゃんの手紙はいつも嘘ばかり。本当に好きなら、こっちに来ればいい。でも、もしかしたら嘘じゃないんじゃないかって期待する自分がある。馬鹿な女だ。

何も手に付かない。食べることさえおっくうだ。こうしていれば死ぬかと思うが、それでも生きている。最低限は食べてしまう。私は無力だ。

ああ、解放してくれ。この苦しみから。あなたが私の救世主だ。あなたしかいない。私のところに来い。そして私を抱け、抱け、抱け、抱け。息ができなくなるくらい。この細い腰を折って殺すくらい。

やっぱり、私は妹でしかないのか。血も繋がってないというのに。私に回ってくることは、ないのか。

相変わらずつまらない人生だ。生かされているだけマシということか。まあ、苦しんで死ぬよりは、惨めでも生きているほうがいいのだろう。

生きているのが嫌だが、死ぬのは苦しいから嫌だ。ああ、ああ、ただこの時間が恨めしい。早く時に殺してほしい。

自分から死ぬ勇気なんてない。だから、こうして毎日を無駄に流している。

時計、回れ。時計、早く回れ。私を殺せ。自分で自分を殺す勇気のないこの私を！

今日、レターセットを買った。

手紙を返そう。そう思ったから買った。

物を買うのは珍しい。勇気を出して、買った。

でも、手紙は出さない。出せない。きっと私はこれを開けない。10年経っても返さない。

きっと言葉で返す。あるいは、紙を破いてメモにして渡す。こんな女の子っぽいレターを返したり、できない。私みたいな可愛くない女は。

でも、返さないと、返さないと。また蛍に取られる、またお姉ちゃんに取られる。やつらが憎い。死ねばいいのに。

そうだ、10年間出せないで苦しむなら、今10年後に向けて出してしまえばいい。あるいは10年前とか？どっちでもいいけど。

この手紙に魔法をかけておこう。好きな日付と宛名を書くのだ。そこに届くように。

魔法があれば、勇気はいらない。かわいげも、ね」

日記を読んだ紫苑の手がぶるぶると震える。

「先生、もしかして……」

「……期待大だな。ただ、実際このセットを使わなかった恐れがある。この日記にもあるように。そしたら魔法はかかってない」

「確かに……」

レイン「紫苑、レターセットは何通入ってる？」

「あと7組」

するとレインは目を輝かせた。

「じゃあ、メルは何通か使ったはずよ！つまり、手紙に魔法をかけたってこと！」

「なんで？」

「アルバザードが7組でセットを売るわけないでしょう！」

紫苑と俺は「あっ」と大口を開けた。

そうだ、アルバザードで7は忌み数。7部セットで売るやつはいない。恐らくこのセットは元々10部入っていたのではないか。

間違いなく第七使徒メルはこの手紙を何通か使ったはずだ——魔法をかけて。

・勇太と叔父

東京都練馬区光が丘

駅に着くと、私は慣れない足取りで春夫おじさんの家へ戻った。

勇太君は初めての街だから、きょろきょろしながら付いてくる。

「春夫さんは、静の弟だから、あなたのおじさんね」

まあ、私のおじさんでもあるんだけど。

「ああ」

「緊張する？」

「別に……」

相変わらず仏頂面の彼。

マンションに戻ると、先ほど突っ込んだトラックは撤去されていた。

エレベーターで上がると、部屋の前に立つ。

ピンポンを押すと、おじさんが来る音がする。

「あ、そうだ。先におじさんに事情説明するから、ちょっと離れててくれる？」

「わかった」

おじさんがドアを開ける。

「おう、お帰りリディア」

「はい」

私は先に入ると、ドアを閉めた。

「おじさん、勇太君、連れてきたよ」

「おお、よくやった」

「でね、私は静の作ったキャラってことになってるので、おじさんのことは春夫さんって呼ぶよ。いい？」

「ん？なんだかややこしいことになってるようだな。分かったよ」

外に出る。

「入って。もう大丈夫よ」

「おう、どうも初めまして。勇太君だね」

「あ……はい。初めまして」

おどおど話す勇太君。大人には弱いようだ。私に対する偉そうな態度とは全然違う。

「まあ上がってよ。お腹すいてるだろ。出前取るから。勇太君、何がいい？」

中に上がり、テーブルにつく。

「あ、なんでも……大丈夫です」

「寿司でいい？」

「あ、はい」

おどおどする勇太君。おじさんはちょっと首を傾げてチラシを探しに行く。

「ねえ、緊張してる？」

「いや……別に」

あくまで否定する。

おじさんが戻ってきて、お寿司を頼む。そしてお茶を淹れてくれる。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

「そういや、君のお母さんは寿司が苦手だったな」

「え、会ったことあるんですか」

「ここで1年半くらい一緒だったかな。わさびが嫌いだから寿司が食えないとか言ってた」

「ここで……」

「ああ、ここで」

「それで、蛍さんは元気にしてる？」

「それが……さっき電話で事故にあって、病院で昏睡してるって……」

「そうか……。琥珀め、どこまで世の中に迷惑をかければ気が済むんだ」

「あの……僕は何をすればいいんですか」

「琥珀を止めてほしい。ニューワイズエンドを止めるために。ウォンバスの話はリディアから聞いた？」

「はい。でも、息子だからって、何ができるでしょうか。そもそも、居場所も分からないのに」

「その居場所なんだがね、大河君と調べたところ、ある程度目星は付いている」

「あ、春夫さん、そういえば大河さんなんだけど」

「ああ、電話で聞いたよ。大変だったね」

「で、居場所ってどこなんですか」

「最初のエンドが起こったのは一昨日なんだが、揺らぎはその前から起こっている。

そこで俺たちはすべてのニュースを見直し、検証した。揺らぎと思われるものをピックアップし、起こった場所や時間などの検証をしたんだ」

「はい」

「すると、あることに気がついた。最初の揺らぎと思われる、最も古いものは、東京で起こっていたんだ」

「じゃあ、琥珀は東京に」

「いや、ところがね、揺らぎの時系列を整理していると、東京の次は神奈川に集中していたんだ」

「おじ……春夫さん、それってつまり移動しているってことですか」

「そう。で、神奈川の次は静岡。次は愛知。これが何を意味するか分かるか？」

私と勇太君は顔を見合わせ、首を振る。

「やれやれ、お前たち、修学旅行くらい行ったろう」

とそのとき、お寿司が来た。

おじさんはお金を払うとテーブルにお寿司を起き、部屋に行って地図帳を出してきた。

「あ、この地図、学生時代のですか」

「ああ。世界地図なんて学生時代でしかもらわないからな。必然的に大人になっても使い続けることになるもんだ」

「高校の？」

「ああ。この緑のやつはな。ちなみに静のだ」

「へえ。そうなんだ」

「しかし兄も安易なものだ。自分の高校をウォンバスの舞台に選ぶとは」

「ウォンバスの舞台？」

「主人公の祁答院霊司は北城高校の出身なんだよ。言ってなかったっけ？」

「え？」私は目をぱちくりさせた「でも、北城高校は紫苑の……」

聞き慣れぬ名前に勇太君が顔を向けてくる。

「は？そんなはずはない。静は北城高校生だ」

そうか、こっちの世界だと静は北城高校に通っていたのか。少し歴史が違うみたい。

「まあいい、この地図を見てくれ。ああ、食べながらでいいよ。東京、神奈川、静岡、愛知と来て、三重、岐阜と来ると？」

「……京都？」

勇太「修学旅行……」

「そういうこと。新幹線で通ったろ？」

勇太「この順番で揺らぎが起こったんですか」

「そう。ウォンバスで琥珀が結界を壊して回ったルートの逆走だ」

「どうして逆走なんかしたんだろ」

「ペルソナと争っていたニューワイズは、ペルソナに遅れを取らないよう、結界を残したまま次の土地に移ることがあったからだ。むろん事情はペルソナとて同じだがな。

勝利後、琥珀は取りこぼした結界を壊すために、東京から逆走したのだろう」

「けど、ペルソナたちに勝ったのが98年だとして、それから24年も東京で何を……」

「そこは分からんな」

勇太「ただ、琥珀が京都にいるのは濃厚ですか」

「ああ。京都に入ってからというもの、移動の痕跡はない。揺らぎのデータを見るかぎりな」

「じゃあ京都に取りこぼした結界のどこかに琥珀がいるのかなあ」

「恐らくは。そこでふたりには明日早速京都に発ってほしい。新幹線の切符代と旅費を今のうちに渡しておくよ」

「明日？」

「ああ、今日はもう夜だしな。勇太君も泊まっていきなさい」

「あ、はい」

「お家は大丈夫？ 蛍さんの見舞いとか」

「行きたいですけど、時間がないんでしょう？ またあの揺らぎが起こったらと思うと……。それに、昏睡中じゃきっと僕のことも分かりません」

「そう……か」

「家には友達のところ泊まるって言ってあります。母さんの病院にはもう見舞いに行ったことにしました」

「へえ、行動が早いな」

勇太君は少し嬉しそうな顔をした。

・平塚

2022年7月22日金曜日

次の日、私は朝早めに起きると、朝ご飯を食べた。

昨日は夕飯のあと、お風呂を貸してもらった。二日も入ってなかったし、汗もたくさんかいた。

お風呂に入ってすっきりした私は、洗濯機を借りてセリアを洗った。それから乾燥機をかけたけど、生乾きだったので、ドライヤーで乾かした。

これが結構くせもので、時間がかかった。おかげで寝たのが12時すぎ。今日は6時間しか寝てない。中3の少女にとってはけっこうキツイんです。

それと、ハブラシがないのでおじさんに言ったら、買ってきてくれた。

本当はナプキンもほしかったんだけど、恥ずかしくて言えない。

まあ、今日買えばいいや。お金たくさんくれたし。

昨日の夜は、おじさんは気を使ってか、私に一人部屋をくれた。勇太君はおじさんと一緒。

あの二人、会話あるのかな。てゆうかむしろ心配なのは静のほうよね。会話あるのかしら。

勇太君、静に会ったらどうするつもりなんだろう。刺し殺したりするほど憎いのかな。私のお父さんだから、乱暴は止めてほしいんだけど……。

それと、おじさんは電話も貸してくれた。新規にケータイを契約したそう。

自分で2台持っていることになる。そして1台を私に渡した。

これで連絡も取れる。よかった、助かった。

「じゃあ、気をつけて。静のこと、頼むな」

「あ、はい……。じゃあ、行ってきます」

私はお辞儀をすると、マンションを出た。

光が丘駅へ歩く。

途中で薬局を見つけた私は「寄っていい？」と聞いて、中に入った。

勇太君は何も言わずにふたり分の荷物を持ってくれた。中に入ったところで何も言わずに立って待っていた。

意外と優しいところ、あるんだ。

薬局を出ると、スーパーに入ってさらに買い足す。勇太君は文句も言わずに——かといって面倒くさそうな顔で——待っていた。

静なら絶対文句言うな、「早くしろよ」って。こういうところは勇太君のほうが優しくくて良いな。

静だったら「悩む時間が無駄だ。ほしいなら買ってやる。いらなきゃ後から捨てていい。だから早くしろ」って言うに決まってる。

女の長たらしいウィンドーショッピングに付き合えないとは、女の敵ね。

結局、買った物は以下の通り。

鞆、ナプキン、汗ふきパッド、爪切り、携帯ハブラシ、替えの下着、シャツ、手鏡、靴下、むだ毛処理用剃刀、日焼け止め、頭痛薬、胃薬、風邪薬、筆記用具と文房具、ケータイの充電器、水、携帯食、非常食、シュガーレスの飴、ミント、酔い止め、絆創膏、傷薬、虫さされの薬、髪ゴム、癖毛直し、ソックタッチ、ハンドクリーム。

ちなみに勇太君が買った物はガムと十徳ナイフと笛とコンパス。な……なんに使うのよ、これえ……( ; ㄥ )

けどまあ、突っ込まないでおくことにした。男の子って成長遅いから、高校生でもこんなもんなのね。

そのくせ、勇太君は私の荷物を見て、ギョっとした顔を向けてきた。

「お前……そんなに買ったの？」

「え、少ないくらいよ」

「あ……そうなんだ。酔い止めとか……いらなくないか。ひげそりもいらないだろ」

「いーのっ！それにそれはひげそりじゃないよ」

「じゃあ何？」

「お…とこの子は、知らなくていいのっ……」

「……。なあ、地図はいらないの？」

「京都駅で買おうと思って」

「あ、そうか」

「ねえ、先に新白寄っていいかな」

「え、どこ？」

「うち。寄りたくて」

どうなってるのか見てみたい。

「いいけど……」

遠回りになっちゃうけど、私たちはいったん光が丘から新白岡まで電車で行くことにした。

新白は私のいた世界と同じように存在していた。特に代わり映えはない。

自分の家がないなんて信じられないくらいだ。

この世界では紫苑は静に会ってない。じゃあ、紫苑はどうしてるのかな。

……あ、そうか。紫苑はここでは夢幻さんになってるんだ。



ん？でも2008年以降の紫苑が夢幻になったわけで、それまでの紫苑は存在してたのよね。じゃあ、家はあるか。

でも、私は中に入れないうね。でも勇太君には私はここに住んでいるって言ってある。中に入れないうのを見られると厄介だ。

「あのさ、ここで待っててくれる？すぐ戻ってくるから」

勇太君を遊歩道に残し、一人で歩く。そこから5分ほど歩くと、家に着く。

家自体はそこにあったが、人に売られてしまったようで、車も表札も違った。

「やっぱり……」

私はがっくり肩を落として、遊歩道へと戻っていった。

「おじいちゃんたちは、どこに行っちゃったんだろう……」

私が元気のない顔で戻ると、勇太君は心配そうな顔をしたが、特に何も聞かなかった。

それは言葉が見つからないからなのか、優しさからなのか、私には分からない。

会話もないまま私たちは電車に乗る。大宮に着いたら電車を乗り換えて、東京に行く。

新幹線の切符を買おうとしたとき、それは起こった。

「なあ……」勇太君が電光掲示板を見てつぶやく「新幹線、いつだ？」

「え？」

電光掲示板には何も書かれていない。代わりに、お知らせが出てきた。

「えと……事故発生のため、運転を見合わせています……。え、えええーっ!？」

「困ったな……」

「ど、どうしよう。時間ないのに」

「どれくらい待つのか聞いてくる」

スタスタ歩いていく勇太君。あ、けっこう面倒見がいいのね……。しかし、暗い顔で戻ってくる。

「いつになるかわからないって」

勇太君は自信がないと声が凄くぼそぼそする。

「え？」

思わず聞き返してしまう。

「いつか分からないって」

「大きい事故なの？」

「あっちでテレビが映ってる」

見に行ってみると、新幹線が脱線し、ちょうど行き違っていた新幹線と正面衝突したというニュースが流れていた。

ちょうど午前に出た便で、もし白岡に行っていなかったら私たちが乗っていたであろう便だった。

「……危なかったな」

テロップには次々と死傷者の名前が挙げられていく。

私は恐怖でぶるぶる震えた。

これをやっているのは、お父さんなのだ。知らぬとはいえ、お父さんは娘の私をも殺しかねないのだ。

「どうしよう……」

「動いてる電車で少しでも京都に近づくか」

ケータイで地図を出す勇太君。

「これ……が、東海道新幹線だろ。あくまでこれに近いルートで行くのがいいと思うんだよ」

「うん、うん」

きっと静ならもっといい手を思いつくんだろうけど、子供の私たちじゃ新幹線のルートに近い普通の電車を探すことしかできない。

「新幹線を使わないとすると、この東海道本線か」

「東海道本線？それって新幹線と違うの？」

「多分、ふつうの電車だと思う。ほら、新幹線と違う道を走ってるだろ」

ケータイのちっちゃい画面をのぞき込む私。必然的に息がかかるくらいの距離に近づく。

ふっと勇太君の髪からシャンプーの匂いがした。とても優しい感じの匂いだ。と思った瞬間、私は耳が赤くなるのを感じた。

「これ、京都までいけるのかな」

画面をスクロールしていく。ものすごくたくさんスクロールして調べた結果、新幹線とは別のルートで京都まで行っていることが分かった。

ただ、途中には重なるほど近くなる部分もあるみたい。

「新幹線だと2時間だけど、これだとどれくらいかなあ」

「さあ。半分のスピードでも4時間じゃん？」

「そんなに早く着くとは思えないけど……」

「今日中には着くだろ」

東海道本線は幸運なことに運転していた。

電車に乗る前に、駅弁を2つ買っておいた。

新幹線が止まっているので、電車は混んでいた。凄く混んでいるので、私たちは話もせず、黙って下を向いていた。

蒸し暑い……。汗が……。おじさんがくさい……。おばさんもくさい……。勇太君は良い匂い……。こっち来て……。

はじめは順調に動いていたけど、1時間ほどしたらだんだん遅くなってきた。さっきの事故の影響なんだろうなあ。

てゆうか、どうも最初から結構遅かったみたい。ほんとならもう平塚っていう駅に着く頃なんだけど、まだ藤沢だって。

電車地獄が続く。暑いし、気持ち悪いし。しかも私、セリアを着てるじゃない？目立つらしくって、ジロジロ見られる。

はぁ……痴漢されませんように、痴漢されませんように。お父さん、痴漢するおじさんを優先的に揺らいでください。

それから 30 分して、茅ヶ崎に着く。なんという遅さだ。アナウンスによると、何か事故が起こったらしい。まだ原因はハッキリしていないようだ。

茅ヶ崎を出たら、今度は途中で止まってしまった。あぁ、もう。

車内アナウンスが流れる。それによると、小田原というところでさっきと同じような脱線事故があったため、運転が遅れているそうだ。

先ほどまではのろのろと進んでいたものの、復旧のめどが立たないということで、この電車は次の平塚で運転を中止することになったという。

私はがっくりとうなだれた。

結局それから 20 分して平塚に着き、電車を降ろされた。本当に、世も末だね……。

「さて、これからどうするか」

「とりあえず買ったお弁当を食べようよ。お腹すきすぎて死んじゃう……orz」

お昼をベンチで食べる。

「これからどうしようか」

「うーん、とりあえず電車が動くのを待つしかないな」

「今日は京都に着きそうもないね。せつかくおじさんが京都に宿を取ってくれたのに。ほかに中学生とか高校生を泊めてくれるところってあるのかなぁ」

「……分からない。いつも出かけるときは親と一緒にだったから」

「だよね……。はぁ、私たちって子供ねえ」

「ビジネスホテルとかでも、多分子供だと怪しまれると思う」

「公園で寝るのは危ないしね」

「でも、最悪そうなるかも。金があっても引率がいなきゃ何もできない。下手すりゃ補導される」

「おじさんに相談しようか」

電話をかける。

「おう、リディアか。もう着いたかい？」

「あのね、新幹線が事故になっちゃって。東海道本線に乗ったんだけど、それも事故っちゃって。今まだ平塚ってとこなの。今日までに着きそう？」

「平塚あ？そりゃ無理だ。まだ小田原にさえ着いてない。京都どころか名古屋すら遙か彼方だよ」

「名古屋？ああ、「なんとかだぎゃ」の場所？京都より右にあったんだね。大阪の向こうかと思ってたよ」

「お前……兄の娘だから黙ってたが、もう少し勉強したほうがいいぞ」

「それで、宿をどうしようかと思って」

「ふうむ。困ったな。こっちでも事故が起きてな。俺は行けそうにないんだよ」

「そう……困ったね。子供だけじゃ泊めてくれないよ」

「だよな……。うーん」困るおじさん「あ、そうだ。じゃあ人を行かせるよ。車で連れてってもらえ」

「だあれ？」

「藤堂っていうやつで、俺とタメだ。静のダチでもある。明日土日だから、事情が事情だし、きちんと説明すれば助けてくれると思う」

「藤堂さんなら知ってるよ。静、たまに遊んでたから。でも、直接会ったのは私が小さいときで、覚えてないの」

「ただ、こっちの藤堂はお前に面識がないから、そこは覚えておいてな。」

まあ、平塚でかえって良かったよ。あまり遠くに行かれると車も出せん」

「じゃあ、私たちここで待ってればいい？」

「ああ、夜まで待ってくれ。安全な場所だな」

「はい」

電話を切って、勇太君に伝える。勇太君は少し安心したような顔になった。

「これで楽できるね」

「ああ、荷物をいっぱい買わなくてもよかったな」

「あ、ひどーい。あてつけ？」

「いや、ちがうちがう」

私はくすくす笑った。が、そのとき急に頭に電気が走ったみたいになった。

「——痛ッ！」

「どうした？」

「ううん、なんでも。頭の中が急にピシッっていう感じになって。ストレスかな」

「どの辺？」

「この辺……」髪をかき上げる。

「特に赤くなったりはしてないな……」

「そう……あ、いたた……」

「大丈夫か？」

肩に手を置こうとする勇太君。でも恥ずかしいのか、触れずに近づけるだけだ。

私が顔をあげると、目の前がおかしくなっていた。

一瞬理解ができなかった。なぜか視界が緑のもやで覆われているのだ。

行き交う人が緑のプール、しかもゲル状のスライムに煙を足したような気持ちの悪い空間の中で、歩いていた。

みんな、くろ色のシルエットみたいに見える。

そんな中でハッキリと映っていたのは勇太君と自分の体だけ。

「どうなってるの……」

「え？」

「なにこれ、勇太君。この緑の」

「緑？何がだ」

「え、みんな緑じゃない！ほら、あの人も、あの人も」

「……緑……？スカーフのこと？」

「ええっ？違う違う、全部よ。全部苔むしたシルエットみたいに」

「お前……どうしたんだよ……」

「勇太君と私だけ違うの、ふつうなの！でも、ほかはみんなおかしいの！緑なの！」

勇太君は困惑した顔をする。

私は周囲を見渡す。遠くの地面が光っている。あれはなんだろう。緑色の光る線。

「あの光は……なに」

歩き出す私。

「おい、動いて平気なのか！？」

慌てる勇太君。後ろをついてくる。

「ねえ、この線何？」

「線なんてないよ。何もないうって」

「嘘！白緑の線があるじゃない。こんなに明るくて……」

私は線沿いに歩いた。途中で壁があったりして線上をそのまま歩くのは無理だったけど、線を追っていったらだいたいの形が掴めた。線は一部駅の外まで出ていた。

「これ……円形だ。この線……円を描いてる」

「円？でも、俺には見えないぞ」

「私には見えるの、こんなクッキリと！あ……」

「ん？」

「急に、緑の靄が消えた」

「なんで？」

「分からない。線の外に出たから……？」

駅の外に出た私は空を見上げてびっくりした。

「わあっ！何これ！？」

そこには駅を取り囲むように緑の光でできた円柱が立っていた。巨大な円柱だ。

どうして誰も気づかないのだろう。

「円柱だ……これ、なんのイルミネーションなの……」

「いや、俺には見えない。誰も見えているようには思えない」

私がほうと息を吐いたら、急に緑の光が消えた。円柱がガラガラと崩れていく。まるで砂のお城が崩れるように。

「崩れた……」

「え……」

「崩れたの」

線はもうなくなっている。線があった中に入るが、もう靄は見えない。

「なんだったんだろう……」

「疲れ……だと思うけど」

「……だよ」

・藤堂広重

夜になると、ケータイが鳴った。

「あ、もしもし、藤堂と言いますが」

電話の主は低い声の男の人だった。流石に声までは覚えていないが、藤堂さんだ。

「こんにちは、リディアです」

多分、はじめましてのほうがふさわしいのだろう。

「あ、どうも。それで、今近くまで来ました。駅のロータリーで待っててもらえますか」

「分かりました」

「リディアちゃんの特徴は？」

「緑の浴衣を着ているのですぐ分かると思います。あと、静っぽい顔の男の子」

横で如実に勇太君が嫌そうな顔をした。

やがてやってきたのはおじさんと同じくらいの年の男の人だった。

背は静と同じくらい。やっぱりやせ形。顔に特徴はなく、派手でもないし、悪くもない。

髪型もおじさんにありがちで、服もそう。これとって特徴のない人だ。

静やおじさんと違って唇が少し厚く、それで包容力がありそうに見える。そういえば大河さんは薄かったな。対照的だ。

年相応に大人っぽい人で、頼れるおじさんという感じだ。

「どうも。リディアちゃんだよね？」

「はい、わざわざすみません」

「あ……こんばんわ……」

勇太君はまた猫になった。

藤堂さんは静の昔を知っているのか、「似てるなあ」とにやにやした。

「まあ乗ってよ」

車に乗り込むと、独特の匂いに包まれる。

夜の車は静かだ。乗ると急に静かになり、モーター音やウィンカーの音が顕在化する。

「疲れたら寝ていいからね。あと、飲み物買っておいだから、好きに飲んで。コンビニ弁で悪いけど、食べ物も買った」

ビニール袋を渡してくる藤堂さん。うわー、大人だ……。用意がいいし、面倒見もいい。子供に人気がありそうだ。

てゆうか、多分結婚してるな、これは。子供もいそうだ。面倒見がいいもん。人に配慮ができるし。

「ありがとうございます。私たちこそ時間があつたので、買ってあげれば良かったです」

「いいよいいよ。あと、高速使うから、トイレ行きたかったら早めに言っておいてね」

「はい」

ビニール袋をがさがさ弄る。

「勇太君、何飲む？」

「あ、もしかしてコーヒー好きな人いた？今回は避けといたんだけど」

「私は飲みません」

「僕も……」

「あ、やっぱり？勇太君、静の息子だったら飲まないと思ってき、なんとなく」

「え……」

「血って関係あるのかわかんないけどさ、遺伝子が同じってことは胃腸の造りとかも似てるかなって思うんだよね」

「はあ……」

「静、コーヒー飲めなかったから」

「うちもコーヒー飲みませんが、それはお母さんが飲まないからです」

ちょっと反抗的な言い方の勇太君。やっぱり静と結びつけられるのが不快みたい。親の気持ちも知らないで。……と子供の私が申しております。

「藤堂さんってお仕事、何してらっしゃるんですか」

「いや、ふつうのサラリーマンだよ」

「結婚してるんですか」

「うん、大学のとくにね。子供が君らと同じくらいなんだよ」

「男の子ですか？」

そんな気がする。車の中を見た感じ。

「ああ。ゆうまって言ってね、野球やってるよ。明日からの土日は試合なんだ」

ゆうまって良い名前だな。人類の始祖ユーマと同じだ。あ、でもユーマは女か……。まあいいけど。

「勇太君は高校生かい？」

「はい……1年です」

「部活は？」

「特に……」

「ああ、俺と同じだわ、ははは」

今度は静との比較をしなかった。勇太君の反応を見て、静と比べられるのが嫌だって悟ったんだろうな。人を見るのが巧い人だ。

ごはんを食べると眠くなってきた。勇太君もそうらしく、目が顕著に二重になっている。眠いときの静みたいな目をしている。

「藤堂さんは、ウォンバスの話を？」



「俺が静と会ったのは静が大3のときだったから、その話は聞かなかったな。

でも、春夫からちょっとは聞いたことがあったかも。あと、本人も昔話でそんなことを言ってたような気がする」

「現実化して、ビックリしてますよね」

「でもまあ、静のしそうなことだなとは思うよ。昔からそういうファンタジーなことが起こればいいみたいに願ってたから、静にとっては良かったんじゃないかな」

「藤堂さんは怒ってないんですか、静のしたことに」

「まあ、静が俺たちを悪人として殺すわけじゃないしな。なんていうか、確かに悪ではあるけど、静らしい選択だとは思うよ」

「藤堂さんが見てきた静って、どういう人だったんですか」

「え……？ああ、そうだな。純粹で、頭の良い人だったな。人間的には……うん……。ただまあ、凄い人ではあった。色んな意味で」

ふうむ。大学時代の静は私の印象とはだいぶ違うのね。私が知ってる静は紫苑に隸属する可哀想な犬なんだけど。

勇太君が寢息を立て始める。本格的に寢たようだ。目がしかし半開き。こわいよおw  
そういえば静も寢てるときは目が半開きだな。

勇太君は口をかすかに開けて、子供っぽい顔をして寢ている。

「疲れたみたいだな」

「昨日美杉台に押しかけてから、気が休まってないと思います」

「君だって異世界から来て大変だったろ」

「はい。でもまあ、紫苑の子ですから、強いんです」

「しかし、静が再婚した未来から来た娘とは、驚いたよ。勇太君は妹だとは知らないんだってね」

「ええ、ややこしいことになるので」

「まあ、それがいい。で、そっちの静は元気？」

「おかげさまで。紫苑の尻に敷かれてますけど。あ、藤堂さんとはたまに会って飲んでますよ」

「そうか。仕事は何を？」

「銀座の商社です」

「凄いじゃん」

「祖父母がお金持ちなんです。逆玉ってやつで。コネ入社なんです」

「うーむ……」

コメントしがたいといった感じ。

「だから紫苑には逆らえないんです。でもこの紫苑が静ラブラブでして。ウザイくらいイチャイチャするんですよ」

「あ、じゃあ問題なさそうだね。よかった。家族仲が良さそうだね。兄弟は？」

「意外にも、一人っ子なんです。増えそうな匂いはプンプンしてますが」

「まあ、まだ若いもんなあ。お母さんはいくつ？」

「妊娠したのが女子高生のときなので——」

「えっ!？」

声を大きくする藤堂さん。そして苦笑。

「くっく……さすが、静。やってくれるw こっちでは世界を滅ぼし、別の世界ではJK  
ゲットとは、恐れ入る」

小声で言うが、わりと聞こえてる。

「ラジオ、つけるよ。ニュースをチェックしたい。今の時勢、いつ事故が起こるか分から  
んからね」

「はい」

ラジオの音が流れる。なんでか、車の中のラジオって聞き入ってしまう。

しばらくしたら、車が急に混んできた。

「おかしいな……」

ハンドルに顎を置く藤堂さん。

「まさか事故ったとか……」

そのまさかだった。

ラジオから緊急ニュースが流れる。

「先ほど、11時59分に、世界各地で大規模な事故が発生しました。

航空、船舶、鉄道、自動車の事故が各地で同時に相次ぎました。

原因は運転手の急死によるものと見られ、19日から相次ぐ変死との関連性が強いと見ら  
れています。

これまでの報告によりますと……」

「おい……これ、大変なことになったぞ」

「うーん？」勇太君が起きる「あれ……どうしたの？」

「揺らぎよ」

「いや、これは春夫が言ったエンドに近いかもしれん。規模がでかすぎる」

ニュースの言葉は難しくて私にはよく分からなかったけど、藤堂さんが要約してくれた  
ことによると、自動車の道路は事故車両でいっぱいいっぱいだそうだ。

特に大都市部分は壊滅的で、とても車の動ける状況じゃないそうだ。道路もところどころ  
壊れ、まるで戦争で空爆されたかのような悲惨らしい。

「え……じゃあ、車で行くのは難しいってことですか……」

「うーん、残念だけど、そのようだね。道が使えないんじゃないか……」

「ど、どうしよう。電車がダメで、車もダメ。あとは何がありますか」

「そうだな……飛行機もたくさん落ちたそうだから、事後処理で忙しいから、しばらくほかの便も飛ばないだろうな。

あとは船か。船は——飛行機もそうだが——運転手が死んでも即沈まないし、壁に突っ込む恐れもない。だが、ここから京都まで出る船はないだろうな。

しかも京都は太平洋と面していない。せいぜいここから愛知の南端にまでしかいけないだろう。根本的な解決ではないな」

「じゃあ……ほかには……」

「正直言って、思い当たらない」

「ですよ……でも、私たちはそれでも行かなきゃいけないんです」

「ちょっと待ってて、春夫に電話してみる。安否を伝えとかないと、あいつニュース知ったらビビっちゃうし」

「あ、はい」

「そこにコンビニあるから、トイレ行ってきなよ。勇太君も。次いつ行けるか分からないし」

「はい」

トイレから戻ると、藤堂さんは電話を終えていた。

「どうになりました？」

「うん……あくまで行くとしたらだな、恐らく陸路が一番マシだろうということになった」

「道路ってことですか？」

「うん。ただ、車は難しい。早いし全天候OKなんだが、なにぶん車体がでかい。壊れた道や壊れた車を避けては行けない」

「となると……」

「バイクか原チャがあれば一番なんだが」

「原チャってなんですか？」

「……って年だよな、そうだよな。しょうがない……。まあ、でこぼこすぎるところをバイクでっていうのも危ないしな」

「じゃあ……まさか、歩いて？」

「いや、こっから4~500kmあるよ。現代の中学生が歩いてくのは現実的じゃないって」

「ですよ、自分の脚でいくなんで……」

「あ……待てよ」

藤堂さんは目を横に動かす。

「チャリ……」

「……え？」

「バイク乗れないなら、チャリはどうだ？小回り効くし、動かし方は知ってるし、歩くよりずっと早い」

私は勇太君を見た。青白い顔で、うーんと下を向いている。

そりゃそうよね、誰が自転車でこんなところから京都まで行くもんですか。

でも……もし本当にそれしか方法がないんだとしたら？

「あの……実際に京都まで自転車ってありえる話なんですか？」

「江戸時代の人は東海道を歩いて東京から京都まで行ったんだよ。人類的にはぜんぜん可能だ」

「女の人も？」

「ああ、子供でも行ったそうだよ」

「じゃあ、自転車なら現代人の私でも大丈夫そうですね」

希望が見えてきた。そうか、京都って案外近いんだね。

「ただな、当時は土の道で、道路が歩きやすかった。車みたいな怖いものも走ってなかった。

それに、宿は53次あって、だいたい10km刻みで設けられていた。現代だと事情が違うからな……」

「え……と」

「でもまあ、自転車があれば、不可能じゃないと思うよ」

「は……はい」

勇太「でも、自転車ってどうやって手に入れればいいんですか」

「明日になったらホームセンターで買おう」

勇太「マウンテンバイクみたいなやつですか」

「いや、ああいうのは買ってもその日に乗れるわけじゃないんだ。ちゃんとしたやつは納車までに数日かかる。量販店で打ってるのはすぐ乗れるけどな」

明日は自転車を買うことにして、今日はもう遅いのと、到底車を遠くまで動かすことができないということで、藤堂さん含めて車内泊となった。

どこかのお店の店外駐車場に勝手に陣取り、寝ることにした。

私は椅子で座って寝た経験なんてないから、寝にくくて困った。

「リディアちゃん、眠れないだろ。こっちおいで」

藤堂さんは私を助手席に座らせて、椅子を目一杯リクライニングしてくれた。

「で、勇太君は悪いが俺の後ろでいいかな。俺はリクライニング使わないからスペースは大丈夫だと思う」

「あ、はい」

「悪いね、寝にくくて」

「あ、いえ、大丈夫です」

なんか私だけ悪い感じ。でも、やっぱり男の人って女の子に優しいなあ……。

・小田原

2022年7月23日

神奈川県小田原市

車の中で寝たせいか、起きたときは肩がこっていた。腕を回すとバキバキいう。

14歳の少女にふさわしくない音を立てながら、まずはペットボトルの水を飲み、ミントを1粒食べた。

それから勇太君に声をかけて、起こした。

「おはよう。眠れた？」

よくいうよ、私。自分だけリクライニングしてたくせに。

「あ、ああ……」

藤堂さんも起きて、「うーん」と伸びをした。

「さて、朝飯にするか。うわ、まだ8時だよ」

車から出ると、急に空気がすっきりした。あー、いい空気だ。

「ここ、どこなんですか」

「小田原」

「……？」

「神奈川県だよ」

「はあ、神奈川……名前だけは」

藤堂さんは苦笑して歩きだした。

ファミレスに入って食事を済ませる。

和食定食を食べて、トイレで歯を磨いて、用を足す。

今日もまだ生理は来てない。ストレスで早まるかと思ったが、逆に遠のいているらしい。

外に出ると、車には直帰せず、駅前に向かう。

「小田原ってあまり大きくないんですね」

「いやあ、有名な場所なんで、もっと大きいかと思ってたんだが、意外だな」

「何が有名なんですか」

「城があるよ、小田原城」

「へえ……」

まずは自転車を買に行こうということになり、駅前を歩いた。

意外に大型デパートみたいなところがなく、昔からやっているであろう個人商店みたいなところを頼ることにした。

「値段は気にしなくて良いから、丈夫で漕ぎやすいのを選んで」

「あ、はい……。あの、電気自転車ってどうですか」

「俺もさっき考えたんだが、山道に入ったりすると充電のしようがないからな。

電池が切れたらかえってモーターが付いてる分、重くなってしまう」

「なるほど」

「ママチャリはスポーツバイクに比べれば重いが、その分耐久性がある。パンクしにくいタイヤが付いたママチャリが一番だろうね」

「マウンテンバイクとかそういうのがゲットできない以上は、それが一番よさそうですね」

結局、パンクに強いという表示があり、しかも軽快に走れると宣伝してあった銀色の自転車を二台買った。

お店の人に高さを合わせてもらい、外に出る。

「次は本屋だな」

「え？」

「地図がいる。あと、正直リディアちゃんは地理に疎いようだから、走る前によく見ておいて頭に入れておいた方が良い」

「どんなことを覚えておけばいいですか」

「自分が通るルート、その県名と市町村の名前くらいは。どこを通ってどこに行くか、最低でもそれくらいは」

「そうですね」

本屋で地図を探す。ケータイの地図は画面が小さいので、このくらい長距離で移動するときは紙のほうがいいそうだ。

「じゃあ、探してきます」

私は勇太君を呼んで店内を物色した。

「ねえ、勇太君、これなんかどう？」

日本道路地図を差し出す。

「……京都まで行くのに北海道とかいらなと思うけど」

「あ、そうか。でもさ、なんかあったときのために」

「なんかって何？」

無表情でビシッと問う勇太君。もっと愛想がほしいです……。

「いや……別に。じゃあさ、これは？首都圏から 100km までが載ってるって。ほら、昨日の平塚も入ってる」

「これ……熱海くらいまでしかないじゃん」

「えーっ、京都ってもっと向こうなの？」

「この 5 個分くらい向こうだと思う」

「遠いなあ」

「せめて地域ごとに載ってないと」

「地域……っていうと、近畿とかこういうの？」

「近畿だけじゃ意味ないな……。静岡とかもいるし」

「静岡ってどこだっけ。あ、関東か」

「うん、多分」

「いやいや」藤堂さんが苦笑する「東海だよ、あの辺は」

「聞いたことないな……」私たちは声を合わせた。

「大丈夫かな……」藤堂さんは頭を搔く。

「もう、分からないよ。とりあえずこの神奈川県広域詳細道路地図ってやつにしようよ」

「お前、静岡はどうする気？」

「静岡で同じの買えばいいよ。今買ったら荷物が増えちゃうもの」

「ああ、そうだな」

勇太君は納得して頷いた。

本屋を出ると、いったん車で移動し、ホームセンターへ寄った。

「チャリで行くってことは道中山道も通るだろう。寝袋だ水筒だといったものを用意したほうがいい」

藤堂さんはアウトドアが好きだそうで、休みの日はよく車で釣りに行ったりするらしい。だからというわけではないが、私たち子供に比べたら遙かに外ではどう過ごすべきかを知っていた。

最悪野宿もありえるということで、最低限の装備を買っておくことにした。

鞆も大きなナップサックにした。

「あの、寝袋は大きすぎて、車じゃないと運べないんじゃないですか」

「そうだな。あ、こういうのはどうだ？」

それは携帯用の寝袋だった。広げると長さ **2m** もあるのに、畳むとたった **18cm** になる。重さも **160g** くらいで、とても軽い。これならバックに入る。

「まあ、今は夏だから凍死ってことはないが、その代わり虫除けスプレーは持って行ったほうがいいな」

「はい」

「あと、女の子だし、勇太君もまだ一応子供の年齢ってことで、痴漢とか暴漢に気を付けて、防犯スプレーを持っておくといい」

赤い缶を渡してくる。

「これを吹き付ければ相手は目が見えなくなってもがくから、その間に逃げるんだ」

「は、はい……」

「あと、帽子ね。これがないと酷い目に遭うと思う。それに、合羽も」



勇太「けっこう大荷物になりますね」

「人間が文化を保ったまま移動しようと思うと、どうしてもこうなるのさ」

勇太君は何度かゆっくり頷いた。

「着替えももっとあったほうがいいな。でも、案外かさばるんだよな」

「この際、着替えは我慢します」

「まあ、もし不快なら、古いのを捨てて新しいのを買えばいいよ」

「はい」

ホームセンターを出ると、荷物はものすごいことになっていた。

これ、5kgくらいあるんじゃないかしら。お、重いよお……。少女の肩にのしかかる、ぼぶり並の荷重があ……。

駐車場に戻るだけで私は肩が凝ってしまった。

「さて、俺はここまでになってしまうが、二人とも気を付けてな」

「はい、ありがとうございます」

「京都に行くなら国道1号だ。日本橋から三条大橋通って大阪まで行ってるから、迷うことはない。

自転車は高速道には乗れないから、国道1号だけに行くんだよ。ほかの道は寄らなくていい。

ただ、下でも途中でどこかしら自動車専用道路になってると思うから、そこは地図を見て迂回するんだ。

とにかく最短で1号に戻ることに。1号さえキープしてれば迷うことはない。ある意味ルートは簡単だから、安心していい」

「はい、分かりました」

車が身動き取れない状態でこれから自分も大変なのに、藤堂さんは最後まで私たちのことを心配してくれた。

「さて、それじゃあ行こうか、勇太君」

「まずは国道1号だよな。今小田原駅の近くだから、この74っていう道を行って、小田原城を通過って、1号ってとこか」

「あのさ、74って道路の名前？」

「みたいだな」

「道路って名前あったんだ？」

「さあ、そうなんじゃない？」

「数字の周りの四角の形がさ、違うじゃない？これ、なんか意味あるの？」

「え？」

「1号はさ、こう……逆さおにぎりみたいな枠じゃない？74はさ、蜂の巣みたいな形じゃん。何か違うの？」

「さあ……どうでもいいだろ」

勇太君は地図を籠に入れると、さっさと漕ぎだした。

「あっ、まってよおー！」

カシャカシャ漕ぐ私。普段自転車なんて乗らないから、慣れるのに時間がかかる。

それにしても男の子って凄い。苦しげな顔もせず、あっさり遠くまで行ってしまう。

私は一生懸命追いつこうとするんだけど、全然無理。いつも勇太君が先に行ってしまう、信号待ちでようやく追いつく。

追いつくとすぐ青になるから、私は休む時間がない。ただでさえ疲れるのに、休みがない。

1時間もしたら私は汗だくでゼエゼエ言っていた。

お、男の子と一緒に走らせるなんて、ひどすぎる！

しかも勇太君、私が死にそうなのに気づいてない！自分が楽なもんだからって、明らかに気づいてない。

「ちょ……待って……！し……しんじやう……」

箱根湯本というところで、私は待ったをかける。

「えっ！？」

勇太君は「何のことでございますか？」とばかりに振り向く。

こ、こいつ……。

「死ぬって……どこか怪我したのか」

「ちがくて……！私、勇太君と同じ早さで行くなんて無理だよ」

「あ……ああ、そうか。いや、そう思ってゆっくり漕いでただけど……早かったか」

ふえーっΣ(°Д°)

あれでゆっくり！？ど、どんだけパワーがあるのよ、男子って。私なんて1月分の運動をしてしまったよ。

そりゃあ、確かにわたくし水月リディアは運動が苦手ですよ。だからって、これはなさ過ぎる。

いや……待てよ。確か紫苑の昔話によると、紫苑は雨の中アルシアからアルナまでレインと自転車でいったって話だったわね。

紫苑は化け物だからいいとして、レインは私並みに運動神経がない。そのレインでもできたってことは、私にもできるはず。

でも……とりあえず休ませて。

「あの……お昼にしない？ここって観光街って書いてあるし」

「ああ……いいよ」

・箱根湯本

自転車を下りて川沿いを歩く。左手はものすごい山だ。山の中にホテルが建っている。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0066.JPG>

駅前を歩く。土産物屋が中心だけど、観光街なので、おそば屋さんとかがある。

「勇太君、何食べたい？」

「別に。お前の好きなやつでいいよ」

いつも通り、ぶっきらぼうな言い方。本当は食べたいものがあるのに言えないから不機嫌なのかな。それとも、親切の照れ隠しなのかな……。勇太君のことが分からない……。

おそば屋さんに入ると、席に付く。

「何にする？私、山菜」

「あ、俺も」

「勇太君も好きなんだ？」

「あ、うん。野菜が好きだから」

「肉はあんまり？」

「天ぷらとか肉とか、そういうのはあまり好きじゃない」

「あー、だよね、勇太君やせてるもんね」

こっちに悪気はなかったが、勇太君はムツとした顔をすると、そのまま押し黙ってしまった。

「ねえ、お茶頼もうか？」

「……」

不機嫌な顔のまま、聞こえないふりをする。

「ねえ、お茶いる？」

黙って首を振る。

おそばが来るまでの間、勇太君は何も喋らなかった。

「おいしいね」

「……」

「ねえ、聞ってる？」

無言で頷く。

「なんかさっきから機嫌悪くない？私、何か怒らせた？」

「……別に」

聞こえないくらい小さな声で呟く。私は困った顔で俯いた。

「あのさ……痩せてるって言われて、怒ったの？別に痩せてて弱そうねって意味じゃないのよ。自転車だつてちゃんと漕いでたじゃない」

「あ？」

小さい声だが、明らかに不快そうな勇太君。いちいち人の傷を抉るなという目つきを向けてくる。

うわ……やっぱそうだ。私、明らかにいないことを言ったっぽい。でも、なんで怒ってるのか分からない。何が気に障ったのか……。

勇太君、蛍さんの血が入っても基本的に静だから、やっぱり傷つきやすいのね。

いや待て、静の話じゃ蛍さんもプライド激高くて、背の話をされると日記に書くくらい恨みつらみを抱いたとか……。しまった、どっちに転んでも彼はそういうキャラだ orz

さて、どうやって挽回しよう。しかし私はその方法がまるで分からない。なぜかって？友達がいないから。

友達なんて小学校のゆかりくらいで、後はいない。男の子の友達なんていわんや。

私の周りにはいつも私を理解して甘やかしてくれる大人しかいなかった。おかげで私はずっと鳥籠の中で守られてきた。

対等って環境を私は知らないし、仲が悪くなったときの修復方法も知らない。

しょせん静は父親だから、私と絶交することはない。私がおしりを叩かれるか、私がごめんなさいするかは二択だ。

紫苑もそう。おしりの代わりに頬を引っぱたかれるっていう違いしかない。レインなんて私を叩いたことすらない。

困った……困った……どうすればいいんだろう。

結局私は何も話すことができず、落ち込んだ顔でおそばを食べ続けた。

勇太君は私と目を合わせず、ただ黙って食べていた。

お金を払う。外に出る。会話は……ない。

私は後ろを振り返る。観光街なのに、寂しく見える。それは私の気持ちが落ち込んでいるからだろうか。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0077.JPG>

勇太君はどうして黙っているんだろう。不快にさせた見せしめで、私を虐めているのかな。

本当は喋りたいのに、私に罰を与えたいから、我慢しているのだろうか。

いや、きっと違う。そもそも彼は無口だ。私と会話がなくても、なんら苦痛ではない。それどころかうるさいのがいなくてちょうどいいといった感じか。

私は無言で自転車を漕いだ。

だが、そこでふと気づいた。勇太君は何も言わなかったけど、自転車の速度を緩めてくれたのだ。

ちゃんと……私のことを考えてくれているみたいだ。

そうか、私のことが嫌いになったわけじゃないのかも……。

しかし、正直言って私たちはそんな心の機微をやりとりしている場合じゃなかったのだ。湯本の観光街を越えたあたりから、どうも道が変わってきた。

小田原から湯本までは走りやすく、坂もたいしたことはなかった。

ところがどうだろう。急に歩道がなくなり、道がくねくねしだした。山道を縫っていているため、ありえないくらい道が曲がっている。

私の住んでいる場所では絶対に見られないようなカーブだ。そしてその歩道もない道を、大きなトラックが往来している。

トンネルを越え、橋を渡る。

左手には青々とした山。先ほどは綺麗に思えたが、もしかしてこれから山を越えなければならぬのではないかと思うと、急に畏れの対象に感じられる。

「ねえ、勇太君。ちょっと作戦タイム！」

さすがに喧嘩してる場合じゃないと思ったのか、あるいは単に向こうも不安に思ったのか、勇太君は素直に止まって地図を広げた。

「この先ってもしかして山なの？」

「わかんない……箱根ってどこみたい」

「いまどこ？」

「この……橋向ってとこ」

「うわ、何このカーブ。これ道なの！？ありえない！車が向こう側から来たらぶつかっちゃう！」

青ざめる私。

「勇太君、やっぱり自転車なんて無理じゃない？」

「そんなこといったって……電車も動いてないし、車もないし」

「うー、平らな道だって大変なのに……。これから山でしょ。坂が多いんじゃない？」

「……」

不安そうな顔の勇太君。なんといいか分からないようだ。

「でも……昔は子供でも歩いたって藤堂さんが言ってただろ」

「そうだけど……。でも、ほんとに車が危ないよ」

「じゃあ正面衝突しないように、車と同じ場所を走ろう」

「どういうこと？」

「車って左側通行だろ。今俺たちは右を走ってるから危ないんだよ。いったん向こうに行こう」

「でも、後ろから轢かれない？」

「そりゃそうだけど、衝突するよりはマシだ」

「……うん」

私は白い顔で頷いた。男の子ってなんて強いんだろう……。

「あのさ、この向こうって山なのかな。山と山の間に1号を作ったって考えられない？つまり、なるべく平らな場所を」

「かもな」

愛想のない勇太君。

「地図にそういうの書いてない？」

「さあ。分からん」

「分からんじゃなくてさ、調べてよ」

すると勇太君はムツとした顔になり、私に地図を差し出して「そんなに言うなら自分で見れば？」と言い、自転車に乗った。

「え……私、地図の見方なんて知らないもん……」

泣きそうになる私。勇太君は面倒くさそうな顔をして、私を放置した。

あまりに愛想がないので、私もムツとした。

「なによ、自分だって知らないくせに」

負け惜しみを背中に投げる。けど、勇太君は聞こえなかった振りを決め込み、振り向きもせず漕ぎ出した。

信号が極端に減ってきて、しまいにはなくなった。

勇太君は怒ってるからか、私をおいてさっさと行ってしまふ。

私は意地を張って助けを求めなかった。そしたら本当に私を置いて行ってしまい、気づいたら見えなくなっていた。

「ひどい……私を見捨てたわね……。お兄ちゃんのくせに……」

いいもん。どうせ1号に行くしかないんだから、はぐれることはない。

それからしばらく一人で漕いだ。が、本当に体力の消耗が著しい。

それにしても私、何してるんだろ。この服って浴衣に見えるじゃない？浴衣着た女の子が銀色のチャリに乗って汗だくで山道を漕いでるってどういう図よ。

傍から見たらよっぽどヘンなことをしているように見えるでしょうね。

ああ、それもこれも静のせいよ。馬鹿なパパを持つと娘は苦勞するわ。

脚が疲れた……。

止まって地図を見る。大平台というらしい。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0080.JPG>

「え……そんな。まだここなの……。もう一生分自転車を漕いだ気がするんだけど……」

てゆうか、喉が……。なにげに水筒に水を入れ忘れた。

さっきから山道ばかりで、自販機が置いてない。この大平台はまだ人里で、自販機が置いてある。

「ジュース……飲みたい……」

コーラの自販機が置いてある。お金を入れて、コーラを買う。

ふだんはあまり飲まないけど、恐ろしく汗をかいたので、発作的に飲みたくなった。

飲むと、本当に生き返った。私の喉の粘膜がコーラを一生懸命吸収するのが分かった。一滴も残さず内蔵に吸収しようとする。

かつてこんなに水分を欲したことがあったろうか。否。だって私、朝行っただけトイレに行っていない。トイレするだけの水分すらないということだ。

もったいないので半分ほど残すと、籠の中に入れて進んだ。

また地獄のような山道を進む。

勇太君の姿は、ない。きっとつらいのは私だけなのだろう。彼は涼しい顔をして上っているに違いない。

ただ男の子に生まれたというだけで、強靱な肉体が手に入るなんて、不公平だ。

大平台を越えると、また急に山道になった。勾配が凄いいことになっている。

「これは……無理。とても漕げない」

あきらめて自転車を降り、押して歩く。重い自転車が邪魔ではしょうがないのだが、ふと気づいたことがある。

不思議なことに自転車が杖代わりになり、登りがいくぶん楽になるのだ。確かに自転車を押す労力はあるが、車輪がついているので抵抗が少ない。

杖でもあり、滑車でもある。それが山道での自転車なのだ。ふだん家の周りの坂を上るときには気づかなかったことだ。

もうひとつ、私は意識を変えたことがある。地名に対する興味だ。

大平台というのは住宅地で、家が密集していた。なぜ密集しているのかというと、そこだけ平らな土地だからだ。

山道には高低があるが、たまに台みたいに平坦な部分がある。昔の人々はそういうところに家を構えたのだろう。

そしてそこを大平台と名付けた。つまり、山間の平らな部分という意味だ。

こうやって自分の脚で移動すると、地名である程度地形が想像できるようになる。そうできることが死の回避に直結しているため、できざるをえないとでもいうべきか。

もともと、体力のある勇太君にとっては死活問題ではないだろう。しかし、私のような体力のない女の子にとっては、頭を使うことが死の回避になるのだ。

私は地名や道路のくねり具合を見ながら、見えない先の道を想像し、体力の配分を考えた。こうしないと、本当に死んでしまう。

車はほとんど通らない。元々少ないのだろうが、揺らぎのせいでますます少ない。



もしこのまま夜になれば、この山道で野宿することになる。しかしこんな何が出るか分からないところで野宿して、もし熊なんかが出たらどうなるだろう。

そこにあるのは間違いなく死だ。勇太君は戦うかもしれない。紫苑も生き残るだろう。でも私は頭を抱えて腰を抜かすことしかできない。格好の餌になる自信がある。

それにしても不公平だ。紫苑が異世界に行ったときは、お嬢様レインの家でぬくぬくしてた。でも私のこの状況は何？

私は紫苑より頭も力もないのに、なんでこんなに苦労しているんだろう。しかも紫苑より3歳も年下なのに。

「もう……無理よ、こんなところ……。勇太君に電話しよう。一緒に行ったほうが安全に決まってる。こんな山道を自転車で走る女の子がいたいどこにいるのよ、しかも一人で」  
観念して電話を取り出す。

ゴネられたらどうしよう。いや、それでもいい。悔しいけど平謝りして、連れてってもらおう。じゃないと本当にもう無理よ……。

しかし電波は圏外。

「え、なに圏外って。どうして？地下でもないのに」

呆然と立ち尽くす。

「まさか……田舎過ぎて電波が届かない……とか？」

急激に不安に襲われる。死に神に肩を叩かれたような気分になった。ひやーっと汗が流れていく。

「うそ……。こんな誰もいないところで……本当に一人……？」

甘く見ていた。いざとなったら勇太君かおじさんか、最悪警察に電話すれば、命は助かると思ってた。

でも電話が通じないんじゃどうにもならない。しかもこんなところで野宿とか無理すぎる。

道路で寝てたら車に轢かれる。

「え……じゃあ、この森の中で寝るの……？」

ガクブルした。無理に決まってる。こんな、どんな毒蜘蛛や毒蛇がいるか分からない場所で野宿とか。

そんなのきつと静だって無理だ。紫苑でも。まして私なんか。

「ど……どうしよう。もし毒蜘蛛に食われたら、ムヒじゃ治らないよね？」

夜になっても寝れない。山を出るまで歩くしかない。じゃあ、もし雨が降ったら？脚を怪我したら？

てゆうかそもそも電灯さえない場所で夜になったら一歩も歩けないのでは？

そうになったらどうなる？力尽きて行き倒れ……。行き倒れたらどうなる？狐や熊が出てきて……。お食事に。

私は顔を真っ赤にして、声を出さずに泣き出した。

えぐえぐ言いながら、でも歩くしかなくて、自転車を押す。

泣いたら喉が乾いた。

コーラが残っていた。あまり好きじゃないんだけど、こういうときはおいしく感じる。

ところが籠に手を伸ばした瞬間、「あれ？」と呟いてしまった。

中に入ってたはずのコーラがなくなっていた。そして籠がべっとりしている。

「なんで……」

どうやら蓋の閉め方が緩かったのか、こぼしてしまったらしい。最悪だ……。

中にはちょっとしか残っていない。しかも籠の中でしこたま揺れたらしく、炭酸が一切抜けていた。凄くまずい。

私はまた泣きそうになった。アルテよ、どうして私はこんな目に遭わなきゃいけないのでしょうか。

しばらくすると下り坂になる。自転車に乗る。

上り坂は歩き、下り坂は漕がずに乗る。そういう流れが確立してきた。

しかし数十秒もしないうちに上り坂になる。なんだか登りのほうが多いのは気のせいだろうか。

宮ノ下を通過する。

そういえば勇太君は地図もなしに大丈夫なのだろうか。

1号を行けばいいというのは分かってるだろうが、地図のおかげで地形がある程度予想できるの、地図がなくて困っているのではないか。

それにしても全然姿が見えない。本当に女の子を置いて行ってしまったのか。静が見たら息子のことをどう思うのだろう。

「しよせん俺の子か……って言うだろうな。静のことだから」

宮ノ下からはしばらく人里だった。「下」というくらいだから、少し低地なのだろう。

右手に川が見えてきた。うん、川があるということは、下りの流れのようだ。

左手に電車の線路らしきものが見える。こんなところに電車が走ってるんだ……。

小涌谷というところに来ると、消防署があった。

「……いっそこに駆け込んで避難させてもらおうかな。ほかに車も走ってないことだし、峠を越えるまで車で次の街に連れてってもらおうとか……」

私は自転車を止めて中に入った。が、誰もいない。

「おかしいな……」

出たところには郵便局がある。ところがここにも人がいない。

「なんで……」

もしかして、揺らぎのせい？

人員が足りない上に今日も揺らぎで事故が多発。街に人を回さなくちゃいけないから、こんな山間の消防署や郵便局は緊急性を欠くということで人員が街に回された……とか。当たらずとも遠からずだろう。絶望した。この箱根峠に絶望した。

踏切がある。どうせこの電車ももう走っていないのだろうな。先ほどから一両も見ない。

線路を越えると、道がいくつかに分かれていた。左に行く道と、まっすぐ進む道。どっちだろう。

左手に大きな大きな地図がある。自分の地図と照らし合わせて、見てみることにした。

しかしこの看板は相当いいかげんで、全然道が分からない上に、適当に「芦ノ湖」と書いてあるだけだ。こんなんでもどり着けるもんか。

しかも芦ノ湖がまだまだ先ってどういうことよ。私のイメージだと、もう箱根は越えたかと思っていたのに。

ここで一度地図を改めて確認する。そして私はふたたび絶望に陥った。

さすがにもう峠は越えたらうと思っていたが、地図を見るとこれから芦ノ湖だそうだ。

そして芦ノ湖を越えてしばらくしたところが箱根峠だそうだ。

そこが峠なんだそうだ。

しかし私は現在芦ノ湖にすら届いていない。これだけの地獄を越えてきたのに、まだ湯本と芦ノ湖の中間地点にいるのだ。

「無理……」

私はしゃがんで三角座りになった。

「無理……もう一步も動けない。車が来たらヒッチハイクして助けてもらおう。もうヤダ」

しかし車は来ない。湯本らへんでは見たのに、ここでは全然見ない。もしかして山を登っている間に揺らぎが起こったのだろうか。

でも、それならそれでいい。ここはまだ人里だ。山道のように道が森しくないところとは違う。

潰れたお店の軒下で寝ることができる。とりあえず死なずに済む。そして明日になったら帰ろう。

私はすんすん泣いた。

・ 芦ノ湖

そのとき、ケータイが鳴った。

私は慌てて出る。そうか、ここは電波が届くのか。

「は、はいっ」

「あ……俺だけど」

「勇太君っ!？」

「ああ……大丈夫か」

「え……う、うん……あ、ううん。だめかも」

「え、怪我したのか？」

「ちがうの……けど、もう……無理。ねえ、今どこにいるの？」

「さあ、地図ないし。お前は？」

「小涌谷っていうところ。大きな看板があるところよ。線路を越えたところ」

「ああ、さっき通ったな。あのさ、さっきから何度も電話してたんだけど」

「え、だって電波が圏外だったから」

「……そうか。と思って留守電を入れたんだけど」

「え……ううん、聞いてない。入れたの？」

「うん」

「……」

「……」

「で、俺今からそっち戻るから」

「え、来てくれるの？」

「ああ、流石に一人は危ないからな」

「一人は危ないって、私の心配してくれてるの？」

「……別に」

「まっ、待ってる。待ってるから来てね！私、絶対動かないから！」

「……行くまで休んでたら？」

ぶっきらぼうな声。でも、なんだかとても優しく聞こえた。

勇太君はなんと 10 分くらいでやってきた。

「……」

無言。しかし、無言。「お待たせ」とかもなく。

「ありがとう。ごめんね、わざわざ」

「別に……」

「早かったね。案外離れてなかったんだね」

「いや、ずっと下りだったから。上るのには 30 分以上かかった」

「……ごめんなさい」

「別に……。で、お前、漕げるの？」

「あの……ちょっと無理かも。でも、がんばるよ」

「坂がきつければ歩いてもいい」

勇太君は自転車を降りてとことこ歩き出した。

「……大変だったか？」

「う……。遭難したらどうしようって思った」

「だから泣いてたのか？」

「え？」

「さっき……電話で……。声、泣いてたから」

外人の片言ですかって感じの言い方でぼそぼそ喋る。

「それと、目が……赤い」

「あっ……」私は恥ずかしくなってまぶたを擦った。

「悪かったな……」

「え？」

「おいてって……。こんなに差が出るとは思わなかった」

なんだか私は急に嬉しくなった。

「ううん。大丈夫だよ。ありがとう。私こそ、ごめんね」

「何が？」

「なんでも」

二人だと疲れが全然違う。体力の消耗は変わらないけど、不安が軽減されるので、精神の消耗が全然違う。

ユノは削られるけど、ノアが削られない。人間は協力しあって生きるという言葉をこれほど体感したことはない。

「勇太君もさ、疲れたら言ってね。休もうね」

「ああ。でも平気だ」

「え、疲れてないの？」

「ん？」意外そうな顔の勇太君「てゆうか、お前、そんなに疲れたの？」

「え……うん」

「そうか……今日中に峠を越えないとまずいんだけどな」

顎を押さえる。

「地図を見ると、まだ芦ノ湖までけっこうある。湯本からここまでと同じくらいの距離だ。

峠はさらに芦ノ湖の向こう。昼を早く食ったからまだ余裕があるにせよ、時間はもう3時。

日が暮れるのは多分……7時過ぎだと思う」

「あと 4 時間……」

「正直、このペースだと 4 時間じゃ無理だ」

「え……ど、どうしよう」

「芦ノ湖は観光地だと思う。宿があると思う。春夫さんに電話して、芦ノ湖に宿を子供だけで取れるようにしてもらえないかな」

「親の振りして予約を取ってもらいのね。輔導されないかな」

「さあ、店次第じゃないか。経営の苦しいところは OK してくれるかも。ただ今日、土曜なんだよなあ」

暑そうな勇太君。ちょっとバテたのかな。

そうか。勇太君、制服で自転車に乗ってるんだよな。私みたいに風通しのいいセリアじゃなくて、夏服。さぞや暑いだろうに、文句のひとつも言わない。

静だったらどうだろう。私の知ってる静は紫苑の心配ばかりして我慢強い人だけど、若い頃はどうだったんだろう。愚痴っていたかもしれない。

小涌谷を越えると、また完全に山道に戻った。勾配がきつい。

私は体から汗を出すこともできなくなって、歩いていた。

日焼け止めクリームのおかげで肌はまだ痛くないが、純粋な暑さと乾きのせいで肌が悲鳴をあげている。

「リディア、大丈夫か」

「うん……」

といった私は思わず顔をあげた。

「勇太君……今、私の名前呼んでくれた？」

「えっ？い、いや」

私はふふっとほほえんだ。

「嬉しい。ずっとお前扱いだったから」

「……」

「ねえ、もっと呼んでよ」

「はあ？なんだそれ。それより、お前さ」

「お前じゃなくて！」

「……リディア、お前喉渴いてないか」

「渴いたよ。でも買ったコーラがダメになっちゃったの」

「コーラ？」訝る勇太君「なんでそんなもん。スポーツドリンクなかったの？」

「え……そっちのほうがいいの？炭酸のほうがスッキリすると思って」

「ミネラルが入ってないからダメだよ」

「ミネラル？麦茶とかに入ってるやつ？」

「汗と一緒にミネラルが出てくんだよ。だからスポドリとかで補給しないとヤバイ」

「そ、そうなんだ。じゃあ今度はミネラル入ったのにするよ。お茶とか」

「お茶は喉渴くからダメだよ」

「そうなの？」

「詳しくは知らないけど、母さんが言った。それに緑茶とかにはミネラルないし。スポドリがいいよ」

勇太君は止まって鞆を開ける。

「さっきペットボトルを4本買っておいた。全部スポドリで味はまずいかもしれないけど、我慢して。これ、2本やるから」

「え、いいの？」

「まず1本渡すから。で、なくなったら次のをやるよ」

「一気に渡しちゃダメなの？」

「荷物になるだろ」

「……やさしいのね」

「別に……」

「あと、荷物の中身入れ替えるぞ。俺のバックにできるだけ入れる。あと、こっちのチャリの籠にも入るだけ入れて」

「いいよ、いいよ！そこまでしてもらったら悪いもん！」

「既に悪いし」

ビシッと指摘。

「あう……」

私の困った顔を見て、勇太君はくすつと笑った。あ、久しぶりの笑顔だ。

「うそだよ。いいから早く入れて。お前の速度を上げたほうが効率いいんだ」

「勇太君、疲れちゃわない？」

「さっきから言おうと思ってたんだけど、多分俺はお前の5分の1くらいしか疲れてないと思う」

「う、うそっ!？」

「別に呼吸も大して乱れてないし、脚も痛くないよ。ハイキングくらいにしか思っていない」

「不安になったりは？」

「不安？別に。ケータイが繋がらなかったときは、お前が大丈夫か考えたけど」

「男の子ってそんなもんなの？それとも勇太君が強いのか？」

「さあ……俺は別に喧嘩強くないし。ふつうじゃね？」

「いや、喧嘩は性格の問題でしょ。本当の強さってこういう力のことだもん。勇太君、絶対ほかの男子より強いと思う」

「そうかな……」

指で鼻をさする。少し嬉しそうな勇太君。いや、かなりとっていいだろう。

でも多分その心肺能力や持久力は、静譲りなのだ。蛍さんは温情もらっても体育が2だったと静が言っていたし、自宅から100mの距離を走るのに呼吸困難になって泣き出して言っていたから。

だけど私は黙っておくことにした。今度怒らせたなら、それこそ山に捨てられかねない。

それから1時間ほど、私たちは無言で歩いた。喧嘩じゃない。単に喋る気力がないのだ。

とはいえ、それは私だけの話。勇太君にとってはゆったりペースのトレックらしく、鼻歌交じりで歩いている。

ふだん狭いマンションで友達もおらず、閉鎖的に暮らしているからか、こういう自然環境が彼を開放的な気分にしてくれるようだ。

レインから喘息でも移ったんじゃないかってくらいゼエゼエしている私とは対照的に、勇太君は上機嫌で山登りをしていた。

おかしい……。勇太君はほぼ二人分の荷物を持ってきている。もはや私は空手に近い。にもかかわらず、彼は鼻歌交じり。一方、私は喘息ソング。

自分の下着とか生理用品とか、そういうプライベートなものを除き、彼がほとんど持ってきている。

肩に背負っているものだけでも7kgはあるだろう。その上籠の中にも私の荷物がある。蛍さんが見たら「うちの子に何てことさせんのだよ！」状態になるだろうなあ……。

分かったことがある。勇太君は、見かけより強い。筋力と体力がある。細いのは、引き締まっているからだ。静と同じ体質のようだ。

さらにしばらく歩く。ひたすら鈍行で。

私は歩きながらアルディアのことを考えていた。

アセットは冒険のはじめでは子供だった。セレンは10歳。リディアは7歳。

サプリから毎日アシェルフィまで徒歩で通い、使徒を捜すためにソエンの谷を越えたりした。子供の体で森も山も行った。

凄いことだ。きっと幼いリディアは大変だったのではないか。同じ名前の私には、到底できそうにない。

しかし、彼らは空を飛べた。山を最短距離で通過できたのではないか。

地図を見ると箱根は相当くねくねしている。次のポイントの三島まで、直線距離だと大したことはない。人間の腸のように曲がりくねることで、2点間の距離を嫌らしいくらい長くしているのだ。

このせいで私は地獄を見ているのだ。私が使徒だったら、さぞ軽やかに飛べたのだろう。口惜しいという言葉はこういうときに使うんだろうな。

長い長い坂を登っていた私は、突然頭に刺すような痛みを感じ、うずくまった。



「どうした？」

「ううん……」

顔をあげると、目の前が緑の靄で覆われていた。

「まただ……平塚と同じ靄だ……」

「ええっ？」

相変わらず私と勇太君だけクリアに見える。しかし周りはずべて靄に包まれている。

辺りをぐるっと見回すと、視界の遠くに私たちと同じく靄に包まれていない人影が見えた。

「んん！？」

しかし人影は私に気づくとサッと消えてしまった。

その後、緑の空にひびが入り、ガラスが割れるように「靄硝子」が崩れていった。

「消えた……」

「またか……。疲れのせいなのか？」

「ねえ、今あっちのほうに誰か見えなかった？」

「は？……いや、誰もいなかったと思うけど」

「……そう」

それからしばらく歩く。

「ねえ、まだ上二子山の上側みたいね。芦ノ湖でさえまだなのに、もう4時を越えちゃった。今日中に峠を越えるのは無理みたい」

「かもな」

短い勇太君の言葉。やっぱり足手まといの私に怒っているのかな。

ところが、ふたたび絶望しかけた私たちに奇跡が舞い降りた。

「あのさ、そこの看板に国道1号最高地点って書いてある」

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0092.JPG>

「えっ？あ、ほんとだ。凄く高いところまで上ってきたのね。すごいね！」

「いや、そういうことを言ってるんじゃないかと、これから下りになるってことじゃないか？」

「あ……そうか！」

坂を登り切ると、確かにそうになっていた。見渡す限りの下り坂。

私たちは急に元気になって自転車に乗った。

それからは軽快の二文字だった。

坂は延々続き、登りの6~8倍もあろうかという速度で進んでいった。

今度は速度の出し過ぎによるブレーキの調整に気を遣うようになった。

さっきの状態からすれば、まったくもって贅沢な悩みだ。

大柴で左折と覚えておいたのだが、ちょうどそこは下り坂だったため、一瞬にして通過してしまった。

どこがチェックポイントの大柴だったか分からないくらいあっさりスルーして、元箱根に着く。

ありえないことに、ほんの5分程度で最高地点からここまで来てしまった。

芦ノ湖だ。ついに来た。

・箱根峠

「勇太君！これで峠は越えたのね！」

「いや、箱根峠はこの先だろ」

「そ……そうか」

「峠ってくらいだから、また登りだと思う」

「ねえ、ちょっと休んでいい？時間ないのは分かってるけど」

勇太君は湖を見てみたかったのか、「いいよ」と快諾した。

柵のところに自転車を止める。フェリーが湖の上に浮かんでいた。

「すごい。ねえ、あれに乗れないかな？」

勇太君は地図を見る。

「いや、方向が違う。北西にいくとまずい。どっちかというとな西寄りに行かなきゃいけないから」

「そっか……」

はあとため息をついてベンチに座る。脚がもうダメ。私が何か悪いことしたのってくらい痛い。

勇太君もベンチに座った。けど、不自然なくらい距離を取っている。間に幽霊でも座ってるんですかというくらいに。

「ねえ、こっち来てよ。どうして距離を取るの？」

「え……」

「……もしかして、私汗臭い？」

「は？」意外な顔の勇太君「いや、それはまったく。むしろ」

「むしろ？」

「……いや」

勇太君は黙った。私は無言で一歩右に詰め寄った。

「来んなよ……」

迷惑そうな声。

「肩貸してほしいの」

「ええ？」

如実に嫌そうな声。

「寄りかかりたいの」

「じゃあベンチで寝てればいいじゃん」

「……」

私は黙って下を向いた。そして寂しそうな声で呟く。

「本当にそうしてほしいなら、そうするね……。リディアは堅いベンチで寝ます……」

「わかったよ……」しょうがないなという舌打ち。

「えへ」

あからさまに可愛こぶって、肩に頭を置く。

静が嫌いな蛍さんは、私のことも嫌いだろう。もしこのシーンを見たら、激怒するのではないか。

「お前さ……」

「うん？」

「普段から男子にそんなに懐くわけ？」

「え？ううん、男子の友達なんていないし、話す人もいないよ」

「……そうか」

確かに私、懐いてるな。お兄ちゃんだと思ってるから壁が薄いのかも知らない。

そうか、向こうは妹だって知らないんだもんね。そりゃ不審にも思うか。

「そもそも私、友達いないんだ」

「ふうん」

「勇太君は？」

「まあ……多い方じゃないけど」

あ、見栄張ったな。素直に少ないって言えばいいのに。

「湖、大きいね。箱根って来たことある？」

「さっきの湯本ってところは家族で来た」

「そっか。蛍さんてどんな人？」

「別に……ふつう……だと思う」

「静のせいで……苦労した？」

「俺には分からない。俺も父親のことなんて詳しく聞かなかったし」

「恨んでる？」

「誰を？」

「静」

「別に。会ったこともないし」

「静のせいで離婚したんだとしても？」

「母さんが選んだことで、俺には関係ない」

「関係なくはないでしょ」

「関係ねえよ。親の都合だろ。別に俺には関係ない。離婚したけりやすりゃいいじゃん」

「でも、養育費ももらってないんでしょう？つらくないの？」

「別に。てゆうか、会ったこともないやつから毎月送金されて「お前のお父さんですよ」っていうツラされるほうがウザい」

「……そういうもんか。もっと私はお父さんに会いたくて寂しがってるんだと思ってたよ」

「生まれたときからいなきや、そんなもんだ。京都で会ったとしても親とは思えない。俺にとっては揺らぎを起こしてる張本人でしかない」

私は何も返せずに黙った。

休憩後、痛む脚を我慢して、自転車を押した。

芦ノ湖から箱根峠まではまた登りになってしまったからだ。

はあ、下りで楽できたのは10分もなかったか。

でも、体が慣れたのか、あるいは心が慣れたのか、さっきほどつらくなかった。

また、幸運なことに、箱根峠までは大した距離がなかった。最後のひとふんばりって感じ。

峠には車のための休憩所があった。「道の駅・箱根峠」って書いてある。

さっき休んだばかりなので、先に進みたいところだけど、ここがどのくらい高いのか興味がある。

「ねえ、左側、凄い景色よ。急いでるけど、ちょっと景色を見てみない？」

「観光じゃないだろ」

にべもない。

「どのくらい高くまで来たとかさ、これから先の地形を見たりとかさ」

「……わかった」

しぶしぶ自転車を止める勇太君。

柵のところから下を見下ろす。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0103.JPG>

「わー！凄いや、勇太君！」

「……ああ」

「こんなに登ってきたんだね、私たち！」

素直にはしゃぐ私。勇太君はにこっとして、気持ちの良さそうな顔で眼下を見た。

「高いな……」

ぼそっと呟いた。それが彼の感想だった。

高いな。うん、高いね。なんか、嬉しかった。

箱根峠を越えたときはもう6時ごろになっていた。

実はこれがとてもまずいのです。だってあと1時間で日暮れ。なのに三島まではまだまだある。

ところが、ここに来て神様は私たちに味方した。なんと、峠を越えたらひたすら下り坂だったのだ。

今までほとんど下りがなく上りばかりだったので、その蓄えを一気に返してもらったというわけだ。

箱根峠は一度越えると後はひたすら下りなんだということを学んだ。

ふつう山って峠を越えても上下を繰り返すものだけど、ここはとにかくひたすら三島まで下り。上りはほぼ皆無。終わりのないスキー場みたい。スキーしたことないけど……。

で、逆に気を付けなきゃいけないのがブレーキ。とにかく急勾配の坂をひたすら下る。ブレーキはかけっぱなし。

でも、あまりブレーキをかけすぎると摩擦でタイヤがどうにかなっちゃいそうな気がして、かけては緩めを繰り返した。

なんと1時間ほどノンストップで坂を下り続けた。もっと早い自転車なら40分くらいでいけたらどうか。

その間一切会話はなし。している余裕などない。ひたすら転ばないように気を付けて下っていく。この速度で転ぼうものなら大怪我は確実だ。

そして最悪に怖いのが、今になって現れた後続車。

トラックにとって私たちは邪魔でしかない。かといって道の端っこは危なすぎていけない。だから道の真ん中を走る。

トラックは私たちが抜かそうとするんだけど、道がくねくねして狭いので、反対から来る車を用意して中々抜かせない。

なので当然クラクションを鳴らされるんだけど、今端っこに寄ったら転びかねない。クラクションを無視して私たちは鈍行で走り続けた。

それでも多分速度はけっこう出ていたと思う。距離とかかった時間から逆算すると、多分30kmは出ていたはず。早い自転車なら40kmくらいはあったろう。

信じられる？30km前後もの距離を、ただひたすら漕がずに下るっていう状況。しかも道は曲がりくねっていて、後ろにはトラック。転んだら即死亡。なんの罰ゲームよ、これ。

都会じゃ30kmもあつたら相当行けるんじゃない？いくつかの区をまたぐでしょうね。その距離を脚を回さずに行ってしまうわけ。

ところで私はというと、この下り坂がトラウマ級の恐怖だった。人生でこんな恐怖を味わったことはない。

アルソンさんにサーベルを突きつけられたときも怖かったが、あれはほんの数秒。こちらは死の危険が1時間。ストレスはこちらのほうが大きい。

・三島

三島まで下りたところには、徐々に空が赤から黒に変わってきていた。

三島市に入ってもまだ坂は続いていた。結局下りは 30km 前後続いたのではないかな。

徐々に信号も出てきて、坂もゆるやかになってきた。

ようやく街と呼べる場所に戻ってきた。人間社会バンザイ！

「よかった……生きてた」

私は長いため息をついた。

キッと勇太君が止まり、振り向いて「大丈夫か？」と聞いてくる。

「うん、へーき。怖かったね」

「え？」と意外そうな顔。勇太君はむしろ楽しそうな顔をしていた。

「あの……もしかして楽しかったとか？」

「あ、ああ。まあな。だってあんな長い坂でスピード出したの初めてだし。そのうちまたやりたいんだけど」

「ええええええ Σ( ㉨° ;)」

あなた、どんなマゾですか。

「もう夜になるから、宿を探そう」

「おじさんに連絡する？」

「あ、やべ。忘れてた」

「そうだね」

「ん？ところで、なんでお前が春夫さんのことをおじさんって呼ぶんだ？」

「勇太君がそう呼んでるから合わせてるだけだけど？」

しれっと嘘。

「ああ、そうか」

勇太君はおじさんに電話する。

「おう、リディアか。大丈夫か」

「あ、うん」

「藤堂から聞いたぞ。自転車で行くんだってな。勇太も大丈夫か？」

「うん、助けてくれたよ。荷物とか持ってくれて」

「今どこなんだ？」

「三島ってとこ。泊まるとこないかなあ？」

「ちょっと待ってろ、調べるから。またかけ直す」

それから待つこと数分。電話がかかってくる。

「すまん、ホテルはあったが、やはり子供だけじゃ厳しいようだ」

「そう……だよ。じゃあどうにかするよ」

「どうにかって……どうするんだ？」

「勇太君と考えるよ」

「……すまん、何もしてやれなくて」

「うん。それより、電車は復旧した？ここは東海道だから、東海道本線ってのに近いはずでしょ。復旧し次第、そっちで行きたいんだけど」

「流石にチャリじゃ無理か」

「小田原から三島だけで死にそうになったもの。これで京都まではとてもじゃないけど無理だわ」

「だろうな……。うーむ」

しかしおじさんの声は渋い。嫌な予感がする。

「あのな……非情に言いにくいんだが、JRはほとんどの運転を中止したんだ」

「え……うそ。じゃあ、帰ることすらできないってこと？」

「俺たち以外は連続怪死事件の原因が何かまったく知らない。ただ人々が急死しているようにしか見えてない。

流石に一人の運転手による運転は禁止にしたようだが、今度は発電所がやられてな。

また、ふたり同時に死ぬ線があって、結局そこでも衝突事故が起きちゃった。

そもそも急に一人運転を禁止したもんだから、運転手が足りなくて、必然的に電車の本数が少なくなっちゃって……」

「……最悪ね。日本とは思えない」

「まったくだ。静ももっと考えて革命をしてほしいものだ。このままじゃ俺だっていつ巻き込まれるか……」

「みんな怖くて外に出れないでしょ」

「異常事態だからって、会社も休むところが多いな」

「と思ったよ。こっちも車が少なすぎでさ」

「なるほど。まあ、車がないのは安全でいいかもしれんがな」

「うん」

電話を切ると、勇太君に事情を伝えた。

「明日のことはまた考えるとして、まずは飯と寝るとこだな」

「ご飯はコンビニでいいとして、寝るところはどうしよう？」

「うーん」

勇太君は腕を組んで悩んだ。

結局解決法が見つからず、とりあえずコンビニを探すことにした。

コンビニは滞りなく見つかったものの、寝るところに困ってしまった。



「俺は野宿でもいいけど、お前は危ないだろ。女だし」

「うん……」

「寝袋があってもキツそうだな」

「うん……」

今日はどこまで進んでおけばいいのやら分からない私たちは、乗らずに歩きながら話した。

「ねえ」と声をかけたが返事がない。

「勇太君？」不審に思って振り向くと、彼は止まって左上を見ていた。

私は自然と視線を追う。すると目の先にはアパートがあった。その二階部分に男の人がいて、胸を押さえてうずくまっている。

「あれ……苦しんでないか？」

「……うん」

男の人はそのまま地面に倒れた。

ガチャッとスタンドを立てると、勇太君は無言で走っていった。

「え、どうしたの!？」

「助けるに決まってるだろ」

「ええっ!？」

勇太君は階段を駆け上がると——でもやっぱり暗い怖じ気づいた声で——大丈夫ですかと尋ねた。

しかし男の人は既に死んでおり、返事がなかった。

「どう？」

「ダメだ……」

「これも揺らぎだと思っ？」

「多分」

「どうして？」

「さあ。多分」

いちいち理由なんか聞くなよって顔。

私は顎に手を置き、目を左上に向けて考える。いやに頭の中が涼やかだ。

勇太君は急いで電話をかけようとする。しかしその手を私が遮る。

「……なんだよ？」

「どこにかける気？」

「警察と救急車。まだ助かるかもしれないだろ。本当に死亡したかどうかなんて医者じゃないと分かんないし」

「ダメ。……見捨てなさい」

このときの私はおばあちゃんと同じ顔をしていただろう。いや、あるいは紫苑と同じ顔をしていただろう。

「は……？」

眉をひそめる勇太君。私はしゃがんで男の人のポケットを漁る。

「さっきこの人、胸を押さえたよね。でも胸に外傷はない。となると恐らく心臓発作でしょ。

発作で突然死ぬとしたら、典型的には心臓か脳。でもこの人は胸を押さえてた。心臓発作の可能性が高い。しかも心臓は既に止まっている。脳ではない」

「……」

「じゃあ、この人は心臓に持病があったのだろうか？否。なぜか分かる？」

紫苑の口調を真似る私。まるで紫苑が私の体に移って喋っているかのようだ。

「……」

「心臓病の持ち主なら必ず発作を抑える薬を携帯しているはず。けどこの人のポケットを漁ったところ、鍵と財布しかなかった。

この人はかなりの確率で揺らぎにより殺されたものと思われる。どう？」

「……よくそんなの思いついたな。でも、だからなんなの？救急車呼べば助かるかもしれないだろ」

ふたたびケータイに手を伸ばす勇太君。私はその手をはたく。

「なにすんだよ」

「よく考えなさい、村上勇太！」

ピシヤリと言い放つ。ビクッとする勇太君。

「私たちは鍵を手に入れた。この人の死体の中に入れて見つからないようにして、部屋を借りればいい。救急車を呼べば私たちはここにはいられなくなってしまう」

「はああ！？」珍しく大声を出す勇太君「お前、死体と一緒に寝る気かよ！？てゆうかこの人見捨てるのかよ！？」

「もう死んでるわ。心肺停止からダメージのない蘇生を目指すには、3分が勝負よ。私たちは人工呼吸のやり方なんて知らないし、AEDもない。

救急車が着いてもどうせ助からないわ。今日、消防署を見たの。人がいなかったわ。救急車でさえここに来るまで何十分かかるか」

「お前……」

勇太君は小刻みに震えだした。

「早く！鍵を開けるからこの人を中に入れて！人が来てからじゃ遅いわ。へたすりゃ殺人犯に間違われる」

「……や、やだよ、そんなの」

急に勇太君の声が震える。いつもの意地っ張りな表情が消え、小学生のような顔つきになる。顔なんか今にも泣き出しそうだ。

「案外意気地なしなんだね。男の子のくせに、怖いの？」

「え……だって……死体となんて」

もうプライドも保てないらしく、反論してこない。

「死体なんてちょっとセレスが抜けただけよ」

「せれ……す？」

「ほら、早く！」

私は鍵を開けて、ドアを開く。勇太君が動きそうもないので私はうーんと唸って死体の腕を引っ張る。だけど私の力じゃ引っ張れない。

「早く！この状況で誰か来たら本当に殺人犯として刑務所よ、いいの！？それとも女の子を置いて自分だけママのところに泣いて帰る？」

「……くっ」

悔しそうな顔。勇太君は耳まで真っ赤にして、男の人の腕を取った。凄い力で男の人を引っ張る。

ラッキーなことに部屋の中には誰もいなかった。

畳に仰向けになって倒れる勇太君。

「お前……もし家族がいたらどうするつもりだったんだ？」

「鍵を持ってたから、それはないわ。それにこの荷物は夕飯でしょ。コンビニの袋持ってこの時間に帰るんだから、明らかに一人暮らしよ。」

「第一このおじさん、見るからにさえないし、こんなぼろっついアパートに住んでるし、その上この年じゃお嫁さんなんて来てくれないよ」

「お前……口悪すぎだぞ」

やば……心の声が表に出てしまった。

「私はただ分析しただけよ、客観的に。それに、死んだんだから、この人って悪人だったんでしょ」

「……次はお前が揺らがれる番かもな」

勇太君は軽蔑したような言い方で吐き捨てて、部屋を出る。

「まっ、待ってよ！どこに行くの！？」

「……チャリをこっちに持ってくる。あそこにあると怪しい。あと、飯の袋も向こうだし」

「あ……ああ、そうね」

「お前はここにいたら？チャリを2階まで持ってくるのは無理だろ」

「荷物くらい持つよ。私も行く！」

自転車や荷物を静かに部屋に入ると、部屋に鍵をかけた。

「できるだけ静かに話そうね。隣の部屋の人が気づくかもしれない」

「そうだな。とりあえず飯を食おう。疲れただろ」

勇太君は押し入れを開けると、布団を出す。

「え、もう寝るの？」

「いや。布団敷くから、お前はそこで食べたら？ 量だと疲れが取れないし」

「え……でも、お行儀悪いよ。布団ってベッドのことでしょう？」

「今更気にしてもしょうがないだろ」

慣れた手つきで布団を敷く。

「器用だね」

「ウチ……ベッドないから」

「……そう」

私はちょっとだけ自分の父親が恥ずかしくなった。

そして次の瞬間、きっと国語の問題だったら一行上の部分に傍線部が引かれ、「このときの少女の気持ちとして適切なものを以下のア～エより選べ（配点：4点）」って書かれそうだなと思った。

答えは……うーん、オだな。私のこの複雑な気持ちは選択肢なんかじゃ表せない。

コンビニ弁当を食べる。ふだんコンビニ弁なんてウチでは食べない。レインや紫苑が作ってくれるから。

コンビニ弁は味が濃い。まずい。でも、我慢する。贅沢は言えない。

「いたた……」

脚を押さえる。

「あとで風呂に入ったら？ 少し良くなるかもしれないし」

「うん……そうするよ」

おじさんを見る。

「やっぱり死んでるのかな？」

「そりゃそうだろ。お前、あんまり思い出させるなよ」

「なんか気になっちゃって」

勇太君は押し入れからシーツを出すと、おじさんに向けた。

「どうしたの？」

「あのままじゃ可哀想だろ」

「……優しいんだね」

「別に……」

食べてしばらくしてからお風呂に入った。

お湯を張って、湯船につかる。

うわあ、私、人ん家のお風呂に勝手に入ってるよ。

このおじさんには家族がいないって断言しちゃったけど、誰か来たらどうしよう。

20分くらいして出る。バスタオルもおじさんのを借りた。助かった。

「お待たせ。どうぞ」

「え……いや、俺はいいよ」

「お風呂嫌いななの？」

「いや……。あ、シャワーある？」

「うん。あ、シャワー派なんだね？」

「いや、違うけど……」

「ん？おじさんのだから気が引けるの？」

「じゃなくて……」

勇太君は赤い顔で濡れた私の髪を見る。

なんだろう……。

結局勇太君はシャワーを浴びて出てきた。

「あは、私たち、同じ匂いだね」

「石鹸が同じだからな」

「家族みたいね」

「……かもな」

「うわー、シャツがものすごい濡れ方してる。汗だくだったからなあ」

「俺のも」

「どうしよう。洗濯しようか？」

「いや、音がうるさくて隣が文句を言いに来るかもしれない。大人しくしてよう。

あと、服は捨てよう。かさばるだけだ。必要な分だけコンビニとかで買い足せばいい」

「賛成。それで、明日はどこまで行こうか」

地図を広げる。

「1号だったよな……」という勇太君の顔がみるみる曇っていく。

「どうしたの？」

「あのさあ……」勇太君は箱根湯本に指を置き、一本の道を指で辿る「これ……なんだ？」

私のがぞき込むと、そこには「旧東海道」と書いてある732号線があった。

「まさか……」わなわな震える勇太君「この道を行けばあの山を行かずにすんだんじゃ……」

地図は確かにそうなっている。国道1号を使っても732号を使っても結局大芝の近くの畑宿入口で合流する。

指で距離を測る勇太君。明らかに旧東海道のほうが近い。

「ふざけんな……。旧東海道をいきやあんな山の中いなくて済んだってことかよ」

うっわあ……。勇太君、超不機嫌です(;´Д`)

そりゃそうよね。てゆうか私もムカついてきたわ。

結局山々の北側をぐるっと迂回するのが1号で、山々の南をサクッと行くのが旧東海道みたい。1号は宮ノ下とか小涌谷のせいでかなりぐるっと迂回していて、距離が長い。

さっきまで昔の人はこんな大変なところを行ったんだって自分を言い聞かせてたけど、全然違った。昔の人はもっとショートカットしてた！

うわあ、私たち、バカみたい。昔は遠回りの1号なんてなかったし、今の人は1号を車で行く。

ちょっと待ってよ。じゃああの道を自力で行った人間ってほかに何人いるの？

自転車好きな人はともかく、女子中学生は？……。いるわけない。

あああ、神様、どうしてリディアはこんなにも不幸なのでしょう(T\_T)

「なんか……。それ見たら急に疲れちゃった……」

「俺もだ……」

「脚……。いたいよ」

「湿布……。買ったから使うか？」

「え？持ってるの？」

「お前、ハンドクリームとか酔い止めとか要らないもんばっか買いやがって」

「なによ、勇太君だってコンパスと笛とか、何に使うのよ」

「……」

勇太君は無言で塗るタイプの湿布をくれた。

「……。ありがとう」

「あ、ちょっと待て。まだ使っちゃダメだから」

「え、どうして？」

「風呂上がりで使ったら痛いよ」

「そうなの？」

「使ったことないのかよ」

「うん。だって私、運動しないもん」

「それで買い物リストにもなかったんだな」

できるだけ太陽の光を長く使おうという話になり、早起きを心がけることにした。

11時になり、私たちは寝ることにした。

おじさんは一人暮らしで、布団はひとつしかなかった。

「お前、ここで寝ろよ」

「勇太君は？」

「畳」

「……ごめん」

「別に……。あと、交代で寝ないか？」

「どうして？」

「いや……おじさんのこととか……」

「え？」

「つまり」勇太君は顔を赤らめる「もし幽霊になって出てきたらさ。ふたりとも寝てたら呪い殺されるかもしれないじゃん」

ああ、要するに怖いってことね。はいはい。

「それに、不審に思った近所の人が警察を呼んだりするかもしれない。そうなったら素早く逃げないと」

「うん、わかったよ」

「じゃあ、2時間交代で寝ようか」

「はい」

しかし私たちは圧倒的に疲れていたため、先に見張りをすると行ってた勇太君は座ったまま眠ってしまった。

結局私は見張り役として起こされることもなく、朝まで安眠した。

・私は別の世界の私たちのために泣く

箱根峠を越え、私は極度の疲労で眠りこけた。しかし、誰かが私の名前を呼び、目が覚めてしまった。

目を開けると、そこには静がいた。私のお父さん。あらゆる女の子にとって初恋の相手、自分のお父さん。いつもはただの家族で、何とも感じない。猫と同じで、いて当然の人。

だけど今は違う。こないだのディアセルからもう何年も経ってしまったような気がした。

「静あつ！」

ガバッと抱きつく。

静は意外そうな顔で「どうした？」という。そうか、事情が分かってないのか。

私は顔を離す。そして違和感を覚える。

あれ……？ここは、どこ？

私の部屋ではない。もっとずっと広い部屋。そして豪華な部屋。ここは私の家ではない。

服も違う。セリアではない。いつの間にかお姫様みたいなドレスを着せられていた。

ベッドサイドには制服がある。黒のセーラー服だ。でも、あんなの見覚えがない。

ウチのはセーラー服ではあるものの、色は紺だし、三本線が入っている。スカーフも紺で、さらに制服の上からベルトを締める。明らかにあれとは違う。

静の様子もいつもと何か違う。顔はやつれ、皺が多い。目はストレスにやられているのか、窪んでいる。

「静、どうしたの？具合、悪いの？」

「いや、具合はいつも通りだ」

「……心が、痛いのか？」

すると静はゆっくり頷いた。そして私を抱きしめ、胸に顔を埋める。

どうしたんだろう、私にこんなに接触してくるなんて、小学校のころでさえ記憶にない。

静はそのまま泣き出した。

静が泣くなんて……。嫌な予感がした。まさか紫苑に何かあったんじゃないか……。

「紫苑に何かあったの？」

首を振る。

「じゃあ、紫苑に何かされたの？」

するとゆっくり頷く。

「そう……。喧嘩したのね。かわいそう……」

「いつものことだ……」



ん？いつものこと？

それは言い過ぎでしょう。ふたりが喧嘩しているのなんて見たことない。

いや、そうか。子供の前では控えていたということか。

私の中で理想の夫婦像というのがガラガラと崩れていった。世界に何があってもこの二人だけは幸せだと信じていたのに……。

永遠の愛なんてものは存在しないのだと知った私は、急激に鬱になった。

「静、いいよ。私が慰めてあげるから」

それで、あとでちゃんと紫苑と仲直りしようね、静。紫苑は静が好きだから、絶対仲直りできるよ。

私はそう信じて静を慰めた。

「ああ……リディア。分かってる。俺にはお前しかいない」

「え……」

頬が赤くなる。うわぁ、私、初めてお父さんに認めてもらえたよ。静、そんな風に私を見てたのね。

紫苑には悪いけど、うきうきする。こういう喧嘩なら悪くないね。

静の手が私の服をまさぐる。はじめはくすぐっているのかと思った。

だが、どういうわけか、その手は私の胸を揉んでいるように見えた。

「し、静？」

いたずらにしてはタチが悪いのではないか。いくらお父さんでも、中学生の娘にそれはやりすぎだろう。

「こ、こらっ、おとーさん！」

私は怒った振りをした。

「どうせ「父が乳揉んでどうする」ってなネタがやりたかったんでしょーけど、これはやり過ぎよ！」

だが静は私の顎をくいを持ち上げると、私の唇に唇を重ねた。

「——！」

な……。

は？

しかも舌を入れてくる。

「むーっ！」

私は思わず叫び声を上げる。

静は舌を出し、唇に沿って舌尖を這わせる。

そして極めて優しく私の頭を撫でる。

「リディア……可愛いよ。昨日の浴衣も良かったが、このドレスもよく似合ってる。赤と黒のチェックのスカートを買ってきたから、後で履こうな」

「き、昨日も？「も」って何！？静、何言ってるの！？」

「え……？」

意外そうな静の顔。

「な、なにしてんのよ、お父さん！わたっ、私、今のが初めてだったんだからね！いたずらじゃ済まされないよ！」

「初めて……。何がだ？」

「キスよ！今のどうカウントしたってキスでしょ！xiks どころか xian！手塩にかけて育てた娘を自分で傷物にしてどうするのよ！」

「傷物？な……なにを言ってるんだ、リディア。元はといえば、お前が最初に俺のことを……紫苑から引きはがそうと……。紫苑に見限られた俺をお前が慰めてくれるって……」

頭を抱える静。

なんなの、この人は……。こんなの、静じゃない……。

「リディア……お前、今日はどうかしてるぞ。妊娠したのがそんなにショックだったのか……？」

「妊娠……わた……私が？」

頷く静。

「ま、まさか……静の……赤ちゃんを？」

「今更そんなこと言わせないでくれ」

「……」

私は言葉を失って惚けた。

これは……何かの間違いだ……。何かが……おかしい。この世界は……偽りだ。

「だ……だって私……処女よ？完璧な。いつの間にしたの？私が寝てる間にしたの？」

「何を言ってるんだ、本当に。俺を困らせないでくれ。何度も愛し合ったろう。

それに、毎晩求めてくるのはたいていお前のほうじゃないか。俺のことが可哀想と言って、自分を紫苑の代わりに抱くようにと……」

「やめてえ！」

気持ち悪さが最高潮に達し、私は金切り声を上げた。

すると騒ぎを聞きつけた紫苑が部屋の外にやってきた。

「……どうしたの？」

しかしその声は私の知っている紫苑の声よりずっと嗔れていた。

静は私に静の言葉を繰り返すよう、耳打ちした。

「……別に。悪い夢を見て起きたの」

「……そう」

紫苑は含みのある言い方をして、去っていった。

ありえない……。私の知ってる紫苑なら、有無を言わず部屋を開け、「なっ、何々！？ゴキブリっ！？」とか言ってるはずだ。

あのドアには何か仕掛けでもあるのか？むやみに開けると爆発する装置でも付いているのか？そうでないと到底納得がいかない。

「静も……出て行って」

「リディア……。嫌だ。今日のお前は様子を変だ。俺にはもうお前しかいない。蛍や紫苑のように無くしたくないんだ。俺は帰らない。お前を離さない」

「静……本気で言ってるの？私、あなたの娘なのよ？」

「セックスが嫌になったのならなくていい。俺もそんなことのために毎晩ここに来ているわけじゃない。ただ、そばにいてほしいんだ。嫌か？」

「それは……いや、そういうことなら一緒にいてあげたいけど、でも、静はお父さんでしょう？私はいつか結婚したら家を出て行ってしまうのよ？」

「結婚をしたくないと言ったのはお前じゃないか……。小さいころから。今になっても。昨日だって。」

俺が何十年も先に死ぬから嫌なのか？メルティアに頼んでもらって、少しばかり寿命を分けてもらうさ。あのときシェルテスを倒した褒美に、それくらいは……」

「静……」

悲しくて、泣けてきた。

ようやく分かった。これは別の世界の静なのだ。そして彼が話しかけているのは、別の世界の娘なのだ。

これは、静と紫苑の心が離れてしまった世界。誰が悪いのか、私は知らない。

だけど、この世界の静は娘の私に紫苑を重ね、救いを求めているのだ。

なんて弱い男。なんて悲しい、哀れな静。

私はこんなのお父さんじゃないって強く思う。

だけど、この世界の私は、こんな静を愛して、受け入れている。逆にこの世界の私にとっては、私の知っている静こそ受け入れがたい父に違いない。

自分のことだから分かる。これはありえる世界だ。

もし静が本気で求めてくれば、私は彼を受け入れるだろう。いや、自分から彼を求めたかもしれない。私はそういう女だ。

だけど、幸いなことに、私はきちんとした倫理観で育てられた。私の知っている静は、とても倫理的な人だ。そして強い人だ。

彼をそう変えたのは、恐らく紫苑だったのだろう。彼女はそれだけの力を持っている。彼女は人を変えることができる。

ここは、紫苑の努力の足りなかった世界なのだ。

私は紫苑という人が今後何をするか、簡単に想像がついた。

この世界の紫苑は、いずれ静を殺すだろう。

だが紫苑は基本的に静を愛していたから、それを悔やんで死ぬだろう。

最後に残された私は静を失って絶望し、自ら命を絶つだろう。

それにしても、レインはどこにいったのだろうか。もしかしたら既に死んでいるのかもしれない。

「静……」

頭を抱いて、髪を撫でる。この世界の私がしているような慰めはできないけど、代わりに額にキスをして、抱きしめてあげる。

「今日は嫌な夢を見たね。今夜は、寝よう。一緒に寝よう。明日になれば、この嫌な夢は醒めてるよ。静はまたいつもの私に会える。私も……」

「リディア……どこにも行かないでくれ……どこにも」

「行かないよ……。この苦しい貴方の世界が紫苑によって閉じられるまで、私はあなたの麻薬になってあげる」

私は声を出さずに泣いた。この世界の私たちのために、泣いた。

・盗んだバイクで走り出す

2022年7月24日 日曜日

静岡県三島市

朝日が窓から差し込んできて、目が覚めた。なんだかとても嫌な夢を見た。

一瞬、自分の置かれている立場が分からなかった。

布団から起き上がると、「ああ」と思い出した。

一方、勇太君は子供っぽい顔で「おはよう」と言った。声は相変わらずぶっきらぼうだけど。

「ご飯にしようか」

昨日のうちに、今日の朝の分も買っておいた。またコンビニ弁だ。いつまで続くのだろう。

先に歯を磨いてから食べる。

食後、私はシャワーを浴びた。

「お待たせ」

私がシャワーから出ると、勇太君は少し不機嫌な顔で呟いた。

「寝る前に入ったばっかじゃん……」

「え？でも、寝汗かいたから」

「……」

まずい、これは喧嘩になる流れだ。

「あっ、ごめんね！あの……待たせちゃったよね……」

「別にいいけど……。ほら、時間ないしさ」

「あ、うん！うん！分かってる。ごめんなさい！髪乾かさないうすぐ行くよ」

「え？いや、それは……乾かせよ」

「え……でも、あまり待たせると……」

「いいよ、別に。どうせすぐだろ」

「はいっ、急ぎます！」

ドライヤーで髪を乾かす。朝一から喧嘩なんて嫌だから、さっさと動くことにした。

勇太君は律儀に布団を片付けていた。荷物もまとめてくれていた。

さて、出発だ。隣人に気づかれないように自転車を下まで降ろす。幸い誰もいなかった。

私たちは逃げるようにコソコソとその場を去った。

「お前、脚は？」

「筋肉痛。死にそう」

「大丈夫なのか？」

「漕ぐより歩くほうがつらい。多分違う筋肉なのよ。昨日は山を歩き通しだったから、歩くのは無理。でも、漕ぐための筋肉はそんなに疲れてないみたい」

「多分ここからしばらく平地だから、今日は漕ぐのがメインだと思う」

「そうなの？」

「ほら」地図を見せてくる。

「え？」だけど私は意味が分からない。

「海沿いだろ。ってことは平地なはずだ」

「……そうなんだ？」

自転車で走り出したけど、ものの5分で私は勇太君を見失う。

彼も気づいたようで、遠くの信号で待機している。

「ご、ごめん……」

せっかくのシャワーも無駄になるくらい汗をかいた私は、息を切らしながら謝る。

「お前、本当に体力ないな」

「ごめんなさい……。やっぱり脚がキツイみたいで……。私、ほんとお荷物だね……」

平謝りする私を気の毒に思ったのか、勇太君は文句を言わずに「うーん」と考え込んだ。

とそのとき、男の人がバイクに乗って、キッと私たちの近くに止まる。何か荷物を持ってマンションへ入っていく。

「あれさ……借りられないかな」

ぼつりと呟く勇太君。

「え？無理でしょ、今使ってるじゃん」

「いや、つまり……緊急事態だし、勝手に借りるっていう意味なんだけど」

「ええっ。……勇太君らしからぬ台詞だわ」

「なんだよ……。お前が走れないって言うからだろ」

「でも……もし見つかったらどうしよう」

「ぶっ殺されると思う」

「えええ……(´°ω°`)」

「だから見つかる前に早く」

手で私を促す。

「はあっ！？わ、わたしが盗るの！？む、無理だよそんなの！運転できないもん！」

「でも、乗るのお前だろ」

「無理だって！いいよ、自転車で我慢するから！」

押し問答をしているうちに、男の人が戻ってきた。私たちは別にまだ何かしたわけじゃないのに、緊張のあまり黙ってしまった。

男の人は私たちをチラと見ると、そのまま去っていった。

「あーあ。行っちゃったじゃん。お前がモタモタするから」

「そんなこと言ったって……。じゃあ勇太君が取ってよ。後から乗り方教えて」

「取った後お前は どう逃げ るんだよ、そのチャリで」

「別の方向に逃げよ。あとでケータイで落ち合えばいいじゃん」

「あ、そうか……」

なるほどという顔。しかし、あくまで自分の手を汚すのは嫌なようで、「やっぱり止めようか」と言ってきた。

なによ、ここぞってときに勇気がないんだから。名前が泣くわよ。

ふたたび自転車を漕ぎ出し、大岡、片浜と進んでいく。

片浜に来ると海沿いだ。平坦で広い道路だ。車道の横は歩道があるが、これが変わっている。

歩道は車道と分離している。車道から一段下がったところにある舗装道で、とても走りやすい。

とにかく車と並んで走るのが恐ろしいので、こういう道があると神の救いかと思ってしまう。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0111.JPG>

「ねえ、気持ちいいね」

後ろから声をかける。話す余裕が出てきた。ここは楽な道だ。

「脚は平気なのか？」

「うん。これくらいなら。風も気持ちいいし、走りやすい。海沿いはずっとこうなのかな」

「多分な」

「よかった。今日は稼げそうだね」

——と思った私が甘かった。国道1号をなめていたわ。

新富士を越えた辺りで、道がだんだん変わってきた。明らかに人なんて通りませんよっという感じの道。車専用と言わんばかりの道。

そこには先ほどの親切な歩道などなく、二輪用の白線内は極めて細い。

さらに悪いことに、走っているのはトラックよりも遙かに大きい車。なんて呼べばいいのか私には分からない。レッカー車？そんな感じのがたくさん走っている。

明らかに人間が自転車で通るために作られていない。

状況は富士川を越えたらさらに悪化した。

「ちょ、勇太君待って！怖い！」

待ったをかける。しかし勇太君は振り向かず「ここで止まるな！危ないぞ！」と叫ぶ。

叫んだのは怒ってるからではない。周りがうるさくて、叫ばないと聞こえないのだ。

日本語は母音の多い言語だ。そして母音は聞こえがいいのでよく通る。

子音に依存しがちなアルカだったら今聞き取れただろうか。

私は頭の中で首をひねった。現実の首を振ったら転んで死ぬので、あくまで心の中で。

素晴らしいことに、左はすべて海。埼玉県民には嬉しいくらい晴れ晴れとした海。

しかし、それを鑑賞する暇は皆無だ。なにせ大型トラックが数十 cm 右を走っているのだ。少しでも右にずれたら、水月リディア享年 14 歳のお墓ができる。

海沿いに走り続ける。ママチャリがあまりに遅いので、数十台に一台は後続車がクラクションを鳴らしていく。

でも、怒鳴られはしない。多分浴衣を着ているせいで女の子だって分かるから、見逃してもらってるんだろうな。

道の様子が変わる。海が見えなくなる。

どう見ても高速道路でしょって感じのところに來る。家族旅行で使う東北道とかいうのに似てる。

でも、あくまで国道 1 号なので、一般道らしい。信じられないよ！

「勇太君！まだ！？私、もう無理！」

「そこの避難所で休もう！」

道が左側にデコって膨らんでるところに入り、いったん休む。

私はなりふり構わず、その場にへたり込む。水分は籠の中に入れて時折補給していたが、脚と胸が悲鳴をあげている。

「よくがんばったな」

珍しく優しい勇太君。

「うん。勇太君も。疲れた？」

「いや、俺は……」

確かに涼しげな顔だ。でも、日焼けしている。

「焼けたちゃったね。クリーム塗り直しなよ」

バックから取り出して自分に塗ってから、渡す。

「湿布塗るか？」

「ううん、移動中は止めとく。で、ここどこ？」

勇太君は看板を指す。由比と書いてある。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0114.JPG>



「ここ……高速道路じゃないのよね」  
「ああ、信じらんないけどな」  
「あ、やっぱり勇太君もそう思う？」  
「ああ。うちにはこんなのない。凄い田舎だ」  
「でも、右側は家ね。人はいるみたい」  
「よくこんなところに住めるな」  
「この茂みの向こうって海かな？」  
「うん、地図的には。平坦で助かる。お前、まだ漕げるか？」  
「漕ぐしかないね」

立ち上がる私の脚に激痛が走る。

「いったああい！」  
「どうした!？」  
「今、ブチって言ったの、脚の中が！」  
「ああ、筋を痛めたのか。動かないで。湿布塗っというて」  
「こ、これ治るの？し、しんじょうの、私？」  
「死なないよ、そんなんじゃ。でも急激な運動は止めた方がいい。立つときも漕ぐときもゆっくり動いて。急に動くと筋を痛めるから」  
「わ、わかった……」  
しかし私は心が折れてしまい、泣き出してしまった。ああ、もう。私って泣くしかできないの？

「お、おい……」  
慌てる勇太君。  
「ご、ごめんね。勇太君が悪いんじゃないの。自分が情けなくて」  
泣きながら湿布を塗る。

勇太君は眉をひそめ、私の向こうを見つめる。

「なあ……人が死んでる」  
「ええっ!？」  
驚いて思わずガバッと振り向いてしまい、また脚に激痛が走る。踏んだり蹴ったりです  
(T\_T)

確かに私の後ろでジャージを着た男の人が死んでいた。バイクと一緒に倒れている。死角で気づかなかった。

「なんでこんなところで人が……」  
「揺らぎ……かな。急に具合が悪くなってここに待避したけど、結局死んじゃったとか」  
「ところでそれ、バイクだよな」

「うん。……あ、まさか」

「だって……お前、走れないだろ」

私たちは急いで死体を茂みの中に隠した。

バイクは電源が切れていたけど、鍵は刺さっていた。

「ねえ、これどうやって動かすの？」

しかし勇太君は無言でケータイを調べていた。行動が早い。私も空気を読んでケータイで検索した。

「多分これ原チャだと思う」

「バイクじゃないの？」

「免許が違うし、排気量が違うらしい。普免があれば乗れるって」

「……楽譜？」

「は？……あ、いや、普通免許のことだと思う」

「ああ。でもいずれにせよ私たちは持ってないね」

「この際免許なしでもいいか。動かし方はバイクより簡単みたい。ちょっと立たせるから支えて」

バイクを起こし、私にハンドル持たせる。

「わ、重いね」

「倒すなよ。お前の力じゃ起こせないし、下敷きになるかもしれない」

「う、うん……」

「えーと、左のブレーキを押さえて」

「こう？」

「で、その状態のまま、そこのボタンを押して。それが電源」

「あ、はい……」

キュルルと音がする。

「いつ離すの？」

「さあ……。じゃあ離せば？」

離すとブルルルと車体が振動しだした。

「エンジンかかったっぽい？」

「ああ、多分。これでいいと思う」

「で、どうや——」

その瞬間、バイクがキュンと前に飛び出し、私は引っ張られて 3m ほど前に行き、バイクと一緒に転んだ。

「びぎゃーっ！ \(\text{°} \text{D} \text{°}\)」

「だっ、大丈夫か!？」

「いたた……」

膝を押さえる。もう、最悪よ。

勇太君がもう一度起こす。

「あのさ、右ハンドルを手前に回すとアクセルだって。お前、回したろ」

「そういうことは早く言ってよ(#`Д´)」

アホな兄のせいで、危うく死ぬところだった。

「あーあ、ウィンカーにヒビ入っちゃったよ」

「ウィンカーって何？」

「右折しますとか左折しますって後ろの車に知らせるやつだよ。チッカチッカいうだろ、車も」

「ああ、あれね」

「このつまみを動かすと光る。で、ここを押すと消えるらしい」

「あ、ほんとだ。ねえ、止まるときは？」

「は?いや、チャリと同じだよ。これがブレーキ。さっき言ったじゃん」

「え、これしかないんだ？」

「あと……ヘルメットをかぶらないと捕まるらしい」

「そんなもん、ないよ」

「じゃあ死体から借りないと」

勇太君は死体を指さす。

えええ……私ですか(>\_<)

「勇太君、とってよ」

「いやだ」

ストレートに拒否。いまいち頼りにならないなあ。いざとなったら私、見捨てられそうだ……。

静なら絶対取ってくれるな。蛍さんと付き合ってたころからその辺は一貫していたに違いない。男気がなあ……。

私は目をつぶりながらヘルメットを引っ張った。が、とれない。

どうも首のところでパッチンして留めているらしい。嫌々目を開けてどうにか外すと、メットをかぶる。

「すみません、お借りします」

小声で呟いて、バイクに走り寄る。

「はじめはゆっくり走ってみ」

待避所で10分ほどバイクの練習をする。

原チャというのは簡単な乗り物のようで、運動音痴の私でも簡単に乗ることができた。  
「アクセルかけすぎるなよ。転んだら大怪我じゃ済まないから」  
「ねえ、もし警察が来たら？」  
「……そんなの、知らないよ」  
ブスッと答える勇太君。自信がないといつもこうだ。

揺らぎのおかげで基本的に車も警察も少ないため、特に咎められることもなく進むことができた。

「うっわー！爽快、爽快！」

少しも脚を動かさず、ものすごい勢いで進む。バイクって凄い！作った人天才！

勇太君は今回の旅の中で初めて汗だくになって漕いだ。私に追いつこうと必死に立ち漕ぎで。真っ赤な顔で汗をかいて走っている。

わあ、ちょっと優越感w ふ、お兄ちゃん、ようやく私の気持ちが分かったようね。

運転は神経を使うものの、漕ぐのと比べればまったくもって天国。中央分離帯っていうのがあるおかげで、対向車っていうのもこっちに来ない。

対向車が右折をしないし、こちらの車が左折巻き込みっていうのをしないから、安全で走りやすい場所なんだそうだ。

右を見ると線路が見える。地図によると新幹線の線路らしい。まさかこんな民家の横を新幹線が走っているなんて。それ以前に、自転車でここまで新幹線に近づくなんて。

海が本当に綺麗だ。見る余裕がでてきた。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0121.JPG>

「これが駿河湾かあ……」

その後、興津川を越える。この辺りの道は本当に酷い。

絶対自転車が通る想定なんかなく、恐ろしい勢いでトラックが真横を走る。

富士を越えてからここまで本当に地獄みたいな道だった。

川を越えて少ししたところで、道が大きく二つに分かれていた。片方は静清バイパスというらしい。

勇太君が死んでいるのがミラーで見えたので、いったん止まる。

「お……お前……運転巧いじゃねえか……サクサク行きやがって」

ぜえぜえ言ってる。お兄ちゃん、かわいい♪

「ねえ、どっちに行けばいいの？」

「あくまで1号だろ」

「でもさ、旧東海道みたいな前例があるし。1号じゃないほうが早いこともあるよね」

「そうか、そうだな」

地図を広げる。

「……バイパスを使った方が少しだけ近いな」

「じゃあ左だね」

・三保

また海岸沿いに行く。

だが、私はヘンな光景に気づき、ブレーキをかけた。

「おい、急に止まるなよ！」

だが私は答えずに、ぼーっと海の向こうを見ていた。

「観光は後にしろよ」

「ねえ……あれ何？」

海の向こうの陸地に星形の大きな光のビルが建っていた。

「何って？」

「星っぽい緑のビル。光ってる」

「また緑の何かかよ。俺には見えないって」

「あそこ……どこ？」

地図を広げる。勇太君は面倒くさそうな顔で調べる。

「三保……っていうらしいな」

「ねえ……このまま進んだらあそこって行く？」

勇太君は少し指で地図を追うと、首を振った。

「そう……。でも、気になるの」

「はあ？」

「あの……行っちゃダメかな」

「ダメに決まってるだろ。お前バイクだからって調子のんなよ」

「じゃあ勇太君乗っていいよ」

「な、なんだよ……。何でそんなに行きたいんだよ」

「あのね、ようやく私、ピンと来たのよ」

「何が」

「あれってさ、もしかして結界なんじゃない？」

「え……？け、結界ってウォンバスの？」

「そう。琥珀は結界のすべてを壊したわけじゃないのよね。だからこそエンドはまだ起こってないわけで」

「じゃあそれが残りの結界だっていうのか？だとすると、俺らに何も関係ないだろ。琥珀は京都にいるんだし」

「でもさ、平塚のときも、箱根峠のときも、どっちも結界は壊されたよね。私、あのとき人影を見たの。あの人がきっと結界を壊したのよ」

「……ならその人影が琥珀なんじゃないか？だとしたら俺たち、京都に行く必要なくなるってことじゃないか？」

「珀璃じゃないと思う。珀璃の体型と違った。もっと幼い感じだった」

「女ってこと？」

「分からない。でも珀璃の体型とは違う」

「お前、なんで珀璃の体型知ってるの」

「え……。あ、だってほら、私、キャラだから」

「あ、そうだったな」

勇太君は頷いた。

「で、あそこに行ってどうするんだ？」

「放っておいたらきっとあそこも壊されちゃう。あの人影が来るのを待ち伏せて、結界の破壊を阻止しよう」

「え……そんなことできるのか？」

「さあ。相手も人間だし、いざとなったらバイクで轢いちゃおうよ」

「お前って、けっこう凄いこと言うよな」

「うふふ」

なにせ紫苑の娘ですから。

「でもさ、あれが結界だとしても、放っておいていいんじゃないか。」

珀璃は京都にいる。三保以外にも結界はまだ残ってるはず。じゃあ人影とやらが余った結界をすべて壊す前に、珀璃を倒せばいい」

「それは蛍さんの命を縮めるかもよ」

不可解な顔で言い放つ私に、勇太君はぎょっとする。

「なんでだよ」

「ちょっとしたことに気づいたのよ。平塚の結界が壊れたあと、藤堂さんの車に乗ったよね。で、その後揺らぎが起こって車に乗れなくなった。」

さて、それじゃあ次の揺らぎはいつだった？」

「……三島か？三島についておじさんに電話したら、揺らぎのせいでJRが止まったって言うってた」

「三島に着く前、私たちはどこにいた？」

「箱根峠……あ」

「気づいたようね。そう、結界が壊れるたびに揺らぎが起こっているってわけ」

「なるほど……」

「つまり、三保の結界が壊されると、また揺らぎが起こる。それに蛍さんが巻き込まれる可能性が浮上する」

「……わかった。行けばいいんだな」

勇太君は自転車を構えた。

「バイクじゃなくていいの？」

「お前は脚を怪我してるだろ」

三保に向かって走る。

1号で清水と新清水を通過し、149に乗り換えて南下。半島に差し掛かったら199に乗り換える。

「結界はまだ見えるか？」

「うん、見えるよ。いったん止まって地図を確認しよう！」

羽衣の松入口交差点で止まる。

「あっち……右の方、そこに結界が見える。地図でいうと……三保の松原、かな」

人影に気づかれぬよう静かに進もうという話になり、私たちは乗り物を押して歩いた。

「なあ、どうして琥珀はここを残したんだろう」

「意図的に残したってわけじゃないと思うけど。ペルソナとの縄張り争いも関係してるから」

「そうか」

「でも、まったく理由がないわけじゃないと思う。例えばここは半島で、一度ここに入ったらぐるっと戻って興津に行かないと行けないでしょ。それって面倒だし時間の浪費じゃん。

あと、箱根峠は旧東海道じゃなかったからじゃない？琥珀たちは迂回路である1号を避け、速やかに箱根峠を越えたんじゃないかな。だから逆に1号の上二子山の結界が残ってた」

「つまり俺たちが1号を行ったのは怪我の功名だったってことか」

「そうだね。もし旧東海道を行ってたら私は結界と揺らぎの関係に気づけなかったと思う」

「しかし、平塚はなぜ残っていたんだろう」

「あそこは地理的な理由がないから、恐らく取る前に移動が行われたんでしょうね」

「なるほど。けどお前、道に詳しくなったな」

「この生活してれば嫌でも鍛えられるよ。死活問題だもん」

着いた先は海岸だった。

看板がある。三保の松原というらしい。天の羽衣伝説の発祥地だそうだ。

「あー、ほら、昔話の。天女が下りてくるっていう」

しかし勇太君は首を振る。聞き覚えがないようだ。

「ここ、ウミガメの産卵地でもあるみたいね」

辺りには誰もいない。

「結界はここなのか？」

「うん、私の視界は霧だらけよ」



勇太君は砂の上に座る。

「ウォンバスって大変だな」

「どうして？」

「敵が来ない間は何もすることがないだろ。敵が来なきゃ出張損じゃん」

「ああ……そういえば。多分、結界を補強するとか、できたんじゃないかな」

「なるほど……」

そのとき、私は背後に人の気配を感じて振り返った。

私の視界だと、人には靄がかかる。でも、そこにいた人には靄がかかっていなかった。

「……」

立ち上がってじっと見る。

男の子だ。銀髪の細い男の子。年は私とそう変わらなく見える。子供だ。

なぜ彼には靄がかかっていないのだろうか。一般の人には靄がかかるはずなのに。

私は用心深く、胸の前で手を構えた。構えたって何もできないんだけどね。

しかし、一瞬視界がぐらっと揺らいだかと思うと、次の瞬間、男の子は消えていた。

「あれ？」

首を傾げながら呟くと、勇太君が後ろから肩をぼんと叩いてきた。

「ねえ、今そこに——」

振り向くと、そこには目の前にいたはずの男の子がいた。肩を叩いたのは彼だったようだ。

「——え？」

男の子は目をぱちくりさせる私に手を伸ばした。硬直する私の後頭部に右手を回し、頭を抱きかかえる。

「やっと会えたね、可愛いリディア」

「え……？」

そう口にしようとした瞬間、男の子は私の頭を右手で手前に引き寄せた。

ぐにっという感触がして、私の唇に、男の子の唇がくっついた。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。

私の唇に、男の子の唇がぶつかった。

物理的に何が起こったかはすぐに理解したが、それがキスだということに気づくのは時間がかかった。

「迎えにきたよ。僕の愛しい妹」

「……」

頭の中では「は？」という私がいた。だけど、言葉が出ない。唇と一緒に日本語も奪われたようだ。

勇太君は、ただ自転車のハンドルを持ったまま、硬直。私も硬直。一步も動けない。  
それから十秒くらい、沈黙があったと思う。  
その間に、私は自分のファーストキスが無残に奪われたことを理解した。  
激しい怒りと恥ずかしさと悔しさがこみ上げてきたが、体がロクに動かない。  
私はただただ「え……え……」と繰り返しながら、砂の上に跪いた。

「リディア？」

男の子が跪いて私を見つめる。

「な……」上目遣いで見上げる「なに……するのよおお……」

泣き出す私。

「なんてことしてくれたのよおお……」

「リディア、泣かないで。僕は君を迎えにきたんだ」

「はぁっ！？何アンタ！」

いくら大人しい虐められキャラの私でも、さすがに怒りのエンジンがかかってきた。

近づく男の子をドンと突き飛ばし、無言で睨み付ける。まあ、それが精一杯の抵抗なんだけど。

「やれやれ、姫君はご機嫌ななめのようなだ」

男の子は意外そうな顔をして、ゆっくり立ち上がる。

くすっと笑いながら、セミロングの髪をかき上げる。その様子は極めて色っぽい。

悔しいことに、彼は稀代の美少年だ。輝くような瞳、柔らかそうな唇、白い肌、賢そうな顔、サラサラな髪の毛、かすかに漂う清潔な香り。

正直言って、モロ私好みだ。街で会ったら声をかけてほしいと思う。思うけど、私からは何もできないので、声をかけられる妄想を楽しむような相手だ。

でも、だからってあくまでそれは妄想の話。現実にはそんな展開望んでない。いきなりキスとかありえない。しかもファーストキスを！

「まだ混乱しているようだね。じゃあ、先に結界を破壊するでしょう」

「え……」

男の子は手を上に向けると、手から雷のような光線が出て、結界を直撃する。緑の結界は硝子のように崩れていく。

「まっ、待って！ダメよ！結界を壊したら揺らぎが起きちゃう！」

私は男の子に飛びかかる。

「危ない。来ちゃダメだ、リディア」

男の子の手を取った私の体を雷が直撃する。

「きゃああ！」

悲痛な金切り声が海岸に響いた。

・嘆きの牢獄

>el 7/0

謎の男の子の雷を食らった私は、叫び声を上げて倒れた。  
が、意外なことに痛みがない。  
目を開けると白い天井が見えた。ありえない。海岸にいたはずなのに。

「え……どこ」

起きて振り向くと、外人の男の人が立っていた。  
違う……外人っていうか、アルバザード人だ。アルバザードの兵士だ。

そう、私はこないだ地球にワープした場所、すなわちアルナ城のサリュに戻ってきていたのだ。

この人は見覚えがある。ワープする前に私を捕まえようとした人だ。

⑥Oec, 4aA-, (c Me u-l JeeP Vecl -A 7cl (c, lo7c9⑥

スラッとサーベルを抜く。

⑥4-, 4-r⑥

私は青白い顔で小さく叫んだ。

何がなんだか分からないまま、私は兵士に連れられ、地下牢に連れられていった。

アルナ城には地下牢がある。時代によっては拷問や処刑が行われた場所だ。

この時代の地下牢はどれくらい凄惨なのだろう。私は生きた心地がせず、引きずられるように歩いた。

こんなことなら三保で男の子と戦うほうが良かった。せつかく生き延びたのに、このままだとアデュに送られてしまう……。

牢屋に入れられる。時間は昼のはずなのに暗い。壁の隙間から漏れる光とローソクの灯りしかない。

そこは大部屋で、何人もの囚人を入れておくところだった。私のほかにも人が何人かいる。

でも、誰も話しかけてこない。ただ、痩せこけた顔で下を見ている。

恐らく、ここにいるのは政治犯なのだろう。元々悪人ではないタイプの人たちだと思う。

よかった。とりあえずここで男の人に怖いことをされる心配はないようね。

中3ともなれば、さすがの私でもセックスやレイプについて知っている。レイプがどんなに恐ろしいことで、どんなに防ぎがたいかも知っている。

この状態でレイプされても、私は命乞いくらいしかできないだろう。騒げば殺されるし、飽きられても殺される。

私は一生懸命影を薄くする努力をした。

ただ、やはりここの人たちは政治犯なのか、気の荒い人はいないような感じがした。特に何事もなく時間が過ぎていく。

となると心配は別のところに移る。つまり、自分はこの後どうなるのかという不安だ。

私は身元不詳だし、ミロクさんのところから逃げ出した。アルティス教徒の服を着ているとはいえ、アデュ送りは免れないだろう。

アデュ送りは陵辱と死を意味する。若い女の私は犯され尽くしたあげくに殺されるだろう。胃がさっそく痛くなってきた。

自分の殺され方を想像した私は、恐怖で泣き出してしまった。

私はアルバザードが好きだが、痛烈に嫌いな部分も多くある。そのひとつが犯罪の猟奇性だ。

ニュースを見比べていれば分かるが、日本人に比べアルバザード人は凶暴だ。攻撃性が強く、残忍だ。フェンゼルの末裔ではないかと思うくらいに。

第一「妙齢の乙女」を表す  $\text{yala}$  という単語に「性犯罪の被害者」という語義が備わっている点からしておかしいではないか。

アルバザードの犯罪者は、日本人だったら思いも寄らぬようなやり方で被害者を殺す。

被害者が少女の場合、長きに渡る陵辱と拷問を経て殺されるのが一般的だ。その後は死姦や死体損壊。場合によっては死体は骨までしゃぶられ、最悪事件は迷宮入りと化する。

アルバザードのことを知らずにふつうの日本の少女として生きてきたら、絶対こんな知識はなかったはずだ。

もともと、ほとんどのアルバザード人は大人しく礼儀正しく思慮深く優しい。その代わり、犯罪に走ると徹底的に残酷になる。極端な民族なのだ。

「いやだ……死にたくない。アルバザードでは死にたくない。三保で殺された方が楽に死ねた……。私を帰して。雷で焼け死ぬ方が楽よ……。アルバザードで死ぬのだけは嫌……」  
急にアルカに対する嫌悪感が沸き、私は頭を抱えて日本語で念仏を唱えた。

とそのとき、聞き覚えのある声が私を呼んだ。

Ⓞ  $\text{Mclc-d } \text{C } \text{C-} \text{A } \text{laA-J } \text{-Ca} \text{d } \text{e}$

アルシェだった。

⑥ -ムエツ |ー (ヤ しー -カツ

⑥ -λ |ー (ー ヤー -カ >-λ -λ le>c) >cμo) Vol -λ |ー (ー (c - λ-|c

うわ、最悪だ。それじゃ原因は私じゃないですか……。

⑥ -λcεo, -ムε,, λoλ e' し-<-|c

⑥ leλ λ-θ (a c)ε

しかしアルシェの顔は暗い。当たり前だ。私のせいで、彼も牢屋送りなのだから。

⑥ λee, leλ- し-λc λcl ヤー -| -> e'yo

⑥ γ->cl, -| -λya (c)εεε

⑥ …leλ

すると、横にいた人影がふいにクククと笑い出す。

今まで毛布の山かと思っていたそれは、どうやら男の人だったらしい。

男の人は顔をひょっこり出すと、亀のようなポーズで歌を歌い出した。

⑥ …λcλλoθ

ぼつりと呟く私。

魔列車。アデュ収容所へ送られる人間の恐怖と絶望を歌った最悪の鉄道唱歌だ。

アルシェは恐怖をかき立てられたのか、黙って両手で耳をふさいだ。

⑥ λee, λyaλλoa, λoλ lo (a (e λ-Z - し-|c (aμ sel (ヤ >c)λ (a -カε

⑥ -h-h, V--V-, yaλ-, leμ eλ |ー (ー λoλ Ve> (cc)ε

彼は屈託なく笑う。そしてずいっと私に近寄る。

⑥ (c e' λe -δ

男の人が私に話しかけてくる。

「——ぶっ！」

私は思わず咽せてしまった。彼の口臭が物凄かったからだ。予想外だったので思い切り吸い込んでしまった。

電車の中で臭いおじさんとかいるけど、比じゃない。口の中で猫でも死んでるんじゃないかという匂いがする。

電車のおじさんはまだ我慢できる。そういうときは「すー」と鼻息を吐いて、吸ってしまった毒ガスを追い出す。あまり顕著な態度に出して傷つけないから。

その程度の常識は心得ている私だが、今回ばかりは体が脊髄反射してしまった。

やばっ、モロ咽せちゃったよ。超失礼だわ……(>\_<;

急に冷や汗が流れる。私は人に対してそんな挑発的な態度を取ったことがない。

一瞬思考が止まった私は、「埃が喉に入って咳き込んだ演技でもするか？」とか考えていた。

が、そんな小細工を弄する前に、男の人はガッハガッハと笑いだした。

Ⓢⓐ, ⓔⓔ-, ⓗⓔ ⓓⓔ ⓗⓔ ⓔⓔⓔ, ⓙ--, ⓗⓔⓗ ⓗⓔⓔ, Ⓨⓐⓗ-

いや、笑わないでください。死んでしまいます。

——とは言えないので、私は彼が話している間は鼻を止めることにした。

Ⓢⓔⓔ, ⓗⓎⓐⓙⓙⓐ, ⓓⓎⓐ ⓔⓗ ⓓⓔⓗ Ⓨ-ⓗ ⓓⓐ ⓓⓎ, ⓗ-ⓔ, ⓗⓐⓗ ⓔⓓ ⓓⓔⓔ-, ⓔⓓⓔⓐ

Ⓢⓔⓔ-, ⓔⓓ ⓓ'-ⓗⓔⓓ ⓗ- Ⓢ

ダメだ、話し終えても臭いが残っている。私はどこで呼吸をすればいいのでしょうか。

Ⓢⓐⓗ -ⓙ Ⓨⓗⓗ ⓔⓓ ⓓⓐ-ⓗ Ⓨⓔ-ⓗⓔ Ⓢ

Ⓢⓗ-, ⓗⓔⓔ ⓔⓓ -ⓗⓔⓙ ⓗ-ⓗⓔ

アルヴェスク……。悪魔の雨。アルディアの時代の出来事で、雨の日に滅んだはずの魔族が降ってきてアトラスを襲う現象だったと思う。

Ⓢⓗ-, ⓔⓙ ⓗⓎⓐⓙⓙⓐ -ⓗⓔⓙ ⓗ- ⓓⓔ -ⓓⓐⓔ Ⓢ

Ⓢⓗⓔⓔ ⓔⓓ Ⓨⓙⓙ-ⓗ ⓔ Ⓨⓔⓗ-ⓗⓔⓓ ⓓⓔⓔⓔ, Ⓨⓔⓔⓙ ⓙⓔⓓⓔⓓ Ⓨ-ⓗⓓⓔⓙ ⓔ Ⓨⓔⓗ-ⓗⓔⓓ ⓔ ⓗⓔ ⓙⓔⓗ ⓗⓔ ⓗ-ⓙ ⓔⓙⓔⓙ ⓗ-ⓗⓔⓙⓙⓙⓙ,

ⓓⓔ ⓗ-ⓔⓙ ⓙⓔⓗ ⓓⓐ -ⓔ ⓗⓔⓓⓔⓓ Ⓨ-ⓗⓓⓔⓙ ⓔ Ⓨⓔⓗ-ⓗⓔⓓ ⓙⓐⓗ ⓙ--ⓗ ⓗⓔⓗ Ⓨⓔⓗⓗ- / ⓙ-ⓗ ⓙ-ⓗ,

ⓙⓐⓗ ⓙⓔⓗⓗⓔⓔⓔ -ⓗⓔⓓ ⓙⓔⓓ Ⓨⓔⓔⓙ, ⓓ-ⓗ ⓙ- ⓙⓐⓗ, -ⓗ Ⓨⓔⓙ-ⓓ Ⓨⓐ ⓗ-ⓙ, ⓔⓔⓔⓔⓔⓔ

Ⓢⓔⓔ, ⓗⓔⓗ- ⓓⓐ ⓙⓔⓗ Ⓨⓐ ⓔⓎⓔⓔ ⓗⓔⓗ ⓗ-ⓗⓓ ⓙⓔⓗ Ⓨⓐ -ⓗ -ⓗⓎⓐⓔ Ⓢ

Ⓢⓗ-, ⓔⓗ ⓙⓔⓗⓗⓔⓔⓔ ⓗ-ⓗ -ⓓⓐ, ⓗ-ⓔ, ⓔⓙ ⓓⓔ ⓗ- -ⓓⓐ -ⓔⓔ Ⓢ

Ⓢⓐⓗ ⓙⓔⓗⓗ-ⓓ ⓓⓐ ⓗ-ⓗⓓ Ⓨⓔⓗ ⓓⓔⓗ ⓙⓙⓙ-ⓗⓙ - ⓙ-ⓗⓎⓐ ⓓ'-ⓓⓐⓔ

Ⓢⓙⓐⓗ ⓓⓔ ⓔⓗ ⓙⓐⓓ Ⓨⓔⓔⓙⓔⓔ ⓙⓐⓙⓔ

アルヴェスクさんは真面目な顔になって腕を組む。

Ⓢⓗ--, ⓓⓔ ⓔⓓ ⓗⓔⓗ-, Ⓨⓐⓗ-, ⓗⓔⓗⓙ, ⓓⓔⓔⓙ ⓔⓗ ⓗ-ⓗⓓ ⓙⓔⓗ Ⓨⓐ -ⓗ -ⓗⓎⓐ ⓓⓔⓔⓔⓔ

Ⓢⓔⓔⓔ ⓔⓙⓔⓔ Ⓢ

Ⓢⓔ ⓗ-ⓔⓙⓙ-ⓓ ⓗⓔⓗⓗ ⓗⓔⓗⓗⓗ Ⓨⓔⓙⓙⓙ Ⓨⓐ Ⓨⓔⓔⓙⓙ ⓔⓔⓔ ⓙⓔ ⓓⓐⓗ -ⓔ ⓗⓔⓗ ⓗⓗⓗ-ⓓ -ⓓⓐ ⓔⓙ ⓙⓐⓗⓔ

Ⓢⓗⓗ-ⓔⓔⓔⓔⓔ Ⓢ

Ⓢ-ⓗⓙ ⓙⓔⓗⓗⓗⓗⓗⓗ, ⓐⓔⓔ, Ⓨⓐⓗⓗ- / ⓙⓔⓙⓙⓔ, ⓓⓔ ⓔⓗ -ⓙⓙ -ⓓⓐⓔ

壁の隙間から差し込む光。

Ⓢⓙⓙ ⓙ--ⓓ ⓙ-ⓗⓓⓙ ⓗⓔⓔⓔⓔ ⓔ ⓙⓔⓙⓙ, ⓓⓐ ⓔⓓ ⓙⓔⓗⓙ ⓓⓔⓔⓔⓔ

Ⓢⓗⓙⓔⓔ Ⓢ

アルヴェスクさんはくつくと笑う。

ⓈⓎⓐⓗ-, ⓓⓔ ⓙ-ⓔⓔⓙ ⓙⓔⓔⓔ- ⓔⓗ, ⓓⓔ ⓔⓓ ⓗ-ⓗ ⓙ-ⓗⓔⓔⓔⓔ Ⓢ

ⓈⓎ-, ⓙⓔⓗⓗⓗⓗⓗⓗⓗ ⓗⓔⓗ ⓗⓐⓗ ⓔⓓ ⓙ-ⓗⓔ Ⓨⓔⓙ- ⓓⓔⓙⓙⓔⓔ

⑥-, -h-h-h,, (c e' lol -, 4aΛ-r lec> el 7a <ce >eJ- (a,, (-l (c eΛ 7a <ce,, -h-h, leμ JccΛ- >c4a (c,, 4-, leμ JccΛ-) (c c> (c 7a) (a⑥

私は身構えた表情でアルヴェスクさんをじっと見ている。

その一方で、妄想癖な私は全然関係のないことを考えていた。

いつだったか、紫苑が JccΛ-) と JccΛ- >c4a の違いが分からないとか言ってた。私はどっちがどのシーンで適切かは分かる。それがネイティブというものだ。

この場合、アルヴェスクさんの使い分けは自然だ。好きな状態に変わっていることを指したいのか、好きになったその一瞬を指したいかの違いだ。

前までは好きでなかったが今は好きだという状態変化を言いたいときに >c4a を使う。好きになった瞬間を説明したいときに c7) を使う。

しかし紫苑にはそれが分からないらしく、会話をしていてもヘンなアスペクトを使うことがある。

ふ、私は言語に詳しいでしょう？なにせ新生人工言語論の管理人だからね。

⑥Oec, 4aΛ-, (c Me e> 7ol- Jeleμλ,, ol Jo-, JoΛ Jeleμ -l) V-Λ cccJ co,, -7δ⑥

⑥7ol- lclcΛδ⑥

⑥4-, >ol >cμo) e' V-l(e >c7)- l-V, (-l l- e' (co Jec-Λ,, l- e' -laac eVcle,, (a e' (c-, ol a Jec l-, JoΛ l-Λ lc/ lc Jec Jcl 4a,, JoΛ <c Jec <-l l- eeo -⑥

⑥<c e'....(4a >c-Λδ⑥

⑥4-, (c e' (c-, μclc-, leμ Jec Jcl l- J'-laac,, JoΛ Me laΛ- o) Jeleμ⑥

「ん……」

アルシェを見る。アルシェは困惑した顔で私を見返してくる。別に反対はしないようだ。

しかし、歴史にアルヴェスクなんて人物がいたのだろうか。レインぐらいきちんと勉強した人なら知っているだろう。だけど私は知らない。

例えば私でも織田信長くらいは知っているが、彼の部下となるともうお手上げだ。秀吉と光秀くらいしか知らない。

ただ、確実にいえるのは、後の世でアルヴェスクという人がミロクに勝ったという歴史はないということだ。

彼は確かに過去に存在したかもしれないが、ミロクに負けたのだ。

しかし、そうと知りながらも、今の私には彼に付くという選択肢しかないのだ。この嘆きの牢獄を出るために。

私はゆっくり頷いた。アルヴェスクさんは満足そうな笑みを浮かべ、壁の隙間の光を指さした。

見ると光は石畳の線に達していた。

⑥(a c> -⑥

私の肩に手を置いて、ゆるりと立ち上がるアルヴェスクさん。  
その瞬間、ドカーンという派手な音がして、近くの壁が崩れた。

⑥ ㄱㄱ-ㄹ ㅂ-ㄴㄹㄹ

アルヴェスクさんは私たちの背中を叩くと、穴の中へ走っていった。  
兵士が何事かとばかりに階段を駆け下りる音ができる。まずい、ここで捕まったら脱獄の罪まで加わってしまう。そうなったらアデュ送りどころか、ここで拷問死だ。

モクモクと立ちこめる硝煙に目を細めて咳き込みながら、私たちは光の差す方向に向かって走り出した。

穴を出ると急に明るくなり、目がやられた。アルヴェスクさんの強い腕に引っ張られ、とにかく走る。

⑥ ㅍㄱ ㄱㄱ-ㄹㄹ

私が答える前にアルヴェスクさんの腕らしきものが私の細い腰を抱きかかえ、私はキャベツのようにどこかに放り込まれた。

アルシェの声もする。

急に辺りが暗くなる。エンジンの爆音がしたと思ったら物凄い揺れが私を襲った。どうやらトラックの荷台に投げられたらしい。

「きゃああ！」

私は芋みたいにゴロゴロ転がって、頭を色んなところにぶつけた。

⑥ ㄱㄱㄱㄱㄱㄱ, -ㄱ ㄱㄱㄱㄱ ㄱㄱ ㄱㄱㄱㄱ -ㄹㄹ

ガッハガッハと笑うアルヴェスクさん。

ようやく目が慣れてきた。やはりここはトラックの荷室らしい。運転しているのは彼の仲間だろう。

見ると、私たち3人のほかに2人座っていた。同じ牢屋に入れられていたアルヴェスクさんの仲間らしい。彼らを助けるためにアルヴェスクさんはわざと捕まったのだろう。

恐らくこういう流れだったのではないか。まずお城の壁に爆弾で穴を開け、地下に移動。そこで地下牢の壁を破壊。

そんなところだろう。実際、逃げるときに坂っぼいところを登った覚えがある。

荷室には野菜などとともに、重火器が転がっている。凄い光景だ。これ、おもちゃじゃないんだよね。

アルシェは何が何だかという顔でビクビクしている。

⑥ ㄱ-ㄴ>- , ㄱㄱㄱㄱㄱ, ㄱㄱㄱ ㄱㄱ ㄱㄱㄱㄱ-ㄱ

座っている人に話しかける。一人は30代くらいの男の人で、ヒゲを生やした強そうなおじさんだった。



おじさんは私に大した興味もないのか、おざなりに挨拶を返して終わった。-lee さんというらしい。なるほど、ブナみたいに大きい人だ。

もう一人は30代くらいの女の人。アルヴェスクさんに泣きすがっているところを見ると、どうも奥さんか何かではないか。

©cccc-cccc-, (aM (c eC 3-JJ), >elcaJ6

メリウスというらしい。彼女はアルヴェスクさんにあやされて泣いていた。

・ソーマの森

1時間以上走っただろうか、トラックが止まる。

ⓄⓂⓂⓂ, ⓂⓂⓂⓂ ⓂⓂⓂⓂ -ⓂⓂⓂⓂ

トラックを降りると、そこは森の中の山小屋だった。空気が綺麗だ。

運転席から男の人と女の人が下りてくる。アルヴェスクさんはまるで学校から帰ってきたかのような気楽さで軽く挨拶をする。

ⓄⓂⓂⓂ, ⓂⓂⓂ, ⓂⓂⓂⓂⓂⓂ

カルドと呼ばれた男の人はまだ若く、せいぜい20代といったところだろう。小柄な感じの人で、心配そうな目でアルヴェスクさんを見ている。

ヴェイレンと呼ばれた女の人なんかまだ10代のようなのだが、冷たく醒めた感じの顔つきをしているので少し年上に見える。

彼女はへらへら笑うアルヴェスクさんを「やれやれ」という顔で見ると、今度は私に目を向けた。

ⓄⓂⓂⓂ, ⓂⓂⓂ ⓂⓂⓂⓂⓂⓂ

ⓄⓂⓂⓂ ⓂⓂⓂⓂⓂⓂ

ⓄⓂⓂⓂ ⓂⓂⓂⓂⓂⓂ -ⓂⓂⓂⓂⓂⓂ

困っている私の前にアルヴェスクさんがへらへらしながら割って入ってくると、大げさな身振り手振りでヴェイレンさんに事情を説明した。

ヴェイレンさんは私たちを訝って迷惑そうな顔で見たが、アルヴェスクさんのへらへらには勝てないようだった。

不思議だ。40歳くらいに見えるアルヴェスクさんが、こんな私と数才しか変わらないようなヴェイレンさんにへらへらしてるなんて。……いや、見た感じ、アルヴェスクさんはわりと誰にでもこうか。

そこまで言うなら仕方ないという感じで、ヴェイレンさんはハイズをしてアジトに入っていた。

アルヴェスクさんは私に「よかったな」と言わんばかりにウィンクをして、入口をくぐった。

ⓄⓂⓂⓂ, ⓂⓂⓂⓂⓂⓂ -ⓂⓂⓂⓂ ⓂⓂⓂⓂⓂⓂ -ⓂⓂⓂⓂⓂⓂ

ⓄⓂⓂⓂ, ⓂⓂⓂ ⓂⓂⓂⓂⓂⓂ

なるほど。無口なアルベさんは、大樹のように外で見張っているというわけですね。

アジトの中には大きなテーブルとホワイトボード、そして食料と重火器があった。

ⓄⓂⓂⓂⓂ ⓂⓂⓂⓂ

アルヴェスクさんに勧められるまま座る。

⑥h-c, V-J)leJ e(-), 9el8 6

声を受け、カルドさんは戦況を記した紙を広げる。

あれ？この人ってカルドって名前だったよね。何で羊って呼ばれてるんだろう……。あだ名かな。

どうやら、アルヴェスクさんたちは民主主義勢力ミナレット系列のレジスタンスらしい。レジスタンスのアジトがあるこの場所は、地図によるとソーマの森というらしい。追っ手を振り切って逃げたので少し時間がかかったようだ。

カルドさんは子供の私たちにも分かるように状況を説明してくれた。

一昨日、すなわちメル 320 年のディアセルに、第六回の選挙が行われた。

それまでの選挙では常に民主主義勢力が与党に選ばれていたものの、相次ぐ不祥事により、それまで万年野党と評されていたアルティス教勢力が与党に選出された。

民主主義政権は連立与党を狙っていたものの、内ゲバにより共倒れ。漁夫の利を掬う形でミロク率いるイルミロク党が一躍与党になった。

ところが与党になった瞬間、ミロクは民主主義勢力の重鎮をことごとく暗殺。持ち前の魔力により軍部を掌握した結果という噂らしい。

この時代の人にとってまだそれは噂でしかないが、未来人の私は知っている。ミロクさんが本当に魔導師だったということ。

ミロクさんの横暴に民主主義勢力は激高。それまで与党勢力だった政治団体はレジスタンスとして再結成されたようだ。

アルヴェスクさんは部下 4 人を束ねる 5 人グループの長。レジスタンスの中の 1 班らしい。

5 人しかいないから下っ端なんだろうなって思ったら、意外や意外。なんと彼は若くして幹部なのだそう。

彼の地位は遊撃隊。自分で好きに考えて行動できる。幹部だから許されるわがままで。アルヴェスクさん以外は何百人単位の班を率いているらしい。彼は変わり者なのだそう。

だが、カルドさんやヴェイレンさん、そして恋人らしきメリウスさんの態度を見ていると、彼は相当人望があるらしい。

それにしても反アルティス教徒勢力なのにメリウスとは面白い名だ。恐らく親の代まではアルティス寄りだったのだろう。

アルヴェスクさんの率いる班は今のところ全員無事だが、ここまで来るのは苦難の道だった。

間者としてイルミロクに出帆していたメリウスさんが逮捕され、護衛のアルベさんも捕まった。

その後、アルヴェスクさんはわざと捕まり、そこで私たちと出会った。そして彼はままとカルドさんたちを引き入れ、牢を脱出。現在に至る。

彼らの目的はミロク＝ユティアの暗殺。しかし、私はそれが成功しないことを知っている。

今ほど歴史の教科書がほしいと思ったことはない。彼らはどう戦って、そして最後にどうなったのだろうか。

戦いを諦めて、革命後の世の中で幸せに生きてほしいものだが……。

ともあれ、私とアルシェは庶務として彼らに雇用されることになった。書類作業ばかりではないので、庶務と呼んでみた。

食事と宿を与えてくれる上に前線に出なくてよい環境で、その上雀の涙ほどだが給金もくれるという。家無き子と奴隷にとっては涙が出るくらいありがたい話だ。

しかしその話にヴェイレンさんは否定的だった。アルシェは奴隷だが身元が分かる。だが私は身元不詳で信用できないという。

Ⓔ 0ecΛ, (Yα laΛ-∇ -μe-Z-μl c∇ ->δ 6

テーブルに両手を突いて、上からのぞき込むように尋問してくる。アルヴェスクさんは困った顔で苦笑している。

Ⓔ Λo...ΛoΛ...6

やっぱり、ここで答えなければアルソンさんみたいにサーベルですかね。

かといって異世界から来ましたっていうのは、アルティス教でもない彼らにとってはからかいに映るだろう。

Ⓔ 0ec, VecμeΛ, Jeleμ ∇cl Ye∇ -δ 6

くすくす笑うアルヴェスクさん。

Ⓔ ∇α e∇ h-α,, la e∇ l-Z ∇ΛoαJ,, JoΛ ΛoΛ ∇-μ Vcl la,, la e∇ ∇cel Z-cΛ e >cμo∇6

機械的で冷たい口調のヴェイレンさん。最低限の言葉しか喋らない合理的な人のようだ。

Ⓔ h--, l-Z ∇ΛoαJ∇-, JoΛ ∇c μe -μ >cJ ΛoJSo∇, VecμeΛ,, μJccl ∇ccl e∇ Aeδ Y-Λ ∇c <c-J-∇ ∇- ∇o ∇-lδ 6

Ⓔ >...6

ヴェイレンさんは言葉に詰まる。

Ⓔ Jeleμδ ∇c Λ-θ ∇-Λ>-cΛ eleJ >-Λ ∇c ΛoJ Λ-θ ∇-Λ>-cΛ e ΛoJ,, ∇-l a ∇cl ∇c Λ-θ ∇α ∇cJ lo∇ Jeleμ6

Ⓔ -lVeJ∇...6

年相応の幼い顔がふいに現れる。そのままヴェイレンさんは下を向き、小さく  
⑥V-AC-AC....⑥ と呟いた。

ここで素直な笑顔を返すと神経を逆なでるかと思ったが、かといって仏頂面もよくない  
と思った。その結果、中途半端に卑屈な笑顔を見せてしまい、後悔した。

だけどヴェイレンさんは何も言わず、腕を組んで柱に寄りかかった。

・魔法の杖

アルヴェスクさんのアジトに来て1週間が経った。

三保で別れた勇太君が大丈夫か不安だったが、私は地球に戻ることなく、レジスタンスの庶務として働いていた。

来た初日に私は生理になってしまったが、年の近い女の子のヴェイレンさんがいたおかげで、生理用品には困らなかった。

生理中に運動だの戦闘だのは本当に勘弁してほしいだったので、ここ1週間ずっと庶務だけしていればよかったのは幸運だった。

一週間も一緒に食事をしているので、流石に彼らにも慣れてきた。キャラを掴んだし、仲良くもなった。

別に悪い人たちではない。アルベさんはあんな大きい体をして無口なわりに、森の動物と仲がよい。

冷たく感じるヴェイレンさんも、ただ愛想がないだけで、本当に心が冷たいわけじゃない。

それにアルヴェスクさんは気さくで面白い人だ。いつも明るく、みんなを元気づけている。

そんなアルヴェスクさんにハラハラさせられてるのがカルドさん。いつもきよどきよど自信なさげにしている。

アルヴェスクさんの恋人のメリウスさんは彼にべったり。片時も離れない。

アルシェは奴隷商人メジュの所有物なので、街中を歩いていると連れ戻されてしまう。

私は身元不詳だからもっとタチが悪い。だからこのアジトは隠れ家としても格好の場所だった。

元々私が着ていたのはセリアだが、ミナレット系レジスタンスにいながらこの格好はありえない。

カルドさんが見かねて私に服を用意してくれた。庶務ということで、戦闘服ではなく、可愛いセーターとスカートだ。わーい♪

アルシェもボロぞうきんみたいな服では可哀想ということで、シャツとジーパンを買ってもらった。

服なんか買ってもらったことがないといっって、とても喜んでた。

餌付けされたからというわけではないが、私は彼らといて、ミロクさんが正しいことをしているとは思えないようになってきた。

メル 384 年の世界を知っている私はあの世界に何ら違和感を感じないし、住みやすい世界だと思っている。

だけど、その世界ができた過程には、革命の血の歴史があったのだ。今までそんなことを考えたことはなかった。平和というのは当たり前存在するものだと思っていた。

ミロク革命後のアルバザードは確かに暮らしやすいかもしれない。だけど、それはこれから虐殺される何億人もの人命に見合ったものだろうか。

これから起こる革命で虐殺された人の数は実に 4 億。想像できるだろうか。日本が 4 つなくなる勢いだ。

現在のアトラスの人口が 100 億人。その 25 人に 1 人が今後罪もなく虐殺されるのだ。アルバザード国内だけでも千万以上の人間が虐殺されることになる。恐ろしい話だ。

さらに、惨劇は虐殺だけではない。ミロクさんはアトラスの浄化として、増えすぎた人口を間引いた。

徹底的な経済封鎖と農地汚染により、何十億人もの人が飢え死にした。

例えばファベルのある国の人間を間引こうと思ったとき、そこの貿易を完全にストップし、飛行機で対人用の毒殺兵器や農地を荒らす薬を散布するのだ。

こうしておけば食べ物はなくなり、1 年もせずにはほとんどの人間は死ぬ。食べるものといえば野生の動物か人間くらいのものだ。

用意周到なことに、散布した毒薬はたった数年間で土壌を循環し、無に帰すものだった。邪魔な人間がいなくなりしだい、自分たちが征服しようという腹だ。

世界中で間引きが行われ、アトラスの人口は極端に減った。その上で徹底的な人口管理が行われ、人は自由に子供を作ることさえままなくなる。

そのおかげでアルバザードはあの安全さと豊かさを保持してられる。だが、その豊かな生活の基盤には、数十億人もの怨念が籠もっているのだ。

虐殺も間引きもこれから起こることだ。私はその時代のアルバザードしか知らない。だが、今この世界を見た私は、何が正しいのか分からなくなった。

この世界にはミロクさんのアンチがたくさんいる。384 年にはアンチはほとんどおらず、彼は神格化されている。

ふと、恐ろしくなった。ミロクさんが素晴らしいのではなく、ミロクさんを素晴らしいと思う遺伝子しか残らなかったのではないかと。

だとしたら、私が幼いころから受けてきたレインの教育は何だったのだろう。

雨。しとしと降る、夏の雨。

森に降る雨は美しい。日本と違ってじめじめしない夏なので、この上なく心地よい雨だ。ほんとう、美しさという点では、アルバザードに勝る国はないだろう。私はそう思う。

今日はアルシェとふたりだ。みんなはアデュにおでかけ。山岳部に潜伏し、魔列車を破壊。護送中のミナレットの要人を助けるというプロジェクトだそうだ。

一方、私は搬入した武器の整理と点呼をしていた。武器や食料の在庫管理は私の役目。

帳簿は奴隷時代に経験のあったアルシェの担当。アルシェは子供のくせに経理ができるので、ここでは重宝されている。

アルヴェスクさんはあんなだから、カルドさんが頭を痛めながら今までずっと頑張ってきたそうだ。アルシェのおかげで別の仕事に注力できるようになったから、カルドさんは大喜び。みんなもアルシェを可愛がるようになった。

私はといえば、料理担当。レインが子供のころからみっちりアルバザード料理を仕込んでくれたおかげで、私はふつうの子よりは料理が巧い。紫苑よりはヘタだけど。

私は倉庫で手榴弾の在庫を確認しおえると、「よし」と言って外に出ようとした。

そのとき、アジトのほうでダダダッと音がした。不穏な音だ。

私の胸がざわっとなる。

「な、なに……？」

隙間から見ると、迷彩服を着た軍人が4人ほど銃を構えてアジトを襲撃していた。

「うそ！見つかった！？」

どうやらミロク軍にアジトが割れてしまったようだ。それにしても4人というのは随分少ないな。

それに、今日みたいな不在時に限ってどうして示し合わせたように来たのだろうか。

「……そうか」

ピンと来た。彼らの狙いは情報の収集だ。留守を狙ってほかの班のデータなどを盗むつもりなのだ。

まずい、書類はすべて床下の金庫に隠してあるだけだ。あんなものどっさの時間稼ぎにしかない。

「どうしよう……。書類が見つかったらほかの班の居場所もバレちゃう……」

かといって相手は4人。しかも銃を持っている。私に何ができるというの。

私は何もできずに隙間から彼らを見ていた。何より心配なのは書類なんかよりアルシェだ。彼はまだ中にいたはずだ。

「まさか……今の銃声って……」

つーっと冷や汗が流れる。

すると中からアルシェが出てきた。手を上にあげ、大人しく歩いている。後ろには銃を構えた兵士。



よかった、無事だったのね。いや……待て。彼らはアルシェを拷問して私たちのことを喋らせようという気ではないだろうか。

まずい……どうしよう。とりあえず彼らが去るのを待って、すぐアルシェを奪還するようアルヴェスクさんたちに連絡しなくちゃ！

しかし、現実はそんなに甘くなかった。

兵士はすべての場所を根掘り葉掘り探した。もちろんこの倉庫も。

残念ながらこの倉庫に隠れる場所などない。ドアの隙間から覗いていた私は、膝がガクガク震え出した。

どうしよう……相手は4人だ。ドアを開けてきた瞬間に銃を乱射すれば倒せるか？

いや、無理だ。こないだカルドさんに小銃の使い方を教わっただけだ。4人を一気に倒すなら最低でもマシンガン。けど、マシンガンはまだ習ってない。

だが、うまくマシンガンを使えたとして、苦し紛れに向こうも発砲するに違いない。そうしたら相打ちだ。

それに、マシンガンなんぞ撃とうものなら、アルシェまで蜂の巣ではないか。

隙間から覗く。幸いなことにほかの3人は家の中に入って調べ物をしている。

ど、どうしよう。一人だけなら殺せるか？

心臓がバクバクいう。

それとも大人しく投降するか？そしたら向こうも殺さないでいてくれるかもしれない。

ああ、でも拷問は確実だろう。しかし、死ぬよりは……死ぬよりは……。

いや、待て。これは本当に千載一遇のチャンスかもしれない。サイレンサー付きの銃はそこにある。暗がりに隠れて撃てば……。

私は銃を取ると、木箱の陰に隠れた。ここはドアを開けても光が差さない場所だ。

ガラガラと音を立てて、ドアが開く。

兵士が無言で銃を構えながら中を見回す。

銃を持つ私の手が震える。歯がガチガチ鳴るのを必死で押さえる。

見つければ死。しくじっても死。

いやだ……いやだ……怖い、怖い、怖い、怖い、死にたくない。

兵士の頭に銃口を向ける。

待て……頭って面積が小さい。果たして当たるだろうか……。

じゃあ、お腹を。いや、待て。お腹には防弾チョッキがないか？

では……脚？いや、それも細くて……。ど、どうすれば……。

と思った瞬間、兵士がくるっと私のほうを向く。

「ひっ！」

思わず叫んでしまい、私はとっさに引き金を引く。

パスッと音がして、兵士の横の小箱に穴が開く。

しまった！！外した！！

心臓が跳ね上がった。撃たれてもないのに撃たれた気分だ。

「ひいつ……」

私は銃を投げ捨てて、頭を抱えてうずくまった。

⑥0ec, ʀa eʃ ʌeɟ ...l-Z ʃ-ɟ ⑥

私が女の子と知って、意外そうな声を出す。

⑥-l- eʃ ʀc ʃ- -ʀa -ɟ ⑥

兵士は私に近づく。

「い……いやだ……こないで。殺さないで！」

⑥0-...r -l- ʀc ʀaʃ ʀɔɟ ʀc ʌe -ʃe-ʌɟ ⑥

兵士が怯む。かといって私はその隙を活かして走り出すこともできなかった。ただ、腰が抜けて立てないのだ。

⑥hɜʃ, ɟ-ʃʃɔ,, ʀc eʃ ʃaɔʃa cʌ, ʃaʌ-, -ʌ eʌ 0cl l-Z ʀcʃ c> ʌec>, ʀ-l -ʌ 0cl ʀc ʌel ʃaʌ-  
-ʌʃ/ l-ʌʃ ʃɔ-⑥

⑥0...0cl...ɟ ⑥

ぞっとした。全身の毛穴が開くのを感じる。

⑥e-ʃe-ʃ, ʀc eʃ -ʀc cʌ <cʌ ɟɔ>ɟɔ> eʃ ʌcʃ ⑥

兵士は銃を置くと、しゃがんで私の胸に手を伸ばした。

「や……やだ……」

兵士はお腕を持つような手つきで、私の胸に下から手を当て、乱暴に揉んだ。

もちろん、こんな目にあったのは初めてだ。ファースト乳揉まれ。最悪だ……。

⑥-hʃ-hʃ ʌeʌ >-> e l-Z eʃ hɔʌɔ/ ʌcʃ -, ʀ-l ʀa ʃaa< ʌeʃ ⑥

「やめて……」

恥ずかしさで涙が出てきた。

⑥0ec, ʀa eʃ l-> ʃ-lʃ ʀc ʃɔʃɟ ⑥

このやろう……。揺らがれてしまえ。

このままだとレイプされたあげくに殺される。

私は薄明かりの中、手で辺りをまさぐった。何かが手に当たる。棒のようだ。

⑥-l ʃ---ʃeʃ ⑥

兵士は私の胸に顔をうずめようとした。

とっさに鳥肌が立ち、私は思わず手に持った棒で兵士の頭を殴りつけた。

⑥-ŷ--ſr⑥

兵士が頭を押さえてうずくまる。

「は、はあ、はあ……」

⑥0ec...ſe...⑥

ゆらあつと起き上がる兵士。

「いやあっ！！」

私は恐怖にかられ、ふたたび兵士の頭を殴りつけた。

倒れ込む兵士。だが、私は手を止めない。何度も何度も金属の棒を打ち付ける。

ガッ、ガッと兵士を殴る。これでもかというほど、殴る。

戦闘服の頭から血が流れて嘔き出す。私の体に返り血が飛ぶ。

兵士が芋虫のように這って銃を取ろうとする。私は腰が抜けて立てないので、物乞いのように身を前に乗り出し、左手を地面に付き、右手で頭をひたすら殴り続けた。

「来ないで！来ないで！来ないで！来ないで！」

言葉に合わせて私は棒を頭に打ち付ける。兵士は殴られるたびにビクンと痙攣した。

やがて、兵士の動きが止まる。

「……た、たすかった？」

だが、実は少しも助かってなかった。

私が大声をあげたせいで、別の兵士が倉庫にやってきたからだ。

兵士は死体を見ると驚いて駆け寄り、すぐに私に気づき、銃を向けた。

⑥ſeo...>cſ-, ſe Jeſ-ſ la -ſ⑥

「ち、ちがうの……私はただ……」

しかし相手は言い訳なんか受け付けてくれなかった。

⑥Vſſſ, ſee>ſſ⑥

引き金を引く。ガンッと音がして、銃が放たれた。

——が、運の良いことに、銃は私には当たらなかったようだ。

外した？

ゆっくり目を開けると、兵士は驚いた顔で私を見ていた。

手に持った棒が、光を放っていた。

「なにこれ……」

光は薄い黄色の盾を作っていた。それは亀甲形で、輪郭線だけが光っている。

まさか……これって例のヴァルデ？

だとしたら——

⑥ -MZoAr Cc Me 7eMΛe-l la V-c 7oΛ <oΛUr⑥

私はロッドを構えると、兵士に向かって呪文を放った。

すると私の声に応答するように、ロッドの先から突風が起こり、兵士を吹き飛ばした。

兵士は木箱にぶつかって気を失う。

「うわっ、これ、本当に魔法の杖だ！」

腰が抜けていたなんて嘘のように、私は飛び上がって喜ぶ。

「ついに念願のヴァストリアを手に入れたぞ！」

流石、紫苑の娘だけあるわ。

「これ、ヴァルデかな、かな？」

しかし先っぽに宝石は付いていない。どうやらただの魔法の杖のようだ。

ちょっとガッカリしたけど、魔力はかなり強い。いずれにせよ、私がこの銀色のロッドに救われたことは確かだ。

騒ぎを聞きつけ、残りの2人が倉庫にやってくる。

⑥ OecΛ, lclcJ MeΛ leeV -Ca J'-J), VecΛ ΛoΛ V-Jc lclcJ 7o77o -Mcr⑥

調子に乗って兵士を襲う。兵士はアルティス教徒だけあって一瞬たじろぐが、倒れた仲間を見ると速やかに発砲した。

だが私は魔法の壁でそれを防ぐ。驚く兵士たち。もちろん、殺すつもりはない。

⑥ ccMe, Cc Me V-Λl laaJr⑥

雷がロッドから出て、地面と並行に進んでいく。

あっという間に兵士に到達すると、雷は彼らを射貫いた。

悲鳴を上げるまもなく地面に倒れ込む兵士たち。

⑥ Mclc-r⑥

外で待機させられていたアルシェが駆け寄る。

⑥ -MeI Cya eC 3-JJo JeCeIδ -C- -C- eI⑥

⑥ Oec, -I- -J Cc V-J(c) laaJδ⑥

⑥ 7o77o Ca -MZoΛ, ΛoΛ J-J-C Ca -Ca⑥

⑥ O--, Cc eC -M-Λ l-⑥

⑥ lYaJJJa -IveJ) JcΛ Ca, Cya lδ⑥

⑥ Cee, >-Λ >cΛ-leC C-Λ Ccl -M-Λ⑥

⑥ h--Λ⑥

あ、そうだ。さっき頭を殴った兵士を治さないと。このまま放置したら死んでしまう。

魔法で兵士を治す。治しすぎないように気を付けた。また立ち上がられると困る。むしろ、性的な意味で。

・アシェルフィ

>el ʔ/0 Z-Λ lcΛ

ソーマのアジトは見つかってしまったので、アルヴェスクさんたちの帰還後、私たちはアジトをアシェルフィに移した。トラックに武器や食料や資料を積んで、アシェルフィにある別のアジトに逃げる。

アルヴェスクさんたちがアルナに帰って来るまでに私とアルシェは荷物を整理し、トラックに詰めるだけ荷物を積んだ。これが重いなのって。腰が痛いし、腕が痛い。

アルシェは元奴隷だっただけあって、重労働には慣れているようだ。文句も言わずに積み込みをしている。

みんなが帰ってきたころには、あらかた積み込みが終わっていた。

ヴェイレンさんはトラックの荷物を確認するや、<sup>Ⓞ</sup>く-ㇿㇿㇿ と短く言ってスタスタとトラックに乗り込んだ。

がたごと。あ〜る〜晴れた〜、ひ〜る〜さがり〜、り〜でい〜あ〜を、乗せ〜てゆく〜。

私とアルシェは荷台。三角座りでじっとしていた。

すると、アルヴェスクさんが入ってきた。あれ、なんで運転席側じゃないんだろう。

<sup>Ⓞ</sup>ʔcllc---, ---ʔue, ʔccʊ ʔaʔ -ʔδ Ⓞ

へらへら笑いながら、アルヴェスクさんは私の二の腕をぐいっと掴む。

「あいたたた！」

<sup>Ⓞ</sup>leΛ ʔc ʔcl ʔc>e<-cz -ʔa ʔ-, >>, ʔccʊ cʊ ʔ-é-ʔ ʔcΛ ʔ-, hec, leʔ <cʔ ʔa - ʔc leʔ ʔ-ʔⓄ

といって取り出したのはドーナツ。砂糖とチョコがまぶしてある。

<sup>Ⓞ</sup>0--, >-ʔ -ʔⓄ

<sup>Ⓞ</sup>ʊa, ʔc ʔccΛ- >-ʔδ -ʔʔ- -ʔʔ-, -ʔue, <-ㇿㇿ ʊΛ ʔc ʔ-ʔ, ʔeleʔ ʔeΛ ʔccʔ ʔell ʔc <ʔΛⓄ

<sup>Ⓞ</sup>ʔ-, ʔ-, ʔeΛʔ-ʔʔⓄ

あっはっはと笑うと、アルヴェスクさんはどて一と荷室に倒れ込んだ。手榴弾が転がる。あ、あぶないっすΣ(´Д`)

<sup>Ⓞ</sup>ʔee ʔʔaʊʊʊaⓄ ドーナツはむはむ <sup>Ⓞ</sup>ʔcllcʊ ʔcʔ-ʔ ʔcΛʊʊʊ ʔe ʔ-ʔδ Ⓞ

<sup>Ⓞ</sup>ʔ-, leʔ ʔ-ʔ-ʔ ʔʊʊ ʔcΛʊ ʔa - ʔccʊ,, ʔʊ0-----, <ʊ ʔʊ0---, ʔee ʔcΛʊʊʊʊ -ʔcʔ <-cʊʔ ʔ-ʔ ʔeleʔ -ʔʔ-ʔ ʔʊʔ- e >cΛ-leʔⓄ

身振り手振りを入れて話す。太くて筋肉だらけの逞しい腕が、台風で揺れる大枝のようにあちこちに動く。

それにしても逞しい腕だ。私の脚くらいはある。

Ⓔ λee, λ4aJJa, C4a Ccl C-) S-シ/ l--J Λ-ΛΛ-ε

Ⓔ h3μδ - 4-, h3C, JJa Cc Jeμ I-シ -J leμ eC VceΛ JJaδ ε

「えっ？」

Ⓔ cΛrε

アルヴェスクさんは右腕を私の腰に回すと、そのままくいと持ち上げた。

「うきゃあっ!？」

私は羽毛布団みたいに簡単に持ち上がった。Λc> の字みたいな格好になって、ぶらーんと垂れ下がる。

Ⓔ JeeeC(C-, -μe, Cc C-Λ -rε

今度は左腕でアルシェを持ち上げる。両手にふたりを抱えるアルヴェスクさん。オカマっぽい裏声で遊園地のアナウンスの真似をする。

Ⓔ JJaλJaΛ, lclCJ cl., leΛ- JeΛC lclCJ >cl lclCJ laΛ-J Ca -JaJ- c> <cJ., c Caμ, leΛ- JeμJ lclCJ JeμΛ S-Λ JJaJJa S->θ., -θθθθθθθθ...ε

私たちを小脇に抱えたまま、ぐるぐると回転しだした。

「す、すごい! てゆうか目が回るーっ!!」

Ⓔ Λ->C, >ca Λ->C, cl., Ca S->θ e> C-シ <ecΛ CcJJerε

「アッヒャッヒャ! \ (^o^)/アッヒャッヒャ! すごいすごい! てゆうか、女言葉キモーイ!」

アルシェも珍しくはしゃいで、あははと笑っていた。

ところが突然トラックが急ブレーキをかけ、私たちは悲鳴をあげて段ボール箱に突っ込んでいった。

「あはははは♪」

私はなんだかとても楽しくて、大笑いしてしまった。地球ではこんなに笑ったことってないなあ。

トラックがふたたび動き出す。

Ⓔ hec, JJa> Cc JJa Cc ell, μclC-δ leμ lo Ca le -μJ)-ε

Ⓔ - 4-, CcΛJ, ΛJa laΛ-C -μe-Z-μl c Cc J-lε

アルヴェスクさんになら本当のことを言っても良いか。

Ⓔ CcΛJ, ΛJa laΛ-C c <c- -I Cc ea Ja>-Λ-, Ja>-Λ-, d- <c- le JeμeΛ -μe-Z-μl laΛ-C cCε

さすがの彼も驚いた顔で顎に手を置く。

Ⓔ h3>>r -JJa Cc JJa JeΛ Ca ell C-, h---, leμ Λ- ΛcJ ee

しかもあっさり信じた。そして特に何も追求をしてこない。メリウスさんもヴェイレンさんも、こういうところに惚れたのかもしれないな。

Ⓔ C4a -J> I-Λ a e4bδ ε

Ⓔ >δ Cc I-シ leμ -J> Ccδ ε

私は笑って首を振る。

⑥-, 4- 4-, leμ -J> I-シ le,, <c- Cocl Ccl Velл μ-08 ⑥  
⑥J>J>, ΛoΛ leΛ Vcl Velл, CeC 3-3- ΛoΛo JccΛ- Velл I-ΛC CcJJe⑥  
⑥lo)C -, J--, Velл μ-C -I-シ- <c- μ-C -⑥  
彼はにこりとして、また仰向けで寝た。

アシェルフィに着くと、夜になっていた。しかも雨だ。  
私たちは黒い合羽を着込んで、まず食料などを軒下に降ろした。  
火薬類はトラックを動かして倉庫にくっつけてから運んだ。

「ここが……アシェルフィ」

地図を見ると、ちょうどアシェットのアルシェ側が住んでいた家からすぐ北西のところにある森のようだ。

アルディアの時代、ここは犯罪が多くて有名だった森で、人はあまり近寄らないようだ。

この森はセレンがクリスを凍り漬けにしたり、リディアを刺し殺したりといった、神話上重要なイベントが起こった場所でもある。

私は一足早く作業を中断すると、食料を開けて料理の支度をした。

ここではみんな忙しく働いている。休日なんてないし、労働時間も長い。

これは生き残りをかけた戦いだもんね。労働環境がなんて言ってもらえない。私もみんなを助けるために、がんばらなくちゃ！

翌日、アルヴェスク班はネルメス隊のエンナ班指揮下に加わることとなった。

ネルメスさんというのはアルヴェスクさんと同じくレジスタンスの幹部で、28もの班のリーダーを務める偉い人だ。

私は非戦闘要員だけど、一度顔を見せておくと良いということになり、アルシェも連れ立ってネルメス隊本部に行くことになった。

トラックでカンタルのほうまで脚を伸ばす。ガタゴトのせいでお尻が悲鳴をあげはじめたころ、本部に到着した。

煉瓦色の建物に入り、執務室へ行く。中で待っていたのは50代の男性だった。髪は少し白くなっていて、目が細い。顎髭を生やしているが、これも白くなってきている。

アルヴェスクさんが挨拶をし、私たちを紹介する。ネルメスさんは興味もなさげに私たちを一瞥した。

なるほど、アルヴェスクさんのキャラはレジスタンスでレアなようだ。ふつうはこの人みたいに無愛想で警戒心が強く、神経質なようだ。こういう人が生き残って上に行くのね。

面通しを終えると、トラックでそこから約 100m ほど離れたエンナ班のアジトに向かった。

ネルメスさんも別のトラックで一緒に来た。ここは班長が戦死したばかりであるため、直接ネルメスさんが指揮を執るそうだ。

そんな問題のある班で何をさせる気だろう。いや、問題があるからこそ増援として招聘されたわけで……。

エンナ班は 20 人ほどの小さな班で、テロやゲリラ活動をメインにしているようだった。ただ、負傷兵が多く、残った班員も訓練の浅い少年兵が多いとのことだった。

エンナ班に命じられたのは同じカンタル内にあるイルミロクの駐屯地の破壊。駐屯地は監視用で、そのせいでレジスタンスの活動が阻害されているとの話だ。

ここには庶務も医師もおり、比較的傷の浅い負傷兵も雑務に就いているため、私とアルシェは不要になった。

かといって無駄にご飯を食べさせておくわけにもいかず、ネルメスさんは私たちに戦地に出るように命じた。

アルヴェスクさんたちの後ろの安全なところで、現場で雑用をやれとのことだ。けっこう現場で雑務って発生するものらしい。

ただ、流石に現場であるため、武器の扱いは訓練しておく必要があるそうだ。

作戦実行は 7 日後なので、私たちはカルドさんからみっちり講習を受けた。

私は長さ 1 メルフィもない魔法の杖を接近戦用の武器その 1 として装備した。魔法の杖と言うと説明がややこしくなるので、打撃用の武器とした。

腰にベルトを付けてもらい、そこにパチッと留めて携帯できるようにしてもらった。そのほかにナイフなどももらった。

私たちに武器の扱いを教えたカルドさんは、とても驚いていた。

なんでって？私の運動神経の悪さに。冗談だけど。……半分ね(T\_T)

カルドさんが驚いていたのはアルシェに対してだ。

訓練を始めたとき、アルシェは私より不器用で、知識の飲み込みも悪かった。

私は紫苑ほどではないにせよ、ふつうの子よりはずっと頭が良い。勇太君よりも私のほうがずっと頭良いはずだ。

アルシェは勉強をしたこともなかったので、はじめは全然飲み込めてなかった。

それに銃の腕前も酷かった。的の円どころか、的にすら当たらない。私は反動の軽い銃ならどうにか円に当たったのに。



そんなこんなでカルドさんは呆れていたが、その後、アルシェは驚くべき進化を遂げた。奴隷時代の根性なのか知らないが、アルシェは不器用さと頭の悪さをすべて根性でカバーした。

庶務の仕事がないので訓練に時間を割けたアルシェは、ただひたすら戦闘の訓練をした。文句も言わずに、ただひたすら練習に明け暮れた。恐らく1日の睡眠時間は3時間程度だったのではないか。

アルシェは元々影の薄い子だから、ひたむきな努力をしても、みんなは気づかずにスルーしていた。

いつも何となく訓練所にいるなという印象を持たれていたようだ。私もそうだった。だから彼が3時間しか寝ていないことなどはじめは知らなかった。

5日目になると私はとっくにアルシェに追い越されていた。

アルシェは筋トレもして、線の細い体を変えていった。もともと、5日程度ではほとんど変わるべくもないが、それでも銃を構える腕や脚の筋肉はついてきたようで、多少ブレが少なくなった。

筋肉がついたからか、体が慣れたからか、私には分からない。でも、アルシェのパフォーマンスは確かに向上していた。

アルシェは銃のほかに剣の練習も取っていた。はじめは一切何もできず、私にすら負けていたのに、5日目にはカルドさんに攻めていけるようになった。

そのときカルドさんは慌ててアルシェをはじき飛ばしていたので、あれは相当焦っていたはずだ。アルシェの剣はかなり向上していたのだろう。

7日目までアルシェは訓練を続け、パフォーマンスを上げていった。アルヴェスクさんはニヤニヤしながら面白そうに見ていた。

私はアルシェって凄い才能があるんじゃないかと思って期待した。みんなもそうだ。

ただ一人、ヴェイレンさんは否定的だった。彼女は冷やかにアルシェを見ていた。私がなぜ素直に褒めないのか聞くと、彼女はこう答えた。

「>α | - eJ - (-) - lcθcθ Je VαJ), (eθ | - Jc V-Jλ,, α(- el eθ - (-) - V-J, el eθ eΛα Uel Uec V-Jλ,, Ve>λ Jo a c> V-J (cJ)εε

なるほど、と思った。それは十分ありえる話だ。

・カンタル

作戦実行日。目的はカンタル内にあるイルミロクの駐屯地の破壊。  
作戦は夜3時にスタートする。皆、徹夜だ。  
私は眠い目を擦りながらトラックに乗った。  
私とアルシェは先ほどまで講習を受けていたので、寝ておく時間がなかった。  
でもアルシェは慣れっこなのか、特に辛そうな顔もしていなかった。

トラックが付近の林に着く。  
予行演習通りに配置に着く。頭の中で地図と行程表を思い浮かべる。  
アルヴェスクさんがちょいちょいと手で招く。ささっと付いていく私とアルシェ。  
ああ、お父さん、中学校3年生の受験生の娘は、これからカンタルでテロを行います。

裏口に回ると、見張りの兵士をヴェイレンさんがサイレンサーで射殺。  
2人いたが、彼女は正確に眉間を射抜いた。恐ろしい腕前だ。  
同時に正門でエンナ班による攻撃が開始。  
私たちはさっと扉を開けると、闇に紛れて通用口へ進む。  
どうせ裏口の兵士を射殺したのはカメラで見られている。戦闘は避けられない。  
だが、エンナ班が正門を攻撃しているため、どうしても人員はそちらへ向かう。  
私たちは最小限の敵を倒しながら機関部を押さえるというのが仕事だ。

扉を開けると通路で、そこには誰もいなかった。  
何度か曲がりながら廊下を進むと、大広間に出た。  
大広間に入ろうとしたカルドさんをアルヴェスクさんがぐいと引っ張る。カルドさんは宙を浮いて半メルフィほど吹っ飛ぶ。凄い腕力だ。

同時に、カルドさんがいたところを銃弾が襲う。

「狙い撃ちだ！」

ᄀccJ し-l -ca, J-c Ÿelᄀ

ᄀ-l, Jcccl-rᄀ

ジャキッと銃を構える。今回は制圧が目的なので、散弾銃や機関銃は避けた。手榴弾も御法度だ。この施設を壊しては意味がない。

私もアルシェも短銃だ。ただし、戦闘で負けては元も子もない。一応私も散弾銃を持たせられているし、手榴弾も腰に付けている。

私たちはマスクを付けているので、しゅこー、しゅこーという自分の呼吸音がやけにうるさく聞こえる。

アルヴェスクさんが催涙弾を投げる。

煙はぷしゅーっと吹き抜けて広がっていく。

夜襲された相手は流石にマスクを装備していなかったらしく、咳き込む音が聞こえた。

⑥lee<rg

ダッと走り出す。煙の中に身を隠し、撃たれないように注意する。

ガガガッとマシンガンの音が鳴る。私は何も聞こえない振りをして走った。

しかしマシンガンが無駄と思ったか、上の階の兵士は階段を下りてきた。

⑥Ae7C - e-1rg

壁の窪みに身を隠すと、マシンガンの弾が私の肩当てを突き抜けていく。

「ひっ！」

後衛とはいえ、これでは確実に最前線だ。

VecMeA ⑥Mc1c-, -Me, 1c1c 1-1 -Ca,, Ae7Ce 1-1⑥

アルヴェスクさんが身を乗り出して銃をガンガン撃つ。兵士に当たったようで、くぐもった悲鳴が聞こえる。

アルベさんは壁にかかっていた大きな絵を外すと、怪力で投げつけた。叫びが聞こえ、兵が怯む。

⑥7cl>rg

走り出すアルヴェスクさん。あっという間に階下のホールに陣取る。

アルベさんは体に似合わない速さでテーブルをひっくり返すと、あっという間に防壁を作ってしまった。

ガガガッと机に穴が開いていくが、分厚い金属の机なので、弾は貫通しない。

しかし机の高さは低い。階段の上から掃射されたらひとたまりもない。

それはみんな心得ているようで、階段の上を走っていく兵をヴェイレンさんは華麗に撃ち抜いていった。

自然と向こうも物陰に隠れ、膠着した銃撃戦となる。

ところが左右のドアから敵の増援が現れた。

⑥Ceorg

慌てるカルドさん。敵は速やかに銃を放ち、カルドさんとヴェイレンさんの脚を撃った。

ふたりは悲鳴を上げて地面に転がった。

「いやあ！」

私はというと、銃を構えているのにおびえることしかできず、全然引き金を引けなかった。

VecMeA ⑥Mc1c-r Me V-1r 1el 1-rg

苦しそうな声でヴェイレンさんが叫ぶが、私は「あ……あ……」と怯んでしまった。

左の兵士が私に銃口を向ける。私は思わず目を閉じた。

その瞬間、ガンッと音がして、それとほぼ同時にバーンという大きな音がした。

私は何が何だか分からなかった。突然私を狙っていた兵士が爆発したのだ。

いや、爆発したのは銃だ。銃が暴発した。そして左にいた3人の兵士を巻き込んで、彼は倒れた。

-lVeJ) 6aaa0ooo-r -Me, (c e' l-c -r6

銃を撃ったのはアルシェだった。まぐれか狙ったか、アルシェは敵の銃の銃創を撃ったのだ。

アルシェは緊張のあまり歯をガチガチさせ、銃を足下に落としてしまった。それを見てアルヴェスクさんが笑う。

6(a e' h-g lcel/ lcl-, (l (c V-J(c) l--J, -Mer6

6-...-A...6

6lcel, (c e> JeA V-J-A <ccYa (cJeeF6

幸いにもカルドさんとヴェイレンさんは弾がレッグガードに当たったため、大怪我には至ってなかった。

階段の敵を倒した私たちはエンナ班と合流し、機関部へ侵入した。

私たちは完全に後列。もう危ないことはないようだ。安心した。

レジスタンスは無事機関部を制圧。投降した兵士を虐殺することはなく、捕縛して本部へ送ることとなった。

戦闘が終わると私のような庶務はかえって忙しくなった。

死んだ兵士の検死に立ち会い、死亡者のリストを作る。敵兵のも味方のも。結局こういう作業って誰かしらがしなくちゃいけないのよね。

死体は銃で撃たれて眠っているようなものから、頭が吹き飛んでいるものや、内臓が飛び出ているものがあった。

私は思わず死体を見て吐いてしまったが、それを掃除するのもどうせ私の仕事なんだろうなあ。

カルドさんは私の背中をさすってくれた。アルシェは黙々と検死官の指示に従って書類を作っていた。

私はたくさんのミサンガを持って、倒れている人を見て回った。味方にだけこのミサンガを付けるのだ。

死んでいる人は黒。大怪我には赤。中くらいには黄色。軽傷には緑。医師の指示に従って付けていく。

血に触れないようにと医者に注意された。手袋とマスクをして作業しろと言われた。肝炎が移る可能性があるというのだ。

死傷者のリストを作ると、今度は武器の回収だ。

落ちていた武器を集め、壊れていないか判断する。判断するのは工務科の人たちだ。私たちは彼らの判断に従い、壊れていない武器のリストを作り、トラックに搬送する。また、敵の武器は戦利品として押収する。このリストも別途作らねばならない。

最前線で戦っていたアルヴェスクさんたちは今日はもう仕事を終えてアジトへ帰った。

これからエンナ班との打ち上げをやるとか聞いてた。この時代にはアルバザードでも飲みニケーションがあったのねえ。

アルシェも誘われたが、庶務は仕事が忙しいので辞退した。

彼らはバーでアホみたいに飲んで、タバコを吹かし、戦闘で親を失った10代の女の子を買っらしい。親がイルミロクだった子を買うんだそうだ。

ほかの人はいいとして、アルヴェスクさんはメリウスさんがいるのに……サイテー。

てゆうか、親を失ったイルミロクの子を当てつけのように買うなんて、酷い人たちだわ。

アルヴェスクさんはバカだけど、そういうことはしない人だと思ってた。軽蔑よ、最低だわ。

私はため息をついて二階に上がる。仕事が多すぎる。

Ⓢhec, Mclc-, Cc 4aλ λ-eJ,, Cc -C Jclδ Ⓢ

Ⓢ>cl -|VeJ)...r λoλ λ- -θeλ (cλ)- - |-, |-(a )e |Z )- c>θMeλ <ceλ |-(cl >elcaJ la-Ⓢ

Ⓢh--λ...(-| (a eC J-c- >-λ |-(eC Vc)Ⓢ

Ⓢh>δ λo> C4a C-λ C-a |Zδ Ⓢ

Ⓢ-λδ Ⓢ

アルシェは苦笑して首を振る。

Ⓢ4- 4-, >cl (4a le Vc) JeCeⓈ

するとアルシェは一瞬ムツとした顔をしたが、何も言わずに作業を再開した。

メリウスさんが後ろから来て、しゃがんで仕事を私にしなだれかかる。

ふうと息を吐いて私の前髪を揺らしてくる。ラベンダーの香りが私の鼻をくすぐる。

……にや、にやんですか？

私は眉をひそめて後ろを振り向く。この人はいつもこうだ。とても人なつっこい。

Ⓢ|-( C4a 4aλ λ-eJ,, Cc -C Jcl, lc- lccδδ Ⓢ

-Me Ⓢ|-( λ- Sο - λ4aJJa -|VeJ) CcJeeⓈ

ちょ！なな、何チクってんのよアルシェ！しかもよりによってメリウスさんに！

K (空気)・Y (読みなさいよ!) ( ㊦ )

⑥ - h--,, (Y a λ- μclc-λ - l- JeCeδ ⑥

⑥ eeθθθ (e, Ceo⑥

⑥ θ-JJθ e,, >oλ l- (a >cλ )- c>θμeλ,, (eC l- JoC Jo- >cl (co l- λc-λ l-λ λ-λ eC θceC⑥

⑥ z>...θceCδ ⑥

⑥ Y-,, l- (a >cλ, (l- Jo a - la >cλ,, (co, l- λoo) - >cλ, <cC Ycl - la⑥

⑥ Ya l Jo- Jo l (Ya λ-μ >c-λδ l-l- eJ (Ya λ-μ Jeλ l- -C Jo-δ (co, l- μeλJ λcel <ce  
- (Ya⑥

しかしメリウスさんはくすくす笑うと、唇に指を艶めかしく這わせた。

⑥ λoλ λ-μ Jeλ l-...>cl Jo l λoλ (aC Ya l- c> λe⑥

私は意味を理解すると、急に耳まで真っ赤になった。

恥ずかしかった。彼を少しも信じてあげられなかった自分が。

私……一生懸命働こう。ここで、彼らのために働こう。

たとえ歴史を変えてミロクさんを殺してしまっても、それでいい。

ミロクさんさえ死んでくれれば、何十億という命が救われるのだ。私の知っている未来のほうが、もしかしたら間違っていたのかもしれない。

その後、死体をトラックに積む作業を行った。

清掃はアルシェに任せ、私はエンナ班の庶務の人たちとトラックに乗った。

死体を捨てに行く仕事だ。味方の死体ではない。敵の死体だ。味方の死体は綺麗にして家族に返す。

敵の死体でも交渉に使えるような死体は保存しておく。今回は敵のリーダーの死体を保存することにした。それは残ったアルシェの仕事だ。

トラックの荷台に乗る。知り合いはいない。

私は死体の横で、三角座りをしていた。

ガタゴト揺れる。大きな石に乗り上げるたび、ドンッてなってお尻が浮く。

突然、ガンという音が響く。そして急ブレーキがかかる。

何が起こったのかも分からないまま、私は荷台を転がる。

「今の——銃声!？」

ふたたびガンという音。

まさか、イルミロクによる反撃か!？

撃たれたのはどうやらタイヤらしい。トラックはバランスを失ってあらぬ方向に走っていく。

そして減速しながら木にぶつかった。

があんと音がして、私は勢い余って荷台から吹き飛ばされた。

・静岡

2022年7月24日 日曜日

静岡県静岡市

気がついたら私は海岸で寝ていた。

周りには誰もいない。太陽はもう夕日になっている。

「ここは……三保？私、また地球に……」

起き上がると、横にはリュックが置いてあった。

「いったい今は何日なんだろう」

ケータイをリュックから取り出す。

「うそ……まだあの日のままだ。でも勇太君はいない。あの男の子も……」

ふと唇を押さえる。

そうだ、ここで私はいきなりキスされたんだ……。

ふつふつと怒りが湧いてくる。

ケータイを見ると、留守電が入っていた。

聞いてみると、勇太君だった。どうも私の居場所が分からないらしく、とにかくあの男の子から逃げて先に進もうという内容だった。

勇太君は無事に逃げられたのだろうか。無事なら1号をどんどん進んでいるはずだ。

あれからまだ1時間しか経ってない……。勇太君はどうなったんだろう。

ケータイにかけると、勇太君が出た。

「リディアか！？」

かなり声が焦っている。

「うん。勇太君、大丈夫？」

「ああ。お前は？」

「平気よ。海岸で気を失ってたみたい。今どこ？」

「1号を走ってる。お前も向かってるかと思ったけど、海岸だったんだな」

「電話くれた？」

「3回くらい。でも出ないから、またしばらくしてかけようとしてたところ」

「そう、無事で良かったよ。いま1号のどの辺り？」

「清水から54号で1号に繋がって、今静岡に向かってる」

「あ、地図は勇太君が持ってるんだっけ」

「悪い。ケータイで見れるか？」

「うん。じゃあ静岡で今日は泊まろうよ。先に行ってて。私はバイクがあるからすぐに追いつくと思う」

「運転気を付けろよ」

「うん、ありがとう」

バイクは私の傍で倒れていた。頑張ってバイクを起こすと、エンジンをかける。バイクに乗って1号に戻る。

警察に捕まらないか冷や冷やしたが、運良く誰にも何も言われなかった。

それから2,3時間して、私は静岡駅についた。

ケータイで勇太君と待ち合わせる。

1号に近い入口から入り、バイクを押して中を歩く。しかし勇太君が見つからず、反対側の入口まで出てしまった。

壁に静岡駅と書いてある。ここで間違いないと思うんだけど。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0133.JPG>

左を向くと案内地図があった。そしてそこに勇太君が立っていた。

「勇太君！」

「あ、リディア！」

勇太君は案内地図で状況を確認していたようだ。泊まる場所の算段を立てていたのかもしれない。

「無事で良かった」

「ああ……って、お前その服どうしたの？」

私は白のワイシャツを着て、白のスカートを履いていた。スカートにはポケットが付いていて、中には掃除したときに回収した手榴弾のピンが入っていた。

しまった……着替えずに来ちゃったんだっけ……。

ベルトには魔法の杖までご丁寧に付けっぱなしである。手榴弾は在庫整理のときに置いてきたけど、杖はそのままだった。

「あの……着替えを」

「そんな服持ってたんだな」

「あ、うん……」

「でもさ、俺が見たときそんなの持ってなかったよな」

「ん？ううん、奥のほうに入れてたよ」

訝る勇太君。まずい、ごまかさないと。

「パンティとブラの下敷きになってたから」

私はわざと刺激的な言葉を使った。すると純情な勇太君は顔を赤くして追求を止めた。



「ねえ、今日はどこで寝ようか」

静岡は大きな街だ。おじさんに探してもらえばどこか泊まる場所くらいあるはずだ。

しかし勇太君は電話をせず、「昨日と同じふうにしよう」といった。

「揺らぎで大勢の人が死んでるからな。一人暮らしで身よりもなければ孤独死になってる可能性もある。気分はよくないが、しょうがない。三島のときみたいに、空いてる家を探そう」

「でも……どうやって？」

「外の電気メーターが回ってるにもかかわらず部屋が暗い家を探そうと思う。

平塚の揺らぎや箱根峠の揺らぎが起こったときはまだ明るかった。その時間に死んだ場合、電気を付けずに死んだはずだ。ヘタすりゃ鍵もかけてないだろう。自分は家の中だし」

「でも、単に外出してても電気メーターは回るでしょ？」

「いや、この季節だからクーラーを付けてたと思うんだよ。クーラーを付けっぱなしで死ねば、かなりメーターは回る。クーラーって消費電力大きいからな」

まるで勇太君が静に見えた。

「あったまいいい！」

「でも、時間がかかるし、確実じゃない。こっちも疲れてるし、できるだけ早く探そう」

勇太君の作戦はなかなか **rat** なものだった。

一人暮らしの確率が高いオンボロアパートを探し出し、洗濯物のかかっているベランダを探す。

その中で灯りの付いていないところに目星をつける。

電気メーターやポストを確認し、中の音を聞き、ピンポンを押す。

この方法で何件か回ってみたところ、どうも中で死んでいそうだという家を発見した。

私たちは何度もピンポンを押し、外の窓からも中の様子をうかがった。

そして意を決してドアに手をかけると、幸運なことに鍵はかかかっていなかった。

「……オッケーっばいよ」

ささやき声で見張りの勇太君を呼ぶ。勇太君は急いで荷物を持ってくる。自転車とバイクは既に付近の林に隠してある。

中に入ると、ひんやりしていた。やはりクーラーのかけっぱなし。貧乏そうだが、クーラーは設置していたようだ。

予想通り、中では人が死んでいた。女の人だ。

そう、私たちは始めから女の人を狙った。女物の下着が干してある家を探したのだ。というのも、もし中に人がいて騒ぎになってしまった場合、男の人だと勝ち目がないが、女の人なら逃げられるからだ。

女の方は30代だろうか、服を着てケータイを持ったまま倒れていた。クーラーのおかげで腐敗が遅れているようだ。

勇太君が荷物を持って中に入り、鍵をかける。

「こんなに早く見つかるとはな……」

「勇太君の作戦が良かったのかも」

「一人暮らしか？」

「っばいね。洗面所を見たけど明らかに一人分。男がいる気配もないね。誰も来ないと思うよ」

「そうか……可哀想にな」

私は雑然とした居間のテーブルに置かれたクレジットの利用明細を見る。

「名前からすると韓国人のようね。こっちで暮らしてみたい」

「あ、そうか。死ぬのは日本人とは限らないもんな」

「腐敗が進行してないから、多分昨日死んだみたいね。電話を持っているのは119しようとしたんでしょう」

「俺たちにとっては、その電話が間に合わなくて助かったということか……」

落ち込んだ顔でいう勇太君。

私は冷蔵庫を開けに行く。

「おい、人ん家のだろ」

「昨日死んだんなら、腐ってないから大丈夫よ」

「いや、そういうことじゃなくて」

「コンビニに今から買いに行つて隣人に出くわしたら言い訳もできないわ。今日はここで料理するから」

「……ほんと、お前が揺らがれても知らないからな」

「んん？」

私は冷凍庫のアイスをしゃぶると、笑みを浮かべた。

「そんなことでいちいち殺されてたまるもんですか」

「そんなこと……って」

青ざめる勇太君。私はこの2週間で相当人間が変わってしまったようだ。

テロ組織に参加し、実戦にまで参加した。倉庫では兵士を撲殺さえしかけた。

それから比べれば住居不法侵入など、この非常事態においては何ら罪悪感を感じさせない。

今の私を紫苑や静が見たら、いったいどう思うのだろうか。いじめられっ子が逞しくなつたと褒めてくれるだろうか。

「あ、挽肉はっけーん♪ハンバーグにしようか？」

「俺……いい。何も食う気がしない」

勇太君はお腹を押さえてその場に倒れ込んでしまった。

勇太君は度重なるストレスで胃を壊したらしい。

私はお粥を作ってあげた。

「はい、あーん」

「いいよ、自分でやる」

しょぼしょぼと食べる勇太君。私は薄いお茶を淹れてあげた。

「俺……お前がもっと傷ついていると思ってた」

「え、どうして？」

「だってあいつに……キスされて……」

「もう。ヤなこと思い出させないで」

「……悪い」

「今日はもう早く寝よ。明日はどこまで進む？」

「地図を見る限り、これからしばらく山道のような。志太郡の辺りがヤバイ」

「……ほんとだ」髪をかき上げる「藤枝の辺りも田舎っぽいね」

「島田を通過して大井川を渡って……」

「また山があって……掛川？」

「多分、その辺までだろうな。ほんとはもっと行きたいけど」

「でも、無理しないようにしようよ」

「ああ。俺も明日はバイクを探すかな」

「うん、そうしよう」

「いっそ車でも盗るか？」

冗談交じりで笑う勇太君。

「絶対事故死するから止めて」

私も笑った。

・浜松

2022年7月25日月曜日

静岡県静岡市

韓国人の女の人の家を出た私たちは、1号沿いに西へ向かった。

静岡を離れると急激に田舎道になり、山間の道を走るようになった。

最初はバイクがあったから良かったものの、運悪く電池が切れてしまった。女の人の家にはケーブルがなかったので充電できず、かといって明らかにお子様な私がスタンドに行くこともできなかったため、そこでバイクは廃棄となった。

バイクを廃棄したのは島田だ。それから私は乗り物を失い、歩く羽目になった。

暑い。死ぬ……。

勇太君は自転車を押して歩く。

「この辺りは何も無いな。バイクも落ちてないし、自転車もない。どこかで盗むしかないかな」

私に感化されたのか、だんだん大胆になってきた。私は少女だてらに、純粋な少年を汚すことに快感を覚えた。

結局、少し脇道にそれて、違法駐車してある自転車を壊して盗もうという話になった。

人に見られないよう気を付けながら、私は魔法の杖で鍵を殴って壊した。アルバザードの自転車に比べてなんと簡単に盗めることか。

自転車を奪った私たちは、大井川へ向かった。

川には大きな橋がかかっていた。自転車用の道が設置されており、安全に進める。なんて親切なんだ、静岡県。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0144.JPG>

橋を越えると地図を広げた。

「ねえ、このまま1号を行くとまた山道よ。私、自転車だと無理かも……」

「そうだな。じゃあ南のルートで行くか？473で金谷ってところをぐるっと」

「で、菊川を通過して37で掛川？」

「だな」

ところが473はそんなに甘い道ではなかった。

これがまあ、金谷駅を越えた瞬間、山、山、山。

登っていて、途中右手に「旧東海道」と書いた看板があったものの、道が険しくて行く気がしない。

山をひたすら歩いて登る。漕ぐのは無理だ。

しばらく歩くと山は終わったが、今度は直線が長い。嫌に長く感じたのはバイクを捨てたからだろうか。

牧ノ原で右折し、物凄い下り坂をあっという間に下っていく。ぐるぐるぐるぐる回っていった。

舗装はされているものの、人っ子一人見えない獣道みたいなところを走る。辺りは畑だ。

「ねえ、もし道を間違ってたらどうしよう。私、絶対今下りた坂なんて登れないよ！」

「そんなこといってもしようがないだろ」

「ここ、本当にあってるの？こんな獣道、ありえる？」

マイナーな県道だから案内が悪く、看板もなければ道を記す標識もない。私は不安になった。もしこれが間違っていたら、あの山を戻らねばならない。

だがしばらくすると、ようやく標識が出てきた。

「合ってるみたいだ、この道がやっぱ 79 だ」

菊川に着く。

ここで一休みしようと話していたものの、駅を見て私たちはスルーを決め込んだ。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0144.JPG>

ここでは休めない。掛川へ急ごう。

堀之内で右折し、37 に乗り換える。

しかしこの道も物凄い田舎道だ。線路沿いを走っているのに、しばしば藪で線路が見えない。

1号のほうか距離はあったかもしれないが、走りやすかったのではないだろうか。

このままでは掛川もどれほど田舎か……。

しかし掛川駅に近付くと急激に街の様相を呈してきた。

駅前に自転車を止めると、私たちはコンビニで一休みした。お昼を食べる。

今日は朝早く出たのに、掛川でもうお昼だ。

「ここはちゃんとした街だね」

新白よりは確実に大きい。でも、赤羽や大宮には遠く及ばない。

「飯能とどっこいだな」

勇太君がぼつりと呟く。

駅から北に進路を変える。1号に戻ろうという計画だ。

掛川城のところを通り、1号に合流する。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0156.JPG>

1号に出て、しばらく進む。沢田という複雑な交差点がある。その周りはたくさんの道路が行き交っていて、うっかりすると道を間違えてしまう。

私たちは慎重に道を選び、高架下をくぐった。

するとそこで倒れている人たちを発見した。ヘッドギアをかぶった二人の男性で、自転車と一緒に倒れていた。

「三保の揺らぎのせいかな……？」

「多分。それにしてもこんな往来のあるところでどうして今まで放置されていたのかな……」

「連絡を受けてもすぐに救急車が来れないくらいなんじゃないか？」

「そうだね……昨日も揺らいだんだもんね」

「いったい毎回どれだけの悪人が殺され、どれだけの善人が巻き込まれているのだろう。」

「なあ、あの自転車なんだけどさ、クロスバイクだと思うんだよ」

「なにそれ」

「昨日ケータイで調べたんだが、ロードレーサーっていう早いチャリと、マウンテンバイクみたいな悪路を行けるチャリの合いの子でさ」

「へえ」

「悪路もそこそこ、町乗りもそこそこって感じだ。もちろんママチャリよりずっと軽くて速い。それでいてロードより頑丈だ」

「へえ、へえ！」

私は目を輝かせた。

「じゃあそれ、借りられないかな！？」

「人、来てるか？」

慣れてきた勇太君。私も指示されるのに慣れてきた。さっと見張りに立つと、オッケーサインを出す。

自転車を回収して、脇道にこそこそ隠れた。

木立の中で高さを調節する。勇太君はもちろんやり方を知らないなので、ネットで調べながらいじる。

「どうやら椅子の部分の下にネジがあって、そこを緩めて椅子の高さを調整するらしい。」

「ロードと違って基本的にはママチャリの乗り方でOKだから、良かったな」

彼らが持っていた工具で椅子を調整すると、勇太君はシートをパンパンと叩いた。

「うん、ありがとう」

クロスバイクというのはなかなかの優れものだった。

軽いし速い。一漕ぎでかなり進む。気持ちの良いものだ。

しかも坂道はギアを軽くすれば、立ち漕ぎしなくても登れてしまう。

おおっ、これは素晴らしい道具ではありませんか。

もちろんバイクよりはずっと大変だったが、それでもママチャリに比べれば天と地だ。

そこからは平坦な道も多く、わりとサクサク進むことができた。袋井、磐田と順調に進む。

ここまでも何度かあったが、天竜川の前で1号が自動車専用道路になってしまい、迂回路を行かざるをえなくなった。

天竜川にかかる自動車用の橋は行けず、私たちは一度長森で右折し、1号に併走する261を渡った。

ところがここが曲者で、むちゃくちゃ橋が長いくせに、後続車が「早く行けよ」とばかりに競り上げてくるのだ。

私は無理して漕いだら脚が痛くなってしまった。自転車には計器がついていて、それによると30kmを越えていた。勇太君はもっと速かったけど、私にはこれが精一杯です。

天竜川を越えたらぐいっと南に曲がり、浜松バイパスに乗る。

ずいずいと南に下っていくのだが、今日はもう疲れたので浜松駅に寄ることにした。

どこかでまた宿を探さないと。

1号をいったん外れ、浜松駅に辿りつく。

随分大きな駅だ。それでいて、大宮ほどごちゃごちゃしていない。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0163.JPG>

クロスバイクのおかげで疲れが違う。

いや、ギアというのは重要だね。脚が悲鳴をあげるのは主に坂なんだけど、ギアのおかげで坂が楽になる。

「今日は食べてから宿を探さない？まだ少し時間あるし。ずっとコンビニ弁で、おなかの具合悪くなっちゃった」

「そうだな。お前、何が好きなんだ？」

「イタリアンがいいな。最近食べてないし」

「ああ、いいよ」

東京にもあるチェーン店に入ると、私はトマトソースを頼んだ。

勇太君は魚介のクリームなんたら。あと、ピザとかを適当に。

宿代がかかってないので、お金にはかなり余裕がある。

「とうとう浜松だね。もうそろそろ静岡も終わりじゃない？横に長い県だから、越えるの大変だったよね」

「ああ、次は愛知だ」

「私、愛知から関西って感じなの」

「あ、俺もそう思う」

「静岡までは理解の範囲内なんだけどねw」

「理解？」

「え、まあそういうフィーリング」

「はあ……フィーリング、か。お前ってほんと変わってるな」

「そうかな。でも、ここまで気さくに話せるのは勇太君が初めてよ」

「そうなのか？」

「友達いないもん。あ、そうだ。勇太君も友達少ないって言ってたけど、今日は月曜だし、学校のみんな心配してるんじゃない？」

「……それはないな」寂しそうに答える「俺も……友達、いない」

「そうなの……」

「ゼロじゃないけど……別に……多くはない」

うん、その言い方は本当のようね。

「あ、それと」

「ん？」

「今……夏休みだし」

「あ」

パスタが来る。

「これ、おいしいね」

「ああ。こっちも食べる？」

箱根でおそばを食べたときと比べてずっと優しくなった。「食べたら？」みたいな言い方じゃなくなってる。

「うん。勇太君もこれ食べて」

勇太君は嬉しそうにしている。私に心を開いてくれたようだ。あ、でもそれは私も同じだな。

「お前こそ、友達が心配するんじゃないか。お茶の水の。キャラでもふつうの人間と同じなんだろう？」

「ううん、私の友達いないっていうのは、ほんと文字通りゼロ人って意味だから」

「え……」意外そうな顔「そうなのか」

「うん、そう見えない？」

「別に……」

「えへへ、ほんとにゼロなんだあ。私、嫌われ者だから」

「別に嫌なやつじゃないと思う。ヘンな奴だけど」

「あは、ひどーい。そうね、ヘンって言って去っていった友達が小学生のときに、いたね」

「……」



パスタをくるくる。

「私ね、虐められてたの。虐めたのは元友達。最悪なパターンでしょ？」

黙って頷く。

「それから、友達を作るのが怖くなっちゃって。家族としかいなかった。あ、家族のことは突っ込まないでね」

「ああ……。なんで友達に裏切られたんだ？」

「ええと……。まあ、今考えると私が悪いと思うの。あんなこと言ったらふつうの友達は引いて当然だと思う」

「つまり……。死体の家に侵入しようとか、死体の家のアイスを手勝手に食べようとか……」

「コラ(# ㇏)」

「はは。でも、俺からすれば、そんなことで裏切るなんて、友達じゃないと思う」

「そうね、ありがとう。私、凄く暗くて大人しいから、そのとき友達を引き留めることができなかったの」

「俺の前では大人しくないけどな」

「慣れるとね、そうなの。でも、好きじゃない人の前だと、話せなくなっちゃうの」

好きという言葉に反応した勇太君が、ぴくっと銀のフォークを揺らす。少し口をぽかんと開けたけど、そういう意味ではないと思ったのか、また食べ始める。

「じゃあ……。あれか、俺が初めての友達……。か？」

勇太君は顔を赤らめながら聞いてきた。彼にしては相当勇気を振り絞った質問に違いない。

そして私もその質問を受けるのに凄く勇気がいった。ここで頷いて、でも向こうにその後否定されたら、立ち直れないかもしれない。

私は「えへへ」と笑った。

「な、なんだよ」

「うん、そうよ。一緒にいると、とても楽しい」

勇太君は一瞬呼吸が止まったような顔をして、それからゆっくり息をついた。

「そ、そうか……。俺もお前のこと……。嫌いじゃない」

「好き……。じゃないの？」

「……」

「ごめんね……。調子に乗っちゃった」

頼んでおいたポテトが運ばれてきた。

・中田島砂丘

2022年7月25日 月曜日

静岡県浜松市

お店を出ると、暗くなっていた。

また昨日と同じ方法で宿を探すことになった。

ところが駅の周りには家がなかった。そりゃそうか、こんな大きな駅の周りにそうそう住めないよね。ましてオンボロアパートはいわんやだ。

どうせなら1号に近いほうが明日が楽だということで、家を探しながら1号に近付くことにした。

東のほうに1号はあるのだが、そっちに行くと戻ってしまうことになる。

1号は天竜川のように南下しており、遠州灘のほうで急激に西に転向している。その関係で、浜松駅からは一般道を南下して、中田島で1号に合流するのが良い。

ところが、その中田島街道を下りているときに、私は異変に気づいてしまった。

道の先に円柱の結界が見えたのだ。地図で確認すると、そこは中田島砂丘という砂漠があるところだった。

話し合った末、放っておくわけにはいかないということになり、砂丘へ進むことにした。

しかし戦うとすれば先日の少年ということになるだろう。雷を出すような人間を相手だ。どうしたものか。

とりあえず私たちは防犯スプレーを肌身離さず持つておくことにした。いくらあの少年でも、目までは鍛えられまい。

砂丘に着くと、外に自転車を止めて階段を上がる。

「ここに止めておくぞ」

「中のほうがよくない？」

「砂の上は走れないし、チャリを運ぶのも大変だ。武器だけ持っていく」

「わかった。でも勇太君……もし少年が出てきたら、どうする？」

「どうするもこうするも、そもそも出てくるって思って来てるんだろ。じゃあ今度は戦うよ」

「前みたいに……」

私は途中で口を閉じた。前、勇太君は空気になっていた。全然助けてくれなかった。

自分より強い男の子と喧嘩する勇気が、ないみたいだ。

その気持ちは分かる。勇太君はバカじゃない。雷を出すような相手に素手で挑むくらいなら、戦わずに逃げた方が良い。——たとえ女の子を見捨てても。

だけど、それは賢明に生きるためのやり方。

私が今必要としているのは、多少バカでも女の子のために戦うことのできる男の子。勇太というより、勇者。

でも、臆病な彼にそれができるだろうか。せいぜい守れて自分だけではないか。

私は魔法の杖をぎゅっと握った。恐らく勇太君よりもっと臆病な私が戦うことになるだろう。

覚悟を決めておかないと。死ぬ覚悟、そして殺す覚悟……。

砂漠を越えると、海岸があった。夜で暗く、辺りが見えづらい。

砂漠というが、海があるせいで私には巨大な浜辺にしか見えない。

ただ、入口を入れてすぐのところ、海岸が見えないところまでは、間違いなく砂漠だ。

小高い砂の山が点在していて、ラクダのコブみたいになっている。アラブのラクダは砂漠を真似してコブを膨らませたに違いない。

海岸のところに男の子が立っていた。緑の靄を受け付けない、銀髪の美少年。

少年は結界に魔力を放っていたが、私に気がつくのと、ゆっくり振り向いた。

「嬉しいよ、リディア。君のほうから来てくれるなんて」

「あなた……いったい誰なの？」

「僕？あぁ、まだ名前を言ってなかったね。僕は夕月」

「ゆづき……？あなた、ニューワイズのメンバーなの？」

「あぁ、そうだ。琥珀が取り漏らした結界を破壊し、琥珀に霊力を供給するのが僕の役目さ」

「そのたびに揺らぎが起こっていることを知っているのよね！？」

私は防犯スプレーを構えた。

「揺らぎ？なにそれ」

そりゃそうか、あれは春夫おじさんの命名だった。

「つまり、ニューワイズエンドの小さい版よ」

「あぁ、それが揺らぎ、ね。いいネーミングじゃないか。そう、揺らぎが起こることはもちろん承知しているよ。だが、これが僕の仕事だ」

「仕事？」

「願いでもある」

ゆらっと近付いてくる。

「……君とひとつになるという願いを叶えるために」

「えっ！？」

洗い立ての夕月の髪が風で揺れる。

「リディア、愛してるよ……」

は？この子、今なんて言った？

「こ、こないで！スプレーかけるわよ！その顔、大事でしょ！？」

「顔？ああ、君は僕の顔が好きかい？」

「そんなこと、関係ないでしょう！」

「あるさ。僕は君とひとつになりたいんだから。君に好かれなくちゃならない」

「たっ、確かにイケメンだけど、そんな頭のおかしい人とは告られても付き合えません！」

夕月はくすすと笑うと、瞬時に私の懐に入り、スプレーを構えた右手を掴んだ。

「いい匂いがするね、リディア……」

顎を取ってまたキスをしようとする。

私は思わず顔を背けた。悔しいことに、こいつも良い匂いがする。なんて腹の立つ。

「おい、止めろよ！」

勇太君が夕月の肩をぐっと掴む。

夕月はゆらっと振り向くと、「何？文句あるの？」と挑発的に言った。

勇太君は言葉に詰まったが、「あ、あるよっ！」と一生懸命凄んだ。

「じゃあ、喧嘩しようか」

夕月は顔に似合わない言葉を吐いた。

「え？」

勇太君があからさまに怯える。

「喧嘩。君はリディアを守りたい。僕はリディアを奪いたい。そしたら戦うしかないでしょ」

「な……なんで、喧嘩なんて。俺は暴力とかしない主義だし」

「じゃあ、女の子をおめおめ奪われる主義なんだ？」

くすくす笑う夕月。

「うるさいな！なんだ、お前！」

さすがの勇太君もキレて、夕月の胸ぐらを掴んだ。

だけど、殴るまではいかない。怖くて夕月を殴れない。殴ったらどんな目に遭うか。

夕月はからかうように勇太君を見下ろした。

「君さ、高校生？」

「だからなんだってんだ！？」

「僕はまだ中3でさ。君は年下の男子と喧嘩するのも怖いのかい？女の子のリディア相手にはいつも偉そうなくせに」

「ああっ！？」

勇太君は赤くなると、スプレーで夕月の頭を殴った。ゴンッという鈍い音がして、夕月が砂に倒れる。

はあはあと荒い息を吐いて、勇太君が震える。この年になってまともな喧嘩なんて初めてだったんだろう。膝がガクガク震えている。

「リディア、もういい。行くぞ！」

私の手を取る勇太君。しかし夕月は笑いながら起き上がる。

「違うだろ、勇太。僕をここで生かしておいたら意味ないでしょ。なんのために君らは結界に来たんだ？」

「え……」

「僕を殺さなければ、結界は壊される。揺らぎで多くの人が死ぬ。違うか？」

「それは……」

勇太君は下を向く。

夕月は私に近寄る。私は身構え、スプレーを放つ。が、夕月は魔法の盾を出すと、あっさり受け流す。

「リディア、抵抗しないで」

私に近付く夕月を見て、勇太君が怒って腕を掴む。

「おいっ、止めろよ！とにかくリディアには触るな！」

「そうよっ、またえっちなことする気でしょ！」

「やれやれ、嫌われたものだ。いやらしいことなんてしないよ、リディア。ただちょっとポケットのこれを貸してもらおうと思ってね」

と言って私のスカートのポケットに手を入れると、ナイフを取り出した。

「な……んで、それがあって分かったのよ……」

「白銀の刃が僕を呼ぶんだ。さあ、勇太」

ぼんとナイフを渡す。

「これで僕を刺せよ」

「……え？」

「僕が死ななきゃ、結界は破壊される。多くの人が死ぬ。それでいいのかな？」

「え……」

勇太君はただ戸惑うばかり。

「な、なににいつてんだ、ばかばかしい。そんなことしたら警察に捕まるじゃんか！」

怒った声でナイフを投げ捨てる。

「はあ、君には呆れたね」

ハイズをする夕月。

んん？今のはハイズに見えたけど……。いや、アメリカ人とかでもああいう感じのことをするしな。

「勇太、君は女の子は奪われたくないが、喧嘩は嫌。結界は守りたいけど、殺人は嫌。そういうことかい」

「あ、当たり前だろ。俺は琥珀を止めるために京都にいくんだ。人殺しなんてする気ない！」

「そうか、じゃあ矛盾を解消する気はないんだな。自分の保身が叶わないなら、君は何でも言い訳をつけて逃げるわけだ。悲しいくらい、君はレールの上の人生が好きらしい。ママの影響か？」

それを聞いた勇太君は赤い顔になって砂を蹴飛ばした。

「母さんはそんな人じゃない！クソオヤジのせいで金がない中、俺を私立にまでやってくれたんだ！どこがレールの上だよ、ふざけんな！」

夕月は少し好意的な笑顔を浮かべた。

「そうか。訂正するよ、勇太。君の母親は静を捨てて強く生きたようだ」

「……」

「だが、息子のお前は？」

夕月の顔色が変わる。

「お前、僕の妹に恋をしたらろう？」

「妹？」

「リディア、この華奢な少女だ」

「べ……別に。確かにこいつは友達だけど……」

「そうか、じゃあ僕が奪っていくのに文句はないね」

「あるよっ！友達が襲われるなら守るに決まってるだろ！」

「そうか、じゃあその曖昧な理由でもいい。君は口だけじゃないよな？僕はこれからリディアを襲う。さあ、守ってみせろよ」

夕月は私の腕を取ると、強い力で私を抱きしめた。

「リディア、少し恥ずかしいかもしれないが、目をつぶっているんだよ。100 数える間に、君は僕のものになる」

私の服のボタンに手をかける。

うっ、嘘でしょ！何この展開！？

「ちょ！止めてよ、このセクハラ紳士！」

ドンと突き飛ばす。いくら大人しい私でも、黙って処女を奪われるほど自虐的ではない。

しかし夕月は強い力で私を抱きかかえる。とても私の力では払えない。

夕月は私の耳に唇を這わせると、耳朶を舌先で舐める。全身が総毛立つ。

「ちょ！いやーっ！勇太君、助けてえ！」

私は夕月の右腕にガブッと噛みつく。

「リディア……綺麗な歯をしているね。歯茎も桃色で健康的だ。すべてが美しいよ、君は」

「きっ……気持ち悪い……！アンタ、最高にキモイ！最悪！キモイキモイ！死ね！」  
私は今まで人に言ったことのない言葉を吐いた。

「おい、リディアから離れろ！」

勇太君は本気で怒ると、スプレー缶で夕月を殴りつけた。

が、夕月は片手でそれを受け止める。

「勇太、武器がないと、素手の相手と喧嘩ひとつできないのか？」

「お前、雷とか出すだろ。だから躊躇してるだけだ。お前こそ卑怯だろ。魔法みたいなもの使えるくせに喧嘩喧嘩だって偉そうに。てめえこそ素手でやれんのかよ！」

すると夕月は、ふっと笑って私を離す。

「じゃあ、僕は魔法を使わずに戦おう。これで対等だろ？」

「し、信じられるかよ」

「ここまできて、まだ喧嘩したくない言い訳かい？」

「ち、ちげえよ！」

勇太君は意を決して夕月に突っ込んでいった。喧嘩なんてしたことがないのだろう。小学生の喧嘩のようだった。

タックルをして、グーで相手を適当に殴る。さすがに抓ったり引っ掻いたりはしないが。

夕月は何発か大人しく食らっていたが、勇太君の腕を取ると、「つまらないな」と言った。

勇太君の腕を伸ばし、側面から腿を蹴り降ろす。その動きは明らかに格闘技をやっている者の動きだった。

右足を蹴られた勇太君は、顔をくしゃくしゃにして地面に崩れた。あまりの痛みで勇太君はそのまま気絶した。

「ひどい……」 呟く私「どこが公平よ。アンタ、明らかに格闘技やってるでしょ！勇太君はそんな野蛮なことをしないんだよ！これのどこが喧嘩よ！」

「ふふ、そうだね。あまりに彼が情けないんで、つい発破をかけたくなっただ」

「葉っぱ？アンタの言ってること、いちいちイミフなのよ。砂漠で葉っぱかけるとかさ！ふざけないでよ、いつもいつも人のことバカにして！」

夕月は面食らったような顔でハイズした。

「わが妹は少し言葉の勉強をしたほうがいいようだ」

「はあ？あんたが言語学的なだけでしょ！いちいち難しい言葉使ってさ！」

「恥の上塗りは避けるべきだ、幼き妹よ。君は術学的と言語学的の区別もつかないようだね」

「う……し、知ってるわよ」

「じゃあ、どんな漢字だい？」

屈託のない笑顔で尋ねる夕月。

なんて綺麗な顔をしているのだろう、こいつは。性格はサイアクなくせに。

「げ……げんは……ど忘れしたけど……こないだまでは覚えてたもん！」

「はは、ど忘れね。弓偏に玄武の玄だろ？」

「そ、そうよ、それぞれ！思い出したわ！」

「ぶっ、嘘です」

「……(ﾟДﾟ)。いつ……いいじゃない！そんなこと関係ないでしょ！」

「うんうん、そうだね。恥じる君もまた可愛らしいよ。勉強は僕が教えよう」

夕月はゆっくり私に歩み寄る。

「さあ、僕と交わろう」

「ちょ！意味分かってて言ってるの！？アンタ、私のこと妹って言ったじゃない！どうい  
うことよ！」

「僕は琥珀と夢幻の息子だ。つまり静と紫苑の息子さ。紛れもなく君の兄だろう？

もともと、僕が生まれたのは君が生まれた年の同じ夏の日。つまり、僕らは双子という  
わけさ。だから正確には妹ではないのかもしれないが」

「なん……ですって？だ、だとしても、なんで私を狙うのよ！お兄ちゃんなんでしょう！？」

「君があまりに魅力的だから」

夕月が微笑みながら近付いてくる。

「こないでっ！」

「ふふ、確かにそれだけが理由じゃないけどね。でもそれは君の知ることじゃないよ、リ  
ディア」

ⓄCeeZeAr (c Me 7eMte-l la -ll-Z 7oA <oA VceArⓄ

金切り声とともに私は魔法の杖を向けた。

杖の先から緑の突風が飛び出す。

「なっ！？」

まったく予想だにしていなかった夕月は風刃を食らうと海まで吹き飛んでいった。

ザッパーンと派手な音がして、夕月が海に消える。

私は躊躇なしに杖を持って海へ入った。はっきりいって、殺す気だった。

ここで夕月を殺さないと、終わらない。また揺らぎが出てしまう。

だが、いくら探しても夕月はいなかった。どうやら魔法か何かで逃げたらしい。

私は諦めて勇太君を起こす。

勇太君は一瞬惚けたが、脚に激痛を感じて蹲った。

「大丈夫！？今治してあげるから！」

「な、治すだって……？」

Ⓞ9MocJ, (c Me 7e- Z-> e la -l>-A-rⓄ



白緑色の光が勇太君の脚を包み、ひびの入った大腿骨を治した。

「うそっ……いい、痛くない！お、お前何やったの！？」

「えへ、実は私、魔法使いだったんです」

この際仕方ない。そういうキャラで通そう。

「はああ！？魔法」

「揺らぎがあるんだもん、ありえる話でしょ」

「そ……そうか、よく考えたら、お前、キャラだもんな。え、じゃああいつも倒したのか？」

「寸前まで魔導師だってことを隠しつつ、この杖でね」

「へえ……。魔法、見たかったな」

「なあリディア、この結界、あいつはもう来ないかな」

「来るかもしれない」

「かといってこの結界を封印することもできないんだよな、あいつに取られないように」

「それは無理だと思う。もしできるならウォンバスもそうしていたはずだし」

「だよな……。ん、ちょっと待て？ニューワイズじゃない俺らが結界を壊すってのはどうだ？」

「え……」

「俺らが壊せば皇に取られたのと同じことになるだろ、琥珀やあいつにとって。」

俺らは結界を壊すことで、あいつらから結界を守るんだ」

「壊すことで守る……そうか、その発想はなかったわ」

「その場合、ニューワイズエンドのための霊力にはならないから、揺らぎも起きないはずだ。」

前までは実行不可能だったかもしれないが、今はもうお前の魔法があるからできるはずだ」

「なるほど。勇太君、それ良いよ！それ、やってみよう！」

私は魔力で結界を破壊した。結界は音を立てて壊れ、緑の靄は消え去った。

「どうなんだ……？」

「壊したよ……。これで結界は私たちのものになったみたい」

「あんなこと言った手前言いにくいんだけど、揺らぎは……大丈夫なのかな」

「揺らぎはすぐには起きないからね。先に宿を探そう。そこでテレビを見て起こってなければ大丈夫なはずよ」

その後、私たちは砂漠の近くのアパートに空き家を見つけた。

やはり思った通り、揺らぎは起きていなかった。

忍び込んだアパートで夜を過ごす。寝る前に、電気を消した私はぼつりと呟いた。

「勇太君、ありがとうね」

「何が？」

「私のこと、守ってくれた。魔法も格闘技も使うような化け物相手に。すごくカッコ良かった……」

勇太君は赤くなったが、守りきれなかったことにバツの悪さを感じたのか、ふてくされて下を向いた。

「別に……。俺、一発でやられたし。全然役に立ってない」

「そんなことないよ。あそこで立ち向かってくれたから魔法の杖を使うチャンスが持てたんだもん。私、嬉しかったよ……。それじゃあ不十分？」

「い、いや……。お前がよければそれでいい……。でも、今度は……」

「ん？」

「今度は……守るから」

勇太君は鼻をかいた。

「今度は……最後まで守るから……」

私の胸の奥で、恋に落ちる音がした。

・豊橋

2022年7月26日火曜日

静岡県浜松市

朝起きると、私たちは昨日の砂丘に行った。  
もしかして夕月の死体があるかもしれないと思ってだ。  
夜はよく見えなかったが、朝なら見つかるかもしれない。

「うわぁ、ここってこんなに広がったのねえ」

「本当に砂漠って感じだな」

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0185.JPG>

海まで歩いていく。

「……ないな」

しかし夕月の死体はなかった。やはり逃げたのだろう。  
惜しいという気持ちとともに、人を殺さずに済んだという安堵があった。

私たちは自転車に乗り、クロスバイクで1号を進む。

浜松バイパスは大型が多いが、走りやすかった。

左手は畑ばかりで、自転車が走りやすい歩道はない。

それでも平坦で広いため、トラックのことがなければ楽な道だった。

舞阪を越え、東海道を進む。南の浜名バイパスは避けた。恐らく車用の道なのではないか。

「浜名湖だ！」

勇太君が叫ぶ。とても気持ちが良さそうだ。

海としか思えないほどの広さ。私も思わずうきうきする。

「ねえ、あそこに大きな鳥居があるよ。なんだろう？」

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0201.JPG>

「凄く遠いけど、あの大きさは、相当でかいな。ほんと、なんなんだろう」

勇太君の口調は最初のころとだいぶ違う。前なら「知るかよ」とか「さぁ」だったのに。

そのまま弁天島を通過。温泉街に入っていく。

浜名湖を通過すると、徐々に道は田舎っぽくなってきた。

中田島からは海沿いに行っていたので平坦だったのに、またここで上がってしまうのか。  
そう考えると鬱になる。だが逆に言えばそれだけ慣れてきたということだ。

「ねえ、いったん休まない？」

喉が渴いたのでコンビニに入った。

勇太君は「どれがいい？」といってスポドリを指さす。

「あの、ね。私、飲み物はいい」

「え、どうして？バテるぞ」

「勇太君、舌出して」

「え？舌？なんで……」

「じゃあ私の先見て」

べーっと出す。

「どう？」

「どうって……何が？」

「白くなってない？」

「ああ、ちょっとな。で？」

「舌が白いときは水の代謝が悪くなってるよ」

「ふうん。俺は単に疲れるとなるけど」

「疲れると代謝が悪くなるからよ。疲れなくても気虚状態だとそうなるわ」

「キキョ？」

「漢方よ。うち、家族がそういうの詳しくて。水を飲みすぎると代謝が追いつかなくなるから、舌が白くなるよ。冷えでもそう」

「たまに黄色くなるのは？」

「炎症のせいよ。熱ね」

「へえ、詳しいんだな。でも俺たちは汗かいてるし、飲まないとまずいぞ」

「そうだけど、ねえ、最近おなかの調子はどう？」

「どうって……別に。あ、でも最初よりは調子よくないな。ストレスのせいかと思ってたけど」

「多分、冷たい水分の取りすぎよ。特に男の子は脂肪が少ないから冷えやすいの。特に私たちみたいな痩せ形は顕著よ」

今回は痩せ形といっても怒られなかった。勇太君は真面目な顔で聞いている。

「じゃあ、どうしようか」

「暖かいお茶にしよう」

「お茶あ？……のぼせそうだな」

「買ってほっといて、ぬるくなったら飲むの。で、アイス買おう」

「アイス？余計腹を壊さないか？」

「ここんどこ走ってて気づいたんだけど、喉が渴いて水をたくさん飲んでも、体は癒えないのよ。」

思うに、水分って暖かいほうが浸透するでしょ？腸で水分を吸収するんだから、腸管に取り込まれやすくするには暖かいほうがいいの」

「はあ、それでぬるま湯か」

「ただ、それだと今度は体の火照りがとれない。そこでアイスよ。少量の水分で体を冷やすことができる。例えばこれ」

かき氷を指す。

「量は200g。つまりペットボトルの2/5。その量しかないわりに、アイスを食べた方が熱は取れる」

「しかし、腹を壊さないか？」

「頭寒足熱っていうじゃない？漕いでて思ったんだけど、私たちは頭がくらくたとするのを解消したいのよ。

だから、アイスをお口に入れたら、歯が痛かろうとお口の中で完全に溶かす。喉に冷たい水分を押し当てるように舌を使うの」

「ふむ」

「できるだけ口蓋と咽頭に冷気を押し当てるのよ」

「口蓋？」

「お口の天井のことよ」

「難しい言葉知ってるな」

「言語学で出てくるからね。お父さんが詳しいのよ。

で、アイスをお完全にお口の中で暖めるの。それから飲む」

「すると腹は冷えないわけか。そして頭部の火照りも取れ、内臓は冷えない。水分はぬるま湯で補給する……か」

「そう。勇太君、一昨日の夜あまり食べなかったじゃない？暑さによるバテなのよ、あれ。バテは胃腸に来るからね」

「はあ、お前、医者みたいだな」

感心したように勇太君はうなづいた。

「親がこういう話をよくするのよ。ただ、私も数日間やってみて初めてその意味が分かったんだけど」

「よし、じゃあそうしよう」

アイスをお食べると、暑気が取れた。

「どう？」

「お前の言ったとおりに。アイスをお解かして食ったら頭は冷えたし、腹も冷えない。これ、いいな」

「でしょ。お茶がぬるくなったら水分も取ろうね」

「ああ、こりゃいいや。舌も元に戻るかな」

「戻るよ。舌って結局胃腸と同じだもん。舌が白いときは胃腸も冷えて白みがかかるのよ」

「ふうん、舌が冷えてるわけじゃないんだな」

「そうそう。それに舌が汚れると……息がその……ほら」

「息？……ああ。でも別にお前は気にすることないと思うけどな。なんかいつも良い匂いがするし」

「え？なにそれ……」

「なんか桃みたいな匂いがする。しかし、お前って犬みたいだよな。いつも何かの匂いばっか気にしててさ。そんなに気になるのか？」

ぼつりと勇太君が言った。

私……そんなに態度に出ていたんだらうか。それ以前に、彼はそんなにも私のことを見ていたというのか。

次の目的地は豊橋なのだが、地図上では鷺津を通過して 301 を行ったほうがショートカットだ。

しかし私たちは騙されなかった。近いという理由で金谷を行って大変な目に遭ったからだ。

金谷の場合はまだいい。どうせ 1 号でも山だったから。

ところが今回は違う。1 号は海沿いだ。少し長い距離になっても、できるだけ海沿いで距離を稼いだ方がよい。

大げさでなく、平地と山道なら二倍の距離があっても平地を選ぶべきだ。

予想通り、1 号は平坦だった。

物凄く牧歌的な道で、人里など皆無のような道だった。

右手に物凄く険しい山がそびえ立っている。301 はあの向こうだ。

浜名バイパスが終わると、潮見バイパスになる。東海道は 42 号だ。

箱根のときの失敗を思い出し、杓子定規に 1 号へ行くのを避けた。

ところがまあ潮見坂に入った途端、物凄い山道になった。店も何もない峠だ。

自転車を降りて押す。もう山は慣れた。このくらいじゃへこたれない。幸運なことに山道は長くなかった。

173 号から 1 号に合流する手前で愛知県に入った。その後、なだらかな下り坂が 10km 以上続いた。

1 号を下っていると、私たちは異変に気づいた。

「ねえ、道路の立て看板が多くない？」

電柱に立てられた事故の目撃者を求める看板。何月何日に何と何が衝突したので目撃者を捜しています的な。あれが異様に多い。

それもそのはず。この道に来た瞬間、異様に車のマナーが悪くなったのだ。

例えば脇道から急に出てくる車。無理に左折しようとする。

自転車が行ってから左折しようという気がないのか、ロクに自転車の有無も確認せず、曲がろうとする。

また、右折もいきなり曲がってくる。こっちが直進青信号なのに、非優先な右折が無理に入ってこようとする。

また、黄色になっても止まらない。むしろ速度をあげて突っ切っていく。

真横を走っている車でさえ、ロクに確認しないで左折をしようとしてくる。巻き込まれそうで怖い。

しかも、ウィンカーが遅い。最悪出さない。出しても曲がる直前で出し、一瞬で消す。

……てゆうか、私交通に詳しくなったなあ。

「こりゃあ事故が起きるわけよ」

いったん止まる。

「ねえ勇太君、どう思う？」

「愛知、マナー悪すぎだな」

「愛知のせい？」

「多分。道は同じ1号だし」

「危ないなあ、愛知の人」

「ただ、愛知人の擁護をするとだな、この県に入った瞬間、赤信号が長くなった」

「え、そうかな」

「ああ、長い。圧倒的に長い。一回待つだけでかなり待たされる。そりゃ黄色を突っ切りたくもなる」

「なるほど」

「ただ、左折でウィンカーを出すのが短いし、明らかに優先道路を無視して突っ切ってくるやつが多いのも事実だ。これは単純にマナーの問題だ。事故の看板が裏付けだ。明らかにマナーは悪化してる」

「……だね。気を付けよう」

「豊橋でこれだから、名古屋に入ったら大変なことになりそうだな」

顎に手を置く勇太君。

「でもさ、名古屋のほうは揺らぎのせいで道路がほとんど閉鎖してるんじゃないかな」

「そうか……。そうだな。しかし、そうなると果たしてチャリでさえ通れるのか？」

「分からない……。砂丘からここまでの田舎道でさえ、かなり穴が開いて崩壊した道路とかあったし」

「トラックもまばらだったり、一箇所ですれどろしてたよな。名古屋は通過できないかもしれん」

「じゃあ……。歩き？」

「最悪そうなるな」

私はため息をついて自転車に乗った。まさか大都市を歩くことになるうとは。

マナーの悪い車に気を付けながら、自転車を漕ぐ。

坂なので、走行自体は楽だ。が、この西の人間のマナーが悪く、神経をすり減らす旅路だった。

勇太君がケータイで検索する。

「あのさ、やっぱ名古屋のほうは事故が多いらしいよ」

「なんでだろう」

「県民性っていうか、トヨタがあるせいで車の台数が多いらしい。東京なら車に乗らないような不器用なおばさんも乗るから事故が増えるって掲示板に書いてある」

「ふうん……」

豊橋に着く。

「うわぁ、大きい！」

大宮、いや、池袋くらいはある。

1号は山道なのに、ここに来て急に大きくなった。これは大きい街だ。

「さて、昼飯にするか」

自転車を止め、レストランに入る。食事と睡眠が唯一の楽しみだ。

「勇太君、ドリンクバーばっか飲んじゃ駄目よ。スープにしましょう。暖かいスープ」

「か、母さんみたいだな……」

「ふふ。そういえば、蛍さんは大丈夫かな。おじいちゃんたちに連絡は？」

「連絡は入ってる。事情は言っていない。帰ったら説明するってことと、安全だってことは言っといた」

「後者は嘘ね」

「しょうがないよ。ウチは特にばあちゃんが心配性だから」

「勇太君はおばあちゃん子だった人？」

「あー、そうだな。母さんは仕事で忙しかったから、小さいころは大体ばあちゃんといいたな」

それで兄弟も友達もいなければ、育った環境はほとんど私と同じようなものか。

大人にずっと守ってもらってるから、対等な人間関係を作れなくなるんだよな……。だから私たちは付き合いにくい冗談の通じにくい暗い人間だと思われるのだ。

勇太君が大人相手に急に大人しく礼儀正しくなるのは、育った環境にもよるものだろう。

ウェイターが横に来る。頼んだのはハンバーグだ。



しかし、なかなかテーブルに置かない。その上無言だ。

感じ悪い店だなあと見上げると、それはウェイターではなかった。

「きゃあっ！」

私は思わず長椅子の奥までズザッと後ずさりした。

「ゆっ、夕月！」

夕月だった。夏だというのに灰色のブレザーを着ている。どこの学校なのだろうか。

「やあ、おふたりさん。今日もまたよく走っているね」

「お前……」 勇太君がフォークを向ける「何しに来たんだよ」

「お昼を食べに。君らが入ったのが見えたから、同席しようと思って」

「はあっ!？」

嫌悪感丸出しの勇太君。

「混んでるんだ。行列も凄いし」

「しるかよ。でてけ」

冷たい言い方の勇太君。ああ、これは蛍さんの血だな。静ならこういうとき、相手を試すような意地悪な質問をするから。

ウェイトレスが来る。

「お客様、ただいま大変混み合っておりますので、できるだけ相席をお願いしているんですが」

そういえば入るときに言われた。混んでるときは相席となる場合がありますと。そして私たちは承諾して入った。いまさら断れない。

「あ、はい……」

私は小さく頷いた。勇太君も流石にしょうがないという顔で、不機嫌に下を向いた。そして一言も発さずにコーラを飲んだ。

私の中の静の血が、意地悪な質問を思いつく。こうなったらせいぜいこっちのペースに引きずり込んでやる。

「夕月はお店を壊しにきたの？ここで魔法を食らいたいのかしら」

「いやいや。今日は本当に食事に来ただけだ。不倶戴天の我々だが、たまには会食を愉しむのも乙なものじゃないか」

私は「ふうん」と鼻を鳴らした。

「そうね。じゃあ今日は仲良くお話でもしましょうか」

勇太君が明らかに不機嫌な顔で黙る。

「やけに素直だね、リディア」

「敵でなければ話は別よ。食事中に綺麗な顔を眺めれば、食欲が湧くもの」

ふくれ面で勇太君はコーラを飲む。無言だ。これは相当怒ってるなあ。

「ふふ、可愛い奴だ」

「ねえ、今日も結界を壊しに？」

「ああ」

「どこ？それを言うために来たんでしょう？」

「うん？」

「私たちが偶然見つけたなんて大嘘。誰が信じるとする？目的を聞こうじゃないの。あ、これメニューね。夕月は何が好き？聞かせて」

夕月は綺麗な細い指でメニューをつまむ。

「そうだね、トマトソースのパスタとシーザーサラダを」

「ドリンクは？あなたもコーヒーは飲まないんでしょう？」

「よく分かるね。流石我が妹だ。では紅茶を」

「ミルクね？」

「すばらしい」

食事が運ばれてくる。勇太君は不機嫌な顔で食べる。

ああもう、空気悪いなあ。もう少し大人になってよ。

「たまには戦闘抜きで話すのもいいものね、夕月」

勇太君がざっと立ち上がる。

「俺……トイレ」

「あ……うん」

くすくす笑いながら、夕月が勇太君を目で追う。

「勇太はあれからどうした？立ち上がれたかな」

「魔法で治したわ。ひどいよ、骨にひび入れるほど蹴るなんて」

「すまんすまん、大人げなかったね。僕は子供のころから訓練を受けている。勝てる喧嘩をしかけたのは誠実ではなかった」

「あなた、わざと勇太君に私を守らせたでしょ？」

「そう見えたかい？」

「ええ。私と結ばれたいと言うわりに——」

ナプキンを取って夕月の口元についたソースを拭いてあげる。

「——カレに見せ場を作ってあたのはどうして？」

「ふふ。そのほうが物語が面白くなると思ったからだよ」

「ふう……ん」

「うそ。本当は勇太に強くなってもらう必要があったから」

「やっぱりね。あなたは合理的なもの。無駄なことはしない人よ」

「京都で静……琥珀が勇太を見たとき、落胆されると困る。勇太は大事な客人だ。……君もね、リディア」

「ねえ、私と結ばれたって……どういう意味？」

「そのままの意味だよ」

「でも、私は妹なんでしょう？問題があるじゃない」

そそっと夕月に近寄った。私の息が彼の前髪をくすぐるように喋る。

「まあ、私は夕月みたいの、好みなんだけど」

「それは初耳で。てっきりキモがられてるものかと」

「やだ。あれはいきなりだったから……。夕月を好みと思わない女の子がいると思う？」

「はは。僕は君さえいれば、ほかの子なんてどうでもいいよ」

その瞳に嘘はなかった。私は不覚にもどきとした。

「ところで、リディア。名古屋ルートは避けるんだ」

真面目な顔になって夕月が忠告する。

「どういうこと？」

「豊橋まで来てしまってなんだが、渥美半島を回れ。そこに結界がある」

「結界……」

「その後は渥美半島の伊良湖岬からフェリーで三重に渡ればいい。着いた先は鳥羽だ」

「それ、悪くないね。ただ、豊橋から京都に行くのと、戻って渥美半島に行くのとどっちが近い？」

「フェリーの移動距離を抜くと、ちょうど同じくらいだよ。なにせ豊橋から田原まで戻る必要があるからね。つまり脚を使う量はどのルートでも同じだ」

「名古屋を行っても同じか。それなら結界に行く方が……。でも待って。どうして結界のありかを私に教えるの？」

「さあ？君に好かれたいからかも」

「ふふ……それは貴方の努力しだいね」

唇に人差し指の中腹を当て、くすくす笑う。

「勇太、遅いな」

「きっとやきもちを焼いてるのよ」

「姫を置いて敵から逃げていくとは。僕ならこの隙に奪ってしまうぞ」

「そうなの。彼はあなたと違って男らしさが足りないの。それと、スプーン一杯の知性も」

「そこに大匙の美貌も加えておいてくれ」

私はにこりとした。……死にたい。

「ところで、勇太は僕が弟だということを知らないようだね」

「ええ、だって私が彼の妹だということも知らないもの」

「なるほど、そういうことになっていたのか。では君の苦勞を察し、彼の前ではこの話題は振らないようにしよう」

「懐が大きいのね」

私は彼の腿に手を置いた。

そのとき勇太君が帰ってきたので、私は慌てて手を引いた。夕月がそれを見て優越感混じりに微笑む。

我ながら最高のタイミングだ。

「ごちそうさま。お先に失礼するよ。では、結界で」

夕月はテーブルに一万円を置いて去っていった。

勇太君はテーブルのお金を見ると、憎々しげに呟いた。

「あの野郎、カッコつけやがって！」

おーっ、明らかに嫉妬してるわね。純粹だなあ。

「勇太君」

「ん？」

彼はガブガブとハンバーグをかじっている。子供っぽいなあ。でも、純粹なその眼が好きよ。

私は右手を差し出す。

「手が汚れちゃったの。清めて」

「は？……あ、ほら、タオル使って良いよ、これ」

「ううん、違うの。ゆっくり重ねて、手のひらを」

「はあ？」

勇太君は首を傾げながらも、言われるままにした。

暖かい手。……よし、これで夕月をリセット。

・伊良湖岬

夕月の申し入れを告げると、勇太君は畏じゃないかと疑った。確かにあいつが私たちが結界に招く意味はない。

「あのさ、やっぱ名古屋に結界があるんじゃないか？俺たちを恐れて、嘔吐して渥美半島を回らせる気なんじゃないか」

「そうは……見えなかったんだけどなあ」

「なんで分かるの？」

「いや……昨日の戦いのときも思ったんだけど、夕月は本気を出して戦っていたようには思えないのよ。ねえ、あれが全力に見えた？」

「うーむ、確かに死にものぐるいという感じでは全然なかったな」

「結界を壊すのって長くて数日、短ければ数分でできるのよ。もし私たちが怖いなら単に私たちより速く名古屋に行けばいいだけだわ。迂回させる必要なんてない」

「確かに……でも、わざわざあいつが良い情報をくれるはずがない。何らかの罠だ」

「そうよね」

私は勇太君の扱い方を覚えてきた。Yes-And法。プライドの高い彼にはYes-But法よりも効果が高い。

「でき、もし罠だと分かてるなら、逆に見抜くチャンスがある分、あいつを出し抜く機会になるじゃない」

「それは……そうだが」

「それにもあいつが嘘をついて伊良湖岬に結界がなかったら、それはそれで戦闘を避けて京都まで行けるので、安全策ではあるわよ」

「ああ、そうか」

その言葉で勇太君の心は動いたようだった。

お昼を済ませると、渥美半島へ向かった。

393を經由して、23号にぶつかる。始めは凄惨な都会の道だったが、徐々に田舎っぽくなってきた。

23号にぶつかった大きな交差点は、もう明らかに田舎の道だった。それにしても大きな道路だ。広さがハンパない。

2号にぶつかり、そちらへ乗り換える。259に行く道もあるのだが、半島の重心部を貫いている道だけに、確実に山道であることが想像される。

一方、2号は半島の海岸沿いを行っている。行くなら間違いなくこちらだ。

道は物凄く平坦で、車も少なかった。豊橋の危ない道に比べれば、まるで天国だった。

しかし、2号を進んでいくうちに徐々に坂がでてきた。道も狭くなり、田舎道になってきた。

それでも比較的平坦な道だったし、何より邪魔をする車や信号がなかったので、私たちは予想していたよりも圧倒的な早さで馬草まで進むことができた。

だが馬草を越えて 259 にぶつかると急に山道が増えてきた。

道はより田舎になる。ただ、人外魔境というほどでもない。もはや見慣れたレベルだし、箱根などのリアル山道に比べれば人里な分マシなほうだ。

「この道は 259 でも随分整備されてて走りやすいね」

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0204.JPG>

「ああ、だが地図だとこの後山になる。キツイぞ」

その言葉通り、海岸を離れた 259 はキツかった。

畑のある平坦な道はいいとして、途中で急に山道になるところがある。勾配も酷いし、人の気配もない。絶対に一人では行きたくない。

石神の交差点で一休みし、アイスを食べる。

あまり食べるとさすがに体を冷やす。体力勝負だから、体調を崩すわけにはいかない。

半分こしようということになり、分けて食べた。

でも勇太君は私と間接キスをするのが恥ずかしいのか、「いい」と言って残りを食べなかった。

石神からはわりと楽だったが、人里を越えるとまた山に入った。この半島で最後の山だ。

途中、風車のあるところ越えて進む。

地図上でダムがあるところを越えると終点に近づく。

最後だというのに高低がまだある。最後のひとふんばりを終えたところで、伊良湖岬にたどり着いた。

「リディア、結界は？」

「あったよ！港のところに三角形の結界が立ってる！」

緊張が走る。結界があるということは、戦闘を意味するからだ。

私たちは自転車を止めると、結界へ向かった。

「やあ、待ってたよ、リディア」

そこには夕月がいた。結界を壊しているところだった。危なかった、どうにか間に合った。

しかし、ということは夕月は嘘をついていなかったことになる。どうしてだろう。

「本当に結界に招いてくれるとはね。何が狙いの？」

「いまい僕は信用がないようだ。逆に君たちはこの状況で何がしたい？」

「そりゃ……あなたを、止めないと」

「だよ。じゃあこうしよう」

夕月は手から青い弾を出す。弾は私の足下で弾ける。炸裂した光に眼をやられる。

「きゃあ！」

「おっと、びっくりさせてしまったね。だが次は当てるよ。構えた方がいいんじゃないか？」

「くっ……」

私は杖を構える。

夕月が再度青い弾を放つ。あれはアトラスでいうユノに等しいはずだ。

私は杖に魔力を籠めて弾く。弾は海に吹き飛んでいき、ザパーンと飛沫を上げる。

「ほう、よく弾いたものだ。では、次は本気で行こう。弾けはしまい」

「なら相殺するまでよ！ ( - l e ( a a A - J , ( c M e V - A l l - l - l - l - l ) 」

巨大な岩石が私の前に現れ、夕月をめがけて飛んでいく。

「——助かるよ、リディア」

「え！？」

夕月はひょいっと岩をよけると、岩に向けて巨大なユノを放った。

私の岩が結界の壁に当たる。そしてほぼ同時に夕月のユノが壁に当たる。

ごがぁんという音がして、結界が崩れていった。

「うそっ！」

思わず口を覆ってしまった。

夕月は「ふう」とため息をつき、にこりとする。

「おかげで結界を壊せたよ、リディア。礼を言う」

「な……な……」

声が出ない。

「ああ、言ってなかったね。この結界は大きすぎて僕の力じゃ壊せなかったんだ。だから君の力を借りたというわけ」

「な……」

やられた。まんまと騙された。

私はガクッと膝を突いた。

「じゃあ、僕はこれで」

ふわっと浮かび上がる夕月。

「ちょっと待てよ！」

しかし勇太君は飛びかかると、腕にしがみつく。

「離せよ、勇太」

「ふざけんな、お前。逃げんな！」

「ふ、君に何ができる？」

夕月は勇太君にユノを撃つ。頭に直撃を食らった勇太君は地面に落ちて倒れる。

「では、リディア。また」  
夕月は空に消えていった。

勇太君が地面で泣いていた。悔しかったらしい。顔を赤くして泣いていた。

「あの野郎……」

「勇太君……ごめんね、私のせいで」

「別に……お前のせいじゃない。俺も罠の内容に気づかなかった」

勇太君は起き上がる。手に何かを握っていた。

「なにそれ？」

「あん？……さあ、とっさにあいつのポケットから奪ったっぽい」

それは紙切れだった。メモだろうか。中を開く。

「平塚……箱根、三保、伊良湖岬。おい、これ、結界のありかのメモじゃないか？」

「えっ、どれどれ？」

見てみると、確かにそこには結界の場所と規模と形が記されていた。

「勇太君、凄いよ！これ、すごい情報だよ！」

「そ、そうだよな！？」

「じゃあ、次の結界はどこ？」

「ちょっと待て……ん、伊勢？伊勢だって。伊勢ってどこだ？」

急いで地図を開く。三重県伊勢市、ここから海を隔てたところだ。

三重……海……。確か夕月はフェリーに乗れて……。

フェリー乗り場に目をやる。行けそうだ。

私たちは切符を買いに行った。ちょうどよく船が出るところで、お金を払ってフェリーに乗った。

自転車はどうなるかって？大丈夫、フェリーはとても大きいから、自転車も積めるの。少し追加料金がかかるけど。



・伊勢

2022年7月26日火曜日

愛知県田原市

「おっきーっ♪」

伊良湖岬から鳥羽に渡るフェリーの上で、私ははしゃいでいた。

実はフェリーは初めてだ。ここまで大きいなんて。

背の低いホテルがまるまる動いているようなものね。

「もしかして最大の乗り物って船なんじゃない？」

「ああ、そうかもな。飛行機はここまででかくないし」

甲板に出る。風が気持ちいい。ベンチを見つけて座る。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0223.JPG>

「今回の旅で初めて楽ができたね」

「でもさ、結局名古屋をチャリでいくルートと距離的には変わらないんだろ？」

「うん、この海を船で行く距離を差し引いて、ちょうど同じくらいよ」

「じゃあ脚の疲れは変わらないってことか」

残念そうな勇太君。

「しかし、人が少ないな」

デッキを振り返って勇太君が呟く。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0226.JPG>

「揺らぎのせいで交通機関がだいぶやられてるからね」

「これはよく無事だったな」

「藤堂さんが言ったじゃない。海路はまだ動いてるかもって」

「ああ、そうだった。海は線路が壊れないからな」

1時間ほどすると、鳥羽についた。

「見事に何も無いね」

「えーと、次は42だな。二見浦までは海岸沿いで、そこから山っぼいな」

少し休んだので元気が出てきた。

42号は走りやすく、道もそこそこ広い。最初のころはこれでも怖かったが、もう慣れっこだ。

だが途中から急に山道になった。樹木は生い茂っているし、道の質も悪い。誰が止まるのだろうかというようなホテルがぼつんと立っている。

そこを抜けると人里になった。途中で 102 に乗り換え、伊勢市駅に近づく。あとは一般道をくねくね走り、駅にたどり着く。

伊勢というのは伊勢エビで有名なところだとばかり思っていた。

確かにそれはそうなんだが、本来は伊勢神宮で有名なところらしい。

結界は伊勢神宮にあった。

もう夕方になっていて、薄暗くなりかけてきている。今日は進みすぎた。

かといって放っておいて夕月に結界を取られたらたまらない。私たちは神宮に向かった。

外宮前から直進し、中に入る。

正面には橋があり、こちらがメインの通路のようだ。

一方、左の方にも小さな道がある。意外なことに結界は左の道にあった。

左の道を行くと、池があった。池と柵の間には赤い橋があった。だが、この橋が奇妙だ。なんと、陸地と繋がっていないのだ。

橋を渡った先は四角い演舞場のようにになっている。が、そこも陸地とは接していない。池にぽつんと浮かんだ演舞場と橋になっている。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0226.JPG>

それにしても奇妙だ。いったい誰が何のために。

「リディア、ここに結界があるのか？」

「うん。私には見える。緑の六角柱が」

「夕月が来る前に壊そうぜ」

私は杖を結界に向けると、魔力を浴びせる。

「勇太君は夕月が来ないか見張っていて」

「了解」

それから1時間くらい緊張が続いた。私は盗みを働く子供のようにドキドキしていた。

もし夕月が来て見つかったらどうしよう……。

いや、大丈夫なはず。夕月は私たちがここを知ってるってことを知らない。メモを奪われたことに気づいてなければ……。

結界が傷口のように腫れ上がり、光っては弱まりを繰り返す。まるで殺さないでと叫んでいるようで、気が引ける。

私が最後にうんと力を加えると、ぐらぐらしていた歯が抜け落ちるように、結界は崩れていった。

「やった！」

私は両手をあげて叫ぶ。勇太君は見えてないので、私の反応を見て安堵する。

「間に合ったな！」

「うん！これで夕月から一本取ったよ！」

「——まったくだ」

ふいに聞こえる声に、私は心臓が止まりそうになる。

ハッと振り向くと、そこには夕月がいた。灰色の制服を着て、冷たい顔をして立っている。

「夕月……」

私は杖を構えた。

「……君たち、どうしてここが分かった？」

「おしえねーよ！」

勇太君が冷たく言い放つと、夕月は勇太君をじっと見る。

「その言い方……君が下手人か。ふむ、ということは、いつの間にか僕からメモを奪ったというところか」

夕月はポケットに手を入れ、確信する。

「まいったな。さっぱり気付かなかった。勇太にそんなことができるとは思ってもみなかった。やれやれだ」

バカにされた勇太君は舌打ちをする。けど夕月が怖いのは変わらないようで、それ以上は何もしない。

「ふむ、状況は芳しくないな。予定変更だ。リディア、君は僕と一緒に来てもらう」

私はザザッと下がる。

「嫌よ！」

夕月はくすすと笑うと、一瞬にして私の背中に立つ。勝手に私の髪を撫でながら、からかうように問う。

「そんなに勇太と一緒にいたいのかい？」

私はキッと睨み付けると、「そうよ！」と言い放った。

ところがそれに驚いたのがほかならぬ勇太君だった。

「え……そ、そうなの？」

えらくアホっぽい言い方だ。もう少しムードを大切にしてほしい。

「ふふ、できの悪い子ほど可愛いということか」

苦笑する夕月。

「そんなんじゃないわ。勇太君はいつも私にえぼってるし意地っ張りだけど、でも、一生懸命だし、純粋で……そして……孤独……だもん」

最後のほうは声が小さくなっていた。

夕月はパンと手を叩くと、勇太君に振り向いた。

「さて、勇太。リディア嬢はこのように言っているが、君はどう思ってるのかね」

「はぁ？お前に関係ねーし」

相変わらず芝居がかった夕月と、相変わらず醒めた勇太君。水と油だ。

「関係ない、ね。交渉の拒絶か。人と巧く付き合えないから、他人を敵か味方かに簡単に分け、不適合者は追い払う。君のママにそっくりだな」

「なんだと？」

舌打ちする勇太君。

「そんな人間性では静の息子は務まらないな」

「知るかよ。別に俺はそんなやつ親だと思ってねーし」

「そうやって人を遠ざけてばかり。だから君の周りに人は集まらないんだ。君を本当に好いて近寄ってくる人間はどれだけいる？」

そして、これまでに君は自分の敵をどれだけ味方に鞍替えさせてきた？自分に刃を向ける敵と、笑いながら飯を食うようになったことが、あるか？」

「……何言ってるんだか意味わかんねえし」

「分かってるだろう。言葉の意味は理解できるはずだ。理解できないのは心のほうだ。逃げるな。母親譲りのやり方で」

「……」

「言い返せなければ黙るか？自分を理解してもらえなければふて腐れ顔か？」

「お前、何様だよ」

「僕は君のカイトクレマーだよ」

「……は？」

は？

同時に私もぼかんと口を開ける。

なんか、今すごくアルカっぽい単語が聞こえなかったか？

でなければ私の知らないドイツ語の単語とか？

夕月は私の腰を抱く。ムカつくことに、花のような綺麗な香りが漂う。

「さて、お姫様。行きましょうか」

「待て！」

勇太君が拳を握って夕月に突進する。

しかし夕月は右手を前に出し、衝撃波を放つ。勇太君は正面から食らって砂利の地面に吹き飛んでいった。

「勇太君ッ！」

私は手を伸ばすが、夕月が強い力で抱き留める。

そして私の体は宙に舞っていった。

と同時に、私は意識が薄れていくのを感じた。

・ 死の宣告

>el γΔφ -μΛ-

アシェルフィで魔法の手紙を手に入れた俺たちは、さっそく春夫に手紙を出した。  
異世界の弟に手紙を出すというのはヘンな気分だった。  
その後、できることはしたということで、いったんアルナへ戻ることにした。  
レインの家に戻ると、アルシェが気を遣ってやってきてくれた。

ただ、アルシェも単に励ましに来たのではなかった。

ⓄJ--, ρa eρ ρeλ l'-ΛJ ρ-ε-ρⓄ

本を取り出すアルシェ。

ⓄcαΛ Ⓞρa eρ lec e Jeρ-δ Ⓞ

Ⓞ-Λ -J>-ρ - >elρc- ρaλ μcλc- Jαμ ρα,, V-μ -μρeJ -λΛ, l- -J cλΛ-ρ -l -ΛⓄ

ⓄJee l- Jαμ ρα eρδ Ⓞ

お茶を出しながらレインが期待に満ちた眼で問う。

Ⓞl- eλ ρaρ λc, ρ-l μcλc- ρaμ >ec e λe -lVelJ ρeμⓄ

Ⓞ-lVelJ ρⓄ

レインが飛び上がる。そりゃ、確かに予想外だわな。

Ⓞρ-, -lVelJ le ρel cl>cμαⓄ

ⓄcαΛ Ⓞ>cΛ-leρ....Ⓞ

Ⓞρ-, Jαl ρa eρ,, ρ-Λ -Λ Jeμ-ρ l- eρ μeJ ρ'-lVelJ λ-VⓄ

皆の目がレインに集まる。元アルナ大首席のレイン＝ユティアに。

レインは少し間を置いてから、急に眉をひそめた。

……なるほど。その反応だけで歴史がどうなったのかは伝わった。

Ⓞ-lVelJ ρ-ρ λeρc-Λ ρcJJe,, l- ρcl-ρ ρ μeJⓄ

するとアルシェが眉を上げ、本の1ページを開く。

そこには確かにレインが述べたとおり、4人の部下の名が記されていた。

-μe Ⓞρ-, ρa eρ ρc- αλ l- ρcl-ρ ρ μeJ,, ρa lec ρ-Λ ρa Jα-, ρ-l >elρc- ρaρ -lVelJ ρcl  
ρ μeJ ρ-V μcλc-Ⓞ

Ⓞρ -Jδ Ⓞ

レインは訝ってページを見る。どう見ても部下は4人だ。

Ⓞλee, -μe,, h-c, ρa eρ αλ - μcλc- Jecδ l- e>-ρ μeJ ρ'-lVelJ λ-V ρ- ρa <c- ρeμ,,  
-lKc, ρa eρJ ρcα <c- VecΛ <c-J-ρ ραδ Jαλ ρa lec ρρc a -l -ΛJⓄ

⑥(ee, ucZ)-,, (el >el(c-, μclc- 7eC >el ꞑ/0 l-l- 7e- 0cΛZ e <c-,,  
-l(c, l- 7eC 7eJ l-l- 7eC ue 0cΛZ-Λε

⑥7eC...0cΛZ-Λδ ε

アルシェは神妙に頷く。

⑥4-l la 0cΛZ-Λ eC r- >cμo) 4a(c- 7o)δ ε

しかしアルシェは首を振る。

⑥ucZ)-, l- le 0cΛZ-Λ,, <c- -Λ(eJ (l (cl >cμo) 4a(c- 7o)δ ε

⑥4-, -u)-,, 7oΛ....ε

⑥la 0cΛZ-Λ u- >el ꞑ/0 hoC,, la >c <c- -Λ(eJ (cJeeε

⑥h3>....ε

「つまり……こういうことじゃないかしら、先生。リディアが飛んだ世界にしか存在しない人間が、世界の歪みだと……」

「ああ、恐らくそうだろうな。で、そいつを排除するのがリディアの役目なわけだな。ん？しかし、6人の部下のうち、1人がリディアだろ。じゃあ……」

「そう、多分その最後の一人が歪み……よ」

「だが、それは問題じゃないか？リディアは今レジスタンスにいるんだろ？そのレジスタンスの仲間を……ってことか？」

紫苑は頷くと本に目をやる。

「なあ、リディアはそのことを知ってるのか？」

「さあ……分かりませんが……でも、知っていても地獄、知らなくても地獄……でしょうね」

紫苑は憎々しげに呟いた。そして本に載っている名前に白い指を這わせる。

それはまるで裏切り者を晒し上げる罰ゲームのようだった。あるいは死刑のリストを作る作業のようだった。

だが紫苑は涼しい顔で、死を免れる者のリストを読み上げた。

⑥7-l, >elcaJ, -le, 4-l VecμeΛ....ε

・魔法のお披露目

>el 7/0 Z-Λ >cμ

目を開けたら勇太君がいた。

Ⓜcxc-δ (c c) ΛeC 7o7δ Ⓜ

だがそれはアルシェだった。

あれ……アルシェ？いま一瞬、勇太君かと思った……。

ん？アルシェ？

じゃあ、私はまたアルバザードに来たの！？

ガバッと起き上がる。

そこはアシェルフイのアジトだった。みんなもいる。

Ⓜz>...ΛoΛⓂ

Ⓜ(c -(cJ Λc)J -I -7o <μe> ->o,, 4-Λ -ΛJ -I7-C (c, 9coC (c -(cⓂ

Ⓜ--...JεΛC-ΛCⓂ

Ⓜ(c eΛ Λ- 4-cδ Ⓜ

Ⓜ4-, 9-JJⓂ

朝だった。どうやら私は転んだトラックから回収され、今まで気絶していたらしい。

私は元気だから大丈夫といって、朝ご飯の支度をした。これも私の仕事だ。ここにいるなら、仕事をしなくちゃいけない。

朝ご飯を食べると、作戦会議となった。

今回の作戦はアデュ収容所の破壊だ。

イルミロク党は反対勢力を次々逮捕し、ケートイアのアデュ収容所に入れている。

元々アデュはアルティス教徒が収容され、虐殺を受けていたところだ。ミロクさんは皮肉にもそこを反対勢力の収容所とした。

「血の呪い」の応酬。それ以外の言葉が見当たらない。アデュはアウシュビッツも真っ青なくらい徹底した地獄。

ミロクさんに比べればヒトラーも天使に見える。それくらい彼は悪魔だ。チームスでさえ、ミロクさんほどの命を終わらせたことがないだろう。

死神のシューゼだってアルハイクだって、そんなに多くの魂を導いたことはないだろう。

ミロクさんは人間じゃない。彼は、歴史を歪めてでも殺すべき悪魔だ。

ミロク革命を食い止めるには、まず収容所に捕らわれているミナレットの要人を救出す必要がある。先日の魔列車襲撃はその足がかりだ。



今回も、また魔列車の襲撃を行う。しかし今回は列車の要人が目的ではない。列車を乗っ取り、さらに収容所を制圧するのだ。

イルミロクによる復讐の血風を風ぐために、アデュ収容所の制圧は必至なのだ。

作戦会議が終わると、私はトイレに行く。男女共同のトイレだ。家のトイレと同じようなものだからね。

男女でトイレを分ける余裕さえ、私たちにはない。ミナレットは、かなり負け戦を強いられている。

まあ実際、歴史上負けるわけだし、それは当然のことだろう。だが私はその歴史を変えようとしているのだ。

鏡を見る。なんだか私の顔は変わった気がする。ぼーっとしていた幼い顔だったのに、少し紫苑に似てきた気がする。

前は血も繋がってないレインに似ていたけど、今はとても紫苑に似ている。線の細い切れ長な美人になったということだ。

トイレから戻ると、メリウスさんがアルヴェスクさんといちゃいちゃしていた。

ふたりはいつもこうだ。私は処女のくせにペッティングとはどういうものなのかを学習してしまった。

わざとらしく咳き込むと、アルヴェスクさんがへらへら笑いを私に見せる。

⓪ec, lc-, (a eŋ ūelk,, (c Me ūeΛ Velŋ cŋ) JeleM⓪

⓪ee, ūYaJJa,, ΛoΛ eŋ lc< - ūeΛ Velŋ -J (cJJe⓪

⓪----hhh-h-h, (c ŋaŋ -ū eΛ lc< (ŋ-ŋ lcS ŋoŋδ⓪

⓪ᄁᄁŋ ΛoΛ (e lcS e,, 4-, ᄁ-JJa, ūo> ΛoΛ ūeΛ <-Λ Velŋ⓪

テーブルの上茶色い液体を掴むと、ぐいっと飲む。

アルシェが眼をひんむく。

⓪Oe, Mclc-r (a eŋ ūcJŋr⓪

「もはあっ.:.(°ε°)ブッ!!」

思わず吐いてしまった。な……なにこの、理科のアルコールランプに黒砂糖を入れますたみたいな味は!?

笑うアルヴェスクさん。カルドさんも真っ赤な顔で笑いを堪えている。

VecMeΛ ⓪h>...ŋYa -ŋ>-ŋ Jeŋe, lc-⓪

機械のように呟くヴェイレンさん。

>elcaJ ⓪ŋYa ūeΛ lc- (a Velŋ c> ŋcŋ, lccSδ⓪

といって出してくれたのはミルクのリキュール割り。これでも私には強い。

-ŋŋe ⓪Mclc-, (c eΛ ūeΛ ū-< (a ol (c Λ- ŋcΛ⓪

低い声でゆっくり語りかけてくれる。

アルベさんって見た目は怖いけど、中身はとても優しいのだ。だから私は最近よく懐いている。

たまにおんぶしてもらうんだ。背中が大きいから乗り心地がいいし、すっごく背が高くなった気になれる。

「-ll ⑥h-c, lYaJJoa -lVeJ, -ll eV Jcl Mclc-/ -Me -> Jecδ ⑥

⑥-Me, (c laA- o) -ll >-ll (c e>eJ VceA c> Ca⑥

アルシェは嬉しそうに頷いた。

⑥Mclc-, (c Me e> -l)-ll oA Vclol⑥

⑥ScYa, lo> loA eA V-J Jcl Jecδ ⑥

⑥y-, (c Jcl VcA⑥

⑥ec, loA A- A-A V-J Jec⑥

私は意を決して言った。

VecMeA: <alJel ⑥MeA JeM -ll-...⑥

ぐっと黙る私。だが、諦めない。

⑥cA, cl⑥

ゆっくり杖を出す。

⑥Ca eC -MZoA (cJJe⑥

みんなが眉を上げる。

⑥lo> loA V-J <-ll cl>cMoJ JoJJo Ca -MZoA Jel -M-A⑥

-lVeJ) ⑥0-...-h-h-h, Ca eC M-C, Ca eC M----(C, delo -c JeleM -J(C) Mclc- la- l-r⑥

「-ll ⑥JoA la -MeJ Jcl -MeJ -J <ccA- -ll -r⑥

⑥JoA loA -MeJ Vcl -Me, ec loA -M lcθcθ JoJJo Ca⑥

VecMeA ⑥-lJoA, (c-JA⑥

ひたすらそっけないヴェイレンさんのコメント。髪と同じく言葉もショートなのだろうか。

私はおほんどわざとらしく咳き込む。そして杖をくるっと向けて、囁くように ⑥<oA⑥ と言った。

すると杖の先から小さな突風が吹き出し、メリウスさんのスカートがばさあっと舞う。

⑥0-----oA⑥

と言うメリウスさんは、まるでマドンナのよう。

静より 10 歳上の世代が喜ぶ言い方でいうと、モーレッツって感じ。

私の魔法にみんなもタジタジだ。

アルヴェスタさんは驚くというよりはしゃいでいた。

「-ll ⑥lc-, (c ec l-A -M-A cA⑥

⑥Λ- Λcγ JeCe, γ-lλ J-l-λδ ⑥

⑥V-ΛC-ΛC >-Λ -Λ eΛ λ-μ-C Cc⑥

⑥θ-JJc e,, h-c, ΛcΛ V-J <leΛ γcγc Cαδ ⑥

-IVeJ) ⑥C l-l JeΛ -l>c γcΛ Cαδ ⑥

⑥γ-, ΛcΛ Jc JeΛ⑥

⑥JcΛ θ-JJc -⑥

くしゃつと頭を撫でてくれる。私はにっこり頷いた。

大丈夫、歴史は私が変えるよ。

だからみんなで生き残ろうね。

・魔列車

>el ʔ/0 <-V ʔc-  
ʔc<ʔeʔ, -ʔe-Z-ʔʔ

2カ月が経った。季節はすっかり秋になり、北部では肌寒く感じる日もあるほどだ。私はすっかりレジスタンスに慣れ、ここでの生活を楽しむようになっていた。相変わらず仕事は庶務だが、魔法の腕前を買われて戦闘訓練も増やしてもらった。

魔導師に銃の訓練をしてもしょうがないということで、ヴェイレンさんに魔導師用の訓練をつけてもらった。

ヴェイレンさんは図書館にいて、古典を引っ張ってきた。そこに載っていた魔導師の鍛錬法を実施したのだ。

ちなみにヴェイレンさんが借りたのはアルディアおよびそれに関する研究文献計20冊。

荷物持ちのカルドさんは死にそうになりながら運んでいた。両手に袋を下げ、頭にすら袋を乗せる姿はヤジロベーみたいで面白かった。

ᄀ-ʔʔe, ʔʔʔc ʔʔa (-ʔʔeᄀ という私に ᄀ0e...0ec, ʔc-, Vecʔeʔ, ʔccʔ ʔ-ʔ ʔcc Ve ---ʔᄀ と答える汗だくなカルドさん。私は鼻歌を歌いながら無視w

一方、アルシェは黙々と訓練をしていた。戦闘訓練も座学も。

アルヴェスクさんはその才能に目を付けたのか、アルシェから庶務の仕事を減らした。みんなも肌で感じていたのか、アルシェの庶務の仕事を手伝うようになった。

おかげで仕事が一番増えたのは私なんだけどね。ふんぶんだよ。

灰の街ドフレット。アルバザード最北部の街。

厳密にはアルシアのほうが北だが、アルシアはもっと西部にある。東部ではドフレットが最北だ。

ドフレットはケートイアに面している。山の間を越えるとそこはアデュだ。

ケートイアはドフレットを通っていかないと入れない。あいにくケートイアとアルバザードの国境線は山脈になっているからだ。

アルバザードにとってケートイアがそんなに身近に感じられないのは、この山脈で地理的に隔てられているからかもしれない。

ドフレットは魔列車の通過点でもある。

アデュからは外国になるため、電車は一度ここで止まり、ケートイア側の検査を受ける必要がある。

今回は魔列車が確実に止まるドフレットを襲撃場所を選んだ。

街に入ると閑散としていた。冬はとても寒い街で、豪雪地帯らしい。逆にケートイアに入ってしまうと、けっこう暖かくなるんだけどね。家の屋根は変わった形をしていた。食事は辛いものが多い。あとはお酒。体を温めるためだそう。

「からーい！」

インサールから伝わってきた唐辛子をまぶした牛肉を食べる。屋台で1皿80ソルト。ものすごく辛い。味なんて分かんなくなりそう。

「はふ、はふ」

口を開けて息を吸ったり吐いたり。お行儀わるいなあ、私。

Ⓞ-ムe, (a e( -く μ-γ λ-λλ-δ Ⓞ

Ⓞ>>δ - 4-, (l -λ γ-l eK <c oλ (a,, (a e( oJ), (cl γ-c(,, Joλ λ-l( -λ, (a e( (->Ⓞ

Ⓞ>>...Jo- λ4-Ⓞ

いたたまれなくなつてヴェイレンさんを見る。

しかしヴェイレンさんは手で口を押さえたまま、真っ赤な顔でプルプルしていた。

おっやあ〜？もしかして辛いのが苦手とか？

私の口が急に猫になる。ぼふりでいあです。にゃ〜。

Ⓞl-l l-l-, l-λλl-l-l-, VecMeλ la-, λoλ λ-μ eK (a Je γcλ-, (e( (Ya Jcλ -く >c--λδ ( `∇` )Ⓞ

VecMeλ ⓄJe lec>...Ⓞ

おー、やせ我慢。よく見ると目に涙が。

いやあ、ヴェイレンさんにこんな可愛い弱点があるとは。かんらかんらですな。

こんどイビられたら、スープに唐辛子混ぜてやる♪

食事を終えた私たちは、待機所として使うプレハブに向かった。

このプレハブは外見がむちゃくちゃオンボロで、何十年も前に廃棄されたもののように見える。

谷間に立っていて、昔は鉄道を造った人たちが寝泊まりしていたそう。

そこを内装だけ新しくして住めるようにした。だから中は意外と綺麗だ。

γ-lλ ⓄSeλ( (aμ μ-c cλⓄ

サッシ越しに線路を確認する。

アルベさんは窓からライフルを構えている。

アルヴェスクさんは双眼鏡で遠くを見ている。

予定ではそろそろ魔列車がここを通過することになっている。  
私は計画を頭の中で繰り返した。

やがて山の向こうからガタゴトと音が聞こえてきた。

「来た……」

-lVeJ) 6)eeee(??(-lCe6

魔列車が登音を立てながらやってくる。

私は手を額に当てて遠くを見る。

魔列車は減速し、駅で止まる。ここから先はケートイアだ。魔列車は検査を受ける。

運転手が列車を降りたとき、そこに現れたのは駅員ではなく、銃を構えたヴェイレンさんだった。

後ろではメリウスさんが切断された駅員の生首を持ってくすくす笑っている。

私はぞっとしたが、戦闘とはこういうものだと言いに聞かせた。

運転手はヴェイレンさんに銃を突きつけられ、両手をあげて歩きだす。

「見せて、双眼鏡」

アルヴェスクさんから奪うように取ると、背中越しに銃口を構えられ、運転手は青い顔をしていた。

しかし様子に気付いた車掌が、警備の兵を連れて最後尾の車両から出てきた。

手には銃を構え、ヴェイレンさんを狙っている。躊躇なく撃つ気のようなのだ。

だがそれは予想済み。アルベさんはライフルを向けると、窓から兵士の頭を撃ち抜いた。

双眼鏡の向こうで、頭の吹き飛んだ兵士が仰向けに倒れるのが見える。凄い威力だ。まさか頭の半分が吹っ飛んでしまうなんて。

私はあまりのグロさに双眼鏡を落とし、口を押さえた。とっさにアルシェが窓を開ける。

「うえええええ！」

窓の外にありったけ吐いてしまった。白っぽい吐瀉物がびちゃびちゃと落ちる。

アルベさんは次の兵士も撃つと、何かと恐怖ですくんでいる車掌も容赦なく撃ち抜いた。

ヴェイレンさんは片付いたことを確認すると、プレハブのほうを向いて頷いた。

-lVeJ) 6)cl9-JJ5r J5A -AJ 7e V-A -lYa J- l59 75A 7->6r6

急いでプレハブを引き上げ、トラックに乗り込む。

予め調べておいた近道を利用して、アデュまで一直線に進む。

ヴェイレンさんとメリウスさんは首尾良く魔列車を強奪した。

このままアデュに突っ込む。だが、車掌は既に本国に警報を伝達していたはずだ。  
だから全員で魔列車に乗り込むのは危険。魔列車には元々反イルミロク側の人間しかいないので、イルミロクにとっては死んでいい人間しか乗っていない。  
となると魔列車は収容所に突っ込む前に攻撃される可能性が高い。私たちの役目は、先回りして終点にある駐屯地を攻撃することだ。

え、なら最初に車掌も殺せば良かったって？  
違う違う、わざと伝令させたのよ。駐屯地に兵を集めさせて、隠れ本隊である私たちが強襲できるようにね。

暗いトラックの荷室で、私はこの計画を立てた人物をじーっと見た。

Ⓞ>>δ (c c) Jol, Mclc-δ Ⓞ

Ⓞ(ee,, h-c, (Ya eΛ Λ- -Λc eδ Ⓞ

Ⓞ4-, θ-JJ,, -Λ eC ΛoC - (a (cJ >-Λ -Λ -C 71-ΛⓄ

Ⓞ(c eC VceΛ,, (ee, (c eJ VceΛ, -MueⓄ

アルシェは訓練を受けたときは何もできなかったし、頭も悪かった。  
だけどひたすらひたむきな努力を続けた結果、銃の腕前は上がり、この作戦も考案した。  
奴隷商のメジュにお前は何一つできないと罵られ、殴られ続けた少年は、ただ自分の努力だけで這い上がったのだ。

驚くべきはその成長率。確かに最初は何もできないお荷物だった。ケンカなんて私より弱かったはず。

なのに、アルシェは恐るべき成長率で頭角を現してきた。もちろん今はまだヒヨッ子だけど、これからこの人はどんどん強くなるに違いない。

アデュに入る。トラックを山岳部に止め、武器を持っていく。  
崖の上からアデュの駐屯地を見る。思った通り、兵士が集まっていた。  
あれは……大砲か？まずいな、魔列車ごと爆破する気らしい。  
また、線路に何か不審なものがある。爆薬か？大砲は爆薬がダメだった場合の保険らしい。

山道を見る。ここから駐屯地まではほんの 100m ほど。しかしそれは空を飛んだ場合の直線距離。重装備を持って山道を行けば 1 時間はかかる。

当然アデュ側は山道に兵を配備しているだろう。私たちの作戦はこの段階では策だ。  
だからこそ、キーパーソンになるのが私なのだ。

ⓄleeV, leΛ- 7oM UccC le -JM-Ⓞ

-lVeU) 64-, MeeeCC, -MC-A la-r6

杖を取り出すと、私は図書館で見つけた古代魔法を唱えた。

アセット第 11 使徒ミルフが使った laCe の魔法を使うと、皆の体が宙に浮いた。

あいにく私の魔力では飛ぶのまでは無理だ。だが、宙に浮く程度ならできる。

崖を安全に下りるといふこの状況に、ルテの魔法はうってつけだった。

ふわふわ浮かびながら、私たちはゆっくり気付かれぬように崖を下りていく。

むろん、こんなところから敵が来ると思っているはずもないアデュ軍はノーマーク。

崖を伝って駐屯地の裏手に回る。アルベさんだけは崖の上に配置した。

6(a c>...6

アルシェが時計を見つめて呟く。

そのとき、魔列車が轟音とともに近付いてきた。

67cl>r6

私が心の中で叫んだとき、ターンというライフルの音が響いた。アルベさんだ。

次の瞬間、線路に設置されていた爆薬が爆破。

線路の一部が吹き飛んだものの、その後魔列車は勢いを緩めず突っ込んだ。

アデュ軍は対応が遅れた。この爆破は予定通り魔列車が爆薬を踏んだことによるものだ  
とっていたからだ。

しかし魔列車は無傷。爆発に巻き込まれなかったため、そのまま突っ込んだ。

用意していた大砲など、所詮はお飾り。ひとたび混乱が生じてしまえば指揮に数秒の遅  
れが出る。そしてその数秒が命取りだ。

魔列車はアデュ軍に突っ込み、多くの兵士を飲み込んでいった。そしてそのまま止まる  
ことなく、駐屯地を破壊していった。

ヴェイレンさんは最後尾に既に移っており、衝突の寸前で線路傍にジャンプ。事なきを  
得た。

煙が立ちこめる中、ヴェイレンさんは魔列車の陰に隠れ、マシンガンを放つ。

アデュ軍も一斉射撃。魔列車にガスガスと穴が開いていく。

67eCC-r6

アルヴェスクさんが手榴弾を後ろから投げ、マシンガンを放つ。

さあ、私たちの出番だ。

背後から銃を乱射しまくる。兵士たちは後ろから撃たれて次々と倒れていく。

しよせん魔列車の阻止に集められた軍勢だから、数は 50 人にも満たない。



魔列車で轢き殺した分を減らすと、残りは 30 程度だろうか。私たちの銃弾でどんどん倒れていく兵士たち。

しかし兵士も的ではない。振り返ると、マシンガンで撃ってきた。むろん、こちらは多勢に無勢。

だが、レジスタンスには私がいる。魔法の杖で光の壁を作ると、何もない荒れ地に防壁ができる。

兵士はどよめいた。向こうの感覚では薄い黄色に光る壁が突如現れ、自分たちの弾が弾かれているようにしか見えない。

アルヴェスクさんたちは亀甲の壁の縁から身を乗り出し、機銃掃射する。バタバタ倒れる兵士たち。

⑥I->c r ⑥

アルシェが突然叫び、アルヴェスクさんを突き飛ばす。

彼が立っていたところを銃弾が走る。

増援だった。背後から兵士がやってきたのだ。

⑥-lŋyaŋ r ⑥

アルシェは側転しながら兵士を撃っていく。

ありえないことに、側転という狙いの定まらない状況の中、アルシェは正確に短銃で兵士の眉間を射抜いていった。

あまりの神業にアルヴェスクさんはヒューっと口笛を鳴らす。

ほう、この辺りの感覚はアルバザード人もアメリカ人も同じか。

あっという間に増援は全滅する。たった一人の少年アルシェによって。

一方、アルヴェスクさんたちは地道に目の前の兵士を倒していく。

向こう側からはヴェイレンさんもマシンガンを撃ってきているので、兵士は挟撃される形となった。

さながら地獄絵図だ。残った 4 人の兵士は投降の意思を表した。

⑥q-JJ, cJ -M, lc-⑥

私はほっとして魔法を解いた。4 人だけでも殺さずに済んだのでよしとしよう。

後ろ側の車両に囚人を集めていたメリウスさんは、ハッチを開く。わーっと囚人たちが出てくる。

うんうん、よかったね、みんな。

アデュ軍にとってはすっかり地獄と化した駐屯地で、私たちは 4 人を拘束した。

半分くらい破壊された駐屯地の家屋に彼らを運び、尋問をしようということになった。

私は手頃な縄を見つけると、捕虜の手を縛るのを手伝った。

⑥hec, <oΛ <oC -Λ Je <c-μ⑥

隣の兵士に話しかけられ、私は首を上げる。

とそのとき、ガンッと音がして、私が手をかけていた兵士の後頭部に大穴が開く。

「わきゃっ！」

兵士は私のほうにグラッと倒れ込んできた。慌ててよけると、地面にべしゃっと倒れる。

撃ったのはアルシェだった。眼を細め、冷たい顔で兵士を見ている。

「な……なんでよ」

アルシェはさっと兵士の右手を指さす。そこにはナイフがあった。手首に隠していたらしい。

私と隣の兵士が喋っている間に私を人質にとろうとしたのだ。

アルシェはざっと隣の兵士に近寄る。

⑥し-IC -Λ, (a le uoeμ,, (ccJ (r -ΛoC (a 7o)δ⑥

⑥(e, (eot⑥

叫んで頭を振る兵士。

アルヴェスクさんは苦笑してアルシェの肩を叩く。

⑥---μe, (c eC Λ-V- μ-7 -r μe uclhc la,, θ-J7oδ -ΛJ ucμ (eU c laaJ⑥

アルシェはすっと眼を閉じると、ガンッと銃を放った。

弾は怯えていた兵士の顔を吹き飛ばすと、兵士は悲鳴をあげるまもなく地面に倒れた。

アルヴェスクさんは顔を引きつらせて、⑥oα....⑥と困った顔で苦笑した。

7-1λ ⑥-μe, >oΛ (c (cl e7eC, (l -lVeJ) eC μJccI- -Λ(eJ,, JoΛ -ΛJ h--J し-< la⑥

⑥-Λ h--J-( la,, -ΛJ ucμ (eU c laaJ <cΛ -ΛJ (c<lc) 7o e laaJ⑥

アルシェは銃を降ろした。

私は膝がガクブルだったが、何とか堪えると、残りの兵士を家に運んだ。

ヴェイレンさんがアルシェの横に立つと、パンッと頬を打つ。

アルシェは奴隷時代の卑屈な笑みを浮かべ、立っていた。

⑥h--J -lVeJ)⑥

ヴェイレンさんは静かに言った。

アルシェはしかし、抗うように呟いた。

⑥l--J l-Λ-( μclc-, -lJoΛ -Λ uclhcC Vcl l--J⑥

私は胸が締め付けられるのを覚えながら、聞こえない振りをして歩いた。

奴隷少年のアルシェが初めて人に逆らった瞬間だった。

これまでの彼は、ただひたすら自分の意見を押し殺して相手に合わせることで生きてきた。

それが最も殴られずに済む方法だったからだ。だが、彼は殴られても意思を通す生き方を掴んだ。

私はそれを勇気と呼ぶことにする。

• 2017 1--3

>el 7/0 <-V 2c-  
-24a, 7ee7oc-

201 2- 201 2- 1'-24a,,  
2a e7 eZ 20-2,, 2ee 201 2- 307 >77c,,  
<2 201 2- 2c 2017-,, 2e7 201 >7 2cl c> 201 >cl 2- 2002,,  
201 2- 20- >cl 2e7- 2e7-7 2-2 2c <2e7 200 e7 2-c e 2e71,,

201 >7 2cl --26  
201 2-7c7 - <2c7, -2c 207c7 2-2 2077c <2c7 201 3077c,, 2-2 207c7 30 207 c 2a 201 207,,  
2a 2- -2a....2ee a c2 201....6

2c3 2e7, 201 e7c7 2c - 2c77,, 2ee 2077c <-7 e 2c, 201 2077 2c7 2c77 201 2-2 >e>,,  
2>>....6

h--, 2007- 20a 2- 201 -> e7c,, 2- 201 2c77 e7c7  
c> 20, 2-2 201- >24 2-2c- 20-2 2-2,, 2- <2a 2-2, 20- 2e 201, 2e7 200....  
h--, 2- 2c77- 201 e7c7 2- 2c-2 <-2 201 -27  
21 2- c7e 201, 2> 2- 3c7 <-2 201 -> e7c,, 2e77 2-27-7 2ee 2e7- 2e7 e7e7 2- 2e7,,  
2c 2a, 2e7- 201 2071,, <2-2 - <cl77c,, 2ee 2- 20- 201 - 207 20-2,, 2-2 2- 2c77 -2e7  
- 201 2c77-,,  
201....-....>>....,,

2c 2-2 >e>, 2V 2c 201 2c-2,,  
2e7, 21 -2e7 2-2 201- -2a7 2- 2c77- 201, 201 2-2,,  
201 2- 2- 2->cl 2c, 2e7 2-2 >24 2007- 20a,,  
2e7, 2e7, 2cl7 2e7 2-2 -2e7 2-2- 201 e7

201 2V 2c7 2c 201 2c-2 2e 2-2 <e77 2077 2-2 >e> 2e >e,,  
2a....2a e7 2-7 -27-----....  
-a....21, 21 2077c 2c7 2-2 201- -2a, 2> 2- 2-2- <-2 201 2e 2-2,,  
2ee, 2- e7 2e7,, 2- 2e7 2c77c7, 2e7 2- 2c7 201 2e 2c7 2c7,,  
2- 2-2 -2e7/ 2007- 20a, 2-2 201 2c77 2a 2077c, 2- 2e 2-2 <-2, 201 2-7 2a - 2077-,,  
2-2 2077c e7 3077c/ 2-277c7, <2c7 201-2- - 201,, 201 2c7 2a 2c7, 2e7 201 2e7 2e7 2e7  
2e 2- <2c7 - 201,,

Uee uc laμ/le, l- Ocl >e ΛoΛ γ- -γJ e Yaaγ)-,,

aa....l- JbΛC (e> Λo-Λ, Oe> γcC....

ceC c> Caμ, YaaC- Jaa laΛ- -Ca l-Λ- -lγ ΛoΛ,, Y-Λ Λo....

ceo YaaC- Jaa, ce Co-Λ Ca CcJ, eΛC CcJJe....

-CC...a....Λo, ΛoΛ leeVcμ....leeVcμ....-....leeVc....

c> Caμ, -lVeJ) e>c YbΛ-C o>c Λo-Λ Je l-V,,

h-Ya eμc> Λo-Λ eC J-C cJ,,

⊗(c >o) >o-δ ⊗

⊗(e, ceo.... Coδ ⊗

⊗h--Λδ - əeΛC, əeΛC,, Ca eC μclc- C-, əeΛC, leμ lco ΛoJ laΛ-γ eZ e >elcaJ,,

-h-h(∇ ` \*Σ) ⊗

ΜeeeeeeeeeeeeeeeeeeΛ VoooooooooμCγγ\ ( ` Д ´ ) /

・アデュ収容所

>el ʔ/0 <-V ʔc-

-ʔʔa, ʔeeʔoc-

寝不足の眼を擦りながら、私は朝ご飯を作った。

私はまったく不機嫌だった。ぽぷりがいれば髭をピンピン引っ張ってやるところだわ。

「もうっ、アルヴェスクさんのバカ」

大人はいいよね、恋人がいるから寂しくなくて。

子供だって寂しいときは寂しいのよ。

スクランブルエッグを乱暴にかき混ぜる。

私だって……。

でも、待てよ……いい年して彼女いないカルドさんはどうしてるんだろう……。

ああ、そうか。だから女の人を買うわけか。男の人はそれができるからいいよね。

私なんて、ウジウジするしかない……。恋がしたい、恋を成就させたい……。

うう……なに私、卵なんか炒めてるんだろ。

後ろからアルヴェスクさんが来て、ちょいちょいとおつまんでいく。

⑥Oecʔr⑥

ぺしっと手を叩くと、へらへら笑って去っていった。

「まったくもう……子供なんだから」

どうせ昨日はあの後メリウスさんと……。む、むかつくわあ～。

というわけでアルヴェスクさんのお皿には、通常のお塩をプレゼントしてあげた。

ほら、戦闘で汗かくしね♪

朝ご飯を食べると、戦況と作戦の確認をすることにした。

昨日、駐屯地から帰還できた敵兵はゼロ。

山道に配備されていた兵士もアルベさんと私たちが挟撃した。

ほとんど一瞬で勝負が付いたため、向こうに一切戦況は伝わっていないと思われる。

また、夕方にはネルメス隊のファーヴァ班が到着。周辺警備と駐屯地の警備に就いた。

今日は同隊のクノン班とともに作戦を行う。

主力はクノン班だが、実は本隊は我がアルヴェスク班。クノン班が戦っている間に手薄な本陣を叩くという予定だ。

準備をすると、私たちは予定通り配置に付いた。  
向こうは私の魔法を知らない。なぜ崖から山道を通らずに強襲できたのか、知らない。  
だから今回もルテを使って収容所の裏手に行った。

時間になると、予定通りクノン班による攻撃が始まった。  
騒然とする収容所。兵士が次々正門に集まっていく。

VecMeA 6leeV6

ヴェイレンさんは裏口の兵士をスパンと撃ち抜いた。  
恐らくこの様子はカメラに映っている。すぐに裏手にも人が来るだろう。

急いで裏口を開け、中に入る。  
収容所内の造りは昨日の兵士から聞いてある。私は脳内地図を確認しながら進んだ。  
敵がやってくる。銃で撃ってくるが、魔法の壁で味方を守る。  
アルシェは素早い動きで敵を倒していく。狙いは正確で、攻撃は容赦ない。

クノン班の尽力のおかげか、私たちはほとんど敵に会うことなく、機関部へ潜入した。  
収容所の長官がいる部屋に向かう。流石にここは警備が厳しく、マシンガンのせいで階  
下のホールに入ることもできない。

6-Me, laA- 7o77o Aoa, lYaUJa -IVeU, -M 3c3<-c) 1-A- 1-l <-3r6

63-Uo2 3el, JeleM e> -A-cr6

6UcYa, Mcccl-r6

アルヴェスクさんとカルドさんがマシンガンを撃ちながらホールへ飛び出る。  
弾雨を避けてテーブルをひっくり返すと、簡易防空壕を作る。  
そしてテーブルの向こう側から手榴弾と煙幕を投げた。  
手榴弾にやられ、一時敵の動きが止まる。

67cl>r6

アルシェはバツと飛び出す。側転しながら彫刻の裏側に隠れる。  
私も身をかがめて走り、柱の裏に隠れる。

6-Me, leeVr6

煙が消えた瞬間、私は柱から飛び出し、炎を放った。業火に兵士が巻き込まれていく。  
銃を放して床に転がる兵士。弾薬に引火し爆発に巻き込まれる兵士。地獄絵図だ。  
アルシェはとどめを刺すように残った兵士たちを撃っていく。  
左右の廊下から来る兵士はカルドさんとアルヴェスクさんが機銃掃射する。

「よし、ここは突破ね！」

魔法の盾を構えながら、アルヴェスクさんについて階段を上がる。  
長官の部屋を開けた瞬間、一斉射撃を食らったが、盾で弾く。兵士は驚いた顔をしている。

その隙を突いてアルヴェスクさんが兵士を機銃掃射する。これでレジスタンスの勝利だ。

「……あれ？」

しかし、機銃掃射を食らったはずの長官は静かに立っていた。

一瞬、立ったまま死んじゃったのかと思った。が、彼は魔法の盾で銃弾を防いでいた。

まずい、こいつも魔導師だ……。しかも杖なしで魔法を使ってる。本物だ……。

Ⓞⓔⓔ -|VeJ), -A e-J (ccJⓄ

長官は忌々しげに言うと、手をかざしてくさしを唱えた。

私たちは風に吹き飛ばされ、部屋の壁にガンガン体をぶつけて回った。

ⓄMe VojCⓄ

続けざまに突風を食らうと、私たちは仲良く窓の外に吹き飛ばされていった。

ⓄlaCeTⓄ

とっさに私はルテを唱える。ギリギリのところでみんなの体が浮き上がり、トマトにならずに済んだ。

アルヴェスクさんはカルドさんを見ると、にっと笑う。

ⓄA--, 7-|l, JeJeM V-J(c) |--J 7ojδⓄ

Ⓞ-, MJcc|-, -AJ V-J(c) >oA |--J (cJeeⓄ

Ⓞ(aM, -lYa e>c) -A(eJⓄ

アルヴェスクさんは私の頭を撫でる。

Ⓞ-Ao c) >cYa, lc-, (c 7ojC loKleC Je (-u o) -MeⓄ

Ⓞh3Mδ |-| eJ Aoa 7ojC loKleCδⓄ

Ⓞ(aM, JeJeM (-<c) -lYa,, u> -|Joa lel >ec e lcc<- 7oM -CaⓄ

7-|l Ⓞ(-| lcA|oθ eJ Mco,, JoA | 7o- -| ->o 7- loKleC,, Ca eC 7cl>,, (ccJ JeC |- c) |- 7o- -| ->oⓄ

Ⓞ(eC...lclCJ laA- -Ca o>δⓄ

アルヴェスクさんは窓を見上げる。

長官がゆらーっと下りてくる。

Ⓞh3>, (ccJ KcJ u-| JcAⓄ

ジャキッと銃を構える。



⑥-Λ∪ ∫c)ε V-Λ ∫cc∪ >-Λ <c V-∪∫ <-l la rε

⑥ l4a∪∪a....ε

私は顔を曇らせる。

⑥h3μδ -l- ε∪ ∫c εΛ- ∪-∫ ∪cΛ,, 0εc 0εc, leΛ e> <a∫cc- εΛ -Λ∪ Vε∫∫(-∫∫εε

しっしと猫を払うように、アルヴェスクさんは私たちを追い払う。

アルシェは私の腕を掴むと、一目さんに走り出した。

森の中を走る。後ろから銃声が聞こえる。

アルヴェスクさんは……死ぬつもりだ。彼は私たちを生きかすために、自ら犠牲になる気だ。

後から行くなんて嘘。本当に後から合流するなら、戦力の私を離脱させたりなんかしない。

私は走りながら泣いた。

しかし森の中で追っ手に追いつかれてしまう。

銃声が響き、真横の木に穴が開く。

「ひっ！」

慌てて私は氷の矢を放つ。兵士は胸に矢を食らい、倒れる。

まずい、見つかった。

私たちはひたすら走る。

しかし前方の藪に潜んでいた敵兵が突如現れ、私の杖を蹴り上げる。

「あっ！」

杖が吹き飛んでいく。

兵士は私を押し倒すと、馬乗りになる。

犯すとかそういうレベルじゃない。一瞬にして殺す気だ！

「きゃああ！」

ありったけの声で叫んだが、まったく意味がない。

「お前！リディアから離れろ！」

怒号とともに、アルシェが尖った枝で後ろから兵士の首を刺した。

兵士は首をかきむしって倒れる。

「——え？」

私は呆然とした。

今、アルシェは日本語を喋られなかったか？

思わずアルシェを見上げる。

⑥  $\mu c^2 = mc^2 - \mu_0 c^2$

⑥  $\mu - \dots - \mu, \mu e^2 - \mu_0 e^2$

・大脱走

収容所の長官から逃げてきた私とアルシェは、命からがらアデュ駐屯地に帰還した。  
が、そこは大変なことになっていた。警護に就いていたファーヴァ班は壊滅。味方の焼け焦げた死体が地面に放置されていた。

「うそ……なんで……」

アルシェは私の腕を取ると、近くの茂みに身を隠した。

Ⓔ cΛ, μcλc-, |- e( 7->cl 7-| cΛⒺ

「あっ！」

思わず声を上げてしまった。それはアルソンさんだった。

腰にサーベルを差し、軽装で駐屯地を歩いている。取り巻きに囲まれ、報告を受けている。

「アルソンさんだ……」

なんということだ。アルソンさんは既にドフレットからアデュに入っていた。

私たちが収容所を襲っている間に、ファーヴァ班はあっさりイルミロクにやられていたのだ。

私たちは陣地の守りが薄いのに先走って収容所を攻撃してしまったことになる。これはどう見ても負け戦だ。基地を取られては意味がない。

まずい、収容所にはまだクノン班がいる。収容所は制圧できたろうが、アデュを取られてしまったら増援も物資の補給もできない。アデュは孤立してしまう。

Ⓔ μcλc-, -Λ 7cl( l-7 -lelc, μe( λeμ>eJ 7-Λ( V-c VecΛ -cαⒺ

Ⓔ 7-> (4a., c> 7c(, leΛ- 7cl> -l lo<le( / -l4a 7cl7cl l4aJ4a λeμ>eJ., (e(…Ⓔ

アルシェは顔色を落とす。そう、それはクノン班とアルヴェスク班を見捨てることを意味する。

Ⓔ 3-J4, μcλc-, >α 7aΛα JecΛ Je( Jcl 4a, (7- |VeJ) Jc< eΛ Je( Jcl 4a >-Λ -|Jα eΛ Jeμ |--J 7- Veμ7αVⒺ

なるほど。確かにあの5人ならスッと林道を抜けてくるかもしれない。一縷の望みに過ぎないが。

アルヴェスクさんはアルソンさんのアデュ侵入を防げと言っていたが、残念なことに既に手遅れだ。

こうなったらいったんアシエルフィに戻って増援を求めるより、ほかはない。

私たちは茂みの中で夜になるのを待った。

夜になると、私は魔法で上空から駐屯地に忍び寄った。最も家屋から離れた目立たない位置に置いてあるトラックに眼をつけ、降りていく。

運の良いことに、整備中らしく、エンジンがかかっていた。

アルシェはサイレンサーを持って後ろから近寄ると、整備士を羽交い締めにし、口を押さえて頭を吹き飛ばした。

## ⑥e(C-r6

アルシェがドアを開ける。急いで荷室に乗り込むと、私は杖を構えた。

ドロンとエンジンが唸り、猛スピードで駐屯地を出て行く。

はじめは何事かと慌てた兵士だったが、トラックが奪われたことに気付くと銃を撃ってきた。

私の役目はトラックのタイヤなどが傷つかないように、バリアを張ること。

計画通りトラックの奪取に成功した私たちは、止まることを知らずにドフレットへ向かった。

当然ドフレットはアルソンさんの手に落ちているだろう。トラックを盗んだことは連絡が行っているはずだ。

本来ならトラックをドフレットの前で捨てて山道を歩かなければ、ドフレットは抜けられない。

だが、そうしたら今度はトラックという脚がなくなってしまう。タイムロスはクノン班の死を意味する。

恐らく彼らは収容所で籠城するはずだ。籠城が破れる前に増援部隊に参加し、アルソンさんを倒さなければならない。

ファーヴァ班はネルメスさんに既に壊滅の連絡を入れているはずだ。

従ってネルメスさんは増援部隊を用意しているはずだ。

だが、収容所やアデュ駐屯地の現状を知っているのは、実際に眼で見た私たちだけ。ネルメスさんに伝えることは山ほどある。

が、残念なことに私たちは今通信機を持っていない。くo八で吹き飛ばされたときにすべて壊された。それ以外の通信機は簡単に傍受されるので信用できない。

1時間後、ドフレットに入る。待ち構えていた兵士たちが銃弾を放つ。

恐らく馬鹿正直に正面突破するとは思っていなかったのだろう。兵士の数が予想より少ない。

よかった、これなら魔法のバリアで十分だ。

助手席に移った私は身を乗り出してバリアを張る。

トラックは私のバリアに守られながら、兵士の群れに向かって突っ込む。  
兵士を轢き殺すたびに、ドッカドッカとトラックが揺れる。物凄く嫌な衝撃だ。  
そのまま私たちはドフレットを通過した。これで一安心だ。  
山は越えたと思い、私は安堵のため息をついた。

・-μ- は繋ぐもの

ドフレットを通過して数時間して、私たちはカンタルに戻った。  
だが、そこで私たちが見たのは意外な光景だった。  
カンタルの駐屯地に近付いたとき、イルミロクの兵士が道で検問をしていた。

このままではまずい。このトラックはマークされている。  
私たちはトラックを乗り捨てると、駐車場に止めてある民間人の車に目を付けた。  
ロックは魔法で破壊できるが、流石にキーがないと動かない。  
買い物から戻ってきた民間人の背後に忍び寄ると、アルシェはドンッと頭を殴り、気絶させた。  
私は可哀想な男の人を茂みに隠すと、魔法でさらに眠らせた。すぐ通報されるとまずい。

車を奪うと、静かに検問に向かって走り出した。  
その後、検問で止められ、兵士が寄ってくる。アルシェは窓を開ける。  
私たちは元々アルヴェスク班の人員として登録されていない。だから検問には引っかからなかった。  
子供が運転しているわけだが、それについてはアルシェは免許を持っているのでOKだ。  
この点は日本とは違っていて助かった。

検問する兵士はいかつい顔で私たちを見たが、奴隷商の子供でお使いの途中だということ、表情を和らげた。

Ⓞlee lee, l4aJJa,, l-l- eJ lclcl l- -caδ J- <ca Jel, >cA-leC l-C -ca JeCeδ Ⓞ

Ⓞ--, 4aA-, -AJ C-<-C >e 7-A-C-μ c >cA-leC,, JbA CccJ A- A-lⓄ

ⓄO--, -C-C-r JeA-C-A h-r>- leA-Ar AaA 7l-7 <-A V-JA lclcl -l cl 7l-A(<le-Ⓞ

すると兵士はにこっと笑う。

ⓄleJ 7cl>-C 7-A-C-μ eC r- >cμo) 4aC- l4aJJa CcJeeⓄ

ⓄleA l4aJJa >cμo) eC Jbμl-C leA-A >4arⓄ

助手席から愛想を振りまいた。兵士はにこにこして私たちを見送った。

車が走り出すと、私は真顔に戻る。

「ミロク……か。ついに親玉が動いたってわけね」

カンタルの駐屯地に着く。

車は降りずに外から様子をうかがう。

やはりイルミロクの手に落ちているようだ。ネルメスさんはどうなったのか。心配だ。



「ダメだ、もう行くところがない！」

どこに逃げればいいのか？どこに逃げればいいのか？私は頭が真っ白になった。

追っ手が来る。

ⒺⒺⒺ

アルシェはぐいっとハンドルを切る。

どこに向かっているんだろう。

また歩道を行ったおかげで、追っ手は流石に市民の安全を考えて迂回せざるをえなかった。

どうにか追っ手をまいた私たちがたどり着いたのはアシェットの家だった。

重要文化財。アシェットのアルシェの家。

近くの森に車を止めると、アルシェは銃を持って降りた。

重要文化財なので、家の周辺には警備が張り巡らされている。いくら人件費がかかろうと、ここはあるがままに残すという方針のようだ。

「ねえ、何する気？」

アルシェは無言で進んでいく。

Ⓔ-Ⓐ 4ol V-Ⓐ V-7 ('-M.e., JoⒶ J- Ca, -Ⓐ Vell ucM -CaⒺ

アルシェは外壁に近寄ると、ライトを持って歩いている警備をサイレンサーで撃ち殺した。

私は口を覆った。あれはただの公務員だ。兵士ではない。なんてむごいことを……。

アルシェは口で息をしながら、詰め所に近寄り、呼び鈴を押した。

ⒺJoⒶⒶ4aⒶ, l4aJJoⒶⒺ

気さくな声で話しかけ、中の人を呼ぶ。

Ⓔ-Ⓐ CeM V-Ⓐ Ce, lcc<Ⓔ

応対に出てきた守衛に銃を突きつけると、相手は両手を挙げて降伏した。

が、アルシェは躊躇いなく彼の頭を吹き飛ばした。血を流して公務員のおじさんが倒れる。

私は涙が出てきた。なんてことを……。だが、止められない私も同罪だ。

警備にいたのは計4人。アルシェは4人全員を容赦なく射殺した。

カメラも見つけ、次々と破壊していく。

正面のドアを開けると、アルシェは私に手招きをした。

が、その瞬間、ガァンという音がして、アルシェは膝を付いた。

警備の人だった。アルシェの凶行を見て、慌てて中に隠れたのだろう。



警備にいたのは5人だったようだ。4というアルカ的に区切りの良い数字にすっかり騙されてしまった。

ハアハアと荒い息で警備員が近付く。

⑥C, Me し-I JeeM⑥

右手の銃でアルシェを制しつつ、左手でケータイを取り出す。

アルシェは口からよだれを垂らし、涙をこらえて顔を真っ赤にしている。

「リディア……壁を……」

「えっ！？ア、アルシェ？」

警備員は不審な顔で私たちを見る。

「こいつは……この会話が理解できない……魔法の壁を、今のうちに……」

「わ、わかった！」

私が魔法の壁を作った瞬間、アルシェは銃を構えた。

警備員は驚いて発砲したが、壁に弾が弾かれる。その刹那、アルシェは警備員の右目を撃ち抜いた。弾は脳を貫通して、警備員は床に倒れる。

ボタンとアルシェはドアを閉める。

「こっちだ」

アルシェは私の手を引っ張る。薄暗い家の中で、階段を上がっていく。

カーペットが敷いてあるので、音は小さい。ぐじゅっぐじゅっという柔らかな音を立てるだけだ。

2階にはたくさんの部屋があった。

アルシェは脂汗を浮かべながら、目に付いたドアを開けた。

中に入ると、ベッドサイドに倒れ込む。三角座りをすると、お腹を押さえる。

「大丈夫？いま私が治してあげるから」

プロティスの魔法を唱え始める私。

「リディア……いったい……何が起こったんだ……？」

「え？」

魔法を唱える唇が止まる。

「俺は……どうしてこんなところに……」

「アルシェ……？」

「アルシェって……？あ、ああ、そうか、俺だ、俺だな、うん」

「えっ、いったいどうしたの？」

「なぜ俺は怪我をしている？ゆ……夕月のやつにやられたのか？」

「ええっ……！？」

眉をひそめる私。まさか……。

「まさか……勇太……君？」

「勇太……？誰だ、それは」

「だってアルシェ、あなた……。あなた、どうして日本語を話しているの？」

「なぜって……？なぜ……だろう。ああ、俺はお前を守りたくて……それしか考えてなかった。それだけが俺の……ぐっ！」

お腹を押さえるアルシェ。

まずい、話している場合じゃない。

魔法で傷を治すと、アルシェは落ち着いたのか、眠ってしまった。

私はアルシェを抱きしめながら、外の物音に耳を澄ませていた。

追っ手は来ていないし、警備は全員通信する前に倒した。少なくとも夜勤が終わって朝帯の人が来るまでは安泰だろう。

1時間ほどすると、アルシェが起きた。

「……おはよう」

試しに日本語で喋ってみた。

アルシェはぼーとした顔をした。やはり、ダメか。

「ああ、おはよう」

しかしアルシェは日本語を口にした。

「ねえ……自分の名前が言える？」

「はぁ？村上勇太だけど……」

私は全身に鳥肌が立つのを感じた。

・ふたつの月

アシェットの家の一室で、私は勇太君を名乗るアルシェと座っていた。  
外から入る淡い光しか、私たちを照らすものはない。

「勇太君、ここがどこだか分かる？」

「ええ……と。アシェルフイだよな」

どうして……知ってるの。

どうして、アルシェが知らない勇太君の名を口にし、勇太君が知らないアシェルフイの地名を口にしてしているの。

「ねえ、私が夕月に襲われたのは覚えてる？」

「ああ、お前が……あれは……伊勢か。伊勢で夕月に捕まって空に消えて」

「うん」

「俺はその後、お前を追って……次の結界に行ったんだ」

「一人で？」

「ああ。夕月が行くのは次の結界のはずだからな。それで、俺はお前を取り戻すために」

「ゆっくり過程を聞かせて」

勇太君は唾を飲んだ。

「確か……23号でひたすら北西に進んだんだ。広い道でな。とにかく何もなかった。

スーパーが数軒あったくらいで、あとは自販機もなかった。広く長かった。

側道は区切られていて、坂になっていた。上がっては下がるを繰り返した」

「景色は？」

「田舎だよ。畑ばかりだ。牧歌的だった。その後は松坂を通過して……津に行ったんだ」

「津って何？」

「そういう地名」

「「つ」一文字で地名なんだ？なんかヘンだね」

「ああ」勇太君は疲れたように笑う「そこに結界があって、俺は夕月を追ったんだ」

「でも、勇太君は結界が見えないんじゃないか……」

「だから、メモを頼りに夕月を探した。そしたら夕月が一人で立ってたんだ」

「一人で？」

「ああ。お前のことを尋ねたら、急にいなくなるとかふざけたことを言っでて。

それで突っかかったらあいつに雷を打たれて……。

気付いたらお前が森で兵士に襲われてて、ああ、アルヴェスクさんたちが逃がしてくれたんだっけって思って……思わず枝で兵士を刺したんだ」

「そう……」

記憶が……混ざってる。アルシェと記憶を共有している……。

でも、どうして……。

「それで、また意識が暗くなって、次に俺はこのアシェルフィの家で、腹を打たれてた…  
…。

とっさにお前に盾を張らせて……で、今ここにいる」

「ありがとう、よく分かったよ。守ってくれてありがとう」

「なあ、俺たち死ぬのか」

「……多分。今までは危険に瀕したときは地球にワープしてた。でも、さっき銃で撃たれたときはワープしなかった。恐らくもうワープは……」

「そうか……。じゃあ、ここにいるのが一番安全か。しかし、それも朝までだろう。まさかアルバザードで死ぬことになるとはな」

勇太君はため息をついた。

「ごめんね……私のせいで」

「別に……」

私はくすつと笑った。

「また「別に」って言った。いつもそうだよね」

「そうか？別に気にしてないけど」

「あ、ほらまた」

「う……」

「ふふ」

私は脚を伸ばす。

「ねえ、綺麗な空ね」

「ああ」

「京都……行けなかったね」

「……だな。ニューワイズエンドも止められなかった。それに、母さんのことも……」

「……」

「でも、お前を守れた。それで十分だ」

「ほんとお？」

「ああ」

勇太君の顔が赤くなるのが、この薄暗闇の中でも見て取れた。

私は手を組んで正面に伸ばす。そしてまた戻し、小さく息をつく。

「あの……ね。前から聞きたかったんだけど。勇太君って……彼女さん、いるの？」

「いや……いないけど……」

「そう。あの……私もね、今はいないの、カレシとか」

「そ……そうなんだ。てゆうか、前はいたんだ？」

「え、ええと」

すみません、見栄張りました(T\_T)

「ええとね、カレシってほどじゃないんだけど。まあ、カレシみたいになっていうか」  
しどろもどろ。

「勇太君はそういう子いなかったの？」

「いや……」

「好きな子とか」

「いたことはあるけど……でも……別に」

「そう……。あの……さ、それって、女の子自体が苦手とか嫌いとかってある？」

「え……いや、別にないけど」

「じゃあ、単に両思いになる空気じゃなかったみたいなの？」

「まあ……そんな感じ」

私は細長く唇から息を吐いた。

「あの……さ。勇太君って私のこと……その……」

「え？」

「いや、よかったら聞かせてほしいなって思って。あの……一緒に旅してたわけだし」

「聞かせてって何を……」

「え、だからあ、好きとか嫌いとか」

「……嫌いじゃない」

「それだけ？」

「え……だって……お前はどうかんだよ」

私は戸惑った。もし、好きって言って、断られたらどうしよう。もし向こうは私のことを友達だと思ってたら？

どきどきしてきた。こういう駆け引きは苦手だ、怖い。心臓が破裂しそう。

こういうのって男の子が先に言うもんなんじゃないの？言わないってことは、やっぱりそういうことなの？

女の子の私から言えるわけない……ましてアルバザード人の私が。

「私は……勇太君と同じ……だと思う」

「え？」

うわあ、私、丸投げしたわーっ。

紫苑だったら食いついてるところだろうな。

結局私に勇気なんてないんだ……。

勇太君は床に手を当てて動かしていた。円を描くように。落ち着かない仕草だ。何度も繰り返している。

「いや……同じって言われても……」

「だから……勇太君が……もし私のことを……なら、私も……かも」

最悪だ、水月リディア。こんな煮え切らない台詞で保身に走るなんて。

あんた、恋を成就させる資格なんてないよ。

私はえぐっと泣き出してしまった。自分が情けなくて、泣き出してしまった。

「ど、どうした？」

「ううん……ちがうの。わ……わたし……ほんとは……勇太君に好きって言ってほしいのに、でも……それには自分が好きって最初に言わなくちゃいけなくて……でもそんなこと怖くて言えなくて……だから自分が情けなくて」

「リディア……」

言ってしまった。ああ、間接的だが、言ってしまった。

勇太君は急に真面目な顔になると、下を向いて呟いた。

「俺も……お前のこと……好きみたい……だ」

「えっ……？」

ゆっくり私は勇太君を見る。彼は下を向いたままだ。

「ほんとう？」

「ああ……」頷く。

「だったら……」

「え？」

「こっちを向いて。私を見て」

「……」

「私を選んで」

勇太君は恥ずかしそうに私を見た。目が合うと、私はにこりと微笑んだ。

「お前……ずるいよ」

「どうして？」

「好きって……きちんとってない」

「ふふ……」

私は顔を近づけ、囁くように言った。

「だいすき……だよ」

・ひとつの月

勇太君に抱きついた私は、1時間くらいずっとそのままでいた。

やっと結ばれたのに……でも、私たちの命は今日までだ。

日が昇れば、私たちは殺されてしまう。

嬉しさ半分、恐怖半分。

どうして私たちはこんなに不幸なんだろう。

「ねえ、自分が今日死んでしまうって……信じられる？」

「いや……なんとかお前を守る方法を考えてる」

「いやよ、生きるなら一緒じゃないと！」

「ああ……すまん、そうだな」

「でも、もし死ぬなら……やっぱり……それも一緒がいいな」

「ああ、そうだな」

「ねえ、私たち、あと4時間かぎりの恋人じゃない？」

「かもしれない……」

「だったら、4時間で恋人のイベントをすべて済ませてしまわない？」

「どういう意味？」

「4時間でデートをして、食事をして、お話をして……キスをして……その……も、して……」

「えっ!？」

雰囲気ぶち壊しで勇太君が声を上げる。

私は赤い顔でドキドキしながら、「私は……いいよ」と言った。

「で……最後に結婚式もしよ？」

「……え、でも……」

「私たち、4時間で40年分生きるの」

勇太君の震える手を、私はぎゅっと握った。

部屋を出ると、私たちは居間に行った。

「デートはアルシェの家の見学ね」

そう言って私たちは家の中を見学した。

薄暗くて肝試しみたいだったけど、歴史的に有名なものが見れて楽しかった。

居間に戻ると、車の中から持ってきた携帯食を出した。

食器はアシェットのものを借りる。

ローソクに火を付けて、できるだけムードを出す。

「私の食器、誰のだか分かる？」

「リディア……？」

「ぴんぽん。えへへ、自分の名前、使っちゃいました♪」

「てことは、俺の食器はセレンのか？」

「はい、よくできました」

「アシェットのアルシェたちはここで飯を食べていたんだな」

「まさか自分が食べることになるとは思わなかったけどね」

ティーパックの桃の紅茶をすする。

リディア＝ルティアは桃の紅茶が好きだったらしい。

「広いな、この部屋」

「14人以上が食べられるテーブルがあるからね」

窓の外を見ると、暗がりの藪だった。灯りを向けると、藪の向こうは灰色の塀だった。

食事を終わると、アルシェのお風呂を借りた。お湯がまだでたので助かった。

お風呂をあがると、私たちは部屋に戻った。

しばらくお話をしていたが、勇太君も私も動こうとしない。

このままだと夜が明けてしまう。

「ねえ……この後どうすることになってるか、覚えてる？」

「え……」

勇太君は顔を赤くする。

「いや……かな？」

勇太君は首を振る。

「嫌じゃないけど……」

「じゃあ……。その……私、一応女の子だし……なんていうか、いいよってしか……言えないの」

「え、それってどういう」

「だから……ええと……その……私は……いいよ。まず……キスから……それ以上は……恥ずかしくて言えない」

勇太君の呼吸が荒くなる。死ぬほど緊張しているに違いない。それは私も同じだ。

私はゆっくり目を閉じて、唇をあげる。

そのまま10秒ほど間があって、私がいい加減目を開けようとしたとき、唇に感触を感じた。

ものすごく柔らかくて、優しく、あったかかった。



すっと目を開ける。

「やわらかーい」

「お、お前のほうが柔らかいと思う」

「ねえ、もういちど」

「え……あ、ああ」

今度は長く。離してはくっつけてを何度か。

ちゅっちゅと微かに音がする。ああ、だから「ちゅう」とか txo とかいうのね。

凄く息が荒い。部屋が暖まるのではないかと思うほど。

私は目をそらしながら、勇太君の手を取った。

「多分……次はここだと……思う」

確実に聞こえない声で呟くと、私は彼の手を自分の胸に近づけて示唆した。

勇太君はちょっと怯えた顔になり、「なあ……やめないか」と言った。

私は困ってしまって、泣き出してしまった。

「え……ど、どうしたんだよ？俺、お前を傷つけたくないから止めようかって言ったんだよ。嫌いとかじゃないって！」

「ううん……わかってる、ありがとう。でも、本当に好きなら、私を求めてほしい……」

「わ、わかったよ。それがお前にとって良いのなら……そうしたほうがいいって思う」

勇太君は自分を説得するように呟くと、ごくっとな唾を飲んで私の胸に手を当てた。

だけど、手を置くだけ。特に何かするわけではない。

「あの……これ、痛かったりとか」

「強く揉まなければ平気よ。でも、ゆっくり優しくしてね。堅くて痛いから、胸って」

「え、堅いのか？」

「さあ、ほかの子は知らないけど、私は堅いと思う……へ、ヘンかな？」

「いや……悪い、俺には分からない」

さわさわと軽く指を動かす。弱すぎて何も感じない。てゆうか仮にもう少し強く触られても、とても気持ちよくなるとは思えない。直に触った方が良いのかも。

「あの……手を入れて。ここから」

「あ……ああ」

上着を通してシャツの中に手が入ってくる。

「なんか……堅いのがある」

「それ……ブラのワイヤー」

「下着、外したほうがいいのか？」

「あの……隙間から手が入ると思う」

「引っ張られて痛いとかない？」

「大丈夫……だと思う」

勇太君の暖かい手が入ってくる。私は怖さとくすぐったさと恥ずかしさでピクッと震える。

「い、痛かった？」

「大丈夫、くすぐったいだけ」

「あの……気持ちよくなったりとかはしないんだな」

「うん、ごめんね。私、感じない人みたい」

「単に……初めてだからじゃないのか？」

「そうかも。えへ」

「ええと……次は何をすれば？」

「あの……勇太君、そうやって女の子に全部聞くのはちょっとどうかと……」

「あ、そ、そうだな。ごめん。でも俺、ほんと分かんなくて。あ、ちょっと待って。調べるから」

ケータイを取り出す。

「あれ、電波ないな」

「あの……ここ、アルバザード……」

「あっ、そうか！」

おー、かなりテンパってますな、少年。

逆に私は余裕が出てきた。

すっと立ち上がる私。本棚に近付く。

「どうした？」

「事典を探そうと思って。hiptの項に方法が書いてないかなって。リディアの棚なら何でもあるでしょ」

「あ、なるほど……」

「勇太君、まったく分からない？」

「いや……その、なんとなくは」

「聞かせて」

本棚から事典を取り出すと、机に置く。

「つまり……俺のを……お前のに……入れる」

「私の……が、よく分からないのよ」

「自分でもか？」

「うん。どうなってるのか見たことなくて」

すみません、大嘘です。小学校のころから鏡とか使っていました。

「あ、ほらここ、書いてあるよ」

勇太君はじっと見てくる。

私は恥ずかしさを紛らわすようにくすっと笑うと、立ち上がってスカートの中の下着を降ろした。

ベルトを外し、杖やナイフを机の上に置く。

「……見ないでね、恥ずかしいから。本と比べて形を掴んで。穴を見つけて……そこが、多分、そうだから」

「ほ、本と比べながらするのか？」

「うん……だって、見られたら死んじゃうもん」

「あ、ああ、分かった。でもさ、この本だと、穴……3つあるみたいだけど」

「前は入りっこないから大丈夫。後ろは……私に分かるから違うって言うよ」

ベッドに寝転がる私。

勇太君は一部服を脱ぐ。

「あのさ……いきなりでいいのか」

「ぜんぎ、は、さっきしたもん」

「そう……なのか」

「それより、勇太君のってどうなってるの？見ていい？」

「え……い、いや。だってお前も見せないって言ってるじゃん」

「ええ～、見たいよお。自分の中に入ってくるんだから、確かめないと」

「あ、ああ。でもそうしたらお前のも見せろよ」

「う、うーん、じゃあ、一瞬だよ。先に勇太君の見せて」

起き上がってじっと見る。

「お前……自分だけじっと見るとか、なしだからな」

「う……」

「交代しろよ。やっぱ見ないと分かんないし」

「ひー、死にそう……」

なんだか赤ちゃんみたいなポーズになってしまった。

私のこんなところを見たことがある男の人は静くらいのもものだろう。

恥ずかしさで汗が滝のように流れる。

「へ、へんじゃないかな？」

「だから俺は分からないって。でも、色も形もきれ——」

「ちょ、具体的に言わないで！耳で聞くと恥ずかし死ぬから！」

「ええと……うん。あの……これって、中どうなってるのか見て良い？」

黙って頷く。

一瞬どころか 30 分もしげしげ見られ、弄られた。恥ずかしくて死ぬ……。

「じゃあ……入れるよ」

「うん……」

私はシーツを握って目をつぶった。

予告があったものの、つるつる滑ってどうにもならない。

「暗いせいかなあ」

「いや、穴の位置は分かるんだけど」

「小さくて無理？」

「……と思う。だって、小指の先も入らないし」

指をあてがわれると、ジクとした痛みが走り、自然と腰が逃げる。

そのまま 30 分ほど頑張ったが、どうにもならない。

「なあ、諦めようよ」

「いや。我慢するから無理にでもして」

「だって、指で痛がるのにこんなの入れたら、死なないか？」

「死なないよ。処女でえっちして死んだなんて聞かないもん。どうせあと 2 時間で死ぬんだから、私、我慢する……」

「……わかった。じゃあ、片手で俺は自分のを押さえて動かないようにするから、お前は指で開いて。手をあてがわないからつるつる滑っちゃうんだよ、きっと」

「うん……」

勇太君は左手をベッドについて、乗っかってきた。

ぐいっという感覚の後に、ブチッと何かが切れるような感じがして、激痛が私を襲った。

あまりの痛みで体が裂けるんじゃないかと思ったが、顔を真っ赤にして唇をかみしめて、涙を流しながら我慢した。

「は、入った？」

「ああ。え、自分で分からないの？」

「そこら辺一体の感覚が激痛しなくて、何がどうなってるのか分からないの」

「じゃ、もう抜こうか？」

「ダメよ、我慢した意味ないじゃない。気持ちいいように動いて」

「っていっても……お前が痛そうなのに俺ばっかりじゃ」

「いいの、それで。私は痛いけど嬉しいから。でも……ほんと……お願い……できれば早く終わって……」

「あ、ああ。分かった」

勇太君は無言で動き出した。動き方は本能ですぐに察したようだ。  
まあ、極めて原始的な動作なので、これ以上簡単な動きはないだろうしな。

それから2分ほどして、勇太君の動きが速くなった。

「あの……どこで……」

「え……なにが？」

「外のほうがいいよな」

「あ……。……ううん、このまま」

「え……わ、わかった」

そして、汗がぼたぼた私の顔に落ちてきて、急にゆっくりになって止まった。

「終わった……？」

「あ、ああ……」

苦しそうな声。顔をしかめてる。あれ、おかしいな。ネットで見た情報だと男の子はご満悦って聞いたけど、苦しうさだ。

「あ、まって。抜くのゆっくりにして」

と言ったが、勇太君は「いや、勝手に抜けて出た」と言った。

「はあ……」

私は大きなため息をついた。

勇太君はがっくり膝を付いている。何も喋らない。試合の終わったボクサーみたいだ。  
なんかウケる。

「大丈夫？」

「い、いや、お前こそ」

「痛いけど、大丈夫よ。死にはしなかった」

「そうか、よかった。あ、でも俺は怪我したっぽい」

「え!？」

ガバッと起き上がる。

「どうかしたの？」

「いや……血が」

「あ……多分、それ、私の」

「あ……そうか。そうだよな。でも俺、もっとドバーって出るのかと思ってた。案外少ないんだな」

「中が切れるだけだからね、大したこと……あ」

「ん？」

「まずい……リディアさんのシーツに……血が」

「あ……」

それから私たちは抱き合って寝た。

もう、あと少しで殺されるなんてことは忘れていた。

これから結婚式をする予定だったのに、一山越えたと思ったら急に疲れて眠くなってしまった。

・きぬぎぬは鳥の鳴き声、常考

朝、起きたら鳥が鳴いていた。

目の前には勇太君がいた。私は一瞬ぼーっとしたけど、昨日のことを思い出して顔が赤くなった。

勇太君も目を醒ます。

「おはよう」

勇太君は顔を赤くすると、「ああ」と言った。

まだ兵士は来ていないようだ。

私はうーんと伸びをして起き上がる。

「……あれ？」

ここは……どこだ？

そこは見知らぬ部屋だった。

部屋といっても、明らかに家ではない。なんていうか、屋内って感じた。

周りは木の壁。中にはヘンな木製のオブジェ。なんだ、ここは。

勇太君は正面のドアを開ける。

するとドアの向こうには、鈴があった。ほらあの、元旦にガラガラするやつ。

「え……神社？」

「……のようだな」

え……てことは、ここは日本？

な……どうして？

神社の外に出る。目の前は鳥居。

本当に……日本に帰ってきたようだ。

見ると、勇太君はアルシェの服でなく、いつもの制服を着ていた。一方、私は昨日のまま。

そういえば勇太君は既に昨日の食事の後、勇太君になっていた。

最初はアルシェの体だったのに、いつのまにか姿まで勇太君になっていた。

つまり、私はやっぱりリアルお兄ちゃんとえっちをしてしまったことになる。

しかも、生き延びて。

ああ～……。

私は思わず頭を抱え、心の中で叫んでしまった。

ど、どーして、日本に戻ってきたのよ！

私、絶対死ぬと思ったからしたのに。戻って来れたんなら、焦らなきゃ良かった……。

「リディア、大丈夫か？」

「私たち……どうして日本に？」

「は？」

しかし勇太君は首をひねった。

「どういう意味？」

「え……だから、どうして日本に帰ってきたのかって」

「すまん……意味が分からん。どうして神社に……言いたいのか？」

え……どうということよ。

「あの……勇太君、昨日のことは……覚えてるよね？」

「え？あ、ああ。つまり……お前と……」

「そう……。え、でも場所は？」

「場所？……さあ。そういえば……。そこじゃないのか」

「そこ！？え、神社？」

「ああ……。だって……。いや、夕月のやつに津で会って……。それで……。いつの間にかお前のところにいて……。それが今思えばこの神社だったわけか」

なんということだ。勇太君はアルシェとしての記憶が消えていた。

アルバザードのことも一切覚えていないようだ。

ただ、私と契ったことは覚えていた。もっとも、それを忘れていたら刺し殺しているところだが。

神社には勇太君のリュックしかなかった。

まあいい、私のは軽くしてあったから、大したものが入っていない。

と思ったものの、突如私は青くなった。

「ゆ、勇太君」

「どうした？」

「私……パンツはいてない……」

「えっ？あ、そこの中じゃないの」

いや、神社にあるわけがない。だってアシェルフィに置いてったんだから。

あああ、水月リディアのパンツがリディア＝ルティアのパンツとして歴史に残ってしまう……。

アルバザードのみなさん、ごめんなさい。

しかも魔法の杖まで置いて来ちゃったよ……。へこむなあ。

勇太君が神社から出てくる。

「中にはないようだな。おかしいな。じゃあ、どこかで買うか」

「コンビニっ！まずコンビニ行こ！」

神社を出ると、コンビニを探した。



パンツを買う。あー、勇太君連れだから、女の人がいかがわしい目で私を見るよ。コンドームじゃないのに緊張する。

ご飯も買っておく。ついでに道も聞く。津の近くだそうだ。

「津駅に行ってみるか」

近くの公園でご飯を食べると、勇太君はぼつりと言った。

歩いていける距離だったので、てくてく向かった。

「案外小さいね」

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0263.JPG>

「ああ。県庁所在地のわりにな。で、リディア。結界が見えるか？この場所のはずなんだが」

「ううん……もう夕月に壊されたみたい」

「そうか……」

「次の結界はどこ？」

「京都だ」

「じゃあもうゴールなのね。ここからどれくらいあるのかなあ」

「かなりあるぞ、距離的に」

「自転車もないし、困ったね」

「まあ……それは盗むしかないだろうな」

「えへ、私たち、ほんとそのうち揺らされるかもね」

止めてあった自転車を盗むと、私たちは京都へ向けて出発した。

おあつらえ向きにクロスバイク 2 台を盗んだ私たちは、人が来る前にダッシュした。

「なあ、今回は盗んだっていうより強奪じゃないか？」

「ううん、そんなことないわ。ちょっと公園で休んでたクロス乗りの人たちを後ろから石で殴りつけて鍵を奪っただけよ」

「お前……最初に会ったときはそんなことするやつじゃなかったような……」

自転車で京都まで行ったりレジスタンスで戦ったりしてれば変わるものよ。

「いいの。緊急事態なんだから。ニューワイズエンドが起きるよりはマシでしょう？」

次の目的地は関だ。津からは 10 号を使った方が早い。

最初は楽で広い道だったが、だんだん狭くなってきた。特に中町の辺りから道が最悪になってきた。

とにかく狭い。車一台分くらいしかない。そのくせ側道はなく、代わりに側溝がある。落ちたら脚を捻るか折ってしまう。危なすぎる。

芸濃 IC の脇を通ると、道はさらに悪くなった。車は減ったものの、山道が酷い。  
だが、下り坂が多くてまだ助かった。ぐねぐねした山道を降りると、関に着いた。

「東海道だと、ここが鈴鹿峠直前の宿場らしい」

「峠があるの？箱根みたいな？」

「ああ、ただ、東海道最大の難所は箱根らしい。あそこを越えたんだから大丈夫だろう」

1号にふたたび合流し、鈴鹿峠を登っていく。

確かに箱根よりは楽かもしれないが、それでも凄く長い坂だ。

自転車を押して歩く。暑い……。まだ日本は夏だ。アルバザードで過ごした2ヶ月のおかげで向こうは秋だったのに、また夏に戻ってきてしまった。

左右は森。山賊でも出るんじゃないかってくらい鬱蒼としている。

ガードレールの向こうは崖。落ちたら容赦なく死ぬ。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0263.JPG>

「ここも中々凄いいところだね」

「ああ、それよりお前、体大丈夫か？」

「え？」

「動くと痛いんじゃないか。さっきから脚の動きがヘンになってる」

「そ、そうかな」

大当たり。股に何かまだ刺さってるんじゃないかっていう違和感がある。そして動くたびに痛い。

なぜ紫苑はあんなに嬉しそうに静に懐くんだろう。恐らく紫苑も夜は静とまあ……なわけ、でも……よくあんな痛いの耐えられるな。

いや、気持ちよくなったのだろうな、慣れで。しかし、私はどう考えてもそうなる気がしない。

勇太君は淡泊そうだし、何度も求めてくるようには思えない。あれはふたりの儀式だったようにしか思えない。

次にするとしたらいつになるのか分からない。それくらい実感が持てない。

うーむ、よく紫苑と静は……。

沓掛を超えると二股に分かれていたが、私たちは左を選んだ。

が、その後右は対向車線用だったので、どのみち行けなかったことに気付いた。

それからしばらくすると峠だった。

だが、箱根と違い、ここは峠を越えても高低が続いた。上がっては下がるを繰り返すので、なかなか楽ができない。

峠を越えて甲賀に入ったとき、私は生まれて初めて「コウガ」ではなく「コウカ」と読むのだと知った。

水口は思ったより都会だった。そのまま走るとまた少し田舎になるが、三重に比べると滋賀は街続きだった。

ぐっと西寄りに進路を変え、草津へと進んでいく。もう琵琶湖だ。

琵琶湖の外周をぐるっと回りながら、大津に着く。ここが最後の宿場だ。

・京都

最後の宿場の大津で、私たちはお昼休みを取った。

さあ、あとひとこえで京都だ。

コンビニ弁を食べるのがむなしかったが、それも今日までだ。

お昼をすませて少し休むと、私たちは自転車にまたがった。

大津を出ると、急に山道になった。京都は盆地という。その山が、これか。

途中、弘法大師堂というのがあった。さすがの私でも聞いたことのある名前だ。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0275.JPG>

左を見ると、坂があった。

これが最後の山道ね。

なんだか感慨深いものがある。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0275.JPG>

最後の山は距離にすると、大したことがなかった。

勾配もそれほどではなく、ゆるりと進むことができた。

ただ、鈴鹿峠に体力を奪われていたので、どうしても疲れてしまったが。

山道を越えてしばらく行くと、ついに京都に着いた。

161 や名神と交わっているものすごく複雑になっている交差点を越えると、あとは三条大橋に向かってひたすら漕いでいく。

ところが京都に入ったあとも坂道が多く、へとへとになっていた私たちは疲れで無言になりながら進んだ。

ああもう、あれで最後の山道だと思ったのに。

意外と京都に入ってから市内に入るまでは時間がかかった。

山科区と東山区は名前の通り山が多く、山道も何カ所かあった。

私たちは三条大橋を目指していたので、最後は 143 の三条通を使った。

蹴上を越えると街っぽくなってきて、東山ではもう都会を走っていた。

やはり都内は揺らぎの影響が多く、車はほとんど動かないという状況になっていた。

それから 10 分ほど漕ぐと、私たちはついに三条大橋についた。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0290.JPG>

「つ、ついた！ ついに着いた！ 勇太君、私たち、自分の脚で京都まで来たのよ！」

「ああ……！」

勇太君は嬉しさと恍惚とした表情をしていた。

私たちの旅はここで一区切り。それは紛れもない事実。  
だが、ここで終わりじゃない。ようやく始まりなのだ。神崎琥珀を止めるという大目的の。

「やれやれ、まさか本当にここまで来るとはね」  
後ろからふいにパチパチと手を叩く音が聞こえる。  
振り向くと、そこには夕月が立っていた。

「夕月……」

「ほら」

夕月はカードを差し出してくる。

「……なにこれ」

「ホテルのカードキーだ。流石に今回ばかりは君らの努力を称えようと思ってね。最後の戦いの前に休むといい」

「その手は食わねえぞ。どうせまた罠だろ！」

「あいにく僕もまだ子供でね。宿は取れないよ。それは琥珀が取ってくれたんだ、君らのために」

「なん……だと？」

「琥珀は君らに会うと言っている。まあ、君らが顔を出すのが礼儀だがね」

「……いずれにしても行くつもりだったよ。そのために来たんだ」

「そうか、それはよかった」

「ああ、そうだ。待ち合わせの場所を決めておこう。場所は四条。祇園だ」

「祇園？」

「花見小路をまっすぐ歩くと、建仁寺の入口にぶつかる。まあ、その辺りで落ち合おう」

「落ち合うだと」

「ああ。最後の結界はそこにある。祇園、花見小路だ」

「最後の結界……」

「待ち合わせは夜8時。まああれだ。まだ数時間ある。京都見物や買い物をしてから来るといい」

「ちょっと待てよ。その間に結界を壊す気じゃないだろうな」

「そう思うならリディアに見張らせていればいい。リディア、結界がこの鴨川のずっと向こうに見えるだろう？あの結果を見てどう思う？」

夕月は四条の方角を指さす。そこにはドーム状の結界が立っていた。

「大きいわね……。抜けがけしたって、すぐに一人では壊せない」

「——というわけだ、勇太。安心して京都見物をするといい」  
そう言うと、夕月はシュッと消えた。

私たちは自転車を置いて、ホテルへ向かった。

荷物を置いて、いったん買い物にでかける。

「お前……けっこう余裕あるんだな」

「ないよ……。けど、服は変えたいの。ずっと着っぱなしだし」

「気にするんだな」

「だって……勇太君の前だもん。いつも綺麗でいたいの」

すると勇太君は赤くなって「そ、そうか」と言った。

近くの商店街で買い物をすると、ホテルに戻った。

「ねえ、着替える前にお風呂に入ろうよ」

「うん」

「ねえ、一緒に入りゅ？」

「ええっ!？」

「くすくす、うそ」

「お……お前、緊張感ないなあ」

「わざとなくそうしてるのよ」

「うそつけ」

シャワーを浴び、ご飯を食べる。

「ねえ、まだ1時間以上あるよ。いちゃいちゃしようよ」

「え……あ、ああ」

それからベッドに入ってしばらくキスしたり抱き合ったりしていた。

ああ……安らぐ……安らぐわ。蛍さんが見てたら、私、呪い殺されそう……。

静はなんていうかな。多分、特に気にしないだろうな。紫苑も。レインが一番驚くだらうな。

「ねえ、また……する？」

「え、いや。それはいいよ」

わりとキッパリ断ってきた。

「だって、痛かったろ」

「でも、二回目は大丈夫かも」

「だとしても、しばらくは止めた方がいいって。傷も治ってないと思うし」

「やさしいのね。でも、もしかしたら今日死んじゃうかもよ」

「もしそうなっても、一度はしたんだから、思い出はもうあるじゃん」

あら、意外と女の子みたいなことを……。純粹ねえ。私のほうが年下なのに。

「ねえ、ほんとにいいの？本当はしたいのに我慢してない？後悔するかもよ」

「大丈夫だって。それより、そろそろ行こうぜ」

「……うん」

私は少し寂しそうに頷いた。私の王子様はどっちかというと、淡泊な人らしい……。

これってアルバザード人的にはとても不幸なことなんだけど……どうしよう。

私は最初は痛くてもう二度とって思ったけど、慣れれば痛くなくなるのではと思うようになった。

別に体がつながることは求めてない。それによって心がつながった気になれるから、痛くてもしたいと思うのだ。安心材料なのだ。

でも、彼にその気はないらしい。私は小さくため息を吐いてベッドを出た。

・ 祇園

2022年7月28日 木曜日

京都府京都市東山区祇園町南側

祇園は歓楽街で、昔はとても有名だったそう。

ただ、私はそれがどのくらい昔で、どのくらい有名だったか知らない。

祇園の商店街を歩き、花見小路に向かう。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0317.JPG>

辺りにはタクシーが並んでる。どうせ団子状態で動けないのに。でも、生活がかかっているので必死なのだろう。

「左のほうには何があるのかな」

「さあ……祇園の北ってことか？」

「北……かあ」

私は首を動かす。

「この辺りはまだ車が通れているようね」

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0318.JPG>

だがそれもいつまで持つか。ここで最後の結界が崩れればすべて終わりだ。ニューワイズエンドが起きてしまう。

「ここだな、花見小路」

勇太君が石の看板を指さす。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0320.JPG>

「わあ、きれいっ！」

小路の中に入ると、きれいな電灯が立っていた。なんて幻想的な。

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0322.JPG>

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0326.JPG>

<http://cid-dd6eff55a81cbf67.skydrive.live.com/self.aspx/arka/PICT0327.JPG>

(※今回の写真、ロケハンしたものではありません。あしからず。)

その電灯の影に、夕月は立っていた。

「やあ、来たね」

闇に浮かぶ夕月の姿は悔しいほど美しかった。

だが今の私には勇太君しか見えない。



「琥珀はどこ？」

私の問いに、夕月は静かに顎をくいとやる。

はっとして後ろを振り向くと、そこには静がいた。

「静っ!？」

いやちがう!

あれが神崎琥珀なのだ。

どう見ても静が悪ふざけをしているようにしか見えない。

メガネをかけて、髪を長くして、袴を履いている。そういう格好をした静にしか見えない。

「神崎……琥珀ね？」

「お前が……」明らかに静の声「リディアか」

「……は、はい」

威圧感に圧倒され、私は素直に頷いた。

勇太君は無言で静を見ている。何を考えているのか、私には分からない。

そして琥珀の横から、髪を伸ばした着物姿の紫苑が出てきた。

若い、可愛い。誰よこれ。

それは明らかに紫苑よりも若々しい、少女のような人だった。

これが……夢幻?設定上、彼女は皇女ルキテファウスヴィルテスの欠片。人間じゃない。年の取り方が違うようだ。

「あなたが……夢幻さん？」

夢幻さんはくすくすと微笑んだ。

「お前が……勇太か。初めてだな」

「……」

「なるほど。その沈黙がお前が数日間、あるいは16年間考え続けた答えか」

琥珀は静かに呟いた。勇太君は何も言わなかった。

「あの……琥珀さん、勇太君と私がここに来た理由を……知っていますか」

「ああ、ニューワイズエンドを止めるために」

「どうして……ニューワイズエンドを起こそうとするんですか。そんなに悪人を滅ぼしたいんですか。」

でも見てください。あなたの起こした揺らぎのせいで、関係ない人が巻き込まれてるんです。蛍さんも！」

「えっ……」

琥珀は眉を上げる。神崎琥珀といっても 2008 年までの水月静と融合しているので、蛍さんを愛していた記憶があるのだ。

「蛍が……。死んだのか？」

「いいえ。事故にあって昏睡中です」

「そうか……」

どことなくほっとした顔の琥珀さん。勇太君の表情が強張る。

「ねえ、こんなことになってるんですよ。止めましょうよ、ニューワイズエンド！」

「そういうわけにはいかんな。お前はエンドの目的を履き違えている。

ニューワイズという団体はかつて世界中にあった。俺はその日本支部のリーダーになったに過ぎん。

悪人の排他など、活動の口実でしかない。各国のニューワイズとの足並みをそろえるだけの理由に過ぎん。

もっとも、俺がニューワイズであることに変わりはないから、結界を壊すことでお前らのいう揺らぎが起こるのは確かだがな」

「じゃあ……なんのために」

琥珀さんは夢幻さんを抱きしめる。勇太君が目を少し大きくする。

「愛する女のためだ。そして……」

夕月が琥珀さんの横にいき、膝を曲げて頭を撫でてもらう。

「可愛い我が子のためだ」

「え……それってどういう……」

「リディア、お前は夢幻の正体を知っているか」

「紫苑……でしょ」

「そうだ。この架空世界を作り出した神、夢の世界を夢見る少女、紫苑だ。

そして夢幻は皇女ルキテファウスヴィルテスの欠片でもある。

かつて紫苑がこの世界を造り、俺は中 3 の時代に戻った。

俺はそこで夢幻に出会う。それからは幸せに暮らしていた。

ところが夢幻は皇女の欠片だ。予定通りユーテルが現れ、夢幻を殺した」

「果ての君……セイネルスが？」

「そうだ。だが俺は夢幻を諦められなかった。夢幻の体は残ったが、欠片は奪われ、命も取られた。

俺は夢幻の亡骸を見て誓ったんだ。結界を破壊し、霊力を集め、夢幻に命を吹き込もうと」

「命を……。そうか、欠片を失ってセイネルスに狙われなくなった夢幻さんを生き返せば、もう魔界に狙われる心配もない」

「その通り。だから俺はニューワイズになり、結界を破壊した」

花見小路から人氣が消える。美しい電灯だけが通りを彩る。

「じゃあ……。本当の目的は悪人の排他なんかではなく、欠片と命を失った夢幻さんに命だけ戻してあげること……」

なんてことだ。私は不覚にも琥珀さんに同情してしまった。

もし私が彼の立場だったら、きっと私も同じことをしていたに違いない。たとえ何億人を殺すことになろうとも。

「だけど……。だからって……。ニューワイズエンドを完遂させるわけにはいかない」

「ちょっと待ってよ」

不機嫌そうな声で勇太君が呟く。誰にともなく喋り出す。

「なんで夕月、お前は俺らをここに呼んだんだ。勝手に結界を壊してエンディングにすればいいだろ。」

それに、夢幻って人を生き返すのが目的っていうのもワケわかんないし。もう夢幻って人は生き返ってるじゃんか」

「ほう」琥珀さんが微笑む「お前、中々筋が良いな」

「……」

「お前たちは俺を止めるためにはるばる京都までやってきたわけだが、俺からすれば飛んで火に入る夏の虫だ」

「なんですって……？」

「俺は98年にウォンバスとペルソナを下した。そして夢幻を生き返すのに必要な靈力は確保した。」

元々俺にとって悪人を滅ぼすだなんてことは大して興味がない。俺が望むのは夢幻との幸せな生活だ。

ところがな、生き返った夢幻には魂がなかったんだよ」

寂しそうに語る琥珀さん。恐らく、livroは戻ったがselesは戻らなかったということだろう。

「こうしてっ！」

突然琥珀さんは夢幻の左胸をわしづかみにする。

しかし夢幻さんはくすくす笑って琥珀を見上げるだけだ。

「触れても夢幻は何も言わない！」

琥珀さんの声が感情的になる。もしかして……。泣いているのか。

「確かに生き返して体に触れられるようにはなった。当初はそれだけでも飛び上がるほど喜んだ」

「……」

「だが夢幻は心を持ってない！俺のことを呼ばない。愛してくれない！俺が抱こうがキスをしようが、夢幻は少しも返事をしないんだ！」

琥珀さんの動きが止まる。

はぁっと大きなため息を吐く。

「……夢幻は人形だ……抱くことのできる……人形だ。子供も産める。この夕月のように」

夕月が小石を拾い、ぼんぼんと手の上で投げては掴む。

「だけど、僕も欠陥があつてね。心ない夢幻の子供として生まれたせいで、心が半分しかないんだ。髪もこの通り白いままさ」

「そう……だったの」

「夕月が生まれ……欠陥に気づき……俺は息子にすまない気持ちで一杯になった。

欠陥品として産んだことも！笑いかけない、抱かない、愛情を注がない母を持たせたことも！」

琥珀さんの声が私の胸に突き刺さる。まるで私の前で静が啼いているかのようだ。

静……あなたは……。

「だから俺は夢幻に心を与え、夕月の欠陥を取り除くことを決意した。

それにはまた結界の力が必要だった。

しかしニューワイズで結界の場所を予言していたのは夢幻だ。俺には結界の場所が分からない」

「夢幻さん？でも、霊司や皇と戦っていたときは、既に夢幻さんはいなかったんでしょう？」

「夢幻は死んだ後、俺の中で生きていた。目を閉じれば俺は夢幻に会うことができた。

そのころはまだ夢幻も心を持っていた。だが、復活を境に、彼女は俺の頭から消えてしまったんだ」

「その代わりに、人形になった夢幻さんを手に入れた……と」

心か体か……その両方は得られない、ということか。

「俺にはもはや結界のありかが分からない。だから自分の足でひたすら全国を旅して探した。

だがな、夕月が14歳になって霊力に覚醒したんだよ。そして夢幻譲りの結界探知を開花させた。

それからというものは破竹の勢いで残りの結界を破壊することができた」

「なるほど……それでニューワイズの勝利から現在まで24年もかかったのね。そして結界を壊せば、夢幻さんは心を取り戻す、と」

「そうだ」

「そうしたら夕月はどうなるの？彼の半分の心はどうなるの？」

すっと夕月が私に歩み寄る。

「僕の場合は夢幻と違って元々半分しか心がなかった。取り返せばいいというものではないのだよ」

「じゃあ……」

「そこで、なぜ君たちが招かれたのかという問題に行き当たるわけだ、勇太」

「えっ……？」

勇太君は訳が分からないという様子。

「勇太。君は静と蛍の子だ。そして僕は静と夢幻の子だ。

同時に、君はこの世界とウォンバスの世界を繋ぐ楔でもある。

神崎夕月はウォンバスの世界にしか存在しない。村上勇太は元の世界にしか存在しない。

今、君と僕は2つの世界の架け橋になっているんだ。

この世界が完全にひとつになるためには、僕らが融合すればいいんだよ」

「ゆ、融合……だと？」

「そう。そして僕は君の魂を譲り受けて、元々持っていなかった半分の心を補完する」

「なっ！」

私は思わず声をあげた。

「ちょ、ちょっと待ってよ！そしたら勇太君はどうなっちゃうわけ！？」

「僕の中で永遠に生きる。ただ、彼にその自覚はないだろうが」

「つまりアンタに食われるってことでしょ！それって死ねって言ってるってことじゃない！」

勇太君はびくっとし、硬直する。私はじろっと琥珀さんを見る。

「琥珀さん、いえ、静。琥珀さんと融合した静に問うわ。勇太君はあなたにとって実の息子でしょう。

夕月も息子かもしれないけど、そのために勇太君を犠牲にするようなことはしないわよね？」

だが、琥珀さんは「ふっ」と鼻で笑った。

「できの悪い娘だ。勇太をここに来させるように仕向けたのはそもそも俺だ」

「——え？」

「もうひとつの世界の俺を装って、春夫に手紙を出したのは俺だ」

「そ……んな」

「お前に勇太を迎えに行かせ、勇太を連れてこさせる。そして最後の結界の下で、勇太と夕月の融合を行う。それが俺の目的だ」

琥珀さん……琥珀はきっぱりと言い放った。

勇太君は下を向いた。下を向いて……何も言わなかった。

「リディア、こっちに来い。お前は静を愛しているのだろう？俺たちは家族だ」

私は悩んだが、相手は静だ。どんなになっても静なんだ……。

私は素直に頷くと、琥珀に歩み寄った。

勇太君は「行くなよ……」と泣きそうな声で言うが、私は「ごめんね」と呟いた。

「リディア……行くなよ」

勇太君は消え入りそうな声ですがった。

「ごめん……あんなのでも、お父さんだから」

「え……？」

顔を上げる勇太君。

「騙してごめん。私……さらに別の世界から来たの。私のお父さんは水月静。あなたは私のお兄ちゃんよ」

「な……ん……」

「お母さんの名前は初月紫苑。夢幻さんよ。私と夕月は双子の兄弟なの」

「うそ……だろ」

「ごめん。あんなのでも、お父さんだから……」

私は琥珀にすり寄る。

「良い子だ、リディア」

頭を撫でてくれる。まるで私の知ってる静のようだ。

「こっちの静は私を作ってないのよね。それでもちゃんと愛してくれる？」

「ああ、もちろんだ。お前は俺の娘だよ」

私はにこりと笑うと、琥珀の腹部にナイフを突き刺した。

「——なっ!？」

アルバザードにいたとき、靴下にナイフを忍ばせていた。

まさか自分の父親を刺すのに使うとは思わなかった。

「リ……リディア……？」

琥珀はお腹を押さえて後ろに下がる。

「あんたなんか……お父さんじゃないよ」

「なんだと……？」

「今のは勇太君の代わりよ。彼が受けた傷の復讐。

あなた、いったい自分の息子を何だと思ってるの……。

ふたりの息子のうち、愛したほうのために、愛さなかったほうを犠牲にするの。

そんなの親じゃないよ！」

「お……お前に何が分かる……子供のお前に……。

俺が……勇太に会いたくなかったと思うか……？

蛍が……あの女が俺を捨てて……出て行ったんだ。

俺の意思なんて……何一つ尊重されなかった。

国も、自治体も、裁判所も、この社会そのものが、女のあいつに味方をした！

俺は勇太の名の正確な読み方さえ知らない。どう生まれ、どう泣いたのか。戸籍でしか知らないからな」

「……」

「子供のお前にその気持ちが分かるか。俺は……この手で抱いたことのある夕月だけを……愛している」

「……蛍さんとのことは、どっちが悪いのか分からない」

「悪い……か。なら多分……それは俺だ。だが、蛍にも問題があったし、何より出て行った後が問題だった。あんなんじゃない……納得できるものか……。

俺は……追い続けるぞ。24年経っても……忘れるものか」

琥珀は夢幻さんの腕を掴む。

血を流す琥珀を見た夢幻さんの目に光が宿る。

「はくり……？」

人形のような夢幻さんに表情が戻る。

「琥珀……？琥珀……どうしたの！？いや……どうしてこんな傷……」

「む……夢幻？お前……どうして」

夢幻さんはひざまずいて琥珀に泣きすがる。

「ひどいよ、誰がこんなことを……。私の大切な琥珀……。琥珀……早く……病院に行こう？」

「無理だ。歩く力などない」

「じゃあ救急車を……！」

「夢幻、ダメだ。車は1時間は来れない。道路が壊れてるんだ。壊したのは俺たちなんだよ……」

「え……」

「すまん、夢幻。せっかくお前を取り戻せたのに……」

「いやよ……琥珀。私を置いていかないで……」

「せ……せっかく心を取り戻したお前を抱けなくて、残念だ」

「琥珀……苦しそう……私が助けてあげる」

夢幻さんは白い光をお腹に当てた。

「麻酔をかけたわ。どう？」

「ああ、もう苦しくない」

「よかった……じゃあ、行こ」

夢幻さんは琥珀にキスをする。琥珀は静かに頷く。

夕月が目に涙を浮かべながら、夢幻さんの腰元の小刀を抜いて渡す。

「琥珀、あいしてる」

夢幻さんは琥珀の手に小刀を持たせると、琥珀の手で自分の胸を刺した。

「夢幻……あいたかった。俺、もう……離さないから」

その刃を抜くと、夢幻さんは琥珀の胸を刺した。

とさっと音がして、ふたりは抱き合ったまま死んだ。

私はひとつだけ問うた。声に出して、彼に問うた。

「ねえ静……人生をやり直して、あなたは幸せになれたの？」



・悪魔の仔

夕月は父の胸に刺さった白刃にそっと手を添えた。

そして小さく私の問いに答える。

「幸せだったと思うよ……」

「……」

「お前さえ……」

「え……」

「お前さえ……現れなければ」

夕月は泣いていた。心半分の少年は、赤い目で泣いていた。

「あなた……泣いてるの」

「どうやら……」

嗚咽混じりの夕月。手が震えている。

「どうやら僕は父を愛していたらしい」

「夕月……」

「確かに彼は虐殺をした。実の息子を生け贄にしようとした。身勝手だし、いつもカッコつけてるし、いまだに昔の女を引きずってる。

だけど、欠陥品の僕を……愛してくれた。そして、純粹で、強かった。

そして、母さんを愛してた！

お前の知ってる静がどんな人間か知らない。

だが、僕の知ってる静は、尊敬できる父だった！」

夕月が一瞬にして私の懷に飛び込んでくる。

その刹那、彼は私の頬を殴った。

あまりの痛みで私は動物みたいな声を上げてのけぞった。

夕月はそのまま私の腿を蹴った。

続けざまに肋骨に拳を叩き込む。私の耳の中で、ボキッと骨の折れる音がした。

私は顔をくしゃくしゃにして絶叫を上げる。

倒れ込んだ私の鎖骨に夕月は手刀を振り下ろす。

あまりの威力で、鎖骨の端っこが肩を突き破って突出する。

肩から噴水のように血が噴き上がる。私は肩を押さえながら地面に転がった。

その顔を夕月は容赦なく踏みつぶした。奥歯が何本か折れ、血と一緒に口から吐き出される。

「リディアァ！！」

勇太君が飛びかかる。

勇太君はけっして出遅れたわけじゃない。夕月の攻撃がほんの1,2秒の間に行われたため、対処しきれなかったのだ。

だが、夕月は赤い目を向けると、一瞬にして勇太君の拳を捌き、顔面に強烈な一撃を加えた。鼻が折れ、勇太君は声をあげて倒れる。

その髪を掴むと、お腹を何度も蹴りつける。肋骨が折れたのか、勇太君は激しく血を噴きながら地面を転がる。

「リディア！逃げろ！逃げろおお！」

必死に叫ぶ勇太君。だけど私は一歩も動けなかった。

夕月は勇太君の脚を取ると、柔術を悪用して折った。

勇太君の悲痛な叫びが花見小路に響く。しかし、不思議なことに助けはどこからも来ない。

左脚を折られ、勇太君は脂汗をかく。夕月は右膝を蹴り、皿を割った。

「やめてえ！やめて、夕月！やめてえ！！」

「何が止めてだ、リディア。お前が静を刺したからだろう。お前が僕の父を刺し、母をも奪ったんだろう」

「じゃあ私が死ぬから！私が死ぬから勇太君を助けてあげて！彼は何も悪くないの！」

夕月は私に歩み寄ると、胸ぐらを掴んで起き上がらせた。

「死ぬ必要などないさ。僕は勇太と融合する。そしてお前と契る」

「な……契る？」

「なぜお前を狙っていたのか、分かるか？いくら勇太と融合しようと、僕はしょせん琥珀と夢幻の子。現実の人間じゃないんだ！」

「現実……の」

「対してお前は静と紫苑から生まれた。僕の双子、僕の鏡だ！

架空の僕はお前と契ることで、現実との繋がりを持つ！

そこで初めて僕は現実の存在になれる。お前を食らい、僕が現実になるんだ！」

「それが……あなたの目的……」

「そうだよっ！そのためにお前らをここまで呼んだんだ！

僕は父の意思を継ぐ！僕は完全な心と体を手に入れるんだ！それが父の願いだ！」

私の服の襟を掴むと、夕月は力任せに破った。

上着が脱がされ、シャツを乱暴に引き裂かれる。

水色の模様の入った白のブラジャーに手をかけると、躊躇なく引き裂いた。

路上で胸を晒されたのに、私は痛みと悲しみに抵抗できなかった。

夕月は私の胸が壊れるんじゃないかというくらい強く揉みしだくと、スカートを無理矢理引っ張りおろした。

さっき買ったばかりのお揃いの色のパンティーが露わになる。それをビリッと引き裂く。脛のところまで引き下げられたホックの外れたスカートと、はだけた上着と破れたシャツ。私はもはやそれしか着ていない。

胸も秘部も花見小路の電灯の下に晒されてしまった。

夕月は恨みの籠もった目で——静によく似た目で、泣きながら私の中に指を入れた。

じくっと痛みが広がって、ふたたび血が出てきた。

勇太君は地面を這って私を助けようとするが、両脚をやられて動けない。

「リディア、お前のすべてを奪ってやる」

実の双子とは思えぬ形相で、夕月は乱暴に私の中に入ってきた。だが、私はもはや痛みを感じない。

「お前と契れば、僕は現実世界との繋がりを得られる！繋がりがなんだか、分かるか！？」

夕月は私の中で乱暴に動くと、私の肺がつぶれるんじゃないかというほど強く抱きしめた。

私は壊れた人形のようにぶらんと腕を垂らしていたが、肺があまりに苦しいので、「けふっ」と血の息を漏らした。

夕月の速度がゆっくりになる。私の頬を強く殴ると、「答えろ」と言った。

「答えろ、リディア。僕はお前のことを愛していない。これっぽっちも愛していない。

その男に犯された気分を答えろ。生まれてくる子供になんて説明するつもりなのか、答えろ」

「子供……」

私は呆然と呟いた。

「子供……そうだ、僕の子供だ。リディア、お前と僕の子供が、架空と現実の世界の架け橋なんだ。

分かるか、答えが！ふたつの世界を繋ぎ、僕が現実の存在になるためには、架け橋となる子を成せばいいんだ！」

なるほど、そういうことか。それで夕月は最初から私の体を狙っていたのね。妹だというのにあんなにも熱心に。どうりで……。

夕月は昂揚した顔で立ち上がると、祇園花見小路の結界を破壊した。

「ははは、これですべての結界が崩れたぞ！僕は現実の存在になるんだ！

そして心の欠片を補完する。ルキテファウスヴィルテスのようなっ！」

悔しくて涙を流す勇太君を掴むと、崩れていく結界の天井に向かって差し出す。

「さあ！僕とひとつになるんだ、勇太！

なあに、ひとつになれば愛するリディアを犯された悔しさも消えるだろう。

何せリディアの処女を奪ったのは君ということになるのだからな！」

しかし、結界はただ音を立てて崩れ去っただけだった。

何も……起こらない。

「な……なんだと……？なぜだ……なぜ、何も起こらない！？」

夕月は天が落ちてくるのではと心配する愚か者のように、ずっと空を見上げていた。

……だから、後ろに迫った私に、気付かなかった。

肉を抉る嫌な感触とともに、私は夕月の背中を刺した。彼の父と母の命を奪った白刃を以て。

「な……リディア？」

渾身の力で私は刃をこねくり回した。

「許さない……。よくも勇太君の前で私を……」

「や……やめろ……僕は……死ぬわけにはいかない。静の意思を……継いで……現実にならな……」

夕月が刃物を私から奪う。そして私の頭上に振りかざす。

そのとき、ガァンと音がして、夕月の胸に穴が開いた。

勇太君だった。上着の中から小銃を取りだし、夕月に放ったのだ。

「どう……して、そんなものを……」

それはアルシェの小銃だった。そして勇太君の腕前は、アルシェのそれだった。

「ばか……な」

夕月はうわごとのように力なく眩くと、地面に倒れた。

夕月はヒューヒューと浅く息をし、血を吐く。

「ど……どうして、結界を壊したのに……何も起きなかったんだ」

「私がああなたの子供を身ごもる可能性がなかったからよ」

「な……ぜ。僕は今間違いなくお前の中に……。それに……血はついてたものの、あれは生理ではなく破瓜の血だった。なぜ……」

「まだ分からない？ どうして私が悪魔の仔を身ごもれないか」

見下すように笑うと、夕月はハッとして勇太君を見た。

「馬鹿な……。お前はもう勇太の子を妊娠していたというのか」

「残念だったわね」

夕月の息が浅くなる。目がうつろだ。

「僕は……なんのために……生きていたんだろう」

「あなたに同情する点があるわ。琥珀にも。夢幻さんにも。みんな……不幸すぎた。

私には分からない。どうして……人生をやりなおしたのに、こんな不幸になってしまったのか」

「それは……恐らく僕が考えるに……それが水月静という人間の限界だったからだ」

「限界？」

「ああ……蟻は……何度生まれ変わっても……蟻である以上は……大きくなれない」

「……蟻」

「静は……僕も……蟻だ……。運命に抗った……小さな……蟻だ。女に捨てられ、女に拾われ、女を犯し、女に刺され……いつも……越えられない。何度死んでも……越えられない」

「なら……どうして静は……幸せだと思わなかったのかな。今あるもので、幸せだと思えばよかったのに……」

「はは、それが——」

血を噴く夕月。

「——このシュミレーション世界の答えだな。お前は生きて帰って、自分の父に告げればいい。

お父さんの実験は失敗だったよ、と。

人生など……やり直しても……うまくいかないのだ。今を……生きて……手に入れたものだけを……素直に喜んだ人間が……勝ちなんだ」

「勝ち……か」

「ああ、勝ちだ。人生は……幸せゲームなんだよ」

「ええ？」

「幸せになった人間が勝ちなんだ。がらくたで喜べる人間は、この世に歓迎された人間だ」

「……」

「僕はどうやら違ったようだ。こんな説教、死ぬ前にたれてどうする。昔の自分に教えてやりたかったな」

「夕月……ごめんね。麻酔くらいかけてあげられればよかったのに、私、魔法の杖を置いてきてしまったの。ねえ、苦しい？」

「苦しい……。心が……。半分しかない僕の心なのに……きちんと、ひとつ分、苦しいんだ」

「夕月……」

彼は最期の方で私にこっと微笑んで見せた。

「これ……不公平、だよな？」

・川のほとり

夕月が目を閉じ、私はゆっくり離れた。

勇太君を起こす。さんざん夕月に暴力を受け、重篤な状況になっている。

もし肋骨が心臓に刺さっていたら大変なことになる。はやく救急車を呼ばないと。

ケータイを探しただしたとき、急に目の前が光った。

そしてそこから悪魔メルティアが現れた。

⑥ >el(c-....⑥

この……間違いだらけの仲介人が。

⑥ μclc-, -c (c 7-uc) VclJ⑥

⑥ V...VclJδ ⑥

⑥ -λ ㄥ-λ(c- (c -ca >-λ ㄥcaλ 1-l-(ca <c-, 0cλZ-(c <c- Jecλ,,

4-λ (c 1-ㄥ-(ca) cl) Je 7cλ 7o)δ ⑥

そ、そういえば……。

だけど、こんな危険な内容までは望んでいなかったわ！

⑥ J--, (c -J) l-J 7leJ - μJccl Jecλ >-λ -λ o7c V-λ ca - 1--J,,

J- cl, -λ 7e- <1 (ccJ c⑥

メルティアが手をかざすと、私たちの傷が綺麗に消えた。折れた歯も元に戻った。

今まで体中がジンジン燃えるようだったのに、嘘みたいだ。

勇太君も不思議な顔をしている。あれ、おかしいな、昨日銃弾に撃たれたのを治してあげたのに、回復魔法のこと覚えてないのか。

「リディア……」

勇太君が私を見る。

⑥ 9eλ(c-λ(c, >el(c-, >ca λca ㄥ-> (ca ca ㄥca ㄥ-λ(c λca Je 7cl(c - <c- ㄥ-λca, (e(c <c(c >el

- leλ-⑥

⑥ ㄥca⑥

メルティアは光の中に消えていった。

「歩こ……勇太君」

私は勇太君の手を取ると、綺麗な花見小路の電灯の光に包まれながら、祇園を去った。

左に曲がって四条へ戻る。河原町の手前でまた左に曲がり、小さな路地を歩く。

私たちは、細い細い川のほとりを歩いた。

川の流れを見ながら、私は立ち止まる。

「私……夕月にひどいことされちゃった」

「……ごめん、助けられなくて。俺……リディアの彼氏の資格……ない」

死にそうな声だった。

「えっ……勇太君、そんなこと考えてたの？私、逆だよ。私こそ、あんなことされて、もう勇太君に顔向けできない。捨てられても当然だと思った」

「なに……いつてんだよ。そんなこと……俺は全然……。なんで自分が助けてやれなかったのかってことで頭がいっぱいで……」

「ねえ、本当に私のこと、汚れた女だって思わないでくれる？」

「もちろんだ。あんなの……カウントに入らない。忘れよう」

「う……うれしい、私たち、もうダメかと思ったの！」

「ダメなもんかよ。だって……お前……お腹にいるんだろ……子供」

「あ……そ、そうだったね。多分、そうだと思う。検査したわけじゃないけど、夕月の計画が失敗した以上は、そういうことだと思う」

「そう……だよな。そう……に決まってる。だって……あれはもともと子供作るための行為だし……。したらそうなるってことくらい、分かった……」

「うん……また、迷惑かけちゃったね」

「迷惑なんかじゃない！俺、学校やめて働くから！」

「いいよ、そんなことしないで。学校はきちんと出て。大学も。その後でお父さんの会社を紹介してあげる。

3代に渡ってコネ入社だから苦勞するかもしれないけど、私と子供のことさえ愛してくれれば、将来を約束するわ」

「え……コ、コネ？」

あたふたする勇太君。

「で、でもさ、それってお前の世界の話だよな。お前の父親って……静なんだろ」

「それなんだけどね、勇太君。私たち、これからどうしようか」

「これからって……まさかお前、帰るつもりなのか？俺が行くのは無理だぞ。そっちの世界にも俺がいるんだろう？勇太が二人もいたらおかしいだろう」

「そう……ね。かといって私はこの世界じゃ戸籍さえない。存在が元々ないから」

「だから、俺が学校止めて養うって！俺、頑張るから！」

「うん……嬉しい」

メルティアが川の上に現れる。この人、ホントに日本語分からないんだろうか。タイミングが良すぎるような……。

Ⓜcℓc-, JσΛ -ΛJ Jσℓ ℓccℓⓄ

Ⓞz>>...>elℓc-, ℓcΛJ ΛσΛ Jσℓ ℓcΛ <c- ℓ-Λσ,, ℓσ>, JεJℓ ℓcσΛ Jc< -ℓa, ℓeℓⓄ

⑥h3>...-Λ -J J3J3 Vcl Cc -J,, Ca eC YeC 3Λ ucCe Λ-6

メルティアは光の中にいったん消えると、すぐ戻ってきた。多分彼の中では数分が流れているはずだ。

そして紫苑たちが光の中から出てくる。

「リディア……」

「紫苑……なのね？」

「あなた……随分顔つきが変わったわね。頬、こけてない？瘦せた？」

「痩せるよお、あれだけ自転車漕いだんだから」

「自転車？」

「え……そうか、紫苑は何も知らないのよね。私たち、ディアセルではぐれたっきりだもんね」

紫苑たちが怪訝な顔をする。

「どういうこと、リディア。あなた、勇太君と練馬に行ったんでしょ？」

「練馬？なにそれ」

紫苑はきょろきょろする。

「ねえ先生、ここどこですか。練馬じゃないみたいだけど」

「……京都じゃないか？四条の近く。何度か来たことある」

流石は静、道マスター。

紫苑「京都一っ！？」

レイン「いったい、何がどうなってるの……」

それはこっちの台詞だ。

「リディア、お前俺の手紙読まなかったのか？」

俺たち、アルバザードをかけずり回って魔法の水晶と手紙を見つけ、お前にどうにか手紙を送ったんだ。危険を知らせるために」

「手紙？読んだよ。春夫おじさん宛でしょ。でもそれ、こっちの静……琥珀の畏だったって」

「畏あ？どういうことだ」

「先生の手紙を琥珀がすり替えちゃったんじゃないの？」

「そういうことか」静は額を押さえる「じゃあ、俺の手紙は無駄だったわけだ」

「何て書いてあったの？」

「春夫のところにはワープするだろうから、ウォンバスの話を聞いて、理解したら勇太を連れて練馬にいけって」



勇太という言葉にぴくっと勇太君が反応する。

静と勇太君の目が合う。

「あ……そういえば、挨拶がまだだったね。……いや、こっちの世界の君に言うのもなんだけど、はじめまして。娘が世話になりました」

「……………いえ」

「正直言って、いまさら父親面するつもりはないから。そういう意味ではふつうのよそのおじさんとして見てくれてかまわない。もっとも、君が父親面してほしいというなら話は別だが。いずれにせよ、君の意思を尊重させてもらえるかな」

「……ええ。そのほうが助かります」

静かな嵐のようだ。気が気じゃない。

「ねえ静、なんで練馬？」

「そこにペルソナのアジトがあったんだ。ペルソナも相当結界を破っていたわけだろう？

アジトには那羅奈國の秘密の部屋がある。ペルソナの人間しかしらない場所だ。

そこにペルソナの溜め込んだ霊力の泉がある。それを利用して、ニューワイズに対抗しろ……そう手紙に書いたんだがな」

「ええーっ！？それじゃあ、私が京都に行くって話は！？」

「そりゃ……琥珀の罫だろうな」

「私、ずっと道中夕月に襲われたんだよっ、琥珀と夢幻の息子の！」

「そうか、俺はそんなキャラ作らなかつたな。新顔だな。なので俺にもそれは予想できなかった。

まあ、夕月ってのが丸腰のお前たちを殺さなかつたところを見ても、明らかに罫だと思うがな」

「そ、そういえば……」

私は口を押さえた。

・ぐるぐる回る魔法の杖

「じゃあ、私たちはハナから京都に行く必要がなかったってことお!？」

がっくりだ。あの苦労はいったいなんだっただろう。

「最初は俺たちも何が起ってるのか分からなかったんだがな。

手紙を送る寸前に過去の設定を色々思い出したんだよ。

ただ、ミロク革命のほうは何も手伝ってやれなかった」

紫苑「メルティアに聞いたわ。レジスタンスにいたんだって？アルシェが調べてくれたわ」

「そうなの。アルシェって男の子に助けられて、お城のサリュを使って一度地球に戻ったんだけど、またアトラスに戻ったの。

お城に忍び込んだ罪で牢屋に入れられたの。その後アルヴェスクさんって人に助けってもらって、レジスタンスに……。

ねえ、アルヴェスクさんたちは歴史上、どうなったの!？私、アデュで別れたっきりのよ!」

レインは渋い顔で一冊の本を出す。それは歴史の本だった。

「リディア、そのレジスタンスなんだけど、メンバーを見てくれる？」

そこにはアルシェと私の名前がなかった。

「ふたりの名前がないのよ、ここ」

「そりゃそうよ。私たちは正規のメンバーじゃなかったんだから」

「違うの。そういうことじゃない。リディアは異世界人で、元々歴史にいなかった」

「じゃあアルシェは？」

「……同じなのよ」

「え……？」

レインは苦い顔で言った。

「あなた……どうして自分がメル 320 年に飛ばされたと思う？」

時空移動によって生じた歴史の歪みを食い止めるためよ」

「歪み……？テーマスみたいなの？」

「そう。そして今回のケースでは、紫苑と静のせいで生まれてしまった架空世界のせいで、魔法の発生元である霊界も歪んでしまった」

「霊界が……」

「そして、架空世界のキーパーソンであった一人の人物が、歪みとしてアトラスにも現れた」

「まさか……」

「それがアルシェよ。そしてあなたの役目はミロクを殺すことじゃない。レジスタンスに荷担することでもない。この少年アルシェをアトラスから抹殺することだったの」

「——！」

私は言葉を失った。

川がゆるやかに流れる。

「リディア。アルシェはどうなったの？」

「私……アルヴェスクさんたちとはぐれて……アルシェとアシェルフィの家に逃げたの。」

そこで警備員にアルシェが撃たれて……。私はアルシェを魔法で治したんだけど」

紫苑「魔法？」

「ソーマの森のアジトに倉庫があって、私はじめそこで在庫管理とかしてたの。倉庫で魔法の杖を見つけたのよ」

紫苑「その杖でアルシェを回復したのね」

「そう」

「ちょっと待て。お前、その杖はどうしたんだ？」

「アシェルフィの……アシェットの家に置いてきちゃった」

紫苑「まさか……それってリディア＝ルティアの部屋じゃない？」

「そうだけど……なんで分かったの？」

すると紫苑と静は目を大きく開けて、お互いを見て頷いた。

「まあそれはいい。それで、お前はアルシェを治したのか？」

「うん。でも……そのころにはアルシェはもう勇太君になってたの。」

今思えばなるほどよね。彼らは同一人物だったんだから」

レイン「なるほどね……。気の毒だけど、リディア、あなたの魔法は多分間に合ってなかったよ」

「え……」

「アルシェは……そのとき既に死んでいたと思う。だから、勇太君に入れ替わった。」

そしてアルシェが死んだからこそ世界の歪みが修整された。私が思うに……あなた恐らくその後地球に戻ったんじゃないの？」

「そうっ、そうなの。なぜか三重の神社にいたの！」

そういうことだったのか。謎が解けた。

それにしてもアルシェは……助からなかったのか。

私は唇を嚙んだ。

「それで、アルヴェスクさんたちはアデュの後、どうなったの？」

レイン「アデュ戦線の後……彼が協力していたネルメス隊は壊滅したの。アルヴェスク班はアデュで孤立したわ。そして最期はアルソンに……」

「……そんな。……そんなぁ……」

私はしゃがみこんで泣き出した。

「そんなのひどいよお……。みんな……カルドさんも、ヴェイレンさんも、アルベさんも……私たちのこと可愛がってくれて……良い人だったのに……どうして死んじゃったの……」

紫苑「……そういう時代だったのよ。私たちが知っているアルバザードとは違うのよ」

「ミロクがっ！」

私は顔を赤くして立ち上がった。

「ミロク＝ユティアが悪いんだ！あんなのが出てきたらアルバザードはおかしくなっちゃったんだ！」

真っ赤になって私は叫んだ。

レイン「違うよ、リディア。ミロク＝ユティアがいたから、世の中は良くなったの。彼は自分を悪魔に変えて、世界を救ったの。血で、人を救ったのよ」

「嘘だ、嘘だ、ウソだッ！！ミロク＝ユティアは虐殺者だ！あんなやつが作った世の中は間違っているッ！レインが言ってるのは勝てば官軍にすぎない！」

「リディア……あなた、大人になったね。そうだね。もしかしたらミロク様が間違っていたのかもしれない。

だけど、私は自分の世界が平和で、秩序だっていることに、誇りを持っているよ。

かつてリディア＝ルティアとセレン＝アルバザードは、確かに悪魔を追い払った。だけど、彼らは世界を平定しなかった。彼らの治世では今のアルバザードほど豊かで安全にはならなかった。ミロク様はアルバザードの黒の歴史を初めて白くしたの。

でも、リディア、私はあなたの考えを受け入れるよ……あなたの考えとして。これからは思想上の敵同士ね」

私はしばらくしゃがみこんで、泣いた。

「まあ、何はともあれ無事でよかった。これでお前も元の世界に無事戻れる」

「それなんだけど……私、帰りたくない」

「なんだって？」

私は勇太君の腕にしがみつく。

「私……彼のことが好きになっちゃったの」

「は……あ？」

呆然とする3人。

「いや……でもお前、勇太はれっきとしたお前の兄だぞ。意味、分かってるのか？」

「でも、一緒に暮らしたこともないし、兄っていったって静としか繋がってない。半分は他人よ。蛍さんの血は私には流れてないし」

「そりゃそうだけど……なあ、紫苑、どうなんだ、こういうの」

「腹違いでも日本では同じ兄ですからね。でも、生物的にいえばリディアのいうとおり、ふつうの兄の半分しか兄弟でないと思います」

「でも……問題あるだろう。それにお前たち、知り合ったばかりじゃないか」

「もう私たち、両思いよ。付き合ってるの」

勇太君はこくこくと頷く。

静は困った顔をする。

「いや、別にお前に彼氏ができるのはいいけどさ、異世界人な上に兄っていうのはまずいだろう……」

「でも、好きになっちゃったらしょうがないじゃない」

「しょうがないけどさ……でも、ほんとにこないだ会ったばかりだろ？そんな長続きするとは思えないけど。まあ、長続きすりゃいいけどさ……。

え……勇太はそれでいいの？君は了解してるの？」

「はい」

「そ、そうか……。はあ……そうか……。あの、君も妹だってことは分かってるんだよね」

「はい」

「うん……。はあ。じゃあ聞くけど、ウチの猫猿のどこがよかったの？」

「え……」

勇太君がたじろぐ。

「え、じゃないでしょ。ウチの子の好きなところが言えないのに付き合いたいなの？」

「いえ……その……可愛い……ところとか」

ほう、まず一番はそこか。私は耳をそばだてた。

「あと……優しいところあるし……料理もうまいし……俺のこと好きって言ってくれます」

「ふむ。まあ、最後のが一番かもなあ。で、リディアは？」

「え、私？そうね、純粹なところ。あ、でも最初に好きになったのは静に似てたからよ」

「そりゃそうだろ、彼は事実俺の息子なんだから」

う……機嫌を取ろうとしたのに、やぶへびだった orz

「それに、圧倒的に強い夕月に立ち向かってくれたの。命がけで私を守ってくれたのよ。勇気があるの」

「そうか……まあ、俺が紫苑とあんなったときも、同じような理由だった気がする」

紫苑はやけに嬉しそうに静の腕を取る。

「まあ、そこまでいうなら仕方ないとして。でもお前はこっちの世界に残るとしたら、戸籍もないのにどう暮らすんだ？」

「僕が……働きます」

「君はまだ高1だろう。それに、まだ働く必要はないよ」

「いや……あのね、静。働く必要があるのよ、私を養うために」

「お前に戸籍がないからか」

「それもそうなんだけど……その」

もじもじする私。いち早く察したのは紫苑だった。

「ちょ……あなた、まさか……」

それでようやく静も気付く。が、ショックは静のほうが圧倒的に大きかったようだ。

「お……おま」

静が私に手を伸ばそうとした瞬間、レインがつかつかと歩み寄ってきた。

「レイン？」

見上げる私の頬を、レインは思い切り打った。

パンという音が響き、静と紫苑は目を丸くしてレインを見つめた。私もだ。

レ……レインに……ぶたれた。生まれてから一度もぶたれたことがなかったのに……。

「レイン……」

じわっと涙が出てくる。この一撃はきつい。

「……あなたをアルバザード人に育てようとした私の苦労は、空回りだったみたいね」

「レイン……怒ってるの？」

「怒ってるし、呆れたよ。会ってから、3年どころか3週間も経ってないでしょ。

セックスするだけでも許せないのに、14歳で子供のあなたが、赤ちゃん作ってどうするの」

「だって……アシェルフィでもう助からないって思ったから……最後に思い出を」

「なら、処女のまま死になさい」

レインは真剣な顔で言い放った。金色の髪が怒りでふわっと舞う。

「そんな……。私だって辛かったのよ……お母さん」

ぷるぷるとレインは拳を振るわせた。目には涙があふれている。

「もう……お母さんて……呼ばないで。私……あなたのこと……許せない」

その場にしゃがみこんで、レインは泣き出してしまった。

そんなにショックだったんだ。

私は胸が引き裂かれる思いがした。

・ 餓鬼

静はレインの怒りようを見て、自分の怒りなど引っ込んでしまったようだ。

「勇太……こんなときだけ父親面してすまんが、嫌ならひとりの大人の台詞として聞いてもいい。

あのな、いくらなんでもお前が働いて子供とリディアを養うのは無理だ。

中卒じゃ、ふたりを食わしていくほどは稼げない。まして 16 歳じゃ」

「でも……」

「じゃあ、月にふたりを食わすのにいくらかかるか言えるか？いくら必要か、そして自分がどの仕事をすればいくら稼げるか言えるか？」

「……」

「帰ってから調べればいい、じゃダメなんだ。今確信を持って言えないのに、君はウチの娘をかつさらおうとするのか？」

いくら俺でも、算段さえ付かない男に、はいそうですかと娘を渡すわけにはいかない。それは分かるだろう」

「……はい」

「君がリディアを好きだというのは分かった。だがな、いまの君じゃ責任が取れない。

娘を孕まされたことは……まあウチの猫猿が悪いせいもあるから、水に流そう。

その代わりに、君は娘を諦めてくれ」

「そんな……！」

「じゃあ、こうしよう。君が大人になって、リディアを養うだけの力がつけば、子供とともに渡す。

リディア、それまでお前はこっちの世界で暮らせ。子供は産みたければ産めばいい」

「えっ、いいの!？」

「だが、勇太がお前のことを好きでいる保証はないぞ。なにせ 1 週間程度しか知り合っていないんだ。

そして彼が成人になるまでは 4 年もある。大学を出るには 6 年以上もある。

1 週間に対して 300 週以上もブランクがあるんだ。その期間、愛情が醒めない覚悟があるか？」

今は気持ちが熱くなってるだろうが、300 週間も経って彼が 22 歳になったとき、変わらずお前だけを愛す自信があるか？」

彼は本来ならこれからようやく女の子と付き合う年だ。これから恋をする。高校大学と一番良い頃だ。それをお前を待つためにフイにするんだ。

浮気を疑わずに、お前は待てるか。逆に、勇太もリディアがほかの男に寝取られないという自信があるか」

正論だ。私たちは黙った。

6年間……300週間以上……。長い、長すぎる。

でも、それまで親の力がないと、私たちはご飯も食べられない。

私たちは子供はなんて無力なんだろう……。

「だけど……私たちは……お互いを信じてる」

「そうか。じゃあ、信じてるがゆえに、相手の幸せを奪うのか」

「え……」

「お前の言ってることは、22歳になるまでずっと自分のために、ほかの女の子とのデートもせず、ひたすら待ち続けてね、ということだろう。

人間の中で最も楽しい時代を奪っておきながら、それが相手を愛してることになるのか。

自分とデートもさせず、セックスもさせないのに、ただ相手に我慢だけさせるのが、お前の言う愛なのか。

勇太も同じだ。これから色んなことで苦しむリディアを俺みたいに片親にさせときながら、俺のことを信じてただ我慢しろっていうのか」

「……」

勇太君は黙った。私もだ。何も……言い返せない。まさか、相手を信じることさえ、相手を縛ってしまうなんて……。私のしたことは間違いだったのか。

「私……ねえ、勇太君……どうしよう、どう……すればいい？」

「え……」

勇太君は黙った。答えが見つからないみたいだ。

それとも……私のことを疑っているの……？浮気をするんじゃないかって……？

「俺……わからない……どうしたらいいか、わからない。でも……リディアが幸せになれば……それが一番いい」

「勇太君……」

「でも、どれがリディアにとって一番幸せか、わからない……」

「勇太。あのな、お前たちが付き合うのは、社会的には問題があるが、まあ俺はアリだと思ってる。

で、子供を作るのだってOKだ。ただ、それはお前に経済力がついてからだ。

今産んだら、子供はどうなる。お前たちが結ばれた頃にはもう小学生だぞ」

「え……そ、そんなに」

「そうだよ。6歳だからな。今お前が高1だろ。4年前まで自分も小学生だったよな？で、結ばれたときに子供が小学生って考えてみ？」

「……」

「ありえないっていうか、実感できないだろ？」



勇太君は大人しく頷いた。

「子供を作ってもいいが、万一 22 歳までに破局したら、どうなる？勇太、お前、俺になるよ」

「……」

「だからな、今回は——ハッキリ言うぞ——今回は、諦めろ」

勇太君は私を見てくる。静も。

「リディア、後はお前次第だ。分かるよな、何が勇太と自分のためになるか。俺は別にお前たちの付き合いに反対してるわけじゃない。それも加味して考えろよ」

「私……でも、この子が……可哀想」

「それは分かる。だから、可哀想な境遇に産まないことも、選択肢のひとつなんだ。勇太、お前は蛍の元で産まれて後悔はしてないだろう？」

「え……？あ、はい……」

「そうだ。こういう成功例もある。だがあれは蛍に両親もあったし、蛍自身に生活力があつたからだ。大人だったからな。

「なあ勇太。もしお母さんが一銭もお金を持ってなかったら、それでも今の幸せがあつたと思うか？」

「一銭も……？それだと、無理だと思う……。母さんだって食えなかったと思うし」

「だよな。お前たちが産もうとしてるのは、そういう子だぞ」

私は静の説得に負けた。すべての方向性から、静は「予襲」をしてくる。

「……わかった。それが勇太君の幸せなら」

・勇太の答え

話はまとまった。

私は傷ついた体を持って、元の世界に帰ることにした。

メルティアに頼んで、勇太君とは毎年会えるようにしてもらった。

「勇太君……私、帰るね」

「ああ……またな。来年……会えるんだよな」

「うん。22歳になって大学出たら、私を養えるようになってね」

「分かってる。勉強ちゃんとするよ。あの……手術……ガンバレよ。俺、横にいてやりた  
いけど」

「大丈夫。妊娠初期なら大事には至らないよ、きっと」

「そうか……安心した」

レインが無言で光の中に消えていく。紫苑も続いて消えていく。

静が勇太君を見る。

「この世界の俺は……もう死んだのか。君は……本当は俺の子じゃないんだな。俺にはあ  
っちの勇太がいるから」

「……はい。でも、話せて良かったです。もっと……琥珀みたいにどうしようもない人か  
とと思ってました」

「いや、ならそれが正しい。神崎琥珀が本当の俺の顔だよ」

「え……」

「すまないな、勇太。俺のこの顔は紫苑によって作られたものなんだ。紫苑という大きな  
愛情を手に入れなかった俺は……何をやっても、人生をやり直しても……ダメだった。

「……俺を変えられなかった。俺自身も……。変えられたのは、あの紫苑だけなんだ」

「……すごい人なんですね」

「ああ。紫苑と出会ったっていうのは、宝くじで3億円当たったようなもんだ」

「なんか……そっちの世界のほうがこっちより架空みたい」

静は顎に手を当てた。

「だろ？ そう思ったからこそ、俺はより現実味のある人生を送っていた自分にチャンス  
をやったんだ」

「ああ……なるほど。それが……ウォンバスの世界」

「そうだ。元はといえば俺が蒔いた種だな。それにしても、やっぱり俺の子供なんだな。「な  
るほど」って口癖」

「え？……いや、ふだんは言わないです」

「？……そうか」

「……まあ、話せて良かった。思ったより、まともな会話ができた。

こうして実際に会って話すと違うな。やはり……いや……これは言うべきではないかもしれないが……その……かわいい……と、思う」

「え……」

「君のことが……。あ、いや……その……すまん。でも……本当は……蛍と別れなければ良かったと思ってる。少なくとも君のために。

今まではそう思ったり思わなかったりを繰り返したが、会うとやはり……違うものだ」

「……」

「最後に聞かせてくれないか。蛍は……一番何が原因で俺を嫌いになったんだ。なぜ、蛍は俺の元を去ったんだ。

稼ぎが少ないだケンカが多いだ、色々言われたが……もっと大局的で包括的な原因が知りたいんだ。なにか……聞いてないか」

「……」

「それとも……蛍は嘘をついているのか。俺がいないのをいいことに、自分の都合のいいように嘘を……」

「どうしてそう思うんですか」

「調停で……あいつが嘘を並べまくったからだ。俺の親族がキレるほどの。きっと醜悪な婆の弁護士の入知恵だと思う。そう……思いたい」

「母さんが嘘を言ったかどうか、俺には分かりません。それはそっちで判断してください。

ただ……俺が思うに……母さんの言葉を総合すると……」

静はゆっくり頷いた。

「父さんが……母さんを大切にしなかったからだと思います」

静はゆっくり目を閉じた。

「金がなくても、ケンカが絶えなくても、仕事がなくとも、母さんは……自分を大切にしてくれさえすれば、父さんに尽くしたと思います。

どうして……大切にしなかったんですか」

静はしかし、何も答えられなかった。ただ、ものすごく辛そうな顔をしていた。

「勇太……。だとしたら、原因は俺にある。俺が……悪かった。蛍を……どうして幸せにできなかったんだろう。どうして……大切にできなかったんだろう……」

静は涙を流した。多分、紫苑と出会わなかった静や神崎琥珀のために、泣いたのだと思う。

勇太君は何も言わず、下を向いた。

静は光の中に帰って行った。

「じゃあ……ね、勇太君」

「待って……」

勇太君は私の腕を取る。

「俺……最後まで、ずっとお前に任せっぱなしだった。自分から好きだとも言わなかったし、求めもしなかった」

勇太君は私の腕をぐいと引っ張った。思ったより、全然力が強かった。

私の頭を両手で抱えると、勇太君は愛おしそうにキスをしてきた。

その様子があまりにかわいくって……私は泣いてしまった。

私は光の中に帰った。

最後のキスは、しょっぱかったに違いない。桃の味じゃなくて、ごめんね。

光が消えると、私は新白岡の自分の部屋にいた。

勇太君のいない世界。いても、私のことを妹を名乗る頭のおかしな女としてしか見ない。そういう世界。そういう、乾いた無意味な世界。

私はこの何もない世界で、あと6年生きなければならない。勇太君との唯一のつながりを持ったこのお腹の赤ちゃんを殺して……。

紫苑が私の気持ちを察したのか、後ろから抱きしめてくる。

「あのね……紫苑。私、この子が産まれたらアルカって名付けるつもりだったの」

「ヘンな名前。そんなのあるか、ってね」

「もっつ、紫苑！」

「あはは。どうしてそう名付けようとしたの？」

「つなぐ……」

「え？」

「つなぐ……って意味だから」

・アルバザードの女

俺は一足先に元の世界に帰った。リディアの部屋に出る。

リディアと勇太はまだあっちで話し込んでいるようだ

レインの姿がない。部屋に行くと、荷物を整理していた。

「おい、どうしたレイン」

「私、アルバザードに帰ります」

「ええっ！？なんだよ、リディアにそんなに怒ってるのか。大人げないぞ」

「もうあんな子知りません。私の気持ちも知らないで、猫の子みたいに発情して。情けな  
いったらありやしない」

こいつ、日本語巧くなったなあ……。シェルテスに怯えてたころや新宿でおぶってやっ  
たころはあんなに可愛かったのに。

レインは荷物をまとめると、リディアの部屋に行く。紫苑の書を使って帰るつもりだ。

「待って」

白い腕を掴むと、「離して！」と言って振りほどこうとする。

「リディアの意見も聞いてやってくれよ」

「もう聞きました」

「お前がいなくなったら寂しがるって」

「あのね、静。私はあの子に乙女の貞操がいかに大切かずっと教えてきたのよ。アルバザ  
ード人なら当然持っている倫理観を与えたの。なのにあの子は私を裏切った。アルバザ  
ード人の女なら、絶対に処女のまま死んだわ」

「そりゃ……そうかもしれんが、本当に勇太のことが好きだったってことだろ」

「だとしても、3年はさせるべきじゃないわ！」

「そんなこと言ったら俺と紫苑だつてさ」

「紫苑は日本人です！」

うわ、だめだ。真っ正面から議論しちゃいかん。虫を食う民族を見て嫌悪感が沸いてい  
る人間に、虫は栄養豊富ですからみたいな理屈を捏ねても意味がない。

「紫苑、なんとか言ってくれよ」

「無理よ……。レインは一度怒らせたら私より怖いよ……。知ってるでしょう？」

「さすが、紫苑。親友だけあって、よく私のこと分かってるね」

「でもさ、レイン。じゃあその親友のために、ここにいてくれない？」

「紫苑、ごめんね。もともと紫苑とは年一回会う約束だったから、それには来るよ」

「……そう」

レインはすたすたと去っていった。俺は口半開きで黙った。

紫苑の書が光り、レインは消えていった。

「……行ってしまったな、ほんとに」

「リディア、悲しむわね」

「でもまあ……あのバカが悪いんだしな。しかし、レインがいないと寂しくなるな」

「帰ってくるよ。私には分かる」

「そうか……」

「それより先生こそ、あのアホに怒ってないの？」

「いや、俺が殴ろうとしたら、先にレインが引っぱたいてたから」

「私も殴る寸前でした。ウチ、全員スパルタですね」

「まあ、でも、それだけ勇太を好きになったってことだろ。

俺もお前もシェルテス戦で死ぬかと思ってたから、前夜にセックスしたじゃん。それでできたのがあいつなわけで。ある意味当然の流れなのかとも思う」

「そうですね。叩く資格なんてありませんでしたね。でも、あの子、まだ14ですよ。勇太君も子供だし」

「そう、そこが違いだよな。俺は当時もう働いてたし」

「あのふたり、6年持つと思います？」

「あ、それは持つと思う。リディアは執念深いからな。勇太は……俺に似てなきや浮気性じゃないと思うし」

「先生も一途ですよ」

「いや、それはお前みたいないい女がいるからだよ」

「こわいい女の間違いじゃなくて？w」

・村上 蚩

ベッドに座り、息を吐く。紫苑が子供のように、膝の中に入ってくる。

「ねえ、人生の意味、わかりました？私の作った魔法の世界は、ようやく完結しましたよ」

「ああ。人生の意味を問うこと自体が必ず負けるゲームだ。魔法で人生をやり直しても、静は幸せになれなかった。

それは静が目の前にあるもので幸せになれなかったからだ。

そしてその原因は、目の前にあるものを大切にしなかったからだ。

最後に蚩に教えられたよ」

「勇太君の言葉ね」

「ああ。あれが答えだ。確かに離婚の個々の原因はあるだろう。だが、つまるところ、俺が蚩を大切にできなかったことが、破局の原因だった」

「ねえ、どうして大切にできなかったの？」

「それをさっきから考えてるんだが、なかなかつらい結論が出た」

「聞かせて」

「出会ったころ、大4のころは、大切にしていた。そして好きだった」

「うん」

「だけど……徐々にだな、ある日突然じゃなく……徐々に、大切じゃなくなった。この子が大切だとか、この子を尊重すべきだと思えなくなった」

「どうして？」

「……シビアな話だが、彼女に呆れたからだと思う」

「呆れた？」

「俺ってさ、女に求めるものが、知能なんだよ」

「うん、そうね」

「知性を感じさせない愚行をするとだな、俺の中で確実に評価が下がる。すると、それが恋人であろうが家族であろうが、大切じゃなくなる」

「ふつう、「こいつバカだな」って思っても、それが可愛らしかったり、恋愛対象として不利益になったりは、しないよね」

「ふつうはな。ただ、俺の場合、バカだと思えることが致命的だ。バカだと思われると、大切にされない」

「えーと、静は知性のある人物を尊敬し、大切にするのね。敬意と好意が分離してないのね」

「ああ、だから俺はお前には優しいし、従順だし、浮気もしないわけだ」

「なるほど……それは、珍しい男性よね」

「蛍は……俺に呆れられ、優しくすべき相手リストから、外れた。それでも付き合い続けたため、大切にされないまま関係が進んだ。そして最後は破局した」

「もし蛍さんに呆れても大切にしたら、蛍さんも出て行かなかったわけね」

「ということになる。あいつが尊敬できる相手だったか、あるいは俺の敬意と好意が分離できていれば、別れなかったと思う」

「静は……私以外の女とは付き合えないね」

「と、思う」

ああ、これが結論か。

人生の意味を問うのは必敗ゲーム。

意味を問うのを避けることが肝要。

問うのを避けるには、幸せの追求と不幸の回避が条件。

体から心が生まれることもあるので、常に笑顔でいること。脳を騙すこと。

小さなこと、目の前のなんでもないことも、幸せだと思うこと。

これらが幸せの条件。

目の前にあるものを幸せに思えない場合は、大切にすること。

大切にすることで幸せという感情を生む。行為から感情を生む。

蛍は大切にされなかった。

静は知性ある人間に敬意と好意を抱く。蛍は大切リストから外れていた。

蛍は知性を獲得できなかつたし、静は自分の趣向を変えられなかった。

よって、不和になった。

その結果、蛍は去った。

原因を辿っていくと、静の趣向と蛍の知性に行き着く。

その一歩後にあるのが「大切にしなかった」事実であり、これが原因としては最大。

異世界の自分は大切にすることを身につけられなかった。

だから魔法を使っても幸せになれなかった。

静は紫苑を大切にする。目の前にあるものを大切にする。

もし紫苑がいなくなったとしても、このことを学んだ静は、幸せになれる。

人生の意味を問わずに済む。



水月紫苑は世界を作って壊してまで、静に授業をした。

静は学んだ。

仮に紫苑がない世界になっても、静は幸せになれる。

人生の意味を、もう静は問わない。苦しめない。

・育ての親

元の世界に戻った私は、紫苑たちからレインが帰ってしまったことを聞かされ、愕然とした。

レインは私に愛想を尽かしてしまい、アルバザードに帰ってしまったのだ。もう私の面倒など見ないということらしい。

それが私にはあまりに大きなショックだった。

どうやら私にとってレインは紫苑以上にお母さんだったらしい。

レインを失った私は発狂状態になり、家の中で暴れ回った。

あんなに大人しかった私が、お皿を投げたり、棒で壁を叩いて穴を開けたり、奇声をあげて叫んだり、大変な騒ぎだった。

止めに入った静を突き飛ばし、椅子で殴りつけたら、静は鎖骨を折ってしまった。紫苑は慌てて私を床に組み伏せ、一時はひどい騒動になった。

あまりに予想外な出来事だったのか、紫苑は私を精神科に連れて行き、安定剤を注射させた。

静がいうには、レインのことだけでなく、色んな出来事の PTSD が今になって出てきたのだろうとのことだ。

見かねた紫苑はメルティアに頼み、現状をレインに伝えた。

すると完全に天の岩戸を決め込んでいたレインは、私のしでかしたことを聞いて、大変驚いたようだ。レインは自分が出ていったせいだと思い、私のところに戻ってきてくれた。

何があってもレインは私のお母さんなのだ。私はそう実感した。

レインの慌てようといったらなかった。自分の責任だ、自分がリディアにひどいことを言ったからだといって泣き叫んだ。そして私を力一杯抱きしめてくれた。

そしたら不思議なことに、私の症状は治まった。すっかり元の水月リディアに戻った。

紫苑は複雑な顔でそれを見ていた。

・リディアの書

症状が良くなった私は2学期を迎え、何事もなく学校に行った。  
友達は相変わらずできなかったけど、前よりは自分に自信が持てるようになった。  
一人でいることに、前ほど恥じなくなった。

私は勇太君に会いたくて、毎日彼のことを考えていた。  
とてもおかしい話だけど、私たちはある奇妙な約束をした。  
最後に去るとき、私は彼の耳にこう囁いた。  
それがあまりに恥ずかしかったので、この世界では数人を除いて読めない言葉で、私の日記に書いておいた。

⑥ lee, ㄅ> ㄱㄲ <ㄱㄱ ㄱ-ㄱ ㄱㄱㄱㄱ ㄱㄱㄱ ㄱㄱㄱ leeㄱ ㄱ-ㄱ ㄱㄱㄱㄱ ㄱㄲ ㄱ-ㄱ ㄱel c> leㄱ- eㄱ -ㄱㄱ  
-ㄱel, ㄱㄲㄲㄲ ㄱ

それで、私は自分の匂いのついた服や、色んな格好をした写真を撮っておくことにした。  
来年再開したら、お土産にあげるつもりだ。  
勇太君には声の入ったテープを録ってもらおう。あと、匂いフェチの私的には、制服も  
ほしいです(>\_<)  
よしっ、これであと6年。がんばるぞ。

たまに勇太君発作が起こって、私は飯能に行きたくなる。  
だけど、こっちの勇太君は別人なのだ。私のことを愛してくれない。顔と体が同じだけ  
の別人。  
一卵性双生児の違うほうと恋愛するのが無理なように、こっちの勇太君と恋愛するのも  
無理なのだ。

ところで赤ちゃんのことだが……さようならをした。  
しばらく私は泣いた。こんなときこそ勇太君にいてほしかった。  
蛍さんはどんな気持ちだったんだろう。たとえ静が嫌になったとしても、一人で産むの  
は辛かったんじゃないか。  
産婦人科でほかのお母さんは旦那さんが迎えに来てくれるのに、自分は一人ぼっち。ど  
んなにか惨めだったろう……。  
静と蛍さんは、どうしてこんな不幸な結末になってしまったんだろう。  
「大切にしなかったから」

そう……それだ。きっと……それなんだ。

だから、私は大切にしよう。

私をからかう小悪魔なお母さんの紫苑。

紫苑のことしか頭にない哀れな犬の静。

私のことを産みの親以上に愛してくれるレイン。

異世界で私を迎えるために勉強に励む勇太君。

今あるものを——今、居てくれる彼らを——大切にしよう。

それが幸せになるのだ。

幸せな日をたくさん積み重ねて死んだ人が、人生の意味という永劫回帰を脱却して生きることのできた幸せな人なのだ。

そう、私は幸せになる。今ある幸せを大事にして、幸せの芽を大きな花に育ててみせる。

私は今回の冒険をまとめた日記帳、リディアの書を閉じた。

勇太君との思い出でいっぱいだ。

ああ、早く会いたい、私の王子様。

いや、根暗だから、むしろ悪魔様か。

日記に額を押し当てる。ひんやりしている。

私はお祈りをして、ベッドに就いた。

紫苑たちと同じように幸せな未来が私にも訪れますように。

愛っていう色で私のパレットを塗り尽くせますように。

ΛοΛ ʌeʌʌ - ʌʌ, ʌʌʌ Λo-ʌ,,

迎えにきてね、私の悪魔さま♪

——終

- ・あともぎ

初稿を書き終わったら、弟の誕生日だった。少し不思議な感じがする。

- ・今回のテーマ

2つある。

1つはウォンバスという少年時代の作品を実現すること。元々ゲーム用の設定だったが、頓挫してしまった。設定しかなく実現しなかったのでキャラが不憫だと思っていた。

かといってウォンバスをこの年になってそのまま書く気はない。そこで小説の第一部として導入した。

Kakis氏が言っていたが、この作業はこれまでの人生をまとめる行為だそう。30を目前に控え、その考察は当たっていると言わざるをえない。

もう1つは人生の意味について。リディアの書本編はこれがテーマになっている。

- ・人生の意味

人間は動物だから、食って寝て子供を残して死ぬだけの存在だ。

だが、人間は人類という動物を越えた部分を持っている。そのせいで、人生に意味を求めて悩む。

特に、衣食住など低次元の欲求が満たされた人間ほど、これを考える。先進国病といってもいい。

同じ先進国民でも、悩みやすい人間がいる。私はその好例だ。

最初に重篤化したのは高校のころ。将来何になりたいのか分からなかった。どの進路もしっくりこなかった。

大学にいても同じだった。父親が過労な上に仕事で借金を作ったので、リーマンというものをどうやって避けるかばかり考えた。

それで院に行ったが、折りしも高学歴ワーキングプアの時代。文科省の策略にまんまと乗ったわけだ。

そんな環境だから当時の嫁とも折り合いが悪くなり、結局別れてしまう。

当然、自分の進路などいい年こいて見えぬまま。

子供の頃から、自分には異世界を救う使命があって、それなら人生の意味として納得できると考えていた。

自己愛性人格障害が重篤だったため、自分の等身大に見合わない願いに人生の意味を見いだした。

当然、現実になんかことは起きない。無駄に荒れていく。

一方、高校のころからアルカの作業が本格化する。小中学に比べ、裁量が増える。

まして大学からは制アルカになり、私が担当になった。

これにより、自分の人生の意味はアルカにあるのではないかと考えるようになる。

実際、私の人生の意味は、アルカだと思う。私にしかできないことで、私しかしないことだ。

それでいて学者肌&芸術家肌の自分を納得させられるだけの知的複雑さがアルカにはある。

そういう意味では自分は幸せなほうだ。

だが、それはリディア＝ルティアという紫苑に会ったからだ。

もし、リディアに会わずに生きてたら、自分は何もなかったのではないか。そう思うと怖くなる。

だから、リディアに会わなかった自分をシュミレーションしてみたくなった。

それが紫苑に出会わなかったほうの静だ。

その静に、チャンスを与えた。彼が望むよう、夢の世界を実現化した。

そこで彼は人生の意味を見いだせるのか、幸せになれるのか。

まあ、それは本文のとおりだ。

ところで、人生の意味とは何か。

実は、人生の意味は何でもありえる。円満な家庭に人生の意味を見いだす人もいるし、ニコ動を見て笑うことに意味を見いだす人もいるかもしれない。

ただ、それは幸せな人間だ。目の前にあるもので満足できる人間は幸せだ。

しかし静のような人間は違う。目の前のものでは安心できない。

望みの高い人間は、どうすれば満たされるのか。

そこで静はあらゆる可能性を考える。自分の思い通りに行く世界があれば意味を見いだせるかと考える。

だが、仮に魔法を使っても自分の満足する世界はないという結論に達する。

望みが高く不安感の強い人間は、仮にどんなに自由に世界を操れても、満足できない。意味を見いだせない。

自分にはもっとふさわしい未来があるはずではないかと考え続ける。

そこで静は気付く。静のような人間にとって、人生の意味とは考えた時点で負けなのだ。

静が人生の意味を問うときは、常に鬱なときだ。幸せなときには考えない。

そこで、次の条件に気付く。すなわち、人生の意味とは、この不幸せな状況を我慢するための理由なのだ。

仕事や学校がつらい、部活がつらい、勉強がつらい。こういった苦しみを我慢するために、家族のために、出世のために、などといったよすがを探す。それが人生の意味だ。

人生の意味なんてものは、苦しいときにしか考えないのだ。笑って愉しんでいるときには考えない。

言い換えれば、人生の意味を問うことは必敗ゲームだ。考えた時点で負け。

となれば、いかに考えないかがポイントだ。

考えない条件は上記のとおり。すなわち幸せであり、不幸でないこと。

そこで静は次の段階に入る。

いかに幸せであり、不幸でないようにするか。

この後、このテーマは娘のリディアに受け継がれていく。

リディアは、目の前にあるもので幸せに感じようという結論にたどり着く。

ここが父静との違いだ。静はそもそも目の前のもので幸せになれない高望みの人間だ。

リディアの結論は正しい。だが、それは彼女のような非高望みの人間にとっての正解だ。

これでは静の解決策にならない。ただし、リディア自身の解決策にはなった。

では静はどうなったのか。

結局最後に助けてくれたのは勇太の答えだった。

「静は蛍を大切にしなかった。金がなくても、仕事がなくとも、生活が苦しくても、蛍は静が大切にしてくれさえすれば、少なくとも裏切ることはなかった」

これで静は2つ目の結論にたどり着いた。

1つは、幸せを求めて不幸を避けること。これが必敗ゲームを回避する方法。

1つは、目の前の幸せを大切にすること。

静は高望みだ。目の前のもので「幸せ」には感じられない。

だが、目の前のものを「大切」に扱うことはできる。前者は「気持ち」だが、後者は「行い」だ。

人間にとって、感情を起こすことより、体を動かすことのほうが、容易にできる。「好きになれ」は難しくても、「好きな振りをしろ」は詐欺師でもできるように。

結局、静は娘と違い、蛍から答えをもらった。

娘は高望みをしない人間で、「幸せ」に感じる「感情を起こす」ことができた。

静は高望みをするので、「大切」にする「行い」しかできない。

そうして行為を繰り返すうちに、自分の気持ちを起こそうというソリューションだ。

抽象的になってしまったので、例を挙げよう。

私はとても疲れて鬱になると、胃痛がする。このとき、無理に笑顔を作って、無理に笑う。そういう行為をする。

すると、しだいに元気が出てくる。気持ちが昂ぶる。最終的に胃痛も消えるという良い循環ができる。

このように、行為を起こすことで気持ちの変化を作ることができる。

科学的にも笑筋などを動かすことにより、快樂や安定を感じる神経伝達物質が分泌されるといえ、行為が感情を作ることは分かっている。

高望みによって諦観や降伏の気持ちを作れない静にとって、行為から感情を起こすというのが唯一の効果的な道だった。

そして最後に静はそれを蛍から教えられる。こうして静は行為から感情を起こす方法を身につけた。

また、必敗ゲームの回避法も身につけた。

これが人生の意味というテーマにおける、リディアの書のソリューションだ。

#### ・書くということ

私は書くのが好きだ。喋るのも好きだ。

恐らく書いているときは最も集中して安定している。セロトニンやドーパミンが大量に放出されている。

私は書いて考える人間だ。書きながら考え、思考をまとめる。



そのくせ、自分の文章は直さない。読み返してもほとんど修正しない。ほとんどの文章は初稿と大差ない。

このあとがきだってそうだ。七面倒な屁理屈が書いてあるわりには、指をほとんど止めることなく滝のように打っている。そして直さない。

昔からこうではなかった。

書きまくったせいで、最初から文章として成立している文を捻出する能力を身につけたようだ。

しかも早い。リディアの書の場合、一日に5万字というのが自己ベストだ。

ちなみに私はブラインドタッチができないくせに、打つのが早い。社内でも早いと言われた。

PCが広まる前からPCをやっていたせいかもしれない。いずれにせよ、5万字を書くには、能力が必要だ。

幻文でも同じだ。さくさく止まらずに書いている。

むしろ高度な内容でなければ、最速の言語はアルカだと思う。ああ、もちろん最速専用で作られた人工言語との比較ではなく、自然言語と比較して。

人工言語の中でもプロトタイプ制アルカが最速の言語だと思う。新生はずっと遅くなったが、それでも随分楽だ。

日本語は変換が面倒くさい。アルカにはそれがない。それだけで随分早く書ける。変換ミスもないし。

あと、漢字の開閉や送り仮名の統一をしなくていい。編集ではこういう点が一番面倒くさいので、アルカは楽だ。

また、アルカは英語と違って大文字も使わない。とても早く打てる。ほとんどの単語も3,4文字だ。

だから、簡単な文なら、日本語で書くよりアルカで書いたほうが執筆ペースは速い。

#### ・登場人物について

今回の主人公はリディアと勇太だ。

リディアのモデルはない。玲音の書のエンディングに出てきたちよい役だからだ。

静と紫苑の娘なので、ルシアに見える。今考えれば彼女がモデルなはずだ。だが玲音を書いたときにリディア＝ルティアは妊娠していなかった。

また、そもそも水月リディアとルシア＝アルバザードでは性格が違う気がする。ルシアはもっと自己中でわがままで攻撃的で、おてんばな気がする。

そういうわけでリディアのモデルは厳密にはいない。強いて言うならロシアのポストと  
いうくらいだ。

リディアの性格は3種ある。

1つは玲音の書のエンド。これは天使のような利他的な人間だ。

2つは静かなる病のエンド。勇太と一緒に育ったので、やや活発になった。

3つは伝えるということのエンド。1,2の中間的な性格だ。

リディアの書は第3エンドを継承しているので、このような性格になった。

リディアは大人しく引きこもりで弱い。頭もよくないし、運動もダメ。

だが、冒険するうちに、徐々に紫苑の血が現れるようになる。

リディアは黒のヴェールを剥いで悪魔の顔を見せるタイプのキャラだ。

実際、リディアは作中であまり成長しない。元々持っていた悪魔の素質を見せていくタイプだ。

次に勇太。

これも私の息子の勇太とは別人だ。というのも、私は会ったこともないし、まだ彼は2  
歳だからだ。

ただ、静と蛍の息子という点で、勇太のポストにいるキャラだから、そのまま勇太とし  
ただけだ。

もちろん、自分と蛍と向こうの家の性格を考えて、多分このように育つだろうという予  
想はした。だから下記はあくまで想像にすぎない。

勇太のキーワードは勇氣。

私は勇太が大きくなったとき、勇氣ある少年になるとは思っていない。

多分体の大きな子とは怖がってケンカしないだろう。

逆に小さな相手を苛めこそしないものの、優越感混じりの顔をするだろう。

私も子供の頃、そうだった。臆病なので、自分が怪我をするのが嫌なのだ。

変わったのはリディア＝ルティアたちと会ってから。格闘技や戦闘術の訓練をして、性  
格が変わった。

格闘をして筋トレをしても、実はケンカはそんなに強くならない。漫画みたいにはいか  
ない。

体が大きい相手にはなかなか勝てない。ただ、それでも向かったし、気合いがあれば案  
外勝つものだ。

そういうことが勇太には恐らくないだろうから、恐らく臆病なふつうの少年として育つのではないか。だがそれではリディアは救えない。

私の息子はどこまで追い詰められれば女の子を守るのか、考えた。それが勇太のテーマの勇氣だ。

どこまで女の子を好きになれば守るだろうか。どんな子なら守りたくなるか。どこまで相手に挑発されれば戦うだろうか。

その辺りがとても気になった。自分の息子はどれくらい雄として勇敢なのだろうか。どれくらい勇敢に成長できるだろうか。

そう、勇太は作中で実はほとんど成長しない——武力においては。つまり、ケンカが強くなったりは特にない。彼が成長するのは勇氣だ。好きな女の子のためにどこまで勇氣を出せるか、それが彼のテーマだ。

まあ、あれだ。実際会うことのない息子なので、想像上で、父親として課題を与えてみたくなったのだ。

つまり、「俺のガキはどこまでケツ叩きや、自分の女を守るようになるかな」と思い、鍛えなくなったのだ。

もちろん、現実にはどうにもできない。なので、あくまで想像だが。

次はアルシェ。

アルカに詳しい人ならこれが勇太のエコータイプと名前だけで気付くだろう。

アルシェは「英雄」や「勇者」と介される。勇太のもじりだとすぐ分かるはずだ。

私の小説はスレイヤーズのように、常に才能ある人物が活躍する。

恐らく私自身がたいていのことは最初からなんでも器用にできるタイプだからだろう。

だが、年を取るうちにそれがつまらなく感じた。

努力で這い上がった人間というのは強いのではないかと感じた。

そこで、最初は弱い、努力して強くなる人間というのを試してみたくなった。

それがアルシェだ。

アルシェは不幸な勇太という設定の人物だ。

恵まれずに育ち、反骨精神とど根性を手に入れる。

そのおかげで異様な成長率を見せる。

作中で、唯一アルシェは武力も知力も成長する。しかも異常に。

さて、こう見ると実はリディアの書は自分の子供のお伽噺だということになる。  
今までは自分を主人公にしていたのに、いつの間にか子供を主人公にしている。  
やはり、私はもう年で、ファンタジーから降板されてしまうのだろうか。  
第一線に自分を出さない時点で、私の夢を見る力はもう失われているのかもしれない。

#### ・場所について

私の小説は匂いと色と場所に特徴がある。ここが他人と違う部分だ。  
私は多くのことを匂いと場所で記憶している。  
また、会話のほとんどは場所で記憶している。  
話の内容を聞いても思い出せないのに、あの場所でこういう状況で話したときのことと言われると急に思い出す。  
自分が通ったほとんどの場所で、「ここは〜と〜をした場所」と記憶している。  
例えば大学のキャンパスなどはひどいもので、ほぼどの地点を取っても「この場所では何をした」情報がある。  
逆に言えば、場所記憶なしには、何をしたかを思い出せない。

小説の場合、それ自体が壮大な嘘だから、必死こいて架空の場所記憶を作らねばならない。

私にとって、場所がないと記憶ができないからだ。小説のイメージが湧かない。そこで、どこで行われている出来事かを異様に気にする。

リディアの書にもそれがよく出ている。今回は東京から京都まで東海道を行く話だが、その場所記述の細かさには読者も驚かれたはずだ。

そこが何という場所で、どのような形の場所なのか、そういうことが分からないと、書けない。

場所が気になるということは、恐らく私は外出をよくするのではないかと想像される。  
それは正しい。乗り物にのって一人で散歩し、その場所を見てくる。特に何かするわけでもなく、場所を見て帰る。それが楽しい。

ひとつ嫌なことがある。2022年には今回紹介した場所情報が崩れている可能性がある。  
2022年の道路はきつとこのようになってしまい。その点で正確さを欠く。  
いつもなら店の名前まで細かく書くのに今回はぼかしているのはそのせいだ。

ここにイオンがあると書いても 2022 年にはどうなっているのか分からない。そこで、書かないことにした。

案外これがフラストレーションだった。店が書けないので記憶が弱まり、イメージが曖昧になる。

#### ・リディアの悲劇

自分の娘が主人公なのに、ものすごく大変な目に遭わせてしまった。かつてここまで酷い目に遭うヒロインを出したことはない。

だいたい紫苑より能力がないのに、飛ばされた先が大変すぎる。泣き虫瞬がアンドロメダ島に飛ばされたくらい、不憫な話だ。

いくつもの世界を渡り歩き、危険な目に遭いまくる。

しかしリディアは無能。基本的にふつうの女の子なので、危険が来ても泣くだけ。動けないし、腰は抜かすわで、大変。

しかもそれでいて若い美少女なだけに、これがまあ面白いくらい慰み者にされるわけだ。

そしてリディアを守る勇太とアルシェは、どちらもひ弱。

お姫様が無能ならナイトまで子供という、壮絶な状況だ。

そんなこんなでリディアは大変な目に遭ってしまう。

可哀想なヒロイン選手権でチャンピオンを取れそうだ。

#### ・蛍について

私はもう静ほど蛍については拘っていない。

彼女は自分が過去に犯した過ちという対象であり、もはや脱人格化されている。

蛍という人間というより、彼女について回ったできごとについて、自分の未来のために考察する。そういうときに蛍が出てくるだけだ。

むしろ、鬱になったときとかに出てきて、私を苦しめる怨念でしかない。この意味では早く消え去ってほしい相手だ。

#### ・紫苑について

実は今回の騒動の発端はこの女なのだが、何一つ糾弾されていない。

自分でやっついて飄々としているところが、まさに初月紫苑の魔力。

書いていて思ったが、私はやはり紫苑が一番好きだ。最も萌えるし、最も焦がれる。あの癖の強いところも、悪魔っぽいところも、逆に天使のようなところも、いい。いつまでも若いし、少女っぽいし、美人。頭がいいし、なんでもできる。喧嘩も強い。紫苑がほしいなあ。「静になれますがどうでしょう？」と聞かれたら、「いいですとも！」と即答してしまいそうだ。

#### ・オリジナリティ

申し訳ないが、私の小説に独創性はほとんどない。登場人物は自分を含めた知り合いか、そうでなければ漫画のパクリだ。話の流れも大体何かをパクっている。紫苑の場合は日帰りクエスト。今回はパクリすぎて数も数えられない。

リディア＝ルティアはオリジナルで話を作ってしまうので、そこは尊敬できる。ただ、私は人工言語だけはなぜかアプリオリで作れる。そこが不思議だ。

#### ・まとめ

振り返ると、長々書いたものだ。ウォンバスのことが気になっていたのも、まとめることができ、ほっとしている。ウォンバス自体が複数の話のミックスだし、とにかく登場人物が多くて話のスケールが大きい。それと本編とミロク編を混ぜなければならず、いったいこれらをどう整合性を持たせて書くかというのが悩みだった。初挑戦でもあったが、どうにか扱えたようだ。レジスタンスの話はもう少し長くしてもよかったかもしれない。番外編を作るとしたら、アルヴェスクの話だろうか。まあそれは読者の反応次第で。

ときに、今回でこの話は一応終わりだ。私は開いた未来が嫌いだ。続編の可能性というのは基本的に苦手。

玲音の最後でリディアが出てきたので、未来が開いてしまった。これを閉じる作業が今回のリディアの書だ。

・リディアの書の登場人物

人数が多すぎて把握できないと思うので、リストにしました。

名前	読み仮名	生年	性別	所属	モデル・元ネタ	概説
水月リディア	みづきり でいあ	2007	女	リディアの書	執筆時は知る由もなかったが、今見れば将来のルシア	リディアの書の主人公
水月紫苑	みづきし おん	1988	女	紫苑の書	リディア、村瀬エリ	紫苑の書の主人公。フェンゼルを倒した
水月静	みづきし ずか	1981	男	玲音の書	セレン	玲音の書の主人公。悪魔シエルテスと戦った
れいんゆ ていあ	れいんゆ ていあ	>el?0	女	紫苑の書	ミルフ、日帰りクエストのラーディ	紫苑にアルカを教えた少女
ぼぶり		??	雄	リディアの書	セレンの猫コリン。名前は昔の小説から	リディアの飼い猫
初月雄和	はづきゆ うわ	1966	男	玲音の書	ユーア	紫苑の父。万能天才人
初月理沙	はづきり さ	1969	女	玲音の書	リーザ	紫苑の母。カリスマ女王
村上螢	むらかみ ほたる	1982	女	玲音の書	エスタ=アルバザード。苗字は好きだった元カノのもの	水月勇太の母。静の元嫁
村上勇太	むらかみ ゆうた	2006	男	リディアの書	勇太	静の息子。リディアに会い、運命が変わる
祁答院霊司	けとうい んれいじ	1980	男	ウォンバス	祁答院は中三のころの深夜ラジオドラマから	ウォンバスのリーダー。気弱
祁答院零司	けとうい んれいじ	1980	男	ウォンバス	二重人格の設定は銀狼怪奇ファイルというドラマ	霊司の別人格。気が荒い

天城華嬢	あまぎか じょう	1980	女	ウォン バス	クリス	霊司の幼馴染
天城紫丹	あまぎし たん	1981	男	ウォン バス	バーコードファイターの桜	実は男という萌えキャラ
美術室の 霊	びじゅつ しつのれ い	??	女	北城高 校	特になし	美術室の九十九にとらわれ た霊
石神結衣	いしがみ ゆい	1975	女	北城高 校	学校であった怖い話の仮面の 少女	トイレの花子さん
雅軀龍	みやびく りゅう	1979	男	ウォン バス	多分 X の空太	雷を使う関西キャラ
薬師寺京 香	やくしじ きょうか	1975	男	ペルソ ナ	リュウを悪人にしたイメージ	隠れペルソナ。魁羅を復活 させる
母親	ははおや	??	女	北城高 校		羅刹嬢の母親。娘を守って 魁羅と心中
夕霞罪羅 刹嬢	ユカザイセツ ジョウ	??	女	ウォン バス	クミール	魁羅の娘。霊司の拾った赤 ん坊。本来はニューワイズ
魁羅	かいら	元寇	男	アデル	原作ではカイラという名では なかった	羅刹嬢の父。元寇時代から 飛んできた
霞堂裏槍 戯	カスドウリウ ギ	1981	女	ペルソ ナ	なし。とりあえず大阪人	飛鳥の姉
神崎琥珀	かんざき はくり	??	男	ニュー ワイズ	セレン。静愁呪〜は「学校で あった怖い話」の主人公に使 った名	ニューワイズのリーダー。 別名静愁呪慈苑嬢瞬
夢幻	むげん	??	女	ニュー ワイズ	リディア×大人しさ。遊空は 元々人称ではなく廃案になっ た名	琥珀の恋人。紫苑の転生し た姿。遊空という一人称を 使う
霞堂裏飛	カスドウリアス	1989	女	ペルソ ナ	綾波レイ	感情のない少女



鳥	カ			ナ		
皇叡慈	すめらぎ えいじ	1980	男	ペルソ ナ	Xの皇昴	ペルソナの実質リーダー
入屋臥	いりやし ん	1986	男	ペルソ ナ	Xの子どものころのカムイ	ウォンバスと対峙する前の キャラで、本編には出ない
左京怨弥	さきょう おんみ	1981	女	ペルソ ナ	フルミネア	甲賀忍者の末裔。本名麗弥 (れみ)
氷室麗	ひむろれ い	1983	男	ペルソ ナ	リュウ	伊賀忍者の末裔
庵頭苑	おりがし らえん	1981	男	ペルソ ナ	オヴィ	神奈川出身の元ボクサー
魔霧	まむ	??	男	ペルソ ナ	スレイヤーズのゼロス	クルル編のミストのなれの 果て
呪影	じゅえい	??	?	ペルソ ナ	なし。ロボ	本来はアリーナ編のキャラ
クルル= ディア	くるるで いあ	1417	女	クルル 編	リナ=インバース+アルル= ナジャ+リディア	魔族と人のハーフ
モンナ	もんな	1419	女	クルル 編	フルミネア	神族と人のハーフ。クルル の妹
カトウサ	かとうさ	1415	男	クルル 編	ラルドゥラ。名前はDQのモ ンスター物語から	クルルの兄。最強
ティルル	ているる	??	女	クルル 編	まともなクルル	魔族の少女。クルルの母
ユーテル	ゆーてる	??	男	クルル 編	リュウ+ユーア	神族の青年。クルルの父
メサイア	めさいあ	989	女	クルル 編	ゼルガディス+ギル	炎を操る中級魔族

ゼルギ	ぜるぎ	??	雄	クルル 編	魔導物語のシェゾ。原作では しえぞ=うっきー	咬ませ犬
ライフア	らいふあ	1490	女	クルル 編	アメリア=ウィル=テスラ= セイルーン	姉と違い、純粋な人間。ク ルルの妹
エレキ	えれき	??	女	クルル 編		エリア湖の3妖精。雷属性
ヒート	ひーと	??	女	クルル 編		エリア湖の3妖精。火属性
コールド	こーど	??	女	クルル 編		エリア湖の3妖精。氷属性
ミスト	みすと	??	男	クルル 編	スレイヤーズのゼロス	中級魔族。逃げ延びてニュー ワイズの魔霧となる
カノン	かのん	??	男	クルル 編	名前は持ってたプリンタから	元上級魔族。ぷれみあむ保 持者
ソレイユ	それいゆ	1417	女	クルル 編	ぷれみあむ争奪戦4というゲ ームのキャラ	主人公が4歳のクルルで、 ソレイユは未来のクルル
パルサー	ぱるさー	??	男	クルル 編	ルージュ	ルシロでクルルからペンダ ントを盗んだ少年
ノーテ	のーて	??	女	クルル 編	なんかの萌え精霊	ミナ・カルモで助けた精霊。 回復キャラ
ヴィーカ	ヴーいか	??	男	クルル 編	絵的にはじいさんのイメージ	皇女の側近。クルルの親の 仇
皇女	こうじょ	??	女	クルル 編	ルーキーテ	本名ルキテファウスヴィル テス。魔族の王
サタン	さたん	??	男	クルル 編	魔導物語のサタン。原作では サンタ	魔界の入口の守り手
シャルル		??	女	クルル 編	ミルフ+長髪	シャルル=アマンゼ。死神 貴族の娘。ボケ役。雉

リスティ ス	りすてい す	??	女	クルル 編	クリス	リスティス=マイム=ウァ レッタ。ヴァンパイア。猿
コリント	こりんと	??	女	クルル 編	チビを気にするのは幼女時代 のメルから	コリント=コリンテュア。 精霊。犬
ラスター		??	女	クルル 編	羽の目はエヴァのアダム	シトラス=ヴァル=ラスタ ー
ルア		??	男	クルル 編	リュウ	本名ステル=ヴィス=ウ= ファテキル。ライファの師 匠
セイネル ス		??	男	クルル 編		ユーテルの転生後
リュート=アルカ ネット		??	女	クルル 編	実際には作らなかったゼルダ 風のゲームのキャラ	クルル7歳と旅をした少 女。ミヴァの母
ヘル		??	女	クルル 編		ハデスの部下
ハデス		??	男	クルル 編		ヴィーカの部下
>elC<-	めるてい あ	??	男	紫苑の 書		時を司る悪魔。メルの父。 粋な計らいで有名
-Me	あるしえ	>el?00	男	<b>リディ アの書</b>	勇太のアルカ名がアルシエ	ミロク革命時の奴隷少年。 リディアとの出会いで運命 が動く
-Me -l(ee>J	アルシエ=アルテ ムス	>el?0/	男	紫苑の 書	セレンの通り名がアルシエ。 セレンがモデル	ハインの息子。紫苑の戦友
h-cA -l(ee>J	ハイン=アルテ ムス	>el?1Δ	男	紫苑の 書	FF5のCDジャケットに載ってた 鬚面のエクステスがイメージ	フェンゼルを倒してアルタ レスとなった人物
アリス=アンシャ ル		2022	女	パウハ ン	アンシャルは西洋の意味で、 単に西洋人という設定だった	パウハンの少女。Persona's endの災害孤児

					から	
ミューダ	みゅーだ	??		バウハン	ドット絵を作るのが面倒になったフウシカがサクッとデザインした	そのため、見た目が単に黒くて丸くて長い生命体
ジグラス=アリーナ		2020	男	バウハン		名だたるバウンティハンター。ノエルを追う
ノエル=マシダリン		2018	男	バウハン	ゲームの完成予定日が95年のクリスマスだったため	悪名高い賞金首。ゲームではボスだった
コロン		2022	女	バウハン	CC さくら。ゲームでは登場せず	ノエルの妹。皇女の欠片
サリヴァークトット		2020	女	バウハン	ゲームでは登場せず。墓は故郷のロンドン	アリーナのフィアンセ
乙守氷雨	おつもりひさめ	1980	女	無名	実現しなかったゲームのヒロイン	皇女の欠片
レミレーン		??	女	無名	フルミネア+ローラ姫的な	皇女の欠片
ミリア=アルカネット	ミリア=アルカネット	??	女	ウオンバス	特になし	リュートの娘。時空を変えるメルティア的な存在
雪之条惣那	ゆきのじょうそうな	1980	女	ウオンバス	フルミネア+クミール+メル。顔は岩男潤子	冷静。ツッコミ役。非情
西九条朋裕	にしくじょうともえ	1990	女	ニューワイズ	土萌ほたる、金田一少年の斑目るり	躯龍のいとこ。躯龍が好き
時任姫乃	ときとうひめの	1984	女	ペルソナ	CC さくら（見た目）、Xの譲刃（年上好き）	炎を操る少女。明るく幼稚。内而が好き
沖名彩音	おきなあやね	1984	女	市ヶ谷	CC さくらのともよ	『あの匂いの咲く頃に』のヒロイン。姫乃の親友

綾小路内而	あやのこ うじない じ	1967	男	ペルソ ナ	Xの蒼軌征一狼	ペルソナのNo2,3を争う強さだが、優しく争いを好まない
綾小路綾音	あやのこ うじあや ね	1993	女	ニュー ワイ ズ?	ちびうさ	内而の娘。磁力使い。実はニューワイズという設定があったかも
望	のぞみ	1997	女	ペルソ ナ		姫乃の転生した姿。綾音を守る
ジェノン		??	男	ニュー ワイズ		クルルにやられた雑魚。クルルを恨んでニューワイズに
ゆかり		2007	女	<b>リディアの書</b>		リディアの友人。ひなに唆されてリディアをハブる
ひな		2007	女	<b>リディアの書</b>		勝ち気な少女。リディアの友人だったが、虐めるように
抱風	ほうふ	??	女	ペルソ ナ	絵を描いたときコンビニで一回お茶を買ったら	缶に俳句があり、詠み手の名がそういう老女だった
朧	おぼろ	??	女	ペルソ ナ		怨弥の式神である抱風の中に宿った4つの人格のうちの1つ
月影	つきかげ	??	女	ペルソ ナ		怨弥の式神である抱風の中に宿った4つの人格のうちの1つ
蛍	ほたる	??	女	ペルソ ナ	実際は旧字で	怨弥の式神である抱風の中に宿った4つの人格のうちの1つ
華抄	けしょう	??	女	ペルソ ナ		怨弥の式神である抱風の中に宿った4つの人格のうちの1つ

甲癸	かふい	??	男	ペルソ ナ	スレイヤーズのフィブリゾ。 名前由来は10千	全属性を吸収。五行の最初の甲から最後の癸までを統べる名
ライラ		1490	女	ウォン バス		ライファのその後。中国滞在時は来花
六宝仙忌 祇陣	りっぼう せんきし じん	1980	女	ウォン バス	クリスナルビィ	天城家に怨嗟を持つ剣士の少女
西九条家 当主		??	男	西九条		朋衿の父。西九条家の当主。威厳がある
那羅奈國	ならなく に	??	男	ペルソ ナ		ペルソナの預言者。卑弥呼復活を狙う
卑弥呼	ひみこ	??	女	邪馬台 国		日本の結界に封じられた祈禱師の女性
ジョーカー		??	??	ニュー ワイズ		ゲノムの魔法で朋衿を操る魔物
リリス		1997	女	ペルソ ナ		姫乃の作ったキャラが具現化したもの
>eS	めじゅ	??	男	リディ アの書	日帰りクエストとセイント星 矢の奴隷商	奴隷商人。アルシェを使う
>c/o/) 4a/c-	ミロク=ユティア	>el γ00	男	リディ アの書		ミロク革命を起こした人物
-l/o^	あるそん	>el γ00	女	リディ アの書		リーファ隊の5人目。改革担当。鬼怖い
--le	あーしえ	>el γ00	女	リディ アの書		リーファ隊の4人目。事務担当。大人しい
水月春夫	みづきは るお	1985	男	リディ アの書	パルサー=アルバザード	リディアの叔父。ウォンバスをリディアに解説

大河鉄平	おおかわ てっぺい	1980	男	リディ アの書	フウシカ	静の幼馴染。リディアと勇 太を引き合わせる
㊦eㄞ	べると	??	女	リディ アの書		言語と世界を司る悪魔
lccZ-	りーざ	>el ゝ0	女	リディ アの書	リーザ=ルティア	リディア=ルティアの母
ㄝeㄞe^	せれん	>el ゝΔ	男	リディ アの書	セレン=アルバザード	アセット第14使徒。異世 界からの救世主
ㄞclc-	りでいあ	>el ゝf	女	リディ アの書	リディア=ルティア	第1使徒。最強の魔導師。 魔法のロッドの持ち主
<al>cc-	ふるみね あ	>el ゝΔ	女	リディ アの書	フルミネア=イネアート	第5使徒。占い師。占い水 晶の持ち主
>el	める	>el 0	女	リディ アの書	メル=ケートイア	第7使徒。時魔導師。時魔 法を手紙にかけた人物
藤堂広重	とうどう ひろしげ	1985	男	リディ アの書	アルカ名がないのでこれ以上 晒せない	セレンの友人。リディアを 小田原に連れていく
ㄝ>ccㄞ	くみーる	>el ゝf	女	リディ アの書	クミール=メテ	ソーンのルシーラ
-lㄝeㄝ	あるうゝ えすく	??	男	リディ アの書	SAMURAI DEEPRER KYO の梵天丸	アルヴェスク班のリーダ ー。豪快で懐が広い
-lㄝe	あるべ	??	男	リディ アの書	Xの志勇草薙とか	班員。大柄。動物好き。無 口
>elcaㄝ	めりうす	??	女	リディ アの書	スカイクロラのクスミ	班員。親がイルミロクの孤 児。アルヴェスクの恋人
ㄝ-l	かると	??	男	リディ アの書	軍隊物にありがちなテンバリ やすい青年	班員。気弱。気が利く。あ だ名は「羊」
Vecㄞe^	うゝえい れん	??	女	リディ アの書	ハルヒの長門	班員。冷静。機械的。銃の 腕前ピカイチ

ΛeP>eJ	ねるめす	??	男	リディアの書	エヴァの冬月	ネルメス隊の隊長。老人
夕月	ゆづき	2007	男	リディアの書		結界に現れる謎の美少年
長官		??	男	リディアの書	魔法陣グルグルのコパール王国の大臣。「はくしょん、まもの」	アデュ収容所長官
合計	117名					